



大正十三年三月二十日印刷
大正十三年三月二十五日發行

花袋全集第四卷

（非賣品）

（第十一回配本）

著作者　田山錄彌

發行者　東京市小石川區東青柳町二十九番地　川俣馨一

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　松浦政吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　株式會社博文館印刷所

發行所　東京市小石川區東青柳町二十九番地　花袋全集刊行會

電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

うの親類の家にお子さんを伴れて行つてゐらつしやるが、いづれお歸りになるでせう。田舍の伯父さんも明日は出てお出でになるといふ話です。』かう言つて酒屋の亭主はいろいろと詳しく話して吳れたさうです。去年から變で、何うもをかしいと思つてゐると、元日から急にひどくなつて、のべつに何か言つてゐる。亡くなつた子供のことを頻りと言つてゐる。尼になれと言つて、奧さんの髮を切つだり何かしたさうです。『私の家のすぐ裏になつてゐますから、それがよくわかるんです。私の家でも後には見かねて、いろいろ申し上げたんですが――』かう酒屋の亭主は話して吳れたといふことでした。

私は私の生活と鶴田君の生活とが一緖に雜り合つて來たやうな心持が致しました。

『人事ぢやない――』かう思ふと、じつとしてはゐられませんでした。大海の潮のやうに、また時にはすさまじい暴風雨のやうに、絕えず私達の前に橫つてゐる生活と藝術との海の中にゐて、私達は何うなつて行くのだかわかりやしません。死か、生か、狂か、その結果は知れたものです。しかし溺れるまでは、私達は泳いで行かなければなりません。私は今夜も書かなければならない仕事を持つてゐます。

『おい、火を持つて行つて置いたか?』かう言つて、私は書齋に入つて行きました。

――花袋全集　第四卷　終――

『角の乾物屋ですよ。』

『それぢやそこに行つて御覽。』

その夜は月が明るくさしてをりました。私は風呂に入りながら、庭に濃かに落ちてゐる冴えた月の光を見てゐました。いろ〳〵なことが取集めて考へられて來ました。大きな自然の中に短かい一生を刻んで順々に亡びて行く人間のことなどが、いろ〳〵考へられて來ました。氣が付くと、矢張、同じ仲間で、茅ヶ崎の海岸で死んだ友達が、『僕は君達の死んで行く時のことを考へるよ。痛感したよ。何と言つたつて三十年か四十年の違ひだからな……皆な何うせ死んで行つて了ふんだからな。』かう言つて眼から大きな涙を落したことを私は思ひ出してゐました。

要するに皆逝けるなり――あらず、

あらず彼等はあらず……

その友達の痛感した詩が、月の光に織り込まれて、私の胸に蘇つて來ました。私は硝子窓の外の明るい月の夜を見てゐましたが、涙がわれ知らず頰を傳つて落ちて來ました。

やがて妻は歸つて來ました。吉田屋に行つてきいて見ると、いゝえ、そんなことはありませんと言つた。では、何處で訊いたら分るでせうつて訊くと、角の酒屋に行つてお訊きなさい。あそこではよく知つてゐる筈ですと教へて呉れました。それから、妻はそこに行つてきいたさうです。『奥さんは何處か向

うな心持になつたことも一度や二度では御座いませんでした。其時分、私達の見た繪に、陶器畫工がせつせと陶器に繪を描いてゐる傍に花のやうな少女の笑つて立つてゐるところを描いたのが御座いました。何かの雜誌の口繪か何かに出てゐたので御座います。たしか、そこには、『少女の笑顏のみ心に……』といふ風な題がつけてあつたと覺えてをります。私は鶴田君の生活にそれと同じ詩を感じたので御座います。

お照さん――やさしい中に雄々しいところを持つてゐるお照さん、兎のやうな從順なそして敏捷な氣分を持つたお照さん、お照さんがゐなかつたなら、私と鶴田君との交遊なども、今では何うなつてゐたかわかりやしません。それほど私はお照さんに同情を持つてゐました。鶴田君とお照さんとの生活に若しい詩を感じてゐたのでした。『お照さんは、私の見た多くの細君の中で一番感じが好い。』こんなことを私は私の妻にも私の友達にも度々言つたことを覺えてをります。

二度目に私の妻が出かけて行つた時にも矢張、門に鍵がかゝつてゐたさうです。近所できいて見ても、病院にいらつしたんだらうとばかりで、矢張要領を得なかつたさうです。ところが其日の夕方になると、私の總領の娘は、何處からきいて來たか、『鶴田さんの小母さんは、家をしまつて、吉田屋の二階にゐるんだつて……』と申しました。

『吉田屋つて何だい？』

の弱いところである。弱いから怒るのです。だから感情に訴へて行くと、すぐ涙をほろりとこぼすやうな柔かい所を持つてゐました。

生活といふことが、鶴田君の藝術を大成させなかつた。私はかう思つて黯然としました。鶴田君はあまりに早く生活に入つたのです。餘りに早く戀と家庭とに捉はれたのです。鶴田君の家庭を打立てたのは二十一二の時でしたが、それがもう十年遲かつたなら、もつと表現の自由な藝術の境に入つて行つたことが出來たらうと思ひます。『鶴田君の繪は戀女房と子供のモデルで出來てゐる。』などといふ冷評を私はよく聞きましたが、實際さういふ缺點もいくらかはあつたと思ひます。しかし艱難の生活に對して、鶴田君は、綺麗な、潔よい心持を常に抱いてゐました。鶴田君は田舍に立派な伯父さんもあり、自分の當然得べき田地などをも持つてゐました。それにも拘らず、何んなに困つても、さういふものを當てにはせずに、自分で自分の生活を立てゝ行きました。ですから、友達などにも一度だつて迷惑をかけたことはないだらうと思ひます。本郷の眞砂町の凹いところに、頰の紅い綺麗な細君と二人で、パンを食つて生活して行つた時分のことを考へると私は涙をこぼさずにはゐられません。若いお照さんは、そこで人體解剖圖の色を塗ることを内職にしてゐました。

若い私のセンチメンタルな心は、鶴田君のその時分の生活に何んなにロマンチックな感じを起させられたでせう。戀愛と藝術との勝利といふことを考へて、昔の詩の中にある感じの中にそのまゝ浸つたや

なことを言つて、私の庭にある野椿の寫生に來たことが御座いました。鶴川君は長い間重い脚氣を病んでゐましたから、足が不自由で、何うかすると、よく轉んだり何かしました。その時も、雪の後の路を高い足駄でやつて來て庭に入る柴折戶のところで、何かに躓いて、べつたり轉んだりしました。綠葉の中に赤く咲いてゐる野椿の葉と枝と花とを寒い冬の空氣の中に長い間立つて寫生して行きました。何でも築地から見えてゐる野椿の花の下に、鶴川君の平生得意とする少女か何かを書かうとする計畫らしう御座いました。『もう餘程前に、さうだね、もう十年以上にもなるよ。天王寺の傍のところを步いてゐると、築地の上から野椿の赤いのが出てゐるのが、何とも言はれない感じを與へたんだ。書かう、書かう、と思つてゐたんだが、何うも出來なくつてね……。しかし、今度は是非書いて見るつもりだ。』などと言つてゐました。自己の作畫に沈滯し切つてゐた鶴川君の覺醒といふことを考へて私はそれとなく勵ましてやりました。

しかしもうそれも駄目だ。かう思つて、私は鶴川君の長い艱難の生活を頭に浮べて見ました。それは鶴田君にも弱點はある。自分で自分を好いと信じて、決して友達の忠告などを容れないやうなところがある。『本當に、もう少し學校にでも入つて研究したら何うです。』と言ふやうな意味をある友達から言はれて、非常に激昂して怒つたこともある。喜んできかなければならない忠言に對して、怒つたり何かするやうなところがあるので、鶴田君を捨てゝ去つた友達もかなりにありました。しかし、それが鶴田君

ね。何だか少し變だとは思ひましたけれど……。氣が違つては、何んなことをするかわかりませんからね。』この間行つた時にさうだつたとすると、よくあのくらゐのことで其處から歸つて來ることが出來たといふやうな氣が妻にはするらしう御座いました。それに引かへて私の眼には鶴田君の半生が一つ一つ繪になつて見えました。

『お照さんは、何うしてゐるでせう？　お氣の毒ですね。』

暫くしてから、妻はこんなことを言ひました。

やがて出て行つた妻は、すぐ歸つて來ました。何うだつたつてきゝますと、『門に鍵がかゝつてゐて、誰もゐないやうでしたから、すぐ歸つて來ました。』

『近所できいて見りや好かつた……』

『さうは思ひましたけれど……』

『ぢや、お照さんも病院について行つたのかも知れない。もう少し經つたら、歸つて來るだらうから、あとでもう一度行つて御覽！』

私はかう言ひましたが、そのまゝ書齋の中に入つて行つて了ひました。かうなつては、もう訪ねて逢つて見たところでしやうがない……。こんな風にも思ひました。鶴田君は一昨年だつたか、『今年の文展には、是非しつかりしたものを書いて出すつもりだ。僕はもう本物に手をつけても好い年だから。』こん

『鶴田さんの宅にお巡りさんが來て、小父さんは病院に入つたんだつて――』

『え？　本當かい？』

『お巡りさんが入つて行くと、小父さんが、何故他人の家に斷りなしに入つて來たんだつて、怒つたんだつて……。病院に今朝行つたんだつて。』

私は頭の眩惑するやうな心持を覺えました。

『本當かい？』

『皆な近所でさう言つてゐるよ。』

傍にゐた妻は、『さう言へば、何だか昨夜變でした。私、九時頃になつて郵便出しに行きましたらう。あの時も、あそこに人が大勢集つて何か言つてゐましたよ。けども、鶴田さんの二階には、明りがあかるくついてゐましたから、別に、何とも思はず通つて來ましたがね。』

『もう行つたのかしら？』

『さつき、俥に乘つて行つたんだつて……』

『お前、ちよつと行つて見てお出で。』

かう言つて私は妻を出してやらうとしました。

しかし妻は、何だか氣味がわるいといふ顔色で、『それぢや、矢張さうなんでしたかねえ。怖いやう

蘇つて來ました。

私はその夜は早くから寢ました。

あくる日も、私は机に向つて筆を執つてゐました。その日は一日、頭が痛くつて、氣がむしやくしやして仕方がありませんでした。いろいろ私の周圍のことなども考へられました。妻や子供のことについては、私はいつも無關心な狀態でゐることが多いのでしたが、不思議にも、その日はいろ／＼なことが私の頭にくり返されました。いつも妻のこぼす將來のことなども、まざまざと頭にのぼつて來ました。午からは、いかにしても頭が痛いので、書齋に床を取つて貰つて寢て了ひました。

鶴田君のことも氣になつてゐましたが、例の疳癪位に思つてゐました。別に深くも考へてはゐませんでした。『鶴田君、引越さずにゐるだらう？』いつも學校に行く時に通つて行く筈の子供達にきくと、『え、ゐてよ……同じことよ。』などと總領の娘は申しました。その中行つて見ようなどと私は思つてをりました。

と、何うでせう？　その二日目には、悲慘な事實が霹靂のやうに私の耳を襲つて來たのでした。

『え？』

私は吃驚いたしました。

最初に何處からかきいて來たのは、私の二番目の男の兒でした。

『何か死んだ子のことでも思ひ出したんだよ……』

私は鶴田君の心持に對しては、つねに同情を持つてゐる一人でした。鶴田君の向う側に立つた人は、一度は親密に交際した仲でも、わるく言つたり何かしましたが、私はさういふ氣分には一度もなつたことは御座いませんでした。鶴田君の生活のさびしいことは、私にもよくわかつてゐました。しかしこれはお互ひです。藝術に携はるものが、さういふさびしい生活と戰つて行かなければならないのは、鶴田君もよく知つてゐる筈でした。

私達はひとりで――あくまでひとりで、行かなければならないのです。家族や周圍が自分の慰藉になつたり力になつたりするやうな氣分では、到底その路を歩いて行かれないのが私達の歩いて行く路です。

こんなことを私は思つてゐました。從つて、さういふところに、さういふ風に怒つてゐるところに私が出かけて行つたつて仕方がないといふ氣がして、私は鶴田君を訪問しようとも思ひませんでした。

私が鶴田君を知つてゐたのは、もう餘程前のことでした。栗本と鶴田君とは親しい友達で、確か栗本が鶴田君を私に一番始めに紹介して呉れたと覺えてをります。その時分、鶴田君は艱難な生活を送つてゐました。お照さんはまだ十六七で、若い娘らしい顏をして、よく入口の戶を明けて私達を迎へてくれました。私はお粂さんの死んだ悲慘な事實が鶴田君の家庭の上に及ぼした影響などを考へて黯然としてゐました。私の眼の前には十一二年前に電車のレールの上に橫はつた幼ない血まみれの姿がはつきりと

て、あんなことを言はれたといふ風に妻は言ふのでした。

『それで、鶴田君は何うしてたんだい？』

『別に變つたところもありやしませんよ。少し蒼い顏をして、鬚なんか生えてゐましたけれど。』

『何うかしたんぢやないかい？』

怖ろしいことの中心に觸れたやうに、私は私の心を掠めて通つて行くある感覺を見ました。

『別に何うもしやしないやうでしたよ。少しは變でしたけれども……』

鶴田君には、以前からもいくらかさういふところがありました。物に激し易い、我執の強い、矜持の多い方の質でした。自分の書いた繪に對する批評なども默つて聞いてゐる方ではありませんでした。先輩の繪などにも忌憚のない批評を加へたりしました。『また例の癇癪が起つたと見える……』私はかう思つて、『まあ好いやね。そんなに泣いたり何かしなくつたつて好いやね。その中、また何とか言つて來るよ。蟲の居どころがわるかつたんだよ……。それで、引越しは何うしたんだい？ 矢張、引越して行くには行くのかい？』

『引越はもうやめたんですつて……』

『お照さんがさう言つてゐた？』

『えゝ。』

言つて下さいつていふ風なんです。それに、厠を借りようとすると、他の家の厠なんかに入つてはいけません。貴女の家はすぐぢやないか。家に行つてなさい。他人の家の厠に入るなんて失禮ですつて、かうなんです。私はあんなことを他人から言はれたことは、一度だつてありやしません。』かう言つて思ひ出したやうに眼を拭いて、『だから、私、あんまり悔しかつたから、宅で年始に上らないのもわるいが、鶴田さん、貴方だつてお出でになりませんぢやありませんかつて言ふと、少し默つてゐましたつけ、やがて僕の行かないのはあたり前だ。僕は先輩だつて怖い顔をして言ふぢやありませんか。私はが立つたから、ぢや家に歸つて、さう申しますと言つて、怒つて玄關の戸をぴつしやり閉めて歸つて來ました……』

『お照さんは何うしてゐたい？』

『笑つて變な顏をしてゐましたつけ。』妻はかう申しましたが、『一體、貴方もわるい……。近所だから、年始位には行かなければいけないんです。交際は嫌ひだと言つて、貴方は年始狀も碌々出さずにゐらつしやるけれど、あれはよくありませんよ。世の中にはつき合ひつていふことがありますからね。鶴田さんだつて、折角、この近所に越して來て、往つたり來たりしようと思つてゐたんですのに、貴方は碌々行きもしないんですもの……。貴方の交際嫌ひもわるいんですよ。實際、昔からの友達なんだから。してる爲事は違つても、書生時分からの友達なんだから……』私がわるいばかりに、その飛沫を食つ

に、ちよつと厠か何かを借りる風をして……』と小聲で申しました。私は不思議な氣がしました。
出て行つた妻は、やがて戻つて參りました。私の顔を見ても何も言はずに變な顔をして、すぐ座敷の方に行きましたが、やがてお照さんの母親の歸つて行く氣勢が靜かにきこえました。
私の方に來てゐた客を送り出して茶の間に來ますと、妻は目を眞赤にしてゐるでは御座いませんか。何うしたんだと私が言ひますと、『こんな眼に逢つたのは、始めてです……』つて言ふんです。そして泣いてゐるんです。段々聞いて見ると、鶴田君にひどいことを言はれたのでした。妻は言ひました。『私が入つて行くとお照さんの姿が見えたから、まあ好いと思つて安心しましたが、母さんが此方にゐること は向うに知れないやうに、堅く母さんから賴まれてゐましたから、ちよつと買物に出て寄つた風をして、鶴田さんが何んなにしてゐるかを見ようと思つて、厠を借りる風をして、玄關から上つて行つたんです。と、そこに、鶴田さんがゐて、本などをいぢつてゐましたつけ。私が挨拶すると、吉田君に言つて下さい、私は吉田のやうな人間は嫌ひだから、近所にゐて、年始にひとつ來ないやうな人は交際してゐられないから、今日から絶交すると言つて下さい。何だ、人が文展を書いてゐる時分にやつて來たり何かして……。栗本君はそれでも感心だ。栗本君は何處に行つてゐても、年始狀を吳れるけれど、吉田君は一度だつて年始狀をくれたことなんかありやしない。(栗本といふのは、私の妻の兄で、私だの、鶴田君だのの書生時分によく一緒に往來した友達仲間で今は田舍に行つてをります)歸つたら、吉田君にさう

た。それに、鶴田君は、昔と同じやうに矢張子煩惱で――お粂さんのこともあり、あとに子供もないからでありませうが、お秀さんのことといふといつも一生懸命になるといふ風でした。それに、お秀さんも綺麗な好い兒で、私の宅の子供などと比べると、おとなしくもあり、學問も出來、上品でもありました。『お秀さんを御覽よ、おとなしいぢやないか。』などと私の妻はいつも子供に申して居りました。『矢張、昔の悲傷の跡はまだ治らないと見える。氣の毒だなあ。』かう私は思ひました。

私の鶴田君に逢つたのは去年の秋でした。去年は私は山に行つてをりましたので、友人には誰にも逢ひませんでしたが、ちよつと歸つて來た時、他に用もあつて訪ねたのでした。その時、鶴田君は文展に出すのだと言つて、一生懸命に大きな繪を書いてゐました。私は努力の邪魔をしたといふ氣がして、二十分ほど話して歸つて來ました。それ限り鶴田君には逢ひませんでした。

私はお照さんの母さんに逢はうかとも思ひましたが、丁度その時別にちよつとした客があつて、いろいろ挨拶などして出られずにゐますと、妻は入つて來て、ちよつと私を呼んで、『鶴田さんが難かしいことを言つて、親類に絶交狀なんかを出したんですつて。それに、お照さんが昨日ゐられなくなつて、家を出て、何處か懇意のところに泊つてゐるといふ電話が、昨夜おそくなつてから、母さんのところにかゝつて行つたんですつて。ですからお照さんが歸つてゐるか何うか、鶴田さんは何んな風か、ちよつと見て來て貰ひたいつていふんですがね、私がちよつと行つて來て上げやうと思ふんですつ 買物の序

てゐましたつけ。お秀さん？　なァに大したことはないんですよ。二階から落ちたばかりで、怪我も何もしやしませんでしたよ。』妻は何だかあつけなかつたといふやうな顔をしてゐました。

私も行つて見ようかとも思ひましたが、書くものに追はれて忙しく暮して居りますし、それに懇意の仲だから、その中逢はうと思つて、つい自分にかまけて、そのまゝ訪ねもせずにをりました。しかし、死んだお粂さんを思ひ出して、本郷の方へ引越して行くといふことは、私に一種の衝動を起させずには置きませんでした。そのお粂といふ子は六つの時かに死んだので御座います。それも電車にひかれて悲慘な死方をしたので御座います。私の總領の娘は、今年十五ですが、それと一つ違ひで、私はその生れた時にメリンスの布などを買つてお祝ひに持つて行つた子でした。可愛い子で、親達も非常に可愛がつてをりました。私達と同じやうな困難な生活の中にをりながら、綺麗な着物を着せて、お茶の水の幼稚園に通はせて置いたりしたので御座います。そしてその幼稚園の前のところで、來年はそこの小學校に入らうといふ年に、電車に引かれたので御座います。何んなに鶴田君は泣いたでせう。私もくやみに行つて貰ひ泣きをしました。それに、今のお秀さんがその時丁度生れて一年經つか經たないかぐらゐで、あひにくジフテリアか何かで病院に入つてゐるといふやうな騷ぎで、誰でも鶴田君夫妻に同情しないものは御座いませんでした。健氣なお照さんの素振なども、皆その同情の涙の種でした。その子を――十一二年も前に死んだ兒を思ひ出して、本郷の方に移轉して行くといふことは、何となしに私の心を動かしまし

聲がきこえたと思ふと、『お初に上つて失禮ですけれども……それでは、ちよつとお邪魔を致しますよ。』といふ客の細い聲がして、續いて玄關から座敷の方へと上つて行く氣勢が致しました。

客を導いて置いて、妻は私のゐる方の室にやつてまゐりましたが、『お照さんの母さんですつて。』かう顏を私に寄せるやうにして言つて、何も細かい話はせずに、茶の間の方に火を取りに參りました。

『お照さんの母さんですつて――』唯それだけ言つただけでしたけれど、私は妻の顏の中に、『何事』かが起つたのをすぐ見て取りました。それには前に話があつたからでした。『お照さんの宅では、明日引越ですつて。』かう言つて二三日前に妻がお照さんの宅に年始に行つて歸つて來て私に話しました。『鶴田さん、何うしても本郷の方へ引越すつて言ふんですつて。お粂さんのことを思ひ出して何うしても言ふことをきかないんですつて……。お前が引越すのがいやなら、俺が一人で引越すつてかう言ふんですつて。折角、近所に來て、時々は往來も出來て好いと思つてゐたんですのにね。』かう言つて妻は其處から貰つて來た鱈の切身だの、田舍の方から送つて來たといふ干大根だのを出して私に見せました。『鶴田君は何うしてたの？』かう私が聞きますと、『何だか混雜してゐましたよ。座敷の方に、本なんか片づけてゐたやうでしたよ。久しくお目にかゝらないからつて言つたんですけども、たうとうお目にかゝりませんでした。それに、お秀さんが二階から三段ほど落ちたり何かして、大騷ぎなもんですから、そこそこに歸つて來ました。それ、お秀が落ちた。お照、何うかしやしないかなんて言ふ鶴田さんの聲がし

『誰か來たんぢやないか。』

かう申しましたが、餘り靜かなので、妻は急には立上らうとは致しませんでした。妻も耳を欹てました。

『行つて御覽。』

際立つて人の來た氣勢も御座いませんでしたが、念のために私がかう申しますと、妻は靜かに立上つて、襖の方へと出て行きました。

やがて妻の挨拶してゐる聲がそつちからきこえて來ました。矢張、誰か客が來たのでした。それも女の客だと見えて、靜かに丁寧に物を言つてゐる樣子でした。しかし妻の知つてゐる人ではないやうでした。と、不意に、『あ、さうですか。お照さんのお母さんでゐらつしやいますか。ちつとも存じませんもんですから、失禮致しまして、さあ、何うぞ此方へ――』といふ俄かに改まつた妻の聲が聞えました。

客はしかし容易に上らうとはしませんでした。何か細い、靜かな聲で、此方までは聞取れないやうな聲で――寧ろ何事かが起つたかのやうに細い聲でほそほそと話してゐました。妻が顏やら耳やらを寄せて、え、え、と言つてきいてゐるのが私の耳にも際立つて聞えて來ました。

『まあ、しかし、そこではお話が出來ませんから、ちよつとお上り下さいまし。』やがてかういふ妻の

鶴田君

妻は勝手元をすませてから、茶の間で鏡臺を出して、束髪のふくらみ加減を見て居りましたが、それも濟んだので着物を着替へて、私のあたつてゐる火燵の方へとやつて來ました。私達はいつもかうして向ひ合つて火燵にあたりながら、一時間ぐらゐその日その日のつまらない話をするのが例でした。妻は盆に茶器などをのせて持つて來たりしました。時には蜜柑などがその盆の隅に載つてゐることなども御座いました。子供達は大きいのは皆な學校に行つて末の女の兒が二人、仲好く日當りの好い縁側で、おねさまなどを並べて遊んでゐました。

ふと靜かに玄關の格子の開く音がしました。靜かに、實際靜かにと言ふよりも、もつと靜かでした。何んなにそつと靜かにあけても、格子の鈴の鳴らないことはないのですが、その時はその鈴さへも鳴りませんでした。

耳を欹てゝゐた私が、

早くかういふ境から遁れたいといふ氣がつき上げるやうに襲つて來てゐた。私は自分で長押にかけた外套を取つて着て、帽子をかぶつて、『それぢやまた――』かう言つて暇を告げた。

『まア、好いでせうに、……急ですね。』

などと言ふ母親の聲が後に聞えた。

私は細い裏道を通つて土手の方へと出て行つた。冷たい川風が私の醉を吹いた。

んだらうなどと私は思ひながら、少しさめ加減になつて來た醉を取り返す爲めに、燗の熱くついたのを二三杯つゞけて飮んだ。

母親と女との間には背景になつてゐる人の話はつひに出なかつた。女は、『酒をもう少し取つて來ませうか。』などと言つた。

『今日は餘程寒いんですよ。』

『さうね――』

『それに、いくらかしぐれ加減だから。』

こんな平凡な話がつゞいた。

私は出かけなければならない位置に身を置いてゐるのを知つてゐた。もう、何も彼もすんだ。女の盡すべき義務のすべてを女は盡した。これからあとには、また新しい幕が開けて來るだらう。新しい役者が出て來て面白い芝居を打つて行くだらう。私はこんなことを思ひながら、私の出て行つたすぐあとの光景を想像した。

其處にあつただけの酒を飮んで了つてから、私は出かける支度をした。

『病人のゐるところに來て、大變に御馳走になりました。』

かう言つて立ち上ると、『まァ、好いでせう。』と女はとめた。しかし不思議にも其時私の心には一刻も

ちや駄目なやうなことを言つたから、そこ〳〵にして歸つて來た。外に出ると矢張いけない。』
私は笑ひながら、
『まだ飮んでゐるんですよ。』
かう言ふと、
『何うぞ御ゆつくり。その代り、何にもお構ひしませんから。』
途中で買つて來た切山椒などを其處に出して、『車は寒いね。眼が餘程わるくなつたやうな氣がしたよ。』
『それでも、そんなには待たせなかつたでせう。』
女がかう傍から言ふと、
『あゝ、すぐはすぐだつたけれども……博士がゐなくつて、助手だから、何だかそつけがないやうな氣がして、自分の方が却つて病氣の加減なんか知つてるやうな氣がして、……矢張、お醫者は若い人は危つかしいやうで駄目ですね。』
女は氷を取替へてやつたり、コオトを疊んだりしてゐた。母親は不斷着に着改へてから、矢張、氷袋を右の眼に當てながら、長火鉢の角のところに坐つて、長烟管を取つて煙草を一服二服吸つた。
私がゐなければ、母親と女との話の調子もこれとは餘程違ふんだらう、もつと詳しく病院の話をする

てゐた褥の汚れた母親の薄い寢道具は其處に敷いたまゝになつてゐた。

『俺の眼の見てゐないところでは、何んなことでもするが好い。したつて、俺は嫉妬なんか妬きやしない。本當に嫉妬をやく位なら、俺は自分からよして了ふ。ざまを見ろ、何うしたつて自由にされるぢやないか。男と金とにははかなはないぢやないか。』

私は復仇するやうな氣分で腹の中で叫んだが、つゞいて、『さうすると、あゝいふ婆さんのゐる二階も、女はさういふ場所として豫め選定して置くものと見える。そして外で捗いだ上に、またさういふところにまで男を引張つて行くものと見える。……何か言つてやりたいな。女の胸をえぐるやうな言葉を一つ——たつた一つで好いから言つてやりたい。』

私はこんなことを考へながら、しかもやはらかな靜かな落附いた氣分で一時間以上もこの薄暗い空氣の中に浸つてゐた。

『誰れか來たやうね。』

かう言つて、女は二度ほど下に下りて行つてはまた上つて來た。

病院から母親の歸つて來た時には、私達は下で矢張餉臺に向つてゐた。

『あゝ痛い。』

かう言ひながら、母親は入つて來て、『矢張、博士は見て呉れなかつたよ。若い助手の人が切らなくつ

家普請のぞんざいなつくりで、柱なども十分に鉋がかゝつてゐないといふ風であつた。下りる時には[illegible]注意しないと長押で頭をしたゝかに打つた。

二階は狭い六疊の一間であつた。其處には水銀がはげて満足に顔もうつらなくなつたやうな古い小さい鏡が柱にかけてあるばかりで、道具らしい道具は一つもなかつた。折角の床にも幅物もかゝつてゐず、長押にも額らしいものは見えなかつた。壁の破れた處などがイヤにあたりに眼に立つて見えた。疊には小さい燒こげあとがあつた。

そこにある青い瀬戸の火鉢は、火を少し餘計に起すと、縁が燒けるやうに熱くなつて、手も當てゝもゐられないやうなものであつた。いつも女は其處にメリンスの座蒲團と茶器とを下から自分が運んで來た。古い汚ない藥罐からは湯氣が白くたつてゐたりした。女は何も道具のない室を見廻して、『箪笥を一つ買ひたいと思ふんですけども……あんまり安物でもイヤですしね。』などとよく言つた。

それでも天氣の好い日に戸をすつかり明け放すと、南向の縁側は暖かで靜かで、地平線がひろびろと見渡されて、瓦甍から瓦甍につゞいた家並の向うに、大きなある工場の煙突からもく／＼と煤煙の出るのなどがよく見えてゐた。盆栽の梅が年内から見事に咲いてゐたりした。

しかし其日は暗く寒く冷たく陰氣であつた。冬の薄い光線が、一枚明けた雨戸から微かに、さして來るばかりで、薄暗い一間の中には、濁つた寢臭い、不健全な空氣が一杯に充ちてゐた。今まで敷いて寢

う。まだあるかえ？』

『あるわ。』

かう言つて、女は別の方の燗徳利を銅壺につけた。

私はかなり醉つてゐた。私は此頃酒量が大變に減つて、三合も飲むと、いつも眞赤になつて横に倒れるのが例になつてゐた。女も醉つて顏が少し蒼くなりかけてゐた。

ふとお互に觸れ合つた眼と、手と、心と――それにつゞいて、この家に今は二人きりといふことが、分明とお互の頭に印象されて來た。要求が口説の後の空地を占めて來た。

それは強い力であつた。『何うでも好いや、そんなことは何うでも好い、自分の思ふことさへ出來ればそれで滿足だ。嫉妬なぞやく位なら、やめて了へば好いんだ。男があらうがなからうが、自分の占めてる地位を女が占めさせて呉れさへすれば、それで好いんだ。金に對する報酬だ。ざまを見ろ、イヤな男でも何でも、するだけのことはしなくつちやならないぢやないか。』こんなことを腹の中で叫びながら、私は酒を飲んでゐたが、『酒は止しませうね。』と女は私の顏を意味ありさうに見た。

私が點頭いて見せると、『ぢや、ちよつと待つて頂戴。』かう言つて、女は立つて、上り端に亂雜に置いてある下駄をつゝかけて、格子戸の鍵を内からしめた。

狹い、急な、一足蹈外すと下まで落ちて、ひらきの襖を打拔いて了ふやうな階梯が其處にあつた。借

やがて女は何彼とまた其男のことを話し出した。しかし、其時には私はもう餘程心が靜かに落附いて來てゐた。『そんな話よせ！』とも言はなかつた。一方では、女の口裏から其男の詳しい狀態を聞かうとも私は思つてゐた。で、女が饒舌つてゐる中に段々いろ〳〵なことが解つて來た。その婆さんと言ふのは、其男の下宿してゐる家の主婦で、爺さんは何處か近くの工場につとめてゐるやうな人であつた。『あの人の家はちやんと本鄕にあるんですよ。店を持つて、人をつかつてやつてゐるんですよ。だから、此の土地に來て下宿なんかしてゐなくつても好い人なんです。さうね、此方へ下宿するやうになつたのは、去年の秋時分からですよ。始めは、もつと向うの方に下宿してゐたんですけども、つい此間そこの婆さんの二階を借りたんですよ。』こんなことを言つて、『私此間中から、よく話したぢやありませんか。貴方は唯笑つて本當にしないでゐらしつたけれど、本當なんですよ。稼業をやめさせて抱妓の三人位置いてやるからッて言ふんですよ。でも、矢張、金づくぢやないのね。氣合が合はなくつちや駄目ね。大騷ぎをされればされるほど、厭氣がさして來るやうなものね。私、これで隨分ひどいことを言ふのよ。お袋など、お前餘りヒドイなんて言ふ位なんですもの、默つて、坐つて、一時間も二時間も考へ込んでゐるやうな人なんですもの。』私が默つて聞いてゐるので、女はこんな話を長々とした。

中途で、私は、

『そんな話は何うでも好いや、……何うせ、稼業なんだから仕方がないやね。それよりもう少し飮ま

氣の毒になり出して來た。母親を伴れて、大學病院までわざ〳〵出かけて行く男、其心のすべてがその愛した女の方に偏つて來てゐる男――それは人ごとではないやうに私には思はれて來た。その男は今時分は車の上で震へてゐるだらう。赫と體中が熱くなつて來てゐたりするだらう。人ごとぢやない、自分だつて矢張さうだ。かう思つた私はつゞいて女が體を二つにも三つにもわけてゐる狀態を想像した。何うせ、誰だつて始めからかういふ女に戀を求めてゐやしない。そんなことは百も二百も承知である。女だつて、矢張さうだ。稼業にしてゐるのである。一つ一つ眞劍に受けてゐちやそれこそ體がたまらないなどとも言つてゐる。お互に始めからそれを承知で相手になつたり相手にされたりしてゐるのである。しかし、悲しいことにはお互に生身の體だ。ひよつとした具合でお互に足を蹈外すことがよくある。それも丁度好い鹽梅に、兩方で一緒に足を蹈外せば文句はないのだけれど、大抵の場合では、何方か一方で先づ先きに蹈外すことになつてゐる。蹈外した奴は、男にせよ、女にせよ、痛い熱い思ひを先づさせられるにきまつてゐる。こんなことを考へてゐる中に、今度はまた不思議にも女に對する同情が湧くやうに私の胸に起つて來た。

『イヤな稼業だ。』

かう思つて私は女の白い痩せた顏を見た。女は前にある猪口を口に當てゝ、また一杯あけて厭に笑つた顏を見せた。

『好いよ、好いよ、何うでも好いよ。』

『それぢやイヤだわ、私。』女は體を搖ぶるやうにして、『本當にさうなんですもの、……私なんか何とも思つてやしないわ。そりやね、世話はして吳れる方ですよ。氣の毒な位よ。お金なんかいくらでも出すツて言ふ位なのよ。でも、ね、矢張、氣合ね。イヤな人はイヤね。私はあの人に逢つたのは、去年の春ですけどもね、それは隨分よくして吳れるんですけどもね。』

『好いよ、そんな話は何うでも――』

『だつて、私がよくないわ。』

『聞きたくないよ、そんなこと。』

私はまた冷めたい酒を呷つた。

『ぢや、聞かなくても好いわ。』女はかう言つてその前にある猪口を一呑みに呑み干して、『貴方ばかり飮んでゐないで、私にも頂戴よ。』

私は一杯明けてやつた。

私達は顏を見合せたり何かしてかなり長い間默つてゐた。かねて耳にしてゐたことなどが私の熱した頭を通つて行くかと思ふと、かういふ生活をしてゐる女の心の狀態を詳しく解剖して眼の前に叩きつけてやりたいといふ氣もした。不思議にも、靴の音をさせて入つて來ようとした男のことがやがて私には

それを見送つて、長火鉢の向うに來て、『また屹度痛い眼に逢はされるんでせう。』などと言つてゐると、ふと、足音がして、格子ががらりと明いた。

『誰方?』とも何とも言はずに、女は慌てたやうに障子を明けて上り端の方へ出て行つたが、『今行きましたよ。』といふ聲がして、それから何か手眞似のやうなことをして、ちよつと笑つて、聞き取れない位の小聲で二言三言何か言つてゐたが、そのまゝ、格子を閉める音が高く聞えて、靴らしい音が向うへと行つた。

『誰?』

『一緒に行つて呉れる人、深切な人。』かう女は言つたが、『貴方、知つてる癖に、何をそんなに妬くんですよ。いつか話したことがあるぢやありませんか。……今ね、グングン上りさうにしたから、私、かうしてやつたのよ。』小指を出して見せて、『だつて、向うだつて、貴方のことはちやんと知つてるんですもの、私はいつも言つてゐるんですもの、家には貴方が居るから、無闇に上つて來ては困るッて言つてあるんですもの……。貴方、矢張妬けて?』かう言つて女は體を私の方へ寄せるやうにした。

『お前も隨分人を馬鹿にしてるね。』

『さうぢやないッて言ふのに、貴方も隨分わからない人だわね。……家になんか上げるもんですか、あんな人!』

私がこんなことを言つてゐると、其處にさつきの婆さんがまたやつて來て、『もうお支度は好いんですか。好ければ、車を賴んで來て上げませうか。』

『何うぞすみませんけども……』

かう母親が言つた。

で、母親は座敷の方へ行つて支度に取りかゝつた。大島の着物に、くすんだ鼠がゝつたお召の羽織を着て、白い足袋をはいた。女はそれでも亂れた髮を櫛で撫でつけてやつたりした。

そこにコオトが出てゐた。新しく出來たコオトである。女と同時に拵へたコオトである。私は不愉快な氣がして、前に置いてある冷えた酒をぐつと飮んだ。

支度がまだ出來ない中に、ガラ〳〵と音がして車がやつて來た。女は、『車屋さん？ 一寸待つて下さい、今すぐですから。』かう言つたが、母親から鍵の入つた財布を受取つて、それを帶の間に挾んで、『そんなに、時間はかゝらないわね。』

『えゝ、えゝ、すぐ歸つて來るよ。』私の方を向いて、『ぢや、御ゆつくりなさいまし、すぐ歸つて參りますから。』

下駄を穿いて車に乘つて出て行くのを女は何の彼のと世話をしてやつた。コオトを着て、車に乘つて、矢張眼を氷袋で押へて、やがて出て行く母親の姿は、入り口の通のところにくつきりと見えてゐた。

『大學なら、しかし、安心して見て貰へるから好いですね。』

『何ですか……先生がゐれば好う御座んすけれど、大抵、若い助手か何かゞ見ますからね。』

『誰です、今は、大學では？』

『河本先生なら好いんですけど……、忙しい方ですから。』かう言つて、氷の袋をくるんだ手拭を裏返しにして眼に當てゝ、『宮下さんもなかなか好いお醫者さまですね、丁寧なやさしい氣の置けないやうな人ですよ。』

『一體、何んなになつてゐるんです。』

かう私が言ふと、

『左の方はさう大してまだわるくないんですけども、右がひどいんです。』かう言つて、氷袋を取つて、半開いた眼を明けるやうにして私に見せた。脂のたまつた眼は赤く充血してゐた。

『丸であけられないんですから。』

『困つたもんですね……それに、いつも今頃がわるいやうぢやないですか。』

『え、何うしても、冬はいけません。天氣が好いと、いけないんですね。曇つた日はいくらか好いんですから。』

『さうですかね。困つたもんですね。』

座敷の方で何か頻りに着物などを出してゐた女は、『母さん、何を着て行くの、大島？ 米琉？』

『米琉の方で好いよ。』

『大島を着て入らつしやいよ。……コオトは？』

『此間ので好いよ。』

『さう。』

女は何彼と母親の出かけて行く準備を整へてゐた。

『大學に行くんですッてね。』

『え……』少し途切れて、『病院に行くと、若いお醫者さんなんか、ひどいことをしますけれどね。いかにも痛くて仕方がないもんですから。それや痛いんですよ。ヅキ〳〵して顔が半分しびれてるやうなんですもの。え、いつものに少しトラホオムも交つてゐるんですね。大學に行けば、きつと切るッて言ひますよ。しかし、切られると、それは大變なんですから、眼の球を、拔かれるか、と思ふ位なんですから。切るッて言つたら、逃げて來ようと思つてゐるんです。宮下病院で、一度切られて、それはひどい眼に逢ひましたからね。』

『そんなに痛いもんですかね。』

『それや痛う御座いますよ。……眼の病氣が一番たまらないと思ひますよ。』

すツと立つて行つたが、元氣よく足音をさせて階級を上つて行つた。何か言つてゐる聲が甭高く手に取るやうに聞えた。

やがて女に手を引かれるやうにして、足元危く二階から下りて來た母親は、氷袋を手拭にくるんだのを眼に當てゝ、髮を櫛卷にして、寢卷を着たまゝのみだらな姿をしてゐた。私の其處に坐つてゐるのを見ると、氷袋を當てたまゝ挨拶をした。櫛卷の髮にさしたピンが其處に見えてゐた。

『目がいけないんですツて。今、一寸、二階に伺はうと思つてゐたんですけども……。何うも矢張痛みますか。』

『え、もう、どうも、それは一通りぢやないんですから、頭が半分痛いんですから。』矢張氷袋を離さずに、『こんな風をして、失禮をしてをります。』と頭を下げた。

『それどころぢやありませんよ。病人のゐるところに來て、こんなに、酒を飲んだり、御馳走になつたり何かして、すまないと思つてゐるんですよ。……すぐ歸らうと思つたんですけども。』

『いゝえ、私なんか構ひやしませんよ。何うせ、いつもかうなんですから、病人ツて言つたつて、不斷、矢張同じ病人なんですから……』かう言つてちよいと途切れて、『折角來ていたゞいたのに、お愛想も出來ないで、……何うかおゆつくりなさつてゐらつしやいまし。』

『いやもうさうしちやゐませんけど……』

婆さんは氷を買つて來て、また二階に上つて行つたが、今度はぢき下りて來て、『ぢや、また來ますから。』と言つて出て行つた。

私達は變な不思議な心持で酒を飲んでゐた。お互にお互の心が讀めてゐて、それを何ういふ風に觸れさせて行つて好いかわからないといふやうな狀態であつた。笑ひたいやうな怒りたいやうな氣分がお互の胸にあつた。

私はちやんと覺えてゐる。其時の刺身は鯛と鮪とのつくり交ぜだつた。私の好きななまこが丁度其時なかつたので、酢の物は貝柱のおろし合ひが來てゐた。茶碗の中には比良目がつかつてあつた。私は冷めたくなつたその吸物をてれ隱しに吸つたりした。燗德利は赤い模樣のついた素燒で、猪口は小さな縁の開いた京燒であつた。

『貴方、一杯頂戴よ。』

女はかう言つて、無理に私に酒をあけさせて飲んだ。『昨夜のつゞきをまたやるのかえ?』と私が笑ひながら言ふと、「たんと、皮肉なことを仰しやい。貴方の思つてゐることなんかちやんとわかつてゐてよ」といふやうな顏の表情をして、『さうかも知れないわ。』

『僕もやらうかな。』

『おやりなさいよ。』

『でも……』

『何アに、好いのよ、母さん、病院に行くんだツて言ふから。』

『病院に？』

『痛くつて、痛くつて、何うも仕方がないんですツて……困つて了ふわねえ。あの眼では――』

『何處の病院へ行くんだえ？』

『大學よ。』

『大學まで行くのかえ？　それは大變だ……』「誰がつれて行くんだい」から續いて訊かうとした私の胸には、ふとあることが闇の中を掠めて行く光のやうに思ひ出されて來た。大學病院！　去年、女が腎臓炎か何かを病らつた時にも、大學病院に診察を受けに行つた。其時、名高い博士の深切な話などを私にしてきかせた。などと私は思つた。

『でも、病人のゐる許に來て、のんきさうに酒を飲んでゐるのは氣の毒だからね。』私は考へてゐることを顔には出さずに、

『そこにあるだけ飲んだら歸るよ。』

『好いのよ、本當に――貴郎は強情だからいけない。折角來て嬉しいと思つた男を歸すもんですか。』

女はいつの間にか猪口を口に當てゝ酒を飲んでゐた。ほんのりと顔がいくらか赤くなつてゐた。

『何ういふ人だえ？』
かう私が訊くと、
『なァに、この近所で二階を人に貸したり何かしてゐる婆さんですよ。』
やがて料理屋の男が肴を持つて來た。それを受取つて置いて、女は餉臺の足を起した。私は酒を飲み始めた。
二階に上つて行つた婆さんは容易に下りて來なかつた。何か小さな聲で話をしてゐるのが耳に觸るやうに私には聞えた。私のことを何か言つてゐるんぢやないかといふ疑もいくらかは起つてゐた。女の酒のすゝめ方などにも不斷とはいくらか違ふやうな處があつた。
三十分ほどした時分、二階から靜かに足音がして漸く婆さんは下りて來た。『何うも、矢張いけませんね。陽氣がわるいんですよ……それから、あの、氷がないッて言つてゐましたから、私ちよつと行つて買つて來て上げませう。なァに……わけはありませんよ。すぐですもの。』婆さんが立つて勝手の方へ行くと、女は財布から氷を買ふ錢を出しながら、これも同じく其方の方へと行つた。何か二言三言話した後で通の方へ行く婆さんの足音が聞えた。
女はつゞいて二階に上つて行つたが、すぐ下りて來て、
『今日は緩くりしてゐらつしやい。』

『私ですよ。』かう言つて入つて來たのは、六十になつたかならない位の狡さうな眼をした痩せた婆さんであつた。『あゝ、太田の婆さん。』女はかう言つたが、『母さんに寢られて弱つて了つたのよ。一人でまご〳〵してるのよ。』

『言つてよこせば好いのに、私が手傳ひに來て上げたのに。』

こんなことを言つて、此方に入つて來たが、私の坐つてるるのを見て、少し狼狽してそこに立ちつくしてゐたが、『まァお入りよ、寒いぢやないの。』かう言はれて、障子をしめて室の隅に小さくなつて坐つた。じろじろとその眼は絕えず私の方を見てゐた。その眼と、その眼に對する女の眼とが、私にまたある暗示を與へた。

『母さん、何う？　矢張、痛むの？　いけないね。陽氣がわるいからね。』かう言つて、『ちよつとお眼にかゝつて來ようかしら？』

女が點頭いて見せたので、婆さんはその隅の方にあるひらきを明けて、靜かに二階に上つて行つた。

何ういふ婆さんだか、ちよつと私にはわからなかつた。しかし太田の婆さんといふことは、この前にも二三度母親の口から聞いたことがあつた。『毎日のやうに、うるさく來るねえ。』などと母親が眉をひそめてゐたこともあつた。しかし、今の素振から推すと、懇意の間柄でもなくはないといふことはすぐ私に飲込めた。

『おやね、お氣の毒ですけどもね、花月に電話をかけてね。お刺身に酢の物にお茶碗に三品急いで持つて來て下さいッて言つてお吳れね。それから、角の酒屋へ寄つてお酒を五合。』

『酢の物にお茶碗ね。』

女の兒はかう繰返して言つた。二三間行つたと思ふと、『ちよつと、ちよつと、勝ちやん。』と女は呼んで、『それから煙草を、三つばかり……これは少しよ。』財布から出した銀貨の音がちやら〳〵した。

『難有う。』

と言ふ女の兒の聲がして、『姐さん、煙草は敷島ね。』

『あゝ。』

と言つて戻つて來て、また役者の話を始めた。『此間さそはれて行つて見たけれど、好い處なんかにはちつとも出られないんだもの。あれぢや張合がないわね。名題にもうぢきなれる年割になつてゐるッて言ふんだけれども……あれぢや仕方がないと思ふわ。』などと言つた。『でも女の方でもいくらか氣があるのね。』などと言つて笑つたりした。

酒屋が一番先に酒をとゞけて來て、燗徳利を銅壺につけたりなんかしてゐると、勝手の戸が靜かに明いて其處につけてある鈴が微かになつた。

『誰方？』

て貰ひますから。』かう言つて、女は格子戸を明けて出て行つた。

女のそは〳〵した素振や、探るやうにして口を利く眼色や、さういふものが今日は不思議にも私にある暗示を與へてゐた。それには前からの疑もあつた。女もちよいちよいそれらしいことを言つたこともあつた。何をしてゐるかわかるもんぢやない。毎日來て見張つてゐる譯ぢやなし、二階には誰も上げないやうなことは言つてゐるけれど、何だか見ないことはわかりやしない。こんなことをも思つてゐた。何でも洋服屋か何からしい。女の新しいコオトが出來たり、母親のセルのコオトが出來たり、其他にも羅紗地の反物を一反も二反も持つてゐて、『これは貴方に好いわねえ。一つ拵へて上げませうか。』などと言つたことも私はちやんと覺えてゐた。

鳥渡と言つて出て行つた女は、二十分ほどしてから漸く歸つて來て、隣で芝居の話だの何だの出てつい話し込んで了つたなどと言つた。隣のわけの藝者の情夫が、新派の藤澤か何かの下廻りで、それが丁度其處に來てゐて、『それはだらしがないのよ。狹い三疊位のところに小さくなつて二人でゐるのよ。姐さんに邪魔にされて、あんなところに燻つてゐないたつて好いと思ふわ。役者の方でも、お給金を皆な出すッていふ約束であそこに來てゐるんですッて。いゝえ。つい、此間までぢき其處に一人で下宿してたんですよ。さうね、男の方も惚れてゐるんでせうよ。』などと言つて女は笑つた。

其處に勝と言ふ隣の女の兒が勝手元を明けて入つて來た。

で手水を使つてゐるのが半分明けた障子の處から見えてゐた。
『寒さうだね。』
私が此方からかう聲をかけると、
『いくら寒くつても、かうして手水をつかはないと氣持がわるいんですもの。』かう言つて女は猶長い間石鹼をつかつたり何かしてゐたが、『おう、寒い、宅の勝手は、それは寒いんですからね。』かう言ひながら入つて來る。今度は座敷に行つて、鏡臺の前に坐つて、鬢櫛で鬢をかいたり何かした。
少し綺麗になつて長火鉢の向うに來て坐つたが、『好いんでせう、今日はゆつくりしてつたッて？』探るやうな眼色を女はしてゐた。
『僕は好いけども……母さん、病氣ぢや仕方がないぢやないか。何處か他へ行つても好いけども、（實は他の茶屋に行く金のないのを氣にしながら）留守番がなくつちや出られやしないだらう。』
『それは構はないけども……。いゝわね、今日は、此處で一杯飲んでゐらつしやいよ。母さん、ことによると、病院に行くかも知れませんから。』
病院に行く。さうすれば二階が明く。しかしそんな風にして母親が寢てゐるのにさうしたのんきな色事でもあるまいといふやうな氣がして、まァ仕方がない、今日は運がわるいんだ、酒だけでも御馳走になつて行くかなどと私は思つてゐると、『ぢや、一寸待つて頂戴、私、隣の勝ちやんに頼んでお使に行つ

『何うかすると飮むのね。昨夜なんか可笑しかつた。鹿の子姐さんがひどく醉つちやつて、女中がお祝儀を懷に入れて置いて吳れたのをいつか落したんだね。ふと立つと、其處に白い紙が落ちてゐる。拾ふかと思ふと、お祝儀なんか入らないよ。今日のお客は氣に入つちやつたから、お祝儀なんかまけてやるよと言ふんでせう。それは可笑しかつた。飮手が揃つてゐたもんだから。』

『何ういふお客なんだえ？』

『新川の人か何かでしたよ。お客も隨分醉つてゐたわ。醉拂ひは困るわねえ。』と言つて女は笑つた。

長火鉢の置いてある間は、上り端のすぐの三疊で、座敷との間の襖をしめて了ふと、でなくつてさへ暗い室が夜のやうになつて了ふので、寒いにも拘らず、襖は常に明けておかなければならなかつた。左の障子を明けると、貧しい寒い勝手元が其處に見えてゐた。紫色をした安物の藥罐が瓦斯の七厘の上にかけてあつた。菜の干乾びた大根が二本ほど其處にころがつてゐた。

『その蒲團は薄いから取替へませう。』

女はこんなことを言つて、役者の似顏の模樣の出てゐる大きな厚いメリンスの座蒲團を長火鉢の前に持つて來たりした。

『寒い、本當に寒いわね。』

かう言つて、女は勝手元の方へ行つたが、瓦斯でわかした湯を金盥にあけて、寒さうに白い肌をぬい

つて行くんでせう。それを考へると、心配ですよ。』などと女は常に言つてゐた。

女は座敷に散らばつてゐるものを片附けた。昨夜、お座敷から歸つて來たまゝになつてゐる着物や長襦袢を疊んでゐたが、

『今朝は寒いのね、昨夜遲く金寶亭から歸つて來てすぐおこたをして二階に行つてねて了つたもんだから。丈夫な時には母さんがいろ〳〵世話をして吳れますけれど、こんな時は下女がゐなくつちや困つてよ……。妹？　妹なんかまだ何にも役に立ちやしませんからね。』こんなことを言つて投り出したまゝになつてゐる紙入だの紙だのを拾ひ集めて、『簪を昨夜どこかに落して來やしないかしら。』かう言つて、それが俄に氣になり出したといふ風で、そこらあちこちをさがし始めた。昨夜、騷いで來た跡だといふことは私にはすぐ飮込めた。しかし私は何も言はなかつた。

女は、『あつた、あつた、ありました。こんな處に入れて置いたんだよ。落すとわるいと思つて、髮にさはり〳〵來たことは覺えてゐたんですけどもね。こんな抽斗の中に入れて置いたとはちつとも知らないんですがね。生醉本性違はずだわね。』

『昨夜そんなに醉つたのかえ？』

『え。』と女は笑つて、『定子姐さんや何かとでそれは大騷ぎ、醉拂ひは仕方がないものね。』

『いつもそんなに飮まないぢやないか。』

かうは言ふものゝ女には何處かそは〳〵した處が見えてゐた。『本當に困つて了ふのね、宅の母さんにも――。そら、去年、一昨年でしたかね。一月ほど宮下病院に入つてゐたことがありましたね。何うしても治り切りには治らないつて院長さんも言つたんですからね。』

『何ういふ眼なんだらう、一體？』

母親が二階に寢てゐるといふこと――二階が空いてゐないといふことが絕えず氣になりながら、私はこんなことを言つた。

『何とか言ひましたよ。何でもあゝいふ眼の病氣があるんですつて。普通のなら、いくらも治す方法があるんださうですけども、お袋のは駄目なんですつて、段々わるくなつて行くばかりなんですつて。』本當に困つて了ふ。』

母親の眼のわるいのは私はかなり前から知つてゐた。芝居に行く時にも、母親はオペラグラスを眼から離したことはなかつた。『一間先？一間先どころぢやありません、もうすぐ前がぼうと霞がかゝつたやうになつてゐるんですからね。』などと母親は言つて、茶棚の上から小さな罐を取出したりした。時にはその罐を何處かに置き忘れて、『おい、誰か私の色男を知らないかえ。』などと言つてさがした。眼はぱつちりと明いてゐて、ちよつと見ると何處がわるいのかと思はれるやうであるけれど、時には充血して赤くなつてゐたり眼脂が出てゐたりするのを見たことは度々あつた。『長い中には、あれで、段々わるくな

妹は學校に出かけて行くから、それのゐないのは不思議はないが、母親のゐないのは何うしたんだらう。何處かちよつと使にでも出かけて行つたのかしらなどと思つてゐると、

『貴方、今日は私困つちやつたの。』

『何うかしたのかえ?』

『お袋が寢ちやつて……』

『何うしたんだえ?』

『矢張、眼ですがね。二三日、縫ふものがあつて夜更しをしたんですよ。すると、ぐつとわるくなつて、昨日から寢て了つたんですよ。今朝も起きられないんですツて。』

『寢てるの、それぢや――』

『え、二階に。』女はかう言つて『私、本當に困つちやつた。かう言ふ時は下女がゐないと困るのね。私、勝手元の方なんか、母さんにばかし任せて置いて、ちつとも知らないんですからね……。今朝は本當にてんてこ舞をしちやつた。』繰返すやうに言つて、『いゝえ、もう起きたのはさつき起きたのよ。もう十時過でせう。ちつとも早いことなんかありやしない。唯、まご〳〵してゐたのよ。』

『こんなに早く來る積りぢやなかつたんだけれど……』

『なァに好いのよ、好く來て下すつたわ。ゆつくりして行つて好いんでせう。』

來た子供の養育料をその旦那とわかれる時に澤山貰つて、それで家を二軒建てゝ、一軒は人に貸して置いた。其中二階の格子窓のところには、その幼い子供を妹達の遊ばせてゐるのがいつも此方からよく見えてゐた。母親の半ば白い髪なども見えた。小さな盆栽などの置いてあるのも見えた。

其日は二階の雨戶が唯一枚明いてゐるばかりであつた。私は何だかさびしいやうな氣がした。女がゐないんぢやないかと思つた。私は路地を曲つて、其表口の處に行つて、格子戶を明けやうとすると鍵がかゝつてゐた。

ガタガタ言はせて、小聲で案內を乞ふと、

『誰方？』

かう言ふ聲が中でした。女の聲だ。

『僕だ。』

『あ。』と言つたが、すぐ上り端の障子が明いて、まだ起きたばかりの寢卷姿の女が其處に現れた。『まだ、鍵がかゝつてゐたのね。待つて下さい、今明けますから。』かう言つて其處にあつた下駄を突つかけて鍵を明けて呉れた。『用心が好いぢやないか。』

こんなことを言ひながら私は上つて行つた。何んな時でも、いつも其處に坐つてゐないことのない眼の悪い母親の姿が今日は不思議にも見えない。兄は早くから役所に行くし、弟は工場に行つてゐるし、

横町に曲つて少し行くと、向うの横町からかねてよく逢つて知つてゐる若い女が莞爾しながらやつて來た。運がわるいところで出會したもんだなどといくらか氣恥かしくは思ひながら、『何處に行くの？』などと此方から聲をかけると、『ちよつとお稽古に！』と言つて少し顔を赤くして摩れ違つて行つた。

私は裏道から行つた。少し廻り道にはなつてゐるけれど、そこには知つてゐる女達の家がないので、『オヤ。』などと裏口から聲を懸けられるやうな危險がなかつた。それに其方から行くと誰にも逢はずに私の訪ねて行く家のすぐ傍のところに出て行くことが出來た。で、酒屋のあるところを出外れると、そこにはかなり廣い原があつて、子供達が集つて頻りに凧を揚げてゐた。達磨の繪を畫いた凧はよく揚つてゐた。其處に車をとゞめてゐた羅宇屋の釜からは、スチームが白く颺つて、微かに音を四邊に震はせてゐた。

原に添つて行くと、溝板を渡つて行くやうな細い路地があつた。その路地の中ほどのところから、三軒つゞになつてゐる私の訪ねて行く女の家の二階が見えた。その二階が明けてあるか閉めてあるかといふことがいつも一番先に私の好奇心を惹いた。すつかり明放されて搔卷が干してあることもあれば、二枚ほど明けたまゝになつて白足袋の洗つたのが固めて干してあることなどもあつた。その二階からは四邊にある藝者屋が一目に見渡された。三味線の音が彼方からも此方からも聞えて來た。すぐ前の中二階の家は私の知つてゐるある姐さんの母さんや妹などのゐるところで、其姐さんは、新橋にゐた時分に出

ある母の眼病

私はそんなに早く出かけて行つたことはなかつた。それが其日には不思議にも心がせかれた。私はいつもの處で電車を下りて車に乘つて行つた。三月に入つたばかりのまだ寒い日で川から來る風は身に沁みるやうに吹いた。ペンキ塗の小蒸汽の波を截つて通つて行くのが碧く透き徹るやうな水の上にはつきりと見えてゐた。土手下の日當りには、それでももう青い草が萠え出してゐた。

石の華表のある處で私は車を捨てた。いつもきまつてゐる賃錢を車夫にわたして、一方汚ない溝になつてゐるやうなところを通つて行つた。石の澤山積んで置いてある石屋などもあつた。ふとインバネスの隱袋に煙草がなくなつてゐるのに氣がついて、角に硝子戶のはまつてゐる汚ない店に入つて私は敷島を二つ買つた。私は一日に敷島の袋を三つも四つも明けるやうな男で、せつかちに卷煙草を吸つて半分位で火鉢の中に突き差すのをよく人に笑はれた。その時そこの煙草屋には十三位になる汚ない着物を着た男の兒がゐて棚から煙草を取つて私に渡して吳れた。

ぢやないか。考へると、危なくつて歩けない位のもんだ。』
『何うしてそんなことを考へるんでせうね。もつと皆なと交際して、圓滿に世の中を渡つて行く方が好いぢやありませんか。その方が樂ぢやないですかね。』
『そんな考だから、藝術なんかわかりやしないんだ。お前なんかには人間の心といふものはわからないんだ。恐ろしいもんだぜ。心といふものは底の底の底をさぐつてもわからないやうなもんだぜ。俺はその恐ろしい心と戰爭してゐるんだ。』
今子は夫の顏を見た。しかし別に變つたやうなところも見えなかつた。
朝は矢張早く起きた。茶の間は矢張闇の中に明るく見えてゐた。井戸繩を手繰る音も日增に冴えて行くやうに思はれた。今子は床の中でその氣勢を聞いて絕えず心配はしてゐるけれど、しかし何うすることも出來なかつた。夫は机の上で矢張コツコツ鉛筆の音を立てゝゐた。末の女の兒は早く起きて寒さうに膝ツ子などを出しながら其處に坐つてゐた。

歸つて夫に其話をすると、

『仕方がない、仕方がない……。』かう言つて頭を振つた。

畫家と同じやうに、夫も矢張外に出ることが嫌ひであつた。餘り多くの人とも交際しなかつた。人がわざ〳〵訪ねて來ても、いつも煩さいやうな邪魔なやうな顏をした。皆な、すまして俺を見に來るんだ。俺が何をしてゐるか俺が何ういふ顏をしてゐるか、皆なそれを見に來るんだ。『あいつらにギヨロ〳〵見られると、イヤな氣がして仕方がない。あいつらは、俺のすることを洗ひざらひ見たり聞いたりして、俺を破壞して行かうとしてゐやがるんだ。』

『何うしてでせう? それは私にはわかりませんね。變ですね、そんなことを言ふのは、誰だツて皆な折角訪ねて來るんだから、よく話してやつた方が好いぢやありませんか、世間の交際ッて言ふことも少しはしなくつては駄目ですよ。』

かう今子が言ふと、

『お前には解らないんだ。俺といふものがわからないんだ。人間なんかに交際つたつて何にもなるもんか。皆な細かいことまでほじくり出して、俺を倒さうとしてゐるんだ。そんな奴には逢はないに限る。ソッとして置くのに限る。裏をかいてやるんだ。ざまを見やがれッて言つて眼を向いて見せてやるんだ。お前なんか、よく世の中に出て、平氣で口をきいてゐられるね。其處にも此處にも、陷穽がある

を櫛卷にして、ひどく撲られて挫いた腕を白い繃帶で十文字に卷いてゐた。細君は成たけ詳しい話をするのを避けるやうにしてゐた。『また、今度入らつしやい、ゆつくりお話しますから。』などと言つた。細君もいくらか氣が變ではないかと思はれるやうな口の利き方をしてゐた。凄じい暴風の通つて行つた跡では、いかに落附いた草木でも、ぢつと靜かにしては居られないといふやうに見えた。玄關に立つて話をしてゐるのを向うから障子を閉めるやうにしたりした。顏は黄く蒼味を帶びてゐた。

『一體、いつからお惡るかつたんです？』

かう訊くと、

『去年から變には變でしたけれど、またいつもの癇癪が起つたと思つてばかりゐたんですよ。それが今年になるとわるくなりましてね。夜通し饒舌り通しなんですもの……。貴方がお出の時、もう何うかしてたんですね。もうあの時氣違ひだつたんですよ。』

かう細君は投げるやうに言つた。其言葉と調子とが大砲でも打ちかけられたやうに今子の頭には響いて殘つた。

『もう、氣違ひだッたんですよ。』かう繰返しながら、今子は家の方へ歸つて來た。

『もう、あの時、氣違ひだつたんですよ。』自分にもあゝいふ押へつけたやうな調子で、さういふことを言はなければならない時が來ることを想像して今子はぞッとした。

んに似てゐるよ。』などゝ笑つて言つてはゐられなかつた。また人も起きない暗い闇の中に、カンカン電氣をつけて、同じやうな顏と頭とをした親子がぶるぶる震へてゐるのを見ると、今子は淺猿しいやうな悲慘なやうな氣がして、ぢつとして見てゐるのに忍びなかつた。自分も氣が遠つて來さうになつて來た。今子は癇を昻らせて頰を赤くしてゐる朝などもあつた。

今子は周圍を見廻すやうな人になつてゐた。軍人の細君や、役所通ひの人達の細君や、近所の學校の先生の細君などは、皆なのんきな樂しいやうな顏をして通りを歩いてゐた。頭をつかはないさういふ人達の生活には、いつも明るい樂しさうな空氣が滿ちてゐた。何の苦勞もない生活らしく今子には見えた。此處に嫁に來る前に、軍人から望まれた口が二つも三つもあつた。一つは海軍の少尉で、一つは陸軍の中尉であつた。その中尉は舅や小姑の多い家で其方の話はかなり進んだところまで行つてやめになつたが、その人は少佐になつて今でも矢張獨身で暮してゐるといふ話などを思ひ出した。夫は、『お前なんか、軍人か役人の女房になつた方が好かつたんだ。その方が仕合せだつたんだ。俺のやうなところに來るのが既に間違つてゐたんだ。』などとよく言つたが、實際さうだとも思つた。

畫家はやがて近所の病院に伴れられて行つた。その時にも車に乘らないで困つたなどと、例の酒屋の御用聞が話した。今子はそれを聞くと、すぐ細君を訪ねて行つた。

今子は何と言つて好いかわからないやうな悲慘な感じを其處から受けた。細君は半分ほど切られた髮

『何うか、後生ですから、朝起だけはやめて下さい。』

と賴むやうにして言ふと、

『何うして?』

『何うしてッて言ふ譯はないんですけれども……第一寒いでせう。こんな寒い時に、朝、あんなに早く起きて、體に害にでもなると大變ですから……。私が起きてしまますから。』

『いろんなことを言ふ奴だな。朝起までもお前にとめられて堪るものか。女つていふものは、だから嫌ひだ。亭主は自分のものか何ぞのやうに思つてる。』

『さういふ譯ぢやないんですけど……。』今子は言淀んで、『何うしても眠むられないんですか、朝、目が覺めて? 何うかしてるんぢやないかしら? お醫師にかゝつて、何か眠られるやうな藥かなんか貰つたら何う?』

『好いよ、そんなことは何うでも……。俺の勝手にさせて置け。』

かう言つて夫は立つて行つた。

末の女の兒は夫によく似てゐた。顏ばかりでなく氣象も似てゐた。明けて六つになるのだが、これがまた朝夙くから起きた。同じやうな顏をして、冴えたやうな頭で、夫の机の傍に坐つてゐることなどを發見する時には、今子は殊に一種の強い戰慄を覺えた。『整ちやん、馬鹿に早いね。此兒は本當に父さ

染々考へた。『これから一人で男なしに……』こんなことを考へると、姉いさびしく暮して行つたさまなどもはつきりと眼の前に見えて來るやうな氣がした。『私のやうな氣の弱いものは、何うしたら好いだらう……。そんな事があつちや大變だ。思つただけでもぞつとする……明日からは、何うしても、朝早くから夫を起きさせないやうにしなければならない。』こんなことを考へて、今子は勝手元の處に立つてゐた。其處には、里芋が半分むきかけたまゝになつてゐた。

『行つて上げなくちやわるい……』

今子は續いてかう思つたが、一度呶鳴り附けられてゐるので、氣違ひとわかつた今となつては、一層無氣味で出かけて行く氣になれなかつた。

巡査が二人來てそれと取組んだり何かしたといふ話もやがて傳はつて來た。近所でももうかなりの評判であつた。今子は夫に行つて貰はうかしらとも思つたが、此頃の夫の狀態で、さういふ處に出かけて行つて、もしもそれが何かの災害の動機になつたりしてはそれこそ大變だといふ氣もして、夫が出かけて行かうと云はないのを寧ろ好いことのやうに思ひ返したりした。夏の日などに急に眞暗に襲つて來る低氣壓の一刻も早く過ぎて行くのを待つやうな心持も何處かでしてゐた。

夫は依然として矢張朝早く起きてゐた。ある時、今子が、

ところに人が五六人立つて、その畫家の宅の方を指して、頻りに何か言つてゐた。あの時、もう近所では知つてゐたと見える……。かう思ふと、明るい二階の電氣がまた氣味わるく今子の眼に浮んだ。

『奥さんは何んなだらう。』

今子の胸には、細君に對する同情が湧きかへるやうに起つて來た。さう深い懇意と言ふほどではないが、昔からよく知つてゐる間柄であつた。此家にまだ來ない時分、その畫家はもう今の奥さんを貰つてゐて、里の兄が懇意なので、よく伴れられて、歌留多などを取りに行つた。若い可愛い綺麗なお嫁さんだと思つた。その畫家はまた畫家で、里の二階に兄を訪ねてよくやつて來たものだ。雪のふる日に、尻端折をして、『兄さんゐますか。』などと言つて歌留多を取りにたづねて來たのはまだ昨日のやうに思はれた。それが、今になつて、三十四五にもなつて、さういふ眼にその細君が逢ふといふことは、何とも言はれないほど氣の毒であつた。うかうかと過ぎて來て、だしぬけに艱難に出會した辛さが染々と同情された。

男が四十二三、女が三十三四、世間を見渡しても、其の年恰好の時分にさういふ災害や艱難に出會すやうな人達が澤山にあつた。現に自分の姉もさうだなあと今子は思つた。姉の夫の死んだのは、姉の三十二三の時であつた。それから姉は一人の娘を抱へて、僅かばかりの遺産を頼りに賃仕事などして、辛うじて其日其日を送つて來てゐる。本家の嫂も矢張りその年頃に兄に別れた。今子は後家といふことを

も思つた。夫のことが氣になつて氣になつて、もしやひよつくりそんな眞似をしてゐやしないかと思つてこッそり書齋を覗きに行つたことも一度や二度ではなかつた。子供をつれて町に買物に行つた途中、急に胸騷ぎがし出して、急いで歸つて來たことなどもあつた。夫の心持の中に何處か解らない飲込めないやうなところがあるのが一番今子には心配になつた。夫は何をするか解らなかつた。

今子は夫を知らうと思つて、時々暇をぬすんで夫の書いたものを讀んで見ることもないではなかつた。しかし其處には恐ろしい不愉快なイヤな暗いことばかり書いてあつて、一冊とつゞけて讀んで了ふことが出來ないやうなものばかりであつた。女が顏を赧らめるやうなことも書いてあつた。『何うして、あんなことを書くんだらう。よく耻かしくない。』いつもこんなことを思つて、中途で本を伏せて了つた。

二階についてゐる明るい灯が今子の眼に附いて見えた。昨日の夜、ちよつと郵便を出しに行かうと思つて、無氣味だとは思つたけれど一人で出かけて行つた。此間、あんな雜言を言はれたので、まだ氣違だとは知らなかつたが、何だか變な氣がした。又其處から出て來て何か言はれやしないかと思つて、怖怖ながら其前を通つて行つた。其處には門があつて、丸い軒燈がついてゐて、栽込の中からその畫家の二階の電氣のカンカン明るくついてゐるのが見えた。勉強してゐると見える。何うしてあんなことを言つたんだらうなどと思ひながら、其處を通り抜けて、今子は角の郵便箱に行つた。歸りに見ると、角の

堀内も可哀相だが、細君が可哀相だ。苦勞ばかりして來たんだ……』考へるやうにして、『仕方がない、仕方がない。堀内ばかりぢやない。皆なさうなるんだ。眞面目に眞劍に考へた奴ほどさうなつて行くんだ。藝術家に取つては名譽の戰死も同じことだ。仕方がない。仕方がない。』

かう言つて夫は腦天の後のところをコツコツ叩いた。

『少し休んだら、何うです？』

『何アに大丈夫だ。俺は仕事をしなけりやならない。』

夫は机に向き直つた。

今子は仕方なく茶の間の方へと戻つて來た。心配で心配でならなかつた。此前にも一度さういふことがあつた。よく家に來た名高い同じ仲間の作家で、その細君などゝも今子は懇意の間柄であつた。その作家が朝早く書齋で剃刀で動脈を切つて自殺した。細君が行つて見た時には、血が一杯に疊の上に流れて剃刀を堅く右の手に握つて死んでゐた。細君は、『あんなに吃驚したことは御座いません。』と言つて、後に細かにその時の話をした。『何うも變だ、變だとは思つてゐましたけれど、まさかあんなことをしようとは思ひませんでしたもんですから。』かうその細君は話した。前の日は何でもなかつた。機嫌よく話した。然し前から夜寢られなくつて困る困るとは言つてゐた。眠られる藥を懇意の醫師の許に貰ひに行つて飮んだりした。今子は其話を聞いた時にもぶる／＼と體を震はした。藝術家なんてイヤな商賣だと

胸を震はしたが、思切つて、『堀内さん、たうとう變なんですつて。』
『變て、何うしたんだえ？』
『氣が違つたんですッて？』
『え！　堀内が氣が違つた！』
流石に驚いたといふ樣子で、『本當かえ？』
『本當ですッて……。私、此間行つた時にも、變だとは思ひましたけれど、もうあの時さうだつたんですね。』夫の顏を見い〳〵、『近所で皆なさう言つてゐるんですッて――。桝本の御用聞が今詳しく話して行きましたよ。夜は終夜饒舌り通しなんですッて。』
夫は何とも言はずに、暗い悲慘な顏をして、何か頻りに點頭くやうにしてゐたが、『仕方がない。何うせ遲かれ早かれ、死ぬんだ。俺だッて、明日死んで了ふか何だかわかりやしない。働いていけなけりや死ぬなり氣狂になるなりして了ふばかりさ。』
『だッて、』「貴方になど氣狂にでもなられちやそれこそ大變だ」と今子は言はうとしたが、痛いところに餘り觸りすぎるやうな氣がして飮み込むやうにして止して了つた。
『見舞に行かなくつちやわるいんぢやないでせうか。』
『氣違になつて了つたもの、ところに行つて見たッて仕方がないぢやないか……。しかし、氣の毒だ。

『それはさうだね。』

今子はかう言つて調子を合せた。

しかし、今子はそれどころではなかつた。わくわくと體が震へた。夫は何うしてゐるかと思つて、そツと拔足して廊下を通つて書齋の方へ行つて覗いて見た。

『誰だ？』

いきなりかう聲をかけられた。

『私ですよ、ちよつと出すものがありますから……』

『ぢや、覗いてなんか見ないたツて好いぢやないか。』

『いゝえ、さうぢやないんですよ。書いてゐるところを邪魔をしてはいけないと思つたから、ちよつと覗いて見たんですよ。』

ぢつと夫の方を見たが、いつもに變つた樣子がないので、今子はホツと胸を撫で下した。で、別にさがすものもないのだけれど、嘘言を言つたのが知れてはと思つて、襖を明けて、何か少し搜す風をして、『矢張、此處ぢやなかつたかしら。』などと獨語のやうに言つた。其間にも、机に向つてゐる夫の方を今子は絶えず見てゐた。

話さうか話すまいかと思惑つた今子は、カンカン二階についてゐる灯のことなどを思ひ出して、また

ばかり何方が好いだらう』と言ふと、あれがまたすなほに父さんが好きだつて言へば好いのに、かぶりを振つて見せたもんですから、それはひどく怒りましてね。紋子はそんなことは言はなかつた。父さんが好いつて言つてるたつて、『それァ、怒りやうッてないんですからね。髮の毛を引張つて、引摺つて井戸に入れて了ふッて言ふんですからね……困つて了ひますよ。』などと話した。今子はわくわく震へた。

その畫家の角のところの酒屋の御用聞は矢張今子の家の勝手元にもやつて來る男であつた。『それは、ひどいもんですよ。今でも何か言つてるますよ。始終饒舌り通しですからね。終夜カンカン二階にあかりをつけて、饒舌つてるるんですから。それは奥さんの身になつたら大變ですけども、あゝして放つて置いては仕方がないだらうと思ひましてね。私の宅でいろいろ申上げたんですよ。』

『奥さん、お困りでせう！』

『それやお氣の毒のやうですよ。尼になれとか何とか言つて、髮を切られたりなんかしてゐらつしやるんですから。』

『お可哀相ね。』

『何うも、しかし、氣が違つたのばかりは仕方がありませんね。あゝして放つて置いては、何んなことをするかもわかりませんからね。あゝなつちや一刻も早く病院に入れなくつちや――』

『私、びつくりして了つた。堀内さん、何うかしたんぢやないでせうか。私が行くと、イキなり、お前さんなんか來なくつても好い。來て貰はなくつても好い。もう絶交だつてかう仰しやるんですよ……。本當に、何うかなすつたんぢやないでせうかね。』

かう今子は夫に言つた。

『ふむ、さうか。』

夫はさう言つたきりであつた。夫とその畫家の堀内とは昔から友達であつた。さう頻繁に往來してはゐないけれど、互に氣質などをよく飲込んで知つてゐた。今子は年始に出かけて行つた時のことを繰返して考へた。『歸れ、歸れ、お前などと交際しないよう――』このようを長く引張つて言つた。矢張蒼白い顏をしてゐた。今子は夫を其處に發見したやうな氣がしてわくわく震へた。

『貴方、本當に、少し休む方が好いですよ。もしものことでもあらうものなら、それこそ大變だから。』

其處から歸つて來た時には、今子はかう言つて、無理に書齋に床を取つて夫をやすませるやうにした。

二三日經つ中に、堀内といふ畫家が發狂したといふことが段々近所にも知れて來た。その畫家の細君の母親なども訪ねて來た。『何うも亡くなつた子供を思ひ出したのが元のやうですね。何うも、電車にひかれて、血みどりになつてゐるのが今でも眼の前にちやんと見えるやうですよ。あの亡くなつた子の名を呼んで、生きてゐるやうに、何か話してゐるんですからね。定子をつかまへて、「お前は父さんと母さ

『うむ――』

と言つたきりで、疲れたとも、休むとも言はなかつた。矢張鉛筆を紙の上に走らせてゐた。

年の暮がやがてやつて來た。寒い冷めたい年の暮だつた。夫が一生懸命に書いたものは半は金にならなかつた。彼方此方の勘定も成たけ內端に拂つて、少しでも餘計に小遣が手元に殘るやうに今子は心がけた。總領の娘はリボンを買つて呉れといふ。男の兒は凧を買つて呉れといふ。それに、親類にも皆なそれ〴〵歲暮を持つて行かなければならなかつた。今子は乾物屋の拂ひを半分殘して置きながら、頭を下げて賴んで、其處から鷄卵だの海苔だのを借りなければならなかつた。

餠も五六枚ついたばかりであつた。お供餠にかざる鰕も、押詰つてから行つて、小さいのを値切つて負けさせて買つた。松は甥と男の兒とが夜出かけて行つて買つて來て門に打ちつけた。

今子は目前の生計に追はれる外に、絕えず夫の變つて行つた狀態に氣をもんでゐた。仕事をする時は、昔からさうであつた。妻だの家族だのは眼中に置いてゐないやうな夫のやり方であつた。しかし、此頃のやうに素氣なくはなかつた。峑打むいて知らん顏をしてゐるやうなことはなかつた。癇癪を起してもすぐやさしい顏を見せるやうな夫だつた。心と體とが段々夫から離れて行くやうな氣がして今子はさびしく暮した。夫の朝起きも氣がゝりであつた。

『まだ他では起きもしない暗い中から、雨戸をガラガラあけるのはおよしなさいよ。何だか氣違ひ染みてゐるぢやない？』

『何だ、雨戸を早くあけるから、氣狂じみてる？』

『他に、いくらも明ける人がゐるんですからね。』

『明けなくちや氣持がわるいんだから仕方がないぢやないか。どいつもこいつも、俺について來られる奴はありやしない。それでゐて、文句を言つてやがる。』

眞面目に夫はこんなことを言つた。

夫の朝起きは毎日續いた。何んな日でも、四時が鳴ると、もつくりと夫は起きた。茶の間はやがて明るくなる。ボッといふ瓦斯の音がする。掃塵をかける音がする。井戸の釣瓶の繩を手繰る音がする。かうして一日は一日と經つて行つた。其間には金物のピタリと手に着くやうな寒い朝もあれば、雪が軒下まで一杯に積つてゐるやうな朝もあつた。汚れた黃縞の綿入羽織を着て、鬚を茫々とさせて、神經の昂つたやうな蒼白い顔をした夫の姿は、冷たい勝手元の空氣の中にくつきりと見えてゐた。

『餘り勉強して體にでもさはるといけませんよ。少しは休んだ方が好いんぢやないでせうか。』

今子が心配してから言ふと、

よごれてゐるのに、あつい湯をかけてやると、鐵瓶がいゝ心持さうにしてゐるよ。綺麗になつてゐるだらう。鐵瓶だつて、一日働いて、朝一度位好い心持をしないぢや可哀相だ。』夫はこんなことを言つて、『それから、まだ樂みがある。齒をみがくことが樂みだ。好い心持だ。此頃は月が好いからな。』今子が起きて勝手元を働かうとすると、『寢てをれ、寢てをれ！　人に拵へて貰ふより、人に拵へて食はせてやる方が愉快だ。』

夫は長火鉢と角火鉢とにカン〳〵火を起して、それを兩方に置くやうにして、電氣の紐を長く垂らして、箒のやうな髮を總領の娘の机の上に低頭かせながら、例の鉛筆で一生懸命に字を書いてゐる……。一生懸命に蒼白い無氣味な顏をして鉛筆を走らしてゐる。鉛筆の先が鋭く尖つてゐる。

『かうして貴方が勉強してゐるところに、泥坊が入つて來たら、吃驚するでせうね。』かう今子が言ふと、

『うむ。』

と言つたきりで矢張書いてゐる。

で、五時半位になると、外が暗からうが暗くあるまいが、ガラガラ雨戸を繰り始める。長い緣側から折曲つた書齋の方まで、すつかり明けて了はなければ氣がすまないと言つたやうな風だ。それから前の庭の方の戶を明けて、そして玄關を明ける。玄關の鈴がチリリンと鳴る。

なかつた。夫はいつも火を持つて書齋の方へ入つて行つた。

「それが山から歸つて來てからは、夫は書齋の方に行かなかつた。火の世話をしろとも命じなかつた。」

四時が鳴ると、機械か何ぞのやうにきまつて一分もたがへずに起きて、電氣をつけて、着物を着て、足袋をはいた。鬚面の蒼白い顏が電氣に映つて氣味わるく見えるやうな朝もあつた。で、佛壇の前に置いてある眼鏡をかけて了ふと、一度つけた電氣を消して、障子を靜かにそッと明けて、茶の間の方へと入つて行つた。

茶の間の電氣はすぐついて、障子はぱッと明るくなつた。

瓦斯のつく音がぽつと聞える。こんなに早くから掃除なんかしないでも好いのにと思ふのに、夫はきまつて、茶の間の雨戸を明けて、バタ／＼掃塵をかけて、それから箒ではく音が輕く聞えた。

やがて勝手元の雨戸を明ける氣勢がした。寒い朝には、閾の溝が氷つて容易に動かないのをカンカン金槌で叩いたり何かしてゐた。續いて水を汲む車井戸の音が四邊にひゞきわたつて聞えた。

ある時、『寒いのに、水なぞ汲まないで間に合せて置いたら好いぢやありませんか。』と今子が言ふと、

『だつて、俺は水を汲むのが樂みなんだ。あの冷めたい石の棒のやうに氷つた繩に觸ると、何とも言はれない好い氣持がする。あれに觸らないと、一日不愉快だ。それに、瓦斯をつけるのが面白い。ボッツて言ひやがる。あのボッが面白い。それから、鐵瓶に湯をかけてやるのが樂みだ。一日灰だの埃だのに

夕暮近く、雨を衝いて、甥はその大きな佛壇を車で運んで來た。『佛樣が來た、佛樣が來た。』かう言つて子供達は大騷ぎをした。ぴか〳〵光る香爐や位牌を見て、後には『何だこれが佛樣か。』といふやうな顏をしてゐた。今子が掃除して位牌を並べてゐると、其處に夫は書齋から出て見て、『祖父樣も祖母樣も來たね。よく學校から雨の降つた時などに負さつて來た祖父樣だ。祖母樣には、夜便所に行く時によく聲をかけて行つたつけ。祖母さん、盲目で目が見えないのに、おばァさん見ててておくれッて言つて夜中に便所によく行つたつけ。いつでも目のよく覺めてゐるおばァさんだつた――』こんなことを誰に言ふともなく言つて、暗い佛壇の中を覗き込むやうにして、長い間其處に立つてゐた。

『おばァさん！』

などと小聲に呼んだりした。

今子は無氣味に思つて、『何うしたの？　イヤですよ、お位牌と話なんかしちや――』かう言つて、無理に夫を茶の間の方につれて行つた。

每朝夫の朝早く起きる氣勢を今子は床の中で聞いてゐた。昔から夫は夙起きであつた。書くものがあると、いつも四時頃から起きて机に向つた。前の夜に火鉢に火を活けて置いたり行火に炭團を入れて置いたりした。火鉢の火が消えてゐて、寒い朝を起されて、消炭をブー〳〵吹いたことも一度や二度では

それは年の暮近い頃であつた。亡くなつた兄の家族が一時家を畳むので、先祖代々の佛壇を頼まれて今子の家で預ることになつた。『イヤだねえ、佛樣なんか。』今子はかう言つて顏をしかめたが、しかし何うすることも出來なかつた。此處に家を造つた時、佛壇を拵へるといふことが緣起がわるいやうに思はれて、何だか其時から、已にイヤな氣がしてゐたが、愈々今度佛樣が來るといふことは、今子には何となく見えない災害の來る前兆のやうに思はれた。今子は不愉快な思ひをしながら、其處に入れて置いたいろ〳〵なものを他の押入の中に移したり何かした。其處には不用な道具だの古雜誌だのが一杯詰つて入つてゐた。三月の雛を入れた箱などもあつた。『もう、お雛樣を飾るのもぢきだ。』など思ひながら今子は蓋を取つて見たりなどした。

自分の不愉快な思ひに引替へて、夫はその佛樣の來るのを歡迎するやうに見えた。『たうとう俺の家に皆な來るのか。淸の宅はひろくつて好いなんて言つて、佛樣は喜んでやつて來るだらう。』こんなことを言ふかと思ふと、『子供が多いのに、佛樣までやつて來て、本當にやり切れないな。』などとも言つた。それも戲談ではなく、眞面目な顏で言つてゐるのを今子は見た。

幼い子供達は、夫よりも以上に佛樣の來るのを歡迎した。『今日來るの？　何時來るの？』『何處からお客でも來るやうなことを言つて、飛んだり跳ねたりした。『お客樣ぢやないんだよ、佛樣だよ。』かう今子が言つて聞かせてもわからなかつた。『佛樣、まだ來ないの。』かう言つて其處に來て立つてゐた。

いかと思ふほど、夫は長い間獨りで別の室に寢た。かと思ふと、わざわざ赤い金巾の裏のついた四布蒲團を書齋に持つて行つて、籐椅子の上に布いて、それにくるまつて寢てゐたりなどした。一人の樂園――それは今子にはちよつと想像が出來なかつたけれど、兎に角一人の樂園が夫に存在してゐることだけは明らかであつた。あの女の爲めぢやないかなどと今子は考へた。『私のことなんか、もうちつとも思つて吳れないんですね。後家さん見たいですね。此頃は――。』屹度、誰か他の人のことばかり考へてゐるんでせう。』などと言ふ時には、今子もいくらかのぼせ加減の赤い顏をしてゐた。夫は『もう散々やつて來たんぢやないか。もうお互に後家になつても好い時分だ。』などと笑ひもせずに難かしい顏をして言つた。

風呂を立てることを不思議にも夫は厭がつた。『お前、一人で入れ。おれは内風呂なんかに入らない。きたない、女の入つた汚れた湯なんか大きらひだ。』かう夫はよく言つた。一度今子と總領の娘とが、體のよごれた後の湯を立てゝ、その入つた後に知らずに夫が入つたことがあつた。それから夫は内風呂をヒドク嫌つた。『だから、一番先にお入んなさいッて言ふのに。』かう言つても矢張かれは外湯に行つた。それればかりではなかつた。何うかするとその外湯さへ汚ないものにかれには思はれるらしかつた。『湯つてものは汚いもんだね。三日も四日もためた垢をあそこに流しに行きやがる。今日は汚い爺が入つてゐやがつた。』などと言つて、顏をしかめて歸つて來た。

んなことを夫は言つた。

しかし仕事は昔と違つて、ドンドン運んで行くらしく見えた。『働くのが一番愉快だ。』こんなことを言つて莞爾してゐた。『今年は賴みに來た奴を斷らずに片端から皆な書いてやつた。好い心持だ。』などと言つてゐる。鬚を茫々と生やして、頭の髮の蔽ひかぶさる中から眼をギヨロギヨロと光らせて、にやりと笑つてゐたりした。『あんまり酷いぢやありませんか、理髮舖へ行つていらつしやいよ。』かう今子が言ふと、『働くものが髮の延びたのなどを氣にしてゐられるもんか。鬚の生えたのをかうやツて書きながらさはつて見るのも愉快なもんだ。』などと言つて、わざと濃い頰鬚に觸つて見せたりした。

今子は心配して、食事の膳の上に、牛肉だの鷄卵だのをよく載せて置いた。とろろ汁を拵へた時には、『また、あひるか』などと言つて笑つた。

何時だツたか、『不思議なもんだね。何ういふ作用かしらんが、屹度咽喉のつくりが違ふんだね。あひるがとろゝを大好きだが、それを泳いでゐる川の中なんかに流してやると、それを食つて、咽喉につかへらせて、屹度死んで了ふもんだつてね。滑稽なもんだね。』と言つて皆なして笑つたが、それからは、とろゝ汁をいつも『あひる、あひる。』と言つてゐた。『かう、度々あひるを食はせられちや、體の始末がつかなくつて困るぜ。』などと言つて笑つたこともあつた。

今子が夫の性慾に對して疑を抱き始めたのも、山から歸つて來てからであつた。何うかしたんぢやな

行火には汚れた燒焦だらけのねんねこがかけてあつた。あまり汚いからと言つて、今子は新しい瓦斯銘仙の方を持つて行つてそれに取りかへやうとした。と、『こつちの方が好い。こつちの方はこれでも絹だ。』などと言つて矢張その汚れた方をかけてゐた。それは十五年ほど前に亡くなつた母親の形見で、かれは長い間それを自分の下着にしてゐた。それに、これも矢張亡くなつた兄の形見の黄縞の綿入羽織があつた。袖口のところが切れてゐたり、袂の角に大きな燒けこげがあつたりした。それを夫は好んで用ゐた。『此方の方が好い。これでも兄貴の形見だ……。これを着てゐると兄貴と一緒にゐるやうな氣がする。』などと言つた。他の綿入羽織と取替へても取替へても矢張その方を着た。氣味わるがつて、今子がそつと佛壇の下の押入に隱して置いても夫はいつかそれをさがして着た。

何うかすると、その亡くなつた兄貴の話が始まつた。『兄貴が死んだのは四十三だ。丁度俺の今の年だな。俺なんかもう死んでも殘惜しいことはちつともないんだ……』かう言つて眼を瞬いて、『不仕合せな兄貴だッたな……樂な目に一度も逢はずに死んで行つて了つた。遊ぶことも好きだッたから、今まで生きてゐて、柳橋にでも連れて行つて騷いで見せてやつたら、何んなに喜ぶか知れなかつたのになア。』などと言つた。死んだ人が夫の魂の中に絕えず蘇つて來るやうに今子には見えた。海岸で肺を病つて死んだ友達のことも常に思ひ出すやうに見えた。『早く死ぬ方が運がないんだッて言ふが、あれはうそだ。死んだッて、まだちやんと生きてゐる。毎日、己の頭の中に生きて笑つたり話しかけたり何かしてゐる。』こ

『お前には無理かも知れないが、俺はさう思つてゐる。子供なんかも矢張獨りで大きくなつて行くさ。子供は子供相應に獨立を持つてゐるんだもの。お前だッて矢張さうだ。一人になれば一人になつたやうに何うしてでも生きて行かれるよ。心配するのは愚だ。明日、死んでも好いから唯働くんだ――』

何うかすると、こんな長い會話が取換されることがあるが、大抵は、『さうか。』とか『うむ、よし。』とか言つて默つて了ふ方が多いのを今子は見た。そしてすぐ机の方に向いて、せつせと鉛筆で字を書いてゐた。

この鉛筆がまた今子に不思議な思ひを起させた。山に行く前までは、筆と原稿紙とをひどく氣にする人で、筆は尖が少しすり切れなければ何うしても書けないと言つて、新しい筆を剪などにわざと使つて貰つたりした。原稿紙もいつも使ふものがちやんと机の上に並べて置いてなければ筆が執れないといふ風であつた。それが此頃ではすつかり變つた。机の上に置いてある赤だの藍だの青だのの鉛筆を見ると、今子は、不思議な氣がせずには居られなかつた。

元は、『あゝ書けない、書けない。』などと言つて、折角支度をした書齋から出て來て、緣側の處や庭の周圍をぐる〱歩いたり何かしたものだが、此頃では、一日書齋に入つたまゝで机に向つてゐて、飯の時にも呼びに行かなければ出て來ないといふ風であつた。『父さん、御飯。』かう言つて末の女の兒はいつも長い廊下を通つて書齋の前に行つて言つた。

鉛筆で、原稿紙の中にせつせと字を書いてゐる。角火鉢の中には敷島の吸殻が一杯溜つてゐる。

十能を持つて來て、それを取りながら、

『隨分、大變ですね。かう吸つちや頭にわるくはない？』

『何アに。』

『でも、毒ですよ。』

『酒をやめて、女をやめて、煙草までお前はやめさせる氣か？』

『さうすぐ取つて了ふからイヤですね。さうぢやないんですよ。心配するから言ふんぢやありませんか。』

『お互に心配しつこはよさうぢやないか。お前のことだツて、子供のことだツて、己は隨分心配した。けれど他人のことは心配したツて仕方がないもんだよ。他人は他人、自分は自分だ、子供だツて、お前だツて、俺の子供であり俺の妻でありながら、實は俺の子供でも俺の妻でも何でもないんだからな……。その證據には、俺の子供なら俺の妻なら、俺が殺しても何うしても差支ない譯だがな。殺せば矢張俺も殺されなけりやならないんだからな。矢張俺のもんぢやないんだよ。俺は俺、お前はお前だよ。そんな關係のものをお互に心配し合つたツて仕方がないよ。だからお互に心配し合ふのはこれからよさうよ。』

『だツて――それは無理だ。』

ば好いんだ。それで生きてゐられるんだ。子供さへゐないと、何うにでもなるんだが。』こんなことを口癖のやうに言つた。朝早く床の中で眼を覺した時には殊にそれが烈しかつたやうに今子には見えた。『ああ何うせ死ぬんだ。もう五十年と生きてゐられないんだ。』などと言ふのを聞くのが今子には殊に辛かつた。『何うか、あの朝の溜息だけはよして下さい、身が縮まるやうですから。』後には堪へかねて今子はこんなことを言つた。

『百姓になる百姓になるッて、もうそれぢや藝術は何うするんです。』

かう今子が言ふと、

『藝術なんかやめて了ふのは譯はない。やめて食つて行ければ、今からでもやめて了ふ。藝術なんか何だ。こんなへなちよこな日本の藝術なんか――』

かう吐き出すやうに言つて、『こんな小説なんか、いくら書いたッて仕方がありやしない。反古同然だ。』

それが山から歸つて來ると、狀態が丸で違つてゐた。もうそんなことは口にも出さなくなつた。默つて、飯を食つて、書齋の中に入つて行つた。

三

今子が書齋に行つて見ると、明るい窓に向いた机の傍に角火鉢を置いて、右の方に行火をかゝへて、

『何ァに、好いよ。』

かう言つて夫は矢張輕く叩いてゐた。

子供達が騷ぐと、非常に煩さがつて、口やかましく叱つたり、物を投げ附けたり、『子供が騷ぐので何にも出來やしない。』と言つて書齋から飛び出して行つたりしたものだが、それが今では少しも苦にならないやうに、子供達の騷ぎ散らすのを唯ぢつと見てゐるやうになつた。今子が見かねて、『父さん、少し小言を言つてやつて下さい、騷いで仕方がないから。』と言ふと、『なァに、子供の騷ぐのは仕方がない、騷ぐ方が好いな。』などと言つて莞爾笑つてゐた。

山に行かない前には、生活のことだの藝術のことだのが苦になつて仕方がないといふやうに、朝、火鉢の前で讀んでゐた新聞をメリメリ破いて棄てたり何かしたものだッた。『お前なんかのことを考へると、かうしちやをられんよ。己が死んだら、お前なんか何うする。子供をかゝへて路頭に迷はなければならないんだ……。こんなにしてぐづ〳〵しちやゐられない。』などと言つた。『おい、お前は己について行かれるか……。俺のあとについて北海道に行つて百姓になれるか……。なれないなァ。なれりや心配はないんだが、なれないから心配するんだ。東京の町の眞中で、ぴらしやらしてゐなければ生きてゐられない人間だから困るんだ。好いがなァ、百姓になれば――。イヤな人の顔なんか見ないでもすむんだ。空と星ばかりだ。自分で耕して自分で食つて、馬鈴薯きり取れない年には馬鈴薯を食つてさへすれ

明るい茶の間

半年家を明けて山の方へ行つてゐた夫の歸つて來てからの狀態は、丸で違つて妻の今子の眼に映つた。性急は依然として性急だか、元のやうに無理な癇癪は起さなくなつた。默つて落附いたやうな顏をして長火鉢の處に來ては煙草を吸つた。

『今日は好い天氣だね。』

など〻言つて莞爾してゐる。かと思ふと、此方の言つたことには返事もせずに、いつも深く物を考へる時にするやうな難かしい顏をして額に手を當て〻ゐたりした。

『頭でも痛いんですか。』

『うむ――』

など〻言つて、氣が附いたやうに、頭の腦天の處を輕く叩き始めるので、今子は、

『少し叩いてあげませうか。』

『何ァに！』主僧は笑つて、『昔からこの位の隱藝はあるさ！　面白いだらう。それよりも此處に入る時の條件が面白いぢやないか。外に何も望みがないが、三味線を彈くことだけは許して呉れツて言つて、世話人の承諾を得て入つたんだ。……妻か？　妻も少しは彈くさ。妻を世話するといふ時にも、これだけは彈ける奴つて頼んだんだからね。おい、お照、お照、お前も、此處に來て、何か一つ彈いて上げないか。』

『まア昔の話はよさう。それよりも唄でも唄はうぢやないか。』

主僧はかう言つて、其時分覺えた端唄物などをうたひ出した。二三杯ぐつと飲んだ酒に醉が急に出て來たらしく見えた。肥つた方もそれにまけずに流行唄などを唄ひ出した。細君が銚子の代りを持つて行つた時には、その肥つた方が義太夫のさはりか何かを眞面目な顏して唄つてゐた。痩せた方は顏を眞赤にして、時々口の中でそれに合せて矢張小聲で唄つてゐた。

『矢張、絲がないと駄目だな。』

痩せた方がかう言ふと、

『あるよ、出さうか。』

主僧は向うに立つて行かうとする細君を呼びとめて『おい、これを持つて來ないか。』と言つて三味線を彈く眞似をした。細君は笑つて向うに行つた。

やがて細君は三味線と撥とを持つて來て其處に置いた。主僧はそれを手に取つたが、『それ？　何か唄ひたまへ。』かう言つて調子を合せて、『先づお座附を一つやるかな。』

……君に逢ふ夜は……三味線と唄とが流れるやうにあたりに聞えた。

『いつ習つたんだえ？　豪いもんだな。』二人は眼を瞬らずには居られなかつた。

『本當に何時習つたんだえ？』

『しかし、君がかういふ風にならうとは思はなかつたね。田川君。田川つて言ふ名は今でも山内でひびいたものだぜ……。この間、瓢亭で會があつた時、あの小さな、あの時分お酌をしてた、何とか言つた妓がゐたね。そら、君が可愛い子だつて言つた奴さ。あれがね、僕のそばに來て、田川さん何うしたでせうつて言ふから、好い奥さんが出來たッて話をしてきかせたら、まア、さう、男ッて浮氣なものね、小萬さんが聞いたら何んなでせうッて言つてるたぜ。小萬は何うしたえ？』

『あれつきりだよ、何うしたかちつとも知らない。』

『內々逢つてゐるんぢやないか。』

かう肥つた方が言ふと、

『そんなことはない。』

『本當かえ？』

『それは本當とも……』

醉はもうかなり一座に廻つてゐた。肥つた方は、『此間も君の噂が出てゐたよ、本當にあんな綺麗な和尙さんはもうありやしないッて、皆なして言つてゐたよ……。君がゐなくなつてから一層皆なが何の彼のと言つてゐるよ。何うも、吾々が見ては、さう大して好い男とも思はれないんだけども……矢張、女には何處か好い處があるのかな。』

『だつて御覽の通りの田舍住ひぢや仕方がないぢやないか。』

『これでも好い。今の生活よりも好い。……兎に角、家庭が羨ましい。奥さんがあるつていふことが羨ましい。』

『つまらないよ、君、持つて見ると……君方の想像したやうなものではないよ。』

『それはさうかも知らない。しかし、僕等にはまたそのつまらない味がわからないんだから、可哀相なもんぢやないか……』痩せた方はかう言つて、『人間と生れた甲斐がないぢやないか。もう來年は四十だぜ。僧侶にならうといふ本心で僧侶になつたんなら、あきらめもつくけれど、子供の時分から否應なしに僧侶にされたんだからね。かういふことになるのは仕方がないよ。山内でだつて、年寄達はそれは知らないが、僕達の年輩のものゝ後には皆なさういふ要求があるんだ。君なんかの方が餘程賢いよ。』

『本當だ！』

かう合せた肥つた方はもうかなり醉つてゐた。

『つまらん！　それよりも少し唄でも唄はうぢやないか。え？　田川君！』

かうつゞけて言つた。

『まア、飲み給へ。』

主僧はかう言つて徳利を取つた。

つて來るといふ話などは細君の耳には親しかつた。夫があの宮樣のお氣に入りであつたといふ話なども聞いた。『お山にゐれば、こんな物のわからない百姓を相手にしなくつても好いんだ……。』などゝ夫は言つた。

奥の座敷は賑やかであつた。盃はそれからそれへと廻つて行つた。『好いさ、明日一日位おくれたつて好いぢやないか。一日保養して、何處かへ廻つて面白い思ひをして歸るさ。僕なんざ山にゐる時分は、そんなことは平氣だつたがな。』などゝ主僧は言つた。山内の老僧達の話も段々出て行つた。

『今、僕等が他に先だつて實行すれば、わけはないんだけれども……何も苦情の起りやうがないんだけれど、それにや少し立派にしなけりやァ。今の寺の普請がすつかり出來てでもゐれば何うにもなるんだけれど……。君が先驅者になると好いんだけれど。』

痩せた方が肥つた方に言ふと、

『僕はまだ駄目だ、位置がわるいからな。』

と肥つた方が言つた。

『しかし、本當につまらんよ。本坊にねとまりして、冷い蒲團の中に一人でもぐつて寢なけりやならないと思ふと、冬なぞは殊にイヤになつて了ふよ……お經なぞいくら讀んだつて仕方がありやしない。……僕も、いつそ、君のあとを追はうと思ふことがよくあるよ。』

寺の細君には、此處に嫁に來て、まだいくらも日數が立つてゐないといふ柔らかな氣分が殘つてゐた。

『お照、お照。』と主僧が呼ぶと、ハイ〳〵とやさしく素直に返事をして、莞爾した愛嬌を四邊に見せた。

『う。さうかえ？　それぢやさうした方が好いだらう。』主僧はかういふ風なやさしい口の利方をした。

『もう夜も遲いんだから、何も構つて呉れ給ふな。』かう言ふのもきかずに、主僧は小僧と寺男とを町の方に走らせた。先づ何より酒と言ふので、細君はちよつとした浸し物を菜に膳を客の前へと運んで來た。三人とも山内で聞えた酒豪で、何はなくとも酒さへあればといふ夥作であつた。

『それぢや、久し振りで一杯飲むかな。』かう云つて肥つた方が先づ杯を取上げた。

細君は傍に寄つて酌をした。丸髷の手絡が赤く見えてゐた。

『矢張、酌は異性に限るね。』

などゝ痩せた方が言つた。

町に行つた使ひが、寢た肴屋を叩き起して、何うやら彼うやら刺身に鹽燒位を持つて來る時分には細君の手づくりの吸物も出來た。奥では話がはずんで、賑やかな笑聲が絶えず其處から洩れて來た。細君は機嫌好さうにして旨さうに酒を飲んでゐる夫の顏を見た。

山内といふ二字には細君の耳はかなりよく熟してゐた。『山にゐる時分は――』かう言つて夫はよくその時分の話をした。參詣人が一年中に何十萬人あるといふ話や、宮樣方や貴婦人方やが絶えず避暑にや

には置かなかつた。二人きりになつた時、

『そんな別品ぢやないぢやないか。』

『でも、あゝして一家をつくつてゐるのは好いね。僕等だと、客が來ても、小僧が汚い衣を着て茶を持つて出るといふ形なんだがね。矢張女がなくつては駄目だよ。』

『それはさうだね。早く實行するんだね。』

肥つた方は笑ひながら言つた。

主僧はやがて入つて來た。『いや、もう、お耻かしいわけサ。』などゝ頭を掻いて、『なァに、さういふ意氣な話はないんですよ。』

山を出て、放浪して、あちらこちらと迷つてゐる間に、不圖、昔の知己が此處にゐたのを賴つて、何の氣なしにやつて來て見ると、丁度、此寺が無住で長い間空いてゐたので、一つお前が坐つて呉れないかと言ふやうなわけで、そんならと一時此處に坐ることになつた。『入る時には、こんなことになると少しも思つてゐなかつたけれども……つい、居心が好いつて言ふんだか何だか、あんなものまで出來て了つたといふわけですよ。そんなことを慧觀さんが言ひましたか……何うして、それどころぢやないんですよ。英雄の末路つて言ふやうな有樣なんですよ。お前さんも一人きまつたのを持つ方が好からう、もう持つても好い年だなんて言ふやうな譯で、世話人が寄つてたかつて押つけて呉れた始末なんですよ。』

山がなつかしくて仕方がない。さうかえ？　あそこへ山の用事で來たのかえ？　本當によく來て吳れた。ナァに、遲くだつて構ひやしないよ。いつでも十一時半まで起きてゐるんだけれど、今日は客が來て、少し酒を飲んだもんだから、早く寢て了つたんだ……。さうか、伸がなくて、それは困つたらうね。……成ほど盆だからね、田舍は――。』

こんな風にして話した。一緒に加行をした時分のなつかしい調子が矢張何處かに殘つてゐるのを痩せた方は見た。『まァ落附きたまへ。話も澤山たまつてゐる。何から話して好いかわからない。』かう言つて奥の方へ出たり入つたりした。

暫くしてから、細君が茶を運んで來た。丈の小づくりな、何方かと言へば痩せた方の人であつた。かねて聞いたほど美しい人でもないのを二人は見た。

山の和尙さん達だと言ふので、細君は何處かきまりのわるさうな物の言ひ方をした。唯物ではないなど丶言つた慧觀の言葉が惹起した好奇心はすつかり二人にはなくなつて了つてゐた。『よく入らしつて下さいました。こんなところですから、何にもお構ひ出來ませんでな。』かう言つて茶を侑める言葉にも何處か田舍の訛が交つてゐた。

しかし家庭といふことが山の和尙さん達にはめづらしかつた。美しくあらうが無からうが、さういふ異性の人がゐて、やさしい口の利き方をして、主人と一緒に客を歓待するといふ狀態は二人の心を惹かず

二人は奧の十疊の間に通された。小僧が前の雨戸をガラ〱と明けて、臺ランプの明るいのを其處に持つて來たりした。蚊いぶしを持つて來て、『此處は蚊がえらう御座いますから。』などゝ言つた。

涼しい夜風は流るゝやうに裏の森から入つて來た。床の間には古い具足などが飾り立てられてあつた。達磨の幅物は薄暗くその向うに見えてゐた。二人は被布をぬいで、座蒲團の上に坐つた。

『えらい目に逢つたね。』

こんなことを言つて笑つた。

『やァ。』

かう言つて奧の襖をあけて昔の友達は入つて來た。二人はいくらか痩せて青白い顏をした友達を見た。寢卷にへこ帶をぐる〱卷いてゐた。

『めづらしいね。本當に吃驚したよ。』主僧はかう言つて、『今時分たづねて來やうとは思はないからね。山の人？　誰だらう山の人？　つて一寸分らなかつたよ。しかし、よく來て吳れた。光明院さんも一緒とは本當にめづらしい。夢のやうな氣がするよ。』

元氣ななつかしい昔の調子は二人の心を和げるに十分であつた。『さう〱慧觀さんがたづねて吳れた。……かういふところにゐると、山のことがこひしいよ。一日だつて思ひ出さないことがないからね……。慧觀さんが來て吳れた時にも本當にうれしかつた。あんな風にして出て來たんだから、殊に、

は皆な休んで了つたから……。とつさん、お前、一つ淨光寺まで送つて行つて上げなんし……』深切な上さんはかう言ひながら提灯に火をつけた。

さう大きくない田舍寺がやがて二人の前にあつた。山門――と言ふほどでもない小さな門の奧に、本堂らしい藥葺の家があつて、その右の方に小さな庫裡の入口が見えた。山內の淨法院と言はれた立派な寺に住んでゐた友達が――男振は好し、話は旨いし、學問は出來るし、何一つ缺けたところのないあの才子が、かう言ふ小さな田舍寺にゐるかと思ふと、二人は言合したやうに顏を見合せずには居られなかつた。しかし二人は何も言はなかつた。

先に立つた男が、

『これ、もし、お客さまだぞよ。』

かう二度も三度も庫裡の入口のところに行つて叫んだ。それでも、早く寢て了つたと見えて、容易に誰も起きて來るやうな樣子もなかつた。男は後では戶を叩いた。

やがて小僧らしい十五六の少年が眠むさうな眼をして戶を明けたが、刺を通ずると、その取扱ひが俄かに生々とした趣を見せて來た。奧で人の起きる氣勢などもした。

『何うぞ此方へ!』

矢張返事をせずに、娘達は今度はばた／＼驅け出した。あとから見てゐると、子供の持つた酸漿提灯が大きく輪を描いて搖いて行つたが、その中の一人がころんで、あれと言ふ間に、小さな赤い提灯に火が移つてぼうと燃え出した。わつと泣く子供の聲がした。

もえ上つた提灯の火は、驚いて其處に集つて來る娘達の群をしばらく明るく照してゐた。轉んだ子を慌てゝ引起したのなども見えた。『お前さんが驅け出すからわるいんだよ。』などゝ言つてゐる聲も聞えて來た。

『可哀さうに――提灯一つ燃しちやつた。』

二人はこんなことを言つて笑つた。

町の方へ行く路とわかれて右に入つて行く細い路があつた。一二町行つたら、右に曲つてと教へて呉れた上さんの言葉を二人は思ひ出した。その路は全く田圃路で、畔には草に夜露が一杯たまつてゐた。

『たまらないねえ、これぢや足袋も何もだいなしだ。待つて呉れ給へ。』肥つた方は先に立つて蠟燭を持つて行く友を呼留めた。

しかし、それは短かい間であつた。その路は更に廣い路に二人をつれて行つた。そればかりでなかつた。その廣い路の角には、一軒まだ起きてゐる百姓家があつて、幸ひにもそれは淨光寺の檀家の一軒であつた。『さうでしたか、それは大事でした。生憎、今日は盆で、それに町に芝居があるもんだで、倅屋

いてゐるのを見て、不思議さうに話をやめて立留つた。

六つ七つの女の兒が三四人、その中に十七八の娘が二三人雜つてゐるのがやがて此方から火影にすかして見えた。丈の高い方の娘は、屋號のついた大きな提燈を持つてゐた。

『姐さん、姐さん。』

かう肥つた方が最初に聲をかけた。『そんなに澤山あるんだから、何れでも好いから、一つ提灯を賣つて吳れませんか。』

娘達は立留つたまゝ何かコソ〳〵言つてゐて容易に返事をしなかつた。中にはくす〳〵笑ふものなどもあつた。

『淨光寺に行くのに、路がくらくつて困つてゐるんだがね。一つ小父さんにその提灯を賣つて吳れませんか。』

瘦せた方がつゞいて言ふと、娘達はくす〳〵と笑つた。そして矢張返事もせずに、二人の傍をすれちがふやうにして通つて行つた。子供達は怪訝な顏をして其處に立つてゐる二人の方を見た。

『戲談ぢやないんだよ、本當なんだよ。』かう言つて聞かせても、娘達は矢張くす〳〵笑つて行つた。

『矢張駄目だね。』すれ違つてから、瘦せた方はかう言つたが、思ひだしたやうに振返つて、『淨光寺には此方へ行つても好いのかね？』かう大きな聲を出して訊いた。

『まだ町は賑やかなんだね。』
『盆だからね。』
町の見える路の角に立つて二人はこんな話をした。
あとから空車の音がガラ〳〵して、提燈を持つた男が二人追越して行つた。
裸蠟燭は夜風にチラ〳〵と動いた。それを持つた瘦せた方の僧の顏は、青白く闇の中に見えてゐた。
町に田舍芝居があると見えて、拍子木の音が高く聞えて來たりした。
夕立の後の路はわるかつた。ところ〴〵に水溜などがあつた。バシャソといふ音がしたと思ふと、『こ れはたまらん。すつかり水溜の中に落ちちやつた！』かう云ふ肥つた方の聲が後に聞えた。二人は知らないところに來て、かういふ目に逢ふのを後には笑はずに居られなかつた。『旅に出ると、いろんな目に逢ふね。これなどもあとでは話の種になるね。』などゝ言ひながら縫ふやうにして歩いて行つた。大きな水溜には星の影が映つてゐた。
酸漿提燈を三つ四つつけた群が賑やかに何か話しながら向うからやつて來た。
『あの提燈を一つ何うかしたいもんだね。』
『さうだね。二つ三つつけてゐるから一つ位何うかなりさうなもんだ。』
段々話聲が近くなつて來た。やがてその距離が五六間になつた。向うでも、此方が裸蠟燭をつけて步

た。涼しい夜風が、田圃の上を渡つて來て二人の衣の裾を吹いた。」

今更何うすることも出來なかつた。引返して汽車に乘つて行く譯にも行かなかつた。『兎に角行つて見やうぢやないか。』やがてかう二人は決心した。

『此近所に蠟燭を賣つてゐる家はないでせうか。』

『二三軒先に、駄菓子を賣る家がありますからそこで聞いて御覽なさい。たしかあつたと思ひますから……。』

かう上さんは教へて呉れた。

教へられた店はまだ起きてゐた。庭の軒先には、青く薄を書いた盆提燈の灯がチラ〳〵と夜風に靡いてゐた。『あの提燈を貸して呉れると好いがな。』こんなことを言ひながら二人は入つて行つた。

婆さんが出て來て、蠟燭を賣つて呉れた。痩せた方は、『君、マッチを持つてるか。』かう言つて袂から搜して出したマッチを受取つてそれに火をつけた。婆さんは不思議さうな顏をして見てゐた。

譯を話して、『お婆さん、お氣の毒だが、そこの提燈を賣つて呉れませんか。』などゝ肥つた方が笑ひながら言つて見た。婆さんは笑つてゐた。

仕方がないから、裸蠟燭を點したまゝで二人は出かけることにした。山の裾に添つた町の方では、盆踊の音に交つて太鼓の音なども賑やかに聞えてゐた。人々の騷ぐ聲も田圃を越して來た。

も、今日はお盆なんですから、皆な休んで了つたと見えますね。』そこに凉み臺を出して休んでゐた上さんが言つた。

『成程、盆だ……困つたな。』痩せた方はかう言つたが、『誰か無いでせうかな、此近所に……。初めて行く所だから、俥がなくつてはとても行かれないから。』

『さァ。』

と言つて、上さんも困つてゐた。『皆な俥屋は町から出張つてゐるもんですから……』

『町は遠いんですか。』

『遠くもありませんがね……行つても、盆だから誰か來て吳れゝば好いが――それに、もう遲う御座んすからな。』上さんは和尙さんと見たゞけに丁寧に氣の毒さうな顏付をして、『そして何方へ入らつしやるんですか。』

『なァに、近いんですけど……』肥つた方はかう言つて闇の中に白く見えてゐる上さんの顏を見て、『淨光寺ツてお寺はこの近所にありますか?』

『淨光寺? 淨光寺なら、すぐ其處ですよ、いくらもありやしません。晝間なら、此處から見えるんですから……。町に行くよりも近い位ですよ。』

『しかし、困るなァ。始めての道で、この闇では――。』二人はこんな事を言つて暫し其處に立盡してゐる

たりした。明るい灯は明るい灯に續いた。何處かで絃歌の音が賑かにしてゐた。三味線の聞えてゐる明るい室の前のやうなところをも汽車は通つて行つた。

『まだそんなに遲くないぢやないか。』

肥つた方はこんなことを言つて、世の中の歡樂の漲つてゐるやうな明るい町の方を見た。

二人の下りたのは、そこから二つほど行つた小さな停車場であつた。丁度山の裾になつてゐるやうな町で、黑い山脈の重り合つた線が闇の中にくつきりと劃つたやうになつて見えた。汽車は二人を下すとそのまゝ出て行つて了つた。

若い改札の顏は眠さうに見えてゐた。

二人は停車場の構内を出ると、すぐ俥をさがした。しかし俥は一臺も其處に見當らなかつた。

『俥がないぢやないか。』

瘦せた方は、まだ其處に立つてゐる改札の方に行つて聞いて見た。

『いつも一二臺はあるんですがな。』

改札はこんなことを言つてゐた。

要領を得ないので、止むなく二人は停車場前の店の方へ行つた。『さうですね、いつもあるんですけど

を持つッて言ふことは一寸實行し難いね。田川だつて、僕が先驅者になつてやるなんて言つてゐながら、山を出て行く時はあゝいふ始末だからね。睨まれて、山内にゐられなくなつて、こつそり默つて出て行つたやうな譯だからね。』

『奴なんぞの方が、考へると氣が利いてゐるんだね。山内にゐて、大きな寺に入つて、威張つて忙しい思ひをしてゐるよりも、田舍へ出て、こつそり細君でも持つてゐる方が餘程好いね。』

『しかし、奴も失敗者だからな……』

痩せた方はかう言つて何か考へるやうな顏色をした。かれの眼の前には、これから、たづねて行く舊友のことが歴々と浮んで來た。田川は山内での評判の好男子であつた。淨法院さんといふ名は町の娘の憧憬の的になつてゐた。かれが大師堂にゐると、藝者達が毎日のやうに揃つておみくじを引きに來た。五年間も嫁に行かずにかれの跡を追ひまはした料理屋の娘などもゐた。後には山の町の藝者と關係が出來たやうな話であつた。快活で、怜悧で、話のよくわかる男で、痩せた方の僧とは殊に仲が好かつた。筧の水も氷つた寒い冬の朝に、二人で僧衣の袖を合せて三佛堂に讀經に行つた時分のことなどをも痩せた方は思ひ出してゐた。

汽車の速力が緩くなつたと思ふと、町の灯が明るく車窓の兩側に見え出して來た。夏の夜は更けてもまだ更けたらしい樣子を見せなかつた。さつき降つた夕立の露は柳の枝に殘つてキラ〳〵灯に輝いてる

『しかし、奴のところなら、寢てたつて、何だつて構ひやしない。……それは構はないがね……』考へて、『何うする？……旅籠屋についてつまらなく寢て了ふよりも、奴のところに行く方が面白いと思ふがね？』

『それは面白いがね……迷惑ぢやないかな。』

『少しの迷惑位かけたつて好いさ。好い細君を持つてゐるつて言ふんだもの。』

『綺麗な細君かしら？』

『此間、ちよつと寄つて來た慧觀の話では、若い二十三位の細君だつて言ふ話だよ。只者ぢやないなんて言つてゐたよ。』

『奴が山を出てから、もう何年になるね。』

『さう、あの入佛式のあつた冬だから……さうさ、……もう四年になるよ。』

『さうかな、もうさうなるかなァ、僕達の方は話はちよつとも進まないのに……年月ばかり經つて行つて了ふね……』考へて、『それにしても君の話は何うした？　好い候補者を東京で周旋する筈ぢやなかつたか？』

『何うも矢張、犧牲者になるやうな形になるからね。矢張長い間の因習だから、山内でも一般に家內

て聲が嗄れた位だ。三千禮でもやつたやうな氣がする。』大きなあくびを一つして、『これでこのまゝ歸つて了つては、くたびれ儲けの骨折損だ……。何處かないかな、この近所に……』

『あるにはあるんだらうが、遲くなつて了つたのが何より困る。』

『不夜城がありさうなもんだ。』

『でもなア……かういふ恰好をしてゐるんだからな。』

まさかさういふ場所に入るわけにも行かないといふ語氣を瘦せた方は洩した。

二人はまた默つた。汽車は明るい山裾の町の方へ段々近づいて行つた。

『ぢや、何うする？　矢張奴のところへ行くかね？』

肥つた方が言つた。

『さうしやうぢやないか。今夜は久し振で、奴のところに行つて、昔の話でもして、ゆつくり酒を飲まうぢやないか。』

『始めて行つてわかるかしら？』

『停車場から三四町しかないッて話だから、ぢき分るだらうと思ふがな。』

『びつくりするだらうね。それに、もう遲いから矢張、寢てるかも知れないね。』

說とが段々本山の幹部の間に出て來た。で、この二人は選ばれて其處に遣つて來た。暴風のやうな談判、烈しい凄じい演說、一方を押へれば一方が不平を言ふと言つたやうな恐ろしい爭鬪、ある村の寺の演說會では、村の若者が一杯に押寄せて示威運動がましいことをすれば、他の村では、總代が十人も二十人も出て、二人のゐる寺へも押かけて來た。で、二人は到る處で調和演說をしなければならなかつた。嚇したり賺したりなだめたり怒つたりした。その地方の小本山になつてゐる山の上の大きな寺では、管內の重立つた僧侶を集めて、長い〳〵訓示演說を瘦せた方がした。肥つた方はそこから三里も離れた町に郡長を尋ねて行つたりした。しかしそれも力をつくした效があつて兎に角半分は纏りかけた。年來の感情を打破して雙方互に公平に考へて見ようといふ處まで話は纏つて行つた。最後の宴會には、郡長も警部も村長もやつて來て精進料理の港あげなども出た。酒を飲んで人々は醉つた。『今夜は是非お泊んなさい。』と留めるのを、『まだ、殘つた山の用事がありますから、今夜は是非ともその町まで行つてゐなければなりませんから。』かう云つて振切るやうにして二人はそこから發つて來た。

二人は暫し默つてゐた。

『しかし、勞れた！』

不意に瘦せた方が言つた。

『本當に疲れた！』肥つた方もそれに合せるやうにして言つた。『實際ひどかつたね。あんまり饒舌つ

て、すぐ寢て了ふばかりだからね。何處か上るにしても、すぐ時間になつて了ふし、それに、土地不案內だからゐちこちさがすにしても三十分や一時間はかゝるからね。』

『だから、先つきから思つてゐたんだ。あの郡長め、イヤに愚圖々々してゐて、中々要領を得ないんだからな……。たまに、一年に一度か二度しか世の中に出て來ないのだから、旨い酒の一杯も飮めると思つて樂んで來たんだが、それぢや矢張り駄目かな。昨日はあの通り引廻されるし、今日は今日であの騷ぎ――。』ちよつと考へて、『明日は何うしても山へ歸らなけりやならんね。』

『觀音院が一人でいそがしがつてゐて、可哀相だからな。』

『こんなことになるなら、奴を寄越せば好かつた。』肥つた方はさも失望したやうに忌々しさうに言つた。觀音院が出て來る番であつたのを自分で運動して大騷をしてやつて來た愚かさなども繰返された。

二人の頭には騷がしく通つて來た二日間の光景が描かれてゐた。管內の寺と寺とが確執して、それに田舍の政治運動が絡つて、黨派が二つにわかれて、本山の度々の調和も何の效もなく一二年經過した。『ぢや止むを得ません、訴訟沙汰にするより他に爲方がありません。』形勢がかういふ風に段々に切迫して來た。本山では『何うもそれは爲方がない。調和が出來ないのは遺憾だ。しかし、さういふ風になつて行くなら、これも止むを得ない。』と始めは言つてゐたが、これを表沙汰にしては、本山の威信に關するというふ說と、然るべき位置の調和交涉委員を派遣すれば難かしい話も存外容易く纏るかも知れないといふ

蠟燭

『何うだ、そこで下りやうか。』
肥つた丸顏をした方の一人が言つた。汽車は闇の中を駛つてゐた。樹かげの百姓家の灯がをり〳〵車窓を掠めて行つた。
『一體何時だえ？』
相對して腰をかけてゐる一人がかう問ひ返した。二人とも僧侶のかぶる山形の帽子をかぶつて、薄い黑絽の被布を着て、襟のところから金襴の袈裟を見せてゐた。二人とももう四十に近い年輩であつた。
二人の他に二等室には誰も客がゐなかつた。
肥つた方は被布の下から、小形の金時計の蓋をちよつとあけて見て、『もう十時だよ。』
『もう、さうなるかな。』
一人の方はかう言つて考へて、『十時ぢや、あそこの町に下りて見たつて仕方がないね。旅籠屋につい

ボウといふ汽笛の音がした。向うからの汽船がやつて來たのである。これで最後の希望も絶えた。かの女は何うしても牛堀まで持つて行かれてそこで一夜泊らなければならなかつた。これも仕方がないとかの女は思つた。やがてすれ違つて行く上りの汽船の白いペンキ塗の姿が、暮れかけた湖の上に遠く離れて駛つて行くのをかの女は眼にした。

今は十に八九は駄目だと言ふ汽船がおくれて間に合へば好いと思つた。無論、夜にはなるが、それでもそこからすぐ引返した方が好いに相違なかつた。

いつまで其處に立つて湖水を眺めてゐても仕方がないので、かの女は兎に角一等室の中に入つて行つた。かの女はそこでそれまでしつかり抱へてゐた自分の洋傘をひろげて見た。別に何處にも變つたところもなかつた。キズもついてゐなかつた。汚れてもゐなかつた。しかし半日他人の手に握られた匂ひが未だに何處かでしてゐるやうな氣がした。かの女は紙を出して、脂切つた柄のところを丹念に拭つた。『何うも仕方がない。かういふ廻り合せなんだから……。いくら怒られたつて……』こんなことを思ひながら。

汽船は靜かに沖へ〳〵と進んだ。今しも沈まうとしてゐる夕日は、まともに船尾を照して、その光線は深く一等室の中にさし込んで來た。船の水を截つた跡は一寝長く金色の輝きの中にくつきりと瀨のやうになつて見えた。

それは湖水でも一番濶い深い處であつた。湖は此處では三方にわかれて波濤が淒しく汽船をあほるやうにした。エンジンの一動搖毎に汽船は夫や子供のゐる土地を遠ざかりつゝ行くのであつた。それがかの女にはさびしかつた。またしても、夫が愚圖々々言ひながら難儀して子供と荷物を重荷にして歩いてゐる姿が眼先にちらついた。

それに向つて漕いで歸つて行く艀と、亭主や子供のゐる茶屋の茅葺屋根とがはつきりと指さゝれた。しかし何うすることも出來なかつた。怒つて見たところで仕方がなかつた。

『Sには何うしても寄らないんですか。』

『この汽船は寄らないことになつてゐます。』

『困つたねえ。』

段々船の事務員達が寄つて來て、その話をきいて、後には笑の種にでもするやうにして『まア仕方がありませんや、お上さん、牛堀まで行つてそれから引返すさ……』

『だつて、もう今日は船はないだらう？』

『ことに由ると、最終のに牛堀で間に合ふかも知れないが、まア十に八九は駄目ですな。……三股の少し先ですれ違ふことになつてるから……。まア、一晩牛堀に泊るさ。そしてゆつくり休む方が好い。』

こんな調子で、何うすることも出來なかつた。暫くして再び湖を見渡した時には、Aの河岸も艀ももう細君の眼には映らなかつた。夫が『馬鹿な奴だ。』と罵つてゐるのが眼に見えるやうな氣がした。つゞいて、あの荷物と子供を抱へて、夫はさぞ困つて居るだらうと思つた。あそこから故郷まで二里、その間に俥はない……無論歩かなければならない。『何うするだらう。』かう思ふと、一本の洋傘に心を奪はれた自分が情けないやうに考へられて來た。

かう言ふと、
『あゝ、さう／＼貴女は下りるんでしたな。』さつきの事務員がかの女の顔を見たが、今となつてはもう何うすることも出來なかつた。
『困つたな。』
『何うも出來ないかねえ。』
かう細君は洋傘を抱きながら、泣きさうにして岸の方を見わたした。
『引返して下さいよ。』
『さア、困つたな……』
『だつてちやんと斷つてあがつて來たんだもの……』
『でも、もう仕方がない……』
『困るねえ。』
ふと思ひついて、『Sには寄るんですか、此船は。』
『寄りません。』
『ぢや牛堀まで行くんですね。困つたね。』
細君は暫し立つたまゝ、ぢつと岸の方を見た。もうかなり來てはゐるけれども、それでもAの河岸と

處に誰がゐるかをはつきりと辨別することが出來なかつた。かの女は愈あせり出した。彼方へ行つたり此方へ行つたりした。

最後に、かの女は漸くその夫婦づれの向うの隅にゐるのを發見した。かの女は遠慮も何もしてゐられなかつた。『少々御免なさいまし。』かう言つて、人と人との間をわけて通つた。

『もし、もし。』

かう最初にかの女は聲をかけた。

ちらと此方を見た夫婦づれ――殊にその女の方の眼に、かの女は逸早く失望の色を認めた。しかし、かうまでしてやつて來たものに『これは自分のものだ。』とは流石に言へなかつたらしかつた。『さうでしたか。これは貴女のでしたか。』かう言つて、夫婦づれはその自分の洋傘を返して吳れた。

それを手にした時――ゴトン、ゴトン、ゴオと言つて、汽船は動き出した。

『大變、大變、私は下りるんですから……。』

かう叫んで見たが、汽船はそんなことには頓着してゐなかつた。

漸く三等室の人込を拔け出して來て、さつき上つたところに來た時には、汽船はもうかなり速い速力を出して、沖へ沖へと航してゐた。

『私下りるんだが……困つた……』

又別な方面に行つて了つたかも知れなかつた。かの女はその蝙蝠傘を抱へながら、艀の一隅に小さく乘つた。

船頭は棹から艫にと移つて、次第に沖へと出た。

波はかなりに高かつた。誰も立つてゐるものはなかつた。艀はやがて汽船の近寄つて來る航路に行つて、波に漂はされないだけに艫を押して、此方へ此方へとやつて來る汽船を待つた。

ボウとまた汽笛が鳴つた。

やがて近寄つて來た。かの女はいくらか胸の動悸の高まつて來たのを感じた。艀はやがて近寄つて來らる汽船の舷側へとつけられたが、一番先へと望んでゐるにも拘らず、先へ〳〵と爭つて乘る人達に遮られて、かの女が乘つた時には、あとには年老いた婆さんが唯一人殘つてゐるばかりであつた。

其處にゐた事務員らしい男に、手短にそのことを話したが、しかも心急く身は、先方がすつかりそれを呑み込んだか否かを確める餘裕もなく、急いで先づ一等室を覗いた。

そこにはその姿は見えなかつた。

かの女はすぐ引返した。そしてあせりながら、荷物の置いてある處を拔け、暖いエンジンの火氣の漲つた機關室を拔けて、そのまゝ三等室へと行つた。

運わるく三等室は一杯で、人込のいきれがむつとかの女の鼻をついた。一目見わたしただけでは、何

亭主はかう言つて、胡坐をかいたまゝ、白縮緬の太いへこ帶からそれも誇りの一つらしい金時計を出して、時間を見た。『來たら、お前行つて來うな……俺ら此處に待つてるで……。』こんなことをも言つた。亭主の顏は酒に赤く、傍に德利がもう二本空にされてゐた。

夕日は次第に低く、空氣は影の濃い色をあたりに漲らして、湖上に瀲灔として碎ける光線は、さながら金屬か何かのやうに見えた。帆が一つ芦荻の間から浮び出すやうに出て、そして靜かに動いて行つた。

ポゥと汽笛の音がした。

下駄を突かけて慌てゝ外に出たかの女は、夕日を帶びたペンキ塗の白い外輪の汽船が沖から次第に此方へと近寄りつゝあるのを認めた。

其頃には、その汽船を待つ人達も既に三四人其處に來てゐたが、その人達と一緒に、細君は船着の方へと行つた。そこに行く間は一二町あつた。細君は艀の船頭に、長々と取替へた蝙蝠傘の話をしなければならなかつた。

『さうですか、よう御座んす。』船頭はかう上の空で返事をした。

汽船の着く着かないのは心配はなくなつたが、今度は其夫婦づれが乘つてゐるか何うかが心配になつた。好い涼傘得をたのに誘はれて、途中で取替へられる虞を豫知して、一夜其處に泊るかも知れなかつた。

『さうだつてな……今でもKのものかNのものか一人女が入つてゐるでな。その代り、金はどつさり貰ふだ……』

『まア、いやなつらいところをあきらめて、その金を情人につぎ込めば同じだ。』

など、亭主は段々好い機嫌になつて笑つた。

それにも拘らず、細君は唯默つて蝙蝠傘のことばかり考へてゐた。乘つてゐるに相違ないとは思ふが、もし乘つてるなかつた時は？　乘つてるても、それは私のぢやないと言つた時は？　かう思ふと、多年買ひたい買ひたいと思ひ續けて、漸く母親に半分出して貰つて買つた時の喜悅や、それを始めてさして出かけて行つた時の誇や、道行く人達に振返られた得意さや、さういふシインがあり〳〵と眼の前に浮んで見えた。かの女は取替へて來た蝙蝠傘とそれとを心で比べた。こんなさし古したものではなかつた。同じ焦茶色でも、自分のには薄く白く縫ひがしてあつた。形もこんな田舍式のものではなかつた。

『何うしてもあれをなくしてはならない……』かうかの女は思つた。

此處には屹度寄航すると言ふけれども――確かに寄るに違ひないとその茶屋の人達も言ふけれども、もし寄らなかつた時は？　その汽船の時刻が近づいて來るにつれて、さうした不安がかなりに強くかの女の心を襲つて來た。かの女は度々下駄を穿いて、外に出て、湖水の方を眺めた。

『もう來るだらう。』

室と相對した厨、其處にある豆腐、油揚の煮附、燗徳利、さういふものが忽ち亭主の慾を誘つた。亭主は立つて行つて、『何かあるかな。何？　鱸がある。それは難有いな。それを一つ拵へて呉れねえか……酒でも飲んで待つてゐるだ。仕方がねえ。』こんなことを言つて、かれはあぐらをかいて、日影の當らぬ處へと陣取つた。子供には饅頭を買つてやつた。

Ｓの山の眺望の好い處を買つて、別荘を建てたドイツ系のアメリカ人があつた。それが獨探だと言はれて、一時地方の問題になつた。何でも邸の周圍には電線を張つて、そこに萬一を慮つて電流を通じて置くといふ噂であつた。亭主は酒をちびり〳〵やりながらその話をした。

『さうかえ、まだゐるかえ。』

『びく〳〵してゐるさアな。』

『出るにも出られず、先生弱つてゐるんだらうな。』

『ちよつとでも出ると、子供達が石をぶつ附けるツて言ふアな……』

『本當に、獨探かな。』

『さう言ふだがな……』

『何しろ、始めからあの西洋人けちがついてゐるらア、村でも評判がわるかつたからな、それに、女好きでな。』

ながら、艫の一押毎に次第に此方へと近づいて來た。それに近づくにつれて汽船の速力は次第に遲く緩くなつて行つた。

そしてそれが停ると、右に偏つた舷側に夥しく波が湧いた。

亭主と細君と子供とは、近寄つて來た艀に舷側から乘り移つた。最初に細君、次に子供、その次に荷物を移して、それから亭主が乘移つた。

やがて汽船は艀を離れて動き出した。

艀が岸に着いた頃には、白いペンキ塗の汽船は、黑い煤煙をあたりに漲らせながら、沖遠く靜かに航して行くのが見渡された。

Ａの岸には、茶店が一軒あるばかりであつた。村――村と言つても五六十戸の部落があるばかりであるが、それは松並木の堤防の下になつてゐるので其處からは見えなかつた。下りた人達は荷物を背負つたり擔つたりして松並木の方へと歩いて行つた。商人も挨拶して向うに行つた。

その一行はしかし其處で待たなければならなかつた。狹い一間、しかもそれは西日の暑くさした一間であつた。亭主は其處でも蝙蝠傘の一條を茶店の上さん達に話してきかせなければならなかつた。『それは御面倒でしたな……なアに、二時間も待たねえでもよかんべ。一時間も待てば來るだ。』などゝ上さんは同情して言つた。

『さうしたら、私がおぶふ……』

『まァ、しやうがねえや……』

亭主はどつかと其處に胡坐をかいた。

此間にも汽船は此方の岸に寄つたり彼方の岸に寄つたりして航行した。船の廻轉するにつれて、日影が左の窓からさしたり右の窓からさしたりした。時には艀は右舷に來て留り、時には左舷に來て留つた。さう大して高くない山も、半ば雲の翼に蔽はれて高く遠く仰がれた。

豫期した風もさう大して強く吹いては來なかつた。朝の中はいくらかは荒れるだらうと思はれた空もいつか模樣を改へて、白い鼠色を雜ぜた雲が青空の處々にぽつ〳〵丸まつて出てゐるばかりであつた。

『大丈夫だ、大丈夫だ。しけの雲ぢやねえ、これぢや船はAにもSにも寄らァ。』かう亭主はいくらか安心したやうに云つた。

やがてAの湖岸は近寄つた。

『A上りの方は、お支度をなさい。』かうボォイが一等室に聲をかけて行つた。で、商人もこゝで上る支度をした。『さうですか、あなたも此處でお上りですか、もつと先まで行くのかと思つた。』などゝ亭主は言つた。

岸を離れた艀は、蘆荻や蒲の緣葉のたぷ〳〵と水に動く間を漕いで、午後の明るい日をまともに受け

『ぢや、着物を着改へませうか。』

『さうする方が好いや……それにしても、えらい眼に逢つたな、午少しすぎ位にや着いて、今日の中に墓參をしてえと思つたから、十五日の盆にやつて來たんだ。それに、あそこでうんと待たせられて、またAで二時間、今日は初めからぐれはまつゞきだ……』かう投げるやうに言つて、『本當にあきらめて了へば好いにな、金さへ出せやいくらでも買へるぢやねえか。』

矢張細君の默つてゐるのを見て、商人と顏を合せて笑つて、『女はこれだから困らァ。何うもあきらめが好くねえ。男はかういふ時は好い氣前を見せるがなァ。何だ、一體、傘一本位……』

『さうは言へませんや、女には……男とは違つてますから……』

かう言つて笑ひながら商人は細君の方を見た。

細君は鞄をあけて、自分の不斷着と帶とを出した。

『俺のは此方か。』

かう言つて亭主は信玄袋の方の口をあけて浴衣を出した。

『坊主は歩けるかな。』

『歩けますよ。』

『夜になるかも知れんぜ。』

つた……。』などゝ言つて笑つた。

段々亭主の自慢話なども出て來た。今では工場の方には十五六人も職工がゐるなどと言つた。その雜歩く話になると、『なァに二里や三里は、この位の荷物を俺が負つて行くのは、何でもないがな……。』などゝ言つて、昔若い頃、麻布から横濱まで荷車をひいて日着に歸つて來た話をした。かれは又この故鄕で漁師や肴屋もしたことがあるらしかつた。從つて湖水で獲れる魚の種類、風の方向などによく熟してゐた。ある時は、非常なしけの中を平氣でかれは兄と共に船を出した。『風の強い時には、船は波の上から波の上へと飛んで行きまさ。一直線でさ、船頭や漁師をしてゐちや、波や水が怖くつちや一日だつてやつてゐられやしませんや。その時なんかも、えらい目に逢ひましたぜ。船が丸で波の中でさ。突然、ドンと艫の外れた音がした。見ると、兄貴はゐない。びつくりして向うを見ると、兄貴の頭が波の中にある。それッて言ふので、棹を出してやりましたが、この湖水なんか、いくら荒れたッて大したことはありませんや……。』

『兎に角、何處でしけに逢つたッて、一時間も經てば、何方かの岸につくんですからな。』

かう商人は調子を合せた。

亭主も今は決心したらしく、『ぢや爲方がねえ、さうするさ……。Aで俺も下りるァ。そして荷物は俺が背負つて行つてやらァ。たゞ閉口なのは、Aで二時間も待つのは大變だが、何うもしやうがねえ。』

船の事務員に訊いても、Aには無論寄航するといふ話であつた。で、紳士だけそこで下りた。客と荷物とを艀に移して汽船はまた動き始めた。

波は段々大きくなつた。

湖水も次第に濁く濁くなつて行つた。見わたす限り淼漫として海のやうである。帆がところどころに浮んでゐるが、その向うに遠く微かに陸地が見えるばかりで、唯白い波頭ばかりが颺つてゐる。汽船はかなりに深い上下動をなして搖れた。

Oからは親子連の紳士が乘つた。その人達もUからKへと行く人だといふことがやがて解つた。子供は十歳ばかりで、白い絣の着物に袴を穿いてゐた。

長い間には蝙蝠傘の話ばかりはしてゐられなかつた。細君がひとり困つたやうな顏をしてゐるのを餘所に、亭主と商人とは種々な話をした。汽船の話、湖水の魚の話、それから商賣の話になどなつて行つた。流石に地方を同じうしてゐるもの同士だけに、何を話してもピッタリと話がよく合つた。商人が、『さうですか、酒はお強いですか、私も若い時分は少しはやりましたが、今ぢや一合ですな。一合やりやもう寢るばかりです。』かういふのに對して、亭主は傍にあつた空になつたウヰスキイの小罎を示して、『何うもこればかりはやめられませんや。酒でもなけりや生きてゐるたッてしやうがない位なものでさ。これも今朝汽車の中で半分やつて、あとは船の中でと思つたんですが、待つたもんだから、あそこでやつちや

不意に細君は商人に訊いた。

『それは鹿島に行く人にや違ひないんでさ。さう言つて、一時の汽船にしたんですからな。やつて來ますよ。大丈夫ですよ。Oで待つてゐりや、すぐ來ます。この汽船が後れたから、あとのは二時にはきつと出ます。』

やがてOが近くなつて來たことは、岸の緣が近く、蒲葦のたぷ〳〵と水に搖れて見られるのでも知れた。さびしい岸には小さな家屋が一二軒ぽつ〳〵見えるばかりで、そこらに村があらうとは思へないほどであつた。

艀が一隻ゆら〳〵と此方に近よつて來るのが見えた。

肥つた紳士は、鞄を携へて、室の外の舷側へと出て行つた。

細君も下りる決心で其方に行つた。『何うかそれぢやお願ひします。』などゝ亭主はその紳士に賴んだりした。かと思ふと、『いゝぢやないか、おい、あきらめて了へな。傘はまた金さへ出せや買へるァ。』などと言つた。しかし細君は決してあきらめて了はなかつた。

艀が來ていざ乘らうとするころになつてから急に、此處で上陸して待つてゐるよりも、Aで上陸して待つ方が好いといふことになつた。かれ等の故鄕はSで下りるのが順路だがAなら、そこから步いて行つても二里に近い……。『さうする方が好いでせう。無論Aには寄りますよ。』かう商人も言へば亭主も言つた。

かう肥つた紳士は言つた。

『風さへなけりや、皆な寄つて行くんだが……』

こんなことを言つて、商人は廣々とした湖水を見渡した。

汽船は絶えず波を截つて航行した。風は南から來た。荒日にしては非常に靜かな天候であるけれども、それでも舷側に當る波はかなりに高く、ともすると、船が左右に動搖した。

『馬鹿々々しいことをしたな。』

かう度々亭主は言つた。細君は默つてゐた。

自分の方の蝙蝠傘が好いといふことが、新しいといふことが、何遍となくかの女の胸に上つて來た。『だから、向うでは喜んでゐるわけですな。』かう商人が輕く言つた時には、先方ではそれを自分のものにするために、わざ〳〵下りて取替へに行つても、『いゝえ、これは私のです。』と言ふかも知れないといふやうな氣がした。自分の蝙蝠傘をよろこんでひろげて見てゐる女の顏——その肥つた色の白い顏があり〳〵と見えた。

實際此方でその蝙蝠傘をひろげたり閉ぢたりしてゐると同じやうに、先方でも、あの二階で蝙蝠傘をひろげたり閉ぢたりしてゐるに相違なかつた。その夫婦づれの亭主の田舍臭い姿なども歷々と見えた。

『鹿島に行く人には違ひないんですね。』

れ等は感じた。亭主は『勝手にしろ。』といふ語氣を見せたけれども、それは實は妻の不注意に對する腹立で、さうかと言つて妻をひとりあとに殘して自分だけ旅を續けるのも不安で不愉快であつた。折角かれ等は喜び勇んで今朝都の停車場を立つて來た。十圓近くする涼傘、この女のこれまで持つたことのない涼傘、それに金の指環、着物も明石を着て、髮も綺麗に結つて、平生眞黑になつて働いてゐる世話女房とは誰も思はない位に支度して來た。かれ等は長い間艱難と辛勞とから漸く近頃浮び出した。亭主もあらゆる社會の勞働をつゞけて、漸く人の四五人も使ふ身分になつた。この前、亭主の母親の死んだ時に細君は初めてその湖畔の亭主の故鄕に行つたが、その時から比べると、ぐつとかれ等の生活も樂になり、その頃企てゝゐた小さな工場の事業も成功の緒につきつゝあつた。從つてこの旅では、かれ等は汽車も二等でやつて來た。故鄕に誇る土產物などもそれ〴〵準備して來た。下りた船着でも、ちやんと旅舍の二階に上つて上流の人達のするやうに午飯も食ひ茶代も置いて來た。

で、兎に角、細君はさう決心した。二時の汽船をOで下りて待つことにした。しかし考へるとそれも頗る不安である。Oで下りて待つてゐても、この次の汽船が其處に寄るだらうか。寄らなければそれまでゞある。Oに限らずAでもSでも同じである。かう考へると、汽船の必ず寄航するUまで行かなければその女達に行逢ふことは出來ないやうな氣がする。Uはまだそこから非常に遠い……。

『大丈夫ですよ、寄りますよ。』

また沈默が續いた。

『この汽船はAにもSにも寄つて行くでせうか？』

『寄るだらうと思ふが、風の都合で、何うかすると、寄らないこともある。』

『ぢや、私、かうする……。私、すぐ其處のOで下りて、二時の汽船の來るのを待つて、そして取替へて行きます。』細君は決心したやうに言つて、『さうすれや取替へて呉れるでせうね。』

『それは呉れるとも……でも、お前、取替へて持つて來て濟まなかつたツて、此方からあやまるんだぜ。』かう亭主は言つてきかせたが、『でお前は何うするんだ。二時の汽船は、AにもSにも寄るか何うかわからないぜ！　寄れば好いけれど、寄らなければ、三里も四里も步いて來なくつちやならないぜ！

夜になるから、殊によると泊らなくつちやならないぜ！』

『でも、折角お母さんに買つて貰つた蝙蝠傘で、まだ二三度きりさゝないんだから……。母さんにわるいから……』

『ぢや、さうするさ。泊るとすると、金もいるぜ！　持つてるか。』

『私にある。』

細君は帶のところに手をやつて見せた。

ひよつとした間違から、折角の旅――亭主の故鄕へ墓參の旅の興味がすつかり殺がれて了つたのをか

『それは此間買つたばかりだもの……。困つた……』

かう言つて細君は暫く考へ込んだ。

乗客達はこの不意の出來事に興味を持つて、半は同情したやうに、半は好奇の情に動かされたやうにして、その夫婦の方を見た。商人は小さな蝙蝠傘を取つて見て、『これだッて、好い傘だがな。これだッて五六圓はすらァ……』ひつくり返して見て、『さうだ。あの夫婦づれのだ。確かにさうだ……。あの衆は、しかし、この汽船には乗らなかつたかな。』

『鹿島まで行くんだから、この次の二時のに乗つて行く方が好いッて言つてあとに殘つた筈ですな。』

かう紳士は笑ひながら言つたが、これもその蝙蝠傘を手に取つて見て、

『それでも好い方を持つて來たんぢやないから、此方に惡意のないのはわかつてゐるけども……』

『本當にしやうがねえな。』

『私、あとの汽船を待つて取替へますわ。』

かう亭主は妻を見て言つた。

暫くしてから細君は言ふと、

『俺はいやだぜ、そんなおつき合ひは――。取替へるなら、お前一人殘つたら好いだらう。』

『さうする、私……』

と、急に、

『あゝ、何うしよう！』

かう細君は言つた。

亭主も乗客も皆な其方を見た。細君は焦茶色の蝙蝠傘を手にして、『取替へて來ちやつた！』

『それやお前んぢやないのか？』

『え……。困つた。』動いてゐる汽船をあとへ戻して、取替へて來ることは出來ないかといふやうに、中腰になつて、今出て來た埠頭の方を見た。

渠等が午飯を食つた旅舍の二階はまだそこからはつきりと見えてゐた。

『馬鹿な、何うしたんだ？』

『私の傍に、二人づれの夫婦がゐたらう。あの人のですよ、これは――。同じ色だつたから……。』

『お前が取替へたのか？』

『つい……知らずに……』

『馬鹿な奴だな。』

かう言つて、亭主はその蝙蝠傘を妻の手から取つて、あちこち飜して見てゐたが、『お前の方が好いのか。』

『でも、今日は特別ですよ、二百十日の荒れ日ですからな。それを氣遣つて、朝の中ぐづ〳〵してゐるんですな。なァに、ちつとやそつとしけたッて何でもないんですがな、此處は――』漸く濶々と展開して來た湖水を見廻すやうにして、商人らしい男は言つた。

『荒れますかね。』

『なァに、大したことはありませんや。』

肥つた紳士は、白いリンネルの服を着てゐた。かれも汽車から來てそこの埠頭に三時間以上も待つた。かれはぢきその先のOといふところに行くのであつた。この位ならすぐ俥で行けば好かつたと後悔した。

『えらい目に逢ひましたよ、日がへりをするつもりでやつて來たところが、そのためにすつかり順が狂つた。』

『船には、時間があるやうで、實は時間がありませんや。』

かう亭主は調子を合せた。

しかし兎に角汽船は出た。これで、乘客は皆その思ひ〳〵のところに着くことが出來るのである。人人の心は待遠であつた汽船の埠頭――茶屋、旅館の二階、色の白い上さんのゐる氷屋、退屈まぎれに買つて食つた饅頭、漸く入つて來て横附けにされた汽船、船頭の懸聲をして積込んだ荷、さういふものから段々離れて行つた。

パラソル

佐原行の汽船は漸く小さな埠頭を離れた。たぷ〳〵と岸に動く藻や蒲の緑葉、黒く淀んだ水脈は俄かに大きく波の畝をつくつて、岸に連つた二階屋の低い漁師の家や干した漁網などはすべて靡いて動いて行くやうに見えた。

船尾の一等室には、右から日影がさし込んでゐたが、そこには土地の商人らしい男と、肥つた佛手柑のやうな顔や手足をした紳士と、三十七八の妻と八九歳になる男の兒を伴れた勇肌らしい亭主とが乘込んで、頻りに出帆の遲れた話などをしてゐた。亭主の後には大きな鞄や信玄袋が隅の方に押寄せられるやうにして置いてあつた。

『待ちましたな。』

『本當にこれだから、此處の汽船はいやになりますねえ。』

から細君が言ふと、

してゐる……。

して見て、それから祖になつて、おつくりを始めてゐるところに二番目の子を負つた下女が買物から歸つて來た。『母ちやん、母ちやん。』と其兒は母親の方に手を出した。

それがすんで了つても、まだ須磨子は起きて來ない。時計はもう十時半のところを指してゐる。『本當に何うしたんだらう。』ともう一度かう言つて、階梯の方を振返つて見たが、しんとして物音も聞えて來ない。たうとう堪へ兼ねて、階梯の方のところの扉をあけて、上を向いて、『須磨子さん！』と呼んで見た。矢張返事がない。不思議に思つて、細君はトン〳〵階段を上つて行つた。雨戸は閉つてゐるが、晝近い日影は六疊の室の中を明るく見せた。須磨子は小搔卷をかぶつたまゝまだ寢てゐる。

『須磨子さん。』かう呼んで傍に行つて、『何うしたの、須磨子さん？』

須磨子は顏を蒲團の上に突伏してゐた。机の傍には、本だの手帳だの白粉の罎だのが一杯になつて散らばつてゐる。須磨子は眠つてゐたのではなかつた。

細君は雨戸を明けようとした。と、急に須磨子は、『奧さん、放つて置いて下さい！』と言つてまた顏を突伏した。

『何うかしたんですか、須磨子さん、え、え？』細君は傍に寄つて訊いた。須磨子は默つて喉頭を振つてゐた。細君の胸には、此時、驚愕と恐怖とが凄じい力で襲つて來た。夫の今朝の素振が一つ一つ鮮かに生々として蘇つて見えた。雨戸を明けかけた細君の體はワナ〳〵戰へた。須磨子は依然として突伏

『服！』かう言つて、立つて次の間に入つて行つた。カラーにネクタイに靴下。いつものやうに襟をとめてやらうと思つて、細君が其傍に行くと、

『なァに、好い。一人でやる。』

かう言つて、手ばしこく一人でとめて、そしてサッサとヅボンを穿いた。

『政の不斷着を今日買ひに行かうと思ふんですがね。』かう細君が顏を見ながら言ふと、主人はポケットの中の財布から默つて金を三圓ほど細君に渡した。

玄關を出て、靴をはいてゐる時、

『今日はいつもと同じ……』

『少し遲くなるかも知れない。』

かう言つて、主人は包をかゝへて、格子戶を明けて、そして出て行つて了つた。

細君は茶の間に戻つて來た。長火鉢の傍で煙草を一服吹かしてから、二三日前からかゝつてゐる裁縫を其處に出したが、ふと氣が變つて、その前におつくりをしようと思つて、緣側の方を向いた明るいところに、簞笥の上から鏡臺を下して來た。そして鐵瓶の湯を金盥に明けたがそれが足りないので、今度は小柄杓で銅壺から湯を汲み出した。

髮を結ひ直して、前髮のふくらみ加減を見て、紐で後をキリ〳〵結んで、後櫛をさした具合を鏡に映

『なアに、好いつてば……。お前はおせつかいでいけない。若い娘は眠いもんだから、そッとして置く方が好いよ。』主人の調子には強いところがあつた。

『ぢや、濟して了はう。』かう言つて、細君も箸を執つた。二人は暫しの間默つてゐた。主人は一杯食つて、そのまゝ箸を置いた。

細君が手を出すと、『もう澤山だ！』

『一膳きり――』吃驚したやうに言つて細君は夫の顏を見た。主人は傍の鐵瓶から湯を茶碗について、白瓜の漬物を二片三片食つたばかりで、味噌汁などには手をもつけない。

『何うかしたんですか。』

『なアに――』

『でも、一膳では――』

『此頃は、朝は飯は食へないよ。』暫く默つて、煙草などを主人はふかしてゐた。いつものやうに話もしない。話を細君がしかけても、フム〳〵とばかり言つてゐる。やがて奥の書齋の方に入つて行つた。

主人は久しく其處から出て來なかつた。出て來た時には、細君はもう洗物をすまして、勝手から茶の間に來てゐた。須磨子の茶碗と箸箱との載つた餉臺は隅の方に片寄せてあつた。

隣の犬がまた其處に來て首を緣側に載せてゐた。しかし今日は主人はその頭を撫でてやらなかつた。

も厭に青白かつた。そして默つて何か考へてゐる。

『何うかして？　顏の色がわるいやうですね。』かう細君が言ふと、

『さうか。』狼狽てたやうに、ドギマギした言ひ方をして、『昨夜、遲かつたからだらう、屹度。』

『餘程遲くまで。』

『寢たのは一時だつた。』

『さうですか……貴方のやすんだのを、私ちつとも知らなかつた。』

茶を汲んで出して、『須磨子さんも起して來ませうか。』

『いゝよ、構はんでお置きよ。』夫は慌てたやうに言つた。『折角寢てゐるのを、無理に起さなくたつて好い。』

『でも、餘り遲いから……。もう九時半ぢやありませんか。』

『まア好いから。』かう言つて、餉臺の上にある自分の茶碗を取つて細君に渡した。須磨子の可愛い茶碗と若狹塗の小さい箸箱とがそこにちやんと置いてある……。

『ぢや、私もすまして了はうかしら。』

『その方が好いよ。』

『でも、呼んで來ませう。あとで又面倒だから。』

顔を壁の方に向けて……。

自分の床がそのまゝになつてゐるのを見て、蚊帳を外して、そしてそれを疊んで押入に入れた。蚊帳のカンがチヤラ〱鳴る。

夫が體を動かしてゐるのを機會に『あなた、あなた。』

『う、う。』などと夫は言つてゐる。

『もう、九時過ぎですよ。行くのが遲くなりますよ。』

『う、う。』と言つたが、其時はもう夫は大きな眼を明いてゐた。變な——今まで見たことのないやうな鋭い表情のある眼附をして此方を見たが、すぐまた壁の方を向いて了つた。

『本當にお起きなさいよ。もう遲いんですよ。』

『うむ。』かう言つたが、夫はすぐ跳起きた。そしていつもする朝の莞爾した顏をも見せずに、そのまゝ勝手の方へと素氣なく立つて行つた。やがて細君は床を疊んで茶の間の方に來た。しかし勝手の方はしんとしてゐる。水を汲む音もしない。さうかと言つて顔を洗つて此方へ遣つて來ようともしない。いつも早い癖に——かう思つて覗いて見ると、夫は楊枝を口にしながら、ぼんやりそこに立つてゐる。

暫くしてから水を汲む音がする。金盥を伏せる音がする。

いつものやうに長火鉢の向う側に來て坐つた夫の顔に、何處か疲れたやうな暗い表情があつた。色艶

色の白い顏と、品をした姿勢とがあり〳〵と細君の眼の前を通つて行つた。中形の浮衣に、左の指にはルビーの入つた指環、明るい月の光の陰のところにわざと選んで坐つた艶つぽい姿――『何うして須磨子さんは、あんな素振をするんだらう。學生にも似合はない……笑ふ時に袂で口を押へるのは女郎のやうで可笑しいからおよしなさいつてあれほど皆なに言はれてゐるのに……昨夜も矢張してゐた。……それに、學生の身で、指環なんかをはめて、出かける時には、お召なんか着て行くんだから。いくら家が好いたつて……』かう思つたが、ふといつもの考が胸に上つて來た。と、細君はキッとなつて、自分の心を其處に一つに集めて見るやうな顏の表情をして、向うにある簞笥の方をぢつと見た。過ぎ去つた五六年の月日が歴々と眼の前に見えた。新婚の當座……總領の娘が腹にある時の樂しい旅行……やさしい男の心……子供が二人にもなつて段々衰へ行く自分の姿……夫がやさしい言葉を須磨子さんにかける時の顏色……小さなしかし強い痛い嫉妬……『私なんか指環一つ貴方から買つて戴きやしませんよ。』かう言ふのを默つて眞面目なイヤな顏をして聞いてゐる夫の顏……。

『そんなことはない……馬鹿な……』かう細君は打消して見た。

『本當に何うしたんだらう。』もう一度かう思つたが、鐵瓶から湯を急須にさして、茶を一杯飮んだ。と、其處に總領の娘の不斷着がさつきぬいだまゝになつてゐるのを見て、立つて、それを長押にかけた。次手に障子を明けて見ると、夫はスャ〳〵心持好ささうに眠つてゐる。わけた髮を此處に見せて、

ゐたが誰もかまつて呉れるものがないので、そのまゝのそ〳〵と下りて、今度は湯殿の半分戸の明いてゐる處へ行つた。そして洗濯をしてゐる此家の二十五六になる束髮に結つた細君の前に顔を寄せた。ぢやぶ〳〵と水の音がしてゐる。

『太郎、太郎。』などと細君は聲をかけて居たが、やがて洗ひ終つた腰卷だの單衣だのを一かためにして、そしてそれを庭の隅にある物干竿へかけに行つた。

『もう起きたらう。』と思つて、ぬれた手を前垂で拭いて、そして縁側から家の方へ入つて行つた。しかし依然として家の中はしんとしてゐた。次の間に寢てゐる主人も、二階にゐる須磨子さんもまだ起きたやうな氣勢もない。煮立つた味噌汁の鍋を下しながら、振返つて、後の柱にかけてある時計を見るともう九時十分前である。

『どうしたんだらう。いつもこんなことはないのに…………昨夜遲くまで勉強してゐたかも知れないけど……こんなことはあんまりないことだ。……それに、須磨子さんも何うしたんだらう。學校に行く時間が遲くなりやしないかしら?』

かう思つたが、すぐ止して、昨夜、縁側で、明るい月の光を浴びながら、遲くまで三人して話をしたことを頭に浮べた。『先生、そんなことを仰しやつたつて、それはいけませんわ。女には女の心持がありますから。』こんなことを須磨子さんは云つた。

ある朝

今年五つになる總領の女の兒は、書生が伴れていつものやうに近所の幼稚園に出かけて行つた。下女は勝手元をすませて、二番目の男の兒を負つて、町に買物に行つた。火鉢には白く湯氣の立つた鍋がかかつて、長けた朝を思はせるやうな味噌汁の葱の匂ひが四邊に漂つてゐる。朝日はもう緣側の障子の半面を照してゐた。

餉臺の上には、茶碗だの、お椀だの、漬物の丼だの、醬油さしだの、箸だのがごた〳〵とさつき下女が置いたまゝになつてゐた。

その前の湯殿の流しからぢやぶ〳〵といふ水の音が聞えて來てゐる。それが絶えては續いて聞えてゐる。時には、桶から盥に水を移す氣勢などもする。ばつたり止つたと思ふと、またぢやぶ〳〵といふ音が續く。

隣の黑い大きな犬が來て、いつもするやうに、踏石の上に上つて、首を緣側の上に載せたり何かして

『母ちやん、鼠が死んぢやつたの……。小さな白いお手々をしてたよ。』かう小さい方が母親の傍に寄添ふやうにして言つた。

鼠は水の中を行つたり來たりした。上に浮いたり下に沈んだりした。生命に對する苦悶の狀態が始まつた。金網のところに鼻先を出すかと思ふと、小さい白い手と足とを動かして大きく波を描いて彼方此方へと動いて行つた。子供達は何も言はずに唯默つて見てゐた。

しかしそれも長い間ではなかつた。搖いた水に泡のやうなものが五つ六つ浮び出して來る時分には、鼠の運動も次第に弱くなつて行つてゐた。鼠はもう一度遲い速力で上の金網の處に鼻先を出して來た。それが最後であつた。腹を上に向けて、小さな手を合せるやうにした。死骸が靜かに水の中に横はつた。

『もう死んだ!』

大きい方の男の兒はかう言つて、『おい、行かう。』

『行かう。』

其處に置いてある學校の包を持つて、二人の男の兒は威勢よく裏門を明けて向うへと出て行つた。小さい女の兒達は、猶暫く不思議さうにして其處に立つてゐた。小さい女の兒の赤いメリンスが晴れた朝の冷たい空氣の中に鮮かに見えてゐた。

『もう死んだのよ。』

『死んだのね。』

などと言つてゐた。やがて女の兒達は勝手口から父母のゐる茶の間の方へと上つて行つた。

鼠取機が倒さにその中に入れてあつた。鼠は全身濡れて、水の無いところに鼻を出してバタ〳〵してゐた。

『お前、こんなところでしては、爲方がないぢやないか。こゝは食物を洗ふところぢやないか。外でやるんだよ。井戸端でやるんだよ。』かう母親は苦々しさうに言つて、下駄をつつかけて、風呂場から大きな盥を井戸端の流しに出してやつた。

大きい方の男の兒は、凍つた釣瓶の繩を握つて、力をこめて水を汲んだ。しかし深い山の手の井は、釣瓶が容易に上つて來なかつた。それに水も涸れて少くなつてゐた。初め汲上げた釣瓶には半分位しか水が入つてゐなかつた。二度目には繩を伸して釣瓶を井の底深く入れるやうにした。釣瓶の水は井戸側から瀧のやうに盥に落ちた。

ザア、ザア――三杯目には、水は大抵盥に一杯になつた。弟の方の男の兒は、バケツの中から鼠取機を出して、それを盥の中に入れやうとした。

『おい、そんな風に入れちや駄目だ。』

兄の方はかう言つて、それを弟の手から取つて、そして坂になつて偏つてゐる水の深いところに入れた。

小さな女の兒達も其處に立つて不思議さうにして見てゐた。

來て坐つて、大きな罐から番茶を一すくひ茶焙じに入れてそれを火の上に翳した。香ばしい匂ひが四邊に漂ひ渡つた。

『今朝は寒いね。』

『此頃では一番ですよ。釣瓶の繩が凍りましたもの。霜が眞白でしたよ。』

『さうか、霜が降つたかえ。』父親は障子を一寸明けて見て、『成程眞白だ……。これからは寒いな。』

其處に、學校に行く支度をして、大きい方の男の兒が入つて來た。『先ちやん、お前、してお呉れよ。學校に行く前にしてつてお呉れよ。』

『うん。』

と言つたが、大きな聲で『みいちやん、來いよ。鼠を殺すんだから。』

『鼠を殺すの？』

かう言つて、弟の方は向うから急いでやつて來た。矢張、學校の支度をして、袴をはきかけてゐた。』

『整ちやんも千代ちやんもお出でよ。』

大きい男の兒はかう言つて出て行つたが、暫くして、『バケツぢや駄目だよ、母さん。』と言つてまた入つて來た。

母親が行つて見ると、手桶だの洗桶だのの置いてある內流しのところに、バケツに一杯水を汲んで置

『あの時は悔しかつたよ、本當に……』

母親はかう言つて笑つて『でも、これで少しは靜かになるよ……。本當に、宅の鼠位いたづらなのはありやしないんだから。戸棚をかじつたり、壁に穴をあけたり、それや爲方がないんだから……、もつと大きい奴がかゝればよかつた。大きなのがゐるんだよ。』

『だから、猫を飼へば好いッて言ふのに……』總領の娘は飯の後の熱い湯をさまして飲みながら『母さん、貰つて來て上げませうか。お琴の先生の宅に、それや好い三毛の子が生れたのよ。それャ、毛色の綺麗ッちやないのよ。雌ですけれどもね……。飼つて頂戴よ。さうすりや鼠なんか一疋も出なくなつてよ。お琴の先生の家なんかには鼠なんか一疋もゐやしないわ。』

『猫を飼ふ位なら犬の方が好いや、なァみいちやん。犬なら、泥棒の番をするからな。』かう大きい方の男の兒は言つた。

『犬なんか大嫌ひ！』

總領の娘は投げるやうに言つた。

『生物は何うしてか、私、蟲が好かないんですね。猫でも犬でも、そばに寄つて來ると、ぞつとするんですもの。』母親は誰に言ふともなくこんなことを言つた。

父親は長火鉢の前で煙草を吸つてゐた。母親は朝飯の後のよごれものを勝手に下げて、そして其處に

がら言つた。と、父親は『女にはよくさういふことが出來るね。殺さうといふものにそんな親しみを示すと言ふことは不愉快ぢやないかえ。そんなことをすると、殺すのは可哀相になりやしないかえ。鼠に取つちやそれどころぢやないのはきまりきつてるよ。この寒い朝に、もう一時間も經たない中には殺されて了ふんだ。……油揚なんかやる位なら、いつそ馴して飼つて置いて見るが好いといふ氣がするよ。何んな小さな動物だツて憎まなけりや殺すといふ氣にはなれないもんだがな……』

『それはさうですけれども、食ふか食はないかと思つて――』

母親は笑ひながら言つた。

『母さん、此間の鼠かしら？』

兒の方の男の兒は突然傍から訊いた。

『さうかも知れないよ。此間のも矢張小さかつたね。あんまり惡戲をしたもんだから、たうとう運がつきて了つたんだよ。あの時助かつたと思つた命が三日きりだつたからわるいことは出來ないね。』

『あの時はくやしかつた……。だつて母さんがわるいんだもの。そこの穴を塞いで置いてツて言ふのによく塞いで置かなかつたんだもの……さうさ、やうやく僕がこの簞笥の後から追ひ出したと思ふと、母さん、まご〳〵して、別なところをピシヤ〳〵打つたり何かしてるんだもの。……鼠はすつと拔けて、あそこの穴から逃げて行つちやつた。』

て弟の方は洟をすゝりながら蒲團の敷いてある一間の方へ行つた。

姉に着物を着せて貰つて、末の女の兒の其處にやつて來た時には、鼠はもう流元の傍の土間のところへと下されてあつた。『鼇ちやん、起つきしたかえ？　おとなですね。そら、そこにちう／＼がゐたらう？』こんなことを言ひながら、母親は下ろした釜から飯を櫃に移してゐた。白い湯氣がぱつと其處から騰つてゐた。

女の兒は其處に蹲踞んで、背を丸くして、じつと不思議さうに鼠の方を見てゐた。鼠はもう體を動かさなかつた。何うかして逃れやうと思つて、終夜鼻尖を金網の隙間に挿し込んで見たが、それももう徒勞だと觀念したやうに、今は小さくなつて眞中のところに唯顫へてゐるばかりであつた。『鼇ちやんちう／＼ゐたかえ。』かう言つて母親は覗いて見て、『お惡戯をしたからちう／＼もたうとうつかまつたね。』其處に、父親が起きて來て、『何だ、小さいんだな、まだ、子だ！』などと言つて、楊枝をつかひながら井戸端の方へ出て行つたりした。

ふと見ると、其處に油揚の一片が戸棚の隅の方に殘つてゐた。『何うせ死ぬんだから、御馳走してやれ。』かう思つて、母親はそれを鼠取機の中に入れてやつた。そして母親は手をとどめて暫し見て居た。しかし鼠はそれを食はうともしなかつた。

それは朝飯の時であつた。母親は、『矢張、食ふどころぢやないと見えるね。』などと思ひ出して笑ひな

けて置いた。それが夜中にけたゝましい音を立てゝ、其處から落ちた。誰もかれも目を覺した。『鼠がかかつたんだよ。』かう母親が言ふと、『鼠が。』かう言つて皆な起きて行つて見た。小さい六歳になる女の兒まで出て行つた。『明日まで生きてゐるだらうか。母さん生きてる？』などと弟の方は母親に訊いた。

『惡戲をしたからだねえ。』などと其處から戻つて來て床の中に入りながら小さい兒は言つた。電燈は暫し明るく其の一間についてゐた。一度さめた眼は容易に眠られないといふやうに子供達は蒲團の中で暫らく起きてゐた。母親が床に入る前に、『誰かおしつこに行く人はないかえ？』と訊くと、七歳になる女の兒は、『私、行く。』と言つてそして起きた。で、廁の方の緣側の障子は暫しの間明放されたまゝになつてゐた。寒い夜風が其處から入つて來た。

女の兒が出て來ると、『僕も行く。』『僕も行く。』と言つて、今度は男の兒達が活潑に起きて、騷々しい音を立てゝ廁に行つた。廁の中は明るかつた。月が氷つたやうな光を明るく窓の硝子に輝かしてゐた。

電燈を消してからも、子供達は猶暫らく眠られなかつた。ガサコソ、ガサコソ――さういふ音が絕えず勝手元の方から聞えて來た。『母さん、鼠が出ようとして騷いでゐるんだね。』弟の方はこんなことを言つて訊いたりした。

ガサコソ、ガサコソ――さういふ音は終夜闇の中に聞えてゐた。

『お前、そんなところに立つてゐて、寒いぢやないか。着物を着改へてお出でよ。』かう母親に言はれ

寒い朝

『母さん、鼠ゐる？』

かう言つて子供達は起きて來た。母親は勝手元で何彼と働いてゐた。釜からは白い湯氣が立つて、汁の實にする蕪の青い葉の刻んだのが目ざるに入れたまゝ鍋の蓋の上に載せてあつた。

弟の方の男の兒は寢衣のまゝで寒さうに顫へながら其處に立つてゐた。兄の方は踏臺の下になつてゐる鼠取機の中を覗くやうにして、『居る、居る、じつとして居らァ。顫へてゐらァ。』

『どれ〳〵。』

弟の方も覗いて見て、『何だ、小さいんだなァ。僕はもつと大きいのかと思つた。昨夜見た時にはもつと大きかつたよ。』

『本當サ。』

兄の方も昨夜のことを思ひ出すやうにして言つた。殘つた油揚を半分入れて、戸棚の上に鼠取機をか

この間、河の岸で逢つた女が派手な扮装をして立つてゐるのを見ました。

『おや。』

私は狼狽しました。

『こちらにゐらつしやるんですか。何處にゐらつしやるかと思つてそれはさがしたんですよ。』かう言つた其女の眼は、私の前に坐つてゐる女の眼と烈しく觸れ合ひました。その女はやがて靜かに上つて來ました。

『何故だか、私、そんな風に思はれて仕方がないんですよ。』
『そんなことはないよ。』
『本當――』
其眼には私の心を引寄せるに十分な嬌態を持つてゐました。
『でも、來て好かつた。』
『それにしても、何うして來る氣になつたんだえ。こんなところに來たつて、面白いことも何にもないだらう。』
『そんなことはないわ。……』女の柔かな心が私の方に傷つて來るのを私は感ぜずには居られませんでした。

ある日のことでした。丁度午飯をすましたばかりの時でした。私と女とは圍爐裏に向つて坐つて、話といふ話をするでもなく、新聞などをひろげて見てゐました。
『御免なさい。』
といふなまめかしい聲がすぐ私達のゐる前の庭先でしました。其聲の主は私よりも逸早く女の眼に映りました。私は女の表情の俄かに一種の皮肉な色を帶びて來るのを感じました。私は振返つて、其處に、

女はそれでも新しい生活がめづらしいといふやうに、盥に水を汲んで、よごれた私の着物を洗つたり何かしてゐました。風呂場に行つて見ると、兩腕をまくつて、石鹼とソーダなどを出して、『綺麗になつたでせう。』などと言つてゐました。

障子の隅の机の上には、古いその鏡が障子によせかけて置いてあつて、傍には櫛だの、小さな罐だの、小さな鏡だのの入つてゐる化粧箱が載せてありました。

散歩から歸つて來ると、今まで亂雜にして置いた勝手や座敷が綺麗に片附いてゐたり、緣側が綺麗に拭掃除されてゐたりしました。『矢張、私が來て、いくらか家らしくなりましたね。』などと言つてゐました。女は晴れやかな心持の好さゝうな顏をしてゐることが多う御座いました。

晴れた日が續きました。水の音が體に染み渡るやうな朝もありました。庭の兩隅にある山櫻の葉は黄くなつて、風もないのにバラ〳〵と散り始めてゐました。『おゝ寒い、矢張、山は寒いんですね。』から言つて女が羽織を取つて上に重ねて着るやうな夜もありました。

庭の植木の上に並べて干した足袋や、浴衣の上に、薄い日が當つて、赤い蜻蛉が一疋も二疋も飛んでゐました。『秋だね。』私はこんなことを獨言のやうに言ひました。

『もう、貴郎は私のことなんか思つてゐないんぢやない？』

『何故――。』

『隨分長いのね。一時間位になるわ。』
『そんなになるかしら。』
『だつて、私がおつくりを始めない前ですもの。私のおつくりは隨分長いんで評判なんですよ、それがすんでも歸つて入らつしやらないから、何處か遠くへ散步に入らつしやつたのかと思つた。』
『この花は好いだらう。』
私は崖の下のところで折つて來た白い九連草を女に見せました。
『何ッて言ふ花でせう、西洋花ね。』
その返事はせずに、私は座敷に上つて、それを昨日さしたダリアの花瓶の中へとさしました。

昨夜のやうな純な若々しい心は、暗いライフの中に不意にさし込んで來てそして時の間に消え去つて了つた日光のやうなものでした。私の生活には、矢張、暗い恐怖と汚い經驗とがついて廻つてゐるのでした。
『何うしてあんな純な快樂が私の胸に湧き出して來たらう。』
かう思つてひるがへつて考へて見ても、それが何處から何う來て、何う何處へ去つて行つたか知れませんでした。

をつづけて筆を執ることでせう。

筧の落ちてゐる桶、その向うにある寒山竹、敷石を下りて向うに行くと、此間婆さんが來て蒔いて行つた大根の畑が十坪ばかりありました。それに添つて、路が垣の外の方へ出て行つてゐました。檜や、あすならうや、椿や、杉や、さういふ間を拔けて、路は谷の見える崖の上についてゐるのでした。

其間の路――その路を歩きながら、これまで私は子供の二人ある丸髷の女のことを何んなに深く考へたでせう。私は一面それを遁れるために此處に來たと言つても好い位でした。祕密の快樂と祕密の恐怖と祕密の暗黑と、それが何んなに執ねく私の頭腦に滲みついてゐたでせう。私は二時間位其の谷川の見える崖の上に立つて、深く私達のことを考へてゐたことがありました。

そして、其處から私の室に歸つて來ると、其處には、圍爐裏と鐵瓶と軒の細い竿にかけた新しい白い手拭と、それだけがいつも私を迎へるのでした。

しかし、今では、色の白い、愛嬌のある顏が其處にゐるのでした。

『何處に行つてゐたの？』

『崖の上へ。』

『何をしてゐらしつたの？』

『唯、川を見てたのだよ。』

女にはかういふ生活が此上なくめづらしいやうに見えました。あくる朝は、女は早くから起きて、新しい手拭を姐さんかぶりにして、臺所の方へ出て來ました。

『炭は何處にあるの？』

かう私に訊いて、下駄を穿いて、門の前の暗い小屋の中に入つて行つたりしました。

『駄目よ、貴郎。後生ですから私にさせて頂戴よ。男なんか引込んでお出でなさいよ。臺所なんかに出て來るもんぢやないのよ。』笑ひながらこんなことを言ひました。

何をしてゐるかと思つて、私が行つて見ると、赤い扱帶を襷にして、筧の水のちよろちよろ落ちる流し元のところにしやがんで、汁の實か何かをせつせと庖丁で切つてゐました。

それは廣い臺所でした。眞中に大きな古い圍爐裏があつて、そこに黑くすゝけた自在鍵が木の枝か何そのやうにだらりと下つてゐました。その傍にある石の竈には、釜がかゝつて、そこから湯氣がブウブウ吹き出してゐました。傍には薪だの木片だのが一杯置いてありました。

朝日が窓からさしてゐました。

私の机、机の上に置いてある原稿紙、雜誌、新刊の小說、それは長い間、そのまゝになつてゐました。靜寂——といふ字が書いてあつて、そしてあとはそのまゝになつてゐました。何時、私はそのあと

女は白い顔をはつきりと見せて、障子と縁側のところに立つて見てゐました。
これで天然との交渉も全く絶たれて了ひました。もう全く二人の世界になつて了ひました。
『もう一度、私、お湯に入るわ。好いお湯なんですもの、ね、貴郞も入るわねえ。』女はこんなことを言ひました。

電燈は終夜明るくついてゐました。
水の音は矢張聞えてゐました。しかし、遠く遠くなつて聞えてゐました。筧の音は丁度雨のやうでした。
『また、降つて來たのかしら。』
『なァに、あれは水の音だよ。』
『ぽち〱雨滴の音がするぢやありませんか。』
『あれは筧だ。』
『さうですかね。丸で雨が降つてるやうですね。』
女はかう言ひました。

大きな金ピカの佛龕が一番先に女の眼を惹きました。

『佛樣があるんだ？』

『佛さま？　本尊さま？』

『明けて見せてやらうか。』

『え。』

で、私は佛龕の大きなかけ金を外して、扉を兩方に開いて見せました。中には金鍍の古い三尊が寂然として立つてゐました。

『もう澤山、閉めて頂戴。何だか氣味がわるいわね。』

女はかう言つて、閑爐裏のある明るい室の方へ戻つて行きました。

私がぐづ〱してさがし物をしてゐると、『早くこつちへ入らつしやいよ。早く來て、唐紙を閉めて下さいよ。』かういふ女の聲がその室から聞えて來ました。

長い長い雨戸でした。三四枚重ねて、ぐつと押すと、室の中の明りと暗い夜とのしきりの光線が段々狹く狹くなつて行きました。緣側のすぐ下に栽ゑてある沈丁花の重々しい厚い葉の受けてゐた光線もやがては闇の中に埋れて了ひました。最後の雨戸をしめ終つた時には、私はほつと呼吸をつきました。

『好いさ、少し位……。』

茶箪笥の上の目ざまし時計も喜悦の音を刻んでゐました。それには青いリボンが結びつけてありました。

『寺には寺だけれど、皆な人が借りて住んでゐるんだよ。こつちの隣には西洋人がゐるし、こつちには、お宮を修繕する技師の人が住んでゐるんだよ。』

『隣には、何ういふ人がゐるの？ 矢張お寺？』

『雨戸は閉めずにおくの？』

『今まで閉めたことはないがね……』

『今夜はしめませうよ。何だか、誰か來るやうな氣がするわ。』

女はこんなことを言つて、立つて、障子を明けて暗い夜を覗くやうにしました。

私は何かさがすものがあつて、奥の八疊の方へ行きました。

襖を明けると、

『奥にも室があるの。』女は覗いて見て、『廣いのね。』

かう言つて立つて來ました。

『あれは何ァに？』

ゐるやうに見えました。
餉臺の上にはいろ〳〵なものが並んでゐました。皮の白く柔かな饅頭もあれば、殼のくつきりと白い大きな鷄卵もありました。茶碗、箸、德利、小さな皿、蓋物、丼――さういふものが皆な一間の樂しい明るい空氣と調和して、何とも言へない靜けさを持つてゐました。
『本當に若い頃にかへつたやうな氣がするよ。』
『さう――』
かう言つて、『私にも一杯下さいな、本當に氣が落付いた……。東京のことなんかもう少しも思つてゐないから不思議ですわね。何だか遠い遠いところに來たやうな氣がしますよ……。』女は甜るやうに盃を口に當てゝ、『本當に浮世離れがしてるわ。一月でも好いからかういふ暮しをして見たら好いでせうね。』
『早く人の奧さんになるんだね。』
『でも……矢張駄目よ。人の奧さんになつたつて駄目ですよ。こんなに靜かにして暮してゐられやしませんもの。』
『それはさうだね。』
私も快く醉つてゐました。女は小さな鏡を出して、それに自分の顏を映して見て、『私も隨分醉つたわね。赤いわね。』

かういふ聲が風呂場から聞えて來ました。

『あゝさつぱりした。』

かう言つて風呂場から出て來た女は、大きな信玄袋の中から、化粧道具を出して、さつきまで私が物を書いてゐた次の間の机の上に、古い鏡を立てゝそしておつくりを始めました。そこにはランプが薄暗くついてゐました。

白い腕だの、長い髱だの、三本足の毛筋だのが、その薄暗い光線の中にやはらかに見えてゐました。女が顏を映してゐる古い鏡——氣が附くとそれを私は思ひ浮べてゐました。それはこの寺に昔からあつた四角な鏡でした。ギヤマンの鏡のまだ珍らしい時分に、この寺の先代か先々代が高い金を出して、そして伊達に買つて來て置いた鏡でした。『隨分古い鏡ですよ。よく壞れずに殘つてゐますよ。』などとこの寺の主僧も言ひました。もう顏も十分には映らない位でした。その古い鏡と、薄暗いランプの光線と、白い綺麗な顏と、黑い多い髮と……。

圍爐裏の傍は明るい樂しい空氣で充されてゐました。活々と起つた赤い火や鐵瓶から白く颺る湯氣や、透徹る罎から徳利に移される濃やかな酒や、晴々とした明るい女の顏や、何も彼も靜かに快樂に醉つて

『誰も來やしないよ。晝間はそれでも何うかすると客があるけれど、もう誰も來やしない。』

『さう――』

女は立つて行きました。私は私の胸に若々しい心の燃え立つて來るのを押へることが出來ませんでした。私は二十八九時分の若い純な心持になつてゐました。幻影――幻影に過ぎないといふことをちやんと心の底で理解してゐて、それで、心が不思議にも若い情緒で漲つてゐました。暗い、深い、怖ろしいさま／＼の感情の中を通つて來た私に、こんな純な心持が湧いて來ようとは思ひもかけませんでした。』私は圍爐裏の前に默つて坐つてゐました。ドウといふ水の音が單調なしかし靜かな人の心を落附かせなければ止まないといふやうな調子で絕えず私の耳に聞えてゐました。私は始めて女心に觸れたやうな氣がしました。

私の通つて來た路は、火の中水の中と言つたやうな境でした。暗い心が暗い心と重り合つてゐるやうな私の心の境涯でした。かうして二人きりで、世界を離れて、本當の甘いラバーのやうな一時間を私は送つたことがあつたでせうか。……

女が湯を汲み出したり何かしてゐる音が、水の音に交つて此方まで聞えて來ました。

『さう／＼、ランプをつけてやらうか。』

『いゝのよ、澤山よ。』

やがて風呂場から戻つて來た私は、

『すつかり沸いた。一つ、湯に入つたら何うだえ？』

『お湯がわいてゐるの？』

女は思ひがけないといふ顔をして言ひました。

『丁度好い加減だよ。行く時に火を入れて行つたんだがね。すつかり忘れて了つてゐた。……湯に入つて、くたびれを治してから、茶漬か何か食ふ方が好いよ。』

『私、汽車の中で食べて來たのよ。』

『でも、おつき合をするさ。今日はもう遲いから、何も御馳走は出來ないけれど、明日になれば、いろいろ御馳走をするよ。何でもあるよ。』

かう言つて、すぐ言葉をついで『まァ、一つ入つてお出でよ。』

『貴郎は？』

『僕は毎日入るんだから、何うでも好いよ。』

『さう？　毎日お湯が立つの？』

女はまた思ひもかけないといふ顔をしました。

『もう誰も來ないかしら？』

私の持つて來た大きな風呂敷包は其處にころがつてゐました。『それをあけて御覽、御馳走があるよ。』
『さう――。』かう言つて女はあけて見ましたが、『まア――』と言つて笑つて、『貴郎もよく氣がつくわね……私、お寺だと言ふから、ちやんと支度して來たのに……これは何アに、饅頭？』
『此處で名物の饅頭だよ。』
『さう――旨いかしら。』
一つ取つて口に入れて見て『旨しいわね。それに出來立てね。』
派手な半襟、牡丹の彫刻のしてある指環、黑繻子の帶、横縞の絹セルに鶉の鼠色の羽織――それは皆な私の見馴れたなつかしい思出のこもつたものばかりでした。長い髱が柔らかな曲線を明るい一間に見せてゐました。

喜悦の心を表はした經机の上のダリアは、靜かな夜の一間の光線の中に鮮かに見えてゐました。
『綺麗な花ね。』
女は振返つて見て言ひました。
ふと氣が附いて、私は立つて行きました。』

『ひどいところだらう。』

『いゝえ。』女はかう言つたが、四邊を見廻して、『他に誰もゐないの。下女も。貴郎一人つきり？』

『さうさ。』私は笑つて見せました。

私達の默つてゐる間を、水の瀬の音と筧の音とが靜かに聞えてゐました。

『靜かだわねえ。』

女はかう言つて立つて障子を明けて暗い夜を覗いて見たりしました。

『體がわるいッて何うしたんだえ？』

『なアに、別に大したことではないのだけれども……』かう言つて笑つて見せて、『少し遊ばせて貰つた方が好いッて、母さんも言ふし……ちつとは遊んだつて好いわね。時には、かういふ處に來て、氣の保養でもしなければ本當に體がつゞかないんですもの……。』一寸考へるやうに首を傾げて、『實は手紙を先に上げるつもりでしたんですけれども……貴郎だから構はないと思つて、そして來たのよ。』

『本當によく來た。』

『ゆつくり四五日遊ばせて下さるわね。』

かう言つて、女は信玄袋の中から、名物の鹽煎餅だの、佃煮だの、つく羽根といふお菓子だのを出しました。

私達は後について來る車夫から五六間先に歩いて行きました。私達は互に寄添ふやうにしてゐました。喜悅が胸にあふれてゐて、しかしそれを言葉に表すことが出來ないやうな氣分でした。言葉に表はさうとするとその柔かな氣分が却つてすつかり失はれて了ひやしないかといふやうな氣がして、私達は默つて並んで歩いて行きました。かうした喜悅を互に交換し得るのは、唯、觸覺ばかりだと私は思ひました。

門の中に一歩先に私は入つて行きました。もう四邊は眞暗になつてゐます。私は圍爐裏の火のほつつりと赤く見えてゐる八疊の間に入つて、手さぐりで電燈の鍵をねぢりました。

その電燈の餘光は薄く入口に立つてゐる女の半身を照しました。『さア、上つたら好いだらう。ひどい處だよ。』私がかう言つた時には、女はもう入口の八疊の室に上つてゐました。女は水色の細い蝙蝠傘を傍に置いて、帶の中から小さな財布を出して、そして其處まで荷物を持つて來て吳れた車夫に金を渡してゐました。

『難有う御座います。』

幾度も禮を言つて、そして車夫は歸つて行きました。

女はやがて圍爐裏の向う側に來て坐りました。二人――もう二人きりです。二人の世界です。

『荷物は？』

『赤帽に頼んだわ。』

私達はそのまゝ群集と一緒に改札口から表へと出ました。そこにゐる車はやがて私達の周圍に集りました。

店先にはもう灯がついてゐました。

長阪の下で車を捨てゝ、そこから私達は歩くことにしました。女の荷物は、車夫が寺まで持つて行つて呉れました。

私達は話しながら歩きました。

『よく來たね。あまり急なので實はびつくりした。』

『さう――。』

かう言つて女は私の方を見て、『體がわるいから、少し保養して來る方が好いッて、皆なが言ひますしね……』言ひかけてあたりを見廻して、『でも随分さびしいところね。』

山内の夜はひつそりとしてゐました。誰も通るものもありませんでした。唯、路の角にある電燈がぱつと杉の葉に青く反射してゐるばかりでした。

私は入場券を買ひました。」

黒い煤烟をあげて、雨を衝いて、汽車の入つて來るのが此方から見えてゐました。今、それとすれ違ひに此處から出ようとする汽車が此方の線路に横つてゐるので、入つて來た列車は向う側の線路に着くやうになつてゐました。私は大きな風呂敷包を抱へたまゝ、急いで、駈足をして、こつちの線路から向うの線路へ行くところへと出て參りました。

今入つて來た列車からは、ぞろ〳〵と人が下りて來ます。赤帽が逸早く大きな鞄をかついで此方へやつて來るのが見えてをります。私の眼は群集の中に交つて此方に歩いて來る色彩の鮮やかな丸髷姿を決して見失ふやうなことは御座いませんでした。女もすぐ私の此方側に立つて待つてゐるのに氣が附きました。

多くの乘客のやうに線路を横ぎつたり、機關車の前を掠めるやうにして通つたりせずに、靜かに本當の道を歩いて來た女は、やがて私の傍に近寄つて、

『あき〳〵して了つたのよ。』

と小聲で言つて、

『隨分あるのね。』

『兩方でいくらです。』

私は狼狽して言ひました。

『十二錢でよろしう御座います。』その若い上さんはかう言ひながら、『何なら、あの、穴をあけてさし上げませうか。』

『さうですな、面倒でなければあけて貰ひたいものですが。』

若い上さんは枕の臺の方を持つて奥に入つて行きました。勝手の竈には、赤く火が燃えてをりました。そゝくさと風呂敷に包んで私は表へ出ました。雨は又少し強く降つて來ました。インバネスの袖の先が濡れて了ひました。

私は風呂敷包を抱へて、停車場の待合室で待つてゐました。六時の汽車が着くまでには、まだ十五分位間がありました。

大きな風呂敷包――それを考へると、私は何だか笑ひたくなりました。もし、これをさらつて取つて行つた人があつたら何うだらう。饅頭に、鷄卵五箇に、船底枕に、判じ物のやうな風呂敷包だ。何うい ふ人が何ういふ工合にかうしたものを一緒に包んで持つてゐたかと言ふことは、到底解りはしないだらう。私はこんなことを考へながら、早く暮れて行く雨の日の店の灯などを見てゐました。

買物をしようと思つてそして早く出て來たのでした。ある店では名物の饅頭を買ひました。ある家では鷄卵を五つほど買ひました。そこの上さんは私が店先にひろげた風呂敷の中に丁寧にそれを包んで呉れました。其處の店の隅では、籠の中の家鴨がギャア〳〵鳴いてゐました。

川の岸で逢つた女のゐる家は何でもそこらあたりの横町を曲つて入つて行くんだな、と思ひながら、料理店の軒燈のいくつも出てゐるやうなところを私は急いで通り拔けて行きました。

もう一つ是非買はなければならないものがありました。私は兩側に眼を配りながら歩いて參りました。お正さんの店には、無論あるのですが――其處から屆けて貰へばわけはないのですが、何だかそこで買ふ氣には何うしても私にはなれませんでした。町は段々場末になつて行きました。土産物を賣る家は澤山あつても、私の買はうといふやうなものを賣つてる家は何處にも見當りませんでした。

ある店で訊くと、

『それは、向うの家にあります。』

深切さうな亭主はかう言つて、わざ〳〵店頭まで出て、筋向うの家を指して敎へて呉れました。

その家には、大きな丸髷に結つた若い綺麗な上さんがゐました。『はい、御座います。そこに並んで御座いますが。』かう言つて、店の隅の棚の上を指しました。

『小枕も御座いますが――。』

て私は停車場の方へ出かける支度をしました。

『大丈夫かしら、危なくないかしら、……女を迎へに行つてゐる間に、火事でも起つては、それこそ大變だ。』私は支度が出來てからも、二度も三度も、風呂場へ行つて、鐵砲の中を上から覗いて見ました。火は活々と盛に起つてゐました。

インバネスを着て、帽子をかぶつて、途中で買物をする爲めの風呂敷をポッケットに入れて、圍爐裏の火を四方から危なくないやうにいけて、そして私は出かけました。幸ひにも雨ばたんと降つては居りませんでした。

『もう、鹿沼までは來てる。』

こんなことを考へながら、私はこつそり門を出て行きました。

長阪の石ころ道のところで、かねて知つてゐる寺のお弟子さんが挨拶して通りすがつて行きました。やがて私は山の町の通の方へと出て行く人でした。

お正さんが店頭に坐つて此方を見てゐました。大きな旅籠屋の番頭も酒屋の亭主も雜貨店の上さんも皆な私の方を見てゐるやうに私には思はれました。私は得意でもあり、また後めたいやうでもありました。

電車か車で行けばこんなに一時間も早く出て來なくつても好かつたのですが、私は途中でいろ〳〵な

いつも來る聾の豆腐屋の顔がそこに見えました。

『一つ。』

と、無意識に私は指を出して示しました。と、豆腐屋の爺は、岡持を持つたまゝ、ヅカ〳〵上つて來て、臺所の方へ行つて、そして豆腐を一つ筧の桶の中に置いて行きました。

敷石を傳つて行く跫音が門の方へ次第に消えて行きました。其間にも時は經つてゐるのでした。女の私の方に近寄つて來る時が――。

私の眼の前に見える幻影と白い霧とは互に行つたり來たりしました。雨は止んだり降つたりしてゐました。隣の家の小さな狗が前の庭の芝生を駈けて通つて行きました。

私は圍爐裏に火を起す前に、風呂場の方へと行つて見ました。もう水は八分目近く來てゐました。で、樋を取つて、風呂の蓋をして、それから小屋の方へ炭を出しに行きました。

薪や炭の一杯に入つてゐる小屋は門の傍にありました。戸を明けると、古い埃の匂ひがぷんと鼻を撲ちました。私は大きな炭俵の中に首を半分入れて、そして二つの炭取に一杯炭を入れて雨をついて歸つて來ました。

活々と起きた火を十能に入れて、それを風呂の鐵砲の中へ入れて、十分起つたのを見すまして、そし

ふと見ると、筧の水が細く細くなつてゐました。これでは、風呂に樋をかけることはむづかしいと思ひました。で、私は雨の中を衝いて、隣の境にある大きな桶の方へ行つて見ました。そこには水がいつもの通り澤山に來てゐました。

私の方に來る樋の口のところには、落葉が一杯にたまつてゐるのをやがて私は發見しました。私はそれを手で取つて捨てました。水は勢よく樋の中に落ちて行きました。

コト／＼といふ音――それも私に取つては喜悦の音でした。

風呂場へ行つて、細い樋をかけて、水を十分風呂の中に入るやうにして置いて、そして、私は机の傍に來て坐りました。

靜かに時が經つて行つてゐます。一秒毎に私の方に女の近寄つて來る時です。私は敷島の袋を傍に持つてきて、中から一本拔き出して、それに火をつけてスパ／＼と吸ひました。雨は矢張降つてゐました。白い霧が谷間から一面に舞ひ上つて、時の間に、谷は海のやうになつて了ひました。

心臟の鼓動が自分で自分にわかる位に靜かな靜かな空氣でした。

ふと跫音がしました。と思ふと、敷石に上る人の氣勢がして、障子がスッと明きました。

根川の鐵橋あたりを渡つてゐるだらう。あの眼で白い帆を見てゐるだらう。……私は私の心の俄かにそつちに捉へられて行くのを見ました。

『駄目だ、駄目だ。』

こんなことを心の中で叫びましたが、何が駄目なのか、ちつとも自分にはわかりませんでした。

病氣に私がなつた時分、其女は初めて自前になつて、一軒新に家を構へるやうになつてゐました。自分の力で、ドン〳〵新しい境を開いて行つたやうな女でした。

私は旅行案内をさがして、時間を繰つて見ました。一時に立つといへば、一時五十七分の汽車です。それが此方に着くのは、六時三十五分だ。もう今では、六時では少し昏くなりかけてゐる。日が暮れて、不知案内では、到底この寺はわかるまい……。寺の名を知つてゐたつて、一寸さがすのに困難だ………『迎へに行つてやらなければならない。』こんなことを私は考へてゐました。

雨がサツと降つて來ました。

私は裏の崖のところへ何氣なく下りて行つて見ました。下のところにダリアが綺麗に咲いてゐるのが私の眼に入りました。谷は音を立てゝ流れてゐました。

私はそのダリヤを二枝ほど折つて、それを持つて歸つて、素燒の花瓶に生けて經机の上に置きました。赤い色をした丸い花は、女の來るのを迎へる喜悦のシンボルのやうに暗い一間の中に見えてゐました。

――一ジノギシヤデタツヒデ――としてあります。

私ははつとしました。何うして好いかと思ひました。『たうとうやつて來た！』かう考へましたが、それと共に、一面には深い喜悅が私の胸に押寄せて參りました。此處に、この僧房に、其女を見るといふことが、私に何とも言はれない衝動を與へました。

其女、其女、其女――私の胸は烈しく躍りました。

其女が私に逢ふために汽車に乘り込んだ。さういふ事實が私に何とも言はれない感じを與へました。四ヶ月に近い僧房のさびしい生活、女から避けてゐたやうな世離れた生活、その生活の中に女が入つて來る……もう汽車に乘つた……何ういふ積で汽車に乘つたらう……さうぢやない俺を思つてゐるんぢやない……、何かの動機で不意にやつて來る氣になつたんだ……それに違ひない……しかし何でも好い、來るといふ事實さへあれば澤山だ……其女には久しく逢つたことはなかつた……その眉……その眼……そのほつそりした姿……。『來たら何うだ、大に歡迎するよ。』かう言つて居所などを敎へて來たのはあれはもう二月ほど前のことだ……何うして來る氣になつたゞらう……。

私は圍爐裏の方に行つて、棚の上に置いてある時計を見ました。時計は二時五十分のところを指してゐました。汽車に乘つてからもう一時間の上經つてゐる……久喜、栗橋あたりを通つてゐるだらう。利

私は其話に一種の興味を感じました。男と女の話、それほど私の心を惹くものはない――かう私は思ひました。私は若い人達の戀が、死に迄赴かうとした戀が私位の年齢になつて、段々享樂的に大膽になつて行く徑路を頭に描いて見ました。『人間は何んな風になつて行くかわからないものだ。』こんなことを私は考へてゐました。

あくる朝、私はいつものやうに其店に煙草を買ひに出かけました。そんな事件があつたとは思はれないやうに、矢張店は綺麗に飾りつけてありました。朝日がはなやかに杉の葉の間から洩れてゐました。

上さんは矢張赤い頬をして、氣輕に挨拶して、バケツを持つて、向うの方へ水汲みに行つたりしてゐました。温泉に行つて半日待ほけを食はされた姉婿といふ二十七八の男は、ねんねこで子供を負つて其處に立つてゐました。何も變つたやうなものは一つもありませんでした。矢張、繪葉書の箱が一面にそこに並べられてありました。

その日の午後です。忘れもしない、私が机に向つてゐると、

『電報！』

と言つて、郵便脚夫が一通の電報を其處に投り込んで行きました。

私は封を切つて見ました。

籠屋の娘かなんか汽車を待合してゐると、其處に小福がやつて來たんださうです。まだ女は一人だツたさうです。鹿沼あたりの停車場で男が待合つてゐたんだらうといふことですね。小福が、一寸祝儀な拂つて遠出をするんですから、姐さんにもちやんと斷つて來てゐるんですから。』なんて言つてゐたさうです。それが怪しいツて言ふんで段々わかつて、來てしらべて見ると、家には男の書置などもあつたさうです。矢張、銀行の金をかなりつかひ込んだんですね。家が好いから、表向にはならないで、當人に疵はつかずにすみましたがね。で、家ではびつくりして、警察などへ保護願を出したり何かして大騷ぎをしてゐると、丁度其夜、品川近所で、二人でぶら〳〵してゐるところをつかまつたんです。』

『それでどつちも死ななかつたんですね。』

『新聞に出てゐましたよ、詳しく。』

『面白いね。あの肥つた、杏のやうな赤い頰をした四十位の上さんの息子ですね。……吃驚したでせうね。』私はかう言ひました。私は、さうした店と本宅とを持つた家の出來事に就いていろ〳〵に考へて見ました。

『何でも、その前にその男の關係した女があつて、それと喧嘩して、そして急に小福と出來たんださうですよ。』

其人は猶續いて話しました。

私は不思議な心持で訊いてゐました。

『一體何ういふんです？』

『その三男は銀行に出てゐたんですがね。色の白いハイカラな男でしたよ。金などをよく寺に集めに來る男でした。さうですね。二十四五でせう。それが面白いんです。此間の日曜、さう、天氣の好い日がありましたね。一緒に寂光へでも行つて見やうッて言つた日、あの日ですよ。その男の姉婿があるんですがね。これも銀行に出てゐるんですがね。さう〳〵、子供などを負つてあの店によく出てゐる男、あの男です。あれが姉婿ですがね。今日は日曜で天氣が好いから、萩垣面に行つて、温泉にでも入つて一日ゆつくり遊んで來やうッて約束したんださうです。ぢや、兄さん、一歩先に行つてゐて呉れッて、姉婿が十時ごろから向うに待つてゐたんですッて……。ところが、何時になつても、やつて來ない。十二時になつてもやつて來ない。何うしたんだらうと思ひながらも、湯に入つたり、ビールを飲んだりして、一人で待つてゐたんですつて……。でも何うしてもやつて來ない。醉つて一寢入してもやつて來ない。仕方がないから三時頃になつて歸つて行くと、弟は家にはゐない……何處に行つたかわからない。それから大騒ぎになつたんです。』

『それで、女の方は？』

『女の方は、始め約束がしてあつて、男とは別々に停車場へ行つたもんです。停車場で油屋といふ旅

ある人が來て、こんな話をして行きました。

『え丶、さうです、あの前の煙草店、貴郎が毎朝買ひに行く煙草だの土産物だのを並べて賣つてゐる角の家です。あそこの三男です。あそこは主人はお宮の漆の方をしてゐるんですがね。山田ッて言つて金もあるんです。そら、入町の方へ行く教會のある角に大きな二階屋があるでせう。さう〳〵、噴水が裏に揚つてゐる――あそこです。あそこが本宅なんです。お宮の前の店はあそこから出してゐるんです。子供の多い宅でしてね。娘ッ子が五人も六人もゐますがね。そこの三男が、心中未遂をしたッて言ふんでせう。昨日大騷ぎでした。』

『心中未遂？』

『新聞に出てゐましたよ。』

『さうでしたかね。氣がつかなかつた。何處でやつたんです。』

『東京でですよ。何でも高輪か品川あたりですよ。』

『女は？』

『土地の藝者ですがね……小福と言つて、廣田家の抱へですがね。來てからまだいくらも經たないんですつて。』

『へい。』

『好いよ、好いよ、それで……』
『だつて、あんまりですもの、これでは。これこの羽織？ 御覧なさいよ、こんなにカギ裂をしてるのよ。』かう言つて、右袖のところを此方に見せました。
好いと言ふのをもきかずに、『だッて、お茶屋さんに、藝者がこんな着物を着て來てゐては、見つともないわ。』かう言つて、足駄の音をさせて裏門から出て行きました。
今度入つて來た時には、縞お召の袷に派手の金絲織の帶か何かをしめてやつて來ました。大急ぎでおつくりをしたやうな白い顔をしてゐました。
『姐さんに笑はれちやつた！』
こんなことを言つてゐました。
先程、何處かで匂ひがしてゐたと思つた木犀はその窓の下のところにあるのでした。秋雨は靜かに降つてゐました……。
……『あの時分から比べると、年を取つた。』こんなことを考へて、私は圍爐裏の前に坐つてゐました。絡みついて來る女の心、それは何處まで絡みついて來るだらう。水の音よ、筧の音よ、絶えず流れ去つて行つてゐる人間よ、時よ。

やがて、私は言ひました。『一寸寄つても好いけれど、面倒だから、すぐ何處かに行かうぢやないか。此處等に好い處はないかえ？』

『あるわ。すぐそこにあるわ。……ぢや、裏の家へ行きませう。』

女は内の中に姿をかくしたが、そのまゝ入口から格子を明けて出て來ました。黄八丈の古い袷羽織を着て、幅の狹いメリンスの帶なんかしめてゐました。思ひもかけない人に逢つた嬉しさとなつかしさとで身裝などに構つてゐる暇がないといふ風でした。それが私にも嬉しかつた……。

裏の料理店の裏門から入つて、『こゝは、私を此土地へ世話して呉れた家よ。』などと言つて、『お客樣ですよ。』と大きな聲で、表の方を向いて呼びました。

女中が向うから走つて來て、怪訝さうに私の方を見て、そして裏の離れへと案内して呉れました。その室は中二階になつてゐる八疊の間でした。曇硝子のはまつた戸が右の窓の方にありました。

『一寸わからなかつた樣だつたね。僕といふことが――』

『だッて、餘り思ひもかけないんですもの……でも、すぐ解つたわ。うれしかつたわ。』

莞爾と笑つて、ハァと呼吸を長く引いて、始めて自分が不斷着のまゝで飛び出して來たのに氣が着いたやうに、『まア、こんな扮裝をして、……面白い風でせう。』私の方を見て、『何だかきまりがわるいわねえ……一寸行つて着改へて來るわ。』

私は狼狽して、
『梅千代といふ人が來てますか。』
『え、ゐますよ……。』と言つたが、聲をあげて、『梅千代さん？』
『なァに――。』
と言ふ聲が中でしたと思ふと、高窓の半分開いたところから、梅千代の色の白い顔が額縁の中の女のやうにくつきりと其處に現はれました。
女はしばし不思議さうな顔をして私の方を見てゐましたが、
『まァ、貴郞！』
かう言つて、嬉しさうにして、『何時入らしつて？』
『昨日來た――』
『さう――まァお入んなさい。誰も氣の置ける人はないんですから、姐さんばかりですから。』
『まァ、好いぢやないか、何處かへ行つて見やうぢやないか。』
『え、ま、參りますけれど……一寸お入んなさいよ。まァ、貴郞、よく來て下さつたわね。』かう言つていかにも嬉しさうにして、私の顔をぢつと見てゐました。
私達は戀する若い人達のやうに、暫し默つて顔を見合せてをりました。

それは田舍の士族屋敷に近いやうなところでした。町から横町に入つて來て、お宮の中をぬけて來たやうなところでした。こゝに來る前に、私は彼方此方で其家の名を訊きました。新港家……『それは向うの方ですよ。そこから行つてお宮の中を入つて行つたところですよ。』かうある家の高窓から色の白い女がわざ〳〵顏を出して敎へて呉れました。そこゝに三味線を稽古する音が聞えてをりました。靜かな秋雨でした。宮の中の樹の葉が濡れて、何處からか木犀の匂ひがして來てゐました。靜かな、それでゐて物にあくがれるやうな心持――其時分は、女に對する私の心持もまだ純なものでした。女のやはらかな心に向つて偏つて行つてゐる若い心でした。

其町に來て、女が其處に出てゐるといふことを訊いて、そしてわざ〳〵たづねて來たのでした。

成程、其處に軒燈が出てゐる家がありました。しかしそれが三軒ほどならんでゐるので、その中のどれが私の訪ねる家かといふことが一寸わかりかねました。矢張、三味線の音がそこゝで聞えてをります。高窓が半分ほど明けてある家などもありました。私はどぎまぎして立つてゐました。

向うから傘にバラ〳〵と雨の音をさせながら、下女らしい女が、此方の方へとやつて來ました。

私は訊きました。

『新港………』

其女は首を上げて、『そこですよ、私の家ですよ。』

に君の家に行かう。あの細い通だらう？　行つても好いかえ？』

『それぢや是非ね。』

かう言つて女は又車に乗りました。

『何處へ行くんだえ？』

『木村屋へ御座敷。』

で、挨拶して女は行きました。四年前の夢、實際四年前の夢がまた私の前に展げられて來ました。それは不思議な表情をする女でした。何處までも男に從つてゐるといふやうな、踏まれたり蹴られたりするやうな眼に逢つても、それでも男に對しては何處までも從順な女でした。柔かな線が私の眼の前にあり〳〵と見えてゐました。

『こんな田舍に來るやうになつたのは、いろ〳〵なことがあるんだらう。可哀相な女だ。』こんなことを考へながら私は私の僧房の方へ歸つて來ました。

……………雨の降る日でした。それはもうずつと昔のことでした。矢張其女でした。その女はまだ若くつて二十になつたかならないか位の時のことでした。私は冬の縞ラシヤのインバネスを着て、中折をかぶつて、細い道を入つて行きました。

私の前には、四五年前の夢が再び現はれて來ました。

『何だ、お前か？』

『何うも似てるらつしやると思つた。』

女は車から下りた。

『此方に來てるのかえ？』

かう私は訊ねました。

『先々月から來てゐるんですよ。貴郎は？　さう…………矢張前から來てるの？　一緒に同じとこにゐて知らずにゐたんですのね。此處で逢はなけりやまだ知らずにゐたのね。……』女はかう言つて、私の顏を見て、『私ね、鈴木といふ宅にゐるのよ。貴郎は？』

『僕はこのすぐ上の寺にゐるんだ。』

『お寺？』

私は笑ひながら點頭いて見せました。女は寺の名と所とを詳しく聞いてから、『うかがつても好いの。』

『好いとも……一人切りだから。』

『貴郎一人きり……奥さんは？』

『女は誰もゐないんだよ。僕一人だよ。』私はかう言ひました。が、すぐあとをついで、『でも、僕が先

川の傍の路を通ると、裏口からひよつこりお正さんが出て來ることなどがありました。わざと知らん顔をして通つて行くことなどもありました。

川の瀬の音が高く高く鳴つてゐました。岸には小料理屋などがあつて、赤い襷をかけた頰の紅い女などがゐました。草藪の中に赤い實などが交つて見えてゐました。

『わしが思ひはきぬ川べりよ。こいし〱と松ばかり………』地口めいた唄が何處からか聞えてゐました。

お正さんの白い長い襟と白い素足とが私の前を行く………。

外國人の二人づれが、手を組合せて通つて行きました。あとから、藝妓らしい女をつれて東京の紳士が車を二臺並べて走らせて來ました。川が白い瀬をつくつて流れてゐます。私はひとりよくその川の岸を散歩しました。夕方には水烟が白く揚つてゐました。

ふと私の前で車をとめたものがありました。それは丁度日の暮れる時分でした。私の前には、一目でそれとわかる女が車に乘つてゐました。

私は人違ひかと思ひました。

『貴郎ぢやなくつて。』

『もう二十四でせう。』

『それぢや男の心持が解るのは無理はない。』私はこんな風なことを言ひました。二十四、その位になつた女でなければ、私達にはもう相手にはなれないのでした。若い十八九の娘――そんなものが何になるらう。男がまだ怖いやうな女を自由にしたとて、それが何にならう。關係すればすぐ結婚を迫るやうな娘、理想の家庭をつくることばかりを考へてゐるやうな娘、金の指輪の一つも買つて貰へばすぐ自由になるやうな娘、そんなものを自由にしたとてそれが私達には何にならう。かう私達は思ふのでした。

私は私と丸髷の女との長い間の關係を頭に浮べずには居られませんでした。それは結婚と戀愛とを全く離れて考へるやうになつた女でした。戀愛の爲めには何物をも眼中に置いてゐないやうな女でした。唯々男を對象にのみしてゐるやうな女でした。』『お互の快樂をお互に享受するのに、何の故障があるでせう。自由に、大膽に、受けられるだけのものは互に受けて樂しむが好い。』かうした言葉をフランスのある詩人が言つてゐたではありませんか。私は私の女に對する考と、世の中の人の女に對する考と比べて考へて見ずには居られませんでした。

『さうですか――』

かう言つて、お正さんはサッと顏を赧くしました。

しかし、私達はもう昔のやうに容色の好惡で好ききらひを言ふやうな年ではありませんでした。容色よりも心持、——男の心のすぐわかるやうな女の方が私達の心を惹きました。男の要求にすぐ應ずることの出來るやうな女でなければ駄目でした。

お正さんは蒼白い顔をして店に坐つてゐることが多う御座いました。私は段々懇意になつて行きました。姉さんは土地でも有名な美人で、名高い工學士の細君になつてゐるさうですが、お正さんは、肋膜を煩らつてから、兎角病身勝で、今だに人の細君にもならずにゐるやうな人でした。『お正さんは可哀相ですよ。』こんなことを土地の人は皆な言つてゐました。

私の想像も手傳つたでせうが、私にはお正さんの心持がよく解るやうに感じられて來ました。いつも同じやうな風をしてゐない…………。それが第一に私の心を惹きました。非常に醜い、下女ではないかと思ふやうな顔をして筒袖などを着て働いてゐるかと思ふと、中形の派手なのを着て、黑繻子の帶などをしめて、白い顔をして店に坐つてゐることなどもありました。『實際、變化する顔だね。』こんなことを私は主僧に言つたりしました。

自分が其處にゐながら、後姿を此方に見せたまゝ、わざ〳〵奥にゐる番頭を呼んだりしました。かと思ふと、『まア…………』と言つて、奥から飛んで來て、愛想よく敷島を私にわたして呉れたりしました。

『お正さん、いくつだらう？』

『しかし、一人では出られないでせう。』

『それは行けますとも……』

かう女が言つた。そんなことを私はよくその石ころ道のところで考へてゐました。

都會を離れても、――山の中に來ても、何うすることも出來ないのは心でした。私は心で心を研究しやうとしましたが、しかしそれは駄目でした。

其處では私は自分で自分の半生を顧みるやうな氣分になつてゐました。自分ながら驚かれるやうな心の變遷でそして躍動でした。『同じ人だらうか、同じ心だらうか。』かう言つては自分で自分を解剖して見ました。

私のゐる家には、室が三間あつて、いづれも八疊でしたが、一番奥の間に大きな佛龕があつて、それを明けると、金鍍をした立派な佛像が三體拜まれるやうになつてゐました。私はそこの前に立つて、長い間祈念してゐることなどもありました。それでも矢張『同じ心』でせうか。

お正さんといふ娘がゐました。それは橋の袂から少し行つた位の處にある或店屋の娘でした。『何だ、あんな娘、容色なんかすこしも好くないではないか。』始めはかう言つて見て通つて了つた人でした。いくらか齒の反つてゐるやうな娘でした。

土手の下についてゐる路のやうなところや、隨分さういふところが澤山ありました。ふつと立止つて、女のある時ある場合の言葉だの氣分だのを思ひ出してゐることがよくあるんです。そしてそれが遠い昔のことであつたり何かするのですから不思議ではありませんか。

私のゐた僧房から川の方へ出て行くところがありました。石のごろ〳〵する石ころ道で、向うに山が見えてゐました。そこで私はよく女のことを考へました。

私に取つては女の歴史は大切な歴史でした。私は女の歴史より他に大切な歴史はないと思つてゐます。……赤い振袖姿……束髮……蝶々髷……恥かしさうに顏を背ける無邪氣な娘……私達は何時でもさういふものを唯一の道伴にしてゐるではありませんか。さういふものに勵まされたり、失望させられたりしてそしてこの佗しい平凡なライフを通つて來てゐるではありませんか。

此前歸つた時、私は丸髷の女に言ひました。

『何うです、遊びにお出なさい。』

『行つても好いんですか。』

『二人で入らつしやい。』

『行くなら、一人で行きますよ。』

大きな停車場の石段を私はいつも登つて行きました。そこには電車が待つてゐました。」

私は其處に來ると、いつも足を留めて向うを見るのが常でした。そこには汚ない川があつて、薪だの炭などを積んだ船が二隻も三隻も繫いでありました。下の室よりも二階の室の方が大きいといふやうな家などもありました。薪炭の入つた倉庫の裏が汚く見えてゐたりしました。

その少し先きに、大きな建物があつて、その向うは片側町になつてゐました。なまこじつくいの古風な長い塀は、斜阪をなした白ちやけた路の向うに見えてゐました。

何故か、その古風ななまこじつくいの塀が私の胸にいろ〳〵なことを思ひ起させました。實際不思議です。その塀を見ると、私の知つてゐる女のことが繪卷物のやうになつてすべて私の眼に見えて來るのでした。

其處には車が通つたり、電車が通つたりしてゐました。時には自動車が凄じい勢で通つて行つてゐることもありました。白い埃が西風に揚つてゐることなどもありました。

『おい、何うした？』

あまり長くぼんやりと立盡してゐるので、後から來た同僚に肩を叩かれることなどもありました。

イヤ、それはかりではありません、さういふ場所はまだ他にもありました。此方の道から向うの道へ曲つて行く角のところや、銀杏の樹が立つてゐて羅宇屋がボウと白くスチームを立てゝゐるところや、

私はやがて機械から顔を離しました。

『紫色したのは何です？』

『あれは毒ですな、毒があると、あゝ紫色になつて見えるんです。』

『さうですかな――。』

私はかう言つてもう一度覗いて見ました。混沌とした色が私に何か不思議なものを見せたやうな氣がしました。あの色と男と女の心の色と、其處に何か關係があるんではないかと思ひました。

『不思議なもんですな。』

私はもう一度かう言ひました。

日の當つた長い縁側にはその機械が長い間置かれたまゝになつてゐました。硝子戸の外には廣い樂しい世の中がありました。私はじつと立盡しました。

『病氣など何でもない。そんなものに負けるやうな弱いものではない。もつと、もつと、力強いものですな。』

かう私はある友達に言つた。女は男の病氣などに頓着してはゐませんでした。

そつと試驗室を覗くと、ぽつと青く燃えてゐる小さなアルコールランプの下のところで、頻に皿のやうなものを代診はいぢつてゐました。

『――さん。』

やがてかう呼ばれて、私は其方へ行つて見ました。

機械の中を覗いてゐた代診は私の方を見て、『御覽なさい、見えます、見えます、まだゐますよ。』

代つてその中を覗いた私の眼には果して何か映つたでせう。空氣のやうな單純な少し蒼味がゝつた色の混沌とした中に、鮮かな紫の色が點々として映つて見えてゐました。『そら、何うです、見えましたか。いゝえ、紫の色ぢやありません。紫の色の中にごまつぶのやうな黒いものが見えるでせう。』

『ポチポチと……』

『え、さう、それが黴菌です。』

『さうですか、あれが――』かう言つた私は不思議な氣がしてぢつとそれに見入りました。女と、そのごまつぶのやうなものと、面白い對照ではありませんか。私は『科學の皮肉』といふことを考へずには居られませんでした。

『面白いもんですな。』

かう私が言つたのは、暫く立つてからのことでした。

した。
其處には長い緣側がありました。朝日の當る暖かい緣側でした。寒山竹の梢や松の枝などが其處の下に見えました。私達はその長い緣側を行つたり來たりしました。向うには都會の瓦甍が際限なく重り合つて、高い新式の半鐘臺が高く見えてゐました。
そこに人の上つてゐるのが黑く見えたと思ふと、やがて半鐘の音が朝の寒い空氣の中へ震へるやうに聞えました。
『何番――』
その聲に應じて、待つてゐる人は、その白いカアテンの張つてある手術室の中に入つて行くのでした。赤く濁つた色をした藥と、屈曲した棒のやうな機械と、田舍から出たばかりの看護婦の白い胸當と、女の綺麗な髮の毛と、皮膚の色と、やさしい柔かい感じを持つた姿とは果して何ういふ關係があるんでせうか。何ういふ對照があるんでせうか。私は苦笑しない譯に行きませんでした。『男つて仕方がないもんですね。』かう丸髷の女が私の妻に向つて言つてゐたのを思ひ出さずには居られませんでした。
ある日のことでした。朝日の當つた暖かい緣側の隅に、眞鍮の機械が一臺出してありました。壜を持つた代診が出たり入つたりしてゐました。

私は大きな停車場で下りて、郵便局のある傍を通つて、そして其の醫者の家へと出かけて行きました。―今でもはつきりと覺えてゐます。それは正月の末の頃でした。私は十日ほどその病氣で床に就いてゐました。疼痛と、熱と不安とが私の體を亡すかと思はれる位でした。私は仰向になつて、天井を見てそして終日輾轉反側しました。

私が醫者に通ふやうになつたのは、それがやゝよくなつてからのことでした。私は襟卷をして、日當りの路を選ぶやうにして、そして其處に出かけて行きました。

醫者の宅は少し小高い丘のやうなところにありました。此方の角には下宿屋があつて、片側は大きな邸の石垣で取圍まれてありました。

石段を上ると、醫者の門があつて、そこを入ると、入口の三疊に大きな火鉢が一つ置いてある。絣の羽織を着た書生が寒さうにそれに當つてゐたりしました。

二階の梯子を上つたところに、患者の待合室があつて、そこで、私達は札の順番の來るのを待たなければなりませんでした。時には五人も六人も待たなければなりませんでした。

『これはひどい。』

硝子器に入れた液體を、すかすやうにして見て、代診は顏をしかめたり何かしました。

待合室には女もかなり多く待つてゐました。顏を赤くして恥かしさうにしてゐるやうな人達でありま

『さうですかね。』
『祕密を保つてゐることの出來る人は、何んなことをするかわかりませんからね。』
『でも、祕密と言ふことがなかつたら、つまりませんね。』
何處かで私はさういふ話を女としたことを覺えてゐます。
『祕密！　祕密！　さうだ。そこに人間の眞相が横つてゐる。』今更らしくこんなことを自分で言つて見たりしました。

『何をしたつて、人間は何うにもならないもんですね。恐れることも何もないんですね。此頃さういふことがわかつて來ました。』
酒を飲みながら、ある友達に向つて、私はこんなことを言つたこともありました。そんなことを言ふ私と、僧房の縁側に立つて夕日を見て涙を流した私と同じでせうか。同じ人間でせうか。

其時分、私は醫者にかゝつてゐました。
私は皮肉な氣分でゐました。かういふ體になつたといふよりも、かういふことが世の中にあるといふことが私にはめづらしう御座いました。

う。』

かう思つて、私は深くその奥まで入つて行つたりしました。

顏の蒼白い、頭髮を綺麗に分けた、丈の何方かと言へば小づくりな、眉の傍に黑子のある、笑ふ時にやく〳〵と愛想をする男の顏――それが常に私の眼の前にちらついて見えました。藤蔓の磨いたステッキ、それでコツコツ地をついて步いて行く音が私の頭腦に強くひゞきました。それに茶色の中折の帽子……

子供が二人ゐました。一人は男で、一人は女でした。女の方は母親の系統を帶びて、眉のあたりや眼の輪廓などがよく似てゐました。私が行くと、『叔父さん。』かう言つて、いつも私に飛びつきました。男の方の兒は何方かと言へば父親に似てゐました。弱々しい、色の白い、元氣のない……

私は何故か其男の兒を見るのが厭でした。女もそれを知つてゐました。私が行くと、『降さん、遊びに行つてお出、ね、いゝ物を上げるから。』かう言つて外に出してやるのが例でした。

何うかすると、女が店先で、客を相手に何か戲談などを言つてゐることがありました。さういふ時には、不思議にも私はじつとしては居られないやうな氣分がしました。女の夫に對しては別に不愉快な氣を起さない私も、さういふ時には、屹度女を疑ふ心が盛に起つて來るのでした。

『祕密といふことは恐ろしいことですね。』

『馬鹿を言つてる。それこそ大變だ。』

女は笑つて、

『大變なこともないけど……』

矢張笑つてゐる。

『そんなこと大丈夫よ、ちやんと準備がしてありますよ。』

こんなことを言つたりした。

私は其女の丸髷姿を多くは暗い光線の中で見ました。それは薄暗い陰氣な一間でした。二階の梯子が壁に添つてついてゐて、そこに夕日が薄く當つてゐたりしました。夕暮近い市の音は混雜な四邊に漲つてゐました。

何といふ惑溺でせう。其の女の髪の毛の一本にも私の魂と私の血と私の肉とが名殘なく通つてゐるやうな氣がしました。女の持つた曲線がすべて私にやはらかなしかし烈しい感じを起させました。

『何故、ある男がある女を愛して、それがわるいのだらう。それは女に夫があるといふ社會的制裁から來るのか。それならば、そんな薄弱な制裁はドシ〳〵破つて了へば好い。勢力の一致、勢力の平均、それより他に何も意味はないではないか。』こんなことを私が思つたのも一度や二度ではなかつた。

『しかし、それは單に社會的制裁ばかりではあるまい。……もつと根本的の苦痛な原因があるのだら

『奧さん、お變りない。』

こんなことを言つてゐながら、それとは丸で正反對の欲求を私に求めてゐたではありませんか。……秘密といふことの面白さ深さを私は始めて其處から知つたのでした。

階下では子供達の聲がしてゐました。私の妻の聲もしてゐました。やがて二階に上つて來る人の跫音がしました。

人の跫音、人の跫音。それがある時は緩く緩く一段々々上つて來るのでした。私達は其方を見ずに、一生懸命に話に耽つてゐるといふ風をしてゐました。

それは女の兒が上つて來たのでした。

『父さん。』

かう言つて私の傍にやつて來ました。私と其女とは思はず笑ひました。

其女は私の妻を、『奧さん』と言つたり『おけいさん』と言つたりしました。

『おけいさん知つてるでせうか。』

『知つてるかも知れない。』

『知りやしますまい。……知つてゐると面白いんだけども……』

女は私の眼を避けるやうにしてゐました。私が其方を見る時には、女はきまつて、その後姿を見せるやうにしてゐました。

『何時、歸つてゞらしつて？』

『昨日……』

『また入らつしやる？』

その眼はすぐかう反問しました。多勢の人のゐる中では、眼と眼との交渉より他は何うすることも出來ないやうなものでした。私達は平凡な話をしました。

『もう山は容易に出て來られなくなりましたのね』

『さうでもありませんけれど……。』

『出て來られない譯があるんださうですね。』

『そんなことはありませんよ。』

こんな上つ面の話を私達は何故しなければならないんでせう。……私が一人で書齋にゐると、こつそり私の家にやつて來て、こつそり私の膝に取附いて泣いたり何かした人ではありませんか。

其時分、私の家はある町の阪の上にありました。それが二階屋でした。その二階に私は卓を据ゑて、椅子を置いて、そして筆を執つてゐたのでした。ダリアなどが其處に挿してあつたりしました。

『秋ですな！』

私は染々とした調子で言ひました。

私達は居間の六疊の縁側の處で、臺十能を烟草盆代りにして、そして敷島を袂から出して吸ひました。梅もどきの赤い實がさびしさうに其處に見えてゐました。

『何故かうなんでせう。理窟や理想ではないんですからね。困つて了ひますね。……僕は何うしたら好いかわかならない。』何遍こんなことを私は言つたでせうか。

私の眼の前には、ある處からあるところへ行く路がはつきりと見えてゐます。ゴタ〳〵した兩側の店、退屈さうな顏をして立つてゐる巡査の顏、烟草屋の店にゐる銀杏返に結つた意氣な娘、そこから細い路に入つて行くのでした。栽込の松が見えてゐました。深い溝が其處にありました。溝の中の泥濘のやうな私の生活でした。

私は月の末にはいつも東京に歸つて行きました。……店から入つて行くと、其の女がゐるのが常でした。

大きな丸髷に結つて、蒼白い顏をして氣のなささうな顏をして其處に坐つてゐるのが常でした。

私は入つて行きました。

私は二三日前、ある寺に招かれて行きました。それは谷の上のやうなところにある寺でした。『留守番が置いてあるばかりだから、何も御馳走は出來ない。せめてお湯でもたてませう。』其處の主僧はかう言つて私を招いて呉れました。私は樋から水の澤山に來る大きな風呂場で長い間湯につかつてなりました。水の音が四邊にひゞきわたつて聞えてゐました。

私は何故かひどく昂奮してゐました。私は湯から上つて、緣側のところに行つて立つてゐました。谷には夕日がさし込んでゐました。山の峯には、赤い色をした雲が秋の夕を染々と思はせるやうに靜かにさびしくかゝつてゐました。

私は其の谷にさし込んで來てゐる夕日の中に、私の半生がすつかり織り込まれてあるやうな氣が致しました。私の眼からは涙が溢れて來ました。

『家ばかり大きな立派なものがあつても、ちやんと坐つてゐて、世話をして呉れる人がなくつては駄目ですな。』

和尙さん達はこんなことを言つて笑つてゐました。『さうですな、此處が居間ですな、此處に一人置くんですな。』こんなことをも言つてゐました。

その時ほど私は人間と人間との關係を深く思つたことはありませんでした。――私の經て來た生活と和尙さん達の經て來た生活との相違をつくづく考へました。

霜解

明日は愈々別れて行くのだ。かう思つて私はいろ〳〵なものを取片附けました。手紙を丸めて一束にしたり、いらない本といる本とを區別したり、古雜誌と古新聞とを押入の中に入れたりしました。私は圍爐裏の前に坐つて、ぽつねんとしてひとりいろ〳〵なことを考へました。

此處に來てからもうかれ是半年になります。その間の生活は、單純なものでした。山と水と寬と、——唯それだけでした。

私は何の爲めに此處に來たのでせう。かう私は飜つて考へて見ることがよく御座いました。人間も時にはかうして一人暮らして見なければならないやうな境遇に置かれることがあるものでせうか。

私は自分で自分に問をかけて見ても、それが多くは不完全な自問自答に終つて了ふものであるといふことをよく知つてゐる一人です。自問自答は空虛に向つて發した自問自答であるといふことを私はよく知つてをります。それでゐて人間は何故自問自答をよくするのでせう。

『アスカヘル。』

かういふ電報はやがて來るだらう。その黑い影は遠からず私達を襲つて來るだらう。何うすることも出來ずに、默つて、顏を見合せて戰へてゐるやうな時はやがて私達の上に遣つて來るだらう。暴風雨――その暴風雨の前に立つてゐるやうな私達だ。

こんな平凡な話を選んで私達はした。私は一日おき位には、その崖下の通を歩いて、細い巷路に入つて行つた。

薄い冬の日、寒い西風、床の間に挿してある茶の花、水仙の花、厚ぼつたい羅紗の外套、メリヤスのシャツ、通りを人の下げて通る乾鮭、三盆白と書いた砂糖袋、縁を白い毛で縫つた子供の赤い肩掛、夕暮の風に靡いてゐる注連飾――さういふ光景と、時には燃えるやうに、時には靜かに漂ふやうに、時にはまた暗い底に一歩一歩落ちて行くやうに絶えず動搖してゐる私達の心とが常に混り合ひ、縺れ合つてゐた。

ある日、私はお歳暮に男の兒に新形の可愛い帽子を下町の大通で買つて行つてやつた。と、女は今までに見たことのないやうな喜悦の色を顏にたゝへて、

『好いのを買つていたゞいたね。坊やにはこんなのは買ひたくつたツて買はれないやうな帽子だね。好いこと、ほら、ちよつと此處に來てかぶつて御覽。』

かう言つて、傍に嬉しさうにして寄つて來た男の兒にかぶせて見せて、

『好いね、よく似合ふよ。をぢさんによくお禮を仰しやい！』

男の兒は無邪氣に頭を下げて、そして私にかじりついて來た。

かう女の眼は絶えず言つてゐた。

『爲方がない。』

かう私の眼は言つた。

で、私達はその黒い影に觸れないやうな話を常に選んだ。

女は稚い頃の話などをした。

『私は小さい時から、默つて考へてゐるやうな兒でしたッて。惛氣はなかつたけれど、人づきがわるくつて爲方がなかつたさうです。知らない人なんか見ると、すぐ泣き出したり何かするんですッて……。矢張、さういふ兒でしたんですね。』

時には、無邪氣に、活動寫眞だの芝居だのの話をしたりした。

『もう、あの男はゐないんですッて。』

『あの男ッて？』

『そら、御靜覽…………』

『あゝあの男か、……何うかしたのですかね。』

『何處かのえらい軍人のお孃さんやなんかを誘拐したり何かしたもんですから、警察でやかましく言ッて、たうとうあそこにゐられなくなつたんですッて。』

それにしても何といふ飽滿であつたらう。何といふ漲り合つた心であつたらう。何といふ溺れ合つた心だつたらう。私は今までこれほど熱い女の心に逢つたことがなかつた。それは、地獄までも一緒に翔らうとする心、業火の中にも共に行かうとする心であつた。そればかりではなかつた。私自身に取つても、女の心につれて、今まで經驗しなかつた熱い心が烈しい力で漲り渡つて來た。私は其處に新しい感覺の世界に入つて行く私を見た。想像にも及ばなかつた生活に入つて行く私を見た。

長い間、口も利かずに、默つて互に顏を見てゐた。女の細い髮の毛の一本一本に、私の魂は細く戰へ悸いてゐる。女の黑い瞳の中に私の黑い瞳は動いてゐる。

私達は默つて顏を見合せた。

私達の前には黑いものがあつた。

私達はそれに觸れることを恐れた。その黑いもの〻影は絕えず私達の胸に往來した。雲のやうに、時には嵐のやうに――。

口にこそ出さないが、

『そんなことを考へるのはよしませう。』

かうお照さんは言つて、長大息を吐いた。そんなことをお互に言ふやうな間柄に私達はいつかなつてゐた。

私は漲るやうな熱い女の心を總身に受けた。中年の女の漲るやうなはりつめた愛と、羞恥とか虛飾とか禮儀とかいふものゝすつかりなくなつて了つた慾とが、洪水のやうに私に押寄せて來た。押へに押へて、何うすることも出來ないやうな心であつた。少しづつ落ちて來て、段々それが滿ち溢れて、もう何うしても外に漲り出なければ止まないやうな心であつた。また一方から見ると、さびしさに堪へ忍んで、辛うじて此處まで遣つて來たといふやうな心であつた。默つて怺へて通つて來た女の心がそこにも此處にもあつた。焦々した神經と、滿し難い思ひと、ヒステリックの心持とが、女の通つて來た荒凉とした路に到る處に落ちてゐた。

『だつて、爲方がないでせう。私だツて、女ですもの。』

お照さんはかう言つて笑つた。

從弟の持つてゐた總てのものをやがて知るやうな私であつた。今まで知らなかつたことを女の口から聞いて、改めて振返つて見るやうな人であつた。氣が附くと、私は新たに開けて來た世界に驚いたやうな心持で對してゐた。

燗德利を傍に置いて、はァと大きな長大息をついた。

その長大息は私を悲しいさびしいやうなある處に伴れて行つた。お照さんは急に眞面目になつた。もう話もしなくなつた。默つたまゝ笑ひもせずにゐる。私も默つてゐた。

長大息が靜かに…………。

外も內もしんとしてゐる。夜ももう十時を過ぎてゐる。

お照さんの生けた山茶花の白いのが光線のとゞかない薄暗い床の間に微かに見えてゐる。私は立上つた。

『何處へ行くの？』

『ちよつと便所に…………』

便所から出て來た時には、私はお照さんが其處に立つてすゝり上げてゐるのを見た。私は何も彼も忘れた。

『私がもう少し前に、一月も前に、貴方に逢つてゐれば、私はこんなに苦勞しなくつても好かつたんですね。一月の違ひ、たつた一月の違ひで、貴方も私もかういふ境遇に置かれるやうになつたんですね。一生の運がきまつて了つたんですね。』

『何をです？』
『私がね、初めて、彦也さんにお目にかゝつた時分のこと――』
『覺えてゐますとも――』
『さう、本當に………』
『え、覺えてゐますとも、あなたは、後姿ばかり見せてゐましたね。』
『さうでしたかね。』
例のアハヽハといふ笑ひ方をして、『でも、よく覺えてゐて下すつてね。私はあの時分、氣まりをわるがる方でしたから、――まだ若かつたですからね。十八――九でしたかね。あの頃にもう一度なりたい。』かう言つて、遠い昔を思ひ出すやうな風をして、『もうこんなおばアさんになつてしまつたんですものね。彦也さん！　私なんか本當に女といふものを知らずに來たやうなもんですね。』
しんみりとした調子で、
『でも、彦也さんは私の心をよく知つてゐて下さるわね。あの時分、あの時分……』かう言つて止して、『もう少しお上んなさいな。』
『もう駄目です。こんなに酔つて了つたから。』
『さう――』

『彦也さんは別かも知れない。』

眼に愛嬌をたゝへて見てゐる。

總領の男の兒は、今朝、おばァさんのところにつれて行つて置いて來た。かうお照さんは私に話した。『よう御座んすよ、たまには——かうして私のお酌で飲むのも。』

こんなことをお照さんは平氣で言つてゐた。

私は何うしても醉へないやうな氣分で、長い間酒を飲んでゐた。私の心は悶えたり苦んだりしてゐた。何うしていゝかわからないやうな心持がした。これまでにも、私はかなり女の心に觸れてゐる。女の心を知つてゐると思つてゐる。しかしその時ほど女の心の縺れを感じたことはない。後には、私は手酌で、グヒグヒ飲んだ。

ふと、お照さんは、

『彦也さん、覺えてゐますか？』

かう言つて私の顏を見ながら暫らく默つてゐる。

『何です？』

『覺えてなんかゐないでせうね。』

また見てゐる。

お照さんは、裏からこつそりと酒屋に行つた。

餉臺の上には、刺身だの、天ぷらだの、酢の物だの、いつも私の此處に來て御馳走になるものが置いてあつた。主人公のゐない室は何處となく靜かに取片附けられてあつた。机は隅の方にやられて、上に、いつも從弟の坐る座蒲團が載せてあつた。本箱はきちんと硝子戸が閉つてゐる。女の肖像の額はさびしさうにしてゐる。

餉臺の傍にお照さんは坐つてゐる。

『たまには來て下すつても好う御座んすよ。ひとりでゐるとさびしくつて爲方がないんですもの。』こんなことを言つて、『此頃は、矢張、行くんですか。』

『滅多に行きませんね。』

『たまには行く方が好う御座んすね。』

私は默つて笑つてゐる。

『たまには本當に好う御座んすよ。彦也さんのやうに家にばかり引込んでゐると、氣がつまりますからね……。けども、男ッて可笑しいものね。體さへ任せりや、あとは、何うにでもなるんですものね。』

『さうでもないですよ。』

『ぢや、兎に角、鰻屋を聞いて、その表の通りと言へば解りますね。』

『え。』

かう言つたが、『まァ好いぢやありませんか。本當に………。久し振りで來たんぢやありませんか。』

『また來ます。』

『ぢや、明日入らつしやい！　屹度ですよ、待つてゐますよ。』

私は遁れるやうにして、其處を出た。表で男の兒が遊んでゐて、『をぢちやん、をぢちやん。』かう言つて追つかけて來た。私は立つてその頭を撫でた。

『をぢちやんのとこにお出で。』

『今行かうか。』

『今日はをぢちやんが用があるから、またお出でね。』

振返つて見ると、男の兒は近所の子と石を拾つて遊んでゐた。くつきりと晴れた冬の碧い空が私の上にあつた。

『ぢや、明日入らつしやい、屹度ですよ。』

かうお照さんが言つた。それはもうお世辭ではなく命令であつた。私はその命令に從はなければならなかつた。私は夜になつてから出かけて行つた。

『右です。いゝえ、こつちから行けば左です。』
『左に行つて、それから？』
『左に行つて、少し行つて、また右に行つて、そこに鰻屋がありますね。』
『ぢや、かうですね。』
解らないので、私は其處に蹲踞んで、縁側に線を引いて『山王の通りがかうあるんでせう。さうすると、これをかう行くんですね？』
『いゝえ、さうぢやないんですよ、かうなんですよ。』と、お照さんは、南北にある山王の通を東西に線を引いた。うつむき加減になつたお照さんの髪の好い匂ひが私の鼻を衝いた。
『さうぢやない、かうでせう、山王の通は？』
『さうぢやないんですよ。』
お照さんは艶に笑つた。私の手とお照さんの手とが暫しの間其處に行つたり來たりした。
『彦也さん！　いやですよ、さうぢやないんですよ。』
後にはお照さんは轉げるやうにして笑ひ出した。幾度聞いても、同じ事を言つてゐて際限がない。私の心とお照さんの心とはかう言ふ單純な話をするのにも、絡み着いて、もつれ合つて、何うすることも出來ないやうになつてゐるのに氣が附いて、私は戰慄した。お照さんはアハヽヽハと笑つてゐる。

『まア彦也さん！』

かう言つて、座敷の障子を明けて、お照さんが出て來た。『今日は少し用があつて來たんですから、上らずに此處でお暇します。……あの――君の番地を知つてますか、貴女は。』

『まア、好いぢやありませんか。ちよつとお上んなさいよ。』

『又、その中ゆつくり來ます。今日はいそぎますから。これからすぐ行かなければならないんですから……』

『さうですか。』

つまらなさうな殘念さうな顏をして、『私、番地は知らないんですけれど、ところは知つてゐますけど…………』

『ところでも好いんです。』

『ぢや、あの………』と笑つて其處に蹲踞んで、『そらあそこに山王さまの下のところに、路があつたでせう？』

『え。』

『あそこをずつと行つて…………』

『右に行くんですか。』

ある。私は自分を忘れて走つて行つた。その電車の行くところには色街がある。明るい灯がある。明るい色彩がある。それに、二三年前よく行つた待合がある。私はその電車に追つかけるやうにして乘つた。

私は成たけお照さんの家へは行かないやうにしてゐた。私の足は度々其處に向つたけれど、いつも途中から引返して來た。ある夜などは、その前まで行つて、そッと明るい四疊半を覗いて、さびしさうに裁縫をしてゐるお照さんの姿を見て、そして寄らずに引返して來た。

私の代りに、私は妻をよく見舞に遣つた。そして妻の口からお照さんの樣子を聞いた。『彥也さん、何うして入らつしやらないんです。忙しいんですか。』などゝ言つてゐたと妻は話した。

『矢張、活動になんか行くさうですよ。』などゝ話した。

ある日、何うしても行かなければならないことが出來た。私はある人の番地を忘れて了つた。其日に行かなければならない人の番地である。『お照さんは知つてますよ。』かう妻は言つた。

私は爲方なく出かけて行つた。それは從弟が立つて行つてから二十日位經つてからのことである。私は崖下の路を通つて、細い巷路を入つて、その狹い格子戸を明けた。

うかと思ふと、默つて立つて來て、簞笥を明けて、何かさがし物をしたりしてゐる。

『車屋に賴んで來たかえ？』

かう從弟に言はれて、

『まだ、賴んで來ません。まだ遲くはありませんから。』

『でも寢て了ふといかんよ。』

『大丈夫ですよ。』

矢張さがし物をしてゐる。

私は十一時近くなつてからそこを出た。『明日はお送りすると好いんだけれど……、失禮しますから。』

かう言つて私はそこを出た。私はかなり醉つてゐた。自分の不眞面目を一方では罵りながら、一方では落ちて行くところまで落ちて行かうといふ念が熾んに燃えてゐた。不思議にも、私にはその時もう嫉妬の念が萠してゐた。お照さんが不愛想な顏をしてゐたといふことも私を焦々させた。私は別離に臨んでの夫婦の交情の好さを想像した。今夜の仲の好さを想像した。離れなければならないために起つて來た二人の愛情の復活をも想像した。私はさびしい心細い氣分で歩いてゐた。ふと、遠い所にゐる馴染の女のところに行つて見ようかと思つた。しかし、そこまで行くにはいかにしても今夜は遲い。私は崖の下のやうなところをぼつぼつ歩いてゐる。ふと見ると、電車がそのすぐ上の處を通つてゐる。―― 行として

眼はつとめて私を見ることを避けてゐる。それが私にも解る。私は從弟と別れの酒を酌んだ。從弟は心持好ささうに醉つて、久し振で、昔覺えた端唄などをうたつた。『その中、大阪の方にお出になりませんか。またあつちで一緒に飮むのも面白いですから。』などゝ言つた。

『留守は無人だから、時々來て見て下さい。』と言つたが、お照さんの方を見て、『何うも、お照がヒステリックでいけません。ぢき怒つたり泣いたり笑つたりするんですから。……少し醫師にでもかゝつて、藥でも飮んで見る方が好いのかも知れないんですよ。實は一緒に伴れて行かうかとも思つて見たんですけれど、これが一年とか二年とかなら好いですけども、三月か四月では、また歸つて來て、家を借りたり何かするのが厄介ですからな。まァ、私のゐない中、勝手な眞似でもして、暢氣に暮してゐるんですね。亭主のゐないッていふのも、女にはまた好いもんだッて言ひますからね。鬼のゐない留守の洗濯でもするんですね。』

從弟は機嫌の好い顏をして、こんなことを言つて笑つた。

私にはその夜のお照さんの素振が分明と今でも見える。碌々口も利かないで默つてゐる。いつもの笑顏を見せやうともしない。何か怒つてゐるんではないかと思はれるやうな表情をしてゐる。『お前、お酌でもしたら好いぢやないか。』から從弟に言はれて、不承不精に立つて來て、それでもお酌だけはしたが、すぐ四疊半の方に行つて、長火鉢の前に坐つてほつねんとしてゐる。額に兩手を當てたりしてゐる。さ

さびしさうな顔をしてゐたさうだ。『私も一緒につれて行つて下さい。私を一人放つて行つて、何うするんです？　私のことも考へて行つて下さい。』と言つたさうだ。

從弟の立つ前の晩、私がたづねて行くと、八疊の座敷には、旅行の準備が一杯に散らばつてゐて、新調の旅靴などが彼方此方にころがつてゐた。着物だの、洋服だの、外套だの、柳行李だの、細引だの、退屈の時に讀まうとする本だの……。從弟は行李をしめてゐた手をとゞめて、莞爾とうれしさうな顔をして私を迎へた。

『こんなのをつくつたんですがね。』

こんなことを言つて、從弟は新しく拵へた白つぽい縞羅紗の洋服を私に見せた。それに、派手なハイカラなネクタイ、旅行用の化粧道具、十通りにつかへる小さい鋏、スコッチの靴下、さういふものゝ一面に散らばつてゐる間を、男の兒はちよろちよろして、『父さん、坊には何をお土産に買つて來るの？』などゝ煩さく聞いてゐた。

『まア、こんなところですけど、一杯飮みませう。』

從弟は機嫌が好い。

お照さんはと見ると、さびしさうにして、成たけ此方を見ないやうに、その後姿ばかりを見せてゐる。丁度始めて逢つた時のやうに……。

雨は降つてゐる……葉はぬれてゐる……さびしい靜かな秋の午後だつた。たしか、其時の御馳走は五色飴か何かであつた。私は靜かに酒に醉つた。

『もう、宅で歸つてゐるでせう。此處に來たとは知らないから、飯の支度もしないで、何處を歩いてゐるなんて言つてるでせう。もうお暇しませう。』

かう言つてやがてお照さんは歸つて行つた。藍蛇の目の傘をさして、鼠がかつたコートを着し、さびしさうな後姿を此方に見せて……。

その年の十一月である。從弟は會社の用で、理事について、大阪から神戸の方へ行かなければならないことゝなつた。取調べる事が難かしいので、何うしても今年一杯はかゝる。今年中に歸れゝば好いが、大抵は正月は向うですることになるだらう。かう從弟は私の宅に來て話した。併しこれまで東京にばかりゐて旅になど出たことのない從弟は、少なからずそれを喜んでゐるやうに見えた。それに、多くの會社員の中から特に選ばれて理事につれられて行くといふことも、從弟に取つては少なからぬ名譽であつた。旅費と手當。それで新しい服の一着もつくつて、いくらか不義理の借金もかへすことが出來るなどゝ言つてゐた。

後で私は聞いたのだが、しかし、お照さんは、從弟のやうに喜びもしなかつたさうだ。わびしさうな

うにして見てゐたりした。

私が行くと、

『よう御座んすね、庭が……。かういふ處にゐれば、氣が落付きますね。本當に、ちよつと來ない中に、庭が見違へるほどよくなりましたね。』

こんなことを言つてゐた。

長押にかゝつてゐる三味線を見て、

『おしげさん、お習ひなさいな、今習つておくと、あとで何んなに慰みになるか知れませんよ。』

などと言つた。いつもに似合はず、落附いた靜かな物の言ひ方をした。胸が迫つてゐて、それで心が靜かに落ち附いてゐるといふやうな……。

不意に長押の三味線を取つて『私、子供の時分、少しの間、お師匠さんの處に通つたんですけども、もう忘れたかしら。』こんなことを言つて、長唄の鶴龜を彈き出した。成程、ところどころ忘れてゐる。中途で、『駄目ですね。すつかり忘れて了ひましたね。』三味線を傍に置いて、『伯母がゐましてね。石町にその頃ゐたんですが、女は長唄位ひけるやうにしておかなければいけないッて言つて、師匠にやつてくれたんですけど、父親がやかましいので、たうとう止して了つたんですよ。』妻に言ふともなく私に言ふともなく、お照さんは、稚い時分のことを話した。

『何だ、貴方ですか。』

お照さんは莞爾してゐる。

『何だか、今日は一人でゐると、淋しくつまらなくなつて來ましたから、こつそり出かけて來たんですよ。國ですか、向うから昨日おばァさんが來てつれて行つたんですの。お邪魔しましたね。』

『いゝえ、ちつとも知らないで失禮しました。』

私達は茶の間の長火鉢の傍で話をしてゐた。雨は靜かに降つてゐる。末の兒はひるねをしてゐる。その上の女の兒は、靜かにお照さんに體をすり寄せて行つた。

『此兒は本當におとなしいのね。』

かう言つて、お照さんは頭を撫でた。

靜かな落附いた氣分が四邊に漲つてゐた。私達は靜かに話した。妻が夕飯の御馳走の支度に勝手に行つてゐる間、私はお照さんと向ひ合つて坐つてゐた。私達は途切れ勝に話した。長い間、默つて坐つてゐたりした。

お照さんは銘仙の袷に、くすんだお召の羽織を着てゐた。かせ掛の白いのが靜かなあたりの氣分によく合つてゐた。物を言ふ眼はよく働いた。

座敷の方の緣側に行つて、硝子戶を隔てゝ、庭の植込みに雨の降りかゝつてゐるのをちつとさびしさ

と思切つて強く、二つ三つ叩いたが、急に止して、アハハハと例の神經をそゝるやうな笑ひ方をした。『面白いもんですね。』かう言つて晴々したやうな顏を私に見せた。

其夜、私は歸りながら、『不思議なものだ。新しい觸覺と新しい觸覺とが絶えず互に求めあつてゐるやうなところが我々にある。古くなると、お互に感じなくなるやうな觸覺でも、新しいものに出會すと、烈しい新しい血を湧かして來る。人間は死ぬまで新しい觸覺を互に求め合つてゐる。』こんなことを考へながら私は歩いた。母親に負はれた子供が、『父さん父さん。』などと言つてゐた。

お照さんが、私の家を訪問することは滅多にない。何うかすると、末の兒を負つて遣つて來ることがないでもないが、それも一年に二度か三度位のものだ。

雨の降つてゐる日の午後だツた。私が書齋で勉強してゐると、玄關の戸が明いて、誰れも取次に出ないのに、そのまゝ障子を明けて、襖を明けて、靜かに茶の間の方へ入つて行つた人があつた。近所の懇意な細君でも遊びに來たのかと思つて、私はそのまゝ勉強をつゞけてゐた。後には誰か來てゐるといことも忘れてゐた。

三時頃になつて、茶でも飮まうと思つて、茶の間の方に行くと、そこにお照さんがゐる。靜かにして……。

妻は強く私の脚をたゝいた。

『もつと強く、力一杯。』

『よくそんなにひどくたゝいて痛くありませんね。』

面白さうに傍で見てゐたお照さんは、急に、

『どれ、私にもたゝかせて見せて頂戴！』

かう言つて、無理に妻に代つて、私の脚をたゝかうとした。

『好いんですよ。』

かう妻は言つて笑つた。

『でも、たゝかせて見せて頂戴よ。面白いから。』

無理にお照さんは妻に代つた。私は柔かいお照さんの手を感じた。私は私の全身の血が漲るやうな不思議な感じをその輕い柔かい手から受けた。私は酒がすつかり覺めて了ふやうな氣分になつた。

二つ三つ叩いて、

『これで好いんですか。』

『もつと強くつても好いんです。』

『かう――』

醉つて私は横になつてゐた。

久し振で、末の子供と妻とをつれて、私は從弟の家へ出かけて行つた。丁度、從弟もお照さんもゐて何彼と御馳走をして吳れた。お照さんも機嫌の好い血色の好い顏をして莞爾してゐた。

私も從弟も醉つた。

私は妻に、

『少し、脚をたゝいて吳れないか。』

かう言はれた妻は、そのまゝ後に廻つて、私の脚のひつかがみの處をたゝいた。私は慢性の脚氣を病らつてから、脚がだるくつて爲方がないので、家にゐても、よく子供に足のひらに乘つて貰つたり、輕くふくら脛をたゝいて貰つたりした。

お照さんは前から知つてゐて『よく、そんなところを叩いて痛くありませんね。私なんか、ちよつと打たれても、飛び上るほど痛いのに。』などと言つてゐた。

『もう少し强く！』

腹這ひになつて、脚を二本疊の上に投げ出してゐる私はかう妻に言つた。

『かうですか。』

の、□□が何うのかうの、そんなことばかり言つてゐるんですよ。そし□、國さんのことなんか少しも構ひつけないんですよ。子供には汚い着物を着せて平氣でゐるんですよ。それに、言ふことが變つてゐますね。もう少し面白いことをして見なければ生きてゐる效がないッて口癖のやうに言つてゐるんですもの。此頃では、隣の奥さんと一緒になつて、活動寫眞だの、芝居だのによく出かけて行□□んですッてね。此間も、活動の辯士が何うの彼うのッて、それは詳しいんですよ。そら、あそこに福寶館ッて言ふのがあるでせう。あそこにゐる辯士に、何とか言つた、さうさう、御靜覽といふ名のついた好い男がゐるんですと。御靜覽を願ひますッて言ふ處に、愛嬌があるッて言ふんで、近所界隈の女は大騷ぎをしてゐるんですとさ。お照さんが言ふには、本當にあの位の好い男はちよつとない。女の大騷ぎをするのも無理はないッて、かうなんですよ。それに、面白いぢやありませんか。その御靜覽とかのゐる室の後のところに、汁粉屋があつて、その奥の間が丁度その男のゐる室の窓と向ひ合つてゐるので、女や藝者や町の娘などがそれを見るために、その汁粉屋に入るんですッて。だから、そこの障子は穴だらけなんですと。此間、お照さんも隣の奥さんと一緒に行つたなんて話してゐましたよ。餘程變ね。あれぢや困りますね。それに、話が面白いんですよ。私などでも顏を赧くするやうな話を平氣で面白がつて話してゐるんですもの。』

私は默つて聞いてゐた。

すよ。夕方、私が歸つて見ると、室も勝手元も、朝行つたまゝになつてゐて、そして、お照は四疊半の隅の壁の處に坐つて、じつとしてゐるんです。困つて了ひますよ。さうかと思ふと、着物などをそこら中にちらかして、放つたらかして置くことなどもあるんです。』

私が心配して訪ねて行くと、そんな風は少しもなく、今まで外出でなければ着たことのない銘仙に繻子の帶などをしめて、例の結ひ立ての髮を艶々しく見せて、機嫌の好い顏をしてゐる。『あんまりくよくよ考へない方がいゝですよ。餘り考へると體をこはして了ひますから。』私がかう言ふと、『いゝえ、もう考へなんかしないんですよ。死んで了つたものは仕方がありません。』などと平氣な顏をしてゐる。從弟の言つたことはあれはうそかと思はれる程だ。

その話をすると、

『もう大丈夫ですよ。すつかり心をきめて了つたんですから。もう、私、苦勞なんかするのは止しますよ。なるやうにしか何うせならないんですから。』

かう言つて笑つてゐる。

妻が私に話した。

『お照さんは、此頃丸で變つて了ひましたね。子供を亡くすと、あゝも變るもんかと思ひますね。此頃は、何處の下町のお上さんかと言ふやうな風をしてゐますね。着物が何うのかうの、帶が何うのかう

墓場では、それでも茶店で賴んで置いた何處の寺のお弟子さんかわからないやうな年の若い僧が茶色の僧衣の袖を合せて、小さい鉦を鳴して、お經を讀んだ。棺はやがて埋められた。私はお照さんの若い心が其處に徒らに埋められて行くのを見た。私はまた始めてお照さんに逢つた時分のことを眼の前に浮べてゐた。

『可哀相と思つて下さい。』その言葉は長い間私の頭に絡みついてゐた。

『子供なんかいらない！』

かう言つたお照さんの姿は、忘れようとしても忘れられなかつた。私は度々從弟の家を訪ねて行つた。『またヒステリイを起して、困るんですよ。』從弟は困つた顏をして私に言つた。

『不思議なもんですね。あれから此方、子供のことを餘り喧しく言はなくなりましたよ。國のことなど、放つて置いて、一日、隣に行つて話し込んでゐることなどが多いんですよ。そんな風になるもんですかね、女といふものは。』

從弟はかう言つて、すぐ言葉を續いで、『それに、私がそれぢや困るからツて言ふと、もう子供なんかの世話はイヤだツて言ふんです。子供なんかの世話をしたつてつまらない。それよりも、これからは私は私のことをするツてかう言ふんです。さうかと思ふと、一日、室の中で泣いてゐたりすることがあるんで

『何ァに、手を入れるほどぢやないんですよ。買つて來て、水もやらずに放つて置くから、駄目ですよ。』

『あの赤いのは何です。』

『何と言ひますかね、西洋花は西洋花ですけども名は知らない。』

『朝顏もあるんですか。』

『少しはありますけど……手がかゝるから、今年は大抵やめて了つたんです。』

『しかし、朝顏は樂みなもんでせう？』

『ちよつと、朝起きた時なんか好いもんですけどもね。』

私達はこんな話をしてゐた。しかし、お照さんの一擧一動は、私の眼から離れなかつた。

『可哀相と思つて下さい。』かう言つた先程の言葉が何遍となく私の頭に繰返された。愛憐の情が不思議なほど私の心に漲つてゐた。やつれた蒼白い顏をして默つて坐つてゐるお照さん――。

夜の明けない中から、人足が來て、小さい棺を擔いで、そして墓場へと行つた。棺が家を出る時、お照さんは玄關の格子のところまで出て來て、そして緣の薄かつた幼い兒を見送つてゐた。私と從弟と、他に親類の二三人は、棺のあとについて、朝霧の薄くかゝつた町の通を歩いたり、小さな公園に添つた道を歩いたり、晝顏の咲いてゐる露の深い草藪の傍を通つたりして、遠い遠い墓場に行つた。

八疊の一間には、月が明るくさし込んでゐた。屍はもう小さな棺に入れられて、白木の机の前には、香奠だの供物などが澤山に積んであつた。近所の懇意な人達が代る〲遣つて來てくやみを述べて行つた。隣の奧さんは、派手な着物を着て、金の指環を二つも三つもはめてゐた。大家の若い細君は、『二三日、お見えにならないから、何うしたかと思つてゐましたのに……』かう言つて、矢張眼を赤くしてゐた。子供を亡くした經驗のある細君は、『本當にお察ししますよ。いつそ自分が死んだらと思ふ位ですからね。それに、あとがいけないもんですよ。小さい着物なんか出して、そして獨りで泣いてゐましたよ。』などゝ言つてゐた。お照さんは、もう先程のやうに泣きはしないが、それでも時々眼を袖で押へてゐた。

總領の男の兒は、大勢人が來るので、面白がつて、はしやいで、遲くまで起きてゐたが、これも十時を過ぎると、ごろりと横になつたまゝ寢て了つた。『蚊に食はれるといけない。』私は妻にかう言つて、押入の中からねんねこをさがして來て、そしてそれをかけてやつた。

私と從弟とは緣側に出て話をしてゐた。風がなくつて蒸暑かつた夜も、段々更けて行くにつれて、冷りとして空氣が身に染みて來た。落ちかゝつた月には雲がかゝつて、庭にある盆栽棚の草花が暗くなつた。

『それでも、草花によく手を入れますね。』

もせずに、若い身そらを身裝も構はず、人に笑はれるのを構はないで、育てゝ來たのに……。本當に、私位可哀相な女はありませんよ。』

『まァ、爲方がないですよ。そんなにして、體を壞しても爲方がないから。』

『子供なんか、もういらない！』

かう言つて、お照さんは向うに立つて行つた。私はもう一度幼い兒の顏にかけてある白い布を取つて見た。幼い兒は眼を明いて、さゝやかな笑を顏にたゝへてゐた。

其處に區役所に死亡屆を出しに行つた從弟が歸つて來た。『いゝえ、これも壽命ですから、仕方がありませんけれど、急ですから、吃驚しました。』從弟も流石に殘念だといふ顏をしてゐた。

『もう少し早いと、何うかなつたかも知れませんでしたけれども……氣がついた時は、もう手後れでしたから……。けれども、仕方がありませんよ。死んだものを悔んだところで甲斐がないことですから。』

こんなことも言つてゐた。

其夜は、私と妻と一緒に行つて、通夜をした。それは七月の末で、もうかなり暑くなつてゐた。私は月の明るい崖下の道を妻と並びながら歩いて行つた。私は私の胸の躍るのを感じた。

『人間といふものは、何處まで暗い心を持つてゐるかわからないものだ。かうした光景が却つて離れ難ない絏れをつくつて行くとは！』かう思つた私は人間の淺猿しさを感ぜずには居られなかつた。

すや〳〵晝寢をしてゐたその兒だ。かう思ふと、私も堪らなくなつて、涙が胸にこみ上げて來た。

『怜悧な子でしたよ、彦也さん！』

お照さんはかう言つて泣いた。

『急なんですからね、本當に……。昨日まで、そんなに惡いとは思はなかつたんです。明日は治るだらうなんて言つてゐたんですよ。親ッて馬鹿なもんですね。子供の死ぬのも知らずにゐるんですよ。昨日の夕方になつて少し變だから、大急ぎで佐藤さんに來て貰ふと、これは子供によくある急性何とかいふ病氣だから注意しなけりやいけないッて言ひますから、それから大騷ぎになりましたんですよ。昨夜一晩苦しみましてね……。母ちやん、母ちやんッてね。』聲を曇らせて、『無慈悲な親だと思つたでせうよ、屹度……。彦也さん！　本當にね、私はね、國よりもこの子の方が可愛かつたんですよ。國は男ですし、末は力になるのはこればかしだと思つてゐたのに……怜悧な子でしたのに……』

母親の涙は容易に盡きようとはしなかつた。私は何う慰めてやつて好いかわからなかつた。それに、私は、これまでに、かうした感情の迸り出るやうなお照さんを見たことはなかつた。泣腫らした眼、蒼白い顏、亂れた髮、涙にぬれた袖……。私はかうした場合に際して、愈々私の心とお照さんの心との離れ難なく縺れ合つて行くのを見た。

『可哀相だと思つて下さい。彦也さん！　私なんか本當に苦勞して育てゝ來たのに、人のしたいこと

『何方へ？』
かう私が聞くと、
『髪結さん！』
かう言つて、『ちつとも入らつしやいませんね、此頃は――』
『少し忙しいもんだから、その中行きます。よろしく言つて下さい。』
振返つて見ると、丈の高い後姿と蛇目傘とに雨が細く降つてゐる。菖蒲だの芍薬だのを載せた花屋の車が、濡れたまゝその傍を通つて行つた。

二三日前から、末の女の兒が病氣で寢てゐると聞いてゐたが、自分の忙しいのについかまけて、見舞にも行かずにゐると、『お雪今朝十時半死去致候、おん知らせ申上候。』といふ端書を私は突然受取つた。私は吃驚した。お照さんの悲嘆のさまが先づ私の目先にちらついた。私は取るものも取敢へず出かけた。
お照さんは目を赤く泣き腫してゐた。『彦也さん！』かう言つたきり、跡は言葉が咽喉につかえて出ないといふやうに顏を袖で蔽ひかくした。
幼い兒は逆屛風を立廻したかげに、色の褪めたねんねこをかけて、眼を明いたまゝ死んでゐた。茶碗の飯に箸がさしてあつて、線香の煙が二筋三筋細く立迷つてゐる。此間、可愛いほんのくぼを見せて、

とだ。それに、私が歸らうとすると、外套を後からかけて呉れて、『今度來た時には、何か面白い唄を覺えて來て下さいよ。』などと言つた。アハハハと笑ふ癖があるが、その笑聲には一種男をひきつけるやうな不思議な力を持つてゐた。

私が醉つて唄をうたつたりすると、默つて、眞面目に聞いてゐる。『段々上手になつて來ますね。この頃ぢやもう昔の彦也さんぢやない。』などと言つた。

『お繁さんに、三味線を習はせなさいよ。』

かう言ふので、

『僕の細君なんか、駄目ですよ。琴でも彈いてゐる方ですからね。』

『私なら、内が唄でも覺えて來るやうなら、もう、とうの昔、清元位習ひますがね。』

かう言つて意味ありさうに私の顏を見た。

通りなどで逢ふことがあると、莞爾と遠くから笑顏を見せて遣つて來る。『今日は何方。』などと聲をかける。時には、總領の男の兒を伴れてゐることなどがある。ある雨の日に、蛇目傘をさして、丸髷の手がらをはつきり見せて、新しいつま皮の足駄を穿いて此方へと歩いて來た。

摩れ違ひながら、

──來ようとしてゐる新しい世界を想像した。『馬鹿な！　そんなことが出來るもんか、從弟を何うするんだ。そんな素振を見せるお照さんを戒めてやらなければならない身ぢやないか。』こんなことを考へた。しかし、若い青年ではない。未知の世界に向つて戰慄するやうな青年ではない。なるやうにしかならない。かういふ捨鉢な底を見きはめたやうな心持が一方にあると共に、子供を二人も持つた女の複雜した心理に對して一種の好奇心をも持つてゐた。『女が幾人男を持つたッて、自衛の道を講じて、その破綻を人に示さないやうにさへすれば──身仕舞を自分ですることが出來れば、それは道德上の問題にはならないやうなものだ。男女のことはその當事者が責任を感じさへすれば、それで差支ないものだ。その證據には、それを商賣にして、それで衣食してゐる女さへあるぢやないか。それが絕對に不道德なら、さういふ商賣をさせるやうに決して自然は人間を作らなかつたに相違ない。男女の間は男女の間で解決すべきことだ。第三者の嘴を容れる餘地のあるやうなものではない。』多くの女に觸れて來た私は、女に對してさういふ考をも持つてゐた。

從弟と私と話をしてゐる方をお照さんは絕えず見てゐた。その眼はよく動いた。いろ〳〵なことを言つて見せた。わざと私の傍に來て坐つたりした。

私が行くと、從弟が命じない前に、ずん〳〵酒の支度をした。そんなことは三四年前にはなかつたこ

相變らず髮は綺麗に結つてゐた。此頃は、カセ掛は紫絞などをしてゐた。大きい艶々した丸髷と、長い髷と、長い襟首とがいつも鮮かに見えてゐた。

乳呑子のゐる私の妻は、

『お照さん、此頃、子供が大きくなつたもんだから、おつくりばかりしてゐますね。若返つたッて言つたら喜んでゐてよ。』

など丶言つた。私は扮裝もかまはずにゐる私の妻とお照さんとを比べて考へた。お照さんが銀杏返に結つてゐる時分、私の妻は生々した鮮かな束髮に結つて、白いリボンなどをかけてゐた。私の妻は私の家に嫁いで來てから、いつも束髮にばかり結つてゐて、髮結の手を煩はしたことのないやうな女だ。私は私の趣味の――女に對する趣味の著るしく變つて來たのを感ぜずには居られなかつた。私の心は束髮から銀杏返しに移つて行つた。

其頃、私はお照さんの生々とした色彩を着けて來たのを驚くやうな心持で見てゐた。あの鈍い、ハキハキしないやうな暗いところはいつかなくなつて、その態度にも心持にも鮮かな生々した姿を見せて來た。或は――さう思ふのは、私の心がそれに引寄せられて行つた爲めかも知れないが、さういふ處が必ずあるには相違ないが、お照さんの方にも、今まで引込めて押へて居た心を段々開いて見せて來たやうなところがないでもなかつた。私は夜中などに、ふと蒲團の上に起上つて、自分の前に展開されて來る

いろんなことを大きな聲で言ふんですッて。近所に聞えても恥かしいやうなことを平氣で言ふんですッて、秀奴……秀奴のお歸りだ！ などゝ言ふんですッて。面白いものね、本當に、男の方は。』ちよつと笑つて見せて、『それから、此間は、新橋か何處かでせう。そのお馴染の女のゐる處とは何でも別な處なんですがね。そこに氣に入つたが女ゐるんですッて。何うかしてそれを口說き落したいと口癖のやうに言つてゐて、お前も一生懸命に願でも何でもかけて吳れ、その代り、口說き落したら、お召を一反買つてやるッて言ふんですッて。奥さん、言つてゐましたよ、何うか、早く口說き落して吳れゝば好いッて……。』

『隣の旦那ッて、何ういふ人です。』

話が面白いのでついつり込まれて私が訊くと、

『矢張、會社か何かに出てゐる人ですけども、田舎の家が財產家なんですッて。年？ 年はさうね、もう四十でせうね。好い男でも何でもありやしませんよ。奥さんの方が餘程勝つてゐますよ。でも、ね、矢張、男は腕さへあればね、何んな女だッて、相手にしますからね。』

ふと、チリヽンと女關の格子の鈴が鳴つたと思ふと、埃にまみれて色の褪めた脊廣を着た從弟が、さも疲れたといふやうな顏をして歸つて來た。

お照さんは立つて行つた。

『うそでせう。そんなことはないでせう。』艶な眼色に笑を含ませて、『何か、新しい唄を覺えて入らしつたでせう。』

『駄目ですよ、此頃は――』

『だッて、さう言つてゐましたもの…………綺麗な、腕のある人なんですッてね。上手なんですッてね。』

お照さんはかう言つて、神經を焦立てるやうな笑ひ方をした。私は變な氣持になつた。

『面白いでせうね。』

『何ァに、あゝいふ社會では、商賣ですからね。商品のやうなもんですからね。つまりませんよ。』

『そこが面白いんだッて言ふぢやありませんか。素人のやうに面倒臭くなくつて好いんだッて言ふぢやありませんか。隣の奥さんなぞ、よく話してゐますよ。隣の旦那さん、よくさういふことを話して聞かせるんですッて。手があつて、腕があつて、そして上手ですつてね。』

お照さんは今までに見たことがないほどにはしやいで、『そんなことを言つては、隣の旦那は奥さんを焦らすんですッて。夜なんか、遲く歸つて來て、いきなり「おい、秀奴がよろしくッて言つたぜ。」ッて、からかうなんですッて。それが面白いんですよ、男の人には、屹度――。さう言つて、女をからかつて見るのが面白いんですよ。此間なども、夜遲く戸を叩くから、わざと寢たふりをして、起きずにゐると、

お照さんは默つてゐる。

私は茶を飲んでから、

『何處かに廻つたか何だかわからないんでせう。また、來ませう。今日は失禮します。』

『いゝえ、歸つて來ますよ、何處にも廻るッて言つて行きやしませんよ。』慌てたやうに口を早くして、

『待つてゝ下さいよ。本當に歸つて來ますから。』

『でも……』

『よう御座んすよ、まア。』

『また來ます。』

私がたつて立たうとすると、

『好いぢやありませんか。たまには、私と話して行つて下すつても……』

がう言つて、私の袖を引留めるまでにするので、私は已むなく再びそこに腰を据ゑた。

菓子などを出して、

『此頃は向うは？』

『丸つきり行きませんよ。』

私が笑ひながら言ふと、

『でも、こんな可愛い子供がありますからね。』

『子供なんかつまりませんよ。そりや、可愛くないことはないですけれども、――それや病氣にでもなりや心配しますけれども、それとは違ひますからね。男の方は、女は子供があるからおとなしく家庭に生きて行かなければならないツて言ひますけども、子供なんか、私は欲しくありませんよ。子供なんかいらないから、もつと面白いことをして見たいと思ひますね。……本當につまらないんですもの。私のやうにしてゐては女として生れて來た效がないと思ひますよ。』

『誰でも同じですよ。』

爲方がないので、私は同じことを繰返して言つた。

いつか鐵瓶が白い湯氣を立てゝ蓋がカタ〳〵と響を立て出した。お照さんは、始めて氣がついたといふやうにして、茶簞笥から茶器を出して茶を淹れて、それを盆に載せて、私のゐる方に來た。

『國ちやんは？』

私はわざと話頭を改へて言つた。

『何處かそこらに遊びに行つたんでせう。』

『でも、もう子供達が大きくなつだから好いですね。』

『…………』

『さうでせうか。……世の中には、隨分面白いことをしてゐる人もあるぢやありませんか。お隣の奥さんなぞ、御亭主が働き人ですから、其處にも此處にも女があるんですッて。それを妬いてゐるだけでも面白いぢやないでせうか。……私のやうに、こんなにくすぶつて、何にも考へてゐないよりは、何んなに辛くつても私は好いと思ひますよ。それに、さういふ風だから、自然、御亭主も着物なんか拵へて呉れますしね。見てゝ羨しいやうですよ。宅でも、外で見て來た綺麗な人のおのろけでも言ふやうだと好いんですけど……。』

『人のことは何でも好く見えるものですよ。その中に入つて見れば、そんなに面白いもんでもないんですよ。』

『さうでせうか……でも、本當に私なんかつまりませんわ。』

私はぢつと私の方を見てゐるお照さんの眼を見た。其時には、私とお照さんとは一間を隔てゝ話してゐた。お照さんは四疊半の長火鉢の前に坐つて、そろ〳〵沸き出して來る鐵瓶に白い手を當てゝゐた。私は座敷の眞中に坐つてゐた。末の兒は座敷の一隅に、色の褪めたねんねこをかけて、小さな呼吸を立てゝ晝寢をしてゐた。おかつぱのほんのくぼのところが此方からそれと見えてゐた。

私はその時、始めてお照さんに逢つた時分のことを思ひ出してゐた。

ふと私は言つた。

『何故です？』

『だつて、本當につまりませんもの。』

かう言つて笑つてゐる。

すぐ言葉をついで、『でも、お繁さんなんか仕合せですね。』

『何うして？　貴方こそ仕合せぢやないですか。正雄さんは氣立はやさしいし、男振は好いし……それに、惚れ合つた仲ぢやないんですか。』

『だけど、彦也さん、男は容色なんぞ何うでも好いもんですね。女には、容色なんかより、しつかりした男らしい方が好いもんですね。男らしくなくつては、男は駄目ですよ。私に不自由な思ひばかりさせてるやうな男は駄目ですよ。』

しんみりした眞面目な調子で、

『それに、惚れ合つた仲だなんて言つたつて、駄目なもんよ。子供が二人も出來ては、そんなこと言つては居られやしませんものね。男は道樂して、女の二人や三人持つやうでなくちやつまりませんよ。毎日、同じことして、夜が明けると起きて、日が暮れると寢て、本當に私なんか生きてゐる效がないと思ひますね。』

『誰でもさうですよ。』

う思つて打消して見たが、それは徒勞であつた。

『馬鹿な！』

もう一度かう言つて見た。

久しく觸れずにゐたある物――何うかして觸れさせなければ置かないと言つたやうに物に、私はふと觸れたのだ。『馬鹿な、そんなことがあつて堪るものか。』私はかう言つて見た。矢張駄目だツた。その眼がチラ〳〵する。切れの長い、何んな複雑したことでも言はせずには置かない眼がチラ〳〵する。氣が附くと、雨が降つてゐた。レイルの上にかゝつた長い橋を私は歩いてゐた。

『彦也さんなぞは面白いことがあるでせうね。』

『何うして？』

『だツて、綺麗な女ばかり見てゐるでせう。』

『そんなことはありませんよ。』

うそばつかり！ と口には出さずに眼に言はせて、

『女なんてつまらないものですね。私なんぞ本當に男に生れて來れば好かつたと思ふことが度々ありますよ。』

『貴方も少し道樂でもすると好いんだけど……』お照さんはかう言つて笑つて、『昔はそれでもしたんでせう。……え？　私？　妬くでせうッて？　私など決して妬きやしない。男が家の方をちやんとしてゐて遊ぶなら、いくら遊んだッて構ひやしない。さうすれば、私だッて、こんな風をしてはゐませんからね、着物位出來ますからね。』

何うしてかういふ氣分が開けて來たかと思はれるやうな變遷がお照さんにあつた。私は長い間、それを見て來た。あの顏を赤くした娘時代から、默つて物をも言はなかつた新婚後一二年の時代、ヒステリツクになつて蒼い顏をしてゐた時代、つまらなさうな顏をして、子供を負つて通りを平氣で歩いてゐた時代――それは今でも鮮かな、生々した氣分になることは滅多にはないが、それでもかうした話をするやうになつたといふことは、お照さんに取つてはめづらしいことだ。

『お照さんも變つて來たね。』

私はかう妻に言つた。

氣が附くといふことは不思議なことだ。フと氣が附く。と、いろ〳〵なものが其處にも此處にも見えて來る。

私はある夜、その從弟の家から歸りながら、長い間、その眼附と素振とを考へてゐた。『馬鹿な！』か

その時、子の出來る話などをしたことを私は覺えてゐる。

『私はもうお了ひです。』

『そんなことはないでせう。』

『いゝえ、もう駄目。』

『何うして？』

『譯があるんですもの。』

お照さんはかう言つて笑つた。

『さう言へば、……』

『さうですかね。』

かう言つて從弟は笑つた。

從弟は醉ふと、唄などを唄つた。聲も節廻しも上手であつた。『人と契るなら、うすく契つて末をば遂げよ。紅葉を見よ、薄いがちるか、濃きがまづちるもので候、そぢやないか。』といふ小唄がある。それを何處で何時聞いて覺えて來たか、醉が廻ると、屹度それを唄ひ出した。

『内なぞでは、もう駄目なんですよ。今からこんな風では爲方がありませんね。』

かう言つて笑つて、傍に來て酌をしたりした。

お照さんも、もう、さういふ話がわかるやうな年齢に達してゐた。『さうですかね。』さも思ひ當つたやうな顔色をして、感心したやうに聞いてゐることなどもある。

末の兒がもう三つになつてゐた。ちよろちよろと私達の酒を飲んでゐる傍に歩いて來て、『をぢちやん。』などゝ言つてゐた。お照さんは、相變らず髮だけは綺麗に結つて、――いつも丸髷に結つて、機嫌の好い時には、眼に愛嬌を見せて、長い間、私達の酒を飲んでゐる傍に坐つてゐた。

天ぷら、刺身、酢の物などが餉臺の上に一杯に並べてあつた。從弟は陶器などに趣味を持つて、京燒の猪口だの、昔の九谷の燗徳利などを持つてゐた。本箱が二つほど並んで中に洋書だの新刊物などが一杯に詰つて入つてゐる。半床には、氣のきいた茶がけなどがかけてある。

お照さんは、花を生けることが上手で、その折々の花がいつでも綺麗に挿してある。いつか杜若が見事に生けられてあつたことがあつた。白と紫と…………。

『いつも此處に來ると、花が生かつてゐて、好い心持がする。お上手ですね。』

かう言ふと、お照さんは、

『いゝえ、駄目ですよ。』

を持つてゐるお照さん、華やかな世の中を夢に見てゐるお照さん、自暴自棄に陷つたり、子供の爲めに――單に子供の愛の爲めに思ひ返したりしてゐるお照さん、わざと汚ない着物を着て通りを歩いたりしてゐるお照さん、掴むものがないので、爲方がなしに掴み甲斐のないやうなものをつかんで苦しんでゐるお照さん、――其處には、若い女の生活が絕えず渦を卷いてゐた。さうかと言つて、一方では、睦じい二人のさまが絕えず私の眼に映つてゐた。日曜日などに、二人は子供を右左につれて、上野だの淺草だのに出かけて行つた。活動寫眞などにもよく出かけて行つた。

從弟の處に行つて、私はよく酒を御馳走になつた。

女の話がよく出た。

『勢力の平均といふことは、男女間にもあるもんですね。水平線が保たれてゐるやうに出來てゐる男女は幸福ですね。』

こんな話をよくした。

『寢取られるといふ言葉がありますが、あれは、肉體のことを言つてるんですね。深い經驗から出た言葉ですね。』

かう私が言ふと、お照さんは、

た。子供を持つた若夫婦のみじめな生活――冬の日の曇つた朝の汚れた襁褓の洗濯、加減がわるくなつて夜通し啼いてゐる子供、あとが近かつたため一人が抱かれば一人が啼くといふ忙しい煩はしい世話、それに後の子は乳が出ないので、夜中にミルクを暖めなければならないので、若い夫婦は一層困つたらしかつた。従弟は私によくそれを滴すやうにして話してきかせた。

『これが生活だね、君。』

かう言つて従弟は顔を曇らせて『僕等のやうなはたらきのないものは爲方がないよ。お照に着物を一枚買つてやることも出來ずに、あゝして下女もつかはずに働かして置くんですからな。實際、氣の毒だよ。もう少し好い亭主を持たせてやりたかつた。』

時にはまた、

『此頃ヒステリックになつて困るんですよ。一日默つて口も利かずにゐるかと思ふと、可笑しくもないのにアハハ笑つてゐたりすることがあるんだよ。昨日は一日泣かれて困つた。』

かう言つて、昨夜から上の方の子を抱いて寢るなどゝ話した。

私達は女といふものに就いて、貧しい經驗を土臺にして、いろ〳〵話し合つたりした。私は従弟を通して、お照さんのことをよく聞いた。ヒステリックな蒼白い顏をしたお照さん、フロウベルの書いたエンマのやうに滿し難い虚榮と理想とに悶えてゐるお照さん、私の妻子などに對して嫉妬と羨望と反感と

つた。寢衣のやうな汚ない着物を着てゐる時でも、髮だけはちやんとしてゐた。髮結さんがよく來てゐた。丸髷の赤い手絡がよく似合つてゐた。

『髮だけは綺麗ね。』

私の妻はいつもこんなことを言つた。

從弟の家は三間しかなかつた。親達は、總領の息子の方に行つてゐるので、新婚の二人は靜かに落附いて蜜のやうな生活を續けることが出來た。

從弟は引越しをすることが好きで、私の知つてゐるだけでも四度や五度は引越してゐる。松のある家、崖下のやうになつてゐるところの家、土手の傍の家……。中でも最初の家には私はよく訪ねて行つた。暗い、光線のよく入らないやうな家で、『雲烟過眼』といふ古い額が長押にかけてあつた。結婚してから始めて訪問した時には、お照さんは嬉しさうにそは〳〵してゐた。茶を淹れて持つて來て、丁寧に挨拶をして、それから麥酒などを出した。

『不思議な緣でしたね。』

私はそんなことを言つて、お照さんを困らしたことを覺えてゐる。

三年間に、お照さんには、子供が二人出來た。其頃では、お照さんは、身裝も構はないで働いてゐる

それでも文學が好きで、小説などをよく讀んでゐた。誰れの小説はつまらなくなつたの、誰れの書いたものは此頃巧くなつたの、中央公論の春季附錄の小説は面白かつたのと言つてはよく文學の話をした。そしてそれがかなりの鑑賞力を持つてゐるので私とは話がよく合つた。

『何うだね、今度の僕のやつは――』

などゝ私は言つて、その偏らない意見を聞いたりした。

從弟はお照さんと日比谷の大神宮で結婚式を擧げて、その歸りに、九段の富士見軒で披露會を開いた。私はちやんとその時のことを覺えてゐる。お照さんは、小豆色に竹の裾模樣の出た紋附を着て、千羽鶴の細かく出た繻珍の丸帶をしめてゐた。眼をうつむき加減にして、顏をほんのりと赤くして、フロックに黑のネクタイをした從弟と並んで立つて、そして來客に挨拶した。その時のお照さんは、さう綺麗な人とは思はれなかつた。お照さんに一番大切な眼が下を向いたまゝ睫毛に深く蔽はれてゐたからで、少し色の淺黑い顏には、何處となく薄暗い影のやうなものが靡いてゐた。私とお照さんとはやがて引合はされた。私はお照さんをちつと見たが、お照さんは私の方を見ようともしなかつた。私はその三月ほど前に、旣に今の妻と結婚してゐた。

しかし、從弟の家で逢つたお照さん――新妻としてのお照さんは、盛裝したお照さんとは比べ物にならないほど生々としてゐた。髮を結ふことが好きで、何んな時でも、髮を亂しておくやうなことはなか

嫂が戲談に、

『此頃來る子を、彥さん見たでせう。ちよつと好いだらう。私の知つてゐる人の娘ですがな。彥さん、貰ふ氣はないかね。』

時にはまた、

『本當に言つてるんだがね、戲談ぢやないんだよ。本當だよ。やさしい子だよ。』

など〻眞面目に言つた。

私はそれからも四五度は逢つた。長火鉢のところから勝手の方に立つて行くところを見たこともあつた。丈がすらりとしてゐた。丁度其時はセルの派手な縞の單衣に茶がかつた繻子の帶か何かしめてゐた。腰から下の細そりした形が何とも言はれず好かつた。

『お照さん、放つてお置きよ。私がするよ。』

此方の室にゐた嫂は、それを見て、かう聲をかけた。私はお照さんといふ名を其時初めて知つた

從弟の細君になつてからのお照さんを私はかなりよく知つてゐる。その從弟は多い從弟の中でも殊に私と仲が好かつたので、私はよくその家を訪問した。從弟は會社に出てゐて、流行の洋服に變りチョッキの縞柄を好んだり、髮を綺麗にわけて、何時も行きつけの床屋をきめて置いたりするやうな人だが、

私が妻にこんなことを言ふと、
『お照さんの足の大きいのを始めて知つて？　随分、遅いのね。十一文を穿くつて言ふぢやありませんか。』
かう妻は言つて笑つた。
妻は私をひやかす積で、『だつて、お照さんは貴方が貰ふ筈だッたんぢやないんですか。何うかする拍子で、今時分は貴方の奧樣になつてゐたかも知れませんよ。』
こんなことを言つてはよく笑つた。
私はその時分のことを頭に浮べた。私の兄の家によく遊びに來て、長火鉢のところに、銀杏返しの髷を此方に見せて坐つて、嫂と何か頻りに話してゐた。嫂は頻りに戯談を言つて、聲高く笑つてゐた。私は二度も三度もその後姿を見た。長い髱と白い襟首だけを見た。『何處の娘だらう。あんな風をしてゐるんだから、何うせ下町の娘だらう。』などと私は思つてゐた。別に氣にも留めなかつた。
少くとも一月や二月はその後姿だけを私は見てゐた。と、ある日のこと、私が兄の家から歸らうとして、縁側のところに來ると、いつでも後姿だけを見せてゐる人が、フト此方を向いて、丁度私が見てゐる眼と出會して、顔を眞赤にして、すぐ下を向いて了つた。私はその時始めて面長な、眼のきれの長い、さびしい表情を持つた綺麗な顔を見た。

暴風雨の前

私は何故あのお照さんがかう私の興味を惹くやうになつたかををり〳〵翻つて考へて見ることがある。去年――去年の春頃にはまだ決してあのお照さんがかう私の對象になつて來ようとは思はなかつた。子供が二人、男の兒に女の兒。一人をつれて一人を負つて、世帶やつれをした姿で、通りなどを歩いてゐると、寧ろ氣の毒に思つた位である。從弟ももう少し構つて遣つたら好ささうなものだなどとも思つた位だ。それは容色は好い。丈はすらりとしてゐる。私の親類の細君連の中では、一番綺麗な人だ。『お照さんは、あれでつくると中々いゝ細君になるんだが、惜しいもんだ。』などゝ私は私の妻に言つたこともある。しかし、何處かハキ〳〵しない處がある。鮮かな、生々とした處がない。澄ました顏をして、滅多に笑つたことなどもない。戯談などを言つても、それが解るのだか解らないのだか知れないと言つたやうな顏をしてゐる。『何うせ、私なんか――』かう言つて自分で自分を棄てたやうにしてゐる處もある。

『お照さんは足が大きいね。』

かう爺も言つた。

鶯の卵を孕んだり、子規の卵を孕んだりするといふことが何故か深く私の心を動かした。女性の祕密といふものを私は鶯に發見したやうな氣がした。可愛い美しい羽や毛を持つた鶯に……。あのやさしい聲をして啼く鶯に……。

中禪寺湖の縁などを通ると、此頃は、鶯と子規とが互に好い聲で啼き合つてゐる。其處にも戀がある。お前のやうな稼業をした女に似た戀がある。森の下にある草叢の中を何うかすると、子規がゴソゴソくゞつてゐることがあるさうだ。私は男と女との祕密を考へずには居られなかつた。私は子規の戀を頭に浮べた。

私は可愛い鶯に飛んで行かれた子規の戀を想像した。お前は飛んで行つた鶯ぢやないか。…………

………………。

中で、忘れられないのは鶯と子規との話だ。それはあのつたやの主人が話したのださうで、あの主人は長年小鳥を飼つてゐて、山の中の鳥のことには非常に詳しいさうだ。爺が話して言ふのには、子規の卵を鶯が育てるといふことを昔からよく言ふことだが、何うも、子規の卵を鶯が唯育てるとばかりは何うしても思はれない。何うも子規の卵を鶯が孕むに相違ない。かうつた屋の主人は言つてゐるさうだ。

『何うしても、鶯は子規の情婦のやうなもんですな、屹度。』

爺はこんなことを言つて笑つた。

その證據には、鶯の巢は大抵藪の中にあるのだが、きまつて口が横についてゐるさうだ。上から卵を落すことは何うしても出來ないやうに出來てゐるさうだ。そしてその口が漸く鶯の入ることが出來る位で、子規のやうな大きな鳥は決してその中に入ることが出來ない。それに、その巢の中にある卵がある時はうぐひすであつたり、ある時は子規であつたりするのが第一不思議だ。鶯と子規と深い關係がなければそんなことは出來ない筈だ『つた屋の主人などが鶯の雛をよく搜しに行くんですが、その巢の中に子規の雛の大きい嘴が見えると、こゝは駄目だと言つて捨てゝ行くさうです。』などと言つて爺は笑つた。

私は不思議な氣がした。

『本當かね、不思議だね。』

『本當ですとも……不思議なことがあるもんですな。』

言つた。覺えてゐるだらう。その同じ長火鉢で、家に歸つてもこれで飲んで下さいつて言つて、對のを私に呉れた、京燒のその燗德利で、私は母さんに酌をして貰ひながら飲んだ。いつもならば、お前がお座敷か何かに出てゐて、もらひをかけに母さんが電話に行つて、お前の歸つて來るのを待つてゐると、やがて遠くから小刻みに、お前だといふことのすぐわかる吾妻下駄の音が聞えて來て、ガラリと勢よく格子が明いて『待つたでせう。』と言つて、その艶な綺麗な顏を見せて呉れるのだが、いくら待つてゐたつて、もうお前はやつて來やしない。かう思ふと、私は堪らないほどさびしくなつて、酒を飲んでも飲んだやうな樂しい氣分には何うしてもなれなかつた。それでも母さんは氣の毒だと思つて、何彼と深切に言つて呉れた。嬉しかつた。何うか、今度逢つたら、よろしく言つて下さい。

　私は先月から此處に來てゐる。此處に來る前に、私は彼方此方を旅行した。雪の降り頻る山の奧の溫泉場にも行けば、ガンジキといふものを穿いて深い雪の中を歩くといふやうな北國にも行つた。旅にでも出て、せめてその傷痍を治さうと思つたのだ。さういふ傷痍を治すのには、旅が一番好いことは小說にもよく書いてある。しかし、その目的は達しられたであらうか。傷痍は治つただらうか………。

　霧降から歸つて來て、矢張、ぼつねんとして圍爐裏の傍に坐つてゐると、中禪寺に住んでゐるといふ男が訪ねて來た。もう五十以上の中老漢だ。お前と一緒に雨の日に泊つた、つた屋のすぐ隣だと言つてゐた。私はその爺と長い間話した。その爺は山の中のめづらしい話を澤山話して聞かせて呉れた。……

ゐた。『あれも、なかなか大變ですよ。今では後悔してゐますよ。前の人の子が三人もあるんですからね。その世話をするのが大變だ。母さんと一緒に向うにゐた方が何れほど仕合せであつたか知れないつて言つてゐましたよ。』かう母さんは言つてゐた。しかし、それは私に對して氣の毒に思つて言つたので、私は決してお前を不仕合せだとは思つてゐない。お前が不仕合せな譯がない。お前の今の旦那には、私もかげながら逢つて知つてゐる。年こそ取つてゐるが立派な人だ。

お前は母さんから、私の近狀を聞いて呉れたらう。『思ひ切れなくつて困るよ、母さん。』かう言つたら、母さんは、『あんなことをおつしやつて。』と言つて笑つてゐた。母さんはお前によく似てゐる。眼から眉のところにかけてそつくりだ。お前も母さんの年になつたら、すつかり母さんと同じになるだらうと思はれる。それに聲が似てゐる。かげで聞いてゐるとお前のやうな氣がする。

半日、私はお前の母さんの家で遊んだ。母さんは私が好きなのを知つてゐて、丁度好いのがあつたからつて、松魚の刺身を取つて來て、あの燗德利を銅壺の中に入れて呉れた。あの同じ長火鉢だ。お前と一緒にさし向ひになつて、よく酒を飮んだ長火鉢だ。何時だつたか、朝、起きて其處に坐つてゐると、外を蟹を賣る男が通つて行つた。『蟹！　蟹を買つて食はう。』かう私が言つて、母さんに買つて貰つて、その長火鉢で煮て食つたことがあつた。子の多い旨い蟹だつた。お前は朝湯に行つてゐたが、やがて歸つて來て、障子の傍に鏡臺を出して、そしておつくりを始めながら、『蟹を煮てるの？　旨いわねえ。』と

何遍通つた路だか知れない。お前と一緒に歩いたことも度々ある。渡しに乘つて中流に出るまで、岸に立つてお前が見送つて吳れたこともある。……しかし、もうそんなことは繰返すまい。過ぎ去つた昔だ。

その後私は邦子に逢つた。お定姐さんにも逢つた。あそこのお上は相變らずチヤホヤして、誰か好いのを一人おきめなさいなどと言つて吳れた。しかし、私はお前に言つたことがある。『お前と別れるやうなことが來れば――もうそれで私の遊びはお了ひだ。お前から受けたやうな感じを他の女から受けやうとも思はないし、また受けやうと思つたところで、容易に受けられるやうなものではない。細い長い間の空氣がこれだけの感じを作つたのだ。その長い間の空氣を作ることが大變だ。』かう言つたことがあつたのをお前も覺えてゐるだらう。

過ぎ去つた昔よ。飛んで行つた小鳥よ。

私の傷痍は容易に治らうともしなかつた。それに、その傷痍は不思議にも、手づから觸つて見て、そしてその疼痛を感じて見たいといふやうなものであつた。觸つて見て、疼痛を感ずる。そこになつかしい思ひ出がある。そこにお前がゐる。せめてはその疼痛に觸れて見たい。

私は餘程躊躇したが、しかし思ひ切つて、一度お前の母さんの家を訪ねた。お前は母さんからその話を聞いただらう。そして、少しは私のことを考へて吳れただらう。母さんはその時お前のことを話して

恥かしい。』といふあの小唄を藝者が唄つてゐる聲がする。

車の音がしたと思ふと、其の前で車夫は梶棒を下した。白いヴェールが闇にもそれと見えて艶な女の匂がする。『今晩は――。』といふ聲がする。小〆だ。よく聘んでやつたあの小〆だ……。

私は寄席のあるところを通つて土手の方へ出た。寄席ではあのお馴染の浪花節がかゝつて、赤い酸漿提灯が景氣よくぶら下つてゐた。人がぞろぞろと入つて行く。私は其處でお前が素人義太夫の若旦那に岡惚れして、其場で彌助か何かを遣ひ物にやつて、そしてその晩うれしい逢瀬を遂げたといふ話を思ひ出しながら歩いた。

『戀とか、何とか言つたつて、すぐ消えて行つて了ふんだ！』

私はこんなことを思ひながら歩いた。

川の傍で、長い間、私は立つてゐた。向う岸の灯は水に落ちて長くゆら〳〵と搖いでゐる。川の波の黒く動いてゐる中を船がギィと櫓の音を立てながら通つて行く。モーターの汽船がけたたましい音をあたりに漲らせて通つて行く。淺草の十二階あたりの電燈が明るく空を染めてゐる。

『オーイ。』

何處かで誰か呼ぶ聲がする。

かと思ふと、舳の處で篝火を赤く燃した船が靜かに下流へ下流へと下つて行く。

つねんとして瀑に對してゐた。新綠の中の瀑は綺麗だつたけれど、それも面白いとも思はなかつた。私は其處でお前に別れてからのことを繰返した。

私も赤膚のやうに爛れた傷痕を治さなければならなかつた。來なくつても好いと言ふのに、お前は長々のお禮を申上げたいからと言つて最後に私の家に遣つて來た。お前はその時始めて私の妻や子供に逢つた。妻もお前の聰明なのに感心してゐた。『しつかりしてますね。』と言つてほめた。その時は、唯笑つて機嫌好く別れたけれど、私には言ひたいことが澤山あつた。未練もあつた。しかしもう何うすることも出來ない二人の間柄ではなかつたか。

お前の家は、もうあそこには居なくなつた。母さん達もお前の近所の家に引取られた。お前はもうあそこにはゐないのだ。しかし私はあれから何度お前の住んでゐた土地に行つたらう。お前のもとの家の前を闇に何遍通つたらう。なつかしいその家にはもう他人が住んでゐる。染子とか言ふ藝者の家になつてゐる。植木鉢や何かゞよく出てゐた二階の雨戸はすつかり閉まつて、簾も何もかゝつてゐない。唯下地子の習ふ三味線の音が甲高く聞えてゐたばかりだ。

何處に行つても思出の種とならないものはない。路に立つてゐる電氣燈の明るい光にも思ひ出がある。明るく灯にかゝやいた窓、面白さうに笑ふ聲、爪彈で低く唄つてゐるお客の聲——何も彼もお前を思ひ出さぬ材料にならぬものはない。ある小さな料理店では『人に意見をしたわしが今ではわが身が

牛の親と仔とを五六疋つれた男が坂の下から上つて來た。牛は私の其處に立留つてゐるのを見て、怖いとでも思つたのか、そのまゝじつと立つて動かない。男は叱、叱と言つたが、矢張動かない。すれ違ふ時に、男は『怖くありません。大丈夫です。』かう言つて通つて行つた。

瀑見茶屋に上らうとするところの櫻は、見違へるほど大きくなつてゐた。下のところに、三間くらゐの綺麗な家なども出來てゐた。

あの日は忘れられない。雨の降つた中で、瀑の見える欄干に凭りかゝつて、三時間ほど遊んだ時のことは忘れられない。和尙さんの持つて來た瓢箪の酒を皆な飮んで了つて、茶屋で猶ほ五合ほど買つて飮んだつけ。上さんはもう忘れてはゐるが、矢張、その同じ肥つた上さんだ。

のあ時、お前に深く打込んで來てゐたお客がゐた。その朝見た新聞に、たしかそのことがちよつと出てゐたのだ。私は心にもないことを言つて、お前を酷めた。この霧降の瀑見茶屋でも、私が何かちよつと言つたので、お前がプイと立つて、向うに行つた。お前が茶屋の中に入つて、まだ色氣のない娘と何か話してゐたのは、まだ昨日のやうに思はれる。

『貴方はそれだから嫌ひ。』

かうお前はその時も言つたつけ。

私は一時間ほど其處にゐた。頼んだ鷄卵を茹でゝ上さんが持つて來るまで、私はさびしい顏をしてほ

た。女峯も男體も分明と見えてゐた。お前と一緒に行つた時の記憶は一つ一つ蘇つて來た。

お前があの時疲れて休んだ茶屋――池があつて、小さな瀧が落ちてゐる茶屋には、西洋人が來てゐた。籐椅子だの安樂椅子だのが縁側に置いてあつて、可愛い眼付をした八歳位の男の兒と六歳位の女の兒とが仲好ささうに遊んでゐた。私が通ると、大きな犬が出て來て吠えた。

蕨を買つた茶屋では、あの見覺えのある婆さんがぽつねんと圍爐裏のところに坐つてゐた。あの時、お前が小さい紙入から十錢銀貨を出してやると、『こんなに頂いては――。』と言つて押戻すやうにした婆さんだ。あの時は、雨が降つてゐた。八汐の大きな見事な枝が瀧の落ちるところにさしてあつた。かう思ふと、お前の着てゐたコオトの縞柄がすぐ私の眼の前に浮んで來た。

そこから霧降に行く間は、低い山路を上つたり下つたりするやうなところだ。歸りに、若い和尚さんが醉つて唄などをうたつたところだ。霧降で借りて來た番傘に、お前と和尚さんとが入つて、縺れるやうにして歩いて行つたのをお前は覺えてゐるだらう。その同じ路を私は一人ぽつねんとして歩いて行つた。鶺鴒がチチと啼いて、尾を振つてそして飛んで行つた。

あの時に比べると、あたりの藪だの林だのが綺麗に刈倒されたり切倒されたりしてゐた。鶯が好い聲で鳴いてゐる。杜鵑もをり〳〵、コ、ココ、コと啼いてゐる。馬に乘つた男が鼻唄をうたひながら向うから遣つて來る。草刈籠をかついだ田舍娘がひよつくり路傍から出て來る。

い間かゝつて治さなければならないのだ。それを思ふと、可哀相だ。』かう私が言つた筈だ。實際、赤腐のやうに爛れた傷痍だ。空氣に觸れただけでもすぐ刺戟されるやうな生々しい傷痍だ。

思ひ出したり、憎んだり、呪つたり、泣いたりするだらう。空を見ても、川を見ても、海を見ても、其處等を通る女を見ても、その傷痍は絕えず烈しく痛むだらう。その傷痍の爲めには、仕事も手につかず、世の中も面白からず、時には碌々飯も咽喉に通らないやうなこともあるだらう。自暴酒を飲んで、杯を疊に投りつけることなどもあるだらう。そのお客がお前と別れた當座、酒に醉つて『奴のところへ伴れて行け。』ッて呶鳴つて、家の人を困らせたさうだが、それが男心だ。その心を考へて吳れ。さういふ時には、女には單に『未練な男』『野暮な男』『怖い男』として映ずるやうだが、さういふ單純なものではない。むしろやさしくしてやらなければならない病人のやうなものだ。さういふ心持を持つて吳れ。さういふ博い心持を持つやうになつて吳れ。そこに生活を愛するといふ心持が湧いて來るのだ。お前の新しい生活が開けて來るのだ。

しかし、そんなことをいつまでお前に言つたッて仕方がない。それよりも過ぎ去つた昔の追憶に耽る方が好い。その方が好い。

昨日は霧降に出かけて行つた。せめてはお前と一緒に行つた跡でも步いて見ようと思つたからだ。私は梅屋敷から橋のかゝつてゐる荒澤を渡つて、段々小倉山の方に步いて行つた。天氣はよく晴れてゐる

了ふお前ではあるまい。

何時だッたか、お前がお客のために困つてゐたことがあつた。十分の愛をお前が與へないと言つて、お前を追廻してゐたお客があつた。短刀を持つたり、ピストルを持つたりして、夜、お前の家の周圍をうろうろしてゐるので、お前はお座敷にも出られず困つてゐたことがあつた。お前はそのお客の心持をかなりよく知つてゐて、氣の毒だと言つて一面では同情してゐた。『しかし、私は私ですから、イヤなものを何うすることも出來ませんから、仕方がありませんわね。』かう言つてゐた。其處だ。『私は私ですから。』そこから生活を愛する心が出て來るのだ。

しかし男の心といふことも考へて呉れ。お前などは男の心といふものに、隨分度々出會して知つてゐるだらう。女の方に偏つて躓いて行く心――そのお客がお前とわかれることが出來ないで、泣いたり喚いたり、威嚇したりした心だ。私にはよくその客の心持がわかる。そのお客はお前と別れる位なら生きてゐないと言つて、お前の前でアヒ酸を飲まうとしたさうだが、それは單にお前を嚇かす積ばかりではない。心からさう思つてゐるのだ。それが男心だ。

『男ッて、そんなもんですかね。他に女がゐないぢやなし――』かうお前がその時言つたが、私はその時何と言つた。お前は覺えてゐるだらう。『男心ッて言ふものは、そんなものぢやないよ。そのお客だッて、これから、お前を忘れるために、お前から受けた生々しい、赤腐のやうに爛れてゐる傷痍を、長

の運命を齎して來てゐる。だから、何うか覺えてゐて呉れ。お前と私とはいつ別れるか知れない。明日にも別れるかも知れない。別れないまでも、今夜にも二人の何方かが死んで了ふかも知れない。しかし何うか覺えてゐて呉れ。生活を愛するといふ心を――。何んな境遇にゐても、その生活を愛するといふ心を、いゝか、解つたね。』かう言つた時、涙は私の眼からぼろぼろ落ちた。お前も矢張涙をこぼしてゐた。

『八十までも生きてゐて下さい。』

その時、お前はかう言つたぢやないか。

私はお前には何もしてやらない。お客としてしてやらなければならない何事をもしてやらない。着物も袷を一枚こしらへてやつた位にとゞまつてゐる。物質では何うすることも出來ないやうな私だ。しかし、『生活を愛する心』さういふことを教へてやつた私として長く私を覺えてゐて呉れ。

『そんな水臭い貴方は嫌ひ。』

かうお前はよく言つた。水臭いんぢやない。生活を愛するからだ。お前がお前の生活を愛するやうに私が私の生活を愛するからだ。今度、お前が私から別れて行くに就いても、私が私の生活を愛さなかつたら、何うだらう？　私が私の身の亡びるのをも問はずに、お前の跡を追つて行つたら、何うだらう？

生活を愛するが爲めに、戀愛を棄てゝ行く心持――それを單に水臭いなどゝ言つて、簡單に解釋して

が、しかし、あの時ほどお前の心からの言葉を聞いたことはない。『さうだとも、戀愛などよりも生活の方が先だ。金がなくつては、なんだつて駄目だ。……お前が生活の爲めに働いてゐるのを私はえらいと思つてゐる。』私はかう言つた。何故か、私の眼からその時涙が出さうになつてゐた。私の心は激してゐた。

『金がないのが分つて來たから切れるやうにしかけるんだらうツて、よく言はれますけれど……金がなくつては何うすることも出來ないぢやありませんか。私達は何うして食つて行くんです――』かう言つたお前の眼からも涙が出かゝつてゐた。

實際、戀愛よりも生活だ。それは『死よりも強し』と言はれる位だから、戀愛のために生活を亡して了ふやうな人はよくある。しかしさういふ場合にも、生活は矢張働いてゐるに相違ない。戀愛ばかりで身を亡して了ふやうな場合は殆ど稀だ。絶無と言つても好い位だ。

生活を愛する心――さういふ心がお前には十分に働いてゐる。其處が嬉しかつた。其處にまことの泉が流れてゐるのを發見して私は嬉しかつた。其時、私は言つた。『何うかそれだけは覺えてゐて呉れ。私と三年なり四年なり、かうやつて一緒にゐたのも緣だ。何かの緣だ。あの狹い二階の一間にお前は上つて行く。私は出て行く。其處でばつたり逢つて、何とか思はなければそのまゝ知らずにお互に濟んで了ふんだ。此の世の中にお前といふものがあるか、私といふものがあるか、お互ひに知らずにすんで了つたのだ。唯事ではない。唯事だとは思はれない。その兩方から合つて行つた空氣が私とお前とに何等か

言つて、燗をつけて持つて來て吳れた。お前はよく氣がついた。

お前は今頃は一家の細君として、いろいろな家庭の世話を燒いてゐるだらう。家庭といふものは、外にゐて想像したやうなものではないといふことももう分つたらう。それに、男といふものが、夫としてはつまらないものだといふこともわかつて來たらう。辛いこともある代りに面白いこともある以前の生活と、辛いこともない代りに面白いこともない今の生活と、そこに意味のある對照をも認めることが出來るだらう。男が女房子を持ちながら道樂に身を持崩すといふ氣分も段々その中には分つて來るだらう。この間、此處に來る前に、ちよつと彼處の家に寄つたら、あそこのお上が、『奴さん、父さんに大變に氣に入つてるんですツてね。』こんな話をしてゐた。お前は聰明だ。戀を唯一の寶とする女に取つては、餘りに聰明すぎるほどお前は聰明だ。父さんばかりではあるまい。お前が氣に入らないやうな人間は何處にもあるまい。

しかし、お前にはまことがある。そこに私は惚れたのだ。お前はさういふ社會に育つた人に似合はずうそを言はない。そこを私は好いと思つてゐる。お前の關係した男の話をお前はよく私に話してきかせたが、別れるにも逢ふにも決して無理なことをしてゐない。わるく思つたり思はれたりしないやうな別れ方をいつもお前はしてゐる。そこにお前が本當の戀の出來ない理由がある。

お前とお前の家の二階で話した時のことをお前はまだ忘れないだらう。あの時は酒にも醉つてゐた

をして勝手の方に行く頃には、婆やはもう頬冠りをして、庭で草などを取つてゐるのが例だつた。私達の起きるのはいつでも九時過で日はもう高くなつてゐた。

婆やはお前の爲めに、鏡臺や毛筋や金盥などを自分の家から持つて來て貸して呉れた。道具類は何でもないものはないこの寺だが、それでも、女に必要なものは一つもなかつたのだ。お前はよく中の間の庭に面した處で、鏡臺を立てゝ、朝のお化粧をした。其時庭には、八汐の花が赤く見事に咲いてゐた。婆やがめづらしさうにして、お前の化粧するのを見てゐたことがあつたつけ。さも〳〵感心したやうに――

『お上手ですね。……丸で、はあ、見違へるやうになるだね。』

こんなことも言つたつけ。

お前は派手な柄の銘仙の不斷著を着て、黑繻子の丸帶か何かを緊めて、圍爐裏の傍に來て、そしてその綺麗になつた顏を惜し氣もなく私に見せた。そして、旨さうに煙管に烟草をつめて吸つた……。薄紫の烟が、すうとお前の顏を掠めて通る……。

朝飯の膳がまた私達を樂ませた。葱の汁のにほひ、玉子、湯葉――松皮湯葉のあげたのをお前は喜んで食つた。それから私が少し深酒をしやうとすると、お前はいつでもきまつてとめた。お前は德利を向うにかくして了ふのが例だつた。その癖さびしさうな顏を私がしてゐると、『一杯上げませうか。』などと

ゐるだけの世話はする。しかし、何んな名妓でも末路は皆な悲慘だ。いゝ加減のところで滿足して身をかためなければいけない。さうする方が好い。』さうすると、お前は、水臭いと言つてよく怒つた。『何故女房子も捨てるつて言つて下さらない。そんな水臭いあなたは嫌ひだ。』かうお前はいつも言つた。忘れやしまい…………

私は……さびしい…………。

お前はその時、眞面目な顏で言つた『本當に聞いて下さい、一生のお願ひですから。』かう言つてお前は話した。その時の顏と眼と言葉とは、私には一生忘れることは出來ない。

婆やと私とは、長い間、緣側の處で話をした。婆やにも矢張悲しいことがあつた。アメリカに行つてゐた長男があつちで病死して、この春の二月に骨になつて歸つて來た。母親のその子の死を語るほど悲慘なことはないと私は思つた。しかしそれよりも行つて了つたお前……もうこれから一生遇ふことが出來るか出來ないかわからないお前……逢つても知らん顏をしなければならないお前……私は子を失つた母親の悲しみとお前を失つた私の悲しみとを比べて考へて見ない譯には行かなかつた。

お前は婆やと懇意にしたつけ。『面白い婆さんね。』かうお前はよく言つたつけ。お前と私と奥の室で寢てると、婆やは遠慮して、遲くまで雨戶を半分閉めて置いて呉れたつけ。鐵瓶のかゝつた火鉢を隣の間に置いたまゝいつまでもソッとして置いて呉れたつけ。お前が赤い派手な長襦袢のまゝで眠むさうな顏

るあの人なつこい顔、言葉、調子、――私はその時を思ひ出さずにはゐられなかつた。

『また御一緒かね。』

かう婆やは笑つて聞いた。

『さうかね、それはまあ、お一人ぢやさびしかんべ。』

かう言つて、私に同情して呉れた。私がいろいろ話して聞かせると、

『さうかね、それぢや、もういゝ御亭主さんな出來て……』

私は胸が迫るのを覺えずにはゐられなかつた。『お前は何うせ、僕と一緒にはなられないのだ。僕には女房もある。子供もある。そればかりではない。僕のやうな中年者と一緒になつたつて、到底、圓滿に行く筈のものぢやない。不幸福にきまつてゐる。だから、今の中これはと思つた人があつたら、きめて了ふが好い。さういふ時には、僕には未練はない。』よくかう私がお前に言つたことを私は思ひ出した。たまらなく、さびしく悲しくなつて來た。

お前、お前と呼捨てにするのを許して呉れ。もう一度だけ、この手紙の中にだけ、昔のやうにお前と呼ばせてくれ。お前と言はなくつては何うしても私の本當の心持が出て來ない。立派な亭主のあるお前に向つて呼捨てにしてはすまないが、此の手紙の中にだけもう一度昔のやうにお前と呼ばせて呉れ。

お前によくさういふことを言つた。『一生、かういふ商賣をしてゐる氣なら好い。それなら、私の出來

た。それでもう澤山だ。かうも思つた。しかし、何うしてかうお前が私に堅く纏つてゐるんだらう。

『何だかきまりがわるいやうね、お寺では。』

『何あに構やしない。』

こんなことを私達はよく言つたつけ。

あの世話をして呉れた婆や――あれに、昨日ふつと出會した。そら、梅屋敷、霧降に行く途中にある家、お前と私とわかい綺麗な和尙さんと三人で、雨のふる日に出かけて行つてビールだのサイダだのを飮んで遊んだ家、あそこはその時分はそんなことをしてはゐなかつたが、今では有馬溫泉などと言つて、赤い湯花を据風呂の中に入れて、半分旅館半分料理屋といふやうなことをしてゐる。電話さへかけてやれば何んな料理でもすぐ町から來る。藝者もすぐやつて來る。『好いところを一人呼びませうか。』などと上さんが笑つて言つてゐた。不圖、見ると、あの婆やが知らん顏をして、手拭をかぶつて、庭掃除をしてゐるぢやないか。しかも、私のゐる室のすぐ前の處を掃除してゐるぢやないか。

『ばあやー。』

私は思はず呼びかけた。

私といふことがすぐ婆やにわかつたらしかつた。

『まあ、おなつかしい。』かう言つて、掃除をやめて、やがて緣側の處に遣つて來た。お前も知つてゐ

い襟足とを見せてゐる。庭には草が茂つてゐる。向うに山が見えて水の音が下で鳴つてゐる。小鳥が樂しさうに囀つてゐる。私はぢつとお前の後姿を圍爐裏のところで見てゐた。後々までも私はそれを思ひ出すのが好きだ。

荒れ果てた寺——寺と言つても本堂があつたり墓地があつたりする普通の寺ではなかつた。大きな厨子に包まれた如來樣や本尊さまなどがなかつたなら、普通の人家と少しも違ふところがないやうな寺だつた。三年も四年も人が住んだことがないと言ふので、何うかと思つたが、それでも私達は遣つて來たのだつた。

『ゐられないことはないわね。』

かうお前は圍爐裏の傍に來て言つた。

『却つて好いかも知れないわ。』

かうも言つた。

私達は喧しい旅籠屋などにゐるよりも、何んなに靜かで好いかしれないと思つた。一週間——さうだ、お前が漸く自前になつたばかりの時だつた。『一週間ばかり何處かで遊んで來ませうよ。ね、お金があるわ、此處に五十圓あるわ。』かう言つて、私と二人で此處に遣つて來た。

思ひ出しても仕方がない。思ひ出すまい。幾度もかう私は思つた。私達は長い間爲たいことをして來

鶯に

（ある男の手紙）

………………もう一度お前と呼ばせて呉れ。此處からお前にこの手紙を上げるについて、先づ思ひ出すのは、その時だ。その時、お前は黒の鶉縮緬の羽織を着て、髪を銀杏返に結つてゐた。焦茶色の小さい蝙蝠傘を持つてゐた。

荒れた寺の門の中に入ると、お前も流石にびつくりしたといふ風に、

『まあ、ひどいことね。』

かう言つて、ぐちやぐちやした路を拾ふやうに歩いた。それをお前は忘れはすまい。寺は其時と少しも變つてはゐはせん。あの通りだ。お前と一緒に向ひ合つて茶を飲んだ圍爐裏で、私は矢張茶を飲んだり飯を食つたりしてゐる。

何んなにまああの時は幸福だつたらう。お前は緣側の踏石のところに腰をかけて、此方に長い髱と白

と言つても好い位だ。けれど、そんなことは私には問題ではない。私に取つては、その女は絶えず生きて動いてゐる。その女の髮は艶々としていつも黑く見えてゐる――。

私は今日もその女の柔かな姿を頭に思ひ浮べながら、いつもの低い坂を靜かに登つて行つた。

こで逢つた田舍の婆、椿の樹の傍で網をつくろつてゐた年取つた漁師、鼻を垂した子を負つてゐる子守娘、それが皆はつきり眼の前に見えてゐる。何故だらう？　私はその三里の路を絶えずその女を思ひながら歩いて行つた。

賑やかな町、毎日、私の通つて行く町の右側だ。雜誌屋があつたり、果物屋があつたり、砂糖屋があつたりする處だ。塗物屋の若い上さんの丸髷の手絡がいつも私の眼につく通りだ。

その通りでも、私はよくその遠い山の中の黑い眼の女を思ひ出してゐた。

何うなつて行く生活だらう。この六七年の間にも、私の知つてゐる人は幾人死んで亡びて行つたか解らない。幾何の悲哀、幾何の涙が人の袖の上に灑がれたかわからない。私はまた私で、いろいろな心の變遷に逢つて、自分でも自分の心持の變りやうの劇しいのに驚いてゐる位である。女は女に重なり合つて私の眼の前に見えてゐる……。熱い心は熱い心と縺れ合つて私の前を通つてゐる。……笑つたり泣いたりしてゐる自分の姿が其處にも此處にも見える。

センチメンタルな空想だ。しかし、私は今だにその女に逢ふ機會のあるのを待つてゐる。『眞面目な心持で待つてゐる。眞劍で待つてゐる。私のやうなものはナ――』かう言つてにつこり笑ふその女をいつか再び見ることが出來ると思つてゐる。

そんな空想は實現されたためしはない。かう人は言つて笑ふかも知れない。寧ろ言ふにきまつてゐる

暗くなつてから、私は湯殿に行つた。小さな風呂桶には白い湯氣が立つて湯が一杯に漲るやうにわいてゐた。棚の上に置いてあるランプの光線は、靜かに落着いた感じを四邊に漂はせてゐた。私は手づから傍にある桶の水をうめて、そして風呂の中に入つた。湯がザアとこぼれた。燒けて熱してゐた鐵砲はじつといふ音を立てた。何處か遠く離れた室で靜かに三味線が聞えてゐた。

私はその夜ほど遠く離れた山の中の女を思つたことはなかつた。何たるセンチメンタルな心の狀態だらう。かう思ひながらも、私は湯上りのほつとした暖かい體を火燵に寄せながら、その黑い眼やら濃い髮やら、白い肌やらを歷々と眼の前に浮べてゐた。

女中が入つて來て、床を敷いて、『おやすみなさいまし！』と言つて、靜かに障子を明けて出て行くのを私は見てゐた。

廊下を歩いて行く輕い足音が續いて聞えた。外では海が凄じく鳴つてゐた。

私の眼は時々海岸に沿つた路を見てゐた。

其處を私は歩いてゐた。椿の赤い花が一杯に咲いてゐたり、汐入川が靜かに流れ込んでゐたりした。上つたり下つたりする三里の道だ。春先の暖かい日影に波が光つて、すぐ前に大きな黑い島が見えてゐた。

何年經つてゐたか、もう私は忘れてゐる。……しかしその路ははつきり今も眼の前に見えてゐる。そ

に臨んだ室も、明り取りに處々硝子をはめた雨戸ですつかり閉められて、一間の中は何となく陰氣で薄暗かつた。女中はやがて櫓を運んで來て、火燵をこしらへて吳れて、

『寒う御座んすから。』

かう言つて蒲團をかけて吳れた。

私は火燵に當りながら、ひとり靜かにいろいろなことを思ひめぐらしてゐた。風が凄じく松を鳴らして、一間先も見えないほど雪の降頻つてゐるのが明り取りの硝子窓から見える。波の音は高く聞える。靜かな、薄暗い一間の空氣は、私をしてそのまゝ深い沈思に耽らしむるに適してゐた。私はいつかその女のことを思ひ出してゐた。……長い廊下に輕い足音を立てさせて一歩一歩此方に近づいてゐるのはその女ではないか? といふやうな柔かな靜かな心持になつてゐた。その女中は靜かに障子を明けた。

その夜は風呂の鐵砲が壞れたとかで、夜になるまで私は湯に入ることが出來なかつた。その詫を女中は度々言ひに來た。女中は火燵板の上に膳を据ゑて、古風な籠行燈を傍に置いて、そして飯の給仕をした。行燈には誰が悪戯をしたのか、『……行燈に殘せし針のあと。』といふあの古い小唄が書いてあつた。私はいろいろな話をした。女中はつゝましやかに、小聲で答へながら絕えず莞爾してゐた。私はその遠い昔の女が女中と私との間に立つて笑つてゐるやうな氣がした。『私のやうなものはな。』かう言つて私の顏を見てゐるやうな氣がした。

何か二言三言言つたと思ふと、二人の手はいつか堅く握り合はされてゐた。女の延した白い腕が長く見えてゐた。

やがて男は庭の小さな折戸を押して靜かに外に出て行つた。女は雨戸に凭りかゝつて、それの見えなくなるまで見送つてゐたが、そのまゝ家の中に入つて行つた。男の歸つて行つたあとの曉をこれから靜かに眠らうとするのだらう。私は一枚明いたまゝになつてゐる雨戸を見ながら、遠い女のことを考へてゐた。

旅籠屋の庭の石燈籠につゞいて、海に近い綺麗な一間が見えた。松の鳴る砂山を向うに出ると、碧い海の上には、大きな鼠色の島が横つてゐた。

『佐渡だ！』

私はかう言つた。

旅館の長い廊下には綺麗なお酌と若い藝者とが客に伴れられて來てゐた。三味線の音が其處にも此處にも聞えてゐる。――私は海に近い小さな停車場で汽車を下りて、なにがしホテルと書いた門を入つて、松の鳴る長い坂を登つてそして其處に來た。

私は女中に賴んで、特に隣に客のゐないやうな室を選んで貰つた。それは冬で、今まで晴れてゐた空がすぐ雪になつて了ふといふやうな日であつた。夏ならば、さぞ眺望が好いだらうと思はれるやうな海

何うかすると、午前など、女は鏡臺を座敷の眞中に持ち出して、一生懸命に髪を結つてゐることなどもあつた。それはきまつて暖かい晴れた日で、障子が大抵明け放されてあつた。……白い腕が長く延びて、庇髪のふくらみ加減を一生懸命に女は見てゐる……。花と綠葉とが私の硝子窓に明るく映る。

髪が出來て了ふと、女は一閑張の机の角に斜に品をして坐つて、巻紙を片手に取つて、そして手紙を書き出した。長い長い、いくら書いても書き盡されないやうな長い手紙だ。

私はそれを見ながら、遠い女を絶えず頭に浮べてゐた。遠い女と手紙を書いてゐる女とが私の眼の前を行つたり來たりする……。二人の女が重なり合つて見える……。

その硝子窓はある朝小さな光景を私に見せた。それは夏の朝であつた。朝顔の咲いたのが深い朝霧の中に仄かに見えてゐた。私は早く起きて卓に向つてゐた。

向うの家の雨戸――手水鉢の置いてある方の雨戸が一枚すつと靜かに明いた。と思ふと派手な模様の長襦袢を着たまゝの姿で、眠むさうな眼付をして、娘は男の駒下駄を持つて來てそこに並べた。

頭はハイカラに分けた、色の白い男が、ステッキを持つてやがて續いて出て來た。

女は雨戸に凭りかゝつて、疲れたやうな青白い顏を此方に見せてゐた。髪の亂れたのを指でかき上げたりなどしてゐた。

『私のやうなものはナ……何も出來まへんからな！』

其女は笑つてかう言つてゐる……。

硝子窓――二階の硝子窓だ。

桃だの、櫻だの、椿だのチラチラ映る二階の硝子窓だ。その窓の下で、私はよくその女のことを考へた。晴れた日には、朝日が當つたり、白い雲が映つたり、早く掠めて飛んで行く鳥の翼が映つたりした。その前には、菜の青々とした畠が見えて、物干竿には女のキャラコの白足袋が干してあつた。畠を隔てゝ四目垣が見え、山吹の綺麗に咲いてゐるのが見え、ぴつしやりと閉つた障子が見えた。そこには晩春の雨がザンザン降つてゐる。『もうこれで今年の花もおしまひだ！』かう誰かが言つてゐる

私は椅子に腰をかけて、卓に身を凭せて、そしてざつとその降り頻る晩春の雨を見てゐる。花が泣いたやうに濕れて、緑葉がざわざわと風で動いてゐる。ふと、前の家の障子が明いて、其處から娘が出て來た。背の高い、頬の豐かな、肌の綺麗な女だ……。

女は厠に行つたが暫くして其處から出て來た。手水鉢で手を洗ひながら、ぢつと降頻る雨を見てゐたが、そのまゝ障子を明けて一室の中に入つて行つた。閉めたあとの障子はさびしく白く雨の中に見えてゐた。

何も知らない細君は、其時、かう言つて、その時計を手に取つて見た。

その時計は十二三年も私と一緒にゐた。戰爭にも行つた。旅にも行つた。女を訪ねる時刻を私はよくそれで見た。床の下に置いたのを探つて、

『あゝ、もう十時だ、歸らなくつてはいかん。』とか、『もう十一時だ、車で行つても電車に間に合はない。仕方がない、泊つてゆくさ！』とか言つた。小さな亂れ箱の中に女の櫛と懷鏡と一緒に入つてゐることもあれば、黑蠟色の茶湯臺の上に敷島などと並んで置かれてあることもあつた。かと思ふと、毛氈の敷かれた机の上に蓋を明けたまゝ三日も四日も載せられてあることもあつた。

『この鎖も隨分古いわね。』

などとある女は言つた。

『一つ新しいのをお買ひなさいよ。』

かうある他の女は言つた。

『でも、記念物だから。』私はいつでもさう言つて、矢張、その時計を帶に卷きつけてゐた。その時計のかげにはその女がゐた。

その時計の蓋の裏の煌々するところを見詰めてゐると、女の顏が分明と眼の前に浮び出して來た。

しかし不思議だね。それが生涯僕について廻つてるんだから――』
『貴方、屹度執念深いわね……』
女は笑ひながら言つた。
『いや、執念深いッて言ふのとは違ふよ。……その證據には、他に長い間關係した女があつても、さういつ迄僕の體の中に殘つて生きてゐるものは少いから。』
『何處か氣の合ふところがあつたのね。』
私は默つてその女のことを考へてゐた。汽車は谷川に添つた崖のやうな高いところを駛つてゐた。
その當座、私はその女のことばかり考へてゐた。
金を貯めて、そして、もう一度是非行つて見よう。かう思つて私は働いた。新橋を夜の急行でたてば明日の正午頃には逢へる。ふいと出かけて行つたら、さぞ喫驚するだらう。喜んで呉れるだらう。私はそんなことばかり考へてゐた。
旅籠屋に預けて來た時計は、此方から爲替で金を送ると、すぐ屆けて來た。小さなボール箱の中に綿で動かないやう、丁寧に包んであつて、表には拙い手蹟で、此方の名宛が書いてあつた。時計の鎖がチヤラチヤラした。
『よくそれでもなくなりませんでしたね。』

女は笑つた。

山と山との間を全速力を出して駛つてゐた汽車は、段々遲く遲くなつて、次第にその小さい停車場に近づいて行つた。山には雲がかゝつて、碧い谷川の水が帶のやうに流れてゐた。私は車窓から顏を出してゐた。

停車場の向うには矢張りその大和障子が見えて居た。しかしそこにゐる車掌はもうその若い車掌ではなかつた。一人か二人乘客が下りて、そしてすぐ汽車は出た。

上りの來るのを待ちながら、女のさびしさうに歸つて行くのを私の見送つたプラットホームは、依然として昔の儘であつた。そこには午後の日影が明るく當つてゐた。

女が鞄を落した丘の道には、子供が二三人遊んでゐた。向うから荷を擔いだ行商らしい男が急いで登つて來た。で、山も川も忽ちにして過ぎて行つた。

『でも、そんなにいつまでも思つてゐるもんですかね。』

元の席に私の歸つて來るのを待つて女は訊いた。

『別だね、それぱかりは――。自分にも不思議に思はれる位なんだから。』

『女は忘れて了つてゐるわね、もう……』

『さうだらう、もう忘れてゐるだらう。僕が今行つて逢つたッて、さうでしたね位のものだらう。……

空腹と窮屈な場所と、人の旨さうに吸つてゐる煙草の煙と、女の顏と辛かつた別れとの一緒に漲つて行づたやうな旅だ。

その停車場を私はその後一度通つた。

年月は最早かなり隔つてゐる。少くとも五六年は過ぎ去つてゐた。その時私はある女と一緒に二等室にゐた。それは髱の長く出た襟足の白い女だつた。私は高貴織の羽織を來て、中折帽をかぶつて輕く夏外套を引つかけてゐた。秋の初めで、まだ、少し暑かつたがそれでも女はもう袷を着てゐた。

車室には、日影が左から差込んで來てゐる。汽車の中に、仲賣の店があつて、そこから林檎だの水蜜桃だのをボウイが買つて來て呉れた。

女はさも咽喉が乾いたといふやうに旨さうにして水蜜桃の汁を吸つた。

『何うしたでせう？　其女は？』

かう女は訊いた。

『何うしたかわかりやしない。』

『もう、ゐませんね。』

『ゐやしないさ、しかし、姉がゐる筈だから、さがせば分らんことはないね。』

『お搜しなさいよ。』

向う側から見ると、女は改札所の柵のところに身を凭せかけて、白い顔を此方に見せていつまでもいつまでも立つてゐた。

ゴォと音がして下りが先きに入つて來た。

女は笑ひながら輕く首を下げた。私も挨拶した。私は別れの情を此時ほど深く強く感じたことはない。女のさびしさうに歸つて行くのが此方から長い間見えてゐた。背の高い姿が麥の青い畠の中に動いて行く光景は……いつまでも……いつまでも……私の生きてゐる内はいつまでも……。

その停車場から東京まで。それも私に取つては忘れられない旅だ。

名古屋の停車場で、私は空腹をかゝへて、三時間ほど待つた。そしてその揚句は、長い〳〵珠數つなぎを餘儀なくされて、三十分近くも重い鞄を抱へて立つてゐた。

西鶴の『置土產』の中に、『物參りの精進を打ちやぶりて、もめん寢道具に佗びながら、太夫に逢ふ心地して又下向にもたはふれ、お初尾ののこりを有切に取らせ、山崎より舟ちんなくてひろひわらぢ、步行路、中食なしにかへりぬ。』かう書いてあるが、私はそれを何遍汽車の中で思ひ出したか知れなかつた。

三等の狹い腰掛に押附けられて、眠るにも眠られず、起きるにも起きられず、冷めたい硝子に顏を寄せかけて、そして恍惚と長い間を旅して行つた。

笑ひながら女が言つた。

『好いよ、好いよ。持たうか。』

『ようおます。』

かう言つて鞄を抱へながら女は猶丘の細い道を歩いて來た。私達の間は一間位離れてゐた。

停車場前の大和障子の家の前には、白粉を塗つた女が立つて、笑を含んで此方を見てゐた。停車場に入らうとする時、私は手に持つてゐた鞄の手を外套の隱袋に入れた。

停車場には五六人の乘客が待つてゐた。大きな包を持つてゐる行商らしい男などもゐた。誰もかれも白粉をつけた白い襟をした女の方を珍らしさうに見た。

『もう好いよ、難有う！』

私はかう言つた。しかし女は歸らうともしなかつた。

私は財布を掻き廻しながら、辛うじて東京までの三等切符を買つた。あとを見ると、もう三十錢位しかない。辨當を買ふにも足りない。煙草を買ふ餘裕などは勿論ない。――やがて時間が來た、私は鞄を女から受取つて、そして改札所の方へと行つた。

『上りは向う側。』

かうその若い車掌が言つた。私は鞄を抱へて線路を向うに渡つて行つた。

『御機嫌よう――。』

さういふ聲を後に、逃げるやうにして私は出て行つた。實際逭げるやうに――總ての辛い痛い刺戟から、三味線の音から、女の笑聲から……。

土藏の傍を通つて行つた。其處では男が米を搗いてゐた。

私は默つて歩いた。女は鞄を持つたまゝ私の後について來た。

裏の垣から向うに出ると、向うは丘になつてゐて、その上に小さな停車場が見えてゐる。碧い空を背景にして、くつきりと見えてゐる。

丘の上に路がうねうねとついてゐる。

五日前に、闇の中を轉びながら辿つて來た路だ。さういふ生活が私の前に待つてゐるとは知らずに遣つて來た路だ。麥が青く見えてゐる。

女の下駄の足音を後に聞きながら、私は振返りもせずにサッサと歩いた。

ふと、『まァ、大變や。』といふ女の聲が後にした。

振返ると、女は鞄を地上に落してまごまごしてゐた。鞄の手のクワンが取れたのであつた。

私は二足三足引返した。女は今度は鞄を抱へるやうに持つて、取れた鞄の手を私に渡した。

『こんなになつて……。』

こゝにかうしてゐるよりは好い。』
私は手を鳴した。
別な女が來た。
『發つからね、勘定して呉れ。』
『お立ちになるんですか。』
喫驚したやうな顔をして此方を見てゐる。肥つた女だつた。
『發つんだ。』
ツケを持つて來た盆の上に、銀貨がチャラ〳〵した。
寧ろ女に逢はずに別れようと思つて、私は裏の方に靴を廻させた。裏の傍には、大きな椿の樹があつて濃い緑の葉の中に赤い花が一杯に咲いてゐた。
しかし、女はいつか其處に來てゐた。女は默つて鞄を持つた。編上げの靴紐を私が丁寧に結んでゐる間、女はぢつとして其處に立つてゐた。二三人の女は送つて出てゐた。

暫くすると、廊下を傳つて、此方に來る足音がする。障子の外から、

『およねはん！』

返事をせずにゐる。

『およねはん、ゐまへんか？』

『居ないよ。』

かう私が言ふと、『何處へ行きやはつたか。』とつぶやきながら、向うに行つて了つた。女は莞爾笑つて搔卷の中から顏を出した。

『いゝえの――』

かう言つて、女は頭を振つて泣いてゐた。

私は急いで旅行案內を鞄から出した。それは五日目の夕方であつた。客は三組ほど來てゐた。

私は旅行案內の頁を繰つた。

『こんな痛い、つらい思をしてゐるよりは、此處を發つて行く方が好い。さうだ！　發たう。』汽車の時刻を見て、『五時四十分發の名古屋行がある。名古屋で待たなければならないが、此處で痛い辛い思をして金なしで待つてゐるよりも、寒くつても、プラットホームの方がまだ好い。さうだ、女の聲を聞いて、

『金さへあつたら！』

私はかう繰返して考へた。

二階の笑聲が烈しく私の神經を顫動させた。私はぶる〳〵體を戰はした。私はまた掻巻をかぶつて、眼を大きく闇の中に明いて、そして天井を見てゐた。

天井にはいろんなものが映つて見えた。女の顏だの、客の顏だの停車場だの、車掌だの、灸を据ゑてゐる中婆さんだの、東京の細君だの……。暮れてから久しく經つても誰もランプを運んで來るものはなかつた。

二階の騒ぎが止んだと思ふと、そつと入つて來たものがある。女だ。

『お客が多うてナ。』

かう言つて、長い間、闇の中に女は坐つてゐた。

『およねはん！』

かう呼ぶ聲がする。

女は返事もせずにゐる。

『およねはん！』

その聲が遠くで聞えてゐる。

『金さへあつたら。』

私は旅でつまらなくつかひ果した金を此上なく惜しく思つた。モウパツサンの作に『フランチエスカ』といふのがあつた。イタリアに旅に出かけた男が、途中で女に引かゝつて、たうとうイタリアに行かずに歸つて來るといふ話を書いたものだ。私は、それを其一月ほど前に讀んでゐた。私はそれを思ひ出した。

緣側を通ると、室の中で、他の男と一緒になつて、女が笑つてゐる……。時計を抵當にしてから、私の信用は頓に落ちた。『この客は絞りたくつてもう絞れない！』かう主人は思つたらしかつた。私は紙衣の身の憐れさをつくづく感じた。

私は行火に當つて、搔卷をかぶつて寢てゐた。私は手を鳴して女を呼んだ。女は來なかつた。

用事は別の女が聞きに來た。

『何うしたえ、およねさんは？』

『およねさん、忙しいんだつしやろ。御用は？』かう言つて其處に突立つてゐた。

三味線の音が聞えてゐた。障子を明けて覗いて見ると、二階の一間には、五六人客が來て飲んでゐるらしく、ランプが障子を明るく中に見せてゐた。女は其處にゐた。

女の柔かなやさしい氣分がすつかり私を擒にして行つた。

女は銘仙か何か着てゐた。そして赤い色の交つた派手な襟をしてゐた。茶を持つて入つて來て長い間話して行つたりした。

二日目には、私はもう女と離れることが出來ないやうになつてゐた。實際、何といふ耽溺だつたらう。私に、金があつたら、そのまゝ女を伴れて來て了つたかも知れない。私は女が僅かの金で此處に來てゐることなどまで聞糺して、東京に歸つたら、屹度迎へに來るからなとも言つた。

『ほんまどすか？』

『うそなんぞ言ひはしない。』

『でもな、私のやうなものはな、何も出來まへんでな。』

『何も出來なくつたッて好いさ。』

こんな話をもした。

夜になると、客が彼方此方から遣つて來た。女は晝間のやうに、此方にばかり出てゐる譯には行かなかつた。私は女が別の室に行つて、別の男と笑つたり戯談を云つたりしてゐるのを見るに堪へなかつた。今までに經驗したことのないやうな男性の嫉妬を私は感じた。それに、あゝした優しい女は！……と奥の一間で一人で懊惱してゐた。

『可愛いだつしやろ！』

『うむ……。』

で、沈默が續いた。

天井に映つた行燈の影が微かに靜かに動いてゐる。

隣の間の鼾の聲が高く聞える。

暫くしてから、

『だッてナ、私のやうなものはナ。』

かう言ふ女の聲がした。

行燈の影が頻りに動いてゐた。襖の四季の山水の上には、女の影が黑く映つてゐた。

翌日は奥の方の一間に行つた。丸窓などのある室で、傍の障子を明けると、落葉の溜つた庭を隔てゝ向うに山が高く見えてゐた。北の一隅に置いてある唐机の上には、黑塗の硯箱が卷紙と一緒に載せてあつた。

その傍に私の鞄が置いてある。革のついた小さな鍵が其處等に轉つてゐる。鞄の中には家への土產に買つた種々なものが入つてゐる……。俄かに湧いて出たやうな新しい生活は不思議な氣がせずには居られなかつた。

客の騷ぎが濟んでから、暫く經つても女は來なかつた。時計が一つ鳴つた。私は眠られずに床の中に輾轉反側してゐた。『お湯に入つてから。』かう言つた先程の女の言葉を思ひ出してゐた。枕元の行燈は天井に大きな影を映して、灯子の動く度に、その影は絶えずチラ〳〵した。

期待……期待から起る懊惱……うす暗い靜かな空氣で包まれたその一間に滿ち渡つたその懊惱……。

何處かで風呂の湯を汲み出す響が微かに聞えてゐた。

輕い足音も何もせずに、やがて襖の隅の方がすうと靜かに開いた。と思ふと、背の高い、スラリとした女の姿が其處に現はれる。薄暗い靜かな空氣の中に……。

薄く化粧をした艶の好い白い顏がやがて其處に來た。

行燈の灯子がチラチラした。

『あなた、坊さんある？』

『あるよ。』

『幾人？』

『二人。』

『をとこはん？』

『一人が女で一人が男。』

きりと出た派手な襟をしてゐた。唄がうまかつた。

五日間。

何といふ耽溺だつたらう。私はその爲め梅を見に行かなかつた。梅を見にわざ〳〵下りた古驛に、その梅も見ずに五日間ゐた。

私は其時もう金を澤山持つてゐなかつた。私はその鬚の生えた主人に、時計を出して金を借りた。

『かういふものは分署で喧しいですけども……お預りだけして置きませう。』

かういつて、イヤににや〳〵してそして時計を持つて行つた。金を五圓持つて來た。

『もう、梅見に行くのはよした。』

かう私は女に言つた。

何といふ耽溺だつたらう。私はその旅館の奧の一間に籠つて、行火をしてそして寢てゐた。女は絶えず傍に來てゐた。

その一間は奧に離れてゐた。始め寢た室は、母屋の八疊だつたが、翌日からその奧の方の一間に行つた。母屋の八疊には、床の間に大きな蘭を描いた幅物がかゝつてゐて、長押には德不孤といふ大きな額がかゝつてゐた。襖には川舍廻りの繪師の書いた拙い四季の山水が張つてあつた。

に土地の藝妓が三四人立つたり坐つたりしてゐた。私はそこに女がゐるやうな氣がして、凝つとその女達に見入つた。一方の全景の方は、私は小さな額に入れて、それを書齋の上のところにかけて置いた。

私はその町の寫眞を長い間立つて見てゐることなどもあつた。

『姉はんが此處にゐますよつて來てますけどもナ、町が戀しうおますわ。』

女がかう言つたを私は時々思ひ出した。

ある藝者が來た。

『およねさん！』

かう誰かが言つた。

『君はおよねッて言ふの？』

『え。』

『およねッて言ふ名はゝ僕に取つては忘れられない名だよ。』

『さう！』

かう言つてその藝者は笑つてゐた。瘦せた、眼の表情のある女だつた。お納戸のお召に白い藤のくつ

もう一度その女に逢はずには置かれないやうな氣がする。そつちの方に旅行すると、いつでも其處にもう一度行つて見ようかと思はないことがない……。少くともその女は一生涯僕の體の中に住んで生きてゐるよ。』

『不思議だね。』

『本當に不思議だね。僕にはその女よりももつと深く關係した女は幾人もある。三年一緒にゐた女もある。それに綺麗な、肌の柔かな女も幾人もある。しかし、さういふ女達はぢき忘れて行つて了ふ。十年と心の中に生きてゐる女は少ない。それなのに、その女ばかりは、益々その影が濃くなつて行くんだからね。』

『さうかね。』

友達は私の顏を見てゐた。

女の生れた町――そこを私は想像した。

山の奧の川の流れてゐる、靜かな繪のやうな町だ。

ある時其處に旅をした友達が、其處から私に繪葉書を二枚よこした。一枚は町の全景を撮つたもの、一枚は料理屋の庭を撮つたもので、料理屋の庭の方のには、鶴の置物が置いてあつて、池に臨んだ欄干

もんだね、その五日が――そこに泊つてゐた五日が、僕の生涯に取つては、非常に大きな出來事なんだからね、他の多くの女に對する好尙なんて言ふものが、今だにすつかりその女に支配されてゐるんだからね。』

『さうかね。』

これを聞いてゐた友達は、かう言つて不思議さうに私の顏を見た。

『まだ、その時分は、君は、餘り女を知らなかつたから、それでイリユウジヨンでさう深く印象されたんだらうね？』

友達は續いてかう言つた。

私は言つた。『それもあつたかも知れない。しかしそればかりぢやない。僕はもうその頃かなり女を知つてゐたからね。その時だツて、自分から進んで言出した位なんだからね……。それは僕は今だに思ふがね、耽溺といふ心持を心から味つたのは、その五日間だね。その五日間ほど耽溺したことは未だにないよ。』

『さうかね。その女は何うしたらう？』

『何うせ、今時分は、人の嬶になつて、子供の二三人も持つて、眞黑になつて働いてゐるのさ！　それはきまつてゐるさ！　けども、今でも僕はその女に逢ひに行きたいと思つてゐる。僕の生涯の中に、

明るい灯と明るい座敷とが私の前にあつた。

帳場に坐つてゐた濃い鬚の男と、鈎にかけた鮪と、鮹と、德利と、三味線の音と。

『およねさん！』

かう呼ぶ聲が今も私の耳にある。

顏を少し赤くして、ぽつてり肥つた色の白い橫顏を此方に見せて、『だつて、私のやうなものはナ。』かう言つて此方を見る眼許の可愛さ！

『およねさん！』

かう何處かで誰かゞ呼んでゐる。

『え、もう、ほんに、困つた人達。』

かう言つて其女は入つて來た。濃い眉を顰めてゐた。

さういふ言葉の調子が、今でも私の體の何處かに潛んでゐる。

私は何處かで次のやうな話をした。

『不思議なもんだね、君。それが何うしても忘れられない。その女は今だに、僕の體の何處かに潛んで生きてゐる。年月をいくら隔てゝも、それでも、女と僕との間にはまだ何かある……』實際不思議な

若い車掌はかう言つて闇の中を指した。そこには明るい大和障子が見えてゐた。

私は大きな鞄を下げたまゝ、大和障子を明けて入つて行つた。と、德利、膳、鍋――そんなものゝ混雜と置いてある向うの方に一人の肥つた中婆さんが、袒になつて灸を据ゑて貰つてゐるのが私の眼に入つた。

『泊めるには泊めるが、もつと好いところがあるから其方へ行つて泊んなはれ。』

かう言つてその中婆さんは敎へて呉れた。

中婆さんはイヤにに〻〳〵笑つてゐた。……その顏が分明と今でも見える。

闇の中を私は步いた。

男が私の鞄を持つて、先に立つて步いて行くが、それが何うかすると見えない位に暗い暗い夜だッた。

足元がわるいので、私は尠くとも二三度轉んだ。坂になつてゐて、そして路がデコボコしてゐる。汽車の窓から見た時には、灯がチラ〳〵見えてゐたが、それも何處かに行つて了つた。町が何處にあるかそれすら解らなかつた。

深い闇が續いた。と、其處から――その暗い闇から、新しい生活が俄かに開けたやうに明るい障子と

また白い手首が動く。長い襟足に白粉の痕が殘つてゐる。

青い麥畑が丘のやうなところに廣く見えてゐる。古い小さい驛――たしか角のところに分署があつた。草鞋を下げた家の前では、脚半をつけた旅人が、緣臺に腰をかけて新しい草鞋を上さんに取つて貰つてそしてそれを穿きかへてゐた。驛を外れると、碧を湛へた谷川が流れてゐた。

私はその驛に五日ゐた。

晩泊つて、明日は名高い梅を見に行かうと思つて汽車を下りてそして其處に五日ゐた。

其處の停車場は丘の上にあつた。私は夜の九時頃に着いた。私は十日ほど彼方此方を旅行して、其時もう東京に歸らうとしてゐた。もし私がある大きな停車場で『梅花滿開！』といふ廣告を見なかつたならば、その停車場は唯闇の中に過ぎ去つて了つて、他の普通な小さな停車場と同じやうに、私の生涯に遂に何等の印象を殘さなかつたであらう。『梅花滿開！』その四字が私にある生活を展開させる因をなした。その停車場が段々近くなつて行つた。灯がチラチラと下に見えた。谷川の流れてゐる音が淙々と聞える。山が黑く夜の闇を劃つてゐる。

『此處に旅館がありますか？　一晩泊りたいんですが。』

改札所にゐた若い車掌に私は訊いた。

『すぐ其處で聞いて御覽なさい。』

その翌朝、その女は私の室に膳を運んで來た。そして給仕をした。
靜かに坐つてゐた。
何もないやうに、何も知らないやうに、昨夜のことはあれは夢でなかつたかと思はれるやうに――。
『今朝は寒いね。』
私が言つた。
『寒うおますな。』
女はかう言つてにつこり笑つた。飯を盛るための白い手首が動く。女は顏を少しうつむき加減にしてゐた。飯を盛つた茶碗を盆に載せて此方に出さうとする時に私の顏を見た。
『梅は何うだらう?』
『丁度ようおますわ。』
『盛りだらうか?』
『盛りだッて言つてまいた。昨日歸つて來た人がナ――』
かう言つて、『梅、お出なはる?』
『行つて來ようと思ふんだ。折角、來たんだから。』
『さうな、行つて來なはれ。』

椿の花

停車場の方へ行くところに、此方から上つて行く低い坂がある。その坂に懸らうとする處に細い川が流れてゐる。板橋がかゝつてゐる。

その川では、時々近所の染物屋の男が布を晒してゐたりする。晴れた日には、川の中に入つて障子を洗つてゐる男などもある。坂の右側は竹藪で、その奥からは、春は、野椿の紅いのなどが見えてゐた。

私は毎日其處を通つた。

私はその坂を通る度に何故かその女を思ひ出した。眉の濃い、肌の白い、笑ふ時眼のところに何とも言はれない愛嬌のある表情をする女だ。と、

『だッて、私のやうなものはナ。』

かういふ口の利き方をする優しい和らかな氣分がいつも私の胸に漲つて來た。

『や。』

と眼を丸くして、『や、鈴蟲が居ない。』

主人の方を見て、

『誰かこれをいぢりやしまいな。』

『何うした、鈴蟲が居ない？』主人も其傍に寄つて來た。『誰れがいぢるものがあるものか。』弟の手から籠を取つて見て、『此處から遁げたんだ、ほら、此處がかうなつてゐる。』かう言つて、細いしごの一本曲つて居るところを指した。

『さうかな、此處から遁げたのかな。』軍人は徒らにひつくり返して見て、更に其處等をきよろ〳〵とさがした。鈴蟲は何處にも居なかつた。

昨夜買つて來た二錢の胡瓜は其日の夕方までそこらにごろ〳〵ころがつて居た。

『高い胡瓜だなァ、これで二錢！』軍人はかう言つた。
胡瓜は暫く其處に放り出されたまゝになつて居た。
婢も膨れざるを得なかつた。子守はこそ〳〵と寢衣と着改へて、次の間に寢に行つた。
主人はそれでも餅菓子の竹皮包を引たくるやうに取つて、やゝ固くなつた大福をむしや〳〵とまづさうに食つた。三人とも元のやうな氣分にはなれなかつた。
つかえた大福を咽喉に通す爲めといふやうに、傍についだまゝ冷たくなつてゐる湯呑の茶をグッと主人は飲み干した。細君が餅菓子を二箇取つて遣ると、婢はそれでも膨れた顏をして手を出した。
『もう寢よう、詰らん、詰らん！』
主人は立つて行つた。
軍人が胡瓜を持つて續いて立つて行つた後で、細君は婢に向つて一人ぶつ〳〵小言を言ひながら、夏蜜柑の皮を剝いた。
鈴蟲は頻りに鳴いて居た。
翌朝、楊枝を使ひながら、主人が緣側に行つて見ると、井戸端に顏を洗ひに行つて戻つて來た弟は、書齋の入口に立留つて、簷の蟲籠を下して、頻りにそれをいぢつて居たが、

今度こそと思つた足音も通り過ぎて了つた。

『もう、寢る。』

主人は立上つた。

軍人も書齋に行つた。鈴蟲は好い聲を立てゝ居た。

やがて歸つて來た婢は汗をビッショリかいて、顏を赤くして居た。三寸ばかりの小さいしなびた胡瓜をごろりと一個其處に出した。

まだ出たばかりの走りの胡瓜は、この場末の八百屋などにはなかつた。婢は二錢銅貨を油汗になるほど固く掌に握りながら、町の通を、それからそれへと聞いて歩いた。家で待つて居るといふことも知らぬではなかつた。しかし胡瓜を買はずに歸るといふ氣にもなれなかつた。婢はたうとう停車場の先まで行つて、漸くある八百屋に一本あつたのを搜し出して買つた。

ビッショリ汗になるほど、急いで歸つて來た。

『馬鹿な奴だ！』

かう主人からは叱られた。

『本當にお前氣が利かないねえ！』

細君からもかう言はれた。

つた。人々は退屈なので、ついがぶ〳〵と茶を飲んだ。茶請の來ない中に、鐵瓶は空になり、茶は出流れて了つた。

わざ〳〵茶請を買ひに遣つた一座の興もさめた。

『本當に何うしたんだらう？』

『本當に遲いねえ。』

道を通る人の足音を聞いて、『今度こそさうだ。』などゝ言ひ合つた。しかし門は明かなかつた。

忍耐な軍人も終にはかう言つて、柱にかゝつた時計を見た。

『田舍にゐる頃、狐に魅されたことがあるッて言ふから、またそんな目にでも逢つてゐるんぢやないかしら？』

餘り遲いので、細君はこんなことを言ひ出した。

『チョッ、馬鹿にしてやがる。こんなに遲いなら、買ひにやるんぢやなかつた。』かう言つた主人には、もう茶請などを食はうといふ興も餘裕もなかつた。

『もう、寢よう。』と言つて見た。しかし腹は空いて居た。

三人は腹立しさうな眞面目な顏をして鼻を突合せて居た。もう茶を飮むものもなかつた。話をするものもなかつた。時計のセコンドの音ばかりがしんとした一間に音高く聞えた。

をした。此處に北軍の本隊が集中を終つた。南軍は某地點に上陸して、此方面に向つて前進する。倉庫は何處と何處とに置かれてあるといふ狀況は斥候の報告で解つてゐる。然るに、此處に南軍の一支隊があつて、某地點に上陸して北軍の後方を脅威する任務を有つて居るとする。さうしたら、其隊は何處に行くか、何處に出て行くのが一番有效であるか。』さういふ宿題だが、路が二つあつて何方にも利害があるんだ。』かう言つて地圖を合せて見て、『構はん、構はん、さう出て言つてやれ。』話をして居るのだか、研究をして居るのだか解らぬやうなことを言つて聞かせた。

二十分經つても、婢共は歸つて來なかつた。町の通りはそんなに遠くはなかつた。每朝御用聞に來る八百屋は橋を渡るとすぐであつた。

『何うしたんだらう？』

一番退屈な細君が先づ言つた。

十分は又經過した。

『本當に何うしたんだらう。』

主人もそろ〳〵欠をし出した。

『本當に、氣が利かないからねえ。屹度、覆盆子がないので、何處か先まで行つたんだよ。』

女の足は遲いからと辯護して居た軍人も、やがて得意の戰術の話をやめて、大きい欠をするやうにな

婢は子守と一緒に輕い駒下駄の響を立てゝ出て行つた。

から茶をがぶ〳〵飲みながら三人は話し合つた。

昔の話が出るかと思ふと、女の話が出た。戰爭の話が出るかと思ふと、田舍の女房ののろけが出た。笑聲が暫しこの一間を賑かにした。

軍人は常に大きな聲で話した。

『何うも、軍人の聲の大きいのは、野天で號令をかけるからだねえ。馬子の聲の大きいのと同じことだ。』主人がこんなことを言ふと、

『口が惡いなア。兄さんは……』

かう言つて笑つた。

弟は每日教はる戰術の話を得意になつて話して聞かせた。海軍の參謀が來て講話したといふ日本海戰の話や、一月前に沼津近傍に行つて實地研究をやつた話や、習志野の野營で藁の上に寢る時の賑かなことや、さうした話を熱心になつて飽かず話した。兄はそれをお役目のやうにフン〳〵と言つて聞いた。弟もまた兄の文學上の話をうはの空でフン〳〵聞いた。二人ともその二人の得意な話が解らなかつた。

其夜も軍人は書齋から五萬分の地圖を持つて來て、一面に其處にひろげて、宿題に出された戰術の話

『ぢや、何か買つて來い。』丁度、湯から上つて着物を着て居る婢に向つて、『おい、一寸通りまで行つて來て呉れ。……夏蜜柑？　夏蜜柑も旨くない。覆盆子はないかなア。』

『覆盆子は何うですか……此邊の八百屋には、そんな氣の利いたものはありませんからねえ。』着物を着て白粉を眼に立つほどつけて出て來た婢に、『それぢや、お前、宅の八百屋に行つて覆盆子があつたら取つて來てお呉れ。なかつたら、夏蜜柑を……』

『夏蜜柑はおれは御免だ。覆盆子がなかつたら、菓子を買つて來い。』

『おい、使に行くなら、鳥渡待つて呉れ。頼むものがある。』かう言つて、軍人はドシ／＼立つて書齋に行つたが、やがて戻つて來て、二錢銅貨を其處に投り出して、『胡瓜を一本買つて來て呉れ。』

『胡瓜を一本？』

細君が不思議な顔をすると、

『何に、鈴蟲にやらうつて言ふんだよ。』

主人が傍から言つた。

『なら、好う御座んすよ。宅の八百屋から取つて來るから。』細君は二錢銅貨を押戻した。

『いゝよう、これで買つて來て呉れ。』

軍人はまた押戻した。

『はァ、さうかなァ。』軍人は感心したやうに言つて、『さうかえ、嫂さん？』

『何うですかねえ。』

細君はかう言つて笑つた。

茶を飲みながら、

『何か食ふものはないかなァ……何だか腹が減つた。』

主人がかう言つて細君の方を見ると、

『生憎、何にも……』

『カステラは？』

『子供が食べて了ひました。』

『最中は？』

『さういつまでもあるもんですか。』

『本當に何もないのか？』

『えゝ。』

と細君は笑つて居る。

て來て、大きい體をした軍人が銅色をした莞爾した顏を其處に出した。
『おい、おい、起きないか。』
主人はまたかう細君を呼起した。
細君はやがて眠むさうな眼をして、蚊帳を捲つて出て來た。久留米絣に派手な色の見える帶上げをして居た。
『茶でも飮ませないか。』
長火鉢の前に坐つても、まだ細君は眠むさうな顏をして居た。鐵瓶に觸つて見た手を慌てゝ引込ませて、
『おう熱い！』
『馬鹿！　ねぼけて居やがる。』
かう主人は笑つた。
『宅の奴もよく寢るよ。子供を寢かすツて言つては、ぐう〳〵寢ちやうんだから始末にいけない。子供と一緒に寢るのは、好い心地なんだねえ、嫂さん。』
軍人もかう言つて笑つた。
『母親が寢る位にならなけりや、子供も寢られないのかも知れない。』

から放さなかつた。

『おい、本當に茶でも飮まう。氣が盡きて了つた。』

『ウム。』

鉛筆を持つた儘、兩手を伸して、大きな欠をして、始めて書齋の入口の處に立つて居る兄の方を見た。そしてさも勞れたやうに、仰向けに後にドッと體を横へた。

煙草盆には蚊遣線香が二本、細い紫の烟を立てゝ居た。

兄は長い緣側を通つて、蚊帳の一杯に吊つてある居間に來た。妻が幼兒に添乳をしながら、いぎたなく眠つて了つたのが茶の間から來る灯影でそれと見えた。今少し前まで騷いで居た子供等も皆な眠つて了つた。

『おい、又、眠つちやつたのか。起きろ、起きろ！』

かう呼起して置いて、蚊帳の狹い間を通つて、主人は茶の間に來た。其處には誰も居なかつた。室の中央にホヤの尖の少し煤けて黑くなつた五分の洋燈がボンヤリと點いて居て、子供等の今まで騷いだ箱だの玩具だのが其處等一面に散らばつて居た。沸え立つた鐵瓶からは白い湯氣が徒らに立つて居た。

婢と子守と、仕舞湯に入つて居る氣勢が勝手の障子を隔てゝそれと聞えた。

長火鉢の前に坐つて、主人は先づ鐵瓶に水を注した。同時に、向うからドシン〳〵と重い足音が聞え

胡瓜

『おい、茶でも飮まないか。』

かう言つて、奥の書齋で今日の戰術の宿題を考へて居る軍人の弟に、主人の兄は聲をかけた。この弟は野戰隊附の大尉で、半年ほど前から戸山學校に來て居た。夜はもう九時をすぎて居た。

『ウム。』

三分の洋燈を前に、大きい體を猫背にして、せつせと鉛筆を運ばせながらかう答へた。庭の梧桐が硝子戸を透して、灯影に青く搖いた。

簷では昨夜軍人が買つて來た鈴蟲が好い聲を立てゝ居た。

『これは、よく鳴くなア。』

兄は簷に吊された小さい蟲籠をのぞくやうにして言つた。

『僕の買つて來るものは皆なさうしたもんさ――アハヽヽ。』と弟は大きく笑つたが、しかし鉛筆を手

父親と母親とは、かう言つて、その寒い、折れ曲つた、谷に沿つた道を頭に浮べてゐた。薄日の當つたその寒い路に、赤い綺麗な肩掛がぱツと擴がつて落ちてゐるさまを想像した。そこを山の樵夫か何かが通つて行つた……。

日影の少し當つた暖かい崖の下を通る時、整子は『だつて、風が來て、しやうがないんだもの……、母ちやんの頬ッぺたを吹いてしやうがないんだもの。』こんなことを言つてゐた。

父親も母親も一刻も早くこの寒い處を脫れやうとのみ思つて急いで歩いた。階段の處に來ると、母親はほつと溜息をついて、

『もう大丈夫だよ、整ちやん。』

かう言つて整子の頬にキスをした。

ふと、氣が附くと、赤い肩掛がない。――それは其日の午後のことだつた。

『落して來たらうか。』

一間の中を何うさがしても何處にも見えないので、母親と父親とは、終にはかう言つて、互に顏を見合せた。

『そんな譯がないがな。』

『貴方が、私の襟巻で包んでやる時には、まだありましたか?』

『あつたと思ふがな。』

『落ちる譯がないんですけどもね。ちやんと首の處でとめてあるんですから。』

母親は赤い岩の中に湧き出してゐる溫泉を柄杓で汲んで飮んだりしてゐたが、急に、かう言つて、不意に自分も恐ろしくなつて來たといふやうに、母親は整子を負つた。

『ひどい風ね、もう歸りませうよ！』

『こんなところにつれて來て、母さんと父さんがわるいのね。早く早く歸りませうね。山の神さまにでも伴れて行かれると大變だ。』母親はこんなことを言つて、さつさと先に立つて下りて行つた。山の巓を渡つて行く風が、ゴオ、ゴオと凄じく聞えた。後から何か追懸けて來るやうにさへ思はれた。

『寒い、イタイ。風が來る。』

整子はかう言つて泣いた。

『寒いんですよ、本當に、耳でも、顏でも、あんなに赤くなつてゐるんですもの。私だつて寒い。』母親はかう言つて、自分の襟卷を取つて、『これで顏を包んでやつて下さい！』

父親も何となく心が穩かでないやうに見えた。冬の烈しい嶮しい自然の中に、かうした弱い幼い者をつれて來たといふことに就いて絕えず心が動いてゐた。

父親は、母親の襟卷で、整子の赤い頰や耳をつゝんでやつた。それでも寒い烈しい風を十分に拒ぐことは出來なかつた。

『寒い、イタイ、風が來る、風が來る！』

赤い肩掛は、さびしい寒い崖に添つた道に際立つて見えてゐた。折れ曲つた路の下には、碧い谷川が深く流れて、その縁には雪が白く積つてゐた。細工店だの、貸別莊だのが始めは五六軒つゞいてゐたが、それも皆な戸がぴつしやりと堅く堅く閉められてあつた。西洋づくりのペンキ塗の家の入口には、人が入らぬやうに十文字に木が組合されてあつた。谷に臨んだある小さな家からは、轆轤細工の音がギリギリ聞えてゐた。

整子は顏を母親の脊に當てゝゐた。『そら、御覽。あれが氷柱といふもんだよ、整子。』かう父親が言つて聞かせても、整子はそれを見ようともしなかつた。

路が折れて曲つて行くにつれて、深い谷は益々その前に展けて來た。此方の崖から彼方の崖に引いてある湯の鐵管からは、十丈もあるやうな氷柱が五本も六本も下つてゐた。

谷には薄日が當つてゐた。風は何處から起つて來るともなく、凄しく崖の一角を掠めて吹いて行つた。其處に橋がある。獵師が兎を二疋擔いで山から下りて來た。

湯元の谷には人は誰もゐなかつた。唯、湯氣が白く高く立つてゐた。

小さな亭があつた。整子は母親の脊から其處に下された。『風が寒い、風が寒い、イタイ／＼。』風が吹いて來る度に、整子はかう言つて泣いた。『母さん、お家歸る！　風が來る、風が來る！』

などと無邪氣な調子で言つて、整子はちよこ〳〵歩いて行つた。

其處にお宮があつた。で、その傍の道を通つて向うに行くと、寒い寒い風が吹いて來た。前には廣い深い谷が展けた。雪を戴いた尖つた山が、キラ〳〵と眼の前に三つも四つも聳えてゐた。

谷間から捲き上げて來る風は、ゴォと凄じい音を立てゝ、低い山の一角を掠めて行つた。

谷川は深く下に鳴つてゐた。

何といふさびしい嚴かな自然だらう！　何といふ嶮しい凄じい自然だらう！　其處には一點のやさし味も曖昧もない。むき出しのはだかのまゝの自然だ。——風がまたゴォと音を立てゝ吹いて來た。

整子は恐ろしい自然の前に立つた子羊のやうに、母親に手を取られたまゝ、そのまゝそこに蹲踞んで了つた。深い谷、高い大きな山、崖に沿つた道——生れて始めてかういふものを見た整子は、唯恐ろしさに慄へた。

風が寒く寒く吹いて來た。

『寒い、寒い。』

かう言つて泣いた。

しかし父母は折角此處まで來たのに、湯の元まで行かずに引返すのもつまらないと思つた。『ぢや、負ぶしてあげるよ。』母親はかう言つて整子を負つた。

十階ほどある最初の石段はそれでも事なく昇つたが、二度目からは、整子はすぐ母親の肩につかまつた。『ずるいねえ、負ぶかえ?』母親はかう言つてしやがんで、後に手を廻した。

中頃からは、父親が代つて負つてやつた。階段は高く高くつゞいて行つた。『お父さん、ワンワン!』かう整子が言ふので父親が其方を見ると、八百屋の横町のところを小さな犬がちよろ〳〵と通つて行つた。

『この子は犬ばかり氣にしてるよ。』

呼吸を切らして登つて來た母親は、笑ひながらこんなことを言つた。

整子は高い高い二階だの三階だのを見ながら、父親の背中にしつかりとつかまつてゐた。あたりの物が整子には皆な不思議に見えた。『お山に行つて見やうね、ね、こゝを登つて了つたら、おとなしく歩くんですよ。』かう父親に言はれて、

『ウム、ウム。』

整子はかう幾度も點頭いて見せた。

階段はやがて盡きた。父親は負つてゐた整子を其處に下した。『さア、歩くんだよ。今度は坂がないから。……平らだから。』かう言つて母親が手を引いてやつた。

『お山へ行くの?』

その店には、都會の人達の土産に買つて行く山の細工物が一杯にならべてあつた。小さな箱だの、お盆だの、煙草盆だの、玩具だの、硯箱だの……。赤だの黄だの綠だの白だの紫だの……。

『これが好い。』

かう言つて一度手に取つた玩具をすぐ放して、

『これが好い。』

整子は澤山玩具があるので、喜んで躍つたり跳ねたりした。器械體操を學生がしてゐる玩具だの、振ると五色の球の出る玩具だのを整子は取つたり振つたりした。やがて二つほど買つて貰つて、整子は嬉しさうな顏をして其處から出て來た。

『下まで降りて見ようか？』

父親と母親とは、石段の上のところに立つてかう相談してゐた。寒い風が吹いて來た。山の雪は午後の日影にかゞやいてゐた。

整子は仰向いて上を見た。二三日經つてからであつた。

石段がそれからそれへとつゞいてゐた。旅籠屋だの、細工物屋だの、料理屋だのが兩側に高く仰いで見られた。『上がられるかえ？　え？　整ちやん？』かう言つて、母親は整子の小さな手を取つた。

通りすがりの客は、五歳位になる子が父親と母親とに伴れられて『ワン〳〵怖い！』かう言つてちぢこまつて、路傍にしやがんでゐるのを笑つて見て通つた。

外に行く時には、整子の着物の上に屹度その赤い肩掛がしてあつた。

田舍のさびしい冬の溫泉場には、その肩掛の色が際立つて赤く見えてゐた。すれ違ふ女の兒などは皆なそれを振返つて見て行つた。『何て、まァ綺麗な色だんべ。』家の角に固まつてゐる子守達のかう言つてゐるのを母親は耳にした。

冬の溫泉場はさびしかつた。何處の家の二階の戶も盲いた人の目のやうにぴつしやりと堅く閉められてあつた。近在の爺婆、でなければ農事の閑を選んで味噌や米を脊負つて來た夫婦、でなければすぐ下の村から上つて來た百姓――さういふ人達が其處等を行つたり來たりした。鄙びた女の言葉だの、日に燒けて黑くなつた肌だの、荒れた唇だのが其處此處にあつた。

母親のコートと整子の肩掛とを誰も皆な振返つて見た。

その整子の赤い肩掛は、ある日、通りの店の硝子戶の中に見えてゐた。丁度その時午後の日影は薄く外からさし込んでゐた。

『あれ山よ、雪よ、覺えた？』

母親が指して見せた。

『あれ、山ねえ。』

ひとりで障子を明けて、向うを見ながら整子は言つた。

『ワンく怖い、ワンく怖い！』

整子はかう言つて遁げて來た。障子の外の緣側のところには、首に金輪をはめた茶色の眼をした雜種の大きな犬が、ちぎれるやうに尾を振りながら、頸を緣側に載せてこつちを見てゐた。

『ワンく怖い、ワンく怖い！』

整子はまた繰返した。半分べそをかきかけてゐた。

『ワンく怖くないよ。』

母親はかう言ひながら、叱、叱と犬を追つた。犬は平氣で、クンく鼻を鳴してゐた。

その犬はその旅籠屋の飼犬であつた。客が出さうにすると、すぐ尾を振つて、迎へに出て來た。時には日向に寢てゐることもあれば二三疋の犬と戲れてわざと嚙み合つてゐることなどもあつた。整子は、障子を明けて、わざく其處に犬がゐるかゐないかを確かめに出かけて行つたりした。

二階は寒いのと、それに昇降が大變だと言ふので、そのあくる日には、整子は父母と一緒に階下の六疊の一間へと移つて來てゐた。

そこの障子を明けると、すぐ庭になつてゐて、其處らへ物賣が入つて來る。「鷄卵の生みたて！」かう言つて通つて行くあとから、『こんにやく、よしか。』と言ふ聲がつゞいてきこえて來た。

『お甘薯のふかし立て！』

かう言つて通つて行つた聲は、その少し先きまで行つてまたもどつて來た。『お甘薯のふかし立て！暖かいの！』

母親は障子を明けた。整子はその傍に立つてゐた。寒い風が吹いて來た。やがて男は莞爾しながらその緣側のところにせいろを置いた。ふかし立ての甘薯からは、湯氣がほうつと立つてゐた。

母親はその中から、旨さうなのを二箇取つて、それをそこに立つてゐる整子に渡した。と、整子は嬉しさうに、『ホラ、おいも……父さん、おいも！』かう言つて、それを火燵に當つてゐる父親のところに持つて來た。……お甘薯のふかし立て！　といふ聲が、また朝の冷めたい空氣の中を行く。

障子の外には、山の雪がキラ〳〵と朝日にかゞやくのが見えた。雪が白く敷いたやうに降つてゐる朝もあつた。

『肩を打たせると好い心持だ。お前も打たせたら何うだ！』かう父親に言はれて、母親が其方に行かうとすると、『イヤア、母ちやん。』かう言つて整子は泣出した。

瀧そのものよりも、瀧を仕切つてゐる扉が――閉つたり明かつたりする其扉が整子には怖かつた。

火燵の板の上には、蜜柑、蜜柑の皮、ハンケチ、菓子などが置いてあつて、其處に赤い頰をして整子は當つてゐた。

『千代ちやん。』

小聲で呼んで見たりしてゐた。

『千代ちやん、もう寢たらうか。整ちやんも母ちやんもゐないッて泣いてゐるかも知れないね。』

母親が言ふと、

『千代ちやん、千代ちやん。』隣の間でおばさまごつこでもしてゐるやうに――呼んだら其處からすぐ幼い姉が飛んででも來るやうに整子は呼んで見た。

『千代ちやん、來ないねえ！』

やがて考へるやうにして整子は言つた。

『千代ちやん、あのね、置いて來たの。』整子はこんなことを言つてゐた。

『寒い、寒い、湯にでも入つてゐなくつてはとても凌げない。』

かう言つて父親も母親も二階を下りて行つた。整子は母親に負はれてゐた。もうすつかり日が暮れてゐた。湯氣が白く茫と闇の中に立つて、湯殿の灯がぽつりとその中に見えてゐた。瀧の落ちるやうな音が高く聞えた。

大きな浴槽の一隅に、湯が瀧をなして落ちてゐた。ドウ、ドウ、ドウ――それが絶えず聞える。そこを仕切つてある扉を明けると、湯の上から落ちて來るのがよく見える。しかし整子にはその音が不思議でそして怖かつた。決してその瀧の方に行つて見ようとはしなかつた。唯そつちの方ばかり見てゐた。『怖い！　怖い。』かう言つてゐた。

『怖くはないんだよ。そら、父さんが行つて見ようか。』

かう言つてそこの扉を明けると、

『母さん、怖い！』

かう言つてしつかり母親にかじりついた。

で、整子は母親に抱かれながら、父親がその暗い扉の中で頭からその湯瀧を浴びるのをぢつと見てゐた。

母親はかう傍から言つた。

整子にはこんなところに父親がゐるのが不思議だつた。二三日前まで、家にゐて、よく火鉢のところで鶴だの船だのを折つて呉れた父親がこんなところにゐるとは思はれなかつた。『そら、父さんだらう？』かう母親に云はれながら、『父さん！』といつものやうに聲をかけて好いかわるいかわからなかつた。整子は默つてゐた。

『寒い、寒い、寒い――。』

かう母親も父親も言つた。高い折れ曲つた階梯を上つて行つた。

少し經つた後には、整子はもう火燵に當つてゐた。赤い肩掛は、母親のコートと着物と一緒に火燵の傍に置かれてあつた。母親は女物の布子を上に引かけてゐた。

父さんは別な父さんではなかつた。矢張同じ父さんだ。『何うしたの、整ちやん。父さんだらう。』

などと母親は言つた。

後に置いて來た子供のことを母親は何彼と話した。『千代ちやん、置いて來たね。整ちやんゐないッてさむしがつてゐるだらうね。――本當に、二人だと、いつまでもおとなしく遊んでゐるんだけどね……さむしがつてゐるでせうよ。』

かう母親は父親に言つた。

そこにゐる婆さんがこんなことを言つた。

『寒い、寒い、母ちやん。』整子はかう言つて泣いた。

旅籠屋の名を書いた提灯を持つて、男が停車場に迎ひに來た。その大きな提灯！ それが整子の目を喜ばせた。『提灯！ 提灯。』かう言つてそれを見てゐた。

旅籠屋の男が、『孃ちやん、おんぶしませう。』と言ふと、『イヤアー』かう言つて、整子は母親の脊にかじり附いた。

生憎車がないので、母親は整子を負つて出かけた。整子は片方の頬を母親の脊中に押しつけて、暗い坂路を先に立つて昇つて行く提灯を見てゐた。寒い風が吹いて來た。

兩方には林が並んでゐて、向うに人家の灯がチラ〳〵と見えた。『整子はおとなしいね、父さんがもうぢきにゐるよ。整子よく來たなッてほめて下さるよ。』こんなことを言ひながら母親は歩いた。

提灯は先へ〳〵と行つた。そこには家屋が下から上へと續いてゐた。大きな二階三階の家が多かつた。路のところ〴〵から白い湯氣がぱつと立つて、そしてそれが風に吹靡かされてゐた。

『整子來たか、整子來たか、よく來た、よく來た。』かう聲をかけられて、見ると、そこに、二階の階梯の下のやうなところに父親が立つてゐた。

『そら、父さんだらう？』

一面に散らばつた。

『お菓子を上げやうか。』

整子は矢張頭を振つた。

窓から當る日影とスチームの管とで、室の中は春のやうであつた。暫くしてから、整子は、『母ちやん、眠いの?』と言つて、そして再び母の膝に寄りかゝつた。でも、暫くの間は、眼をぱつちり明いて動いて行く汽車の音を不思議さうにしてゐたが、その次に母親が見た時には、その西洋人形のやうな眼はすつかり閉ぢられて、小さな呼吸が靜かに聞えてゐた。赤い肩掛に日が當つたりかげつたりしてゐた。

山の裾のやうな處に整子は來てゐた。日はもう暮れかけてゐた。風が吹いて來た。寒い〳〵風が吹いて來た。

母親は今迄乘つて來た電車を下りて、洋服を着た男に案内されて奥の暗い室の中に入つて行つた。其處には赤い火が活々と起つて、暗い夕暮の空氣を明るく見せてゐた。

『寒い、寒い!』

整子はブル〳〵顫へてゐた。

『孃ちやん、寒いでせうね。東京から來ては……。今、お迎ひが來ますよ。』

えたをぢさんがゐた。

整子の下されたところは、窓のところになつてゐた。暖かい日影が硝子を透して一面に其處に當つてゐた。整子は窓のところにつかまつて立つて、そして動いて行く外を見てゐた。家が通つたり、人が通つたり、樹が動いて走つて行つたりした。遠くにはピカ／＼と眩しく光るものが長く／＼つゞいてゐた。

『あれがお山の雪よ。』

かう母親は指して言つてきかせた。

ハンケチに包まれて、其處から二つ三つ出かゝつてゐる蜜柑、その黄い滑らかな蜜柑の皮に、窓からさして來る日影は明るく照つてゐた。整子は赤い頬をして、兩脚を前にだらりと下げて、そして蜜柑を一箇手に持つてゐた。

『おたべなさい。』

かう先程から母親は勸めてゐたが、整子はそれを食はうともしなかつた。『おしゝにして上げませうか』いつもなら、かう言はれると喜んで食べるのだが、今日はそれでも矢張頭を振つてゐた。傍では母親がさも咽喉が乾いたといふやうに、蜜柑の汁をチウ／＼啜る音が旨さうに聞えてゐた。蜜柑の皮は其處等

親に抱かれて下りて行く子供などもあつた。鬚の黒く生えた默つてゐる怖いお爺さんなどもゐた。整子はしつかりと母親の胸に顔を當てゝ、眼をはつちり明いて、耳をすましてその物音を聞いた。

また動き出した。轟といふ音がまた聞え出した。

隣にゐた田舍の上さんが、

『おとなですね、おいくつです？　五つ。さうですか。お人形さんのやうですね、おとなですね、孃ちやん？』

などと言つて、その大きな笑顔を整子の顔の傍に寄せた。

それでも整子は默つて膽を消したやうな顔をしてゐた。『そら、をばちやんが、好いものを下すつた！』かう母親が言つて、小さな饅頭を一つ持たせた。それでも整子は矢張默つてゐた。饅頭を持つたまゝ堅く母親に抱きついてゐた。

『あとがないもんですから何うしても甘えて仕方がないんですよ。』

などと母親は言つた。

『整ちやん、母ちやんのお膝が重くなつたから、ちよつと、此處に下りてゐらつしやいよ。』かう言つて母親が整子を傍に下ろしたのは、それはもう餘程經つてからであつた。やさしい言葉をかけて小さい饅頭を呉れた上さんは、もうとうに何處かの停車場で下りて行つて了つた。前には父さんのやうに髯の生

赤い肩掛

整子が綺麗な着物を着せられた時には、喜んで飛んだり跳ねたりした。長い大きな鏡に自分の姿の映つたのを見ながら、『整ちやん、おべべキレイね……赤い肩掛！』

首に卷いてゐる白い毛で縁を取つた赤い小さな肩掛は、何んなに整子の眼を喜ばしたか知れなかつた。『赤い肩掛ね……赤い肩掛ね。』と廻らぬ舌で言つて、そして、それを人々に見せて歩いた。母親はその肩掛をある町の通りの小さな唐物店で買つた。そこでは明るい瓦斯が青白く店を照してゐた。店には莞爾した番頭がゐた。『これでよう御座んす。何うせ小さい兒なんですから。』かう言つて母親は買つて來た。

整子は吃驚したやうな顏をして、動くものを見てゐた。動くもの、實際、何も彼も動いた。青いものだの、白いものだの、黑いものだのが一緒になつて動いた。轟といふ音が絶えず聞えてゐた。

動いたものが少し靜かになつたと思ふと、窓の外を人がぞろ〱通つて行つた。赤い着物を着て、母

『何うして？』

『丸で前のやうぢやない……』

『何う？』

『元氣が好いんですもの。』考へて、『もう、私なぞ何うでも好いのね。』

『そんなことはないよ。』

『さうかしら。』

私は笑つてゐた。女はその時椅子に腰をかけてゐた。その朝横に倒れてゐた同じ椅子に……。』

『さう？　道理で……』

かう女が言つた。私は微笑した。

私の二階の空氣は不思議な色彩を着けて來た。今まで單純な心持と單純な調子と單純な色彩とで成立つてゐた二階の空氣は、此頃影だの日向だのを帶びて來た。光線が絶えず動搖した。

堪へ難い懊惱を女に渡して了つたやうな氣分で私はゐた。女が三週間來まいが、一ヶ月來まいが、恨みがましい言葉はつひぞ私の口から出なかつた。女が望んでゐる熱い心持には何うしてもなれなかつた。手答へがないので、女が手持無沙汰でゐる樣子が私にはよく解つた。

私は女を送つていつものやうに停車場まで行つた。

『左樣なら。』元氣な聲で私は別れを告げた。

今まで私はよく男の話をした。それを近頃はおくびにも出さなくなつた。女が何んな男と一緒に歩かうが、何んな男と一緒に顏を鏡に映さうが、それを氣に留めようとはしなくなつた。

ある日、こんな話をした。

『貴方も此頃變ですね。』

娘はすぐ下りて行かうとした。

種々な物が娘には出來た。蝙蝠傘だの、ヴェールだの、純金の帶留だの、新しい一重の夏のコートだの――。此頃娘が女優か何ぞのやうな綺麗な扮裝をして、町の方へ出て行くのを、近所の上さん達は何の彼のと言つて噂をした。

娘の買つて來た草花の鉢が二階の卓の上に置かれてあつた。それを女が見てゐたりした。

『何うしたんだらう。あの娘は？』

かう言つて、女は娘の後姿を見送りながら『ちよつと來ない內にあゝも變るものかねえ。本當に、若い娘は一日と言はれないねえ……』

かう言つて不思議さうに、女から姿をかくさう――隱さうとしてゐる娘の方を見てゐた。

『それに、見違へるやうに綺麗になつた。』こんなことも言つてゐた。

私の顏をじつと女が見てゐたりした。

『何か出來たんぢやないか？』

『さうだらう屹度、……中佐とか大佐とか言つたよ。』

男は得意さうな顏をして言つた。

私は娘が店の一隅に小さくなつてゐるのを見た。

其夜は女は早く歸つて行つた。

呼んでも娘は容易に二階に上つて來なかつた。それをつれて來るのは一方ならぬ骨折であつた。

『私、もう、怖い！』

『何が――』

『あの人が。』

『そんなことがあるもんか。怖くなんかありやしないよ、平氣でゐる方が好いよ。』

『でも、あの人怖いわ。』私の顏を見て、『貴方も怖い……』

『何うして？』

『だつて私、イヤな氣がした。』

私は娘の心を讀むことが出來た。

『好いよ、そんなに心配しないでも……もう段々來なくなるから……。それに、知らん顏をしてゐれば好いんだよ。』

『だつて……』

されつゝあつた心に誘はれて行つた。娘も笑つて此方を見てゐた。私のついでやつたウイスキーの小さな盃を、その時娘は嘗めるやうにして飮んでゐた。

娘は椅子に腰をかけてゐた。

女のいつも腰をかける椅子だ。私は……私は……私は……。

今朝見ると、椅子が倒れかゝつてゐた。

『處女ぢやない、處女ぢやない。』私はもう一度言つて微笑した。

金の指環――波に千鳥の彫刻のある金の指環を、それから三日目に娘は左の手の藥指にはめてゐた。綠の寶石の入つた指環をもはめた。

その次の週間に、女は遣つて來た。

女は細かな刺繡をした夏襟をして、透き通るやうな着物を着てゐた。『用があつたもんだから。』などとそれでも申譯らしい口の利き方をした。

『何うしてたの、矢張、來てたの？』

『あゝ來てた。』

『其時、何を話したらう?』私はかう思つて昨夜の光景を眼の前に浮べて見た。さうだ、女優の話だッた。女優になりたい、何うかして女優になりたい、かう娘は言つてゐた。

『女優になつて、何うするんだえ?』

私が訊くと、

『だつて、私など、こんなにしてゐては、いつまで待つたつて、うだつがあがりませんもの。女優になりたいわ……女優になりたいわ。』

『それより士官の細君の方が好いよ。』

『いヤアよ、軍人なんか。』甘えるやうに言つて、『この二階に、前に若い士官の夫婦がゐましたけれど、いヤアよ、あんな生活……惨めなもんよ、軍人の生活なんて。』

『女優だつて、中に入つて見れや、そんなに面白いもんぢやないよ。』

『面白くなくつても好いの、女優なら。女優にして下さいよ。』

『そんなになりたいかな。』……………………

『なりたいわ。何でも勝手なことが出來ますもの。』

こんなことを言つてゐた。私が女優を知つてゐるので、それで頼みに來たのであつた。『それから何を話した?』私はかう自分で自分に訊いて見た。私はまた微笑した。その時私はふと私と娘との間に展開

した。

私は聲をかけて見ようかと思つた。しかし私はこの朝の忘れられない感じを十分に味ひたいと思つて止した。『もう、あの娘も僕のものだ！』かう思つて私は得意な微笑を洩した。

娘は釣瓶から水を手桶に明けた。二つの手桶はやがて一杯になつた。

『何んなことを考へてゐるのだらう！　昨夜のことを考へてゐるだらうか。』かう思つた時、娘は何氣なしに此方を見上げた。

『まア――』

娘はかう言つて笑つた。

娘は暫らく立つてゐたが、內から母親に呼ばれて、そこに手桶を下げて入つて行つた。私はもう一度娘の姿の其處に現れるのを期待した。長い間、窓の處に立つてゐた。雨は細く降つてゐた。

娘の姿は容易に出て來なかつた。

『處女ではなかつた！』かう思つて私は微笑した。思ひもかけないことが突然地の中から湧いて出たやうな昨夜の事件を私は繰返して考へずには居られなかつた。『あなた、お邪魔しても好いの？』かういふ娘の聲がした。微かな小さな聲だつた。『ようござんすとも。』私はかう答へた。娘はこれまでにもさういふ風にしてよく遊びに來た。母親もそれを許してゐた。

女の言葉、女の表情、それが總て靜かにしめやかに降る雨の音の中に細かに展げられてゐた。

熱い心が段々に冷めて行く狀態は、それは丁度妬みの神があつて微かに竊かに隙間を狙つてゐるやうなものであつた。その神は二人が熱心に語り合つてゐる間に、いつともなくその力を働かして行つた。私はその力のひそかに通つて行つた跡を眺めた。

塵埃に埋れて花瓣の白くなつてゐる草花の鉢を私は見てゐた。『ケウユカレヌ』といふ電報が卓の下に落ちて、はつきりと灯に照されてゐた。

朝、私は裏の窓を明けた。烟が細い雨の中に這ふやうに低く靡いてゐた。向うには、物置があつて、薪だの、炭俵だのゝ置かれてあるのが半分見えてゐた。井戸側には釣瓶の竿が見えてゐた。

ふと、娘の姿が其處に現はれた。白い手拭を姉さんかぶりにして赤い襷を十文字にかけてゐた。物置の中にその姿を半分入れて、炭か何か出してゐたが、やがてそれがすむと、そこから雨を衝いて家に驅け入つた。

暫くしてその姿はまた井戸端に現はれた。釣瓶の竹を持ち上げる白い腕が梭のやうに行つたり來たり

むやうな心持で、凝とその鏡の中の私の姿を見てゐた。

箪笥の上には、女の鏡臺が載つてゐて、そこに白粉の小さな罎が並んで置いてあつた。私は靜かに思ひ廻してゐた。不思議にも、其夜は私の心は落ち附いてゐた。いつものやうな懊惱からは全く自由にされてゐた。

私は私達のこの二階に就いて、いろ〳〵思ひめぐらしてゐた。熱い人間の心が冷めたい自然に歸つて行く狀態がことに歷々と思ひ浮べられた。私達に初めて發見されたこの二階は、冷たい靜かな空氣から何んなに俄かに暖かい賑かな空氣に變つて行つたらう？　貧しい單調な灰色の壁は、忽ちにして、いろいろな色彩に富んだ額やら寫眞やらで埋められ、佗しい暗い天井は明るい電燈や瓦斯で晝のやうに照され、古びた長押は、派手な長襦袢や燃え立つやうな紅い裏地などで繪のやうに彩られた。卓の上には、何んな時でも草花を絕やしたことはなかつた。そして私達はその明るい灯の中で、小さい杯にいろ〳〵な酒をついで飮んだ。

ほんのりと酒に醉つた女の薄紅色の顏は、其處にも此處にも見えた。

此の一間では、女は何物をも隱さなかつた。總てを男に示した。私達は出來るだけの快樂を其處で盡した。何たる飽滿だつたらう？　何たる贅澤だつたらう？　何たる豐富な色彩だつたらう？——然し今はもう過去だ。私はそれを追憶する身になつてゐるのだ。

『それは分らないけれど、もつと明るい快活な處に行つたら、また屹度面白くなりますよ。』

『さうかしら――本當にさうなら、さうしても好い。』かう言つた私は、娘の無邪氣な顏を思ひ出してゐた。

しかしその話はそれ切りであつた。女は強ひてさうしやうとも言はなかつた。忘れたやうになつてゐた。

三度目の日には、『ケウユカレヌ』といふ電報を打つてよこした。娘がそれを持つて來たが、覗き込んで、『何うなすつたんでせうね。』と言つた。陰鬱な雨が毎日毎日續いて降つてゐるといふやうな時節であつた。窓を明けると、人が高い足駄を穿いて、番傘などをさして通を歩いてゐた。

娘と私とはその時何か話した。

『軍人なんかきらひ！』

かう言つて笑つた娘の顏を、私は後まで記憶してゐた。

私は雨を衝いて歸る氣にもなれなかつた。で、私は一夜を其處に送ることにした。外では雨が容易に止まないと見えて、雨だれの樋をつたふ音が絶えず微かに聞えて來た。

電燈がぽつちり點いて、それが西洋の草花の鉢植の置いてある寂しい卓の上をさびしく照した。前の鏡には私のさびしさうに坐つてゐる姿が電燈の白い笠と一緒になつて映つてゐた。私は自分で自分の憐

『餘りつまらないから、何處か變つたところに私達の二階を移しませうか。』

ある時、女はかう私に言つた。

『だッて、こゝで好いぢやないか。こゝより好い處などがちよつと捜したッてありやしないと思ふがね。』

『さうでせうか。』

私の顏を見て、『だッて、この室にも厭きたやうな氣がするもの。停車場から下りて來ると、屹度あの色の白い車掌がゐて、顏の大きい車屋がゐて、いつも莞爾と愛嬌のある母さんと娘とがゐて、そして、この暗い二階に貴方が蒼い顏をして待つてるんぢやないの？』

『蒼い顏かえ？　僕は――』

『蒼い、元氣のない顏をしてることが多いよ、此頃は――。何うして、あの初めのやうな氣分になれないんでせう。私もさうだッたけれど、貴方も元氣でしたね。本當に面白かつたんですもの。』

『それはさうだね、あの時分の方が元氣で面白かつた。』

『さうでせう、だから、私達の二階を變へる方が好いと思ふんだけど……』

『さうしたら、面白くなるだらうか。』

私ほかう言つて女の顏を見た。

つて戻つて來た。
私は女の熱情の一回は一回毎に冷めてつめたくなつて行くのを知つてゐた。ある時こんな會話をした。
『何うしてかうでせう？』
『何が――？』
『私よ。ぢき氣が沈んで了つて仕方がないんですもの。』
『面白いことがないんでせう。』
『それもさうかも知れない。私の性分でせうけど、私はぢき倦きるのね。何でも初めは面白いけど、ぢき灰色になつて了ふのね。』
『始終、面白くなくてはいけないんでせう？　平凡な境には生きてゐられないッて いふ風な んでせう？』
『さうねえ。』
『それに、物を知つて了ふと面白くなくなるッていふ處があるね。』
『さうねえ。』
女が詰らなさうな顏をしてゐる時ほど氣分のジメ〳〵する時はなかつた。何うかすると、卓に凭りかかつていかにも詰らなさうに女は物を考へてゐた。

女の顏はもう少し前に飮んだリキウ酒に醉つて、派手な美しい薄紅色に染つてゐた。少しく醉つた時にのみ見ることの出來る柔かな自由な線は、女を五つも六つも年より若く見せるばかりではなかつた。其處からはあらゆる淫らな氣分が漲るやうに出て來た。――私はその氣分の快樂に醉ふために、寢る前にいつも女に酒を勸めたことを思ひ出した。

私は女から得たあらゆる快樂を他の男に移して想像した。幸福な男に。女のあの熱い心を、何處かで、何處かの樂園で得てゐる男に――。

私の受けた快樂は、皆な私に謀叛を企てた。それが一つ一つ嫉妬に燃えた私の心に反響して行つた。最初の快樂、それは何んなだつたらう。背の高い白い姿が影のやうに、靜かな、薄暗い、室の空氣の中に入つて來た時は、それは何んなだつたらう。頭はガンとして心臟の皷動のみが高く聞えたのを私は覺えてゐる。

初めて女がその意を示した時には、

『本當?』

かう言つて、顏に生々した色を呈して、そして傍に寄つて來た。私は喜悅と感謝と成功とで胸が一杯になつて、何ッて言つて好いかわからなかつた。私は唯堅く女の手を握つた。

全速力である世界からある世界へと飛んで行つたその大きな快樂――それが今は皆な私の胸にはね反

女がある時かう言つたことがあつた。で『ぢやいつまでもかうしてゐるんですか。』私はすぐ反問しかけて止した。其處が私達の越えることの出來ない最後の一階段だ。

電車は快く駛つた。

毛氈を敷いたやうな緑の斜草地が眼の前を掠めて行つた。

それは林の陰になつてゐた。日影が紅葉を篩つてチラ〳〵とその滑かな芝生の上に落ちてゐた。其處に若い男女がゐた。女の白いリボン、男の麥稈帽――電車はその傍を掠めて滑かに通つて行つた。

女の來なかつたことが三週間續いた。女が旅にも何處にも行つてゐないことは、新聞で知れた。女の家には交際社會の男だの女だのが行つたり來たりしてゐる。その交際室――大きな鏡のある、立派の毛氈を敷詰めた、蘇鐵や松の硝子窓越しに見えるその室、それを私は暗い私の樂園で想像してゐた。大きな鏡に映つた女の淫蕩の顏と體とを私は想像した。その鏡はその時屹度女と並んだ男の顏を映したに相違なかつた。

ハイカラに分けた髮、短かく刈つた口髭、女は派手な着物を着て、その男と手を組合せて、長い廊下をその大きな鏡の方へと歩いて行つた。鏡に映つた影は鏡に近づくにつれて、段々大きくなつて行つた。

郊外の家の縁側には夜着だの着物だのが干してある。日がキラ〳〵する。それについて心がキラ〳〵する。――二階の卓の上には、此前の週間に、ダリアを持つて行つて置いたが、娘は水をやつて呉れたらうか。主人のない室の中に暗く萎れ果てゝはゐないだらうか。『だつて、私、知らなかつたんですもの。』かう言つて娘の笑つてゐる顏が見える。娘が若い士官を相手に面白さうに笑つてゐる聲が聞える。

……氣が附くと、娘と自分との間に段々醸されて來た空氣を私は頭に浮べてゐた。同じ顏を毎日十年見てゐても何の反應を起さないやうなのもあれば、見てゐる中に段々一種の氣分を醸して行くやうなものもある。そしてある機會が來て、その醸された氣分にぱつと火が點く。

私の前に丸髷の女がゐる。それが隣の男と話してゐる。

『さやうで御座います、……もうすぐ暑くなります。』

『お宅では變りはありませんか。』

『難有う御座います。お蔭樣で……』

丸髷の女の顏に笑を帶びた一種の表情がある。男のあたらしい夏帽には、涼しい風が絶えず吹いて來る。………

『だツて、何うしたツて、貴方の言ふやうには出來ないんですもの。』

前へ進んだり後へ退いたりしてゐた。それでも、私の心はいつの間にか女の方に偏つて行つてゐた。氣が附いて見ると、女の態度が此頃冷淡になつて行つたやうに思はれた。寧ろさういふ風に冷淡に見え出して來たことが私には苦痛であつた。時には女の方から偏つて來て、そして自分が離れて行つたりした。『好う御座んす。貴方ばかりが被要求者ぢやない。好う御座んす。』かういふ表情を顔に表して女が歸つて行く頃は、まだ心丈夫なところがあつたが、今では、もうさうした表情を示すやうなこともなくなつて了つた。白い冷めたい大理石のやうな顔だ。

『私について來られるなら來て御覽なさい。貴方にはとてもそれは出來ない。』此頃ではそのい白い顔は確かにさう言つてゐた。

不思議にも私の心はその冷めたい心に向つて震へた。それは冷めたいが爲めに震へたといふやうな震へ方であつた。女のかげにゐる男達に對して私の心が熱したのだ。

疲れた心だ。――氣が附くと、私はその電車に乘つてゐる。

電車は全速力で駛つてゐる。

花はもう散つて了つた。綠葉が到る處の林を包んで、麥の綠は長くなつてゐた。折れ曲つた細い川が銀線のやうに光つて見える。

『私の樂園に比べたなら、まァ何といふさびしい心細い世界だらう。塵埃、泥濘の中を人は蒼い顏をして歩いてゐる。車を曳くもの、朝早くから工場に通つて煤烟の中に一日を送るもの、出勤時間に後れてはと急いで停車場へかけつけるもの、人間は灰色の世界に生きて、灰色の空氣を吸つて、痩せて、汚い衣を着て、そして働いて生きてゐる。何といふ慘な世界だらう……。しかし私の樂園にはさうした空氣は入つて來ない。其處には、風が吹き、雨が降り、時には黑い雲が襲ひかゝることがあつても、それは灰色した世界の雨や風や黑い雲ではない。皆な强烈な色を持つたものばかりだ……。苦悶、懊惱、さういふものでも、矢張その灰色の世界のものとは違つてゐる。紅い火の舌のやうな懊惱だ。――』

ある日の私の日記には、かういふ文句が書かれてあつた。それは三月十五日のところである。『赤い花、赤い血、赤い心』などいふ字が一面に書いてあつた。

『私の二階！　私の樂園！　それももう……』ある日のところには唯かう書いてあつた。

秘密の細い絲が切れたと思つては、また續いた。

週間ごとに、女に對する心持が絕えず變つてゐた。女に對する噂！　それが何うかするに、新聞などに出ることがある。虛僞であらうが何であらうが、それが私の心を種々に動かした。

私は私の心の細かい硏究者であつた。一月以前と十日以前とそれと今とをよく較べて見た。私の心は

しい壓迫を受けた。

女は立つて瓦斯の線を引いた。と、室の中は柔かい靜かな光線になつて行つた。で、その靜かな光線の中で、女は長い間厚い西洋の小說本を讀んでゐた。それは面白い面白い一度讀み始めては到底最後の頁まで讀まなければ置けないといふやうな本だと女は話した。

私は眠つたり覺めたりしてゐた。夜中にも、女は依然として——愈々深くその興味に捉へられたといふやうにして、その本に讀耽つてゐた。私は寢惚けた眼で、それを上から覗いて見た。『まだ讀んでゐるのかえ？』かう言つてまた私は眠つた。

私は其夜は、尠くとも四度までは、さうやつて女の讀んでゐる本を上からのぞいた。女の眼はいつもパッチリと大きく明いてゐた。何かかう他界の力にでも引き搘られるやうな興奮した顏色をしてゐた。『あゝ——』などと長大息をついてゐた。

夜明近くなつてから、女は寢た。其時、女は立つてもう一度瓦斯の線を引いたのを私は知つてゐた。で、私が翌朝眼を覺した時には女はぐつすり寢てゐた。繪に書いた女のやうな寢顏をこつちに見せて、何も知らずに熟睡してゐた。雨戶の隙間からは、朝の光がさして、通を行く人の足音が高く聞えてゐた。

昨夜、讀耽つた厚い本は、開いたまゝ、女の枕元に投り出してあつた。私はそッと起きて、雨戶を一枚明けて、新しい空氣を吸ひに下に下りて行つた。雨は拭つたやうに晴れた美しい朝だつた。

『だつて、ないんですもの。』女は體を長く出して、卷煙草を吸つた。

『あの女の肖像の持主は？』

『…………』

『あなたの家に出入りするあの若い役者のやうな男は？』

『…………』

『あの髯の生えた男は？』

『…………』

女は何を言つても默つて笑つてゐた。

私も終には疲れて默つて了つた。『そんなこと、何うだッて好いぢやありませんか。唯、かうしてゐさへすりや好いぢやありませんか。』かうある時女が言つたことを私は思ひ出してゐた。『しかし、それは出來ることだらうか。唯かうしてそれで滿足してゐられるだらうか。力と力とがうまく平均して、卽く時にも過不及なく、離れる時にも過不及なく、すつと靜かに寄つて來て、そしてすつと靜かに離れて行くことが出來るものだらうか……？……？出來るものだらう。出來なくつてはならないものだらう。いろいろな羈絆や、いろ〳〵な情實や、いろ〳〵な過去の追憶や、さういふものを離れて了へば、唯それだけで滿足することが出來るものだらう。』――此時私は女の強い力を總身に感じた。同時に私の心は靑苦

して女に渡した。
長押にかけた濡れた着物の紅い裏地が、電燈の灯に袷かなんぞのやうに見えてゐた。女は長襦袢の上に寢衣を着て、黒繻子の帶をして火鉢の傍に坐つた。
『來ないかと思つたでせう……今日は泊つて行くのよ。』
私の耳にはその『泊つて行くのよ』の一語が際立つて強く響いた。私は私の體の動搖するのを覺えた。
『好いのかえ？』
『だつて、歸れやしないわ。此雨ぢや――』
その言葉の中には『もう構はないわ、何うなつても。』といふやうな調子があつた。一間は俄かに暖かな春のやうな氣分で滿されて來た。女は藏つて置いたウイスキーの罎を取り出した。

ウイスキーの罎と、ペーパーと、女の長襦袢と、雨と、――明るい電燈と……。
私達は話した。
『今日は何うしても聞かしてお呉れ。』
『聞かすやうなことを持つてやしませんよ。』
『隱したツて駄目だ。』

にゐるに相違ない……。これまでの話を女が決してして聞かせないのもその爲めだ。……女の本性を……さうだ、女の本性をすつかり看破つてやらなければならない。』

私は益々深い黒い淵に落ちて行つた。

……ふと、下で『只今、只今、あけます。』といふ聲が聞えた。私は耳を敧てた。しかし雨の烈しく降る音に遮られて、暫しは何も聞えなかつた。やがて『まアまア、濡れましたね、奥さん！』といふ母親の聲が聞えた。私は躍り上つた。

やがて、階梯を靜かに上つて來る女の足音が聞えた。私はそれを聞きながら、つとめて平氣を粧つてじつとして坐つてゐた。襖がすうと明いて、女の白い顔が浮き出すやうに其處に現はれた。

『お、寒い、すこし當らせて頂戴。』

コートのまゝで、濡れたまゝで、火鉢の處に來て、手と顔を其處に出した。暖かい、むつとした、蒸すやう氣が樂園のヒロインの來ると共に一間に滿ち渡つた。

『濡れたね。』

『だッてひどい雨ですもの。』かう言つて、コートをぬぐと、下から派手な長襦袢がチラ〳〵と見えた。

『寢衣があつたわねえ……濡れたから、着改へるわ』貴方取つて頂戴！』

その命令を男は拒む能力がなかつた。男は後の唐紙を明けて、押入の中から大島の着古した寢衣を出

『戸を閉めましてよろしう御座いませうか。』

かう母親は階下から聲をかけた。

今までにも來ないことはないではなかつた。電報を打つてよこしたことなどもあつた。豫め手紙でその都合を知らせて來ることなどもあつた。しかし斷りなしに來ないことはこれまでに一度もない。……私は寒いさびしい心持を抱いて、じつとして坐つてゐた。飲んだ酒もすつかり醒めて了つた。

私と女との間に繫がれてゐる秘密の絲、それを私はまた手繰り始めた。。それは細い細い丁度電球の中にある細い線のやうなものであつた。『だつて……私だッて。』かう女がいつも言つた。でなければ、默つて私の顏を見てゐた。私はかうした樂園を容易にもう一つ他に想像することが出來た。女は何處かにさうした樂園をつくつて、この雨の夜を樂しく送つてゐるかも知れなかつた。女の半生と女の肉體とは私にそれを肯定させるに十分であつた。色の白い、綺麗な、年の若い、才のある男が私の眼前を往來した。私に與へたやうな快樂を他の男に……。

……秘密の絲は震へた……

『或はもう自分に倦きて來たのかも知れない。』こんな考が雨のザン〳〵降る音の中に無限に雜つて波を揚げてゐた。

『あの電車の中で見た紳士……いや、それではないだらうが、交際家のかの女は、あゝいふ男が澤山

に立つてゐた。本堂ではおつとめの朝の讀經が始まつた。

冷たい空氣が私の熱い心に沁み透るやうに呼吸された。

ある夜、女は遲くまで來なかつた。

それは雨の盛に降り頻る夜であつた。私は其日は三時過ぎに來てゐた。私は横しぶきに降頻る雨の中を蝙蝠傘に凌いで驅けるやうにして遣つて來た。外套を被てゐても、羽織の袖はしとゞに濡れた。それを店で見てゐた娘は、わざ／＼二階に上つて來て、『羽織を乾かして上げませうか。』と深切に言つて呉れた。

女が來ないので、いつもの料理を取つて貰つて、長火鉢の傍で、茶湯臺を出して、私は一人で食事をしてゐた。雨の夜の樂園、それも私には樂しかつた。停車場の灯が雨にチラ／＼してゐるのを見てゐると、私は何だか遠い旅にでも來てゐるやうな心持がして、思はず唄なぞが口から出た。――トタンの樋から落ちる雨水は、ザンザンと凄じい音を立てゝゐた。

十時頃になつても女は來なかつた。娘が上つて來て、『今日は入らしやらないでせうね、此雨では――』などと言つて、其處に坐つていろ／＼な話をし出した。

暫くしてから、

路傍には小さな綺麗な川が流れてゐた　岸には洗つた菜の莖だの葉だのが流れ寄つてゐた。

暫く經つた後には、私はとある高臺の寺の石階を登つてゐた。淡竹の藪には朝日が當つて、雀が寒さうにチユー〳〵言つてゐた。下の菜畠の向うの家では、婆さんが手拭をかぶつて桔槹の水を汲んでゐた。

眼の前にはひろ〴〵として野が展けた。疎らな榛の林を隔てゝ、朝日が丸く赤く輾り出した。遠く製紙場の烟突の烟が見えた。

不思議な人間と不思議な天然とを考へながら私は歩いて行つた。自分の今まで遣つて來たことがすつかり眼の前に浮き出して來るやうに思はれる。かうした人間とかうした天然とが何の交渉もなしにかうして存在して居るといふことが不思議である。昨夜のことを考へると、――いや寧ろ私の樂園のことを考へると、戸外一歩を隔ててかういふ天然があるといふことがいかにしても不思議である。……しかし不思議でも何でも仕方がない、何うにもならない。

私は此時不圖生存といふことを考へた。生存と快樂と……生存と快樂と何故かう一致しないだらうか。生溫い、中ブラリンの快樂に妥協してゐられる人には、それは問題にはならないが、熱烈な不健全な快樂を受けなければ滿足が出來ない人には、快樂の爲めに生存が何故不可能になるだらうか。何故二つのものは一致するやうに作られてないだらうか。……私は唯立つてゐた。唯じつとして寺の境內の垣の處

で送つて、そして歸つて來て寢た。いつもの快い疲勞を味ひながら、ぐつすり寢込んだ。それを私は思ひ出してゐた。女の肖像は私を見てゐた。

窓を明けると、外はよく晴れてゐた。霜が屋根に白い。――私は急いで空氣の沈滯した女の匂ひの滿ち渡つた私の樂園から遁れ出た。私は新しい空氣を吸ひたいと思つた。

早い朝の町は靜かであつた。黎明の光が微かに屋根を越して田圃の上からさして來てゐた。反古だの蜜柑の皮だの毛絲の屑だのの落ちた上に、霜が白く置いてゐた。

湯屋の細い烟突からは、黄い青い烟が薄く颺つてゐた。

汽車の踏切の處に、白い旗が出てゐると思ふと、客車に貨車を連結した北國行の一番汽車が、凄じく地を撼かして通つて行つた。

私の心は不思議にもその朝の霜のやうに冴えてゐた。私はいろ〳〵なことを考へながら歩いて行つた。『かうした朝は、自分の一生に取つて記念とするに足りるものがあるんではないか。』かう思ふと、この町――今まで、一度か二度しか來なかつた町が、女の爲めにかういふ深い印象を殘すやうになつたといふことが不思議にも意味深くもあるやうに思はれ出した。

私は踏切を越えて向うに行つた。そこには、町の外郭といふやうな場末の町があつて、八百屋の上さんが赤い襷をかけてせつせと働いてゐた。朝早く、菜を荷車に載せて市場に運んで行く男などもあつた。

『何方へ？』

『まア――』私は女といふものゝ度胸のすぐれてゐるのを此時ほど感心したことはない。女は狼狽へもせず、顔の色をもかへず、全く自分一人であるやうな風をして、落附いた調子で、そのフロックコオトの紳士と話した。

『大層遅く！』

『え、ちよつと用事が御座いまして……それに月が好いもんですから。』かう言つて、『貴方は何方へ。』

『川向うへまゐりまして。』

『何か演説にでも……』

『相變らずごた〳〵してゐます。』

政治や教育の話を女は平氣でしてゐた。私は默つて隅の方に小さくなつてゐたが、何となくその紳士の顔が愚かに見られた。

その次の週間に逢ふと、『本當に困つた！　あの位困つたことはありませんよ。貴方は笑つてゐるんですもの。』かう言つて、『でも、解らなかつた。役者が上手ですからね。』笑ひながら私の顔を見た。

もう冬が來てゐた。ある寒い朝、私は私をその二階の床の中に見出した。昨夜十時過、女を停車場ま

乘換の場所に來ると、私も女も一緒に下りた。女は向う側の電車に行つた。誰も見てるものがゐない時には、女は傍に寄つて來て、ソッと握手をして行つたりした。女の方の電車の遲い時には女の白い顏が此方の電車の中から見えてゐた。

『俺の女だ。』

私はまた心に叫んだ。

月の明るい夜などもあつた。さういふ時には、私達も少し早く家を出て、田舍町をブラ／＼歩いた。もう十三夜を過ぎた後なので、夜の空氣は寒く肌に沁みた。町でも大抵戶をしめてゐた。コートに包まれた女の影は濃く地上に落ちてゐた。

小さな祠見たやうなものがあつて、其處から太鼓の音が聞えて來た。私達はそれを目的に步いて行つた。そこには子供達や若い衆などが集つてゐた。拙い繪を張つた燈籠などが一軒每にかけてあつた。ドドンコ、ドドンコ――月は流るゝやうな光を四邊に漲らせた。

『もう歸りませう。』

女はかう促した。

ある時は、またかういふことがあつた。電車に乘つて、筋違ひに腰をかけるとすぐ、紳士風の三十五六の男が不意に立つて此方に遣つて來た。

『あの娘は駄目ですよ。』
こんなことを言つた。また、或時は、『あの娘は、もう處女ではないのね。軍人を相手にしてるのよ。』
などと言つた。始めは私には何故女がそんなことを言ふのか解らなかつたが、後には段々解つて來た。
『大丈夫だよ。』
私はかう言つて笑つた。
一緒に歸る時には、私達は停車場からプラットホームに出で、長い橋を渡つて、そして向う側の電車のゐる方へと行つた。明るい電車の車室！　くつきりと浮き出すやうな女の白い顏、それは何んなに私に明るい快い印象を與へたであらうか。私はその刹那ほどはつきりと女をつかんだやうな氣がすることはなかつた。しかし私達は他人のやうに筋違ひに腰をかけるのを例としてゐた。女は知つて居る人に逢ふことを非常に恐れてゐた。
他人のやうに――實際他人のやうにして、わざと知らん顏をして私達は腰をかけてゐた。電車は全速力で駛る……駛る……電線から火花を散して駛る……。その中で、明るい車室の中で、今少し前まで心と心とを合せた男女が知らん顏をして互ひに向ひ合つて腰を掛けてゐるといふことは、私には實に何とも言はれない不思議な感を起させるに十分であつた。『俺の女だ！』かういふ男性の得意な矜持が私の體を動搖させた。

西の窓に當る夕日の金色の中に、私と女と默つて坐つてゐることなどもあつた。汽車の音は絶えず前を掠めて行つた。『何處か遠くへ行つて見たい！』かう女が言つて、窓をあけて見た。

六疊の方の高窓からは、停車場がすぐ正面に見えてゐた。包を持つた旅客が入つて行つた。時には、車掌や助役が此方に向つて歩いて來た。夕飯を近所の官舍に食ひに行く驛長の姿なども見えた。

つひぞ泊つたことがなかつた。何んなに遲くなつても、最終の電車には、女は屹度歸つて行つた。私も大抵は一緒に歸つたが、何うかすると『僕は泊つて行く。』かう言つて一夜を其處に明すことなどもある。柔かい、人の神經をそゝるやうな女の匂ひは、女が歸つた後でも、依然としてその一間に殘つて何とも言はれないなつかしい空氣を四邊に漲らした。

私は何故か其女の歸つた後の一間の空氣に段々捉へられて行つた。女を送り出して――夜の晴れた時には停車場まで送り出して、そして歸つて來て、一間の中に入つた時の心持は、何とも言はず靜かな落附いたものであつた。それに、私は大抵は疲れてゐた。女の肌の暖味の殘つてゐる床の中で、私は熟睡した。

私はよく泊つて行つた。

しかし、女に取つては、これが快くないらしかつた。泊つて行く理由を度々私にたづねた。思ひもかけない嫉妬を浴せかけられたこともあつた。

なくなつて來た。

『あれから何うしました？』

『あれからッて？』

『前の週間に――』

『何も變つたことはありませんよ。』

『でも……少しは話して聞かしてくれても好いでせう？』

『何にもないんですもの。』

かうは言ひながらも、其週間に、自分の家に訪ねて來た男の友達のことだの、女の友達のことだのを話した。それを私は細かく手繰り寄せて考へた。

手繰り寄せて――實際さうだ。それに、女は熱い心を見せて居りながら、しかも、もう若い娘のやうに熱した態度を示さなかつた。

『そんなことは何うでも好いぢやないの？』かう言つて笑つた。

私はいろ〳〵な日と、日に由つて起つたいろ〳〵な感じとを味つて來た。秋はもう暮れに近かつた。林の楢の葉や、柞や、漆などは紅葉して、路傍の草藪には赤い小さい實などが見えてゐた。北へ向ふ汽車は、日毎に停車場に來て、白い烟を靡けて通つて行つた。

集めて縫つたやうなものであつた。

黒い髪が流るゝやうに、寧ろ潮の寄せて來るやうに……。

私は停車場を出ると、急いで、その突當りの二階家に行つた。

娘が大抵は其處にゐた。にこ〳〵笑つてゐるその笑顔で、女は來てゐるか、まだ來てゐないかといふことがすぐ解つた。『待つてゐらしつてよ。』などと言ふこともあつた。ある日、遲くなつて、灯のつく頃行くと、若い工兵の士官が三人ばかり、店で娘を取卷いて、いろ〳〵なものを見せて貰つて買つてゐた。瓦斯の靑白い光が娘の襟首のところに流るゝやうに落ちてゐた。

何方かと言ふと、女の來てゐる方が多かつた。女は別の電車で來た。私が階梯に音を立てゝ上つて行くと、女は卓の上で、椅子に腰をかけて書など讀んでゐた。林檎やバナヽやオレンヂなどがその上に轉がつてゐた。

女はナイフでそれを剝いて半分私にわけて呉れた。

室には電氣と瓦斯と兩方とも來てゐた。『何うも瓦斯は厭ですね、瓦斯をつけると、何處となく氣がふさいで來るんですもの。』かう言つて女は瓦斯を消して電氣をつけたりなどした。

一週間に土曜日一日、それ以外には、女の生活は廣い世の中のものであつた。私は段々それに飽足ら

『かういふ生活を、また何處かで、――何處か違つた室で見るだらうね、この額の女は？』

『さうかも知れない。』

女は笑つてゐた。

『僕に呉れませんか。』

『何うして？』

『何うしても……』

『私の一生の友達だつて言ふのに……』

『だから下さいつて言ふんです。』

『何故なの？』

『一生、貴女についてゐて、いろんなことをあの微笑を含んだ眼で見てゐないやうに……』

女は默つて笑つてゐた。其時であつたか、それとも一月二月經つてからだつたか忘れたが、女は『男の嫉妬つてをかしなものね。』と言つて私の顏を見た。

その時の眼色が今も眼の前にある。

私の眼の前には、赤と紫と白とをくゝつたくゝり目が際立つて見えてゐた。それは皆な縮緬の斷片を

『いゝえ、大變よ、そんなこと！』かう言つて女はそれを押しかへした。
『此頃は好いんですつてね。』
『いゝえ。』
『隨分久し振は久し振りね。三河屋で逢つた切りですね。』
『隨分久し振は久し振りね。三河屋で逢つた切りですね。』
ですけれども……でも、奧さんのことなんか忘れたことはないんですよ、これでも。』
かう言つて、すぐ言葉をついで、『お宅へ上らなけりや濟まない、すまないつて、始終中思つてゐるん
『えゝ。』
かう言つて、男と眼を合せて笑つた。其後も半年ほど女は男と逢つてゐた。
『お孃ちやんやお坊ちやん方は大きくお成んなすつたでせうね。』
『えゝえゝ、總領の娘は十三ですからね、私より丈が高いんですもの。』
『坊ちやんがゐらつしやいましたね、そら、二番目の坊ちやんが……何と仰しやいましたつけ。さう
さう、政行さん。大きくおなんなさいましたでせうね。』
『大きくなりましたよ。』
『もう、あの、末の孃ちやんきり、おあとはないんですか――』
細君は笑つて見せた。すぐ『また、お出なさいよ、たまには？』

二つの岩には白い高い波が砕けてゐた。白堊の土藏に續いた座敷には、品の好いお上さんとちよん髷に結つた主人とが丸い瀬戸の火鉢を挾んで息子の緣談のことを話してゐた。其處へ息子と惚れ合つてゐる町の娘が出て來た。

四

『奧さん！　其處。』

かう聲を懸けられた細君が仰向くと、銀杏返にして髮をふつくり出したお園が其處に立つてゐた。

『此方にお入んなさい。』

かう言つた時には、お園は既に其處から桝の間を傳つて此方に來ようとしてゐた。誰が見てもすぐ分る意氣な姿は、四邊の人々の眼を集めるに十分であつた。女は桝に入らうとする處で、鳥渡躓いて、

『あら大變！』と言つて、細君の肩につかまつたが、

『御免なさい。もう少しで。』

かう言つて、桝の空いた處に坐りかけると、

『お敷きなさい。』

自分の敷いてゐた敷物を取つて、細君がすゝめた。

道具を入れる音が絶えず聞えて、幕の下の方がぱつと電氣に明るくなつたりした。

待つてゐる間がかなり長かつた。細君は筋書を取つて、この次の世話物の筋を讀みかけて見たが、二三行讀むと、すぐよして、今度は土瓶から茶を一杯茶碗についで飮んだ。茶は溫く苦かつた。餘程自分も出かけて行つて見ようかと思つた……。

拍子木が入る頃になつて、亭主は漸く歸つて來た。

『ゐましたか？』

『うむ、ゐた、ゐた。』

『さうでせう、誰もお客と來てるんぢやないでせう？』

『うむ……』

『何處で話してゐたの。』

『其處の廊下の處で話してゐたんだよ。茶でも飮みに行かないかつて言つたけれど……今度は幕間が短いからつて行かなかつた……』幕の明くのを見ながら、『いゝ藝者になつたね。丸で見違へるやうになつたね。……もう、今ぢや抱妓が三人ゐるんだつて。』

『さう……』

細君はかう言つたきり默つて了つた。男も默つて舞臺の方を見てゐた。舞臺の背景には、海が見えて、

『あゝゐた、ゐた。』
雙眼鏡はかう言つた。
暫くしてから『一生懸命で見てゐるのね。』
舞臺では、若い髷に結つた武士が刀を拔いて、他の一人の田舍武士らしい男と丁々發矢と斬り結んでゐた。菊の花は依然として咲きそろつてゐた。若い武士の銳い刀が相手の橫腹を刺したと思ふと、相手の大きい男は撞と後に倒れて了つた。其處へ、白鬚の老人だの娘だのがぞろぞろ出て來た。

三

『鳥渡、行つて來る。お前、一緒に行かないか。』
幕が下りると、亭主はかう言つて身を起した。
『一人で逢つていらつしやい。』
細君はわざとかう言つて笑つてゐた。
振返つて見ると、男の大島の羽織は花道から出方の出てゐる細い廊下へと見えなくなつて行つた。
細君はぼつねんとしてゐた。前の桝にゐる庇髪の娘がすぐ前を通つて花道の方へ出て行つたり、出方が此方の客に壽司と茶とを持つて來たりする間、細君は太い大きい縦縞の幕を見てゐた。幕の內では、

した襟が映つたり、よくまアあんなに大きく出ると思はれるやうな庇髪が立つたり、出方の股引が動いたり、町の女の島田髷が見えたりした。しかし何處にもそれらしいものがなかつた。

……ふと、その雙眼鏡は、長い間動かずに一ところを凝視めてゐた。舞臺から數へて五つ目、綺麗な意氣な丸髷の細君がゐると思つて見てゐた眼は、ふとその隣に二三人のそれ者らしい女のゐる方へと移つて行つた。――其處に、舞臺の方を向いて、此方に横顔を見せてゐる色の白い小づくりな女、それが確かにお園だ。男の胸には三年前の其女を背景にして、さまざまの舞臺が繪巻物のやうになつて、急に簇つて集つて來た……。

『居て？』

細君が笑ひながら訊く。

亭主は點頭いて見せたが、雙眼鏡を取つた後の顔は、矢張笑を帶びてゐた。『それ、其處に、花道の向うに子供をつれた細君がゐて、その向うにかすりの羽織を着た書生がゐて、その二つ向う……』雙眼鏡を顔に當てた細君に向つて、亭主は小聲で教へてきかせて、

『ゐたらう？』

『鳥渡解らないけれど……そこに藝者が三人ばかりゐますねえ……』

『その中で、一番こつちにゐる……そら此方を向いた！』

などと細君は小聲で亭主の方を向いて言つた。しかし、その心は舞臺の上よりも、廁で逢つたその女の方に奪はれてゐた。……あの女が始めて家に來た時……始めは流石に極りがわるさうにしてゐたが、段々詞がはずんで來て、亭主をほつたらかして、一緒に長唄を彈いたり何かして一日暢氣に遊んだことがあつた……それから交情がよくなつて、一緒によく芝居へなぞ遣つて來た……此座へも來たことは二三度はあつた……その向うの棧敷の處に亭主と三人で來てゐたことなどがあつた……でも辛いこともあつた……腹が立つて仕方がない時などもあつた……舞臺には、若い髷に結つた凛々しい男が出て來てゐた。冴えた聲で、臺辭が流るゝやうに其口から出た。白鬚のお爺さんは、容態ぶつた風をして、床几に腰をかけて、其方を見てゐた。

二

亭主はオペラグラスを取つて、それを眼に當てゝ、舞臺の方を見てゐた。しかしそれは長い間ではなかつた。その雙眼鏡はやがて棧敷の方へと移つて行つた。

新橋の七人組の一人で、新聞の廣告などでよく見る顏の妓が、二三人の妓と一緒に其處に來てゐた。肥つた、鬚の濃い四十五六の紳士風の一人の男は、その妓達に押されるやうになつて、時々笑つたり、話しかけたり、酒を飲んだりしてゐた。丸髷の意氣な顏が見えたり、お納戸の地に黑くポツポツ縫ひを

『お園が？』

亭主の顔には驚愕と好奇心との表情が歴々と現はれて來た。

『來てるのかい？』

『えゝ。』細君は笑つて點頭いて見せて、『此方から聲もかけもしないのに、奥さん！　つて、傍に遣つて來て、「まァおめづらしい」つて、それはなつかしさうなんですよ。何時も若いのねえ。』

『何處に來てるんだえ？』

『うづらに居るつて言つたけれど……』かう言つて細君は四邊を見廻した。けれど、何處にもそれらしい姿は見えなかつた。

『お客と來てるんだらう？』

『いゝえ、さうぢやなかつたやうでしたよ。義理の見物に來てるらしい。……何とか言ふ姐さんとそれから二三人で來たつて言つてゐましたよ。……今度の幕間には、行つて御覽なさい。』

かう言つて細君は笑つた。もう幕は明いてゐた。綺麗な菊の花の庭が一面に其處に展げられてあつた。白鬚のお爺さんと下僕の男とが何か頻りに話してゐた。此方の方からは、綺麗な女が二三人遣つて來たりした。

『あれが橘屋ね。』

劇場で

一

『今、めづらしい人に逢つた……』

幕間に厠に行つた細君は、莞爾笑ひながら、かう言つて戻つて來た。

『誰に？』

『それや、めづらしい人……』細君はわざと落附いたやうに寧ろ相手の好奇心を一層強く引張つてやらうとするやうに。『誰に逢ふか知れないものね。』

『誰だえ？』

『今、便所に行つたら、人が一杯待つてるんでせう。おとなしくしてゐては、いつまでかゝるか知れないと思つたから、づうづうしく先へ行つて、やつと小用だけ足して出ようとすると、そこにお園さんが立つてるぢやありませんか――』

つでもあそこで食べるんですッて……隨分ね。』

面白さうに聲を立てゝ笑つた。

秋は段々深くなつて行つた。夜露が深く草に置いて、虫の音もたえだえになつた。月の明るい夜が幾夜か續くと、今度は雨がしと〳〵と降つた。時にはあたりが見えないほど深く夜霧の籠めることなどもあつた。二人の戀は依然として續いてゐた。女は停留場から、レールに添つて、毎日そのかくれ家へと遣つて來た。

かう一人が言ふと、

『この春あたり一緒にそこらをよく歩いてゐた男と女よ。あれは……。私など、よく逢つたわ。いつでも、向うの通りを通つて、上水の方に行つたわ。』

それと知つてゐる若い娘達はかう言つて調子を合せた。

『それで、泊つて行くの？』

『いゝえ、泊つては行かないやうですよ。夜は遲くなつても歸つて行くやうですよ。その證據には、朝はつひぞ見たことがありませんもの……さうね、男はね？　何をしてゐる人ですかね。一日、家に入つてゐて、滅多に外に出ることもないやうですよ。』

『何か始終書いてる人だツて言ふぢやありませんか。』

傍からかう他の一人が言つた。

『それで毎日來るの？』

『大抵來るやうですよ。』

『隨分大變ね。その位なら、一緒になつて了へば好いのに……。』

『本當ね。』

一人の若い娘は、『學校に行くツて、毎日辨當を持つて出て來るんですツて。そして、お午の辨當はい

やがて格子が明いて、女がにこ〳〵して入つて來た。

『つい、遲くなつて了つて……待つたでせう。出られなかつたんですもの。』

それでも急いで遣つて來たと見えて、額には汗が滲んでゐた。

『停留場で、車に乘らうと思つたんですけれど、生憎、今日はないんですもの……隨分急いで來たわ。』

始めて少し落附いたといふやうに四邊を眴して『いゝわねえ、靜かで。』かう言つて、笑つて男の顏を見た。

女には何だかこれが自分の家だと言ふやうに思はれて嬉しかつた。

女は押入を明けたり、勝手の方に行つて見たりした。そこに遣つて來た酒屋の番頭は、鍋も釜も勝手道具も何も置いてない、ガランとした臺所に、束髪に結つた派手な銘仙の着物を着た色の白い女の立つて居るのを不思議にした。

『御近所の酒屋で御座います。元の方にも御贔負になりましたから……』

かう言つて酒屋の番頭は新しい帳面を置いて行つた。

近所ではいろいろな噂をした。

『奥さんぢやないんですッて……まだ學校に通つてゐる女學生なんだッて、あきれたものねえ。』

秋雨のしと〳〵と降る日、新しい桐油をかけた一輌の荷車は、その御料地の傍の小さな家の前に置かれてあつた。小さな木戸は半ば明けられて、勝手元の窓からは、薄い烟が細々と立つてゐた。

車夫は、桐油の上に十文字にかけた細引を解いて、本箱だの、机だの、行李だのを家の中に運んで行つた。上り端には男が立つてゐて、それをまた奥の方へと運んで行つた。

箪笥もない荷物は、時の間に片附けられて了つた。男は机を六疊の床の間の傍に並べて置いて、それに向つて坐つて、獨りぼんやり庭の方を見て居た。

勝手元では、買つたばかりの七輪に、火が活々と起きて、土瓶の口から湯氣が白く颺つてゐた。

賃錢を貰つて、車夫が歸つて行つてから、三十分ほどはかうして靜かに經つて行つた。雨は少し音立てゝ降るやうになつて來た。

勝手の戸を明ける氣勢がしたので、立つて行つて見ると、それは頼んで來た蕎麥屋のかつぎであつた。

『其處と、彼處と、それから向うが一軒——』こんなことを言つて男は敎へてやつた。

早く來る筈の女はまだ來なかつた。

蕎麥を食はうと思つたが、腹が減つて居ないので、そのまゝそれを傍に置いて、また机の前に坐つた。御料地の大きな樹に降りかゝる雨の脚は長く白く此方から見えた。

『あんなこと言つて！　誰が、國になんか歸るツて言つて？』

『でも家を持つては今のやうに暢氣ではゐられないからね。』

『私も家賃位出すわ。』

女はそんな處まで話を持つて行つた。

隱れ家！　靜かな隱れ家！　それが一番多く男の心を動かした。自炊の面倒を思はぬでもなかつた。女の束縛といふことを考へぬでもなかつた。しかし、世離れた野末の家に、人目を避けて、戀を樂しむことが出來るといふことが、何よりも男には望ましかつた。六疊の一間、四疊半の一間、其處に女を置いて、男はいろいろな想像に耽つた。二人はこれまでにも人目を兼ねることに就いてのみ絕えず心を苦しめて來た。何處に行つても、自由に戀を語ることが出來ないのが何よりも不足であつた。であるのに、世離れたそのかくれ家！

『私も家賃位出すわ。』

かう言つた女の言葉をも男は繰返して考へて見た。

それればかりではなかつた。其後女からも、度々手紙で勸めて來た。男は何の氣なしに出かけたその散步が、かれの生活の一轉化をつくる動機となつたことを幾度も考へずには居られなかつた。

ふ。上さんは捌けた調子で『あなた方がお入りになるんなら、それは持つて來いでは御座いませんか。近所は喧しくなし、別に煩さい交際もありませんし、本當に、それは靜かで御座いますよ。』などと言つた。二人は顏を見合せて笑つた。

女は家といふものが珍らしいといふ風に、押入を明けて見たり、勝手元に下りて行つて見たりした。花壇の跡が庭にあるのに眼をつけて、『元ゐた人は、花を好きな人ね。』などと男に言つた。

あたりから懸離れてゐるのが、男にも氣に入つたらしかつた。上さんをつかまへて、大家の番地だの、近所の樣子だのを細かに訊いた。

『何うも御面倒でした。』かう言つて二人はやがて其處から出て來た。

暫く來てから、女は、

『好いわね。あそこをお借りなさいよ。下宿に居るよりはそれは餘程好いわ。』

『鳥渡靜かな家だね。』

『隱れ家には丁度好いわ。今はまだ駄目だけれど、段々私も來て手傳ふやうにするわ。それまで自炊してゐらつしやいよ。』

『國に歸る筈ぢやないか。』

男がわざと平氣な顏をして言ふと、

『さうすれば好いわね。』

『でも……』

『さうなさいよ。』

女は好いことを思ひ附いたといふやうに、『家を借りて自炊をなさる方が、經濟よ。』

『それでも自炊は閉口だね。』

『私が手傳ひに來るわ。』

こんなことを言つて二人は笑つた。

丁度其處に、御料地の垣に向つて、あたりからかけ離れた三間位の家屋が一軒あつた。通り過ぎようとした二人はふと貸家札の張つてあるのに目を附けた。

『そら、貸家があつてよ。靜かな好ささうな家ぢやなくつて？』

『さうだね。』

『見て行きませうか。』

『見て行つても好い。』

で、二人は其中に入つて見ることにした。大家が遠いので、家を預つてゐる二三軒向うの四十二三の元氣な上さんが、鍵を持つて來て戸を明けて呉れた。六疊、二疊、四疊半――それで家賃は五圓だとい

電車で別れて了ふのが惜しいと云つて、もう一度其處等をブラブラ歩いて見ることなどもあつた。其時には、二人はきまつて村の方へと歩いて行つた。

其處には汽車の踏切があつて、レールには明るい日が照つてゐた。年を取つた番人が白い旗を出してゐると、砂利を載せた貨車が幾つも幾つも重さうに地響をして通つて行つた。最後の車には車掌が青い旗を持つて顏を出してゐた。

それから少し行つた處には、小さい川が流れて、其岸では、布を洗つてゐる男などがあつた。レールに沿つた道には、蔓草が一面に蔓つてゐた。

ペンキ塗の西洋造の二階屋だの、周圍に建仁寺垣を結ひ廻した大きな門構の家屋などが到るところにあつた。そこを通りぬけて段々奥に入つて行くと、路は榛の疎らな林のある處に出て行つた。葎の絡みついた垣の中には、廣々とした綠の草が見渡された。

『御料地だね。』

『さう？　此處が御料地……好いわねえ、淸々して！』

女は垣の中を覗いて見た。

『此處等に住んでゐると好いわね。』

『さうだね、……いつそ、此處に一軒、貸家を見つけようか。』

『いゝえ、大變よ、そんなこと！』かう言つて女はそれを押しかへした。
『此頃は好いんですつてね。』
『いゝえ。』
かう言つて、すぐ言葉をついで、『お宅へ上らなけりや濟まない、すまないつて、始終中思つてゐるんですけれども……でも、奥さんのことなんか忘れたことはないんですよ、これでも。』
『隨分久し振は久し振りね。三河屋で逢つた切りですね。』
『えゝ。』
かう言つて、男と眼を合せて笑つた。其後も半年ほど女は男と逢つてゐた。
『お孃ちやんやお坊ちやん方は大きくお成んなすつたでせうね。』
『えゝえゝ、總領の娘は十三ですからね、私より丈が高いんですもの。』
『坊ちやんがゐらつしやいましたね、そら、二番目の坊ちやんが……何と仰しやいましたつけ。さうさう、政行さん。大きくおなんなさいましたでせうね。』
『大きくなりましたよ。』
『もう、あの、末の孃ちやんきり、おあとはないんですか――』
細君は笑つて見せた。すぐ『また、お出なさいよ、たまには？』

二つの岩には白い高い波が碎けてゐた。白堊の土藏に續いた座敷には、品の好いお上さんとちよん髷に結つた主人とが丸い瀬戸の火鉢を挾んで息子の縁談のことを話してゐた。其處へ息子と惚れ合つてゐる町の娘が出て來た。

四

『奥さん！　其處。』

かう聲を懸けられた細君が仰向くと、銀杏返にして鬢をふつくり出したお園が其處に立つてゐた。

『此方にお入んなさい。』

かう言つた時には、お園は既に其處から桝の間を傳つて此方に來ようとしてゐた。誰が見てもすぐ分る意氣な姿は、四邊の人々の眼を集めるに十分であつた。女は桝に入らうとする處で、烏渡躓いて、

『あら大變！』と言つて、細君の肩につかまつたが、

『御免なさい。もう少しで。』

かう言つて、桝の空いた處に坐りかけると、

『お敷きなさい。』

自分の敷いてゐた敷物を取つて、細君がすゝめた。

道具を入れる音が絶えず聞えて、幕の下の方がぱつと電氣に明るくなつたりした。

待つてゐる間がかなり長かつた。細君は筋書を取つて、この次の世話物の筋を讀みかけて見たが、二三行讀むと、すぐよして、今度は土瓶から茶を一杯茶碗についで飲んだ。茶は溫く苦かつた。餘程自分も出かけて行つて見ようかと思つた……。

拍子木が入る頃になつて、亭主は漸く歸つて來た。

『ゐましたか？』

『うむ、ゐた、ゐた。』

『さうでせう、誰もお客と來てるんぢやないでせう？』

『うむ……』

『何處で話してゐたの』

『其處の廊下の處で話してゐたんだよ。茶でも飲みに行かないかつて言つたけれど……今度は幕間が短いからつて行かなかつた……』幕の明くのを見ながら、『いゝ藝者になつたね。丸で見違へるやうになつたね。……もう、今ぢや抱妓が三人ゐるんだつて。』

『さう……』

細君はかう言つたきり默つて了つた。男も默つて舞臺の方を見てゐた。舞臺の背景には、海が見えて、

『あゝゐた、ゐた。』

雙眼鏡はかう言つた。

暫くしてから『一生懸命で見てゐるのね。』

舞臺では、若い髷に結つた武士が刀を拔いて、他の一人の田舍武士らしい男と丁々發矢と斬り結んでゐた。菊の花は依然として咲きそろつてゐた。若い武士の鋭い刀が相手の横腹を刺したと思ふと、相手の大きい男は撞と後に倒れて了つた。其處へ、白鬚の老人だの娘だのがぞろぞろ出て來た。

三

『鳥渡、行つて來る。お前、一緒に行かないか。』

幕が下りると、亭主はかう言つて身を起した。

『一人で逢つていらつしやい。』

細君はわざとかう言つて笑つてゐた。

振返つて見ると、男の大島の羽織は花道から出方の出てゐる細い廊下へと見えなくなつて行つた。

細君はぽつねんとしてゐた。前の桝にゐる庇髪の娘がすぐ前を通つて花道の方へ出て行つたり、出方が此方の客に壽司と茶とを持つて來たりする間、細君は太い大きい縦縞の幕を見てゐた。幕の内では、

した襟が映つたり、よくまァあんなに大きく出ると思はれるやうな庇髪が立つたり、出方の股引が動いたり、町の女の島田髷が見えたりした。しかし何處にもそれらしいものがなかつた。

……ふと、その雙眼鏡は、長い間動かずに一ところを凝視めてゐた。舞臺から數へて五つ目、綺麗な意氣な丸髷の細君がゐると思つて見てゐた眼は、ふとその隣に二三人のそれ者らしい女のゐる方へと移つて行つた。――其處に、舞臺の方を向いて、此方に横顏を見せてゐる色の白い小づくりな女、それが確かにお園だ。男の胸には三年前の其女を背景にして、さまざまの舞臺が繪卷物のやうになつて、急に簇つて集つて來た……。

『居て？』

細君が笑ひながら訊く。

亭主は點頭いて見せたが、雙眼鏡を取つた後の顏は、矢張笑を帶びてゐた。『それ、其處に、花道の向うに子供をつれた細君がゐて、その向うにかすりの羽織を着た書生がゐて、その二つ向う……』雙眼鏡を顏に當てた細君に向つて、亭主は小聲で教へてきかせて、

『ゐたらう？』

『鳥渡解らないけれど……そこに藝者が三人ばかりゐますねえ……』

『その中で、一番こつちにゐる……そら此方を向いた！』

などと細君は小聲で亭主の方を向いて言つた。しかし、その心は舞臺の上よりも、厠で逢つたその女の方に奪はれてゐた。……あの女が始めて家に來た時……始めは流石に極りがわるさうにしてゐたが、段々訂がはずんで來て、亭主をほつたらかして、一緒に長唄を彈いたり何かして一日暢氣に遊んだことがあつた……それから交情がよくなつて、一緒によく芝居へなぞ遣つて來た……此座へも來たことは二三度はあつた……その向うの棧敷の處に亭主と三人で來てゐたことなどがあつた……でも辛いこともあつた……腹が立つて仕方がない時などもあつた……舞臺には、若い髷に結つた凜々しい男が出て來てゐた。冴えた聲で、臺辭が流るゝやうに其口から出た。白鬚のお爺さんは、容態ぶつた風をして、床几に腰をかけて、其方を見てゐた。

二

亭主はオペラグラスを取つて、それを眼に當てゝ、舞臺の方を見てゐた。しかしそれは長い間ではなかつた。その雙眼鏡はやがて棧敷の方へと移つて行つた。

新橋の七人組の一人で、新聞の廣告などでよく見る顏の妓が、二三人の妓と一緒に其處に來てゐた。肥つた、鬚の濃い四十五六の紳士風の一人の男は、その妓達に押されるやうになつて、時々笑つたり、話しかけたり、酒を飮んだりしてゐた。丸髷の意氣な顏が見えたり、お納戸の地に黑くポツポツ縫ひを

『お園が？』

亭主の顏には驚愕と好奇心との表情が歴々と現はれて來た。

『來てるのかい？』

『えゝ。』細君は笑つて點頭いて見せて、『此方から聲もかけもしないのに、奥さん！　つて、傍に遣つて來て、「まァおめづらしい」つて、それはなつかしさうなんですよ。何時も若いのねえ。』

『何處に來てるんだえ？』

『うづらに居るつて言つたけれど……』かう言つて細君は四邊を見廻した。けれど、何處にもそれらしい姿は見えなかつた。

『お客と來てるんだらう？』

『いゝえ、さうぢやなかつたやうでしたよ。義理の見物に來てるらしい。……何とか言ふ姐さんとそれから二三人で來たつて言つてゐましたよ。……今度の幕間には、行つて御覽なさい。』

かう言つて細君は笑つた。もう幕は明いてゐた。綺麗な菊の花の庭が一面に其處に展げられてあつた。白鬚のお爺さんと下僕の男とが何か頻りに話してゐた。此方の方からは、綺麗な女が二三人遣つて來たりした。

『あれが橘屋ね。』

劇場で

一

『今、めづらしい人に逢つた……』
幕間に厠に行つた細君は、莞爾笑ひながら、かう言つて戻つて來た。
『誰に？』
『それや、めづらしい人……』細君はわざと落附いたやうに寧ろ相手の好奇心を一層強く引張つてやらうとするやうに。『誰に逢ふか知れないものね。』
『誰だえ？』
『今、便所に行つたら、人が一杯待つてるんでせう。おとなしくしてゐては、いつまでかゝるか知れないと思つたから、づうづうしく先へ行つて、やつと小用だけ足して出ようとすると、そこにお園さんが立つてるぢやありませんか――』

つでもあそこで食べるんですッて……隨分ね。』

面白さうに聲を立てゝ笑つた。

秋は段々深くなつて行つた。夜露が深く草に置いて、虫の音もたえだえになつた。月の明るい夜が幾夜か續くと、今度は雨がしと〳〵と降つた。時にはあたりが見えないほど深く夜霧の籠めることなどもあつた。二人の戀は依然として續いてゐた。女は停留場から、レールに添つて、毎日そのかくれ家へと遣つて來た。

かう一人が言ふと、
『この春あたり一緒にそこらをよく歩いてゐた男と女よ、あれは……。私など、よく逢つたわ。いつでも、向うの通りを通つて、上水の方に行つたわ。』
それと知つてゐる若い娘達はかう言つて調子を合せた。
『それで、泊つて行くの？』
『いゝえ、泊つては行かないやうですよ。夜は遲くなつても歸つて行くやうですよ。その證據には、朝はつひぞ見たことがありませんもの……さうね、男はね？　何をしてゐる人ですかね。一日、家に入つてゐて、滅多に外に出ることもないやうですよ。』
『何か始終書いてる人だッて言ふぢやありませんか。』
傍からかう他の一人が言つた。
『それで每日來るの？』
『大抵來るやうですよ。』
『隨分大變ね。その位なら、一緒になつて了へば好いのに……。』
『本當ね。』
一人の若い娘は、『學校に行くッて、每日辨當を持つて出て來るんですッて。そして、お午の辨當はい

やがて格子が明いて、女がにこ〳〵して入つて來た。

『つい、遲くなつて了つて……待つたでせう。出られなかつたんですもの。』

それでも急いで遣つて來たと見えて、額には汗が滲んでゐた。

『停留場で、車に乘らうと思つたんですけれど、生憎、今日はないんですもの……隨分急いで來たわ。』

始めて少し落附いたといふやうに四邊を晌して『いゝわねえ、靜かで。』かう言つて、笑つて男の顏を見た。

女には何だかこれが自分の家だと言ふやうに思はれて嬉しかつた。

女は押入を明けたり、勝手の方に行つて見たりした。そこに遣つて來た酒屋の番頭は、竈も釜も勝手道具も何も置いてない、ガランとした臺所に、束髮に結つた派手な銘仙の着物を着た色の白い女の立つて居るのを不思議にした。

『御近所の酒屋で御座います。元の方にも御贔負になりましたから……』

かう言つて酒屋の番頭は新しい帳面を置いて行つた。

近所ではいろいろな噂をした。

『奧さんぢやないんですツて……まだ學校に通つてゐる女學生なんだツて、あきれたものねえ。』

秋雨のしと〳〵と降る日、新しい桐油をかけた一輛の荷車は、その御料地の傍の小さな家の前に置かれてあつた。小さな木戸は半ば明けられて、勝手元の窓からは、薄い烟が細々と立つてゐた。

車夫は、桐油の上に十文字にかけた細引を解いて、本箱だの、机だの、行李だのを家の中に運んで行つた。上り端には男が立つてゐて、それをまた奥の方へと運んで行つた。

箪笥もない荷物は、時の間に片附けられて了つた。男は机を六疊の床の間の傍に並べて置いて、それに向つて坐つて、獨りぼんやり庭の方を見て居た。

勝手元では、買つたばかりの七輪に、火が活々と起きて、土瓶の口から湯氣が白く颺つてゐた。賃錢を貰つて、車夫が歸つて行つてから、三十分ほどはかうして靜かに經つて行つた。雨は少し音を立てゝ降るやうになつて來た。

勝手の戸を明ける氣勢がしたので、立つて行つて見ると、それは賴んで來た蕎麥屋のかつぎであつた。

『其處と、彼處と、それから向うが一軒――』こんなことを言つて男は敎へてやつた。

早く來る筈の女はまだ來なかつた。

蕎麥を食はうと思つたが、腹が減つて居ないので、そのまゝそれを傍に置いて、また机の前に坐つた。

御料地の大きな樹に降りかゝる雨の脚は長く白く此方から見えた。

『あんなこと言つて！　誰が、國になんか歸るッて言つて？』

『でも家を持つては今のやうに暢氣ではゐられないからね。』

『私も家賃位出すわ。』

女はそんな處まで話を持つて行つた。

隱れ家！　靜かな隱れ家！　それが一番多く男の心を動かした。

自炊の面倒を思はぬでもなかつた。女の束縛といふことを考へぬでもなかつた。しかし、世離れた野末の家に、人目を避けて、戀を樂しむことが出來るといふことが、何よりも男には望ましかつた。

六疊の一間、四疊半の一間、其處に女を置いて、男はいろいろな想像に耽つた。二人はこれまでにも人目を兼ねることに就いてのみ絶えず心を苦しめて來た。何處に行つても、自由に戀を語ることが出來ないのが何よりも不足であつた。であるのに、世離れたそのかくれ家！

『私も家賃位出すわ。』

かう言つた女の言葉をも男は繰返して考へて見た。

それればかりではなかつた。其後女からも、度々手紙で勸めて來た。男は何の氣なしに出かけたその散歩が、かれの生活の一轉化をつくる動機となつたことを幾度も考へずには居られなかつた。

ふ。上さんは捌けた調子で、『あなた方がお入りになるんなら、それは持つて來いでは御座いませんか。近所は喧しくなし、別に煩さい交際もありませんし、本當に、それは靜かで御座いますよ。』などと言つた。二人は顔を見合せて笑つた。

女は家といふものが珍らしいといふ風に、押入を明けて見たり、勝手元に下りて行つて見たりした。花壇の跡が庭にあるのに眼をつけて、『元ゐた人は、花を好きな人ね。』などと男に言つた。

あたりから懸離れてゐるのが、男にも氣に入つたらしかつた。上さんをつかまへて、大家の番地だの、近所の樣子だのを細かに訊いた。

『何うも御面倒でした。』かう言つて二人はやがて其處から出て來た。

暫く來てから、女は、

『好いわね。あそこをお借りなさいよ。下宿に居るよりは、それは餘程好いわ。』

『鳥渡靜かな家だね。』

『隱れ家には丁度好いわ。今はまだ駄目だけれど、段々私も來て手傳ふやうにするわ。それまで自炊してゐらつしやいよ。』

『國に歸る筈ぢやないか。』

男がわざと平氣な顔をして言ふと、

『さうすれば好いわね。』

『でも……』

『さうなさいよ。』

女は好いことを思ひ附いたといふやうに、『家を借りて自炊をなさる方が、經濟よ。』

『それでも自炊は閉口だね。』

『私が手傳ひに來るわ。』

こんなことを言つて二人は笑つた。

丁度其處に、御料地の垣に向つて、あたりからかけ離れた三間位の家屋が一軒あつた。通り過ぎようとした二人はふと貸家札の張つてあるのに目を附けた。

『そら、貸家があつてよ。靜かな好ささうな家ぢやなくつて？』

『さうだね。』

『見て行きませうか。』

『見て行つても好い。』

で、二人は其中に入つて見ることにした。大家が遠いので、家を預つてゐる二三軒向うの四十二三の元氣な上さんが、鍵を持つて來て戸を明けて呉れた。六疊、二疊、四疊半――それで家賃は五圓だとい

電車で別れて了ふのが惜しいと云つて、もう一度其處等をブラブラ歩いて見ることなどもあつた。其時には、二人はきまつて村の方へと歩いて行つた。

其處には汽車の踏切があつて、レールには明るい日が照つてゐた。年を取つた番人が白い旗を出してゐると、砂利を載せた貨車が幾つも幾つも重さうに地響をして通つて行つた。最後の車には車掌が青い旗を持つて顏を出してゐた。

それから少し行つた處には、小さい川が流れて、其岸では、布を洗つてゐる男などがあつた。レールに沿つた道には、蔓草が一面に蔓つてゐた。

ペンキ塗の西洋造の二階屋だの、周圍に建仁寺垣を結ひ廻した大きな門構の家屋などが到るところにあつた。そこを通りぬけて段々奥に入つて行くと、路は榛の疎らな林のある處に出て行つた。

葎の絡みついた垣の中には、廣々とした緑の草が見渡された。

『御料地だね。』

『さう？　此處が御料地……好いわねえ、清々して！』

女は垣の中を覗いて見た。

『此處等に住んでゐると好いわね。』

『さうだね、……いつそ、此處に一軒、貸家を見つけようか。』

間があるのを知つてゐた。二人が入つて行くと、四十位の上さんが莞爾として迎へた。
其日、女は目に立つやうな派手な扮裝をして居た。白い花のボツボツ出てゐる模樣の襟は、ことに四邊に際立つて見えた。
古い錦繪を張つた襖を後にして、白い顏を薄暗い空氣の中に浮出させた女の姿は、いつまでも分明と男の頭に殘つてゐた。

いつも男は停留場で女に別れた。『ぢや、左樣なら――。』かう言つて、男が停留場の階段を上つて行つた。女は下の電車に乘るのが例であつた。
上のプラットホオムからは、下のプラットホォムが手に取るやうに見えた。二人は電車の來る間、互に其處に顏を見交してゐた。男は電柱に身を凭せかけて下を見てゐた。
女の方の電車の早い時もあれば、男の方の早い時もある。女の方が早い時には、女はいつも指を口に當てゝ、別れのキスの心を示して、そして電車に乘つて行つた。電車の窓から此方を見てゐた。
男の方の電車の早い時には、男はもう一度女の方を見て、帽子を取つて、輕く會釋して、そして別れた。
雨が斜に電車の窓を掠めてゐる時などもあつた。

其日、二人は川に添つて歩いた。川は深く地を穿つて、屈曲して流れてゐた。

『この川は二人には初めから縁があるのね。』

『さうね、この川の下流ね、彼處の半鐘のある處の川は？』

『忘れられない川だ！』

『本當ね。』

川はさゝやかな音を立てゝ靜かに緩やかに流れてゐた。土手には、薄だの、萱だの、木萩だの、われもかうだのが、一面に生えてゐた。五間位間を置いて栽ゑられた櫻は薄く紅葉してゐた。

『本當に何うして下さるの？』

『そんなことは心配しなくたつて好いぢやないか。今更別れることの出來る間ぢやなし……』

『さう、それぢやさう思つてよ、好くつてねえ？』

男は點頭いて見せた。

女は岸に咲いてゐる桔梗の花を一つ折つて髪に挿した。それから女は別の人のやうになつてはしやぎ出した。

橋の袂に小さい茶店があつた。男は五六年前、其處に來たことがあつた。奥にちよつとした小綺麗な一

男は今更ながら、二人の間柄を思ひ廻して見るといふやうな人であつた。其處にも此處にも二人の姿が鮮かに浮んで見えた。女に逢ふことが樂しみで、出かけて行つた時と今では全く心持が違つてゐた。

『もう離れられない。』

時々男はかう思つて吐息を吐いた。

結婚――其處まで行かなければ女は承知しないものだと謂ふことをもかれは兼て聞いて知つてゐた。結婚の話が出るやうになつては、歡樂はもうお終ひだ。誰かかう言つたのを記憶してゐた。しかし、男と女との複雜した心持は、さうした他人の話や經驗では十分に解らないものだといふことを男は段々意識して來た。男は吐息を吐いた。

『何うかして？』

心配さうに女が訊ねた。すぐ、言葉をついで、『本當に心を話して下さいなね、私、本當に決心しなけりやならないんですから……いゝえ、さうぢやないのよ。國に歸りたいことなどはちつともありやしないわ。』

『でも國に歸らうと思つてゐないこともないんだらう？』冷かすやうに男が言ふと、女はきつとなつて、

『ぢや、貴郎別れるつもり？』

『出來る、出來ないが問題ではないのよ。出來ると言つて下さりさへすれや好いのよ。』男の默つてゐるのを見て、『矢張さうね、始めからその積でゐたのね。玩弄にするつもりなのね。』

女の眼には涙が滲み出して居た。

『で、結婚するとすれば――』

かう男が歩きながら言ひかけると、

『貴郎がしつかりしてゐて下されば、どのやうにも出來てよ。私、何ういふ決心でもするわ。』

『僕だつて、決心してるサ。』

『さう……嬉しい。』

女は心から嬉しさうな顏附をした。

鋤を荷つた百姓が此方を見い〳〵摩れ違つて行つた。

二人はもうのんきに野原を歩いてゐる人達ではなかつた。話しても話してもその問題は盡きやうともしなかつた。

綺麗な水の湛へてある池の中島に、古い辨天の祠があつた。その欄干に腰をかけた二人の姿は長い間其處を離れやうともしなかつた。

林では百舌鳥が鳴いた。

た。

女の白い顏が、さびしさうにして、その停留場の中に見えて居るのを見た時には、男は思はず驅寄つて行つたほどのあつい強い熱情を感じた。

『隨分待つてよ、もう來ないかと思つてよ。』

女はかう言つて傍に寄つて來た。

停車場からの路は、廣い野原へと向つてついて居た。二人の爲めには人目のない廣い野原、其處には林もあれば、深い叢もあつた。

女は一伍一什を話した。

『何うしたら好いでせう？』

『困つたね。』

『結婚して下さる？』

『それはするがね――』

男の煮え切らない言葉をもどかしさうに、

『本當に、貴郎の心を話して下さいよ。何うしてさう水臭いの？』

『結婚が出來るやうな身分なら、文句はないんだけれど――』

産だとまで言つた洋書を賣らなければならないやうな境遇になつてゐた。

「本も惜しいが、それよりも生きた女の方が猶大切だ！」

こんなことを男は考へた。

血の出るやうな高い金を出して買つた洋書を、何の價値もないやうに、二足三文に値をつけて買つて行く本屋の顏が此上もなく憎かつた。女からは心の張りつめた涙の痕のにじんだ手紙がよく來た。ある時は、その費用をつくる爲めに、友達に頼んで、着物を大急ぎで質に典れて貰はなければならないこともあつた。

思ひもかけない障碍が來て、二人のなま溫い戀の心持は全く一變した。十日前までは、かうした張詰めた心を女が示して來やうとは男には何うしても思はれなかつた。

今では、途中のさま／＼の光景やら人物やらが、全く異なつた色を持つて、かれを迎へるやうになつた。林の鳥の聲が二人の戀の歡樂を歌ふもののやうに思はれた昔と今との相違を男は深く考へた。曾て歡喜に躍つた男の心は、今は不安と嫉妬と屈辱とに向つて燃えた。女は國から湧いたやうに起つて來た結婚談を詳しく男に知らせてよこした。

相談がある！　かう言つて其日女は會合の場所を知らせて來た。

いつもの停留場では、二人の姿はもう餘り親しく人々に知られ過ぎてゐた。二人は遠い停留場を選ん

男は堰の前に立つて、長い間、凄じく碎ける水のさまを見てゐた。『いつそ、二人で死んだならば！』こんなことを考へながら、じつとして立つてゐた。

傍に來た女の顏は蒼白かつた。

『綺麗ね。』

暫くしてから、女は始めて口を開いた。『此處から飛び込んだら、死ねるでせうか？』

『それは死ねるさ！』

かう言つて、急に、

『死なうか？』

『死にませうか。』女の顏には月の光を帶びた白い笑が漂つて見えた。『別れる位なら、死んだ方が好いわ。』

二人は堅く身を寄せた。欷歔が夜の空氣に震へるやうに聞えた。

思ひ出すと、其頃は、二人の戀が外部から段々壓迫されるやうな具合になつてゐた。女は、もう以前のやうに自由に家を出ることが出來なくなつた。國からの女の學資の監督も嚴重になつた。男は女に逢ふための費用をつくる爲めに、自分の唯一の財

『聞かなくつても、解つてゐますよ。人の心も知らないで……』
『だつて、解りやしない。言はないで、解りさうなもんだッて、それは無理だよ。』
『だッてちやんと解つてゐる癖に……』
『何が？』
『聞くまでもないぢやなくつて……』
女は時々今までの夢から覺めたやうに、『本當に、私達は何うなるんでせうねえ！　考へると心配だわ。』こんなことを言つて、男からある滿足な答を待設けた。しかし男は何も言はなかつた。
何うした時のはずみでさういふ心持になつたのか忘れたが、二人はある夜、貯水池の閘門の土手の上に立つてゐたことがあつた。大きな櫟の樹の上には、月がその明るい影を現はして、その光りを廣い野に一面に漲らしてゐた。夕霧が白く田の上に沈んで居た。
二つの影は、月の光の滿ち渡つた土手の上を幾度となく往つたり來たりした。二人は默つて何も言はなかつた。男にも女にも口に上されない苦悶があつた。
閘門に入らうとする處で、餘つた水は一方の堰の方へと凄しい勢で落ちて行つた。渦を卷いた水は月の光を受けて白く泡立つて見えてゐた。
水聲は林を撼かして聞かれた。

秋が來た。

樂しい二人の戀は依然として續いて居た。何等異つたことはなかつた。時には、女が男の顏を長い間見詰めてゐたり、男が女の眼色を讀まうとしたりするやうなことはないでもないが――最早始めの時のやうに私語にのみ戀が盡きて了ふやうな無邪氣な間柄ではなくなつて了つては居るが、それでも二人はまだ離れたり覺めたりすることを考へて見たことなどはなかつた。

でも、何うかすると、女は不機嫌な顏をして歩いて居た。何となく沈んだやうな樣子をしてゐることもあつた。男はまた男で、同じやうな戀の經過が何だか飽足らないといふやうな心持になつてゐた。

『何うかしたの？』

『いゝえ。』

『でも、何だか顏色がわるい。』

『少しお中が痛いのよ。何でもないのよ。』男から訊かれる時には、女はかういつて、それとなくまぎらした。時にはまた女が男の顏附を氣にすることなどもないではなかつた。

『男ッて言ふものは本當に水臭いわねえ。』

『何うして？』

『何が？』
『だつて、こんな袖ですもの。』
かう言つて、女はひらいた袖を男に見せた。二人は笑つた。
『人が見たら、随分可笑しいでせうね。』
『そんなこと思つたッて仕方がない。』
『それもさうね。』
二人はさうした浴衣姿で、日の暮れるのをも忘れて其處で遊んで居た。
二人が其處を出たのは、暗くなつてから一時間ほど經つた後であつた。途中の足元が悪いからと云つて、茶屋では、女中がわざ／＼坂の上の往還まで送つて來て呉れた。そしてそこで小さな玩具のやうな提燈を男に渡した。
『貰つて行つて好いのかえ、此は。』
『えゝえゝ、何うぞ……』女中はかう言つて、『では御機嫌よう。またお近い中に。』
『や、御苦勞。』
二人は闇の道にその小さい提燈を振り翳しながら並んで歩いて行つた。野の叢には虫の音が雨のやうに聞えてゐた。

暫くして出て來た男の顏は赤く綺麗になつて居た。派手な浴衣は、一層男の姿を引立たせて見せた。
『入つて來ない？』
『でも、何だか變だわ。』
『變なことはありァしないよ。』
『でも、ねえ。』
『なァに、誰も居やしない。』
『凉しさうは凉しさうね。』
『だから入つてゐらつしやいと言ふのに。』
女は猶暫く躊躇したゐたが、
『ぢや、入つて來るわ。』
風呂場は裏の畑の見えるやうなところにあつた。女が衣物を脱がうとしてゐると、女中は其處に浴衣を持つて來て、何彼と世話をして吳れた。白粉などを持つて來て貸して吳れた。
糊のついたゴツゴツした浴衣姿で、女は湯殿に置いてある鏡の前に長い間立つてつくりをしてゐた。
やがて入つて來て、
『變ね。』

『お風呂は？』
かう言つて、色の白い愛嬌のある女中が浴衣を運んで來た。
『何うです、入りませんか。』
男がかう言ふと、
『私、澤山。』
『でも、涼しくなりますよ。』
一種の眼で、女中に見られるのが、女には辛く不愉快であるらしかつた。風呂に入るなどといふ、さうした暢氣な氣分には容易になれなかつた。
『僕は入つて來るよ。』
かう言つて、男は出て行つた。
其間を、女は立つて彼方此方と胸した。思ひもかけない世の中のことが、脅すやうに女の心を襲つて來た。めづらしいやうな、恐しいやうな、樂しいやうな心持……その中になんとなく浸つて了つてゐるやうな不安な心持……男にすつかり騙されて居るのではないかと思ふやうな心持……。
氣が附くと、かうした茶屋にゐる女中の心持などを女はいつか考へてゐた。
『あゝ好い心持だ。』

や杉などの樹立の黒い影の中から、二人づれの男女が幾組となく出て行つた。ハアモニカを何處かで吹いてゐるのが聞えた。二人は池に臨んだ茶屋の奧の一間に遲くまで居た。

『彼處は好いわね。晝間でも好いんでせう、彼處は?』

『それは好いさ。』男はかう言つて考へて、『でも金がかゝるからな。』

『金なんか、好いわ。』

『でも……』

『でも、本當に、此頃は何に金をつかふんだらうつて、思つてるかも知れないわ。』

『餘りつかはん方が好いよ。』

『でも、今日は行つて見せうよ。』

『それは行つても好いけれど。』

二人は貯水場の裏のやうなところを通つて行つた。

葡萄棚の下には、凉しさうに緣臺が一箇置いてあつた。池にかけた長い橋の上には、束髮の女が子供に金魚を見せたりなどしてゐた。午後の日影は、池に臨んだ凉棚の日蔽ひに照つてゐた。瀧の音が緣を撼かして聞えて來た。

かう言つて、『國に歸るのは、厭だけれど……』
『歸らなくつたッて好いんだらう。』
女は考へて、
『それは無理に歸れとも言はないけれど……國の方からも、度々手紙が來てるんだから……。それに、學校の方をよく怠けるもんだから、保證人の方に何とか學校から言つて來たらしいわ。』
思出したやうに、
『此間も伯父からそんなことを言はれてよ。雪子はそんなに學校を休むのかえ。かう言ふから、私、默つて聞いてゐると、そんな筈はないがね、と、かう伯父が言ふんでせう。私、仕方がないから、此間中、少し勉强しやうと思つて、休んだことはありますッて、わざと落附いて言つたわ。でも、伯父はそんなに疑つて居ないから好いけれど……此間のやうに遲く歸るのが、一番惡いのよ。』
『それは知つてるけれど……』かう言つて男は笑つて、『つい、別れるのがいやなもんだからねえ。それにあの夜は好い月だつたから。』
『さうだつたわね。』
二人は其の夜のことを思出した。
二人の前には、明らかな月があつた。池の水には兩側の茶屋の灯影が長くチラ／＼と落ちて居た。松

夏の日中の靜けさといふやうな靜けさが暫し四邊を領してゐた。通りには、荷車がガタガタと通つて行つた。

暫くしてから、今度は男の顏が、裏の欄干のところに見えた。行水の土竈からは、烟が淡く颺つてゐた。おしろい草が毒々しい紅い色を其處に鮮かに見せて居た。

女の顏もやがて其處に來て並んだ。

歸る時、女は帶の間から小さながま口を出して勘定をした。

『國に歸つて來なくつてはならないかもしれないわ。』

『何うして？』

『だつて、親類でもやかましく言ふんですもの。何だか、私のことを少し感附いて來たんぢやないかと思ふわ。この間のやうに遲く歸つたりするのが惡るいんだわ。』

『何かそんな風な樣子があるのかえ。』

『いゝえ、まだ大丈夫は大丈夫ですけれどね、……少し惡い方に想像すれば、さうかと思はれることもあるわ。』

『召上れな。』
女は笑つてゐた。長い路を離れ〳〵に步いて來たことはもう忘れてゐるやうに見えた。何處となく心持好ささうに莞爾してゐた。
『何も思つてやしないだらうね、……僕が惡かつた！』
こんがらかつた心の糸はかうした言葉で見る見る解けて行つた。『何とも思ひやしないけれど……あなたもあんまり解らないんですもの。』かう言つた女の顏には、打解けた優しい心が十分に現はれてゐた。
二人は顏を見合せて默つて居た。
二人はすしを食つたり、ビールを飮んだりした。女は男のコップを取つて、『私にも一杯頂戴！』笑ひながら、男のついだビールをぐつと一呼吸に飮干した。
上さんも誰も二階にあがつて來やうとはしなかつた。わざと避けて上つて來ないやうにも思はれた。
『割合に靜かな家だね！』こんなことを言つて、男は四邊を眴した。階梯の處から下を覗いても見た。
『何して〻？』
女は小聲で訊く。
『誰も居ない、上さんも居ない。』
男の顏は赤くなつてゐる。

たあの女を……男を知つたあの女を一月なり二月なり自分から離して置くことが出來るだらうか？　そんなことは駄目だ。かうなつた上では、もう何うすることも出來ないのだ。離れることなどが、さう口で言ふやうに容易に出來るものではない。』かう思ひながら、暑いヂリヂリと照り附ける田圃道を、かれは女に引摺られるやうな心持で歩いて來た。

前に歩いて行く女は、強い烈しい色彩に似た刺戟を、かれの眼に、心に、肉體に與へた。

眼には眩惑させられるやうな強い光線が來た。心には痲痺させられるやうな烈しい情熱が燃えた。肉體には拘束させられるやうなある恐ろしい力が働いた。暑い日影に蒸された草のやうな匂ひが、絶えずかれの鼻の前にあつた……。

知らぬ顏をして、サツサと歩いて行く女が憎かつた。その時ほど憎いと思つたことは今までになかつた位だ。

『勝手にしろ……』

かれは口に出してもう一度言つて見た。しかしそれと反對に、涙が胸にこみ上げて來た。

その長い暑い路を頭に繰返しながら、かれは、欄干のところに立つてゐる女の後姿を長い間見てゐた。

女はやがて此方に來て、自墮落な坐り方をして、サイダの殘りを飲んだ。

『僕、一本ビールを飲むよ。』

その巻帶した立姿を、男は寢ころんで、此方から見て居た。

『もう、野原の散歩も暑いわね。』

女がこんなことを言つたのを、男はその時思ひ出してゐた。

二人の間にはいろ〳〵なことがあつた。穩かな靜かな仲の好い時ばかりではなかつた。をりをり二人は物爭ひをした。

其日も何うしたはずみか、打解けた氣分になれなかつた。

『それぢや、私の勝手にするわ。』

『その方が好い。』

『それぢや本當にさうしてよ。……貴郞、あとて、何か苦情を言つたッて厭よ。』

『そんなことはない。』

暑い野道を歩きながら、二人はこんなことを話した。

もう知らない……かう思つて、女はすた〳〵先に歩いてゐた。

勝手にしろ……かう男は思ひながら、そのあとからついて行つた。

引いたり寄せたりする波のやうに、二人の心は合つたり離れたりした。男は歩きながら、『歸つて好いと言つたが、果して歸つて好いだらうか。一月なり二月なり、逢はずに居ることが出來るだらうか。ま

渡つて來る風は涼しく軒の風鈴を鳴した。

『割合に綺麗ね。』

女はかう言つて、さも疲れたやうに其處に坐つたが、不圖思附いたやうに『私、袴、ぬぐわ。』

『僕も取らう。』

主婦が莞爾した顏を其處に出した時には、二人はもう袴をぬいで、ハンケチで汗を拭いたりなどしてゐた。

すしを二人前賴んでから、

『すこし涼ませて下さいな。』

女がかう言つて、紙につゝんだ五十錢銀貨を主婦の手に渡すと、

『えゝえゝ、もうどうぞ御ゆつくり休んで入らつしやいまし。何うせ、この通り明いてをるんですから。』

主婦はかう愛想よく言つて、そゝくさと下りて行つて了つた。

二人は茶を飮んだり、サイダを飮んだりした。田圃から來る涼しい風は、二人の肌に生々した心持を蘇らせるに十分であつた。女は欄干のところにその後姿を見せて、長い間立つて青々した田圃を見て居た。

角に、壽司の招牌の出てゐる二階屋が一軒あつた。

『あそこの二階は上れるわね。』

『何うだか。』

『きいて見ませうか。』かう言つて、女は男の顏を見て『あなた、お中が空いたでせう?』

『それほどではないけれど……少しは減りましたね。』

『聞いて見ませうね、ね?』

かう言つたが、女はヅカヅカとその店前に入つて行つた。赤毛布の緣臺で氷を飲んでゐた客は、驚いたやうに眼を睜つて、女の派手な姿を見た。

『二階が明いてゐて?』

『入らつしやいまし、……明いてをります。』

四十ばかりになる主婦は、かう言つて心持顏を赧くした綺麗な娘と、前に立つてゐる麥稈帽子の男とを見た。

女は一歩二歩重たい重草履を引摺つて、男の方へ戻つて行つて、何か一言二言言ひ交したが、そのまま緣臺の傍を通つて、狹い階梯を二階へと上つて行つた。男もつゞいて上つて行つた。

二階は六疊二間で、それでも思つたほど汚なくはなかつた。奥の一間は、田圃に面してゐて、稻葉を

其日は何うしてか女は遣つて來なかつた。何日の何時――幾度手紙を出して見ても、それに相違ないのに……。何うしたのだらう？　何か事が起つたのではないか？　かう思ふと、男は居ても立つても居られないやうな氣がした。驛員達にあやしまれるほど長い間かれは其處を往つたり來たりしてゐた。

この次ぎのにも來なかつたら、もう歸らうと思つた電車も行き過ぎて了つた。かれは猶暫く其處に立つてゐた。

一時間ほどしてから、男の姿は女の寄宿してゐる親戚の家のあたりに見えてゐた。それは見附内の濠の土手に添つたやうな位置にある大きな二階建の家であつた。栽込の梅だの寒山竹だの高野槇だのが外からも見えてゐた。二階の六疊の一間、そこが女の居る室で、そこからは富士が見えたり、士官學校の庭が見えたりすることがよく手紙に書いてあつた。しかし今は障子がピツシヤリ閉つてゐた。

まさか訪問することも出來ないので、二三十分、そこをうろついてから、佗しい心持でかれは歸つて來た。

まだ十町もあらうと思はれる處から、雨に降られて、ぬれ鼠になつて、かれはその下宿に驅け込んだ。

荷車だの乘合馬車だの俥だののゴタゴタ通る場末の町の通を二人は歩いて來た。いつもの野の逍遙からの歸途であつた。

停留場は高いところにあつた。階段の上にある驛長室の周圍には、驛夫達の洋服姿がいつも鮮かに見えて居た。朝など便所の手洗水を驛夫の取換へてゐる時などもあつた。かれは切符を買つて、そしてプラットホームに行つて腰を掛けて待つて居た。かれは何んなに深く心の歡樂を其處に感じたであらう？

かれは十五分毎に來る電車さへ待遠しく思つた。

電車はかれとかれの心を載せて飛ぶが如くに馳つた。

向うの停留場には、女は大抵は來て待つて居た。晴々したやうな色の白い美しい女の顔は、男の電車から下りるを見ると、そのまゝにつと笑つて、そして先に立つて、改札口の方に出て行つた。男はあとからついて行つた。

『待つて？』

『いゝえ……十分位よ。』

かう言ふ會話の取交されるのは、停留場を出て、少し離れた處に行つてからであつた。

時には三十分ほど男が待つて居ることもないではなかつた。其時は、男はプラットホームに腰を掛けて、向う側にかけてある大きな時計の針の動くのや、硝子戸の中で驛員達が熱心に事務に鞅掌してゐるのや、退屈さうにして待つてゐる乘客などをそれとなく見て居た。……やがて女の小刻みな靴の音は上から聞えて來た。

下宿から電車の停留場に行く間は、矢張半ば新開町で、半は田圃といふやうなところであつた。東京に來て一年經つか經たない中に、この間の路が、かれに取つて、かうした鮮かな印象を與へるやうにならうとは、夢にも思ひがけぬことであつた。かれは、其間の路をいつも生々した心持で歩いて行つた。かれは途中で邂逅す爺さんだの、婆さんだの、大きな丸髷を結つた上さんだの、額に大きな黑子のある肴屋のおやぢだの、さういふ人達を總てはつきりと自分でも不思議に思ふ位に記憶してゐる。林のかげにある赤い小さい祠、芝生を前にした凉しさうな郊外の二階屋、谷を隔てゝ向うに見える丘――かれは女の幻影を頭に浮べながら、さういふ間の路を通つて行つた。

時には時間が早いので、畠の中の祠の境内に入つて見たりする。そこには杉の大きい樹の中に小さな祠があるばかりで、四邊には人氣といふものが殆どなかつた。かれは其處からわざ〳〵路もない畠の中を通つて、好奇にも方向を定めて停車場の方へ歩き出して見たりした。近所にある陸軍の射的場からは、銃の音が空氣を破つて、絶えずヒユウ〳〵と聞えて居た。

何うかすると、束髮に結つた女學生風の女を伴れて、男がひよつくり眼の前に顯はれて來ることなどもあつた。さういふ時には、かれは思はず微笑した。かれは自分の女をその女に引比べながら歩いた。開けて行く郊外は、其處此處に新しい家屋を見せてゐた。高い二階屋の欄干には、晴れた日を受けて、紅裏の夜着などの干されてあるのが見えた。

つてゐた。肥つた方の女は、『一度伴れて來て見せて下さいよ。眼の保養になつて好いわ。』などと言つて笑つた。

別れてから逢ふまで――向うからは手紙が來るが、此方からは遣ることが出來ないので、男は一方ならず懊惱した。一度、こらへ切れないで手紙を遣ると、幸にしてそれは家の人の手に觸れずにすんだが、その次に逢つた時、女は、『本當に、それだけはよして頂戴よ。もし、知れようもんなら、それこそ大變なんだから。』かう言つて、もう二度とあゝいふ大膽なことをして呉れるなと泣くやうにして頼んだ。

『ぢや、出さない。その代り、度々手紙をよこして呉れなけりや――』

『それは、出すわ。』

かう女は言つて男の顏を見た。

何日何時――

それが手紙の中に書いてある時には、男の心は歡喜に向つて躍つた。下宿からある停留場まで行つて、そこから電車に乘つて、その約束の停車場に行くのであるが、その間の心の狀態は自分でも可笑しいと思ふほどはしやぎ切つてゐた。誰も知らない歡樂をかうして恣にしてゐるといふことが一番先に頭に上つて來て、言ひ知れない得意を總身に感じた。續いて、女の顏、女の眼、女の姿が明かに眼の前を往つたり來たりした。

二人は疲れたものゝやうに、默つて並んで歩いた。

氣が附くと、二人はある通を歩いてゐた。材木屋があつたり、湯屋があつたり、肴屋があつたりする通だ。工場の烟突が薄く黄い烟を吐いてゐる向うに、新建の家屋が幾軒ともなく連つて見えてゐた。

『あれ、また通るよ。』

肴屋の女房がかう隣の洗濯屋の上さんに話してゐた。

こればかりではなかつた。二人はよくさういふ言葉に邂逅した。『何處に行くんだらう？』『若いものはあれだから困るねえ。』などと言ふ言葉をよく耳にした。

暫く行つてから振返つて見た男は、上さん達の其處に立つてまだ此方を見送つてゐるのを見た。二人は顏を見合して笑つた。けれど其笑顏は長く續かなかつた。

二人は默つて歩いた。

男は山手あたりのある下宿屋から出て來た。何日何時——その時刻の一時間前には、いつもかれは家を出てゐた。かれは一度その時刻に親友に襲はれて、斷るにも斷れず、一方ならず困つたことがあつた。それに懲りて、いつも早く家を出ることにきめてゐた。まだ誰も知つてゐるものはなかつた。

でも、下宿屋の女中は、手紙の往復からそれとなく勘付いて、『吉川さん、お奢んなさいよ。』などと言

二人は其處で一時間や二時間を過した。女はトランプのクインの繪を表紙にした小形の詩集などを持つて來て、それを男に讀んで聞かせたりした。話しても話しても盡きないといふやうな話が續いた。男は女の前には全く服從してゐるものゝやうに見えた。男は女の言ふことに背くやうなことはしなかつた。

男はいつも輕く點頭きながら、やさしい微笑を顏に湛へて、女の言葉に耳を傾けてゐた。

時には食ふ物を二人して持つて來ることがあつた。停車場を出ると、其處に場末の田舍町があつた。二人は其處で餅菓子などを買つて來た。

停車場から出て來た女が、『今日はね、向うから買つて來てよ。』などと言ふ時には、屹度シユウクリームなどがその紫の風呂敷包の中に入つてゐた。

男は大抵袴をはいてゐた。麥稈帽子は、草の上に轉つて、半ば日影を帶びてゐた。紫の風呂敷包はいつも長い間その草の上に置かれてあつた。

二人は默つて歩いた。

女は菫色の袴を穿いて居た。小形の白い蝙蝠傘には、午後の日影が明るく照つた。男の麥稈帽子の上には晴れた空があつた。

『……本當？……』

『………』

熱した心と熱した心とは、其處で初めて接觸した。其時のことを男も女も分明と覺えてゐた。……百姓らしい爺が、其時二人の傍を掠めて通つて行つた。あとには暫らく誰も通つて行くものもなかつた。

川の瀬の音が靜かに聞えた。

近所の森では駒鳥が啼いた。

半鐘臺から一町ほど行つたところに、路が川緣から下へと下りて行くやうなところがある。其處には畠と林ばかりで、人家らしいものはもうなかつた。細い路は二人を林の中へと導いて行つた。

畠から林へ入らうとする處に、百姓が大根や菜を洗ふ堰らしいものがあつた。そこには綺麗な水が湛へられて、緣葉を透した日影がその上に綾を織つてゐた。嘴の赤い鳥が水を飮んでゐたりした。

そこらには低い灌木の林が多かつた。薄や萱なども繁つてゐた。

二人が草を籍いて坐つてゐる處からは、向うの丘の下の路がよく見えてゐた。青い門を隔てゝ、茅葺屋根が二三軒、その前には、灌木の生えた丸い丘がこんもりと茂つて、日が晴がましく照り渡つた。丘の下の路には、牛乳配達のペンキ塗の車が通つたり、野菜を載せた百姓の荷車が通つたりした。麥稈帽子などの通るのも見えた。

其川の岸には白い花がポツポツ咲いてゐた。低い枝の水に浸いてゐるのもあつた。
『何でせう？　あの白い花は？』
『さうね、卯の花ぢやないかしらん。』
『卯の花、さうでせうか。』
かう言つて、女は川を覗くやうにして見た。
少し行つた處に、それが固まつて白く咲いてゐた。女は、一枝折つて見て、『さうね、矢張卯つ木ね。好いわね。』かう言つて暫しの間、持つたまゝ歩いてゐたが、短い木立の途切れた處に來ると、そのまゝそれを川の中に投げ入れた。白い花は流れて行つた。
橋の袂に半鐘臺があつた。其處で水は折れ曲つて流れてゐた。向うの岸には茅葺屋根が二三軒水に臨んで並んでゐて、室の中で、赤い帶をしめた幼い兒が二三人無邪氣に遊んでゐるのが見える……。

二人はこの川に沿つた道をよく歩いた。
この道は、二人に取つては記念の多い場所であつた。
『本當？』
『……えゝ……』

『今日の髮、何う？』

『さうね……今日は日本髮ね。』男は女の頭を見て、

『何うも似合はないねえ、矢張いつもの方が好いねえ。』

『でも、束髮だと、人が見てうるさいんですもの。』

女はかう言つて笑つて見せた。

一月ほど前にも、女はそれに似たことを言つた。ある日、女は袴をはかずに遣つて來た。男が不思議にして訊くと、

『でも、人目がうるさいんですもの！』と言つて笑つた。それを思ひ出しながら、男は女と並んで歩いた。

それは五月で、小雨が降つたり止んだりしてゐた。二人とも高い足駄を穿いて、傘をさしてゐた。派手な淺黄の蛇の目傘は殊に女の顏を美しく見せた。

丁度、學校の退けて來る時分で、その川に沿つた細い道を、メリンスの海老茶の袴を穿いた女の兒だの、ヅックの雜嚢を肩にかけた男の兒だのが幾群となく通つて行つた。水溜のある處では、二人は兩側に離れて立つて、それを通して遣らなければならなかつた。ある幼い女の兒は、水溜の中で、下駄の鼻緒を切つて泣いて居た。

郊外にて

二人はいろいろな處に二人の並んで歩いて行く姿を見た。機械の響の喧しい工場の長い塀について歩いて行つたこともあつた。其門の中の廣場には、荷車を運ぶレールが縱横についてゐて、事務室らしい入口には、自轉車が一臺横にして置いてあつた。高い窓からは職工や女工がいつも顏を出してゐた。長いトタンの塀を外れると、廣々とした緑の野が二人の前にひらけた。大抵は午後の日影が路傍の榛の樹立を斜に照してゐた。

時には村の中を屈折して流れて行く小川の岸について、何處までも何處までも歩いて行くことなどもあつた。川は深く地を穿つて流れて居た。橋が架つて居たり、瀬が白く渦を巻いて居たりした。別莊の大きな門などもあつた。ある日二人は、いつものやうにして其處を歩いてゐた。女は銘仙の袷に白茶の帶をしめて、髮をめづらしく銀杏返に結つてゐた。

停車場から歩いて來ながら、女は、

のものではないかといふやうに互に思はれて來た。

と、今度はぐづ〳〵に崩れた括枕の中のもみ殻のザラザラした音が神經に觸り出した。ザラ、ザラ――俄かに全身が寒氣立つて來た。

かれはせつせつと蜜柑の皮を火鉢の中にくべた。

細君はそれでも其處に裁縫を出して默つて針を取つてゐた。それはもう十時を過ぎてゐた。不意に細君は針の手を止めて、聞立耳をして、ぢつと空間を見詰めてゐた。

『何だ？』

かう言つた主人の聲は、いつもとは違つて、其人の聲ではないやうな、誰か他に其處に人がゐて言つたやうな、ガランとした聲であつた。

『何だ？』もう一度主人は繰返した。

『そら御覽なさい。始まつた！』

細君は顏を押へた。

例のス、スといふ音が天井裏で聞え出したのである。

あたりが靜かであるだけそれだけ、その音が明かに聞えて來た。ス、ス、ス――……夫婦は顏を見合せた。

互に見合せた顏が、恐ろしいやうな氣がするほど四邊はしんとしてゐた。夫の顏、妻の顏が何か他界

『一年も居る人は屹度病氣になる！』さう言つた同僚の言葉が強く主人の頭に殘つてゐた。一間の空氣の中には恐ろしい有害なものが交つてゐて、それが此處に來る人達の生活を悉く破壞しようとしてるやうに段々主人には思はれ出して來た。

主人は急に、『おい何か燻べるものはないか。』

細君は驚いたやうに目を睜つて、『燻べるッて何です？』

『燻べるッて燃やすものさ。惡い氣でも受けると大變だから。』

『ぢや蜜柑の皮でも好う御座んすね。』

細君はかう言つて押入から箱を出した。そこからは兼ねて藏つて置いた蜜柑の皮が一杯出た。

主人はそれを火鉢にくべた。烟はもく／＼と立つた。一種烈しい物の燃える臭ひが一間に充ち渡つた。烟は時々電球を蔽つた。と室は鳥渡形容の出來ないやうな影に包まれた。主人の顏も細君の顏も長押にかけた美人の額も何も彼も暗く黃くなる……

主人の頭には緣の下にあつた女の髮の毛がそれとなく不愉快な恐ろしい感覺をさそつて來た。長押で首を縊つた女の髮の毛ではないかとさへ思はれた。かれはかうしてじつとしては居られないやうな氣がして來た。六疊の長押、それは何方の六疊だらう？　すぐ其處ぢやないか。自分の坐つてゐるすぐ頭の上ぢやないか。足、足、白い足がだらり………

母さんはかう言つて同情して呉れた。

『何うして？』細君は歸つて來た主人の顔を見ると、すぐかう訊いた。

『至急に、家をさがして引越すんだね、困つた――』

『さうでせう矢張！』

細君の聲は震へてゐた。

四

種々なことが思當つて來た。厠の壁に移つた影のことを考へて、細君は戰慄した。あらゆる秘密あらゆる災害が、かれ等の周圍に集つて來たやうな氣がした。

主人ももう强いことを言つては居られなかつた。長火鉢の前に、ほつねんとして顔を曇らせて坐つてゐた。その侘しさうな顔を五燭の電燈は微かに照した。

總領の娘は、日の暮れる時分、幽靈が出ると大變だと言つて里の祖母さんの家へと逃げて行つて了つた。

夫婦は顔を見合せて坐つてゐた。細君には夫の顔が暗い凄い影を帶びてゐるやうに思はれ、主人には細君の顔が厭に蒼白い心細い色をしてゐるやうに見えた。寢てゐる男の兒の顔も物凄かつた。

同僚は猶ほ言葉を續いで、

『私が此處に來てからでも隨分いろ〳〵なことがありました。肺病になつて引越して行つた人も一人や二人はあります。不思議なのは其處に入つて一年と丈夫でゐた人がないやうです……最後に來たのは、さう？　貴郎がお入りになる二月ほど前でしたが、若い結婚したばかりの夫婦でしてね、初めは、そんなことは知らないものですから、暢氣に暮してゐたやうでした。夜など灯がついて、笑聲などしてゐました。處が、それと知れてから、丸で火が消えたやうになつて了つて、夜は早くから二人とも六疊にかじりついて小さくなつて寢てゐたさうです。五日ほどして引越して行つて了ひました。』それからそれへと話をして、『でも、別に變つたことはないでせう。住む人の方で氣がさして來るから、それでいろ〳〵なことが起つて來るんでせうけれど、その積りでゐさへすれば何でもないいんでせう。貴郎はかなり長く住んでゐらしつたから、もう少し住んで居て御覽なすッたら何うです？』

『でも病氣になるんぢや困りますね。』

かう言つてかれは笑つた。

賑かな同僚の家庭――神棚には灯が點いて元氣な母さんと肥つた上さんと丈の高い弟とがさも樂しさうな調子で話してゐた。同僚は晩酌を遣りながら赤い顏をして、盃をかれの方にさしたりなどした。

『本當に御存じなしでお入りになつて、それと知れましてはねえ、嘸ぞお氣味が惡いでせうねえ。』

主人は兎にかく先づかう細君をなだめ賺した。しかしかれ自身に取つてもその噂は滿更無氣味でないこともなかつた。ボロ〳〵になつた括枕、女の髪の毛、時を切つて物を引摺るやうな音——それが新しい意味を持つてかれの心頭に蘇つて來た。

夕飯を食べながら主人は自から慰めるやうに、『だツて、それなら松田だツて言つて呉れさうなものぢやないか。同じ大家の店子で、そして毎日顔を見合せてゐるんだから……』かう言つたかれは同じ番地に住んでゐる同僚のことを思出してゐた。

『兎に角それぢや松田に行つて聞いて來よう。』かう言つて、主人は夕飯を濟してから出かけて行つた。主人にも思ひ當ることが多かつた。

『實はね、君、君が引越して來た時、餘程さう言はうと思つたんですけれど……僕が氣が付いた時には、もう君は道具を運んで居られたし、それに御存じの上でお借りになつたのかも知れないと思つたもんだから……今まで御存じなかつたんですか？』

かう同僚が言ふのを聞いた時にはかれはヒヤリとした。

『私もそんなに長い間此處に住んでゐるのではないんですから、分明した處は知りませんけれど、何でも十年ばかり前六疊の長押にしごきをつなぎ合せて首を縊つた若い女があつたさうです。肺病の女か何かだといふことです。』

細君が挨拶しても、近所の細君達は通り一遍の挨拶をするだけでいつも急いですれ違つて行つて了つた。時には何か訊きたいやうな眼色をして此方を見てゐることなどもあつた。でも何事もなく三月ほど過ぎた。ある日主人が役所から歸つて來ると蒼い神經質な顏をした細君は、待ちかねたといふ樣な急込んだ調子で『貴郎大變ですよ。此家は幽靈が出るんですつて！』

『馬鹿な！』

『馬鹿なぢやありませんよ。本當なんですよ。お文が何處からか聞いて來たんですがね……本當なんですつて！』

『そんなことはありやしないよ。』

『そんなことがあるもんですか。道理で、家賃が廉すぎると思つた。私お文がさう云つてさつき飛込んで入つて來たからお向うへ行つて早速聞いて見ましたのよ。すぐさうだとは仰有らない、大家の前もあるからさうだとは分明と仰しやらないけれど、人が十日と落附いて住んで居たことがないんださうですよ。イヤだイヤだ。道理で變だ。』細君の蒼白い顏は、夕暮の薄暗い空氣の中に浮出すやうに見えてゐた。

『まあ、少し氣を落附けなさい。そんなことを輕率に信じたつて仕方がない。』

『でも私は厭よ。もうこんな家に一晩だつてゐられない。』

『そんな無茶なことを言つたッて仕方がない。』

ッと?」

『うん、聞える。でも何でもないよ。鼠か、鼬かだよ。』

『それが不思議なんですよ。三十分位經つとやめて了つて、それから一時間位經つてから、また始めるんです。夜中に眼が覺めたりしてゐると、よく聞えてゐることがありますよ。』

『そんなことを氣にしてたッて仕方がない。』

『でもねえ……』

『何時から、そんなことが氣になり出したんだえ?』

『さうですねえ、もう餘程前からですねえ……一月位前からかしら? そら、いつか夜中に貴郎を起したことがあるでせう。それ、寢苦しい、いやに暑い晩、貴郎がうなされて苦しさうな聲を出して居たのを私が起したことがあつたでせう。さう言へばあの時にも聞えてゐましたよ。』

長火鉢にさしむかひに坐つた二人は暫し默つて耳を欹てゝ居た。

スヽッと物を引摺るやうな音はしんとした夜の空氣の中に絕えず聞えてゐた。

近所の人達の態度——それにも飲込めないやうな不思議なところがあつた。引越蕎麥を配らない譯でもなければ挨拶に顔を出さない譯でもないのに、近所の人達は何故か打解けないやうな別種類の人間でもあるやうな顔色をしてかれ等を見た。

三

鼠もかなりよく騷いだ。天井には鼬なども居るらしかつた。何があんな大きな音を立てるのだらうと思はれるやうな音もをりをりはした。

夜遲く、細君が裁縫などをしてゐると、丁度天井裏の一隅あたりで鼠の物を引きでもするかと思はれるやうなス、スといふ音が聞えた。女が着物の裾でも引摺るやうな音だ。

『何でせうね、あの音は？』

餘り毎晩聞えるので――それも時を切つて十時頃からきまつて聞え出すので、細君も終には無氣味になつてある夜それとなく主人に話しかけて見た。

『音ツて何さ？』

主人は聞耳を立てた。『何にも聞えないぢやないか。』

『そら、聞えてるぢやありませんか。そら、ス、スツ、何か引摺るやうな音！』

『何に、あれは鼠が何か引張るんだよ。何でもありやしないよ。』かう無造作に言つて笑つて、『お前此頃本當に何うかしたね……さう神經過敏になつちや困るな。』

『さういふ譯でもないんですけどね、何だか氣になる音ですものね、そら……聞えるでせう。ス、ス

の處に來て、何うかあの枕と藥瓶とを片付けて吳れ、あれがあそこにあるばかりに、未だにうかばれないッて、かう言ふんでせう。』

『此間、あんなことを言つたから、それであの夢を見たんだ……』

『さうかも知れませんね。』

細君はかう言つたが、『でも早く片附けて了ッた方が好う御座んすよ。あんなものが揚板の下にあると思ふと始終變な氣がしてゐるから、そんな夢を見るのですよ。』

『もうぢき大掃除が來るよ。』

『それまで待たずに片附けて了ひませうよ。何だか私は氣にかかつて仕方がない。』

『何うかしたね此頃は？　馬鹿に神經家になつたね。』

主人はかう言つて笑つた。

でも大掃除を待たずに人足を賴んで一度緣の下を掃除して貰ふことにした。

いろ〳〵なものが緣の下から出た。枕、藥瓶、座蒲團の半ば焦げたのなどが山のやうに庭に積まれた。

女の髮の毛の切つたのなども出た。

そしてそれが長い年月を經過したもののやうに、いかにも古く汚く土にまみれてゐた。主人が試みに棒で突つゝいて見ると枕は他愛もなくぐら〳〵と崩れて中から黑いもみ殼がこぼれ出した。衣片などもぼろ〳〵になつてゐた。

『汚いことねえ、今まで何ういふ人が住んでゐたんでせうかねえ。』

その時細君はこんなことを言つたが、『片附けなくつては駄目ねえ。』

主人は、

『もう、ぢき大掃除が來る、其時どうせ緣の下を掃除するのだから、それまで此まゝにして置くサ。』

で、そのまゝになつてゐた。

と、ある日細君が、

『昨夜は怖い夢を見てよ。』

『また、始まつた――』

『でも本當に怖かつたのですよ。あのね、そら、緣の下に枕だの藥瓶だのがあつたでせう。あれの夢なのよ。誰かあの枕や藥瓶を持つてゐた女があつてそれが夢で來たんですよ。』

『馬鹿な。』

『そんな女が何處か見たやうな確か三年前に家にゐて死んだお愛ネ、あれのやうだつたの。それが私

『何うしたのサ。』
變なものが映ると娘は言つた。『臆病ねえ。』母親はもう一度言つて、さて其處に行つて見た。成程明るい影のやうなものが其處の壁に移つてゐる。
不思議に思つて戸を明けたり立てたりして見た。其影は矢張依然としてゐた。母親は今度はその影の前に立つて見た。
影はふッと消えた。
『それ、御覽な、向うから映つて來てゐるんだから……臆病ね！』
かう言つて母親は笑つた。
『さう？　本當？　向うから映つて來るの？』娘はかう言つたが『でも何だか怖いわ。』
移轉して來た日のことであつた。細君はそれとなく勝手の揚板を明けて見た。
『まあ、汚ない！』
思はず知らずかう言つた。主人も其處に來て立つた。
其處には括枕だの、女のする船底枕だの、藥瓶だの、襁褓見たやうなものだのが一杯になつて入つてゐた。

楓だの欅だの、しろ竹だのが、三段になつた長い臺の上に一杯に並べて置かれてあつた。

縁側の傍に置いてある小さい如露は朝に晩に主人の手に取られて其處から細い水が瀧のしぶきのやうに鉢の綠葉や草花に灑がれた。晩酌をするでもなく、机に向つて讀書するでもない主人は水を灑いだ後の庭の涼しさと心地よさとを樂むもののやうに靜かにいつも縁側に坐つてゐた。

段々住んで見ると二つ續いた六疊の間がいかにも住み悄いといふことが解つて來た。それに何處となく陰氣に感じられた。そんな譯はない、陰氣な譯はない。光線はかなりに入つて來るし風通しもそんなに惡くはないし天井だつて高いのだから、そんな譯はないと思ふけれどもそれでも矢張何處か陰氣だ。坐つてゐると何だか厭に氣が滅入つて來るやうにさへ思はれる。

厠が二つ、これも家のつくりから言ふと不自然のやうな氣がせぬでもなかつた。ことに、下の方の厠は無くつて好いやうな位置になつて戸を明けて入ると、いかにも暗かつた。

『母さん。ここの便所は私嫌ひよ。何だか怖いやうな氣がするわ。』

ある薄暮にそこから出て來た總領の娘はこんなことを言つて顏を曇らせた。

『そんなことはないよ。』

『臆病ねえ此兒は。こんな大きな體をして。』笑ひながら母親が言ふと、

『でも來て御覽よ。』

主人は髪の毛の濃い色の白い、小肥つた、ハイカラな三十六七の男で、派手な白つぽい夏服に流行のネクタイをして、新しい麥稈の帽子を冠つて、葡萄のステツキを抱へるやうにして、露地から電車の通りへといつも出て行つた。

『好い男ね。』

などと其處等の細君達がよく噂をした。

主人の役所に行つた留守には細君は男の兒を相手にして、獨りで裁縫をひろげたりなぞしてゐた。女の兒は少し遠くなつた學校へ辨當を持つて出かけて行つて三時にならなければ歸つて來なかつた。訪問して來る客も滅多になかつた。それに、細君も主人も餘り交際をするのが好きではなかつた。從つて近所の細君達も往來するやうな機會もなかつた。

でも夕暮などに男の兒を負つて主人が通りの方に出懸けて行くのを見ることは度々あつた。家の中でも父親の子供と戯れる氣勢は時々した。

『秀や――』かう總領の娘の名を呼ぶ母親の聲は常に四邊に高く聞えた。

縁日で主人が買つて來た草花の鉢が縁側にずらりと並んで見られた。ダリアだのアネモネだの、天竺牡丹だの、中には目も覺めるやうに見事な紅い花などもあつた。それに鉢物もかなりあつた。柘榴だの、

疊も綺麗だし床の間もちやんと幅がかけられるやうになつてゐるし厠も二箇所あるし緣も高く出來て居るし、成程大家の言つた通り貸家に建てた家屋でないのは一目で分る。『長く住んで下さるなら廉くして置きます。八圓の前納で敷金なんぞなくても好う御座んす。』かう人の好ささうな禿頭の大家の老爺は笑ひを口の邊に湛へながら言つた。

長く住むどころではない――何うしてこんな家が人に見附けられずにそッとして置かれたかと思はれる位だ。……こんな露地の中にかう思ひながら其時かれは二步、三步、入つて見た。

と、思ひもかけず雨風に曝されたかし家札が字も碌々讀めないやうになつて其處に張つてあつた。

その翌日細君がわざわざ見に來た。

『好い家ね。それに水道があるのね。ちやんと水が出るやうに掃除がしてあつてよ。』

細君は歸つてから嬉しさうな樣子をして言つた。

二

細君は庇髮に結つたり丸髷に結つたりして居た。瘦削な背のすらりとした、鳥渡外に出るに縮緬の羽織を引かけて行くといふ風の女であつた。子供が二人總領は十二か十三位の女の兒で次の間が遠くまだ五つか六つになつた位の男の兒だ。

女の髪

一

今まで居た家とは比較が取れないほど家賃が廉かつた。六疊二間に四疊半に二疊の玄關、それに狹いながらも樹木の繁つた庭もあつた。

第一、電車の停留場の近いのが何よりだ。細い露地を通りにさへ出ればもう其處には電車が駛つてゐた。夜は電線の唸る音が手に取るやうに聞えた。

『本當に、好い家を見つけたもんだな。』

毎朝電車の割引に乘つて濠端の役所に通つて行く主人は幾度となくかう繰返して細君に言つた。

『此處にさへ住んでゐりやいくら雨が降つたツて役所に行くのに傘なんぞ要りやせんよ。役所の前がすぐ停留場でそこがまた停留場だからねえ。』

雨の降る日に役所から歸つて來た主人はこんなことを言つて莞爾してゐた。

遣つて下さらなかつたか。……熱い心、やさしい心、女にそれを受入れる能力さへあれば、女は今の生活から蘇ることが出來るのだ。』かう言つたが、急によけて、

『駄目だ！　駄目だ！　皆な駄目だ！』

『貴郎お起きなさい。』

あとを片附けて來た細君はかう言つて、其處に倒れて居る主人を呼起した。

起上るには起上つても、すぐまた傍に倒れて了つた。

『何うしたんですよ。本當に意氣地がない。』かう言つて見ても何の効もなかつた。

止むなく細君は姪と婢との手を借りて、荷物でも荷ふやうにして、六疊から蒲團の敷いてある寢室へと伴れて行くことにした。細君は頭を抱へた。婢は足を持つた。姪は胴の處に腕を入れた。『本當に大きいから始末にいけない。』こんなことを言ひながら、三人は辛うじて主人を蒲團の中に入れた。

主人は絶えず足をどたばたさせて居たが、大きな聲で、

『己の女をつれて來い。お……れ……の……女をつれて……來い！』

「貴郎、本當にそんなに飲んぢや仕方がありませんよ。」

「何だ、酒を飲んではいかん。馬鹿を言へ。己の酒だ。……杉山の奴、意氣地がない奴だ。何うか堪忍して呉れ！　女に向つて何うか勘忍して呉れッてあやまる奴があるか。己はあのぐづ〱した話をして居る間、齒痒くつて、齒痒くつて、齒切をしてゐた。蒲團を被て寢てゐるやうな女に……」

「蒲團を被て寢てゐた女、女ッて、伯父さん、もう澤山ですよ。」

姪は堪へかねて傍から言つた。

醉つた主人はぐたりとしてゐた。疲れた處に飲んだ酒が急に發したらしかつた。『今日は本當に何うかしてゝよ。』姪はかう言つて、細君を扶けて、德利や皿などを片附けにかゝつた。

『長い路を、女のことを考へ考へ……女のことを考へ考へ、』擧げた首をぐたりと下げて、韻のついた詩でも歌ふやうな調子で言つた。

かと思ふと、急にしつかりした言葉で『あゝ、あゝ、何故女には男の心が解らないんだ。男が何んなに熱い心を心にそゝいだつて駄目だ。砂の上に染み込んで行つて了ふやうなものだ。熱い心、男の持つてゐるこの熱いやさしい心、それを理解するやうな女は居ないんだ。何故居ない。何故居ない。己は神があるのを信じない。……しかし、もし、』と大きく兩手をひろげて、『もし本當に神があるならば、O my God! 何故女に男のこの熱い心を、眞珠のやうなダイヤモンドのやうな貴い心を、理解するやうに女を

來い。』

また姪の方を向いて、

『何うだ、解つたか。己は醉つて言つてゐるんぢやないぞ。……男が電車のなくなるのも知らずに、女に逢ひたいばかりに長い間坐つてゐた。聞くにも忍びないやうな皮肉を默つて聞いてゐた。それなのに、女は蒲團にくるまつて、好い心持をして寢てゐた。可哀相な男だ。……今時分は、長い路の間を女のことを考へ考へ歸つて行つたらう。この寒い晚に、いいか、いいか、此の寒い晚に……。』

酒を二三杯飮んで、

『己は醉つてるから、こんなことを言つてるんぢやないぞ。己は醉つてはしないぞ。一體女は動物だ。人情だなどと言つて、人情が女に解つてたまるものか。男の心持が女になぞ解つて堪るものか。一體、女に男の心持が解らないから悲劇が起るんだ。杉山でなくつては夜も日も明けないと言つたお前が何故出て來た。一旦定めた男を何故お前は助けて苦勞をしない。馬鹿でも何でも一旦お前が好いと定めた男ぢやないか……男もまた意氣地がない奴だ。出刄庖丁でも何でも持つて來て、かういふ蒲團をかぶつて寢てゐるやうな不貞な女の橫つ腹をゑぐつてやれば好い。ぐ、ぐ、ぐつとゑぐつてくれる、己ならば……なァこれ、さうぢやないか。』

また酒を飮まうとするのを細君は押へて、

『好いことがあるもんか、言ふだけのことを言つて聞かせる。さうだ。何故今少し早く教へて吳れなかつた。本當だ。よく言つた。お前には己の言ふことが解る筈だ。お前が今昨非を悔いて、母さんの言ふことを聞いて、あの杉山を思切つたにした處が、其處にねかしてある一塊の肉――子供は何うする。緣を切つても、お前と杉山と子供との肉の關係は一生切れない。法律や世間では、お前と杉山とは夫婦でなくつても、杉山は子供のお父さんで、お前はお母さんだ。これぱかりは何うすることも出來んぢやないか。私は今夜杉山がお前に逢はせて吳れと言ふから、そんなことは出來ない。男の面目として出來ない。かう言つてやつた。しかし杉山が今一度頭のしつかりした男で、強い意思を持つて居て、でも子供は私の子だ。私が逢ふ權利があると言つたら何うだ。それをも拒む權利は己にはない。お前と杉山とはさういふ深い關係になつてゐるのだ。鳥渡した若氣の至り――實際かうした羽目にならなければ、笑つてすまして了つても好いやうなことだ。それが親一人子一人と言ふ處からかういふことになつて來たのだ。』

德利を出して、

『おい、酒がない。』

『まだ、召上るんですか。もう遲いから。』

『遲いからよせと言ふのか。そんなことを言へば猶飮んでやる。人を馬鹿にするな。なければ取つて

つて來ても引張つて來ても出て行つた。その立派な口が二月經たない中に、その裏からかくれた事實が現はれて來るやうでは仕方がないぢやないか。』

『でも仕方がなかつたんですもの。』

『だから、無責任だと言ふんだ。お前は新しい教育を受けた女だ。女の自覺といふことも少しは知つてる筈だ。いや、さういふことを己が教へて遣つた筈だ。男女の關係などをも己がすつかり話して聞かせてやつたことがある。覺えて居るだらう。今になつて思ひ當ることが多いだらう。』

『本當に伯父さんの言つた通りです。』

かう言つた姪の眼には涙が見えた。『何故、伯父さん、今少し早く教へて下さらなかつた――。』

『さうだ……その時はもう遲かつたんだ。己が節操といふことを說いてやつたことがある。娘の節操といふことは、つまり自分の體を守るといふことだ。自分の體が尊いから、それで節操を守る。それ以外に節操を守るといふ意味はない。肉の關係をつけた以上それが一生ついて廻る。離れることが出來ない。それが恐ろしいから、節操を守る。さういふ譯なんだ。けれどさう言つて敎へてやつた時にはもう遲かつたんだ。お前はもうその時分男を知つてゐたんだ。』

『もう好いでせう、そんなこと。』

かう傍から細君が留めると、

苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をして主人は打附けるやうに言つた。
誰も顏を見合せて默つて居た。
主人はグビ〳〵酒を呷るやうにして飮んだ。瞬く間に顏は赤銅色になつて行つた。
細君が話の樣子を聞かうとすると、
『何に、話すやうなことはありはせん。馬鹿々々しくつてお話にならないッて言ふ方が好い位なもんだ。……今少し何か言ひ分があるかと思つたら、只詫びをするより外能がないんだからやり切れん。』かう言つて、姪の方を見て『お前、何うする氣だ？』
『母さんが承知して下さらなければ――』
『承知しなければ、もう思ひ切るといふのか。虚言だらう。その虚言なのは伯父さんにはよく解る。相談して、相對づくで、一時別れて、母さんを承知させやうと言つて來たんだらう？』
『そんなことは――』邪推にも程があるといふやうに姪は眼を丸くした。
『一體無責任でいかん。お前も母親を棄てゝ出て行つた位だから、立派に一生をその男と暮して行つたら好いぢやないか。何うしてもあの人とでなければ厭だ。あの人の許に遣つて呉れなければ自分一人でも行く。母さんは自分の好きな處にお嫁にやらうと思ふのかも知れないが、私には私の考へがある。私は母さんの私ぢやない。さう言つて立派な口を利いて、お前は出て行つた。母さんが泣き喚いて引張

『さう、まだ居るの。』

急に起上らうとしたが『もう歸つた。』と言ふのを聞くと、がつかりしたやうに、顔をそのまゝ蒲團に當てた。やがて子の啼いて居るのに氣が附いて、起き上つて、それを抱いて、乳房を含ませた。

暫くすると、若い母親は子を寢つかせて、はだけた前をかき合せて、長火鉢のある六疊の方に遣つて來た。

『だつて、本當に寢てゝ知らなかつたんだから仕方がないわ。』若い母親はかう言つて笑つた。

主人の機嫌の常に異つて居るのは、誰にも解つた。これから酒を飲むといふ。『もう十二時ですよ。』と細君が言つたが、それでも酒は燗德利に入れて持つて來た。小さい茶湯臺の上には、鰹の鹽辛だの、漬物だのが並べられた。

『さうね、もう十二時ね。』

姪が柱時計を見ながらそれとなく言ふと、

『杉山さん、電車に間に合はなかつたかも知れない。』

と細君は言葉を合せた。

『長い路を、女のことを考へ考へ、てく〳〵歩いて行つたらう。好い報酬さ！』

つて二言三語言つて、乳をのましてまた寢て了ひました。』

『暢氣な奴だ。女は男なんか何うでも好いんだ。』

主人はかう言つて、態々その寢てゐる傍に行つた。

『起さないでお置きなさいよ。』

細君がかう言ふのにも聞かず、

『おい、おい。』

主人はかう言つて搖り起した。

若い母親はやがてぱつちりと眼を明いたが、何か急な用事でもあつたかと思ふやうに、むつくり床の上に起上つた。

乳を放した子はまた啼き出した。

『男が死ぬほど女のことを思つて訪ねて來て居たのに、知らずに好い心持をして寢てゐる奴があるか？』

『男つて？』

眠むさうな顏をして女はかう聞いた。

『馬鹿な奴だ。杉山が來たんだ。』

であつた。親身になる此處の伯母さんは、『秀ちやん、すつかり母さんになつたね。さうして子供を抱いてゐるのを見ると何だか可哀相のやうな氣がするよ。』かう言つて、大勢の子持であるにも拘らず、何ぞと言つては、抱いたり負つだりして遣つた。

子持はお腹がすくものだからと言つて、カステラだの菓子だのをも買つて來た。

夕飯を食つて、子を寢かした六疊に入ると、子が寢つかない中に、逸早く自分から先に寢て了ふのが例になつて居た。『矢張、くたびれるんですねえ。學校に行つて遊んで歩くやうな樂なわけには行きませんねえ。子持になつては――。』伯母さんはかう言つて、成るたけ若い母親を起さぬやうにしてゐた。

其夜も無造作に束ねた髮を此方に見せて、啼いた時に無意識に含ませた乳をそのまゝにして、スヤスヤと心地好さうに寢てゐた。郡内縞の蒲團が明るい電燈の中に見えてゐた。

其處に漸く客を送り出して遣つて來た主人は、

『何だ、寢てるのか？』

『私はまた起るかと思つて心配して居ましたのよ。早く歸つて吳れゝば好いと思つて、さつき子供が起きた時にはヒヤ〳〵して居ましたのよ。』

『何だ。先程も起きてゐなかつたのか。』

『えゝ、矢張くたびれてゐるんですねえ。子供が啼くと、目をさましたやうでしたけれど、よしく

ほどの幼ない兒の啼聲――鋭い單調なある金屬と金屬とを合せたやうな啼聲が長く續く。
二人は默つて聞いて居た。
兒をなだめるやうな若い母親の氣勢も續いて聞えた
やがて啼聲がぱつたり止む。
主人は冷笑を顏に浮べて、
『あれや君の子だ。丈夫だから安心したまへ。』

主人と客と座敷で話をして居る間、二間を隔てた奥の六疊の間では、若い母親は、幼兒を抱いたまゝぐつすり心地好げに寢込んで居た。
何も知らなかつた。
若い母親には、戀にあこがれた時代のやうな戀はもうなかつた。赤兒をねんねこで背負つて、髮を束ね髮にして、遁れ場所を求める兎のやうに、こつそり裏から入つて來た時には、人達は短い間に青春の移つて行くのをしみじみと感じた。眉にも眼にももう人を惹くやうなところはなかつた。肌も荒れてゐた。
若い身には、一人の兒も尠なからぬ重荷のやうに見えた。抱いたり負つたりするのも一通ならぬ努力

かう言つた主人の聲は高かつた。『もう電車がなくなるよ君。それに僕もつかれたから――』

再び慌てゝ頭を下げた客は、

『どうも長座いたして申譯が御座いません。つい自分にかまけまして。』かう言つて、頭を下げて、『まことに申兼ねますが、當人が居りますなら、鳥渡逢はせて頂くわけにはまゐりますまいか。』

『それは困る！』主人の聲は一層強く響いた。『當人と、それから君達二人でつくつた子供と、それを私は預つて居る。しかし僕は君から保護する爲めに――君に取られないやうに、母親から頼まれて預つて居るのだ。それを君に逢はせるわけには行かない。』間を置いて、『普通の人情から言ふと逢はせる方が本當かも知れない、そこに人情があるかも知れない。しかしそんなのは甘い人情だ。僕だつて男だ。君の辛いのも解る。君が女に逢ひたいのもわかる。君がかうして夜遲くまで僕に不可能のことを望んで居るのもわかる。しかし君も男だ。男の忍ばなければならない苦痛は耐へなけりやならない。男の人格までなくして女に逢はうなどゝは男の言ふべきことぢやない。僕だッて君の心はわかる。』

客は不思議さうにして、主人の激昂した顏を見て居たが、また默つて向うの方を向いて了つた。

まだ歸らうともしない。

沈默がまた續く。

不意に、しんとした夜の寂寞を破つて、子供の啼く聲がけたゝましく聞えた。百日經つたか經たない

に仰向に空間を見つめて居た。電車の發車するのをも知らずに居た。

『男だ。男の苦痛だ。男の忍耐しなければならない苦痛だ！』こんなことを夜の闇の中に向つて叫んだ。

『欺かれたのではない。己の力が足りなかつたのだ。』

かう言つて自から慰めても見た。

苦い汁――むしろ鉛のやうな熱い汁を飲まされたのだ。

男の笑つた顏……もう自分のものでない女の美しい顏……。

氣が附くと、客がまだ其處に默つて坐つて居た。

四邊はしんとして居た。このしんとした死のやうな沈默が主人には堪らなく辛いものゝやうにも見えた。何も彼も破壞して了ひたいやうな氣分を押へるのは容易でなかつた。自分の前に坐つて居る男――女の爲めに男の矜持を全く捨てゝ了ふやうな男、それにいつまでもかうしてぐづ〳〵と相對してゐるのに堪へ難くなつた。

客はまた頭を下げた。

『何うか伯父さんの――』

『いくら言つたつて駄目なものは駄目ですから。』

れをそ誘拐した貴郎が憎い。貴郎の同情者になることは出來ない。』かうまでも言つた。話は絶えたり續いたりした。言ふだけのことを言つて了ふと、主人はぴつたりと口を噤んで默つて了つた。で、難かしい鹿爪らしい顏をした主人の顏と、愁ひを帶びた低頭き勝な蒼い容の顏とは、また長い間默つて相對じて居た。

主人の顏にも佗しさうな表情がそれとなく見えて居た。時々眉のあたりがピリリと動いた。默つて坐つて居る間、種々の幻影が主人の頭を通つて行くらしかつた。それは丸で二人で相對して話して居ることゝは別のことであつた。幼兒を抱へて遁げて來た姪や、男の矜持を捨てゝ自分の前に憐を乞うて居る男などは何うでもよかつた。かれの眼の前には、他の男に伴れられて去つて行つた最愛の女の姿が絶えずチラついて居た。

……其女はもう居ない。他人の持物になつて了つた。……男の心も知らない馬鹿な奴……復讐して遣らなければ腹が癒えない……復讐！　復讐！

殆ど自分を忘れるやうにして、かれは其處から出て來た。蹌々踉々として高い電車の停留場の階段を上つて行く憐むべき自分の姿が、丸で他人のやうになつてかれの眼に見えた。酒も飮まないのに脚がフラ〳〵してゐた。車掌臺に近い車内の一隅に膝をもたせ、後腦を硝子窓に押當てゝ、喪心した人のやう

と一緒に彼方此方につれて行つた。幼い頃はよくリボンなどを買つて遣つた。氣の置けない娘で、伯父さんの腕にすがりついて物をねだつたり何かした。日曜日には、派手な銘仙に菫色の袴をはいて遣つて來た。バイオリンの譜を持つて來てこれから先生の許に行くんだなどとよく言つて居た。其の姪がいつか女になつて、子を生んで、かうした一幕のヒロインになつたかと思ふと、不思議な氣がせずには居られなかつた。

樂器の置いてある二階の一間、其窓にそよいでゐる梧桐の影も思ひ出された。月の明るい夜、其處から洩れて來るピアノの音、それもさやかに聞えるやうな氣がした。若い男女の戀の場は到る處にある。

皮肉な不機嫌な主人の言葉を客は絕えず受け流すやうにして聞いた。此處の主人に縋らなければ何うすることも出來ないやうな位置にかれは居た。かうして來たからには、何んな些かな足溜でも好いから得たいとかれは思つた。聞いて居られないやうな痛い言葉からでもかれは戀しい女の消息を得やうとした。

しかし主人の言葉には賴られるやうな處はなかつた。

『何うか、伯父さんのお許しを得て――』かうした語氣を少しでも見せると、主人はいつもそれを正面から拒絕した。『私は要するに第三者だ。母親と貴郞との關係だ。それに、私も姪を愛して居たから、

は夢にもないやうな顔をして、正面から媒妁人などをよこした。それが憎い。かうも言つて居た。』
『あの時私が自分で參れば宜しいので御座いましたが、つい……。』
主人は暫く口を噤んでゐたが、
『一體、いつから關係を結んだんです？』
『…………』
『話してお聞かせなさい。』
『お宅がまだ私の近所にある時分からです。』
『ぢや、もう三年も前ですな。あの子が十七位からですな？』
客は點頭いて見せた。
『矢張、母親の言ふ通り、あの二階を歡樂の場所にしたんですか。』
『…………』
主人は笑つて、
『歡樂から起つた自然の報酬といつたやうな譯ですな。』
客は眞面目な顏をして默つて了つた。面白さうに笑つた主人の顏も、すぐ曇つて行つた。主人は其の姪を多くの姪の中で一番可愛がつてゐた。眼の可愛い肌の綺麗な美しい兒だつた。何ぞと言つては、妻

『何んなことでも……。私の母親があちらの母さんのお氣に召さなければ、私達は別居しても宜しいので御座いますが——。』

『そんな簡單な問題ではないんです。第一、貴郎に對して、母親は非常な敵意を持つてゐる。これは私も無理はないと思ふ。長年育てた母親の心はとても貴郎になぞお解りにはならない。それに、貴郎の家庭——ことに貴郎の母さんに對して一番烈しい敵意を持つてゐる。三年四年の間、貴郎の母さんは、默つて二人の間柄を見てゐた。貴郎と娘との密會が多く貴郎の家庭で行はれたといふことが一番母親の感情を害してゐる。そんな母親のある家庭にはやられない！　かう言つて居ます。……此間、貴郎が行つた時には、母親は何んと言つてました？』

『………』

『矢張さう言つて居たでせう。』

『母さんのお腹立に對しては、何とも申上げやうが御座いません。』

『それに、かういふこともある。貴郎は娘に取つてはお師匠さんだ。バイオリンを教へて下すつたお師匠さんだ。師匠と弟子だ。それがかういふ關係になつたといふことがけしからん！　それも言つてゐる。バイオリンを教はりに行くんだと言つて、一人の親を騙して行つた娘も憎い。かうも言つてゐる。……それに、懷妊した時に、何故それと打明けて言つて呉れなかつた。知らん顏をして今まで關係など

※

のなら、同じかうなるにしてもこんなせつぱつまつた形にはならなかつたでせう。』

かう言つた主人の顏には、冷笑の影がありありと見えた。

『重々不都合な點はお許し下すつて――』何うしても許して貰はなければならないといふ風に客は見えた。

客の顏は蒼かつた。何處を搜しても餘裕のない眞面目な沈んだ表情をしてゐた。生れて百日と經たない幼兒を作れて女が家出してからは殆どじつとして家に居られなかつた。生命を失つたもののやうに、女の親戚をたづね廻つた。田舍にゐる女の伯父の家にも行つた。耻を忍んで女の母親の許にも行つた。

『母親が承知しないんですから仕方がない。』

主人は再びかう言つた。

暫く互に默つてゐた。

『しかし、承知しないのも無理はないですな。』

主人は母親が其一人娘に就いていかに長い間心を注いで養育したかといふことを詳しく話した。それと聞いた時の母親の絕望、男の家に遁げて行つても幾度となく自分で行つて娘をつれ出して來た時のその意氣込み――さうしたことをも話して聞かせた。

『いゝえ、決してさうは――』

主人は冷かな笑を顔に湛へて、

『しかし、貴郎の立場から見ると、それは大分違つて來るかも知れない。通じてゐる中は、まだ海のものとも川のものともわからない。あの娘が貴郎のものになりつゝあるといふ證據がない。痕跡がない。それで貴郎は、その痕跡がちやんとつくまで――つまり懐姙して自分のものだといふ立派な證據が出來るまで放つて置いた。娘を占有する手段にしては完全な手段だ。世の中を巧に渡る人は、意識して遣つて居るのと無意識で遣つて居るとの區別はあるが、大抵さういふ行爲をして居るものだ――だから敢てそれを以て貴郎を責める譯でもない。これが大抵な家庭なら『御免なさい。』『仕方がない。』ですんで了ふ。さういふ話は世の中にくさるほどある。私の知つてるのでも五つや六つはある。しかし、今の場合はさういふ場合ではない。不幸にして貴郎の選んだ娘は、親一人子一人といふ特殊の家庭に生ひ立つたものだつた。子が腹にある間は、娘は親を棄てゝ男に從つたが、身二つになると共に、今度は親を思つて男の家から出て來た。さういふ形なんだ。それは解つてるでせう？』

『解つて居ります。』客は下唇を嚙みながらかう言つたが、顔をあげて『しかし、私はさういふ積で、人に知れるまで放つて置いた譯では御座いません。』

『それは無論さうでせう。無意識にやつたことだといふことは私にも解つて居ます。意識して遣つた

主人は急に聲を改めて、

『貴郎の一生？　本當に貴郎はさう考へてゐるんですか。』

客は默つて點頭いて見せた。

『本當にさうですか？　ぢや私も言ふことがある。』主人の顏には眞面目な嚴かな表情が見えた。『それなら、私の考も言つて見る。詫びる、只詫びる、さういふ心持で聞いて居るのでなければ、言ふ。貴郎の遣つたことは、普通に言はれる罪と言つたやうなものではないでせう。若氣の至り、かう言つて、昔の人も多く許してゐる。いつの間にか、知らず識らずさういふことになつて行つたんでせう。それは私にもよく解る。しかしさういふことになつて行く第一步、その時から、貴郎には娘の親に對し、世間に對し、重い一種の責任がある。その責任を貴郎は何う取扱つたか。貴郎はその責任を棄てゝ置いて、默つて歡樂に耽つて居たぢやありませんか。三年も四年も處女の操を汚して、相手が世間に見られるのを憚るやうな體になるまで放つて置いたぢやありませんか。さういふ恥辱を娘に見せたといふことは、眞面目に考へると、貴郎の無責任です。そしてまた貴郎の無慈悲を表白したやうなものだ。何うも男らしくない。……私はあの子が懷姙したのを押しかくして、親や親戚や伯父達やさういふ人達の意見を振切るやうにして、一人の母親を泣きの涙の中に殘して貴郎の方に逃げて行つた心持を考へて涙が出た。それを貴郎は、詫びさへすれば、それで其の責任が全うされると思つて居るのですか。』

愁を帶びた客の眼は、再び主人の方を見た。

『何うも難かしいですな――』主人は冷かに、『一體、貴郞が惡いんですから。』

『私の惡いのは、それはもう十分心得て居ります。それはもう私の惡いのは――』

前に既に幾度も繰返した同じ文句になつて行くのを、主人は面倒臭さうに遮つて、

『それはいくら貴郞がお詫をなすつたつて、駄目です。どんな不都合をしても、詫びさへすればその不都合が消えると思つて居ると、違ふ。』

『いゝえ、決してさうは思つて居りません。……私が惡い、今度のことは皆な私が惡いから起つたことです。それは十分存じて居ります。で御座いますから、何んなことでも致して。』

『でも、母親が承知しないんですから、仕方がない。』

『其處を何うか伯父樣達のお言葉で――。本當で御座います。家出をされてから、夜は每晩休んだことがない位です。仕事も手につきません。――』客の眼からは涙が滲み出してゐた。

『何んなことでも、お母樣の思召の叶ふやうに致しますから。』すぐ客は言葉を續いで、『彼方の母さんが親一人娘一人で居らつしやることも存じて居りますし、かういふことになりまして、嘸ぞ母さんが、御立腹で居らつしやるだらうといふこともよく存じて居ります。……しかし、私の一生にも關係してゐることで御座いますから。』

客

夜は十時を過ぎてゐた。

竈燈の明るいのも何處となく四邊に釣り合はないやうに見えた。大きな陶器の火鉢には、火が既に半ば尉になり懸けた。主人も客も默つて相對した。

何の物音も聞えない。

一分、二分、三分――矢張二人は默つてゐた。客は洋服姿をしやんと坐つて、俯向き加減に疊を見詰めてゐた。主人は客が何か言ひ出すのを待設けるといふやうにじつと客の方を見てゐた。

沈默が續いた。

それは何うすることも出來ないやうな沈默であつた。客も主人ももう何も言ふことがなかつた。暇を告げて客が歸つて行かなければならないやうな順序になつてゐた――それに夜も更けた。

『何うしても駄目で御座いませうか。』

いて膝から離さなかつた其兒を窓の方に坐らせて、夏蜜柑を包みの中から出して、皮を綺麗に丹念に剝き取つて、一片づゝ子供の口に入れてやつてゐた。十一二になるお下げの娘はわざ〳〵窓の處に行つて遠く光る海の色などを見てゐた。

『まあ、漸く下りられる。何かまた事がなけりや好いと思つて、それや何んなに心配したか知れやしないのよ。一度あることは屹度二度あるものですからね。……厭な汽車、厭な汽車！』子供の屍を見た時、兩手で顏を掩つた中年の女は、かう言つて網の上から信玄袋を下して、そして松原の中の停車場から下りて行つた。其停車場の小さい花壇には、紅い石竹が見事に咲いてゐた。

新しい客が段々多くなつて來た。子供の轢かれた話を繰返し繰返し話した男ももう何處かで下りて行つてゐた。新しい人達は聽て新しい話を題目にして笑つたり何かした。

かうした言葉が絶えず繰返された。

『線路の中に入つて居たんですかねえ。何うしてまあ、そんな處に來て遊んで居たんでせう。花を取りに入つてゐたんですつてねえ……。五つや六つではまだあぶないなんていふことは知りませんからねえ。』

汽車が二つ三つの停車場を通り越しても、その話は容易に盡きようともしなかつた。其の紅い小さい塊は長い間はつきりと人々の眼の前にあつた。

五

汽車の通つて行く兩側には、田舍の衰へた町があつたり、一八の咲く茅葺屋根があつたり、高い處に新に建築された立派な別莊があつたりした。

新しく乘つて來た人々を捉へて好奇に『この汽車は今、五歲位な子供を轢いて來たんですぜ。』などゝ話して聞かせる人達もあつた。新しく乘つて來た客は、厭な汽車に乘り合せたもんだといふ顏をして、しかもめづらしさうに其話を聞いた。『まあ可哀相にねえ。』女の客は矢張かう同情した。折角遠ざかつた光景がまた新たに繰返して話された。

でも汽車が海岸に近い松の多い處を駛つて行く頃には、同じ年頃の女の兒をつれた細君も、今まで抱

も手も離れ離れになつた小さい紅い塊……巡査の長劍……群集……。

四

『まあ、厭だ！』

かう言つて顔を兩手で蔽つて長い間じつとしてゐる女もあつた。

『まあなんていふ汽車に乗り合はしたんでせうねえ！』

『何んなでせう？　親は？』

さうした聲が轟々とした汽車の音に交つて聞えた。

『何故、私は見たんでせう。見なければよかつた。厭ですわねえ！』

若い娘はつらさうにして言つた。

車中にあるとある女達は恐ろしい運命の迫害から辛うじて遁れて來たやうにほつとしてゐた。家に置いて來たその同じ年頃の子供達を思はない母親はなかつた。現にさうした子供を伴れて旅をしてゐる人達は、しつかりと其子を其身の傍から離さぬやうにしてゐた。

『本當に油斷がなりはしませんわねえ。』

『人ごとと思へませんわねえ。』

か一緒に來たんでせうにねえ?』

『それ、其處にゐるのが伴侶ですと。』

かう右側に居た男に教へられて、女達はその青々とした廣場を前にした群集に取卷かれてゐる三人の兒を見た。七歳から十歳位までの年恰好で、一番年上なのは、髮をお煙草盆に結つて、赤いメリンスの前垂をしてゐた。

その女の兒は始めは何かいろ〳〵と口を利いたり、指さして教へたりしてゐたが、その幼い眼に映つた事件の何事であるかに俄かに思ひ附いたやうに、やがて袖を顏に當てゝ泣き出した。

三

汽車は靜かに動き出した。

列車の左側の處からは、乘客の顏が幾重にも重り合つて見えた。

汽車は靜かに、靜かに…………。

一番先に見えたのは灰色に濁つた汚い堀割の水であつた。其處には泥を滿載した舟が一艘繫いであつた。其の堀割に架けた橋を渡る汽車の音がちよつと耳立つて聞えたが、やがて線路と堀割とに接して、小さいスロープになつた草の生えた處が見えた。綠色の草……散らばつた花束…………紅い血……足

二

『子供が轢かれた!』

誰言ふとなく、さうした聲が車内から車内へと傳へられて來た。一二分經つた後には、群集が彼方此方から集つて來た。汽車から下りてわざわざ走つて見に行く人達もあつた。向うの廣場の柵を越えて、酒屋の御用聞らしい男が此方へ飛んで來たが、子供の二三人立つてゐるところへ來て、何か強ひて聞くやうな形をして、其儘汽車の傍へと寄つて行つた。

後から後へと人々が續いた。

一人の巡査は劍を左の手で持つて慌てゝ走つて來て、叱咤するやうにして群集の中に入つて行つた。車内の空氣は何處となく騷々しかつた。乘客達は皆な顏を曇らせて居た。轢かれたのが子供だといふだけに一層心を動かされたやうにも見えた。『何うしてまあそんな處に子供が出てゐたんでせうねえ。』かう言つた三十七八のコートを着た女は傍に七歲になる位の可愛い女の兒を伴れて居た。

『そんな處に出しておく親の不注意さねえ、まあ。』

かう言ふ聲も聞えた。

『幾歲位? 五歲? まあ五歲位ですつて。それぢやまだ何にも知らない可愛い盛ですのに……。誰

線路

一

停車場を出てまだいくらも來ないのに、汽車はふと輕い動搖を感じて、俄かにしかし緩やかに停車した。非常汽笛が鳴つた。

『オヤ。』

『何うした？』

乘客は互に顏を見合した。車窓から首を出したものもあつた。『誰か轢かれたかな？』かう言つて窓の方に立つて行く人達もあつた。それは丁度町外れと言つたやうな、汚い低い家屋の兩側に並んだところで、色の褪せた襁褓などが懸けつらねられてあるのが其處から見えて居た。トタン張の長い塀には大きな廣告などが書いてあつた。道路と線路とを仕切つた處には、背の低い枳殼の垣が勢よく新しい芽を伸ばして居た。向うの方には敷いたやうに一面に草の青々とした廣場が見えた。

合せて見た。

かう洋服の男が言つた。

二人は電車に乘らずに歩き出した。元氣が俄に出て來た。兩側の灯が明るくなつたやうにさへ思はれた。二人は賑かな明るい巷路を曲つた。

『蕎麥でも食つて行きませうか。』

『さうですねえ、腹が減りましたねえ。』

その蕎麥屋で、二人はまた酒を一本つけさせて飮んだ。饑ゑが滿されると、疲勞もいつかなくなつたやうになつた。蕎麥屋を出た時には、蘇つたやうな好い氣分に二人はなつて居た。

灯が町から町へとかゞやいてゐた。やがて出て行つた土手の上には、おでん燗酒やの屋臺だの、小料理屋だの、いろ〳〵なものがゴチヤゴチヤと並んでゐた。その混雜の中を、懸聲の好い車は、縫ふやうにして驅けて行つた。

二人の姿はやがて大門の方へと歩いて行つた。二人は肩を合せるやうにしてゐた。大火から一年經つた今では、もう本普請の出來た家もかなりに多かつた。電燈と瓦斯とは晝のやうにこの賑かな廓を照してゐた。

張見世に並んだ女の色彩は、二人の眼の前を絕えずチラチラした。狹い巷路を通る時には、客を呼ぶ艶かしい女の聲が四邊に際立つて高く聞えた。二人はとある暗い角のところに立つて、懷中にある金を

二人は其處で酒を一合飮んで赤い顏をして戶外に出た。

路は二つに岐れてゐた。

瓦斯や電燈はもう點いてゐた。『何うします、電車で歸りますか。それとも根岸の方に步いて行きますか。』

『電車で歸りませう。』

洋服の男はかう言つて先に立つた。

二人は樂みにした日曜のかうして過ぎて行くのを佗しく思つた。明日からは、また例の計算、例の簿記、例の暗い一間、例の係長の難かしい顏……。二人は默つてつまらなさうにして步いた。

電車の停留してゐる處に來て、

『ぢや、電車で歸りませうか。』

『歸りませう。』

かう言ひながら、二人はある物足りない心持を同じやうに感じた。此まま歸るのがいかにもつまらないやうな佗しいやうな氣がした。二人の行く先には賑やかな吉原の狹斜があつた。『何うせ近くに來たんだから、それぢやひやかすだけひやかして行きませうか。』

二三年の出水に水脈が二つに別れて、以前は、女や婆さんが足袋だの古着だのを地べたに並べて賣つてゐた處に、新しい橋が出來た。水がちよろちよろ流れてゐた。

大橋を渡る頃には、二人はもうかなり疲れてゐた。夕暮ももう近く眼の前に迫つてゐた。橋の袂にかかつてゐるペンキ塗の汽船、流れ寄つたやうに岸に集つてゐる筏。向うの材木屋の材木置場――それが花やかな夕日に照されて、丁度油繪か何ぞのやうに見えた。ボートや小舟がその間を織るやうに動いて居た。

『何處かに行つちやつたと見える。』

かう言つて失望した土地に名高い鮨を賣る店が向う側に新築して移つて居たのをやがて發見した。『まだ、そんなに腹が空かないけれど――』二人はかう言ひながら其の鮨屋の店に入つて行つた。

それは藥種商を本業にしてゐるやうな家で、店には大きな新しい卓が置いてあつて、二つ並べた孤被を後に頭の禿げた親爺が赤い顏をして立つてゐた。

『鮨はもうお了ひでナ――。』

しかし二人は其儘其處を去らうともしなかつた。『少し休ませて貰はう。』かう言つて、椅子に腰をかけて卷煙草に火を點けた。店の火鉢の傍には、近所の人らしい品の好い爺さんが、これさへあればと言はぬばかりに、ちびりちびり一人で德利の酒を傾けてゐた。

もう、私は扉に出てましたからね――』

『矢張忘れられなかつたでせうね。』

『いや、そんなでもなかつたですよ。葛城といふ方の女は、それでもやさしい女だッたですけれど、それが引かされてから、その妹女郎を買つたんですが、段々金をまきあげられることがつまらなくなつて、しまひには喧嘩して別れて了つたですよ……だから、そんなに辛くはなかつた。』

『兎に角面白いね、奥さん知つてるるんですか。』

『えゝえゝ、來ると間もなく、日記を見られちやつて。……先生が來る少し前でしたからね。日記になど書かなけりや好いのに、矢張書きたかつたんですね。』

かれは笑ひながら言つた。

賑かな通は長く續いた。かれはいろいろなことを知つてるた。角の小間物屋に綺麗な娘のあつたことや、青物市場の朝の賑かなことや、荒川堤に行く近道や、さうしたことをかれは行く〳〵洋服の男に話じた。夕暮の靜かな青物市場では、一人の男が何か見世物を出して、その周圍に黑山のやうに人を集めてるた。

『すゞめ焼を土産に買つて行つて、それで遊ぶことを悟られたことがありましたよ。』

鮒のすゞめ焼を賣つてる店の前では、思ひついたやうにかれはこんなことを言つて聞かせた。

かれは歩きながら其時分のことを話した。年は二十四、日曜日には屹度通つて來た。上野の山下から車賃が十五錢で、いつもそれに乘つては遣つて來た。一年ほど其の關係がつゞいてゐた。相手は十九位で名は葛城――こんな話をかれは歩きながら洋服の男にして聞かせた。

『醫者に請出された筈だが、今は何うしましたかネ。』

かういふ話も平氣でした。

橋を渡つて都會から出て來たやうなその大通は、此處等あたりでも、まだ相應な賑さを保つてゐた。大きな構の家屋があると思ふと、それは多くはさうした種類の家であつた。淺黃の暖簾が風に靡いてゐた。

色の白い方の通つて來た家は、此土地では一番大きな名高い舗であつた。其處は今でも前に柳の樹が植ゑてあつた。かれは二階を指して『丁度、あの室でしたよ。久しく來ないが、まだ元のまゝだ。』かう言つてなつかしさうに其方を見た。

『此方が張見世をする所だつたんです。』

隣の塀で圍んであるところをかれは指して見せた。

『それでも、初めは、夜來たもんですけれど、後には日曜日の十時頃から來て、日の暮れる時分まで遊んで行つて、これから客が來ようといふ頃、暖簾を分けて、そッと出て來たもんです。其時分、

橋を渡つて、その車の先に出ると、二人は一生懸命に驅け出した。

洋服姿の後から髪の濃い色の白い男がセイ／＼呼吸を切らしながら驅けて行くさまが、ボツボツ大きな粒の雨の落ちて來る街道の中に暫し鮮やかに見えてゐた。

森の陰の停車場に行つて、二人はホツト呼吸を吐いた。

洋服姿の男は停車場の中から暫し凄じい南の空を見てゐたが、『本當に戰爭のやうだ。奉天の陷る時は丁度あゝいふ鹽梅でしたよ。思ひ出すなァ。』かう言つて猶ぢつと見詰めてゐた。

『それは面白いね、君にもさういふ時代があつたんですか。』

洋服の方は笑ひながら言つた。二人は停車場からある町の通に出ようとしてゐた。一しきり押寄せて來た黑雲は僅かな雨を齎したばかりで、逸早く通つて行つて了つた。夕日は花やかに射した。

色の白い方は『あの頃はすぐ、夢中になつて了ふんですからな。』かう言つて、其處にある大きな牛肉屋を指して、『其時分は、よく、その牛屋で飯を食つて歸つたもんです。』

『今でもその家はあるんですか。』

『家はありますが、代も變り名も變つて居ます。雨の日に傘のない時など、此處を大急ぎで走つて停車場に行つたもんですがな。』

て勸めた。二人は俳句を考へながら歩いた。

二人は肥料溜の臭いのを咏んだり、葱の白根の長いのを咏んだりした。遠く離れた野中の百姓家なども二人の俳句の題材になつた。

『えらい天氣になりましたね。』

色の白い方がふと氣が附いたやうに言つた。洋服の方の一人も前からそれを知らぬでもなかつた。西から南、都會の空にかけて、凄じい黑雲が烈しい風と共に一面に押寄せて來てゐた。それに、都會の場末の工場の煤煙が夥しく交つて靡いてゐるので、丁度非常に大きな火事でも起つたかのやうに見えた。

『雨が降つて來ては大變ですね。』

『こんな空にならうとは思ひがけませんでしたね。少し急ぎませう。』

かう言つた二人は急ぎ出した。俳句などはもう考へてゐなかつた。

黑い雲を絕えず氣にしながら歩いて行つた間には、國道との岐れ路の石標が立つてゐたり、昔、榮えて今は全く衰へ果てた驛が展けられてあつたりした。

驛と驛との間の川には、橋板の朽ちた古い長い橋が架つてゐた。橋錢を取る小屋が橋の袂にあつた。

やがて雨がポツポツ落ちて來た。二人は丁度その時橋の上を幅をして通つて行く大きな松の樹を載せた大八車の前に出ようとしてゐた。

れた。

『この風では仕方がない。』

二人はかう言つて、元の祠堂のある處に引返して來た。

此儘、歸つて了ふのは餘り興がなさ過ぎるといふ話も二人の間に取交されてゐた。しかしもう此他には此處等には何も見るものもなかつた。山門の前長のい通をブラブラと人車停留場の方へ歩いて行く二人の姿がやがて見えた。

停留場には誰も居なかつた。車もなかつた。近所での話では、客が向うにあつて車が來なければ何時まで待つてゐても駄目だと言ふことであつた。二人は止むなく別な道を別な停車場の方へと行つた。

都會の市場に朝毎に運んで行く野菜の準備を百姓達のして居るやうな野道を二人は靜かに歩いて行つた。深く畦を切つて作つた葱、それを拔いて、束ねて、路傍の車に積んで居るやうな光景は到る處にあつた。畑にゐる若い娘達は仕事の手をとゞめて、都會の人の後姿を見送つてゐた。

『女の子に振返られると思つたら、君がゐるからですね。』

『さういふ譯でもないでせう。』

かう色の白い方はおとなしく言つて笑つた。

二人は俳句の話をしてゐた。『向うに行くまで何か一つ遣らうぢやありませんか。』洋服の方はかう言つ

ア、お二人とも好いお色ね。』と言つて笑つた。ビールを一本飲んでサッサと飯を食つて了ふやうなお客は、女中には相手にならなかつた。『もう、下げてもよう御座いますか。』と言つて、グングンお膳を下げて行つて了つた。

色の白い方は、膳の上の盃を手に取つて『一つ記念の爲めに此杯を貰つて行つてやらうかな。』かう言つて、笑ひながらそれを袂の中に入れた。

『君はさういふ趣味があるんですか。』

『えゝ、かなり集りました。』

などと言つた。

膳を引いた後も、二人は暫しそこに坐つてゐた。巻煙草の煙が靜かに一間の中に漂つて行つた。通運丸と書いた白いペンキ塗の汽船が、淺い水を切つて波を立てゝ上つて來た。

『何處まで行くんでせうね。』

かう言つた和服の方は、その汽船の行く先々の町や港を想像してゐた。

此處から川の下流の停車場に行つて、其處からかへる積りで二人は居た。しかし料理店を出て、土手の上に來ると、強い西風が凄じく砂塵を揚げて、そんな興はもう何處かへ吹飛されて了つたやうに思は

やがて大きな川に臨んだ料理店の一間に二人は相對して坐つてゐた。

『好い景色ですね。』

かう言つて、色の白い方は欄干に凭つて長い間川を見て居た。

川は溶々として流れて居た。對岸には、茅葺屋根が一軒竹藪の中に見えて、渡船小屋の柱に立てかけた張物板の赤い布が、強く、くつきりした色彩を四邊に際立たせてゐた。渡船は自轉車一輛とその主らしいハンチングと、頬冠をした百姓とを載せて此方へと遣つて來た。下流には、風を孕んだ帆が二つ三つ見えて其向うに樹木の繁つた高い丘陵が續いてゐた。

欄干の下には、生洲船の傍に汚い一艘の舟が繫いであつて、百姓の婆さんが其處で一生懸命に菜を洗つてゐた。

硝子障子の間から、川を通つて行くものが絶えずチラチラした。二人は時々その方に眼を遣りながら吩咐けたものゝ出來て來る間を頻りに五目並べに耽つてゐた。

洋服の方が二度も三度も負けた。

『何うも君は強い。』

かう言つて洋服の方は碁盤を元の床の間の上に持つて行つた。

一本のビールを二人で飮んで、二人とも眞赤な顔になつて居た。其處に出て來た赭顔の女中は、『ま

若い丸髷の細君は、顏を赧くして禮を言つた。

車を後から押して來る手拭を冠つた人足の顏が飛んだり跳ねたりするやうに車の窓に見えてゐる間、男の兒は頻りにその狸のついたゴム風船を膨らませてゐたが、やがてパチと響がして破れて了つた。婆やの抱いた兒も、虎の兒の長い尾を引張つて取つて了つてゐた。

祠堂は人車の停留場のすぐ向うに見えてゐた。門前はかなりに長く、小料理屋やくず餅を鬻ぐ店などが其處に並んでゐた。山門の奥には、立派な本堂と、大きな賽錢箱と、鰐口を叩く太い紐とが見えてゐた。

石の手洗鉢の上には、いろ〳〵な懸手拭が風に動いてゐた。

二人が禮拜をすまして山門を出て行く時、若い丸髷の細君は、その手洗鉢で洗つた手を手巾で拭いてゐた。

二人の姿は、暫くすると、大きな川の土手の方に行く路に見えた。

『玩具と菓子の交換は面白かつたですね。』

『人情が現はれてゐますね。』

かう言つて二人は笑つた。

俄かに寒い西風が吹いて來て、黄い埃を高く颺げた。

て來た。二人が其處に來た時には、最切の車は、汚い手拭を冠つた人足に押されて既に出て行く處であつた。

二人は物珍らしさうにしてその次の車に乘つた。『玩弄具のやうな車ですね。』などと二人は話し合つて笑つた。やがて後れた人達も乘つて來た。

此處等あたりの富豪の細君でもあらうと思はれるやうな丸髷に結つた綺麗な若い細君は、初兒らしい丸々と肥つた子を婆やに抱かせて乘つて居た。汽車の中で買つた達磨のついた風船や、虎の兒の玩具などを頻に子供に見せたり何かして、餘念なくあやして居た。處へ、八歳と五歳位の二人の男の兒をつれた夫婦連が入つて來た。男は役所へでも勤めてゐる人らしく見えた。女は丸髷に結つて居た。

達磨のついたゴム風船の縮んだり膨れたりするのを末の方の男の兒はぢつと長い間見て居た。と、若い丸髷の細君は、『さあ、坊ちやんにも一つ上げませうね。』かう言つて、もう一つの方の狸のついたゴム風船をその男の兒に呉れた。

『まア、好いのね。何うもお氣の毒さまでした。』丸髷の細君はかう言つて禮を述べた。そして亭主の方にそれとなく目配せをして見せると、男は信玄袋の中から、菓子を入れた袋を出して、そこから桃山を五つほど紙につゝんで、婆やの抱いてゐる子供の方へ、『さアほんの少しばかりですけど。』と言つて返禮をした。

最後に持出した達磨のついたゴム風船とピイピイ鳴る笛とは其處此處で買はれた。
下りた停車場では、二人の行く方に行くらしい人達が多く下りた。二人は此方から彼方に通ずる汽車の橋の上に昇つて行つたが、やがて言ひ合せたやうにぢつと其處に立留つた。晴れた空には遠山の雪がキラキラと日に輝いてゐた。
『何處の山でせう?』
『さア?』
旅に出たことの無い二人は、その山の何處の山であるかを知らなかつた。二人は唯あくがれるやうにして見た。
『綺麗ですね。』
『何うです、あの雪の光ること!』
かう繰返して長い間二人は立つて見て居た。

ある祠堂に通ずる田舍道には、小さい箱のやうな車を人足の押して行く軌道が停車場から十二三町の間通じて居た。汽車から參詣人が下りたと見ると、車掌は塵埃だらけの小屋の中から汚い頑固な不性らしい手を出して切符を賣つた。車庫の中から黄いペンキで塗つた車は一臺二臺とやがて靜かに引出され

を洋服の男の前に置いた。

乘つた停車場から下りる停車場まではいくらもなかつた。遠くへ旅行する人達は混雜の中に行李や鞄を持餘してまご〳〵してゐた。時の間に汽車は都會から遠ざかつて行つた。ある停車場では、信號の都合で、汽車が十分ほど駐つてゐた。洋服姿の男は、其時『此處等に女學生が男とあひびきするやうな處があるさうですね。』と言つて四邊を見廻した。

しかし田と疎な榛の木立ばかりで、さうした家が其處等にあらうとも思はれなかつた。

瓦甍の上に漲り渡つた都會の煤煙はまだ其處からも見えてゐた。或處は暗く或處は白く或處は黃く見えた。凄しい音をして渡つて行く鐵橋の上からは橋が見えたり、大きな川に添つた町が見えたり、若い人達の櫂を並べて漕いで行くボートの新しい白いペンキが四邊に際立つて見えたりした。

林の中から赤い大きな煉瓦造の建物が見えた。

『さうですか、あれが監獄ですか。』

洋服の方に敎へられて、色の白い方は、長い間、疎な榛の木立の間にチラチラするその赤い建物を見詰めてゐた。

すぐ二人の前に居た包みを持つた男は不意に立上つた『皆さん一寸御披露いたしたいものがあります――』かう言つて、雜誌だの、繪本だの繪葉書だのを手の指の間に挿んで、節をつけて饒舌り出した。

愛嬌の好い細君は眼元に笑を湛へながら言つた。

で、二人は格子戸を明けて出て來た。『兎に角郊外へ――』かう言つて二人は電車の停留場に來た。

電車と汽車とは時の間に二人を郊外に伴れて行つた。それでも汽車の停車場では、一時間ほど待たなければならなかつた。二人は其間に停車場前の西洋料理店の扉を押してその中に入つて行つた。

『先に行つて何か食ふにしても、もう腹が減つて來た。もう十二時ですからな。』洋服姿の男は、かう言つて、卓の前の椅子に腰を落して、自分の懷中時計の時間を柱の時計の時間に合せた。

銀杏返しに結つて赤い襷をかけたボーイ代りの姐さん、時計を見い〳〵フォークやナイフを動かしてゐる田舍者の群、さういふ人達の中で、二人は牡蠣のフライ一皿とパンとを食つた。紅茶をも一杯づゝ啜つた。洋服姿が勘定をしやうとすると、色の白い方の男も懷中から財布を出した。『まアまア、僕がやるよ。』洋服姿はかう言つて強ひてそれを藏はせやうとした。

『ぢや、あとで――』

かう言つて、一人は顏を赧くしながら、財布を元の懷中に入れたが、姐さんを呼んで、敷島を一個貰つて、先づ一本自分で引出して火をつけて、

『何うです、一本やりませんか、煙草を吸はない君でも一本位好いでせう。』かう言つてその煙草の袋

時には、主人は緣側の日向に寢轉んで、心持好さゝうに轉寢をして居た。三毛猫がその傍に丸くなつてゐた。

洋服の男は笑ひながら、肩の處に手をかけて搖ぶり起すと、驚いたやうに眼を明いて、そして起上つた。『あゝ……君ですか。』かう言つて眼を摩つた。

『奥さんは？』

『今、烏渡、其處まで行きました。』座蒲團を勸めたり、火鉢の火を掘つたりして、『しかし、もうすぐ歸つて來ます。』

二人は瀨戶の丸い火鉢を挾んで、暫らく何か話して居た。二人は同じ役所に出て居た。一緖に算盤を彈いたり簿記をつけたりする連中だ。役所での二人の席は丁度さし向ひになつてゐて、帳簿や記錄が其間に高く積重ねられてある。二人はその間から時々紙に書いた俳句の見せ合などをした。

二人は細君の歸るまで話してゐた。細君の丸髷の手絡はまだ紅かつた。

『何うです。行かうぢやありませんか。こんな好い天氣の日曜を、一日家に引込んで居たつてつまらないぢやありませんか。』洋服の男はかう言つて、細君の方を見て笑つて『奥さん山田君を今日借りて行つても好う御座んすね。』

『えゝえゝ、好う御座んすとも。』

散歩

『好い天氣ですな。』

『本當に散歩には持つて來いですな。』

此處まで來る間に、二人は既に幾度となくかう繰返した。それほど晴れた好い日であつた。何處かで鶯が好い聲を立てゝ鳴いてゐた。

一人は丈の高い痩せた男で、綺麗に分けた濃い黒い髪の下から、色の白い顏と柔しさうな眼とが覗くやうに見えて居た。一人はスコッチの脊廣を着て、手に藤蔓のステッキを持つてゐた。二人は話しながら歩いた。

二人は今から二時間ほど前、色の白い方の男の家の格子戸を明けて出て來た。それは崖に添つたやうな細い巷路の中にある家で、其六疊の一間からは、崖の上の大きな門の家の立派な構やら、その庭に咲いて居る梅の花やら、其處から續いて居る崖下のゴタゴタした家屋やらが見えた。洋服姿が入つて行つた

『此處から入らつしやいよ。跨げばすぐ來られますわ。』
『でも……』
『大丈夫ですよ。誰も見てやしません。』
『見てたッて構はないけれど……跨げるかしら？』
『跨げますとも！』
隣の二階の欄干と此方の欄干の間には、一尺位の隙があるばかりで、成程、容易く跨げるらしく思はれた。暫くすると、米琉の羽織を着た綺麗に頭髮を分けたかれの小づくりな姿が、此方の欄干から向うの欄干へと渡つて行くのが四邊に浮出すやうに見えた。
『成程、譯はないね！』かう言つて、かれは笑つた。
娘は默つて彼方此方を見廻した。誰も見てゐなかつたのを見て、安心したやうに莞爾した。
やがて伴れられて行つた一間は、座敷の八疊に續いた六疊で、長押にかかつた父親の肖像が斜に此方から見えてゐた。机だの、鏡だの、新しい簞笥だのが並べてあつた。
『待つて頂戴。』
娘は聞耳立てて二階の階梯の處まで出かけて行つた。

が、流るるやうに滑かに人々の耳に染み込んで行つた。何處までも眞面目といふことを失はないかれの言葉は、女達の心を捉へるに十分であつた。

總領の娘は、其時、裁縫の上に顏を落しながら聞いてゐた。紅絹の布が上氣した顏に反射して見えた。

『矢張、男には未練があるもんですから……。』かう言つたかれの顏には、紅い血が上つてゐた。

『でもねえ、母さん、餘りねえ……。』娘は小聲で言つて母親の方を見た。

十一

娘の顏が二階の欄干の處に見えた。

『加藤さん……居らしつて？』かういふ小さい聲が續いて聞えた。

かれは立つて行つた。午後一時頃であつた。

『何方も居ないの？』かう言つた娘は顏を赤くしてゐた。

『え、誰も？』

『私の宅でも、母が子供をつれて里に行つて、私が一人留守番をしてゐるんですからね、遊びに入らつしやらない？』

『行きませう。』かう言つて、かれが座敷の中に入らうとすると、

な人間が違つたことゝしか思はれなかつた。またその一面には、その熱心になつた自己の姿やら形やらが氣耻かしく感じられても來た。

『何うでも好い！』

かういふ氣分の日が長く續いた。

別室が長く明かないでも、かれは他に移轉しやうともしなかつた。無邪氣な書生と、隣の娘達の嬉々とした笑聲との中でかれは暢氣に一日々々を送つた。

一月も經いない中に、かれはもう隣の人達と二三年も交際したやうな懇意な間柄になつてゐた。よく出懸けて行つては、長火鉢の前に坐つて、娘や母親などを笑はせて居た。快活な、話上手な、輕いウキツトに富んだ男らしいかれの言葉は、世故に長けた未亡人の耳にも鮮かに面白く聞取られた。

『本當に、加藤さん、話が上手ねえ。』母親と娘とはかう言つていつもかれの噂をした。

二階の新聞記者は、『矢張、さういふ天才があるんだねえ。先生のは、若い娘や未亡人の前になど出ると特に光彩を發揮して來るんだから堪らない……十日と經たない中に、もうちやんと長火鉢の向うに坐つてゐるんだからね。』かういふ風に、矢張かれを知つてる新聞記者の一人に話してゐた。

前の戀愛事件を、かれは平氣で、その長火鉢の前で話して聞かせた。靜かな落附いた調子のある言葉

『丁子は高い香を持つてますこと。』

娘はかう獨語のやうに言つて、隣の庭の方を見た。

二人は暫く立つて居た。

この朝、かれは山の温泉宿の總領娘から一通の手紙を受取つた。―御心のほどしみ〴〵と忘れ難く―と書いてある處を繰返して讀んで、かれは微笑した。

かれはつらい悲しい失戀の一年の年月の先に、段々わか草の春のやうな氣分の展けて來るのを不思議にした。

かれは冬のやうに寒く冷めたかつた年月を時々頭に繰返した。鳥渡想像が出來ないほどかれの心は其頃別れた女に偏つてゐた。其女の髮、眼、肌でなければ生效がないやうに思詰めたことも一度や二度ではなかつた。かれは野中の一軒家にさびしく過した二月三月の生活を振返つて考へて見た。

男の一分が立たないやうな屈辱を感じて、中に立つた第三者の家に呶鳴り込んで行つた時の劍幕や、短刀を懷にして邂逅次第女を斬つて捨てやうと思つて歩いた時分の心の焦燥や、人道の上から言つてもこの話はこのまゝに濟まされない、この不道理、不忠實、不貞操の爲めに犧牲になるのが自分の事業だなどと言つて友達を驚かして歩いた頃の熱烈なる情緒や、さうしたものは、今から考へて見ると、丸で別

書生達は歌留多をするからと言つては呼ばれ、御馳走が出來たからと言つては呼ばれて行つた。一人の書生は、二番目の娘に、英語を教へに毎晩出懸けて行つた。

ある日、その總領の娘は、欄干の處に出て立つて居た。かれと顏を合せて、恥かしさうに輕く會釋をした。頰のあたりが赤くなつてゐた。かれは微妙な心の動搖を感じた。

『梅が大變よく咲きましたね。』

かうした機會をつかむことに經驗のあるかれは、かう言つて笑つて見せた。

『もう遲い位ですわね。』

『何處か梅見に入らつしやいましたか。』

娘は存外開けた口の利き方をした。

『い丶え……。』

『今日のやうな天氣の好い日に龜井戸あたりへ行つて見ると好う御座んすね。』

『さうですね……蒲田にも此頃梅が澤山あるさうですねえ。』

晴れた空には鳶が舞つて居た。隣の庭に咲いてゐる沈丁花の强い匂ひが四邊の空氣に充ちてゐた。

其下に娘の針箱の赤い針山が際立つて見えて居たことなどもあつた。一間は六疊らしく、其間からをりをり母親の錆びた太い聲と總領の娘の若々しい艶な聲とが聞えて來た。子供達の泣聲もした。

『母さん、みいちやんが言ふことを聞かないで仕方がありません。』

かういふ聲もした。

『隣は後家さんと娘ばかりだね。』

ある時、かれはかう友達に言つた。

友達はいろいろと其の隣のことを話して聞かせた。亡くなつた主人と謂ふのは、一面政治家、一面文學者として、明治十七八年頃に非常に盛名のあつた人で、病氣に罹つて死んだ時には、都下の新聞紙は筆を揃へて皆な哀悼の意を表した。

『さうか、あの人の未亡人か。』

かれも其名はかねて聞いて知つてゐた。

『でも、少しは遺産があつたものだから、此處に此二軒の家と向うの貸家とを造つて、それで未亡人は娘の教育に半生をまかせることが出來たのだ。』

友達はかう言つてその話を結んだ。

後家さんと娘達の女暮しでは、寂しいことがあつたり、不便なことがあつたりするらしかつた。で、

れる綺麗な一人の娘が、お下げの髪に白いリボンを見せて、此方を見て、赤んべいをしてゐた。」

『馬鹿ヤァい。』

此方でかう言ふと、其娘は長い紅い舌を出して見せた。

『杉山の馬鹿ヤァい！』

娘は書生の名を知つてゐた。杉山と呼ばれた書生は笑つて居た。

一人の書生は、隣の欄干に接した處に顏を出して、ハアモニカを吹いて見せた。

見てゐると、また奥からその妹らしい十歳位の女の兒が出て來た。七歳位のも出て來た。

『並んだ！　並んだ！　ヤアい。』

此方からは、かう囃した。

『並んだ！　並んだ！　ヤアイ。』

其の大きい前の娘は、憎さげに口を曲げてその眞似をした。

『みいちやん、書生さんに調戯つちやいけませんよ。』

かういふ聲が室の中でした。同時に二十二三の丸顏の色の白い庇髪に結つた姉娘の顏が、ちらりと障子の間から見えてまたすぐ引込んだ。

かれは其前にもその隣の二階を覗いて見たことがある。欄干の緣側には、古い本箱が置いてあつて、

夜は一間は賑かであつた。書生達は腕押をしたり、トランプをしたりした。ハアモニカを鳴らすものもあつた。夜、遲くなつてから、阿彌陀をして、汁粉だの、鮨だの、菓子だのを買つて食つた。

『若い人達は元氣が好いナ。』

かれはかう言つて其人達の騷ぐのを笑つて見てゐた。

書生の一人が欄干の處に立つて、隣の方を見て手招きをしてゐた。それはある夕暮であつた。庭の梅が白く四邊に捺すやうに浮出してゐた。

『ヤアい。』

かう言つて、その書生はわざと顏をしかめて見せた。

家の中に坐つてゐた一人の書生も立つて其處に出て行つた。

『おい、構ふなよ。』

中でも一番年嵩らしい書生は、室の中から聲を懸けた。

『何です？』

好奇心に誘はれたやうにして、かれは欄干の處に出て行つた。

其處からは、同じつくりの隣の二階の欄干の處がよく見えて居た。其處には十二三になつたかと思は

が好いよ。思ひ立つた時に斷行しないと、得て障碍が起つて來るものだよ。だから、僕は兎に角やつて來たまへ。何うにでもなると言つてやつたんだ。あんな野原の眞中にいつまでもくよ〳〵思つてゐたつて仕方がないからな。』

『でもこれぢや窮屈だ。』

『何ァに、僕は朝出て行くだらう。書生達もそれ〴〵用事を持つてゐる體で、君のやうに遊んで居る人間はないから、晝間は靜かなもんだ。』

こんなことを言つて友達は笑つた。

その友達は都下で名高い若手の新聞記者の一人であつた。書棚には、西洋の政治論だの、詩集だの、歷史物などが並んで、四邊には雜誌や新聞が一面に散ばつてゐた。每朝、十時が打つと、長押にかけたワイシャツを冠るやうにして着て、スコッチの脊廣に縞ラシャの外套を被つて、流行の意氣な中折帽を冠つて、快活に格子戶を明けて出て行つた。

その友達は每日歸つて來ては、『何うも此頃の議會は行つて見てゝも張合がある。今日の豫算案などは實に面白かつたぜ。』などと話した。賑やかな町の話、忙しい人達の物語、種々雜多な市井の出來事、さうしたことを友達から聞く度に、かれの心は動かずには居られなかつた。かれは徒に過去つた自己の月日を考へた。

が、手傳に來た方の若い男がやがて梶棒を上げて車をひき出した。荷車の音がガタガタと暫し田舍道に聞えてゐた。

其音もいつか聞えなくなつた時、かれは言ふに言はれないさびしさを感じた。野も、林も、田舍道も、古池も、長い間心の傷痍の隱遁所であつた幽棲も、今はかれに何等の色彩をも與へなくなつた。かれは新に前に展げられて來る境遇を想像してゐた。

十

かれは取敢へず友達の居る山手の下宿屋に行つた。

その下宿屋は隣の後家さんが持つて居た。後家さんの住んで居る家も同じ二階屋で壁と壁とが隙間もなく相接してゐた。造作も似てゐた。後家さんの住居の格子戸の前には、八ツ手が手を擴げたやうに一面に簇がつてゐた。

その昔の友達は、書生達を國から大勢連れて來て居た。かれの行つた時にも二三人其處にごろごろしてゐた。『こんなに狹いんなら、他に行く處が無いでもなかつたんだ。』かれは友達に言つた。

『何アに、ぢき好い間が明くよ。國に歸る奴があるんだから。二三日此處で辛抱して居るさ。』何も彼も知つてゐる快活な友達はかう言つて笑つて、『境遇を變へやうと思つた時は、ぐんぐん變へて了つた方

磯さんと、手傳に來た若い男とが、長火鉢だの簞笥だの下駄箱だのを一つ一つ擔いだり持つたりして運んで行つた。

さびしい心を抱きながら、硝子障子を隔てて、かれはそれを見てゐた。

道具を山のやうに積んだ荷車には、やがて細引が十文字にかけられた。磯さんは荷車と家屋との間を行つたり來たりした。家の雨戸を彼方此方と閉めてゐるのも見えた。最後に、磯さんは暇乞に來た。緣側から中を覗くやうにして、

『ぢや、旦那、またお目にかゝります。御機嫌よう！』

かれは障子をあけて、

『いよ〳〵行くのかえ。僕もこゝにはもう長くは居ないよ。』

『どつか好い處がありましたか。』

『今日返事が來る筈だ。』

『世話をするものがなくつちや、こんな處に居られやしませんや。』かう言つて、『ぢや、またお目にかかります。』

磯さんは別れて行つた。

かれは障子を明けたまゝ、ぢつとそれを見て居た。二人は荷車の處に立つて暫らく空などを見て居た

兎に角、郊外の家はかれには最早餘りにさびしくなつてゐた。それに上さんに代つて世話をして呉れるやうな人も居なかつた。

野や、林や、丘や、さうしたものももうかれに滿足を與へなかつた。

大工の磯さんも、一人では不自由で仕方がないから、二七日でもすんだら、親分の家に同居する積だなどと言つてゐた。二七日の日には、それでも其小さい家に、草色の金襴の僧衣を着た近所の寺の和尙さんが遣つて來て、靜かな讀經の聲が長い間聞えて居た。

其夜、磯さんはめづらしくかれの家に遣つて來た。

『可哀相なことをしましたよ。矢張、緣がねえんですな。』磯さんは、酒に醉つて赤い顏をしてゐた。聞きもせぬのに、磯さんは上さんとの長い間の關係を話した。『五年ですからな、隨分深い馴染でしたよ。』磯さんはこんなことを言つて聞かせた。

『一つ、義太夫の三味線の旨い奴をさがすさ！』

笑ひながら、かれが言ふと、磯さんは染々と、

『まア當分は鼻なしで稼ぎまさア。男がさう薄情では、佛だツて浮かばれませんや。』

曇つた寒い日に磯さんは移轉して行つた。路に添つた入口の門の前に荷車が一臺長い間置いてあつて、

袂を捉らぬばかりにして引留めた。若い方の娘は、瀧の落ちる暗い路のところにかれを連れ出して、『何うか、忘れずに居て下さい、ね、ね。』と言つて泣いた。

かれは畫家の眞面目な難かしい顏を頭に浮べた。

『事業が戀人なんだからね、君などは。何うせ僕等の心は解りやしないよ。僕は空想では生きてはゐられないんだから、藝術とか事業とかいふやうな假面を被つたやうなものでは生きてゐられないんだからね。僕は生きてゐるものでなければ興味を惹かないんだから――』かう言つて、かれは畫家に別れて來た。

『君のやうに熱心に繪を畫いてゐる人を見ると、尊敬はするが、僕がさうならうとは決して思はない。僕に言はせると、君はさうして毎日繪を畫いてゐるが、それが何だと思ふね。もつと生々した事業は他にいくらもある。女にラブして、女の心に生々とした自己の像を刻んでやる方が何れほど立派な生效のある仕事だかわかりやしないと思ふね。』

こんなことも言つて來た。

かれは毎日毎日寒い風にも頓着せずに熱心に山陰に行つて寫生をしてゐる畫家の姿を頭に浮べて見た。そして自分と引較べて考へて見た。何たる相違だらう。何たる性格の相違だらう? かれはかう思つて今まで通つて來た自分の半生を靜かに考へた。

かれは其傍を通つて行つた。

九

一月ほど後には、かれはもう山の温泉から歸つて來て居た。

僅かな月日の中にかれはいろいろな變遷を見た。大工の上さん――毎朝飯を炊いて呉れた元氣な上さんは、かれが山の温泉に出かけた十日目に發病して、一週間ほど病んで、間もなく彼の世の人となつて了つた。郊外にかれの歸つた時が丁度初七日で、その小さい家の中には、大工の磯さんがぽつねんと一人さびしさうにして坐つてゐた。佛壇には花やら燈明やらが供へられてあつた。

それに、橋の畔のレストウランの娘ももうゐなかつた。娘はある夜豫て約束して置いた學生と一緒に家出をして了つた。その學生とはかなり舊い關係で、前からその計畫をしてゐたらしく、いろいろ調べて見ても、その行方は更に分らなかつた。かれはさびしい心に閉されて、其處から郊外の家へと歸つて來た。

かれは柱にかけた娘のスケッチを前にして、薄暗いランプの光の中に坐つて居た。

かれの眼の前には種々な新しい幻影が通つて行つた。山の温泉場での一月、其處で行はれたさまぐ〵の光景が思ひ出された。旅店の二人の娘――總領の娘は、不意にかれが歸ると言ひ出したのに驚いて、

『好い娘だらう。』

『うむ、田舍ではまづめづらしい方だね。』

總領娘は默つて意味ありげにかれの顏を見て居た。

初めて見たのは、門から庫裡に入らうとする後姿、次に見たのは、障子を明けて廊下を歩いて行く姿、鳥渡此方を見た白い顏――そんなことをかれは面白さうに話して聞かせた。

『これが、段々出來て行くやうだと、それこそ小說だがね。實際の世の中には、さういふことは餘りないね。』

かれはこんなことを言つて笑つた。

大きな西洋造の旅館の裏通の細い路――長い塀に沿つて、午後の日影が薄い光をぼんやりと四邊に落して居た。

旅籠屋の女中らしい銀杏返しに結つた年增の女は、長い間其處に立つて誰かを待つて居た。

急に向う側の長い塀の木戸が開くと、白い服を着た濃い頭の髮にテラテラと油を塗つたコックらしい男の頭が、其處から四邊を見廻はした。女は急いで其方へと走つて行つた。

二つの姿は寄添ふやうにして暫く何事かを熱心に話して居た。

『お従さんッて言ふのよ、あれでも二十四よ。』

『二十位にしか見えないがね。』

『あれで、あのお寺の和尙、道樂坊主だから、遊藝などをあの娘に仕込んで、この土地でも評判者なのよ。お寺で三味線の音がするんだから、隨分開けたお寺よ。』

『道理で、珍らしい意氣な娘だと思つた。』

默つて顎を撫でて聞いて居たかれは笑ひながら、

『僕も、もう餘程前からあの娘を知つてゐる。』

『え！　君が――』

『僕の顏を見ると、向うから會釋する位になつてゐるんだよ。』

『まさか、うそでせう。』

かう總領の娘も笑つた。

『君は本當に早いね。さういふことにかけては天才があるねえ。』

『いや、別にさういふ譯でもないがね。もう五六度は見てるよ。面白い處に寺があるなアと思つて入つて見ると、三味線の音がするから不思議に思つて立つて聞いて居た。それから本性を見てやらうと思つて、ちよいちよい出懸けたんだがね。』

谷に添つて少し行つた處に、竹藪だの梅林だのが續いて、其奥に山門の高く聳えた寺があつた。かれの姿はをりをりその境内に見えた。

本堂に續いて、小さな庫裡が見えて居た。春は近所から人が見に來るといふ大きな絲櫻が庭一杯に枝を張つて居た。雪が畠の青い菜の上に積つて居た。

かれは絲櫻の幹の周圍を一廻して、庫裡の方を一目見て、それから本堂の傍を廻つて墓域の方に行つた。

或夜、畫家とかれとは火燵に當つて何か話して居た。其處にこの家の總領の娘が茶菓子を持つて來た。

『繁さん、お茶を淹れて上げませうか。』

『え、何うぞお願ひします。』

皆な機嫌よく面白さうに話した。總領の娘も長い間其處に坐つてゐた。

畫家は思ひついたやうに、

『義姉さん、お寺に好い娘がゐますね。』

『今、知つたの？』

『だッて、そんなこと平生、注意してゐやしないから、大抵知らずに居るけれども、昨日退屈して、寺に行つて見ると、庫裡から娘が出て來た。鳥渡、色の白い、田舍には珍らしい子ですねえ。』

かれは笑つて見せた。

女は暫く其處を去らうとしなかつた。かれと同じやうに橋の欄干に凭りかゝつて、深く流るゝ谷川の早瀨を見た。

『深いですね、眼がまはるやうですね。』

『え、隨分深い――』

かれはかう調子を合せた。續いて、

『東京からお出ですか。』

『え。』

『寒いのによくお出でしたね？』

『でも、東京で考へたよりは寒くはありませんわね。』

かう言つて、『貴郎は、何方？』

『このすぐ下の溫泉場に居ます。』

二人はこんな話をして、其處に立つてゐた。女は、直き其處の溫泉宿に居ることを話して、『母が居るばかりですから、ちとお遊びにお出なさいまし。』などと言つて別れて行つた。

彼處の意氣な上さんは？　彼處の庇髪に結つた娘は？　年々遣つて來ても知らないことをもかれは逸早くも知つて居た。

『君はさういふことを探訪する天才ですな。』

かう言つて畫家は無邪氣に笑つた。

繪葉書を賣る店の前にかれはよく立つて居た。山に圍まれた湖、湯氣の白くあがつた谷間の温泉場、岩壁を傳つて落ちる細い瀧――その奥には銀杏返しに結つた頰の紅い意氣な二十三の娘が坐つてゐた。ある夜、電燈の明るい其店先にかれの姿はくつきりと浮出すやうに見えて居た。娘はこの山の中の温泉場にはめづらしいやうな派手な裝をして、繪葉書を入れた箱を幾箇となく客の前に並べて見せて居た。

かれは其處に腰を懸けて煙草を吸ひ始めた。

長い間娘と話して居た。

『あれが名高い石風呂ですか。』

白いリボンをかけた東京から來た庇髪の女は、橋の上に立つてゐるかれに向つて訊ねた。

『え、さうです。』

かれは筆を結んだ。

それにも拘らず、その消息は、尠なからずかれの胸に新らしい印象を與へたやうに見えた。安樂椅子に凭りかゝりながらも、長い間、そのことを考へて居た。散歩に出かけた途中でもそれを思つて居た。

「川原に行つて見ると、畫家は傍目も觸らず一生懸命に繪筆を動かしてゐた。」かれは其後に立つて見てゐた。その瞬間にも、女の消息が、矢張りかれの頭を往つたり來たりしてゐた。

『何うでも好いぢやないか、そんなこと！』

かれはかう幾度となく繰つて來る女の記憶を打消した。

氣が附くと、かれは岩壁に添つた暗い道を高臺の方へ出やうとして居た。

高臺の温泉場は一層晴れやかに日に照されてゐた。西洋造の旅館が彼方此方に立つて、賑かな通りには、郵便局だの、外國人相手の美術商だのが軒を並べて居た。土地の繪端書を賣る店などもあつた。

夜は電燈が四邊を明るくした。

かれは此處に來ても、矢張一間に落附いて仕事をしては居られなかつた。一二枚飜譯をしては、すぐ倦きて、例の通りステッキを抱へて出掛けた。

畫家はをり／＼かれの思ひもかけないことを知つてゐるのに驚かされた。彼處の兀頭のお爺さんは？

どもあつた。其女は矢張かれの結婚に失望して、親の取きめた夫を持つて田舍に歸つたといふやうな人であつた。女は、田舍の單調なことや、雪の山國の圍爐裏の邊の無趣味なことや、都會の生活の戀しいことや、山の中に埋れる若い心の悲しいことなどを細々と書いてよこした。矢張、運命の悲しさを嘆いて居るやうな女であつた。かれは長い長い返事を書いた。

別れた女の從妹に當る人の手紙には、女の消息がいくらか洩してあつた。いづれ近い中、東京に出るやうな話だなどと書いてあつた。かれはそれを見て心を動かさずには居られなかつた。

矢張、二つの心は空間に波打ちつゝあるのをかれは染々感じた。東京へ！　かの女が東京へ！　二つの離れた心が東京へ！

もし何處かで邂逅したら！　かれは其時のことを想像した。不思議にもかれの心は最早以前のやうな熱烈なものではないといふことに氣が附いた。無論、今では再び一緒になるといふ氣が起らなかつた。さういふ氣はすつかりなくなつてゐた。寧ろ知らない關係のない全くの他人といふやうな顏がしたいと思つた。

『かういふ風にならなければならぬやうな目に逢せたるかの女が憎く候。またかういふ心の姿にならねばならぬわが身が悲しく候。今は唯、心の落附きて、何處にてかの女に逢ひ候とも、他人に逢ひたるごとき心の持方をするやうにならんことを祈り居り候――』別れた女の從妹にやる手紙にはかう書いて

塀のところに立て懸けた張板の紅絹は、目も覺めるやうに地上の雪と日影とに反映してゐた。

かれが机に坐つて居ると、障子を靜かにあけて、婢が茶だの菓子だのを運んで來た。

『お淋しいでせう。』

かう其婢は言つて、いつまでも其處に坐つて居た。

それにこの温泉宿には、娘が二人居た。一人は二十五六で、一人は二十位であつた。畫家の細君は其の大きい方の娘の妹であつた。『義姉は一度嫁に行つたんですけれど、緣がなくつて歸つて來たんです。』畫家は曾てかうかれに話して聞かせたことがあつた。何方かと言へば瘦せた方で、何處を捜しても、もう若々しい處はなかつた。身裝などは構はうともしなかつた。

若い方は肉附の好い頰の赤い可愛い顏をして居た。此間まで東京の女學校に行つて居たので、髮の結方から口の利き方まで田舍娘らしい處は少しもなかつた。繪が好きで『兄さん兄さん！』と無邪氣な態度で、畫家の後を追ひ廻した。端書を持つて來ては、よく繪を畫いて貰つたりなどした。

『お冬さん、遊びにお出なさい。兄さんが居なくつても好いでせう。』

二三日經つ中には、廊下ですれ違つてもこんなことを言ふほど氣が置けない間柄になつてゐた。

かれは机に向つて、手紙だの日記だのを書いた。その多い手紙の中には別れた女の友達に遣る返事な

昔、それと僕の思つてゐることとの交渉を考へて見たね。』

かれは茶を飲みながら、こんなことを言つた。眉を昂げて深く人生のことを考へるやうな眼色をした。

二階の欄干に添つて、船底になつてゐる安樂椅子が一箇置いてあつた。かれは湯に暖つた身をそれに凭せて、軽く體を動かしながら、樹立の間に奔跳して流れて行く泡立つた白い谷川を見たり、朝日のキラキラと反射する山の雪に眺め入つたりしてゐた。谷川の向うには、獵師らしい男が獵銃を擔いで山の裾を縫ふやうにして歩いて行つた。

畫家は川を越えたところに三脚を運んで行つて、其處で川原の石の雪を描かうとした。かれは暫し立つて見て居たが、やがて靜かに踵を溫泉の方へ旋して來た。

湯氣の白く處々に颺つた谷底の冬の溫泉場は、繪のやうにその前に展開されてゐた。ある二階の欄干には、手拭が二筋かけてあつて、それが白く際立つて此方から見えた。赤い襷をかけた娘は忙しさうに此方の廊下から彼方の廊下へと歩いて行つた。

地上に雪はあつたが、それでも空は瑠璃色に鮮かに日に輝いてゐた。凍つた筧の口からは、水がチョロチョロと靜かに落ちてゐた。

盥を日に當る處に持出して、せつせと娘の洗濯してゐる傍では、手拭で頭髮を卷いた子守が、脊中の子をあやしながら唄を小聲で唄つてゐた。

も眠られない。女のことばかりぢやないんだ。人生のことがしみじみ思ひやられて、萬感交々胸に起るといふ風で、三時まで起きてゐた。……君は、そんなことは御存じなしだらう。それや、君は、心持好ささうに寢てゐたからな。グウグウ鼾をかいて寢てゐた。君などは、夜、夢を見ることはないだらう？』

『まア、無い方だね。』

『僕はつくづく羨しくなつちやつた。君のやうに、一日働く時はウンと働いて、床に入るとすぐイビキをかくやうな人は本當に羨ましいね。僕は、君の健全な呼吸づかひを聞いて、昨夜といふ昨夜は、羨しいのを通り越して憎くなつちやつた！』

畫家は莞爾して居た。

『つまり苦勞がないんだね。』

『さういへばさうだらうね。』

『僕は昨夜つくづく思つた。僕はこんなに深く人生のことや男女のことや友人のことやいろんなことを思つてゐるのに、……さうとは知らず靜かに穩かに寢てゐる友達があるんだからなア！　自分の心持は何うしても他人に傳へることが出來ない！　かう思つたね。』

『だツて、それは仕方がない。』

『それは仕方がないさ。それから水の音、ドウと流れてゐる水の音、盡きずに流れて落ちて行く水の

…かれはかう思つて、畫家の跡に跟いて遣つて來た。

初めて着いた夜の感じが先づ第一にかれの心を動かした。谷に下りる暗い冷たい危ない路から、俄かに明るい靜かな帳場に入つた時、其處にゐた品の好いお婆さんは、『まア繁さんかね、よく來たね。』と言つて迎へた。それは畫家の細君の叔母さんで、他に細君の從兄妹に當る男や女が二三人居た。賑やかな暖かさうな家庭であつた。

『好い親類を持つてるね、君は。』

かれは幾度となく畫家に言つた。

枕を擡して來る谷川の音、それを明るいランプの下で、湯で暖つた體を半分夜着の中から出しながら、長い間かれはぢつと耳を欹てゝ聞いて居た。

『痛恨に堪へんなア！』暫くしてから言つたかれの眼には涙が光つた。かれは女のことを思ひ出してゐた。

翌朝、かれは遲くまで寢てゐた。畫家は早く起きて谷川の縁を歩いたり、帳場に行つてお婆さんと話をしたりした。十時近く歸つて來て見ても、かれはまだ夜着を冠つて寢て居た。

漸く起きて、顏を洗つたかれは、

『だツて、僕は昨夜殆ど寢なかつたんだもの、いろんなことが思ひ出されて思ひ出されて、何うして

巖壁を傳つて落ちる瀧のしぶきは、白く岩にこほりついて居た。

溫泉宿は谷の底のやうな處に二三軒並んで居た。二階から二階に通ずる廊下には、綿衣に縮緬の帶をぐるぐる卷いた肥つた浴客が立つてゐるのが見えた。

浴場からは湯氣が白く颺つた。

山には雪が白く積つて居た。

寒い寒い山の溫泉場には、客といふほどの客もなかつた。室には火燵が開かれ、火鉢には火が活々と起きて居た。『寒い、寒い。』などと言ひながら客は日に幾度となく湯に出懸けて行つた。

谷川に臨んだ二階の一間には四五日前から二人が來て居た。昨年の暮『僕は山に雪を描きに行つて見やうと思ふんですが、何うです、行つて見ませんか。』かうかれはその畫家から誘はれた。其處には畫家の遠い親類に當る旅籠屋があつた。『何ァに、金なぞかゝりやしません。一日一圓かゝりやしません。それに今は靜かですからな。山の溫泉場の冬もまた詩趣があつて好いもんですよ。』かう言つて畫家は勸めた。

畫家は、冬になると、何時も其處に出かけて行く話などをした。スケッチなども出して見せた。

霜解の深い郊外の路は、もう以前のやうにかれの散步を許さなかつた。それに大工の上さんを相手にしてのさびしい生活も、かれに取つては、旣に堪へ難いものになつてゐた。傷ついた心を山の溫泉に…

『またあゝ取るからな……まァ好いよ。』かう言つて笑ひながら、かれは遣りかけた仕事の筆を取つた。

其畫を描いた時のさまをかれは思ひ出して居た。それはある景色を寫生して來た歸途であつた。かれも畫家も餓ゑて居た。かれは畫家をそのレストウランにつれて行つた。空氣の影の濃い、何となく心の落附いた靜かな日であつた。誰も客の居ない二階には、薄い夕日が硝子を透してさし込んで、赤い實のついた青木が卓の上の花瓶にさゝれてあつた。かれはフオークを取りながら紅葉を流した時の話をした。

『それは面白いね――』畫家はかう言つて聞いた。

『鳥渡、感じの好い娘だね。』

畫家は丈の小づくりな色の白い娘の後姿を見て言つた。

『おい、鳥渡其處に立つてお出で！』

再び二階に上つて來た娘にかう言つて置いて、畫家は傍からスケッチ帖を出した。娘は顔を赤くして居た……。

八

谷について曲つて流れて行く水の音は屋を撼かすやうに聞えた、家々の軒には小さい氷柱が下つて、

かれは得意さうにして笑つた。

『知つてるッて……私が？』

『さうさ。』

上さんは傍に寄つて、もう一度見て、『何うも見たやうだとは思つてるんだけども。』

『見たやうな處ぢやない。始終見てるぢやないか。』

『さう？』考へて、『分りませんね。誰？』

『まア、當てて御覽。』

もう一度見て、

『分らないねえ！』

『それ。』とかれは顎で向うをしやくるやうして、『あすこの橋のそばの西洋料理の娘さ！』

『あゝあゝ、さうね。まさかあの娘だとは思はないもんだから、分らなかつた。』上さんはかう言つて笑つて、『さう言はれて見れば、よく似てるよ……あの畫かきさんが畫いたの。』

かれは點頭いて見せた。

上さんは、それでたんのうして、勝手の方に行きかけたが、『貴郎も物好だよ。あの小娘なんか仕方がないぢやないか。』

かう書いた翌日の條には、
『しかし、事業に向ふには、自分はまだ疲勞してゐる。それに自分は餘りに事業に戀してゐない。』
畫家の性格に關しては、
『事業より外に他を顧みない羨しい勢力家である。其人に取つては、事業が卽ち唯一の戀である。…
…戀を事業とする人間と事業を戀にする人間と……』
かう書いて置いた。

七

娘の顏を描いた小さな水彩畫がいつかかれの机の傍の柱に懸けられた。
大工の上さんは、かれの留守に、二三度その傍に寄つて見た。水彩畫の繪具は上さんの眼を惹くに十分な鮮やかさを持つて居た。
髮を桃割に結つて居た。見たやうな顏だと思つた。
或日、勝手から座敷に上つて來た上さんは、
『あれは、誰?』
『知つてる筈だがな。』

覺めて行く。かう思つて、緣側に立盡してゐることなどもあつた。

渠は自分の遣つて來たことを遙かに思つて見るやうな人になつて居た。中に入つていろいろなことをした第三者の心持もそれと解釋が出來るやうになつてゐた。常識を外れた自己の行爲をも批判した。

遠い處に居る女の心が鮮かに自分の心を掠めて通るやうな氣分のする日が幾日か續いた。

『不幸な女だ！』

かう獨り自分に言つて見て、女の一生を頭に描いて見たりした。

『何んなに率直に、何んなに熱烈に、何んなに眞面目にかれは其女を戀したらう？　かれは心底から女の爲めを思つて居た。物質では貧しい生活であつたが、自分ほど精神的にかの女を愛して居たものは恐らくは無かつた。將來もなからう？　しかし、それが女には解らないのだ。』

こんなことを日記に書いたやうな日もあつた。

『……猜疑、嫉妬、不安、不信、さういふ暗黑の中を自分は通つて來た。自分のやうな正直な心が、その暗い影の爲めに傷けられた狀態は痛ましい光景である。自分は幾度か自分の赤い血の流るゝやうな苦痛を覺えた……』

そんなことも書いた。

『事業？　事業？　自分も事業をしなければならない。何の事業？　藝術？　政治？　農業？』

彩畫が二つ三つかゝつて居た。

外國で買つて來たエッチングや、銅版や、寫眞帖や、繪葉書帖や――さうしたものの並んだ座敷に」カアテンを透してをりをり夕日が射して來た。

『イタリアでは、かういふものを賣つてゐるんです。一つ上げませうか。』

石膏細工のダンテの肖像を畫家はかれの前に置いた。

畫家の細君は痩せた靜かな人だッた。戀愛の時代を人知れず通過して了つたといふやうな感じを與へる人だッた。默つて丁寧に、茶や菓子を其處に運んで來て、そしてすぐ階下に下りて行つた。

欅を描きかけた大きな水彩畫が其處にあつた。畫家は振返つて、『欅を一つ描いて見ようと思つて始めたんですが、何うも旨く行きません。』などと言つた。

汽車は時々大きな地響をさせてその傍を通つて行つた。

獨りで居る時には、まだ女のことを思つて居ることが多かつた。

それは今ではもう女が突然詫びて歸つて來るだらうなどとは思はなかつた。そんな夢のやうな空想からは次第に離れて來た。野に向つての散歩の一歩毎に、時計の分秒の一刻毎に、さうした空想から段々遠かつて行くやうにも思はれた。時にはそれが堪らなくさびしい悲しい情緒を誘つて來た。覺めて行く、

話した。藝術より外に考へることが無いやうな口の利き方をした。

『平凡な言ですけれど、矢張自然を師匠にするより他に仕方がありませんな。』

こんなことをも言つた。

畫家とかれとは、時の間に十年も交際した友達のやうな間柄になつた。打解けてかくすところのないかれの態度が、尠からず畫家を動かした。かれは自己の戀と自己の苦悶とをやがて畫家に話した。かれに取つても、舊い昔の友達よりも新しい友達の方がなつかしかつた。かれの前生、かれの戀、苦悶、かれの性格を知つてる友達が餘りにかれの周圍に多かつた。其の友達はいつも『また加藤の苦悶談が始まつた。』といふやうな顏をして聞いた。

かれは自己の經て來たロマンチツクな境遇を、一度新しい心で聞いて呉れるやうな友達を得たいと思つてゐた。それをかれはこの畫家に見出した。

畫家とかれと伴れ立つて歩く姿は、やがて其處にも此處にも見えた。畫家が三脚を据ゑて寫生をしてゐる傍で、かれは卷煙草をふかしてぢつとそれに見入つて居た。二人は遠い八幡の社あたりまでも行つた。

畫家は荷車や肥料車や馬車の通る塵埃の白い街道を越して、汽車の響の絶えず聞えるといふやうな處に住んで居た。二階の一間には、白いカアテンが硝子窓の日影を彩つて、鼠色の壁の處々には近作の水

ある日、机に向つてゐたかれはかう日記に書きつけた。

その水彩畫家は、畫をかきに來た次手に、外國から歸つて來てから、此の郊外の野原で描いた水彩畫を七八枚持つて來て見せた。

床の間、机の上、書棚の上などにやがて並べられた鮮かな色彩は、かれの眼や心を新たにせずには置かなかつた。橋の上、落葉道、古池、——皆なかれが知つてゐる景色である。かれは深く眺め入つた。

『何うでせう、貴郎方が御覽になつては?』

水彩畫家は得意さうにかれの顏を見て言つた。

『面白いですな。僕等のやうな素人には分りませんけれど、色彩がいかにもフレッシだ。』かう言つてまた見入つて、『僕が毎日テクテクつまらなさうな顏をして歩いてゐる間に、君はかうした藝術品を作つたんですからな。』

『イヤ、つまらんですよ。』

其日は朝の中に霧がかかつて、それが日影に映つて、金色に輝き渡つて見えた。郊外はもう寒かつた。落葉の時節はいつの間にか過ぎた。

硝子障子の外には、山茶花の紅と白とが薄い日影を帶びて見えてゐた。畫家は靜かな落附いた言葉で

の話などをしてきかせた。

巴里の畫堂、其處には何んなに澤山な名畫が集められてあるだらう。古いのもあれば新しいのもある。クラシシズム、インプレッショニズム、サンボリズム、あらゆる繪畫の新しい研究は其處で芽を出して花を咲かせて實を結ばせる。巴里に行つて居れば、それはどんな研究でも出來る。『實際、マネの繪など見てゐると、堪らなくなりますからな、何うしてあんな繪がかけるかと思はれる位ですからな。……え、寫生です。全く寫生から發足して來た畫です。描いてある舞臺は其處等にいくらでもある平凡な景色なんですからな。』

こんな風な調子で話した。

熱心に藝術の爲めに盡すといふ其畫家の性質と態度とは、かれに尠なからざる影響と感化とを齎らして來るに十分であつた。結婚したばかりの細君を二年も三年も家に置いて、其畫家は艱難の多い旅をして來た。其物語も心に響いて聞えた。

『自分のやうに戀に全力を浪費して、書を一册碌に讀まずに二年の月日を經過し去つたものもある！』

かれはかう思ひながら野の道を歩いた。

『僕には戀が事業だ。戀がなくつては、僕は一日も生きてゐられない。』

目も觸らずに描いて居た。通りすがりの百姓が後に立たうが、近所の子供が其周圍に集つて來ようが、其畫家はそんなことには頓着しようともしなかつた。かれも時々は立留つて見た一人であつた。かれは繪畫を見る眼識をさう深くは持つてゐないが、それでもこの畫家の尋常一樣でないといふことはやがて知れた。

一つの畫を完成させる爲めに、其畫家は三日も四日も同じ處に來て居た。

『此處等にそれでも繪になるやうな處があるんですか。』

ある日、かれはかう言ひ懸けた。

『何處を描いても、皆な繪になります。東京では、此の郊外が一番好いですな。』

『それは、さうでせう。武藏野の昔の面影は、一番此方面に殘つてゐますからな。』

二人はぢきに懇意になつた。

畫家はモネやマネやシスレーの話などをした。

『本當に寫生から入つて行つたやうな畫家は日本にはまだ無いんですからな、机の上で風景畫を書いてゐるんですからな。』

だから碌なものは出來ないといふやうな調子で其畫家は話した。

かれはやがて其畫家を自分の幽棲につれて來るまでに懇意になつた。畫家はつい昨年歸つて來た西洋

て、かれはかうした暢氣な世界のあるといふことを考へずには居られなかつた。自分の心に比べて何たる無邪氣、何だる無意味、何たる平和、そしてまた何たる平凡？

いくら考へても、悶えても、何うすることも出來ないやうな苦痛の連續と、子供の遊戲のやうな眞似をして、人を殺す戰爭の準備をしてゐる演習と、いかにその距離の大きいかといふことを考へながら、かれはぢつと立盡して見てゐた。

ある日の午後には、黃い肩章をつけた砲兵が大きな砲車を幾箇となく馬で引いて來て、廣々とした平らな丘陵の上に並べた。『第三砲車擊て――』といふ命令と共に士官は手を揚げた。凄じい響は白い烟と共に野に轟き渡つた。

『さうですか、もう外國にお出でになつたんですか。』

かれはかう言ふより他に仕方がなかつた。

一人の水彩畫家があつた。髯の生えた體格のガツシリした、丈の高い人だつた。それをかれは野の散歩のところどころで見た。

林の夕日を後にしたところ、薄の穗の白く出て居る小川の岸、古い荒廢した百姓家の前、だらだらと下りやうとする坂の上――其處此處にかれは其の人を見た。三脚を据ゑて、筆を手にとて、熱心にわき

『早く灯をつけなけりやいかんね。』かういふ男の聲が續いて聞えた。男は何でも緣側に近い一間に居るらしかつた。太い錆びた聲だつた。やがてランプの灯が點いた。

その小さい灯はかれが丘を越えて了ふまで野に見えて居た。

カーキー色の軍服を着けた兵卒の列は、巣から急に飛上つた鳥のやうに、銃劍を先に揃へて突進した。かと思ふと、まだ三間も行かない中にバタバタと折敷をして、構筒をして發砲した。

銃の音が一しきり靜かな空に響いて聞えた。

かれは林の角や、丘の下などで、よくさういふ光景に邂逅した。長い間、ぢつとして一處に折敷をしてかゞんで居ることもあれば、躍進に躍進を重ねて、見て居る中に遠くなつて了ふやうなこともあつた。時にはまた昨年あたり士官學校から出たやうな若い青年士官が、小隊を集めて　さも實際の敵が前に居るかのやうに眞面目に命令を下して居るやうなこともあつた。

田舍道の林の角で、晴れやかな秋の日影に浴しながら、其兵卒達は飯盒の午飯を食つてゐた。

さうした兵卒の野外演習は、かれに取つては、不思議なめづらしい奇妙なものであつた。かれは長い間立つて見てゐることが多かつた。

戀の爲に苦悶に苦悶を重ねて、時には死といふ境まで落ちて行つたことのある其身の心の閲歴に比べ

會釋しながらかれとすれ違つて行つた。

薄暮の空氣の中に浮出すやうな色白の丸髷姿は、ロマンチックな思をかれの胸に起させずには置かなかつた。それに、片手に持つた臺ランプ！　この靜かな秋の光の滿ちた郊外に今日何處からか移轉して來た幸福な人達であるといふことは、その手に持つた臺ランプですぐ分つた。かれの胸には、俄かに海岸で人目離れて樂しく暮した半年の生活が新しい力を持つて蘇つて來た。人目離れた二人の世界！　何を爲ようが、何んなことを話さうが、誰も見てゐるものも聞いてゐるものもなかつた。二人はよく枯草の中に身を埋めて、前に展げられた蒼い海を見た……。

かう思ふと、かれは急に其の幸福な男が見たくなつた。新しい細君と秋の光の滿ちた野にかくれて日を送る男！　羨しい妬しい男！　かれは十間ほど間を置いて、その細君の後をつけて歩き出した。

丸髷姿は薄暮の空氣の中に微かに見えて動いて行つた。

それは餘り遠い處ではなかつた。此間の散歩にもかれが眼をつけた三間位の家屋——路に臨んだ、前に高窓のある、小さなひらきの門のついた世離れた家屋の中に、その若い細君は入つて行つた。

『かなりあるわね。』

かう言ふ女の聲が聞えて居た。

庭にある脊の高いコスモスの花の色はもう分らなかつた。それほどあたりは暗くなつてゐた。

建物が一棟二棟見えてゐる。

何うかすると、四角な制帽を冠つた若々しい血を赤い頬に漲らした學生が一人二人其處から出て來るのに邂逅することなどもあつた。何も知らない人達！　戀の喜悦も憂ひもこれから知らうといふ人達！かれは過ぎ去つた自分の青年時代をかういふ人達に引くらべて、振返つて考へて見ない譯に行かなかつた。

橋の袂のレストウランに出かけて行く若い人達の生活もかれの想像に上ることが多かつた。

丘の陰になつたやうなところには、新たに建築した家などもあつた。大工が鉋や釿の音を四邊に響かせてゐるのもあつた。

新しい硝子戸、縁側に干したメリンスの派手な蒲團、八ッ手の白い花、風を防ぐために植ゑた樫の木立――さうしたものがかれの眼の前に映つて見えた。

ある夕暮に、かれは丘と丘との間に横つた低い谷を歩いて居た。疎な林の下には、穂の老けた薄や、枯れてガサガサする萱などが一面に路を蔽つてゐた。もうあたりは薄暗くなりかけてゐた。

夕燒が靜かに野を照した。

ふと、向うから、大きな丸髷に結つた若い細君が、片手に臺ランプ、片手に風呂敷包を持つて、萱や笹の中を分けて此方に歩いて來た。

六

さびしい日が續いた。

野は段々寒くなつて行つた。木枯が凄じく廣い野を吹渡るやうな夜もあつた。落葉は路傍にガサコソと音を立てた。

收穫はいつの間にかもう大抵すんで了つた。大根や菜が徒らに青々と繁つて居た。かれが出かけて行つて木の葉の私語に聞惚れた林も、今は、もう疎になつて、下に生えた篠の葉ばかり靜かに朝風夕風に戰いで居た。

丘から丘へ越えて行く低い處には、綺麗に澄んだ水が流れてゐた。そこにはをり〳〵野を過ぎて行く雲の影や鳥の影などが映つた。赤い蹴出しを出して町の方へ行く田舍娘の姿も映つた。子供の通つて行く影も映つた。

富士山がいつもよく見えた。もう半以上雪で白くなつて居る。かれは自分の經て來た苦鬪と艱難とをこの無心な『自然』と對照させて見るといふやうな心持を抱いて、よくその野原を散步した。

大きな學校の塀に添つた路は、一方楢の林になつて居た。篠の葉がいつもガサガサと風に鳴つて居た。其處を少し行くと黄いペンキ塗の學校の門があつて、中に、ひろい廣場が一面に見渡された。奥深く、

その途端に、別なテーブルの上の皿が五六枚また凄じく落ちる音がした。下から家の主人やボーイが飛んでやつて來た。

二人はやがて引離された。

打たれた方の男は、蒼い顏をして、卓を前にして睨んで立つてゐた。

娘はかれの卓の傍に來て居た。

『本當に、杉田さんは、亂暴をするんで仕方がないんですよ。』

『杉田ッて言ふのは、あの大きな男かえ。矢張大學生かえ。』

『え。』

『打たれた方も矢張大學生かえ。』

『え。』

こんな話をしてゐる中に、大勢の人達は皆な出て行つて跡は靜かになつた。

『私、本當に吃驚してよ。仲よく何か話してゐたのよ。と、急に、生意氣な奴！とか何とか言つて杉田さんが打ちにかゝつたんでせう。私、本當に吃驚した！』娘は笑ひながらこんなことを言つた。

暗い夜道を歸つて來たかれは、一層さびしい心持に閉されてゐた。

晝間と違つて、娘は綺麗に化粧をして、白いエプロンをかけてゐた。
あとからまた客が一組入つて來て、空いた卓に相對して坐つた。
『今日は忙しいね。』
皿を運んで來た時、かうかれは娘に向つて言つた。
娘は笑つて見せた。
『いつもかうかね、夜は？』
『え、夜は忙しう御座んす。』
かう言つて、すぐ向うの方に行つて了つた。
人々は娘を片時も多く傍に引きつけて置かうとするやうに見えた。
かれは暗いランプの下で、パンを手で割いたり蝦のフライをナイフで細かく切つたりしてゐた。
學生の群では、猶頻りに何か騷がしく議論らしいことを言つて居たが、突然『何だ生意氣な！』といふ高い癇走つた聲がしたと思ふと、ビールの罎やコップや皿の落る音が凄じく四邊に響き渡つた。見ると大きな男は、立上つて他の一人の頭をポカポカなぐつてゐた。周圍の人達は頻りにこれを抑へようとしてゐた。
『生意氣を言ふな！　おい、離せ。』

籐椅子に凭りかゝつたかれの姿は、暫し浮き出すやうに夕日の影の中に見えて居た。かれは種々の悔恨やら追懐やらの胸に簇つて來るのに堪へかねた人のやうに、長い間額に掌を當てゝ居たっ

其夜、かれはさびしい心をその町の橋の袂のレストウランに運んで行つた。

其處でもかれは思ひがけない新しい光景に邂逅した。

晝間はしんとして滅多に客も無いやうな二階の一間に、其夜は珍らしく客が澤山居て、酒を飲んだり議論をしたりして居た。農科の學生が多かつた。

酒に醉つた赤い顏、髮を長くした蒼白い顏、いが栗に短かく刈つた頭、大學の正帽を被つた丈の高い男などが、卷煙草の烟の一杯に籠つた一間の一隅に集つて、薄暗いランプの光に照されてわい〳〵騷いて居た。

『Bravo.』

かう大きな聲を立てる男もあつた。

『My little queen! ビールを持つて來て呉れ。』

群の中の一人がかう言ふと例の娘はビールの罎を二三本下から運んで來て、コロップを拔いて、彼方此方から高くかゝげる洋杯にビールをついで廻つてゐた。

傷痍は再び開いた。思ひ出はそれからそれへと續いた。戀に夢中になつた自分が此處にも其處にも居た。郊外の林の中の樂しい私語や、廣い野に下りて行く坂の上の路や、波打際に沿つた海邊の夜の逍遙や、さうした歡樂の追憶が、卷物にした繪のやうになつて眼の前を通つて行つた。

學生生活、都會生活、無邪氣な熱心な一途に學問に熱中した心の狀態から、忽ち引摺られて行つたことが殊に歷然と眼の前に見えた。女からの手紙、初めての物語、夜の闇路、邂逅、郊外への散步、林の奧の菫の白い花。――それが何んなに强くかれを引張つて行つたか。かれはその戀に全き力を擧げた人であつた。體も魂も全く其の黑い眼には魅せられて了つた人であつた。その人が二年の年月を經て、魂のぬけたやうな人になつて、かうして籐椅子の上に身を橫へて居る！

今日訪ねて來た女の心をかれも前から知つて居た。かの女は自己の戀を犧牲にした女、犧牲的に二人の戀の爲めに盡力しようとした女である。それが長い間二人の戀を彩つて居た。しかしそれももう殘りなく過ぎ去つて了つた。完全な過去になつて行つた。

一人は田舍に、一人はやがて海外に、一人はかうして都會の郊外に。

『一生別れるやうなことはないやうにしませうね。』かう言つて、三人して手を握つたのは、溪流の見える山の溫泉宿の欄干の處であつた。『貴郎達の戀さへ成就すれば、それで私は滿足よ。』その女はいつもかう言つては涙を流した。

秀夫の送つて來ようとするのを見て、『もう本當に澤山ですよ。それでもかうしてお目にかゝれて、私滿足でした。勇んで、發つて行きますわ。』

二人は門の處まで行つた。

『ぢや、左樣なら。』

『左樣なら、御機嫌よく發つていらつしやい。私はお見送りは致しませんから。』

『えゝえゝ……ぢや、本當に左樣なら。』十間ほど行つた處で、女は振返つて見た。男はまだ其處に立つてゐた。

秋の空は高く鮮かに晴れてゐた。

女の不意の訪問は、落附いたかれの頭を再び根柢から動かして行つたやうなものであつた。二時間！互に昂奮して、別に細かい話もしなかつた。しかし二時間の前と後とでは、心の狀態が夥しく違つてゐた。

かれは女に別れて、斜坂の紅葉の間を縫ふやうにして歩いて、其儘家の緣側のところに來た。

其處には夕日に照された籐椅子がかれを待つて居た。

かれはそれに身を投じて、頰杖をして、簇つて來るいろ〳〵な思を一ところに集中させやうとした。

うな口の利き方をした。

『しかしこれまでにするには、隨分大きな苦痛と戰つたんです。男の苦みは女には解らないんですからね。』

『それはさうでせうね。……私にはよく解りますわ。』

女は考深い目付をした。

『ぢや、お別れね。』

女の眼からは涙が滴れた。『丈夫でいらつしやい。三年經つと、私も歸つて來ますから。』

『三年――その頃は僕は何んな生活をしてゐるでせうね。丸で違つた生活に入つてゐるかも知れませんよ。』

二人は堅く手を握りかはした。

『其處まで送つて行きませうか。』

かう言つたかれは、不圖あることを思ひ出して、『よく貴孃を二人で送つて上げたものでしたね。まだその時から一年と少ししきや經つてゐやしない。』

『本當にね。』

『世の中にそんなことがあり得ることでせうか。あんなに熱烈な、まことの戀が、そんな風にしてさめて行くものでせうか。それが本當なら、私など、何だか世の中が恐ろしいやうな氣がしますわ。』女はかうして獨り住んで居るかれを痛むやうな眼色をして見た。

お光に別れてからのかれの生活を女はかなりよく知つて居た。お光とかれと其女と、その三つの心がある時は巴のやうになつて活きて動いたこともあつた。ある温泉場の旅館の一間では、三人は床を並べて寢たこともある。其時、終夜眠られずに長大息をついてゐたのは、二人の戀人ではなくてこの女であつた。若い二人の戀を監督するやうな地位に身を置きながら、其の男に人知れず戀してゐたかの女の心は譬へやうもないやうなものであつた。

大工の上さんの眼にも、二人の間の關係といふやうなものが映つた。女にも男にも昂奮したやうな調子が何處かにある。中でも、女にはそれが著しかつた。熱い赤い頰に幾度となく手を當てたりなどしてゐた。

『然し、もう大丈夫です。夢に見ることも少くなりました。』

かれは笑ひながらこんなことを言つた。

『もとのやうにはならないものでせうか。お光さんだつて、可哀相ぢやありませんか。悔い改める日を待つて上げて下さい。……女は羸弱いものです。』女は犧牲の精神に富んだ昔の感情を男に思はせるや

『男やもめで、何もお構ひは出來ませんけれど、お茶位は上げられますから。』

かれは緣側に出て、聲をあげて大工の上さんを呼んだ。

上さんがのこ〳〵やつて來て、七輪に火を起して呉れる間、二人はポツポツと途切れ勝ちな會話をつづけた。物語よりも互に昔のことが思ひ出さるゝといふ風に見えた。

お貞さん！　增田お貞さん！　何んなにやさしい溫順な女だつたらう。お光とかれと烈しい戀に陷ちた最初から、彼女は二人の間を詳しく知つて居た。かの女は二人の戀の初めから終までを知つてゐた。そして二人が結婚すると間もなく、良緣を求めて、宣敎師に嫁ぐことになつた。溫順なかの女は、死ぬやうな辛い悲しい運命に服從して其人の許に嫁だといふ其頃の噂であつた。

『何うして、一體、そんなことになつたんでせうかね？』

『お互に解らなかつたんですね。』

『でもねえ、あんな熱烈な戀が一年も經たない中にそんなことになつて了ふものでせうか。私には何うしてもお光さんの心が解らない！』

『あなたなどとは丸で違ふ女なんですから。虛榮心の多い、エゴイスチックな……』

『たよりも何も無いんですか？』

『えゝえゝ。』

女も激して居た。

『まあよく來て吳れましたね。』

男がかう言ふと、

『でも、まァ、漸く知れて好かつたこと。それに、もしか留守だッたら何うしようと思つて、そればかり心配して來ましたのよ。』男の顏を見て、『貴郞、瘦せましたね。』

『苦勞しましたからね。』

『さうね。』

女は緣側に腰をかけて、『私はお光さんが家出をしたといふ噂を聞いた時から、何んなに心配して居たか知れないんですよ。それにしても何うしてまァ、お光さんがそんなことをしたでせう、私には長い間本當に出來ませんでしたよ。』もう一度男の顏を見て、『でもお目にかゝれて嬉しかつた。今日お目にかゝれないと、いつまた逢はれるか解らないんですからねえ。』

『何時です、亞米利加にお立になるのは？』

『この十七日の船で發つつもりですがね。秀夫さん、それは忙しいのよ。』

『しかしまァ、お上んなさい。』

かう言つて女を座敷に請じて、

それは他でもなかつた。其處に伴れて行かれたかれの友達は、眼と顏の輪廓との著しくかれの前の戀人に似た若い娘の顏を見た。

『世の中にはローマンスが多いね。』

かれはフォークを動かしながら、かう友達に向つて言つた。

五

ある日、其の幽棲に不意に訪ねて來た女があつた。

大工の上さんは、束髮に結つた縮緬の羽織を着た二十三四の華奢な女が門から此方に入つて來るのを見た。あの寫眞の女が來たのか知らんと始めは思つたが、何うもそれとは違つて居るやうに上さんには思はれた。寫眞挾の女はもう少し綺麗な人だつた。

『秀夫さん！』

緣側に出て本を見て居たかれは、さう呼ばれて驚いたやうにして其方を見た。

かれはイキナリ緣側にある下駄を突かけて、急いで女の遣つて來る路の方へと出て行つた。窓の處から顏を出して居た上さんは、其處で二人が默つて立留つて握手してゐるのを見た。

男の顏には赤く血が上つてゐた。

かうかれは度々大工の上さんに言つた。

上さんも後にはそれを不思議にした。『何處に行らつしやるのよ。』などと訊いた。

それと知つた時、『まだ子供ぢやありませんか、あんなもの。加藤さんも餘程何うかしてるのね。』

上さんがかう言ふと、

『すぐ、君だちはさういふ風に勘じるからいけない。』言ひかけて笑つて、『何もさういふ積で行くんぢやないよ。』

『若いのが好いんだね、矢張。』

上さんはその辯解を聞かうともしなかつた。

『あれは、あれでもあそこの家の看板なんですッて、農科の學生がよくあそこに出かけて行くのも、矢張あの娘が居るからだといふことですよ。』ある時、上さんは、何處からかそんなことを聞いて來てかれに話した。

時にはかれは友達を其處に伴れて行くことなどもあつた。その時は、かれはきまつてその紅葉を流した話をしながら歩いた。『世の中にはロマンチックなことがあるものだね、君。これで僕がラブにでも落ちれば、それこそ申分がないんだけれど。』かう言つて、『それからまだ君に見て貰ふことがあるんだ。あれは向うに行つてからでなくつては解らん。』

かれは笑つて見せた。

橋の上から見たほど綺麗な娘でもなかつた。しかし肌の理の細かいのと眼の光のあるのと丸顏で愛嬌のあるのとが何處となくあたりに際立つて見えた。恥かしさうにしてはゐるが、かういふ處に居る娘だけに、客に話をするのを億劫にしてはゐなかつた。

『私、きまりがわるかつたわ。』

此の間の橋の上の話をかれがすると、娘はかう言つて笑つた。

『だッて、同じやうな眞赤な葉が流れて來るんですもの。私、あの時、不思議に思つたのよ。ふッと見上げると、貴郞がゐるんですもの、變な氣がしましたわ。』存外打解けた口の利き方をした。

かれは鯛のフライ一皿とロールキャベージ一皿とそれにパンを燒いて貰つて食つた。其日は晴れた日であつた。一本のビールに醉つたかれの顏は夕日に明るくかゞやいて見えた。

娘は調子の好い客の言葉にすぐ引張られたといふやうに、心安くいろいろなことを話してきかせた。客の座を占めてゐる傍の椅子に凭れるやうにして、娘は客と長く相對して居た。その名から年齡まで話した。

それからかれはよく其處に出懸けて行つた。

『今夜は支度をしなくつても好いよ。』

降つて來るのも知らずにかう思詰めて其處に立盡してゐた。

其後かれはその娘と知るやうになつた。

娘は名をおてると呼ばれた。年は十七である。その西洋料理店が遠い親類に當つてゐて、手傳ひに昨年から來てゐるといふ話である。

無論かれが出懸けて行つて逢つたり聞いたりしたのだ。

それは外から見たほど綺麗な二階ではなかつた。テーブルクロースも餘り新しいとは言へなかつた。

其家には、娘の他に男のボーイが一人ゐるばかりであつた。好い鹽梅に其日は娘が獻立の板をかれの前に持つて來た。

娘は無論先の日の橋の上のいたづらを知つてゐた。恥かしさうにしてゐた。

『お酒は？』

註文を聞いた後に、娘は小聲で訊ねた。

『キリンを一本。』

『大の方？』

『え。』

洗つてゐた。上には眞紅に染つた紅葉が水を彩つてゐた。

かれは紅葉を一枚摘み取つて、それを欄干の上から流して遣つた。

紅葉は娘の白い腕の傍を流れて行つた。娘は知らずにせつせと皿を洗つてゐた。かれは一枚、二枚、三枚まで同じやうにして流してやつた。

それが――同じやうな眞紅な紅葉が三枚まで流れて來たといふことが、娘の小さい心を誘つたらしかつた。娘はやがて顔を擧げて上を見た。莞爾笑つたかれの顔を見て、娘はさつと顔を赤くした。

こんなことに忘れ難い興味を感ずるほど、かれの心はセンチメンタルになつてゐた。かれは娘が皿を洗つて、恥かしさうに家の裏口に入つて行くまでぢつと其處に立つて見てゐた。

坂を登つたところで、町は盡きてゐた。其處からは、半ば林、半ば高臺になつてゐた。をりをり秋の午後の空に見るやうな霧が何處からともなく俄かに押寄せて來た。それは深い深い霧であつた。かれはその霧に中に立つて、四邊を見て居た。

何とも名狀することの出來ないやうなさびしさがかれの心を強い力で襲つて來た。其處に立つて居るかれ！　鼠色の霧の天地の中にぽつねんと立つてゐるかれ！　かれは全く一人である。かれを思つて呉れるものはこの廣い世の中に一人も居ないのである。あの不貞な女は、今時分はもう他の若い男の腕に抱かれてゐるかも知れないのである！　廣い砂漠の中に唯一人この自分は居るのである――かれは雨が

四邊に釣合はないのが、一番先にかれの注意を惹いた。それから硝子戸のはまつた二階が眼についた。天氣の好い日には、明放つた窓から、白い布のかゝつた卓に、コツプや水の入つた罎や、赤い白い花などの置いてあるのが見えた。何うかすると、川に臨んで白い服のボーイや赤い襷をかけた若い娘などが皿か何かを洗つてゐるのを見たこともあつた。

其日は曇つてゐた。今にも雨が降つて來さうであつた。かれは家の中にぢつとして居るのに堪へられないほどむしやくしやしてゐた。で、かれは出かけて來た。

いつものやうに水車場の前で立留つて、それから町に入つて、雜誌屋の前を行き過ぎて、また戻つて、昨日發刊された雜誌を鳥渡手に取つて見たが、急に『おいこれ呉れ！』と叫んで、懐の財布から二十錢銀貨を出した。で、歩きながら五六頁其雜誌を飜して見たが、すぐ懐にねぢ込んで了つてまた前のやうな靜かな步調で步き出した。

鳥屋の前では、インコだの鸚鵡だの金糸鳥だのゝ歌つたり飛んだりするのを、長い間ぢつと見てゐた。

橋の上では、われを忘れたやうにして暫く立盡してゐた。

後には欄干に凭りかゝつて下を覗くやうにしてゐた。

それも道理であつた。其處には、かれを惹きつけるある小さな光景が展けられてあつた。川につき出した洗場には、赤い襷をかけた桃割に結つた十七八の娘が、幾枚も重ねた白い皿を、腕を伸して熱心に

雨の降る日には向うの牧牛場で鳴く牛の聲が際立つて高く聞えた。

かれは此頃よく町の方に散歩に出かけた。矢張竹の根のステツキを抱へて居た。町に出やうとする處に水車場があつた。車の廻る響につれて、水の落ちる音が凄じく聞えた。餘流の落ちて碎けるさまは、月の夜などには殊に見事にかゞやきわたつて見えた。門の前にはいつも荷車や荷馬車が置いてあつて、時には白い粉の一杯に體についた男が、叺や俵を運んでゐるのを見かけることなどもあつた。ぢつと立盡したかれの姿はよく其處に見えた。

町は郊外によく見るやうな種類の町であつた。古びた旅籠屋、くさい臭氣の鼻を撲つ鹽物屋、幾日も同じ腿の肉を下げてゐる牛肉店、さうした家が兩側に古く傾いた軒を並べて居た。汚いチヤンチヤンを着た子供が遊んで居たり、荷馬車がガタガタ通つて行つたりした。近所にある工場の汽笛がこの郊外の町にをり〳〵正確な時刻を知らせた。

町はいくらか爪先上りになつて居た。中ほどに小さい川があつて、それには古ぼけた板橋がかゝつてゐた。橋の下流には、欅や楓や榴などの大きな樹が蔽ひかぶさるやうに茂つて、いつも暗い影を水の上に落してゐた。

其處に、川に臨んで、一軒西洋料理店があつた。

それをかれは町に初めて散歩に來た時から知つてゐた。Restaurant と白壁に大きく書いてある字の

上さんは笑つて、『道理で、何だか人の足音がしたやうな氣がしたよ……つむじ曲りね、貴郎は。そんな氣早をしないで、入つて來れば好いのに。』

『邪魔をするより、むつまじい處を傍から見てゐる方が好かつたからね。』

『あんなことを言つてるよ。』

かう言つて、十能を持つて、上さんは勝手へ下りて行つた。

昨夜、それから暫く家の周圍を歩いて居たが、薄月のぼつとした景色にそゝのかされて、つい町の方まで遠く歩いて行つた。かれは卷煙草を吸ひながら、そんなことを繰返して頭に浮べて居た。

野は段々深い秋の色を帶びて來た。

家の前の斜坂の處々に植ゑられてある楓や柞も一雨毎に紅くなつて行つた。何うかすると、凄じい風が廣い野を通つて、其餘勢を高い樹木の梢に見せて居た。

時には、友達が遊びに來て、『好いねえ、實に好いね、郊外の秋をこんなに好く味ひ得るところは少い。』などと言つて、緣側にぢつと立盡してゐる人達もあつた。暖い日當りに座蒲團や籐椅子を持出して、柱に凭りかゝつたり何かして、二三人で頻りに人生問題を論じ合つたりすることもあつた。机に向つて仕事をしてゐるかれは、硝子障子を隔てゝ、日本畫でなくては見られないやうな庭の紅葉を眺め暮した。

三分の釣洋燈が薄暗く一間を照してゐた。

かれは聲を懸けて嚇かしてやらうと思つた最初の計畫を忘れて、其儘ぢつと其處に立盡して了つた。一間しかないこんなあはれな小屋の中にも、かうした樂しい團欒があるかと思ふと、かれは堪らない一種の哀愁を覺えずには居られなかつた。窓の下に印せられた黑いかれの影は、暫くの間其處を離れやうともしなかつた。

『昨夜、窓の處に行つて、立つて聞いてゐたけれど、餘り睦しさうだつたから、邪魔だと思つて歸つて來て了つた。』

翌朝、竈の焚落を十能に入れて枕元の火鉢に持つて來た上さんをつかまへてかれは言つた。

『嘘だらう?』

『うそなことがあるもんか。壺坂をやつてゐたぢやないか。磯さんの顔を見てゐると、それは可笑かつたぜ。』

『でも、上手なんだよ、あれで。』

『お上さんが仕込んだんだからな。』

『いゝえ、私なぞより本物だ。あれで。』

『それに惚れ込んだッて言ふ譯だね。』

處かにこしらへてゐるなど〻言つた。

『でも、仲が好ささうぢやないか。』

『こつちが惚れてゐるから、喧嘩もしないがね。それや腹が立つことはありますよ。』

『餘り好い心持はすまいね、女を拵へてゐることが解つちや――』

上さんは、薪をくべながら、『こつちを構はないやうにすれば、それは默つて承知してゐやしないけれど、こつちを好くして置けば、女を拵へるのは男の器量だからねえ。』

『さういふもんかねえ。』

こんな話をしながら、かれは夕暮から降出した雨を見詰めてゐた。竈の烟は青く薄暮の空に靡いて行つた。

何うかるすと、下の家で三味線の音がすることがある。何か唸つてゐるやうな氣勢もする。あの長火鉢の上にかけてある三味線だな！　といつもかれは思ふが、つひぞ今まで行つて見たこともなかつた。

それは薄月のある靜かな夜であつた。ふと、かれは覗いて、嚇かしてやらうと思つて、こつそり窓の下に歩み寄つた。窓の破れから覗いて見ると、磯さんは節つけのしてある本を膝の上に置いて、顏を膨らませて、頻りに義太夫を唸つてゐる。其傍の長火鉢の前には、上さんが三味線を彈きながら、熱心にその拍子を取つてやつて居る。

憎まなければならなくなつた此身が悲しかつた。さうした處に連れて行かなければ何うすることも出來ない自分が情けないやうにも思はれた。

『奥さんの寫眞何うなすつて？』

ある日、大工の上さんは柱の寫眞挾に知らない風景の寫眞が挾んであるのを見てかう尋ねた。

『もう藏つちやつたよ。』

『何うして？』

『目障りでいけないから。』

『あんなことを言つてる！』

『でも本當に思ひ出していかんからね。それに、出て行つた女などもう何うでも好いからねえ。』

『それはさうだせうね。』

かう言つて上さんは笑つた。

何うかすると、かれはこの上さんと二人切りで一日を過すことなどがあつた。京都から歸つて來た當座は、それでも友達がたづねて來たが、段々それも少くなつて行つた。夕暮など何うかすると、飯を炊きながら、上さんは自分が廓に居た時のことなどを話して聞かせた。今の亭主と惚れ合つて、無理な思やら、不義理な眞似やらして、漸く思ひが届いたと思へば、男といふものは薄情で、今ではもう女を何

を男が肉慾を滿足させなかつたためだと言つて居た。それほど其手紙は情慾の匂ひに富んで居た。
其頃では、もう其手紙を明けて見やうと思ふやうな氣分がかれには起らなかつた。女を懐しいものに思つた心は、いつとなく憎惡の念に變つて居た。かれは手紙から來る刺戟を恐れて、それを深く抽斗の底にかくして了つた。
憎む心と愛する心、それがかういふ風に複雜してかれの心に迫つて來やうとは思はなかつた。郊外に來てから間もなく、かれは友人達と其女の話をすることを避けた。
『もう、そのことを言はないで呉れ給へ。』
其の話が出ると、かれはかう言つて顏を蹙めた。
かれは自から問うた。
『では、もし、かの女が今日にも此處に遣つて來て、重々その不心得を詫びるやうなことがあつたら何うだ。それでもお前は許さないか。』
『許さない。』
かう答へたが、かれはすぐ考へ續けた。『そんな考を起すから駄目だ。汝はもう疾うに女から忘れられてゐるのを知らないのか。詫びに來るどころか、汝を恐れて身をかくしてゐるのぢやないか。馬鹿な奴だ。』かう思つたかれは、その言葉の烈しいのに似合はず熱い涙の頬を傳つて流れ落ちるのを覺えた。

『死んで呉れた方が何んなに好いか知れやしない。死んで呉れゝば、僕はいかやうにも女を美化して、そのイリユウジヨンの中に樂しく住んでゐることが出來るけれど、別れたのでは、さういふ譯には行かない。樂しかつた事實の思ひ出でさへ、暗い不愉快な醜い影を帶びて來るのだからね。』

かれはかう親しい友達の一人に言つた。

二人が同じ空氣を吸ひ、同じ太陽を見、同じ月を仰ぐに堪へないといふやうな苦しい時期が續いた。女を得なければ死！　さう思ひ詰めた時期はかなり長かつた。其時には、女の胸を透つて來る空氣が、そのまゝ男の心に無線電信のやうに傳つて來るやうにすら思はれた。

女が遠い東北の親類の方に遣られたといふ噂を聞いたのは、別れてから一月ほど經つた頃であつた。女とかれとの戀の間に立つたある人からは、それを知らせた長い手紙が來た。それを見てから、かれは始めて京都に行く氣になつたのであつた。

かれは女から來た手紙を束にして持つて居た。それは十通や二十通ではなかつた。戀に落ちた二年前から段々捨て難い離れ難ない間柄に至る間の手紙が中でも殊に澤山であつた。最後の一通は、卷紙に書いてあつて、封筒には切手が六錢張つてあつた。

其の最後の手紙を見たといふ友達の一人は、それに違ひないと言つたやうな調子で、その別離の原因

つて女の父母、親戚の側からの誘惑に崩れて行くやうな二人の間柄ではなかつた筈だ。かれは殘念ながらも自己の貧と女の虚榮心とにその原因を歸するより他に仕方がなかつた。

『僕等の熱烈なる戀が虚榮心の犧牲になつたかと思ふと實に情ない！』かれは幾度となくかう友達に向つて言つた。

『いつそ死んで吳れゝば好かつた。』かれは自分で敷いた床の上に身を橫へ乍ら獨語のやうに言つた。で、仰向に寢たまゝ、暫くは天井を見詰めて居た。

四

『死んで吳れゝば好かつた。』

死んで吳れたのなら、二人の間に取交された感情、言葉、祕密、それが皆な藝術品のやうになつて、其處から樂しい悲しい記憶の泉を無限に汲み出すことが出來るのであるが、假令いかに離れた、いかに遠い沒交涉な土地に二人が住んでゐても、一度其の體を合せた男と女との何方かが依然として生存して居る以上は、一方の相手は不安な不愉快な念に驅られない譯には行かなかつた。かの女はかれの吸つてゐる空氣を矢張同じく吸つてゐて、かれに與へた媚と肉體とを矢張同じく他の男に與へることが出來るではないか。

再び筆を取つたかれは、原書を傍に原稿紙を前にして一字一字書いて行つた。始めてからは容易に筆を留めやうとしなかつた。家の周圍には、夜の闇が犇と押寄せて、をりをり風がガサガサと窓の外の寒山竹を動かして行つた。

笠を深くかけた洋燈は、机の周圍を照すだけで、室の中はぼつと薄暗くなつて居た。それにも拘らず、柱にかけた寫眞は、丁度かれの大きな影の頭の處あたりに、分明と浮出すやうに見えてゐた。かれが筆を捨てゝ、後頭部に掌を當てゝ、仰向に身を倒した頃には、もう餘程夜が更けてゐた。氣が附くと野を過ぎて行く風の音にかれは耳を欹てゝ居た。

かれはこれまで深夜に眼覺めて、何んなに深く強く女のことを思つたかといふことを考へずには居られなかつた。殆ど毎夜――ある時などは自分ながら自己の考の恐ろしいのに戰慄して、それをまぎらす爲めに深更に戸外に出たことさへある。時には、女が後悔して自から此處に遣つて來て、今、戸を叩かうとしてゐるのではないかといふやうな想像に驅られて、わざ〳〵雨戸を一枚繰つて見たことなどもある。何故女には男の心が解らないのか。何故、これほど思つて居る心が女に通じないのか。

何故に女はかれを捨てゝ去つたかといふことが、今でもかれには解し得られぬ疑問であつた。樂しかつた半年の海岸生活、そこに暗い影が潜んでゐるなどとは夢にも思はれない。東京に歸つてからの生活にも、女の家出を促すやうな際立つた事件やこんがらかつた葛藤があつたとは思はれない。さればと言

してゐた。娘に近く座を占めたかれは、娘が樂しさうな笑ひを顏に湛へて、ぬれた手を手巾にふいて居るのをぢつと見てゐた。

かれは心の轟くのを覺えた。かれは死ぬほど戀ひした女の外に猶ほ他の女を思ふことが出來るのを不思議にした。

『しかしこれは戀ではない。女に對する廣い同情だ。』

かれはかう思つたのを今でも覺えてゐる。

かれは縁側から座敷に上つて、眞中に引出してある机を床の間に添つた一隅へと押附けてやつた。渠は机の上に置いてある洋燈を前にして坐つた。

遣らなければならない仕事が澤山にあつた。某雜誌に送らなければならない飜譯の〆切はもう明後日である。某雜誌の文叢欄は明日までにまとめて送つてやらなければならない。それに飜譯しかけた叢書の仕事もある。かれはそれに着手する前に、先づ日記を書いた。

日記は罫紙を綴ぢ合せたもので、今年のだけでも、もうそれがかなり厚くなつてゐる。時には、一日の感想を十枚も二十枚も書くこともあるが、今日は五行ほど書くと、パツタリ筆を措いて、卷煙草を一本スパ〳〵と旨さうにして吸つた。

かれは病院の一室で最後に女に逢つた。白い寢臺……白い女の顏……女は涙を流して詫びた。それは虚僞の涙であつたではないか。

『貴郎の爲めにも、當分一緒にゐない方が好いから。私は外部から貴郎を助けることにしますから。』

其時、女はさう言つた。さう言つて置いて、女は身を躱して了つた。

友人や先輩が心配して、靜かに考へるやうにする方が好いと言ふことになつて、無理につれて行かれた京都の三ヶ月――かれは嵯峨に近いある農家の一間に淋しい辛い日を送つて來た。仁和寺の山門の上に蔽ひかぶさるやうな鮮かな新綠、愛宕道から炭を脊負つて下りて來る田舍娘、自分の居る室から雨の降る日にも晴れた日にも見える妙心寺の屋根、地響をさせて通つて行く丹波への汽車、中でも忘れることの出來ないのは、自分が世話になつた先輩の懇意にしてゐる家の娘であつた。娘はもう二十位だつた。純なやさしい京都辯で、いろいろなことを話して聞かせて吳れた。髮の濃い、眼の綺麗な娘だつた。その娘と娘の父親と先輩と一緒に伴立つて嵐山に行つたことなどもあつた。娘は男の苦悶の原因を知つて居て、何ぞと言つては慰めて吳れたりした。そんな女ばかりではありませんといふやうな語氣を洩したこともあつた。それが男の心に深く殘つて居た。今でも殘つて居た。

其時、娘は手を舟緣から透徹るやうな水の中に浸して居た。水は新綠の色を帶びて、一層濃い碧を呈

「それもさうね、あんな綺麗な奥さんがまだ家に待つてゐてはね。」
戯談らしく上さんは言つて笑つた。加藤は默つてゐた。
暫くしてから家の方に歸つて行くかれの姿が見えた。點けたまゝにして置いた机の上のランプは夜風にチラ〳〵した。四邊の樹木の葉裏はその餘光を受けて明るく照つてゐた。
かれは先づ縁側に腰をかけた。
種々なことが思ひ出された。二年足らずの年月が、何んなにかれに辛い悲しい經驗を與へたか知れなかつた。かれは思ひもかけない人生の一面に觸れて、悶えたり悲んだり、苦んだりする人であつた。かれは今靜かにその二年間の年月を飜つて考へて見た。自分ながらよくもその火水の中を通り拔けて來た。よくもその苦悶を過去のことのやうにして考へゐまでの餘裕が出て來た。……ふと何も彼も逸早く過ぎ去らせて了ふ時の力といふことが頭に上つて來た。かれは堪へられないさびしさを總身に覺えた。
別れてから――女が家出してからもうかれ是れ五ヶ月になる。其間の苦悶は？　苦痛は？　かれは絶えず短刀を懷にして、女に邂逅し次第、其の胸に恨みの刄を當てなければ承知が出來ないと思つたことさへある。また時には自分等二人の間に入つて、二人の仲を割かうとした奴等を片端から斬殺して呉れやうとまで憤怒の思ひに燃えたこともある。かれの戀には、傷けられた男性の矜持に對する恕すべからざる屈辱があつた。

『好い鹽梅です。』

二人の友達は別れて少し來てからかう言つた。

三

加藤は家に入る前に、入口の大工の許に寄つて見た。大工の磯さんはまだ歸つてゐなかつた。上さんは三分の洋燈をつけて其處に坐つてゐた。

『今日は賑やかでしたね。』

などと上さんは言つた。

加藤は暫し默つて其處に腰をかけてゐた。何となく家に歸るのがさびしかつた。夜の空氣が靜かな思出をかれの胸に誘つて來た。

『つまらんなァ。』

思はず知らずさうした言葉が口から出た。

『本當に獨ぢや淋しいでせうね。…………』上さんはかう言つて『一人お持ちになつたら好いぢやありませんか。』

『さう簡單には出來ないからな。』

百姓の娘は、莞爾しながら、かれの散歩姿と摩れ違つて行つた。
時にはかなり遠い處まで出かけて行くこともあつたが、其日はいつも行く池の周圍を一廻して、林に透徹る秋の日影の中に暫し坐つて、それから俄に歸りたくなつて歸つて來た。
縁側に寢轉んで居る友達の姿を見て、かれは喜悦の聲を擧げた。

二

近所に居る友達も來た。
夕日があたりを照して居た。樹の影が黑く地上に落ちた。垣に傍つた路を通つて行く荷車の音が靜かに聞えた。
やがてランプの灯は八疊の一間を靑白く照した。大きな机の上の書籍や雜誌を片附けて、其處に大工の上さんがカレー粉を交ぜた炊き立ての飯を大きな皿に山盛にして運んで來た。人達はスプンを手に旨さうにして食つた。お仕舞になつた時には、戶外はもう全く暗くなつてゐた。
歸る時には、かれは友達を送つて、水車のある橋の處まで出かけて行つた。若々しい笑聲は垣に添つたり牧牛場に添つたり星のうつる水田に添つたりする闇い田舍道を暫し賑かにした。
『加藤君、大分落附いたやうだね。』

だつて、本當ですか。』などと訊いた。

此家の後には、廣い野原が續いて居た。楢や栗の林が多かつた。路がうねうねと丘と丘との間を縫つて、思ひもかけない處に五六軒の百姓家があつたり、小さい川が流れてゐたりした。昔、誰かの邸宅であつて、すつかり荒廢した跡とも思はれる池や築山などもあつた。

野に働いて居る百姓達は、竹の根のステツキをついた何方かと言へば丈の低い痩せた三十前後の一人の男の散歩姿を到る處で見た。林の中の細い路からヒヨツクリ出て來ることもあれば、畑に添つた路に立つて、塵埃の山の燃えるのをぢつと見詰めてゐることなどもある。レールの上に架つた橋の上から白い烟を立てゝ汽車の遣つて來るのを見てゐることなどもあつた。大抵、ステツキを抱へて、凝と物を思ふやうにして歩いてゐた。

林の私語や、小川の流や、靜かな百姓家や――さういふものをかれは求めるやうにして歩いた。かれは靜かに物を考へたいとばかり思つて居た。

かれは百姓に話した。

『今年は豐年でしたらう？』

『いや駄目ですァ。』野にある人達は、腰を延すやうにして、こんなことを言つた。

新宿の女郎上りだと言ふ大工の嚊が、その入口の處の一間しかない小屋のやうな家に住んで居た。其處に下りて行つて聲をかけると、上さんは窓の處から顏を出して、『なアに、散歩に行つたんですよ。ぢき歸つて來ますよ。上つて待つて入らつしやい。』から言つて、客と一緒に上の家に遣つて來て、勝手の七輪に火を起し始めた。

『え、え、私が御飯だけ炊いて上げるんです。こちらの方は、それは寢坊ですからねえ。默つて放つて置けば、お午までは屹度寢てゐますよ。……そのかはり、夜は隨分遲いんですから。一時位まで、雨戶も閉めずに、灯が點いてゐることがよくありますよ。一度、餘り氣になるから、私がそつと來て見ると、机に向つてちやんと勉强してるんですもの。勉强するなら、晝間したら好いと思ふんですけれども、矢張夜でなくつては駄目な稼業なんですつてね。』話好きな上さんは、誰でも構はずこんなことを饒舌つて聞かせた。

あたゝかな午後の秋の日影に照されながら、緣側に腹這ひになつて、客は新刊の雜誌などを見て居た。モウモウといふ牛の聲が時々向うから聞えて來た。上さんは緣側の一隅に腰をかけて、いろいろなことを話しかけてゐたが、七輪の鐵瓶が俄に白い湯氣を立てゝ沸き出したので、急いで立ち上つて、番茶を淹れて、客に出して勸めた。

書棚の傍の柱には、束髮に結つた、眼の綺麗な、十八九の丸顏の女の寫眞が、草色を緣にした立派な寫眞挾に挿まれたまゝ懸けられてあつた。それを上さんは外して來て、『これがこちらの方の前の奧さん

別れてから

一

親しい友達は段々其處に訪ねて行つた。

『停車場から五町、牛舍の向うの斜阪の上にある小さい家』かう端書に書いてあつた。成程五六匹の牛の寢轉んで居る牛舍がある。道路に添つた處々に樹木の茂つた芝草の斜阪がある。茅葺の小さい屋根は其中に埋れるやうになつて見えてゐる。

『これはしやれた處だね。誰かの別莊にでも造つたものと見えるね。』

かう友達の一人は言つた。

一人の友達は、運わるく丁度主人が散歩に出かけた留守に遣つて來た。秋の日影の明るく射した八疊の間には、本だの雜誌だのが散らばつたまゝになつて居て、案內を請うても返事をするものがなかつた。その友達は緣側に腰をかけて暫く四邊を眴してゐた。

漸くしてから、お雪のかう何か辯解するやうな聲が聞えた。

また低い聲が續いた。

『ぢや何うしても歸つては呉れないんだね?』男の聲が高く鋭く聞えたかと思ふと、『あれ――』といふ女の悲鳴が聞えた。清太も爺さんも吃驚して立つて行つた。

顏を押へたお雪の顏からは血がだらだら流れた。

婆さんも傍から言つた。

淸太と讓とはやがて打解けた口の利き方をした。何時東京に行くの、何年位行つてゐる積かなどと淸太は訊いた。『幾年で歸つて來るか解らないんです……私のやうなものには、何うせ何も出來やしないんですから。』などと讓は言つた。

『また、彼方に行つたら、時々は手紙をくれたまへ。僕は君に對しては惡意なんか持つてやしないんだから。』淸太はかう言つて『僕もその中出かけて行くかも知れない。』

何か事件が起りさうなどとは何うしても思れない柔かな話が一座の中を賑かにした。婆さんが出たり入つたりした。茶菓子なども出た。

やがて淸太も爺さんも其處から出て來た。あゝいふ調子では、そんなに心配をすることはないと淸太は思つた。淸太は火鉢の傍で、今年の漬菜のよく出來た話などを爺さんとして居た。

六疊と八疊との間の襖は半ば開けてあつた。お雪の坐つてゐる姿は半分ほど淸太にも見えて居た。やがて二人の何か話して居る聲が小さく聞え出した。

『僕の心持は解らないんだね。』

讓のかう言つた聲がした。

『だッて、私だッて……』

敷の隅に坐つてゐるお雪の帯が此方から見えた。

爺さんと清太とがやがて入つて來て、その後からお雪が續いた。お雪はちらと其處に坐つて居る讓の方を見たが、そのまゝ眼を外らして、俯向き勝に隅の方に小さくなつて坐つた。

日影に遠い裏になつてゐるやうな室であつた。明るい八疊から入つて來ると、暫しは物が分明と見えなかつた。皆な挨拶をしただけで暫く默つて居た。

其處に婆さんが茶を運んで來た。

『昨夜は失禮しました。』清太が一番先に口を開いた。『君には氣の毒だッたけれど、今の場合何うもさうは行かないんでね。』

『えゝ僕も失禮しました。』かう言つた讓の聲は少し顫へた。

『まア、此方も東京に行くッて言ふんだしな、……緣がなくつて、かういふことになつたんだから、誰も惡いつて言ふものはないんだから、綺麗に心殘りのないやうに話してな……』爺さんはゆつくりした調子で『何うもな仕方がない。なア清太さん。』

『え、え。』

清太はかう言つて聞いて居た。

『お雪やんも此方に寄んなされ。』

『やつと、それでも話して來たゞ。爺さんが折角さう言つて仲に入つて呉れるんだからッてな。淸太がつれて、鳥渡此處に逢はせに來る筈だ。……やれやれ、骨の折れた話ぢや。』かう言つて爺さんは讓の方を見た。

十二

淸太に伴れられてやがてお雪は來た。

お雪は庇髮に結つて居た。銘仙の鳥渡した衣服を着て、繻子と縮緬との派手な帶をしめて居た。色の白い上に薄く化粧をして來たので、常よりも一層美しく見えた。

『いつも綺麗な姐御ぢやな。』

こんなことを婆さんの言ふのが聞えた。八疊と六疊との仕切の襖は閉めてあつた。それを待設ける爲めの六疊は綺麗に掃除がしてあつて、中央に火の活々と起きた火鉢が置いてあつた。爺さんの信仰する宇賀神の蛇のとぐろを卷いて鎌首を高く揚げた掛軸が其處にかゝつて居た。その六疊に讓は居た。爺さんや婆さんや淸太の聲が入り混つて聞えた。挨拶が長く續いた。『今度は飛んだことで御厄介になりまして、本當にすみません。』かういふお雪の聲もした。

爺さんが先づ入つて來た。そして四邊を見廻してまた出て行つた。襖は其時明けたまゝになつた。座

傍にブラブラしてゐる此處の息子とも違ふ若い男を振返つて見て行く人もあつた。

やがて婆さんは二三枚の洗濯をすまして、それを持つて向うの方に行つた。樹と樹との間に一筋の繩が引いてあつた。その繩の綯目の間に婆さんは先づ足袋を一つ一つ挾んだ。解いた衣服と襦袢とは小屋の傍の日當りの好い處に持つて行つてかけた。其處の荒壁にはひばなどが吊されてある。

讓の顏を見て、

『何うしたんべ。爺さん、えらう遅いが、話が難かしいんだんべいかな。』

こんなことを婆さんは言つた。

讓はまた緣側の方に行つて、長い間其處に腰をかけてゐた。障子に映つた日影が段々低くなつて行つた。何處かで薪を割るやうな音が聞えた。

やがて泥濘の深い道を拾つて、疎らな垣の方に寄りながら、爺さんの歸つて來る姿を見ると、讓の胸はまた烈しく動悸を打ち始めた。

『やれ、やれ、話が難かしくつてな……解らない奴ばかりゐるから仕方がねえ。』かう言つて爺さんは入つて來た。

婆さんは迎へて、

『それで、何うしたゞ？』

庭の隅にはそれでもまだ黄い豆菊が霜を帶びて殘つて居た。厠の側にある脊の高い南天燭の實や、葉は落ちて實の赤いのが際立つて見える錦木や、枝ばかりになつた柿の木や、さうしたものに日影が鮮かに照つた。畑の大根や菜は青々として居た。

爺さんが羽織を着て出かけて行つた間を、讓はそはそはと落附かないやうに見えた。其姿は緣側の處に見えたり、柿の木の下に見えたり、裏の方に行つたりした。仕事場の戸の少し開いてゐる處に半分頭を入れて、中を覗いて見たりした。其處には藁を打つ石があつて、藁が一杯に散らばつて居た。

堪らなく頭が痛むといふやうに右の拳で後頭部を叩いて居たりした。

晴れやかな明るい光線の漲つた庭の中に、讓の鬚の生えた頭髮の亂れた蒼い顏が際立つて見えた。

元氣な婆さんは、井戸端に盥を持ち出して洗濯を始めた。桔槹の動くのが地上に映る影と共にギイギイ聞えて、やがて水をあける音がした。暫くして讓が其處に行つて見ると、繼の當つた紺足袋と白足袋とが堅く絞つて盥の傍に置いてあつた。婆さんは爺さんの襦袢を洗つて居た。

『忙しいもんだで、洗濯がたまつて。』

などと婆さんは言ひながら、ひゞの切れた手でごし〳〵やつて居た。

時々表の路を人が通つて行つた。『お婆、朝から精が出るね。』かう聲を懸けて通つて行く者もあつた。

婆さんは其處に來て、『くよくよ思はつしやんなよ。』などと言つた。昨夜とは打つて變つて好い天氣であつた。朝日の軒には元氣の好い雀の百囀が聞えた。

『もう一度行つて見ませう。』『朝飯を濟してから讓が言ふと、『なァに、お前さん行くより、爺さんが行つて話してやるとよ。……お前さん、なまじひ行かねえ方が好うかんべ。』婆さんはかう言つて留めた。

讓は朝日の高い暖い緣側に寢ころびながら、矢張そのことを考へて居た。もう終局が近づいたやうにも思はれた。爺さんが行つて話をして來て吳れるにしても、もう再び元の鞘に收まるやうなことはあるまい……かう思ふと町から山を越えて來た昨日と、一夜過ぎた今日との間に夥しい狀態の變化と感情の差違とをかれは認めた。女の心も分明解つたやうな氣がした、焦立つやうな神經の昂奮よりも堪へられない佗しい辛い暗愁を身に覺えながら、讓は緣側の節穴を數へたりして居た。

『爺さんが話して吳れて、此處にお雪を連れて來ても、東京に行く爲めの別れの言葉を述べ得るに過ぎないのだ。別れ……別れの言葉……別れの言葉を述べて他人にならなければならないのだ。他人……に……お雪と自分とが他人に……』かう獨りで繰返して、かれは其の言葉の持つて居る意味を繙つて考へて見た。自分は自分でこの苦痛を何うかしなければならない間に、お雪はその昔の戀人なり誰なりの妻になることが出來る……小鳥の影が障子に移つて枝から枝へと飛んで行つた。讓は長い間身動きもせずに其處に橫になつて居た。

婆さんはこんなことを言つた。

『何ァに、夜だもんだで、薄ッ氣味惡く思つたんべい……明日、己が行つて聞いてやんべい。……東京へ行くに、別れに來たに、逢はせねえッていふ法がねえ。』

爺さんは茶を飮みながら、事もなげに言つて笑つた。暫くしてから、再び仕事場の方に立つて行つた。藁を打つ音がまた聞え出した。

讓は勞れて居た。今日のことは今日、明日のことは明日といふ氣になつて居た。火鉢の火の溫氣と、食慾の飽滿とで、眠氣が頻りに催して來た。婆さんが膳を片附けて其處に來た時には、疊の上に突伏して、半ば眠に落ちて居た。

『もうやすまつしやれ。』

婆さんに起されて、かれは次の六疊に行つた。其處には綿の固くなつた蒲團が敷いてあつた。かれはごろりと橫に倒れて死んだやうになつて熟睡した。

外では雨が音を立てゝ降つて居た。

十一

讓の話は少なからず爺さんや婆さんの同情を惹いた。翌朝、蒼い顏をして讓が緣側に立つて居ると、

ば、何年にも逢はれるか逢はれないか知れないから、一度逢つて、此方の心も話して、別れなけりやならないものなら、止むを得ないから別れるとしても――一度逢ひたいと思つてやつて來たんですが、何う思つたか、危險にでも思つたのか、いくら賴んでも承知して吳れないんです。』讓はかう爺さんに話して聞かせた。

『明日にでもなつたら、向うでも逢はせて吳れるかも知れないから、餘りくよくよ思はない方が好いだ。』人の好い爺さんは、讓のをり〳〵激昂する樣子を見て同情してかう慰めた。

『わしが言つて上げても好いだ――ちやんと譯が分つてゐるんだでな。』爺さんはかうも言つた。

婆さんは其處に夕飯の支度をして持つて來た。大根の味噌汁の臭ひが讓の餓ゑた食慾を刺戟した。菜の漬物、玉子、茶碗には挽割の飯が山盛にしてあつた。

『町の衆にや食へるやうな飯ぢやあんめいが、たんと食つてくらつしやれ。』婆さんはかう言つて勸めた。

平生なら咽喉にも通らないやうな飯も、餓ゑた腹には旨く食へた。三杯までお替りをして讓は箸を置いた。

話がまた續いた。

『精太の處でも餘りだな――あの父さんも解らねえからな。』

んなされ。寒かつたんべい。山はもう寒いだ……さうかな、此頃、達にも逢ひなさつたかな……丈夫で居るだんべいな……この正月には來るッて言つてゐたが、あれも忙しい體だからな。』鐵瓶に觸つて見て、『丸で水だ。少し待ちなされ。今すぐ沸かすで。』かう言つて勝手の方に行かうとした。

『お婆さん、まことに申兼ねるけれど、僕はまだ飯を食はないんだが……』

『飯？　夕飯をな。』驚いたやうに、『飯も食はせないのかな。』

『飯どころか。戸の內にも入れないんですからねえ。』

『それはまァ腹が空いたんべい。何にもありァしねえが、わり飯に漬物位はあるだ。』

やがて婆さんは立つて行つた。勝手で七輪に火を起す氣勢がした。

讓は顏に掌を當てゝ、今夜の活劇を思ひ出さうとするやうに深く深く考へ込んで居た。義兄弟や舅姑達に引かへて、他人の深切をも考へずには居られなかつた。思はず歎息が出た。

仕事場の方で、膝をバタバタと叩く音がしたが、やがて岩乘な脊の高い爺さんが障子をあけて此處に入つて來た。

『今夜は飛んでも無い御厄介をかけまして……』それと見ると、讓は丁寧に挨拶をした。

かれは爺さんを相手に種々な話をした。別れるやうになつて行つた一伍一什、雙方の親達の感情の齟齬、今夜の出來事、最後に東京に行くといふことを事實のやうに話して、『ですから……もう東京に行け

『何故や？　本家さァ泊つたら好かんべいがな。』
『泊める處か、內にも入れて吳れないんだ！』
『お雪の姐、昨日見えたつけがな。』
讓は搔いつまんで其話をした。
たまげたやうな顏をして、婆さんはそれを聞いてゐたが『さうかな、それでかな、お雪の姐の此頃ちよいちよい見えると思つたのは、……ふむ、……さうかな、內にも上げねえ。犬猫のやうにして追かへした。それはさぞ困らつしやつたんべい……』
で、婆さんはまた仕事場の方に行つて、その話をした。低い訥るやうな聲が暫しの間聞えて居た。『わざわざな、來たものを、一日位逢はせたッてよかりさうなもんだにな……この雨の降るのに。』かう言つた婆さんの聲が高く聞えた。
『本家のやうな綺麗の寢道具は無いが、それさへ構はねえけりや、泊つて行くれえ何でもねえだが……』婆さんは其處から出て來てから讓に言つた。
『何うか、一晩泊めて下さい。御恩は忘れませんから。』
讓は蘇つたやうな氣がした。
『やれやれ、えらい眼に逢ひなさつたな。』婆さんは、火鉢の火をかき起しながら『まァ、こつちに寄

それでもまだ返事がない。

『御免なさい！』

漸く奥から誰か出て來る氣勢がした。やがて薄暗いランプを手にして、六十位のお婆さんが姿を現した。障子の破れて居るのが洋燈の光にそれと見えた。

『誰だんべい。』

お婆さんはすつかり忘れて居た。名告つても解らなかつた。頭の髮の毛から全身雨にぬれて立つて居る男をお婆さんは怪訝さうにして見た。

仕事場の方に行つて、

『誰だんべい。菅井ッて……達の友達だッて言ふんだがな。』

藁を打つ音がぱつたり止んだ。『菅井？　あれだんべい、それ、其處の淸太の妹の婿殿だんべい。』

『さうだ……やつと思ひ出した。お雪姐の旦那どんだ……まア上らつしやれ。』

躊躇する場合でもないので、讓は點滴の垂れる外套を脱いで其儘上らうとした。洋燈の光で見ると、足袋も夥しく泥にまみれて居た。で、かれはそれをも脱いだ。

『御迷惑でも今夜一晩泊めて戴く譯には行かないでせうか。』

讓はすぐかう言出した。

闇が一ところ明るくなつて、やがて其處に提灯が見えた。
かれは見つけられまいと、勝手を知つてゐる裏の方から、竹藪の中を通つて、芥溜の傍を拔けて、勝手元のところへと行つた。何うせ今夜は駄目だ。兎に角此處を去らうとかれは決心した。畠から垣を破つて通りへ出た。

雨は繁く降つて來た。腹は空いて居た。體はヘトヘトに疲れて居る。もう何うでも好いといふ氣にもなつた。かれは知人のないこの村で、何處に食を求め、何處に寢る處を求めるかといふことを考へる力もなかつた。かれは闇の中の樹の幹に身を凭せてボンヤリしてゐた。

ふと友達の親類で、里歸りの時の祝宴に列つて居た農家を思ひ出した。かれはその方に足を向けた。

十

藁を打つ音が何處かでして居る。暗黑で道も何もさつぱり解らない闇の中に、ほつつり灯の影が見えた。かれは入口らしい處を漸く搜し當てゝ、案内を乞うた。

藁を打つ音が矢張して居る。

『御免なさい、御免なさい。』

て、默つて耳を聳てた。矢張何の物音も聞えて來ない。しんとしてゐる。

其處の六疊、其次の八疊で里歸りの祝ひをした。親戚達が其處に大勢集つて、酒を飲んだり唄を唄つたりした。忘れもしない、その六疊は其夜二人が寢たところだ。何んなに二人は睦しかつたらう。何んなに二人は樂しい私語に耽つたらう。二人は其夜は終夜目覺めて居た。……お雪は居るに相違ないが、その氣勢位はしさうなものだ。かう思つてかれはまた呼吸を殺して耳を立てた。矢張何の音もしなかつた。時計のセコンドの音が聞えるばかりであつた。

……腹が堪らないほど空いて居た。……とても駄目だ。憎い、憎い女だ……一家鏖殺にして呉れなければ腹が醫えない……覺えて居ろ……屹度この怨はかへして呉れる……かう思ふと、一方では闇の中にかうして立つてゐる自分が馬鹿々々しく思はれる。ふと氣が附くと雨がぽつつりぽつつり降つて來た。

俄かに人聲がしたと思ふと、

『あきらめて歸つたと見える。』

『何處にも居ないか。』

『何處にも居ないやうだ。』

『あゝいふ思詰めた人間は何をするか解らんでな。』

かういふ二三人の會話が聞えた。

譲は拳で涙を拭ひながら下唇を堅く堅く噛んだ。女が憎い……かういふ目に逢はせる女がつくづく憎くなつた。知らないでゐるのか、そんな筈がない。己が來たのを知らないでゐる筈がない。お雪が變心したに相違ない。あの淫婦！

一方ではまた人の情の頼み難いことをつくづくと思ひ當る。義兄と頼んだ人、舅姑と頼んだ人、その人達が婿と呼ばれた男を、たとへどんなことがあらうとも、この掌をかへしたやうな取扱は何事だ。上れとも言はない。遠い山坂を越えて來てさぞ勞れたらうとも言はない。腹が空いて居るだらうとも言はない。只歸れ、歸れとは何事だ。

「もし、もし。」

また呼んで見た。

くゞり戸をがたがた言はせた。

矢張何の返事もなかつた。

かれは猶暫く其處に立つたり蹲踞んだりして居た。ふとお雪の居る氣勢でも聞きたいと思つた。譲は中庭を通つて、こつそり裏の方へと廻つて行つた。

其處に厠がある。其處の雨戸も堅く閉つてゐるが、隙間から灯がちらちら見える。かれは其處に立つ

逢はないと言ふんなら好いですから。』

『それは知らせるけれど。』

『まだ知らせてないんでせう。……一體、親だの兄弟だのが、自分達の家に都合がわるいと言つて、飽きもあかれもせぬ仲を……』

『まァ、そんなことは此處で言はんでも解つてるよ。兎に角、君が遣つて來るといふことが道でないんだ。僕等にしても、君に今此處で、しかも夜、妹に逢はせることは出來ない。』

『兎に角お雪に知らせて下さい。』

堪らなくなつたといふやうに、讓は聲を擧げて泣出した。

沈默が續いた。

兄も默つて立つて居る。

『淸太！』

奧から父親らしい聲で呼ぶ聲がする。

『淸太！　淸太！』

兄は引返して行つた。奧で何か話をする氣勢が續いて聞えた。しかしそれもやがて絕えて跡はしんとなる。

今度出て來たのは總領の兄であつた。この兄は縣廳のある町に出て少しは學問をしたことがあるので、讓とは話も合へば、氣質も合つて居た。

『ヤア、兄さんですか。』讓はわざと砕けて出て、『本當に申譯がないんです……』

『でも君、無理は言はずに、今日は歸つて呉れ給へ。』總領の兄は直截な調子で、『逢はせられるものなら、お互にこんな思ひをしないで逢はせるよ。僕の方だッて困るんだから。』

ふと東京行のことが讓の胸に浮んだので、

『實は兄さんだから言ひますが、僕も東京に行くことになつたんです。彼方に行けば、逢ふことが出來ない。何うかそれまでに一度逢ひたい。そして別れるものなら、綺麗に別れたい。お互に心を殘さずに別れたい。かう思つて親父やお袋には默つて來たんです。何うか、兄さん、一度、僕の兄さんになつた好みで、お雪に逢はせて下さい。鳥渡でも好いですから。』

兄は困つた風で暫く默つて居たが、

『兎に角、今日は親父もお雪も困るッて言ふんだから……それは君には氣の毒だが、今日は溫和しく歸つて呉れ給へ。君も男だ。』

讓はその言葉に少しく激したとい風で、

『ぢや、私の來たことをお雪に知らせて下さい。私がかう遣つて來たことを知らせて下さい。それで

やうな氣がした。絶望に續いて忿怒の情も烈しく起つて來た。しかし一番かれの頭を刺戟したのは、お雪、こひしいお雪に逢ふことが出來ないといふことであつた。

お雪！ お雪！ 憎いお雪！ こひしいお雪！ かれの頭は鼎のやうに亂れた。

風呂の火は靜かに燃えて居た。四邊はしんとして居た。

くゞり戸の一寸位閉め殘してある處にかれはまた顏を寄せて、

『もし、もし。』

かう呼んで見た。返事がなかつた。

讓は歎息を吐いた。

『もし、もし。』

暫くして又呼んで見た。

居ても立つても居られないやうな苛々した氣分と、泣いても喚いても足りないやうな氣分とが混り合つてかれの全身を動搖させた。かれは何うすることも出來ない自分の身を先づ粉韲して了ひたかつた。

風呂の火がチラチラした。

『もし、もし。』

また呼んだ。

に貴方にはお氣の毒でがんすが……』
『逢はして頂く譯には參らんでせうか。』
讓は泣きたいやうな心持を押へて歎願するやうな調子で言つた。
『どうも道でないこんですから。』
『決して危険なことなんぞしやしません。それは僕も悪いんだ。あんなことを乳母の家でしなけりやよかつたんだけれど、ついはずみであんな具合になつて了つたんだから――何うか逢はして貰ひたいものですが。』
『それは駄目ですな。』
讓は困つた風で暫し默つて立つて居た。
『何うか不人情と思はねえで、今夜は歸つて下さい。』かう言つて、兄はくぐり戸を閉めやうとするので、『もし、もし。』
と讓は慌てゝ呼んで、『何うしても逢はせて呉れないでせうか。』
その返事はなかつた。兄の奥に入つて行く足音がした。
讓は戸の傍の壁に凭りかゝつて歎息をついた。最後の絶望！　何うせさうとは思つたが想像したのと事實に打つかつたのとではその絶望の度數が夥しく違つて居た。かれはかれの體が地上深く陷ちて行く

見て、急いで奥に引返して行つた。他の一人の男は輕く挨拶して表へ出て行つて了つた。
奥に引込んだ召使の男は、容易に出て來なかつた。何かごたごたと話をしてゐる氣勢がする。表では讓の胸が烈しく波打つ。一分待つのも長いやうな氣がする。吉か凶か……長い間を置いて漸く出て來たのは、お雪のすぐの兄になる男であつた。氣の毒さうに揉手をして、其處に立つた。『まア、上れ。』とも言はなかつた。
『お雪に逢はせて頂きたいですが。』
讓の方からかう切出すと、
『逢はせねえこともないでがすが……』少し言淀んで、『本當にお氣の毒でがすが――わざわざ遠い處をかうやつて來て下すツたんで、逢はせて上げたいんですがな、逢はせられないやうな行懸りでして……』
『それは知つてるんです。僕がかうやつて來るのが間違つて居るのは、自分でもちやんと承知して知つてるんです。そこを折入つてお願ひに上つたんだが――。』
お雪の兄は氣の毒さうにして、『當り前なら、かうしてわざわざ來て下すつたのを、「上れ。」とも出さないなんて、そんな不人情なことは言はれないんでがんすがな……今も貴方がお出だと言ふんで、親父やお雪とも相談したんですがな……どうか、それは斷つた方が好いと言ふんで……』また揉手をして、『本當

あとはしんとした。

何時までかうして居たッて際限がない。かれは後からある力に推され、前からある力に引かれるやうにして、其家に通ずる路に出て行つた。井戸の傍を通つて、その明るいくゞり戸の前に來てまた立ち留つた。何か賑かに話して居る聲がする。聞くともなしに聞いて居た。と、急にくゞり戸が開いて、またそこから人が出て來た……前に男が立つて居るのを見て、出かけたのを止して、無氣味さうに、

『誰だな――』

讓はどぎまぎして返事もしなかつた。と、其人は半分出し懸けた體を中に入れて、『誰かそこに立つて居るぞな――薄ッ氣味の惡い。』かう今迄話して居た此家の召使の男に言つた。

召使の男は顏を出して見て、

『誰だな――何か用かな。』

『町から來たんだが――誰か兄さんか誰かに……』

讓の聲は顫へた。

『町からッてばかしでは解らねえが、誰だな。』

『町の菅井から來たんだが。』

菅井といふ言葉はすぐ事件の輪廓を鮮やかに男に呑込ませた。闇に微白く出て居る讓の顏をもう一度

かれは暫く立盡して居た。胸がさまざまの考に戰へた。心臟の鼓動が自分にも解るほど高くなつて來た。此處までは何も考へずに遣つて來たが、かうして自分が直接に訪問するといふことは、いかにも突飛であつた。逢はせて吳れるものも逢はせなくなる虞れがあつた。誰か第三者に賴んで話して見て貰ふ方が順序よくもあり便利でもある。しかし此村にはさうした親しい人もない。それに、人賴みでは成功した時は好いが、成功しない時には自分で滿足が出來ない。第三者を仲に立てゝは十分に互に了解することが出來ないからこそ、かうして獨りで出懸けて來たのである。率直に訪問しよう、歎願もして見よう。かう決心はして見ても矢張胸が戰へた。かうした幕を演ずる役者としては讓はまだ餘りに若かつた。

人の足音が聞えた。讓はびつくりして傍の木蔭に身を躱した。それは向うの畠道を人が通つて行くのであつた。讓はほつと呼吸を吐いた。『ちつとも躱れる必要はないぢやないか、馬鹿！』かう自分で自分を罵つた。けれど矢張躊躇せずに居られなかつた。……さうかうして居る中に日が全く暮れた。腹の空いたのを感ずると共に、俄かに寒くもなつて來た。三里の山路に疲れ果てゝも居た。

其家から誰か出て來る氣勢がする。その人は何か高い聲で話しながら出て來た。くゞりを明けた家の中には、風呂の火の赤く燃えてゐるのが鮮やかに見える。讓はその出て來た人にお雪の居るか居ないかを聞いて見ようかと思つて居る中に、その足音はかれの躱れた木蔭の橫を掠めて向うに行つて了つた。

かれはかう思つて、其小刀を取つて、慌て丶懐の中にかくして、そして急いで其處を出た。一二間行くと、一散に驅出して、暫くは足を留めなかつた。其間にもかれは二三度振返つて見た。

少くとも七八町は驅けた。とある岩の角の處に來て漸く足を留めたかれは、手の汗ばむほど堅く握りしめた懐の中の小刀を出して見た。歯の處がいかにも鋭利さうに見えた。これなら何でも出來る。かう思つた。かれは口の邊に凄い會心の笑を浮ばせた。

袂から紙を出して、何だか解らぬやうに、それを包んで、そしてまたそれを懐の中に收めた。

かれは歩いて行つた。

其村に入つた時には、もう日が暮れかけて居た。雲は益々低くなつて、今にも雨が落ちて來さうに思はれた。畑には塵埃を燒く火が處々に燃えて、赤く薄暮の空氣を彩つてゐた。一日仕事に勞れた百姓達は、鋤や鍬をかついで家の方に歸つて行つた。

かれの前には、夕炊の烟に包まれた村が展げられた。白壁だの、樫の垣だの、茅葺屋根だのが見えた。山と山とが迫つて、谷川の瀬の音が身に染みるやうに聞えて來た。

かれは路に熟して居た。村の大通から傍道に入つて、それから少し行つたところが其の家である。青青とした大根や、菜などの畑が其前にあつて、奥に草葺の大きな家屋が一軒ある。半分白く塗つた物置とも土藏ともつかない建物がその右の方にあつた。廣場に面した長い緣側の雨戸はもう閉つて居た。

葉の中に落ちてゐた。

かれは色の褪せた毛布の敷いてある緣臺に仰向に倒れて、長い間默つて煤けた天井を見て居た。婆さんが何か言葉をかけたのをも、溫い茶を其處に持つて來たのをも何も知らずに居た。

頭が絕えずガンガンする。

暫くして身を起したかれは、其處に萎びたきざ柿が五六箇置いてあるのを見た。かれは山坂を越えて來て、いくらか咽喉が乾いて居た。かれはそれを三箇ほど取つて自分の傍に置いた。婆さんは柄のついた切出しを其處に持つて來た。

自分で皮を剝いて、旨さうにして食つたが、ふとその銳利な小刀が氣に懸り出した。『さうだ、こいつを。』と思つて見て、自分で自分の恐ろしい考を起したのに戰慄した。小刀はいかにもよく齒がついてゐた。

裏で誰か婆さんを呼ぶ聲がした。『あんだよ、今行くだよ。』と言つて、婆さんはぐづぐづしてゐた。議は柿の價を聞いて、白銅の銀貨を一つ其處に投出した。そして釣錢は要らないと言つた。婆さんは、『有難う御座りやす、有難う御座りやす。』と幾度も禮を言つて、草履をぺたぺたさせて、呼んでゐる裏の方へ行つた。

『今だ！』

…予は……予は……何も言はない中に、わッといふ聲が嵐のやうに聞える……群集の動くのが眼に見える。……神よ……メシアよ……かれはいつか新しい使命を臨終の場に宣傳する再生の基督になつてゐる……

矛のやうな槍がピカピカと四邊にかゞやく。馬に乘つた異樣な形相をした兵士が列を爲して向うの方を通つて行く。砂烟が黃ろく騰つて、それに反映する黑雲が一種凄じい色を呈してゐる。夕日が死のやうな厭な侘しい光線を投げてゐる……諸君、予が斷頭臺の露と消える光景をよく見ておかれよ……凄じい叫喚が手に取るやうに聞える。死の時刻の來たのを報ずる號砲があたりに響く。斷頭臺が厭な音をして動き出す……

重い苦しい氣分が續いた。氣が附くと、かれは街道から岐れた峠の方への道をたどつて居た。頭がガンガン痛む。お雪の顏が見えては消える。空は全く曇つて、雨になる前の暗い霧が、路傍の葉の落ちた林を罩めた。

峠の上の茶店——お雪と通つた時にいつも休んだ茶店、其處の婆さんは、汚い外套を着て居る讓を、それとは氣が附かずに迎へた。冬になつてからは、近所の村のものが通るばかりで、茶店に休んで行くやうな旅客もなかつた。手が切れるやうに冷たいので夏は評判な前の淸水も、徒らにチョロチョロと落

廣場に芝居の棧敷がかゝつて、田舍の見物がぎつしりそこに詰つてゐた。お雪とかれと並んだ姿は人々の眼を惹いた。『あれが婿どんだとよ。えらいよう似合うた初雛樣だ。』などといふ聲が絕えず二人の耳に入つた。……其時舞臺に出た定九郎や勘平の姿とかれとお雪の並んだ姿とが一緖になつてかれの眼を掠めて通る。ごたごたした雜沓、大きな口を開いて物を食つてゐる百姓、醉ぱらつて成田屋などゝ聲をかける男……いろいろなことが縺れ合つて、こんがらかつて、際限なく浮んでは消え、消えては浮んで來る。

かと思ふと、不思議な空想が果しなく起つて來る。氣が附くと、かれは思ひがけないことを頭に描いて居た。群集を前にした廣場、一段高い處に立つてゐるのは、死刑を宣告された若い一人の靑年である。それはかれである。かれは今死に臨んで一場の告別の言葉を述べようとしてゐる。群集は喚いたり叫んだりしてゐる。手を振り上げてゐるものもあれば、人をつき飛ばして先に出やうとしてゐるものもある。野原のやうな都會のやうな處で、背景には黑い雲が幕のやうに垂れ下つてゐる。集つてゐる人間も日本人ばかりではなく、フランス人もドイツ人もロシア人も居るやうである。かれの一言は滿場の人の血を湧かせるやうなものである。かれの死刑宣告は社會の大事件で、社會はかれに多大な同情を注いで居る。社會を動かした事件でこれほど大きな意味の深い事件はないと思はれて居る。……かれの一言一句は火である、血である。銳利なる刄である。かれの告別の言葉は始まつた……この廣場に集つてゐる諸君、…

、百姓が畑に出て居た。織物を載せた機廻りの車が幾臺も通つて行つた。鷄の群の餌をあさつて居る垣もあれば、新しく建てた家屋の荒壁のまゝで人が住んで居るのもあつた。實を取つたあとの柿の木は枝ばかり際立つて四邊に見えて居た。橋の懸つて居る處もあつた。

お雪との戀が成立つて、此道を歩いた時のことが不思議にも讓にはくり返された。其時はどんなに愉快であつたらう。車で通つたこともあれば、歩いて通つたこともある。忘れもしない、里歸りに峠の下に丁度車がなかつたので、其處からお雪は裾を端折り、自分は尻を捲つて歩いて來たことがあつた。其時、お雪は庇髪に結つて、白いリボンをかけてゐた。何んなに樂しかつたらう。何んなに睦しかつたらう。戀を遂げた極樂境、體と體とが一緒になつて、自分の見るものはお雪も見、お雪の喜ぶものは自分も喜び、自分の指さすものはお雪も指した。丁度四月の末で、山には櫻が白く咲いて、鶯が好い聲で鳴いて居た。讓はそれを文に綴つて東京の雜誌に投書した。雜誌の選者は『里歸りの若い二人の睦じさが眼に見えるやうだ。』といふ批評を添へて翌月の雜誌に載せた。本當に蜜のやうな睦じさであつた。それが一月經つか經たないのに、こんな風になつて行くとは誰が思はう？

それからお雪を初めて見た時のこと、手紙を取交した時のこと、お雪の里の村にお祭があつて一緒に出懸けたこと――さうしたことが絶えず眼の前を繪卷物のやうになつて通つて行つた。鎭守の社の前の

それでも貴樣はおめ〳〵と歸つて來るか。』

かう考へると、かれは苦しくなつた。心臟の鼓動が俄かに高くなつて來た。乳母の家での一活劇が再び繪のやうになつて眼の前にちらついた。

女の心のほども疑はれた。友達が報告して行つた女の不身持が新しい事實となつて簇つて來た。友達の言つたのは手紙をよこしたあの男かも知れない。あの男との關係が切れないで、それであゝして逃げて行つたのかも知れない。肉の關係があつたのかも知れない。かう思ふと、男には解らない、女の淫靡な腐つた心が犇と胸に迫つて來て、天も地も汚い不潔なもので充たされたやうな厭な不愉快なつき詰めた心になる……。

『そんなことはない、お雪はまだそんなに腐つた女ではない。』

考へるのが苦しいので、かれはかう獨りで辯護した。

『存外やさしい心持で逢つて呉れるかも知れない。あの時は申譯がなかつた。ついあゝした行がゝりでしたもんでしたから。かう言つて笑ふかもしれない。』こんな風に思返しても見た。

路は綺麗な谷川に添つて居た。白く泡立つた瀨が見えたりかくれたりした。サアと流るゝ水の音が段々狹くなつて行く谷に反響して聞えた。

近い山の半腹からは、處々の炭燒の煙が曇つた空に低く漂つて居た。
かれは半鐘臺のところまで來て、ほつと呼吸を吐いた。此處まで來れば安心だ。かう思つた。かれは其處に緣側の長い庭の廣い百姓家があつて、一杯になつて晩稻の收穫がひろげて干されてあるのを見た。その隣りの飲食店では、旅客が腰をかけて饂飩を食つて居た。
かれはとある店で朝日を一箇買つた。其處でかれは緩くなりかけた帶を締め直した。

其處からかれの心は全く女の方にのみ向くやうになつた。
『居るには違ひない。』
かう思ひながら歩いた。
『逢はせるだらうか。……尋常では逢はせない。屹度逢はせないに相違ない。……しかし逢はずには置かない。逢はずに歸らない。……何も無理なことを言つて行くのではない。逢つてお雪の心を聞かせて貰ひさへすれば好いのだ。親と親との權力で互の戀を割く、それが心外だ。それでは別れられない。それでお雪の心を聞きに行くのだ。無理なことは少しもない。』
さうしたことをかれは幾度となく心の中で繰返した。『しかしお雪が逢ふか何うか。』時にはかうも考へた。『女の腹が腐つて居て、逢はなかつた時には何うする。……男の一分が立たなかつた時は何うする。

それでも床にだけは入つたが、かれはすぐ其處から出た。かれはさびしい堪へ難い心を抱いて、田圃を通つて暗い町の暗い家の方へと歩いて行つた。

九

ある日の午後、かれの姿は町の大通から裏町へ出て、其處から畠の中の細い道を通つて山の方に通ずる街道へと急いで歩いて行くのが見えた。

お雪が里に歸つて居るといふ報知を今朝かれは確かな人から聞いた。

こんな風にしては別れられない。是非一度女に逢つて心を聞かなければならない。かう思つたかれは此頃家での監督が緩くなつたのを利用して、友達の家に行くと言つて、出かけて來た。

折々日影はさしたが、雲の多い風の寒い日であつた。路傍の萱や薄は枯れてガサガサと音を立てゝ居た。かれは急いだ。唯急いで歩いた。町の甍の後に見える中は、あとから追手でもかゝつて來はしないかと思はれて安心が出來なかつた。

かれの前には砂利の敷いてある路が長くうねうねと續いて居て、その向うには、高い山の下に小さい山が重なり、そのまた下には丘が幾つとなく重なつて起伏して居た。最初の村の樹立の中からは、新しい茅葺屋根だの、高い半鐘臺だのが見えて居た。

生れは山の向うの隣國で、此處に賣られて來る時には、馬に乘つて、さびしい高い峠を越して來た。嚢の窓から雪に光る遠山を見ると、來た當座は故鄕のことが思ひ出されて仕方がなかつたなどゝ其女は讓に話した。

其中不圖したことからお雪と戀に落ちて、かれはすつかり其女のことを忘れて居た。町から少し離れた處にある廓は賑かに灯にかゞやいて居た。三味線や鼓の音が到る處で聞えた。三階の大きな家の一間では、鉢卷をした客の踊つて居る影が鮮かに障子に映つて見えた。兩側に並んでゐる張見世は繪のやうに綺麗であつた。

春駒はもう居なかつた。この秋の初めに、好いお客が出來て引かされて行つたとの話である。その弱々しいやさしい心に縋つてなりとこの醫し難い心を慰めようとした儚い希望――それすら遂げることが出來なかつた。讓は浮かぬ顏をして、佗しさうに坐つて、友達が酒を飮んで、女を傍に引寄せたり、調子外れの聲で唄をうたつたりするのを唯默つて見て居た。

綾衣といふ脊の高い元氣な丸顏の女がかれの相方として出た。『何だか浮かぬ顏をして居るねえ、此方は。』などと言つた。友達が、『綾衣さん、しつかり賴むぜ、その方は失戀して居るんだから。』と言ふと、『失戀！　さうなの、本當に貴郎失戀？　失戀なんか見つともないからおよしなされや。』傍から女達がわいわい囃した。

また幾日か經つた。

落附いた靜かな氣分になつて行くのを家の人達も見た。此頃では以前のやうに、物を言つても返事をしないやうなことはなかつた。

唯さびしさうにして居た。

八

一夜、かれは友達に伴れられて町の遊廓に行つた。

春駒――さういふ女郎が其處に居た。かれがお雪をまだ妻にしない前には度々其の友達と一緒に其處に通つて行つたものであつた。多い其家の女郎の中では、小づくりな、色の白い、華奢な、やさしい女で、初會の時から讓は氣に入つて居た。

本を讀むことが好きで小說や雜誌を持つて行つて遣ると、何を貰つたより喜ぶといふ女であつた。他の女郎のやうに酒を飮んで騷いだり大口を利いたりするやうなことはなかつた。賑かな大勢な女郎の中にいつも獨りさびしさうにしてゐた。

讓は雜誌に載つた自分の詩や文章をよく女に讀んで聞かせた。可哀相な小說の一章を讀んで聞かせたこともあつた。

一年なり二年なり東京に出しては何うだ。かういふ話がその席上に出た。

『それが好い。』

贊成するものも多かつた。

『東京ならよろこんで行くつて言ふかもしれん。』

かう言ふ人もあつた。

父親が一應考へて見るといふことで、その相談の席は濟んだ。それからまた幾日か經つた。ある日、田舍の伯父が遣つて來た。伯父が讓にその話をすることになつた。

『何うだ、お前、そんなにしてぐづぐづして居るより、東京に行つて見る氣はないか。』

かう伯父が言つた。

讓は伯父の顏をぢつと見た。

『お前もあんなに前から行きたがつてゐたんだから、行つて見たら何うだ。行く氣があるなら、己が一つ親父に相談して見てやるがなァ。』

讓は行つても好いやうな行かなくつても好いやうな煮え切らない返事をした。そんなことは何うでもよかつた。

かれは毎晩のやうに夢に魘はれた。そしてそれは大抵刄物を女の肌に當てたやうな夢であつた。白い乳房からは紅い血がだらだらと流れた。その血潮に塗れた女の肌を抱いてかれは泣いた……

『一人、己一人だ！』

夜の臥床に入る時には、かれはいつもお雪を思ひ出した。樂しかつた月日、それはもう過ぎ去つた。紅い房のついた枕に漲つた黑い房々した漆のやうな髮、それはもう其處には居ない。あの髮と、あの肌と、あの肉體とをもう誰れでも自由にすることが出來る！

かれは夜着を被つて欷歔げた。

家の人達は、日數の經つのにつれて、譲の心の段々落附いて行くのを待つて居た。成たけそつとして置くやうにもした。

譲は矢張蒼い神經性の顏をして居た。

十一月でなければ見られないやうな晴れた好い日が續いた。遠い山の頂にはもう雪が白くかゞやいて居た。譲の居間の前には黄い豆菊が一杯に咲いて居た。

家で親類達が寄り集つて、譲の善後策について相談したのは、そのよく晴れた日の一日であつた。何うも女がこの近所に居ては不安心だ。今の樣子ではどんなことでも仕出かさないとも限らない。いつそ

母親は幾度もかう言つて聞かせた。

田舍の伯父も話を聞いてわざわざ出かけて來た。『わしはまた惚れ合つたものなら、東京に行つて暮すも好いと思つたが、女の方から出て行くやうなのでは仕方がない。……いくらも好いのがある。お雪なぞよりもつと綺麗な娘があるから、それを貰つて、見かへてやれ！　男がそんなことにぐちぐちしてゐては仕方がない。』かう半ば慰めるやうに、戒めるやうに言つた。

友達などもそれに同じやうなことを言つて慰めた。ある友達はお雪の町に出て居た頃の不身持などさへ話した。

火事の跡に雨が降つたやうな侘しい日が譲には續いた。激昻の後に絶望の時が來た。かれは誰も心を知つて呉れるもの丶ないのを嘆いた。かれに取つては、お雪の町に居た頃の不身持などは何うでもよいのである。どんなに容色の好い娘があらうと、それに代へられるやうな手輕な苦痛ではないのである。戀人があらうがあるまいが、そんなことは問はないでも好い。お雪の髮、お雪の眼、お雪の肌、お雪の肉體、それがかれにはなくてはならないのだ。未練？　未練が何だ。世の中に笑はれる位は何でもない。男がすたる位は何でもない。お雪さへ自分の傍に居て呉れたら――。

女を憎む心と、女を憐む情と、女を恨む念とが縺れ合つて執念深くかれの胸に附き纏つた。そんなことはないとは知つて居りながら、昨非を悔いて、女が詫びて歸つて來はしないかとも思はれた。

親達の遣つたことが、時を經るに從つて段々讓にも解つて來た。初めから親はお雪を出すつもりで居た。それで嫁の里や、その親類や、その周圍の人達などに對しても、打釋けた親しい態度を取らなかつた。さうでなければ、お雪が伯母の家に遁げた時にも、向うから出て來た親類の人に對して、もう少し溫和な相談をしなければならなかつた。親達は始めからかうなる日の來るのを期待して、二階で暮した二人の二十日間の生活の破綻を待つて居たのだ。家に伴れられて來た時、讓は父親の顏を見て、『勘當した息子は構はないで放つて置いて下さい。』かう叫んだことを思ひ出した。

お雪の里の方の意向も解つて來た。力になつて呉れてやさしいと思つた伯母も、讓を思切らしめるために熱心にお雪を說いた一人であつたといふことも知れて來た。かれ等二人は兩方の家に釀された危險な空氣の中に暢氣に日を送つて居たのであつた。

飽きも飽かれもしない二人の間を兩方の親達が割いた。かう思つたかれは居ても立つても居られないやうな無念を感じた。女も憎い。後姿を見せて慌てゝ驅け込んだ女も憎い。しかしそれよりもさういふ態度にお雪を誘つて行つた奴等が一層憎かつた。『只は置くものか。屹度思ひ知らして呉れる。』かれはかう叫んだ。

『默つて逃げて行くやうな女に未練を殘すものぢやない。』

かしさうに近所の人達に言つた。父親は多くは默つて居た。

讓は以前の六疊の間に起臥して居た。役場の方は病氣屆を出してそれから全く缺勤した。二十日間お雪と生活した二階からは、蒲團やら机やら本箱やらがやがて送り返されて來た。かれは日當りの好い座敷にごろりと横になつて、頰杖をついたり、組んだ手を後頭部に當てたりして、時間の經つて行くのを見詰めて居た。

痛恨、悲憤、忿怒、さうしたものが烈しい力で押寄せて來て、檻の中の獸のやうに暴れ廻つた時のことがあり〳〵と眼の前に見えた。父母をも罵倒した。兄弟をも突飛ばした。歸らぬと言ふのを無理に伴れられて來た時のあばれやうはなかつた。『親の世話になどならない。僕のしたことは僕がする。』かう言つて讓は大道の眞中で嗚咽つた。

かうした狀態に到達したのは、皆な親達が手を下してしたことだ。家に居られないやうにお雪をしたのは誰だ。度々里に逃げて行くやうにしたのは誰だ。親達の氣に入るやうな嫁を迎へなかつたからとて――お袋が心で定めて置いたあのお多福を貰はなかつたとて、それで子はかういふ運命に邂逅せなければならないのか。そんなことがあつて堪るものか。――反抗の念が時としては火のやうに燃えた。

『このうそつき婆！』

かう言つて、かれはそれを振切つて奧に入らうとした。乳母は遣るまいとした。此處に忽ち一場の爭闘が起つた。讓は忽ち鐵拳を振つて乳母の横顏を打つた。『この野郎、打ちやがつたな。』と言つた聲は高く四邊に響いて聞えた。其聲を聞き附けて慌てゝ裏から遣つて來た大工は外套を着た脊の高い男に自分の嬶が引摺られて居るのを見るや、いきなり飛蒐つて、滅茶苦茶に其男に打つてかゝつた。拳と拳とが一しきり空間に行違つた。近所の人々は何事かと急いで飛んで來た。家の前には忽ちにして黑山を築いた。

『よくもうそをつきやがつた。己のお雪を己が捜すのに文句があるか。』絕えずかう呶鳴る讓の蒼い顏は四邊に際立つて凄じく見えた。やがて巡査が劍をチャラつかせて遣つて來た。

群集の中には、『何だ、上町の○屋の息子さんぢやないか。』などと言ふものもあつた。

七

讓は本家から來た人達につれられて父母の家に行つた。かれは再び父母の監督の下に置かれる身となつた。

町では其噂がそれからそれへと傳へられた。新聞にも書かれさうにしたのを、讓の友人達が行つて漸くそれは揉消した。『外聞がわるい。逃げた女房の尻を追つて歩くやうな子を持つて――』かう母親は恥

つたつて仕方がない。一方ではさういふ心の聲もした。奴等ぐるになつて遣つてる仕事かも知れないとも思はれた。それでもかれは電報用紙を一枚貰つて、『オユキイヘデシタ』と書いて、銀貨をチヤラチヤラ音させて頼んで出た。

乳母の家のある横町にやがてかれは入つて行つた。ふと見ると、其の格子戸の前に後姿を見せて立つて居る女がある。紅い袖口が見える。帯が見える。お雪に似てると思ふと、此方を向いた。確かにお雪だ。かれは驅け出した。

此方を見た女は、慌てゝ家の中に姿を躱した。

乳母は矢張居ないと言つた。

『居ないなんて言はせない。今日は騙されない。現に僕は見たんだ。』譲は聲を震はして言つた。

『今、其處に居たのは、あれはお雪さんぢやごわせん。あれは近所の女だが。』乳母は飽までもかくさうとした。

譲は爭つて居る暇がない。蒼い昂奮した顔をして、ヅカヅカ上つて行かうとした。『お前さんも解らねえ衆だナ。居ないと言ふのに、ヅカヅカ人の家に上つて來なさるか。』頑固な乳母は高い聲で呶鳴るやうに言つて、譲の外套を引いた。

譲もかうなつては激さない譯に行かなかつた。

『お早う。』

などと上さんは元氣のいゝ聲をかけた。

客は朝日の袋を袂から出しては吸ひ、出しては吸つた。蒼い心配さうな顏をしてゐるのを上さんは見た。客は吸ひかけた卷煙草を捨てゝ、慌しく通りに出て行つて見たりした。

譲はかうして二時間近く居た。日は段々長けて行つた。かれは自分のして居ることの馬鹿馬鹿しいといふことに氣が附き出した。こんなことをしては居られないやうに思はれて來ると、例の不安が烈しい力で再び頭を擡げ始めた。かれはそゝくさと其處を去つた。

かれの姿は再び町に現はれた。何う考へて見ても、乳母の家に居るとしか思はれなかつた。昨夜の乳母の態度も怪しかつた。一二度は逢つて知つてる間柄だ。何もあんなに冷淡な挨拶をしなくつても好い。……さうだ、確かにさうだ。かれは其方に向つて歩いて行つた。

町の通は明るい日影にかゞやいて居た。國旗がところどころに立てられてあつた。今日は新嘗祭だ。かう思つたかれは、今日の大祭日を何う面白く暮さうかと昨日考へて居たことを思ひ出した。お雪と一緒に何處かに行つて見ようかと思つて居た。一夜の中に俄然として變つて行つたかれの生活をかれは考へずには居られなかつた。この人々の樂しむ晴れた暖かな大祭日をかうして歩いて居る身が情けなかつた。

郵便局の前を通つた時、兎に角里に電報を打つて置かうと思つて、中に入つて行つた。電報なんか打

路傍の林の葉を散らしたり萱原の中の赤い實をあらはに吹いたりするこがらしも、今朝は全く跡を絶つて、丘の麓にある百姓家の煙は靜かに眞直に立ちのぼつてゐた。給のやうな靜けさ！　本當に給からでもなければ味はれないやうな朝の靜けさであつた。其の靜かな平和な朝の道を、譲は騷がしく波立つ心を抱いて彼方に往つたり此方に來たりしてゐた。

町外れから二三町行つた處に、一軒離れて休茶屋があつた。其處の上さんは、外套を着た二十四五の男から、朝早くいろ〳〵なことを聞かれるのを不思議にした。昨日、此處を若い女が一人通つて行かなかつたか。ひさし髮に結つた脊の高い女は通つて行かなかつたか。ことに寄ると、一人ではなく、二人づれであつたかも知れない。かうしたことを何彼ときかれた。上さんは三時頃からならば始終私が此處に出て居たが、さういふ女の人の通るのは見かけなかつたなどと話した。其男は上さんから不思議さうに顏を見られるのが辛さに、『鳥渡其女に話したいことがあるんだが。』などと言譯するやうなことを言つた。

『まアお入んなされや。』

茶代を過分に貰つたので、上さんはかう言つて客に勸めた。柿を盆に載せたりなどして持つて來た。茶も幾度となく湯をかへて來た。

土地の人が通つて行くと、

譲は漸く氣が附いたやうに、『伯母さん、心配かけてすみません……え、私がじます、私が着改へます。』かう言つて帶を解いて、手ばしこく寢衣を着て、轉がるやうに蒲團の中に身を入れた。

『それぢや本當に氣を落付けてお休みなさいよ。明日になりや、私も一緒に捜して上げるから。』やさしい伯母さんは、譲の顔を覗くやうにして言つて、寒くないやうに搔卷を叩いて、そして階下に下りて行つた。

その足音の消えて行くのを待つて、仰向に寢反を打つた譲の眼は、猶暫くの間大きく鋭く明いて居た。その眼は薄暗いランプの光に照された天井をぢつと見詰めて居た。夜はしんとしてゐる。通りを行く人の足音ももう聞えなかつた。やがて深い深い嘆息の音が聞えた。幾度となく寢反りを打つ氣勢もした。『馬鹿な奴だ！』と言つた言葉の中には、辛い苦しいあきらめられない男性の苦悶が名殘なく現はれて居た。譲は今一度起きて、蒲團の上に坐つて、長い間ぢつと空間を見詰めて居た。

六

山の方に通ふ街道は、町の中頃から分れて、田だの、畑だの、小川だののある野を横ぎつて、遠くうねくと續いて居た。機廻りの車が通つたり早立の旅客が脚半ばきで通つて行つたりした。朝日は晴れた晩秋の山々に美しい光線を漲らした。

讓の眼の前には、二十日間お雪と一緒に暮した室が依然としてあつた。お雪の坐つてゐた火鉢の前の座蒲團、お雪が昨日默つて裏の畑から折つて來て生けた菊の花、衣紋竹にその人の姿そのまゝにかけてある不斷着、――お雪はまだ其處に居て、鳥渡便所か何かに階下に下りて、いつものやさしい小刻みな足音を立てゝトントン上つて來はしないかと思はれた。機嫌の惡い默つたお雪の顏、伯父の家に行つての歸り途の月夜、橋の上に立つての久し振の感興、それが今に比べていかに離れた事實、いかに離れた心持をかれに與へたか。

其間には百年の年月も經たなければ味はれないやうな相違した寂しさが横つて居た。

外套も脱がずに其處に棒立に立つてゐる讓を見て、『讓さん今日は寢る方が好いよ。明日になれば私も一緒になつてさがして上げるから……さあ、休む方が好い。』伯母さんはかう言つて、其處に積上げてある蒲團を敷いて、

『さァ本當に休む方が好い。今夜は遲いんだから。』

『え、寢ます。』

かう言つたまゝ讓はまだ立つてゐた。

『本當にさ……明日になりや分りますよ。お雪は身を躱したつて何處に躱れることが出來るもんですか。よく解るから。』伯母は無理に讓に外套を脱がせて、傍にある寢衣に着物を着改へさせようとした。

お雪と別れる?　そんなことが出來るか。かれは遂に、掌を顔に當てて泣き出した。

かれは何う町の通を歩いたか自分でも分らなかつた。其處等には灯が見えたり、人が通つたりした。月は依然として通の家並の屋根を黑く地上に落して居た。ふと三味線の音が耳に入つたので氣が附くと、其處を折れ曲つた細い通に軒燈が賑かに點いて居るのが見えた。灯の明るくかゞやいた二階には女の騒ぐ聲も聞えた。『こゝは新町だ。己は何處を何う歩いてこんな處に來たんだ。』かれはかう言つて、其處から引返した。

『よし、明日、里に歸る途中でつかまへて吳れる。』

かれが歸つて來た時には、もう夜が十二時を過ぎて居た。

あんな置手紙をしたが、思ひかへして歸つて來たから、何うか堪忍して下さい。かう言つて歸つて居やしまいか。かうした願ひも儚ないあだなる願ひであつた。主人夫婦は心配さうなしかし眠むさうな顔をして火鉢に對して坐つて居た。

伯母さんは何か二言三言言葉をかけた。しかしかれにはそれが何を言つたのだか耳に入らなかつた。

伯母はかれの跡からランプを持つて二階に上つて來た。『分りませんか、――困つた子だねえ。何とか一言位相談して吳れても好いのだのに……』

かう言ひながら、讓の蒼い顔を無氣味さうにして見た。

でせうか。』

『それやもう參つて居さへすりや――』

居るやうにも思はれゝば、居ないやうにも思はれた。で、讓は暫く其處に立つて居た。

『もう歸つて居さつしやるかも知れねえ。』

乳母はこんなことをも言つた。

いつまで其處に立つて居ても仕方がなかつた。で、讓は、『ねた處を起してお氣の毒でした。來たら教へて下さい。』かう賴んで置いて其處を離れた。

月の明るい夜更の町をかれは醉漢のやうにして步いた。何處に行つた？　他に行く處がない。あの手紙を寄越した男の處？　かう思ふと、全身に燃えるやうな血が流れた。『搜し出さないで置くものか。』かれは拳を握つてかう叫んだ。

ふとまた思附いた。『乳母の家に居るんだ！　確かに居るに相違ない。男の處に行つたとは思はれない。そんな深い交情だとはあの手紙では思はれない。あの乳母め、確かにお雪をかくしてゐる！　それに違ひない。』かう思つてまた二三間取つて返した。『駄目だ！　駄目だ！　行つたつて駄目だ！』――再び立留つたかれは聲を擧げて泣きたいほどであつた。

遠くでは犬が吠えた。

『御免なさい。』

それを少くとも五六遍繰返した。漸く奥で返事がした。

戸を明ける前に、『何方ですか。』

『菅井ですが。』

やがて前の戸を細目に明けたのは、その乳母である。

『お雪はこちらに參つてゐないでせうか。』

『え、參つて居りません。』

『晝間出たつ切り戻つて來ないんですがな――』

『參つて居りませんがな――それはまア、何うしたつて言ふことでせう。ひよつとすると、お里の方にでも――』かう言つて『でも、默つてお出やるといふことは――何うしたこんでせう。』

讓は困つた顔をして立つて居た。

『まア、こちらにお入んなされや。』

かういふ乳母の言葉の跡について、

『本當に來て居ないんでせうか。もし來てゐるなら、鳥渡でも好いから逢はせて呉れる譯には行かん

『え、鳥渡お見えになりました。』
『何時頃でした？』
『さうで御座いますね。』また奥の方を見て、『四時頃で御座いました。娘と鳥渡話してお歸りになりました。――何うかなさいましたんですか？』
『え――少し用事が――ではまた。』
讓はソヽクサと戸外へ出て了つた。顏を見られるのが辛いのであつた。二歩三歩歩いて、『娘に會つて聞いて見やうかしらん。』かう考へたが、『何うせ駄目だ！』と頭を振つて、通の方へとすたすたと歩いて行つた。
今一軒――お雪の乳母の家がある。それは場末の大工の上さんになつて居た。お雪と一緒に一度行つて見たことがある。無論今日は町の内に居るに相違ない。三里もある里――其處には俥も通はない――其處に歸る譯がない。さうだ、無論町の中に居る。搜し出さないでは置かない。かう思ふと元氣が出た。
その大工の家に曲る横町の處に來ると、かれの胸はまた早鐘をつくやうに騷ぎ出した。かれはお雪が其處に居て、兎に角かれに逢つて呉れるのを望んだ。結果は何うなつても構はない、兎に角其處に居て逢つて呉れさへすれば好い。大工の家では戸がもうピッシャリ閉つて、二階も全く暗くなつてゐた。隙間を洩れて來る灯も見えず、唯月が屋根の黑い影を地上に映し出してゐるばかりである。

『本當ともねえ、虚言を言つたつて仕方がないぢやないかね。』

譲は默つて考へて居たが、『嘘だ、嘘だ、伯母さん達が寄つてたかつて、かういふことにして了つたんだ。僕が親から離れたもんだから、役場の安官員になつて了つたものだから……。』かう言つて、手紙をビリビリと引裂いて、戸外に出て行つた。

その石町の八百屋の角では、月が好いので、町の若い衆だちが、娘子供と何か言つて騷いでゐた。八百屋の店には、マントルをつけた瓦斯が青く美しく柿だのバナヽだの野菜物などを照してゐた。子供達は『かげやどうろくじ』を遣つて遊んでゐた。しもた屋の格子戸の中には、ランプが明るく障子に映つてゐた。笑聲も聞えた。あんな手紙を置いて行つて、わざと自分を調戯つて見る積ではなかつたか。お雪は譲の此處に來るのを待設けてゐるのではなかつたか。かう思つて、譲は暫し其處に立留つて、家内の話聲に耳を欹てた。笑聲がまた聞えた。お雪の笑聲もそれに交つて居るやうにも思はれた。かれはガラガラと格子戸を明けて案内を乞うた。

『菅井ですが、もしやお雪は參つてはをりはしますまいか。』

ランプを持つて出て來た中年増の女は、譲の顏を見て、鳥渡會釋をしたが、奥の方を見てから、『先程入らつしやいましたけれども、ぢきにお歸りになりまして御座いますが――』

『參るには參つたんですか。』

『まア、それぢや本當に出て行つたのかねえ。さつき三時頃、伯母さん鳥渡お友達の處に行つて來るッて、あの銘仙の着物を着て出かけて行つたから、私はそんなことゝはちつとも知らずに、遲いことだ。何うしたんだらう。久し振でお友達に逢つて、話がもてゝ遲いのだらうとばかし思つて居たのにねえ。呆れた子だねえ、まア。』

本當に知らない伯母は、かう言ふより他に仕方がなかつた。

『本當ですかえ？　伯母さん。本當に知らないんですかえ。伯母さん？』かう言つたが、讓は痛恨に堪へざるものゝやうに、『僕の心持が解らんのかなア。これほど思つてゐる僕の心持が解らんのかなア。馬鹿、馬鹿、馬鹿な奴だ。』

『まア、讓さん、そんなに言つたッて出來たことは仕方がない、今少し落附いて話をなさいよ――』

伯母はかう言つて、倒れようとする讓の體を支へた。

『己のこの心が解らんかなア。』もう一度繰返して言つて、『伯母さん、その友達の家ッて言ふのは何處です？』

『それは石町の八百屋の角を奧に入つたしもた屋の娘――其處に行つたんだとばかり思つてゐたんだがねえ、私は――』

『本當に何とも言置いて行かなかつたんですか。』

んな筈がない。かう思つたかれはすぐ階下に下りて行つた。

『伯母さん、お雪が家出した。』

『え――』

伯母は驚いた顏をした。

『伯母さん、何處に遣つたんです。後生ですから敎へて下さい。歸るんなら、歸るんで好う御座んす。緣も切ります。けれどこんなことは出來ない。こんなことをしては別れられない。伯母さん後生ですからお雪の居る處を敎へて下さい。』

『まァ、氣を落附けなさいよ、讓さん。』伯母はかう言つて置いて、『本當にあの子は何處かに行つたのかしら、烏渡、お友達の處まで行くッて言つて出て行つたんだがねえ。』

『伯母さん、そんなことを言はずに敎へて下さい。後生ですから敎へて下さい。』

『だつて、私、ちつとも知らないんだもの……まァ本當に、あの子は出て行つたのかしら?……讓さん、何うしてそれが解つたんだえ?』

讓は手紙を見せて、

『此處にはかう書いてあるけれど、伯母さんは知らない筈はない。そんな筈はない。何うか敎へて下さい。』

五

家に歸つて見ると、お雪が居ない。

机の上には、置手紙がしてある。それにはかう書いてある。

――いろいろお世話になりました。私は考へに考へた上、御暇を戴く方が、貴方のお爲めだと存じまして、今日永のお別れを致します。實はお話をしてからと存じましたけれど、とても御ゆるしがないと思つて默つて家出します。伯母さんにも話してありません。また里にも歸りません。何うか私の跡をさがさずに置いて下さい。

私が居なければ、自然お父さんの勘當も許りることゝ存じます――好い奥さんを持つて幸福に暮して下さいまし。

雪より

ゆづる様

かれは思はず跳り上つた。眼に映つた文字を疑つて今一度見返した。矢張お雪の字である。かれは天と地とが倒さになつたやうな氣がした。「馬鹿な奴だ！」と叫んで下唇を嚙んだ。

猛然として起つて來たのは、伯母のさし金だといふことである。伯母に話してない。嘘だ。嘘だ。そ

讓は東京に行くだけの準備をしようと决心した。一月暮す金さへあれば好い。かう思つた。實行に取懸らうとすると、いろいろな不安やら疑惑やらが起つて常にそれを躊躇させた。一日二日はかうしてまた經つて行つた。かれは遂に决心した。かれが一番先に行つたのは、つい一里ほど離れた伯父の家であつた。百姓をする伯父の家では、收穫に忙がしい頃であつた。伯父も家族の人達も一緒になつて働いて居た。『よく來た。よく來た。』かう言つて伯父は畠から上つて來た。二人のことなども心配して聞いて呉れた。やさしい伯父は、讓の話出したことを『好い思ひ立ち』だと言つて、『それは親父に話して見る方が好い。お前が話せないなら己が話してやる。』かう言つて呉れた。忙しい中で饂飩など打つて御馳走して呉れた。

歸途は月の明るい夜であつた。近い山と山との間には、小さな谷川が流れてゐた。月はそれにキラキラと美しく碎けた。野にはまだ働いて居る人達もあつた。讓は久し振で昔の若々しい心にかへつたやうな人であつた。東京、そこにかれはお雪を置いて考へながら歩いた。何んな艱難とでも戰はう。何んな飢餓とでも戰はう。かう思つたかれの脈には、生々とした力強い血が流れた。お雪さへ居たら――お雪の莞爾した顏さへあつたら何んなことでも出來る。かれの前には新しい人生が開けたやうな氣がした。

かれは谷川に架つて居る橋を此方から向うに渡つた。肌にしみ透るやうな鮮かな水の音が聞えた。靜かな靜かな自然！　思はず橋の上に立留つたかれの眼からは涙が流れた。

あるか解らないが、別にこれと言つて大したことでもないやうにも思はれた。お訪ねくだ……其處を讓はいろいろに考へた。

日が暮れて了つた中に、机の前に坐つて頰に兩手を當てた讓の姿がいつまでも黑く見えて居た。

お雪の眼は翌日まで赤くなつて居た。

二人は何も言はなかつた。讓は何方かと言へば機嫌を取るやうな樣子を見せて居た。お雪は默つて朝飯の支度に取かゝつた。朝飯も二人は默つて食つた。

その頃お雪は體が汚れて居た。汚れてゐると言つた。夜も二人は床を別々に敷いて寢た。

お雪を伴れて東京に行かう。讓はかう決心した。

自分の家の父母、お雪の里、お雪の伯母、此間のやうな手紙を寄越すお雪の昔の友達——さういふものからお雪を自由にしなければ、かれは落附いて生きて居られなかつた。お雪にしてもさうだ。誘惑の多い女の身にしては一層かういふ境遇に居るのが、心を迷はせる種となるらしい。東京に行つての生活の辛いのはかれは知つてゐる。運が悪いと路頭に迷はなければならない。しかしそれよりも今の生活が一層悪い。

譲は立つたまゝ、暫しお雪の方を見て居たが『馬鹿！』ともう一度言つて、そして机の前に坐つた。
女の泣聲は猶續いて居たが、やがてそれが段々欷歔になつて行つた。
『お前さん方、まァ、何うしたッて言ふんだえ？』
伯母さんはかう言つたが、何うすることも出來なかつた。

男の握つた一片は、その長い手紙の丁度中頃とも思はれるもので、次のやうに書いてあつた。男の手跡だッた。

……貴女の不幸福は貴女の心より起りしことにて、今更、何とも申上ぐること出來ず候、御同情申上候より他に言葉は無御座候、しかし今更いろいろにお考へなされ候ふても詮なく、夫を大切になさるより他無仕方と存候、困難は人生の常に有之、小生などのこと御考へ下され候はゞ思ひ半ばに過ぎ候ふことに存候。
小生は田舍のさびしき處にて子供を相手にさびしき日を送り居候、最早當年の希望も水の泡と相成り、かうにしかならぬ身とあきらめ居候――これも貴孃の爲めと存候、一時は身も世もなきやうに思ひ候ひしも今にては大分落附き申候、御訪ねくだ………
これできれて居た。丁寧な文句で書いてあつた。中途で切れて居るのであとにはどんなことが書いて

『あれ――』

と言ふお雪の聲が聞えたと思ふと、長い手紙が男の手にあつた。女は白い手を延してそれを取らうとした。そこにまた暫し爭鬪が續いた。女は一生懸命になつて男の手に武者ぶりついた。長い手紙は三つにも四つにも扯き裂かれた。男はその一片を確實に握つた。

二階の爭ひの音を聞きつけて、伯母さんが上つて來た時には、お雪は打伏になつて欷歔げて居た。男は薄暮の光の中に立つたまゝセイセイ呼吸をきらしてゐた。

『また夫婦喧嘩かえ。』

かう言つた伯母さんは、先づお雪の傍に行つて、其樣子を聞かうとした。

『伯母さん、投つて置いて下さい……あんまりだから。』

お雪は猶欷歔げた。

『何方があんまりだ、馬鹿！』

譲も激して居た。

長い間こらへて居た悲哀が一時に胸にこみ上げて來たと言ふやうに、ヒイヒイいふ女の泣聲が暫し四邊に聞えてゐた。

伯母も呆れて立つて居た。

了つた。

女の機嫌を取るにも取られない。自分で決心することも出來ない、意味のない不愉快な今の生活を辿つて行くより他仕方がないといふやうな日が續いた。前途に起つて來るのは雨か風かそれとも晴か、それはかれ自身にも解らないが、しかしいづれは何等かの現象を呈するには相違ないやうにかれには思はれた。

かれは不愉快な神經性な顏をして日毎に役場への路を歩いて行つた。

ある夕暮、お雪が竊かに手紙を隱したのを讓は見た。確かに見た。

『何處から來た手紙だ？』

『…………』

『お見せ。』

お雪は默つて階下に下りようとした。

『お見せッたら、見せないか。』

かう言つて、讓は後からお雪の胸を抱いて、帶の處に手を遣つた。其處に手紙をかくしたのを讓は見たのである。お雪はそれを取られては大變と言つたやうに、一生懸命になつて男の手を撐へた。取らう取られまいとする爭鬪が暫し續いた。

何うかすると、お雪が眼を赤く泣腫してゐることがある。いつもなら心配して何の彼のと慰めてやるのだが、その事があつてからは、虚僞の涙！　不安の涙！　不平の涙！　すぐかういふ風に取つて了ふ。何が悲しくつて泣いてゐるんだ！　何が辛くつてそんなに眼を赤くしてゐるんだ！　男の心も知らないで——すぐかういふ風に自分の身に引寄せて考へる。『そんなに悲しいなら、何うでもしろ。』『こんな風に捨鉢にも考へる。

時には何も彼も捨てゝ、新規蒔直しとしやうかとも思ふ。お雪に逢はなかつた前、お雪を妻にしなかつた前、その生活は何んなに生々として居つたらう？　何んなに活氣に富んで居つたらう？　其頃にはかうして田舍になどぐづぐづして居る氣はなかつた。東京！　東京！　とばかり心が動いて居た。何うにかして機會を搜し出して都會に出ようとばかり思つて居た。かれは棚の上に塵埃に埋れてゐる書籍を思出した。自分の文章に加へられた希望に富んだ批評を思ひ出した。花々しい一小成功者！　かれは其頃その得意な姿を夢に見た。それから比べると、今の狀態は？　今の離れやうは？　毎日てくてく役場に通つて行つて、戶籍の臺帳やら筆記の寫し物やらに齷齪して、くだらぬ話に笑ひ興じて、歸つて來ては女の動搖した心に頭腦を勞らしてゐる。これが二年前の菅井讓と同じ人間か。『いつそ破壞して了はう。新しい自分の生活を打建てよう。』かう思つて斷乎とした決心をして見る。しかしそれがいつでも一時間と續いて居ることはなかつた。お雪——その可愛いお雪に別れる！　かう考へると、それが忽ち鈍つて

た。お雪を離しての生活をかれは考へて見ることが出來なかつた。時には、『何うか、さういふ考を起すのだけはよして呉れ、お前の爲めには何んなことでもするから。お前の前に手を突いて謝ることでも何でもするから。』といふやうな消極的な氣分にもなつて居た。

自分の心、自分の言葉、自分の態度が女の心持に合はないのが自分にも腹立しいほど情けなかつた。で、かれはお雪の機嫌を取るやうな言葉のつかひ方をしたり、態度をしたりした。わざと笑つても見せた。戯談をも言つて見せた。

それに譲に取つては、親まで捨てゝ、揚句にお雪に捨てられるやうなことがあつては、それこそ男としての一分が立たないといふ腹もあつた。——二階には同じやうに日が照つたり、雨が降つたりした。畑に咲いてゐるコスモスの花が夕日に榮えて繪のやうに見えた。

勉めて其心を靜かにしやう、つとめて平氣で居やう。かう思ふこともある。まだ起りもしないことに取越苦勞をしたツて仕方がない。かうも思ふ。それに、お雪の身になつても心細いに相違ない。家に居る時と今とは身分が違ふ、生活が違ふ。これから何うかして生活の方法を立てなければならない身だ。少しは女の心も察してやらなければならない。かうも思ふ。けれどさうした考はいつも自分の苦しいつらい情けないのに引寄せられて了ふ。で、ついイライラする。默つて蒼い顔をしてゐる。神經の昂奮したやうな態度を伯母だのお雪だのについ見せて了ふことになる。

『實は讓さんにも話さうと思つて居たんだけれど……まだ話すほどのことでもないと思つて默つて居たんですよ。此間、兄の方から手紙が來て、籍もまだ行つて居ないのではあるし、お互に若い身の上ではあるし、お雪の爲めに親御との間を割くといふのも具合がわるいから、二人が承知なら、無いものとあきらめて歸して貰ふやうにしたいと言つて來たんだが……』

『籍、籍ッて言ひますけど、お雪は正當な私の妻です！』

讓の聲は高かつた。

『さうですとも——さうの位ありはしない。だから讓さんに話さないで何うの彼うのと言ふのではないんだよ。鳥渡其の話をしたばかりですよ。』

『それでお雪は何うなんです。そんな話を默つて聞いてゐたんですか？』

『默つて聞いて居るも居ないもないんですよ。唯、さういふ話をしたばかりですよ。』

話はそれぎりでおしまひになつた。

四

讓は絶えず苛々して居た。此頃では血色もよくなかつた。お雪の心は常に疑惑の恐ろしい種をかれの胸に蒔いた。お雪と別れる！　それを考へると心臟の鼓動が高くなるほどかれの心は女の方に偏つて居

『此間、お前は籍のことで何か伯母さんと話して居たらう。』

三日目の朝、堪らなくなつて、讓はかう言出した。

かれはぢつとお雪の顏を見た。

『いゝえ。』

お雪の顏は赤くなつた。

『虛言を言はないで、話して呉れ。』

『いゝえ、そんな話はしません。』

『本當にしないのかえ。』

『…………』

『したッて好いよ。したッて惡いッて言ひやしないよ。しかし、僕の心も少しは考へて呉れるだらう？』

お雪は默つて了つた。

『それぢや己は伯母さんを呼んで來る、こんな生活――こんな虛僞な生活に甘んじては居られない。』

かう言つて、讓はトントン音を立てゝ階子を下りて行つた。

伯母さんはやがて伴れられて來た。『さういふ譯ぢやないんだよ。』伯母さんは困つたやうな風で靜かな調子で話し出した。

らお雪を本當に家に入れる積りはなかつたのだといふことが今になつて始めて分明と解つて來た。それと共に、籍のまだ入つて居ないお雪と自分との關係が甚だ覺束ないやうに思はれ出して來た。

其時、お雪と伯母とは確かに籍のことを話して居た。『まだ籍も入つて居ないんだからねえ。』かう言つて、それから伯母が何か言ひ出さうとする處に讓は其姿を顯はしたのである。と、二人は言ひ合せたやうに狼狽てゝ話をやめて了つた……。

尠くともそれから二日ほど讓は默つてお雪のするさまを見て居た。お雪は常よりも一層沈默の淵に墜ちて居た。點頭きもしなければ笑ひもしない。讓の命ずることは默つてした。夜は脊中を其方に向けて話相手にならうともしなかつた。

其二日間は雨がびしよびしよと降つた。灰色の雲が隙間もなく空を蔽ひ包んだ。かれはそれでも傘をさして役場に出かけた。と、ゆくりなく途中で角を此方に曲つて來る妹に邂逅した。妹は知らぬ風をして、其儘すれ違つて行つた。『妹！　現在肉を分けた妹にも見放された！』かう思つてかれは下唇を噛んだ。

暴風のやうな心持に惱まされて居た。これほど思ふ心の萬分の一も知らないで、スヤスヤと寢て居る女が憎い。『貴樣の爲めには親をも捨てた。兄弟をも捨てた。財產も名譽も捨てた。それも知らないで、里に歸ることなどを考へて居やがる。』かう思つてかれは夜中に跳ね起きて床の上に坐つてゐた。

『怪しいものだよ。家でも手古摺つてゐるらしいよ。』

『さうだらうねえ。お雪さんは綺麗だけど……菅井が惚れてゐるほど、お雪さんは菅井に惚れて居ないんだらう。』

『それはさうだ。僕等が行つて見てもわかる。』

讓の周圍の人達は、二人についていろいろな噂をした。二人の生活は人々に好奇の情を起させるに十分であつた。

讓は時々眞面目に考へ込むやうになつた。二階の一間にも晴れた日ばかりつゞいては居なかつた。雨が降つたり、風が吹いたりした。障子がぴつしやり閉め切つてある時もあつた。

伯母とお雪の里と、それが讓の心にある暗い影を投げて行つた。さうした考は以前にも起らぬことはなかつたけれど、此間、ふと伯母とお雪と何か頻りに話して居るところに歸つて來た時ほど鮮かに其の暗い影を意識したことはなかつた。『何を話して居たんだえ？』『別に何も……』簡單な會話で其時は濟んで了つたけれど、それから讓は注意してお雪の擧動を見るやうになつた。

お雪の籍はまだ入つて居なかつた。それも讓に不安な心を起させた。お雪の里から籍のことを度々父母に言つて來た。父母は其度毎に何の彼のと言つて成たけそれを延すやうにしてゐた。父母には其頃か

などと言つた。

其男は其時一緒に來た友達に、『お雪さんといふ女ね、あれは不思議な女だよ。菅井の處に來ぬ前に戀人があつてね、大分深い交情だつて言ふ話を聞いたことがあるんだ。よくあゝして一緒に居るね。』

『さうかね、そんなことがあるのかね。』それを聞いた友達はかう言つて、

『それで、今その男は何うしてるんだ。』

『矢張、在の小學校の先生をしてるがね。今でも手紙位往復してるんぢやないかと思ふんだけれど……』

『そんなことはないだらう。』

『いや、何とも解らんよ。あの女はあゝ見えてあれで中々評判だつたんだからねえ。容色が好い女は、何うしたッて、さういふことになる！』

『さうかなア。』

考へるやうにして其友達は言つた。

ある友達はまた次のやうなことを話し合つた。

『菅井は納りかへつてゐるぢやないか。』

『あれで長く續くかね。』

『お酒を少し買つて來いつて言ひますから。』

『酒を飲むの？』

此處では酒を飲むものになかつた。主人は酒の匂ひを嗅いだだけでも醉ふといふ方の人であつた。伯母は酒粕も食はなかつた。

『家には德利なんかあるか何うだか。』伯母はかう言ひながら、戸棚の奧を彼方此方とさがして、漸く埃に埋れた燗德利を一本取出した。『これはいつか兄が燗德利に盃位なくつちやつて置いて行つたんだけれど……使つたことなんかありやしない。』かう言ひながら流し元に行つて、それを洗つて、お雪にわたした。お雪は近い酒屋に酒を買ひに行つた。

時には友達などが訪ねて來ることもあつた。『菅井があの戀女房と別居してるさうだ。』などと言つて遣つて來た。一緒に雜誌に投書してゐた友達が來た時には、話がいつもはずんだ。お雪が傍で見て居ても面白さうであつた。

大福などを袂から出すものなどもあつた。ある友達は、親と子との關係を盛に議論して行つた。『本當だとも、親の嫁ぢやない、子の妻だ。今の親達は干渉ばかりして仕方がない。』こんなことをも言つた。

此處に來る友達の中で、お雪のことをかなり詳しく知つて居るものもあつた。それはこの町の在に住んで居る小學校の教師であつた。お雪も其男を知つて居た。『まア香取さんですね、お久振ですこと！』

があと仕舞の釜を洗つて居た。

瀬戸の丸い火鉢を室の片隅に置いて、そこに伯母から借りた鐵瓶をかけて置いた。水さしは大きな土瓶で間に合せて居る。其二階には三尺の半押入しかないので、蒲團は半ば室の隅に積まれてあつた。小さな机の上には、新聞や雜誌が一杯に散らばつて、硯箱は蓋をしたまゝ、幾日にもつかつたことはなかつた。午後の日影は、裁縫箱だの、紅絹の片だの、新聞だの、物尺だのゝ一面に散らばつた一間を明るく照した。

讓は歸りに牛肉などを買つて來た。『おい今日は御馳走がある。』などと言つて、風呂敷の中から竹の皮包を出したりした。讓が七輪の火を煽ぐと、お雪は駈出して行つて自分で葱を買つて來てそれを俎板で細かく切つた。小さい茶湯臺の上に置いた目ざるの中には、燒豆腐だの、絲こんだの、馬鈴薯だのがごたごた入つてゐて、鍋から騰る湯氣は薄暗くなる空氣の中にぱつと白く立つて居た。樂しさうな讓の顏が其中に見えた。

ある夕暮、お雪は下りて來て、

『をばさん、徳利がありますか？』

『何うするの？　徳利なんか。』

間から隱さうとしてゐるといふ話を耳にした。

それでも一度讓は町長の家から呼ばれたことがある。果して問題が起つたと見える。かう思つてかれは其家を訪問した。しかしそれは案外であつた。町長は自分一己の了簡で、讓からその話を聞かうとしたに止まつて居た。『はア、さうですか……しかしお父樣を怒らせても仕方がない。それにこれから細君と一緒に居やうと思ふなら、猶更父母の機嫌を取つて置かなければならない。親を粗末にしては此方に道理があつたつて何だつて駄目ですからね……私も機會を見て、お父さんにお詫をして上げるやうにしますから、君もそのつもりで居なくつてはいけません。』かうした和らかな物の解つた意見をされて、讓は歸つて來た。

二階では夫婦と言ふよりは戀人同士と言つたやうな生活が續いた。

伯母さんに世話をかけるのは氣の毒だと言ふので、土鍋やら七輪やら茶道具やらを買つて來た。『それぢや御飯だけ一緒に交ぜさせて下さい。土鍋の御飯はおいしくないから。』お雪はこんなことを言つて伯母に賴んだ。

『私も勝手元をしますから。』

かうお雪は伯母に言つた。けれどお雪の起きる時分には、いつももう朝日が窓に當つて、下では伯母

はりのものを荷車に載せて届けて來た。

お雪の里の方にもやがて其話が知れた。お雪の兄が心配して出て來て、形式だけでも媒妁に立つた人に賴んで先方へ行つて話をして貰ふことにした。其の時兄も一緒に行つて、頭を下げて、お雪の爲めに重々その我儘であつたことを謝した。しかし讓の父母は容易に解けなかつた。成行にまかせるより他に仕方がない。わざわざ出て來た兄はその翌日かう言つて山の方に歸つて行つた。

讓の父母にしても、その親類の人達にしても、矢張自然に任せて置くより他仕方がないと思つた。

『あの讓の氣違ひは無理をすると、何んなことをするか解りやしない。あの女にすつかり騙されて居るんだから、それが覺めるのを待つより他に仕方がない……なァに、ぢき覺めるよ。』などと讓の伯父に當る人は父親に言つた。

讓はそれでも毎日役場に出掛けて行つた。役場の人達はぢきその話を耳にしたが、しかし誰も面と向つてそれを聞き糺さうともしなかつた。いつもと同じやうな仕事をして、同じやうな談話をして、そしてかれは歸つて行つた。

讓は役場に於ける自分の地位――僅か月給が十二圓ではあるが、今では自分達の生活する唯一の財源である役場の地位、それを父親は激怒の餘り罷免させるやうな手段を取りはしないかと心配した。しかしそれは單なる杞憂に過ぎないといふことが段々知れて來た。家では、父親も母親もつとめてそれを世

その心細さは細い綱で深谷を渡つて行かなければならないやうな心細さであつた。その寂しさは人の居ない廣々とした野原を歩いて行くやうな寂しさであつた。それに、讓の心にはお雪に對する多少の不安と疑惑とがあつた。此方から心をすつかり開いてゐるだけそれだけ、お雪の心は自分から離れて行きつゝあるのではないかといふやうな疑惑を持つてゐた。默つてゐて、ずんずん實行して行く女の性質もかれに頼りないやうな心を抱かせるに十分であつた。男の手を握つたのも女だつた。默つて里に遁げて歸つたのも女だつた。今度の事も女が自分で決心して實行した。これから先何をするか解らないといふやうな不安が微かながらも起つて來た。

『もう少し本當のしつかりした處をきかして呉れ。』讓は幾度となくかうお雪に言つた。けれどお雪は決してはつきりしたことを言はなかつた。言はれる度に唯點頭いて見せるばかりである。夫婦が――其の成立は兎に角、結婚して盃を取換した夫婦が、かうして自分の家を出て、他人の二階に寢て居るといふことが、讓には不思議に思はれた。空想が果てしもなく續いて行つた。

幾度か寢反りを打つたり、嘆息をついたりした。お雪はスヤ〳〵と寢て居た。

三

中に入つて呉れた人達もあつたが、ぢき手をひいて了つた。三日目には、家から讓とお雪との身のま

主人はそれから一時間ほどして歸つて來た『駄目だよ。非常にお父さんが怒つてゐる。……何うかかまはずに置いて呉れッて言ふんだが、仕方がない。これだけ言つて置けば、此方の義理が立つから。』

『隨分酷い親達ですねえ。』

『矢張、始めが出來合で、お雪が讓さんを騙して居ると、てんから思つて居るのだから駄目だ。』

『困つたものねえ。』

二階の二人は其夜は遲くまで眼を覺して居た。話聲が細々といつまでも聞えて居た。主婦があとをすつかり片附けて床に入つてもまだ聞えて居た。

讓は目が冴えて眠られなかつた。

東京に行けたら、二人で一緒に行かう。かういふ話をした時には、お雪の眼も光を帶びて來た。『さうすれば、貴方の望も遂げられますねえ。』かう言つて喜んだ。

しかし、それが出來ることか出來ないことか？　それがすぐ二人を暗い前途につれて行つた。廣い世界、自由な世界、それを讓はかねてから望んで居た。その意味の十分に解らない時分から『自由であれ』などといふ短文を書いた。けれど自由を得て、赤裸々な人生に向つて、今更に寂しさと心細さと便りなさとを感じない譯には行かなかつた。

『何うするの？　今夜？　讓さん。』

二階で遲くまで二人が話して居るので、階下から伯母がかう聲を懸けた。

それには讓は答へずにお雪が下に下りて來た。『泊つて行つたッて構やしない。此處を出れば、己は泊る處はないッて言ふんですがね、伯母さん？』かう言つてお雪は伯母の顏を見た。

『歸る方が好いがねえ。』伯母は二階に上つて行つた。讓は其處に橫になつて居た。

『私がかばふやうに思はれても困るねえ。』

かういふ聲がやがて聞えた。

『……いゝえ、僕は明日になつたッて、家に謝りになぞ行きやしません。人を間に立てゝ何の彼のと厭なことです。僕等はこれから二人で世の中を渡つて行かなけりやならないのです。伯母さんが何うしても泊られないと言ふなら仕方がないですけども……泊められるなら何うか泊めて下さい。二三日緩くり考へさせて下さい。頭が痛くつて堪らない。』讓は此上考へるには堪へられないといふやうにして頭を抱へた。

　主人に話すと、『仕方がない、己が一寸行つて向うの家に斷つて來る。それにしても、何とか言つて來さうなものだがな。讓が來てるか來てないか位聞きに來さうなものだがな。』こんなことを言ひながら出て行つた。

お雪は階下で伯母と話してゐた。讓の顏の蒼いのに何か事のあつたのはすぐ知れた。讓は一伍一什を話す間、絕えず體を震はして居た。

『あれでも親だ！』

拳を握り詰めたやうにして言つた。

伯母は聞終つて嘆息をついた。『困つたもんだねえ。』しんみりした、心から心配したやうな調子で言つた。瘦せた其顏が四邊に際立つて見えた。

外に出て居た此家の主人はやがて歸つて來た。其話は繰返して語られた。主人は考へて居たが、主婦に、『それぢやお前、これから行つて樣子を聞いてお出！』

『私が行つたッて仕方がない。』伯母は讓の家庭の難かしいのを兼ねて知つて居るので、其處に出かけて行かうとは言はなかつた。それに、同じ町內に居ても、さう深くつき合つても居なかつた。讓とお雪との結婚が、普通の媒妁で出來た結婚なら、もつと深い親類づき合をして居たであらうが、二人の間が先に出來て、それから話を進めて行つた結婚であるだけそれだけ、親類同士の間にも何處か圓滿に行かないやうな空氣があつた。

其夜、第一に起つて來た問題は、讓が二階に泊つて行つて好いか惡いかといふことであつた。口には出さぬが、誰の胸にもそれがあつた。

りひどいことを言ふもんぢやありません。何にしても親ですから。』やさしい伯母は讓の顏を見る度にかう言つた。それにも拘らず話は益々難かしい方に向いて行つた。二日目の夜、讓は遂に父親と衝突した。『勝手にしろ――』『勝手にします。』さういふ處まで行つた。父親の顏にはめづらしく青筋が立つた。讓はブルブルと總身を震はした。

『貴樣は勘當だ。』

かう言つて父親は立つて行つた。

難かしい母親ではあるが、――人一倍お雪を邪魔にした母親ではあるが、讓が立つて出て行かうとするのを見ては、流石に默つてそれを見て居るに忍びなかつた。引留めていろいろとなだめ賺した。子供の時、何んなにお前の爲めに苦勞したか知れないなどと言つて聞かせた。後では不幸な兒を持つたほど辛いことはないと泣いて居た。

讓は母親の言葉などは耳に入らないほど激して居た。それに若い血が總身に漲り渡つて居た。『自分が惡いんぢやない。不孝、不孝と仰しやるけれど何が不孝です。』かう言つた言葉が自分の體に反響して聞えた。母親がお雪の弱點を數へ立てゝ、『お前は解らないけれど、お雪はそんな深切な女ぢやないよ。あの位の嫁は腐るほどある。』などゝ言ふのを聞くと、そこにさうして立つて居られないやうな氣がして、母親の手を振放つて、帽子も冠らずに戸外に飛出した。

讓はやがて、

『それでお前の了簡は何うなんだ。』かう言つて、『默つて居ては解りやしない。お前は何うしても里に歸ると言ふのかえ？　それなら、さう言つて呉れ。』

お雪は輕く頭を振つた。

『しかし、本當に言つて呉れ。今度は僕も親に言ふだけのことは言はうと思ふんだから、僕も隨分こらへて居た。お前が可哀相だと思ふから、言ひ度いことも言はないでゐた。』

『私だッて辛抱したんですけれど……』

お雪は半言ひかけて聲を曇らせた。

伯母は一應里の方にも話して、一時お雪を其方に遣つて置いた方が好いと言つたが、讓はそれを承諾しなかつた。『まア暫くこのまゝにして置いて下さい。里になど言つてやる必要はありません。伯母さんは迷惑でも暫くお雪を此處に置いて下さい。』かう讓は賴んで行つた。

お雪はその二階に日を送つて居た。伯母の家は小商賣をして居たが、子供が居ないので靜かであつた。伯母の方でも、お雪の里の方から、萬一の時には世話になるやうにかねて賴んであるので、いろいろ不自由のないやうにお雪の世話をして遣つた。讓は役場の行きに歸りに廻り道をしては寄つて行つた。『餘

それは南に向いた晴々した二階の一間であつた。其處からは田だの山だのが打渡して見られた。
『でも親御がさう仰しやるんだから。』
伯母がかう言つたのを讓は奪取つて、
『でも、親のお雪ぢやありませんから――僕のお雪ですから。』かう言つたかれは思はず激した。『お雪さへしつかりして居て呉れゝば何うでもします。一體、親が惡いんです。それや親が賛成しなかつたには違ひないけれど、僕は僕の妻としてお雪を貰つたんです。僕は何うにでもします。勘當されても好いんです。』
『さうばかりも言へませんけれど……』
『いや言へないことはない。僕は言ふ。僕は父親が勘當するなら勘當するでも好い。僕は立派に別居する。』
『しかし、さう角を立てないで……圓く治まるものならば――』
伯母はかう言つてなだめたが、讓は今までに曾てないほどに昂奮してゐた。
『一體、親が惡い。』
かう幾度も繰返して言つた。
お雪と讓とは默つて相對して居た。

た。世に苦勞などはなささうに思はれた。

二

お雪の母方の伯母が町に居た。それはお雪のこの町に於ける唯一の親戚であつた。ある日、お雪は無斷で其處に遁げて行つた。

父も母も尠なからず激して居た。『さう度々は許されない……我儘にもほどがある。お前はさういふ了簡なら、何うとも勝手にするが好い。お前もあのお雪にそれほど心が殘るのなら、もう子にはして置かれない。』かうした語氣があつた。

讓は役場に行く前に、その伯母の家に出かけて行つた。兎に角其處でかれはお雪に逢つた。

『とても居られませんから。』

かう言つたお雪の顏は蒼かつた。

讓はいろいろなだめたり賺したりした。しかしお雪は低頭いたまゝ默つて居た。別居の話をしても默つて居た。

をりをり袖で眼を拭つた。

伯母が上つて來た。

『本當に解るだらうねえ。』

『え、わかります。』

『お前がイヤなら、家に居ないたッて好いんだから。親達と別れて、分家して貰つても好いんだから――』

『でも東京に入らッしやつた方が、貴方の望が叶つて好いんでせう？』

『東京になぞ行かなくつても好いんだ。お前さへ僕と一緒に居て呉れゝば、どんな暮しをしても好いんだ。お前が居ない間、どんなに僕は心配してたか解りやしない。』

お雪は點頭いたばかりで唯默つて居た。

『お前達も子供でも出來ると好いんだけどもねえ。』

町に居る伯母さんがある時二人に向つて笑ひながら言つた。

其時は唯笑つて挨拶して居たが、時々その言葉が讓の胸に蘇つた。二人の間に、子供のないといふことが飜つて考へられるやうな日が續いた。

讓は子供を抱いて居る四邊の若い細君を見廻した。其人達は嬉々として樂しさうにして笑つて居た。子供をあやしたり、子供に乳をふくませたりしてゐる細君達は、機嫌もよく、血色もよく、元氣もよかつ

ると、自分の子が嫁に取られて了ふやうな心持がすると見える。讓はそれを知つてゐるから、つとめてさういふ素振を見せまいとするけれど、夜など二人でその居間に入ると、つい内所話をするやうな調子でこそ〳〵話を始める。それが母親の耳に入ると、嫁を憎むやうな氣分が一層烈しくなる。

これまでにも、お雪が里に行つて十日も二十日も歸つて來ないやうなことがよくあつた。『私はとても母さんの氣に入らないから――』こんなことも言つた。讓とさし向ひで話をする時には、『あなたは私のやうなものでない、もつと母さんに氣に入るやうなお嫁さんをお持ちなさい。』などゝも言つた。

『お前が家に居るのが厭なら、何うでもなるんだから、親達と別居することも出來るんだから――本當にお前の心持を聞かして吳れ。』此間里に行つて歸つて來なかつた時にも、讓はわざわざ迎へに行つて、さう言つて伴れて歸つて來た。

其時、讓にはお雪の心持を疑ふやうな氣分も起つて居た。生憎車がなかつたので、二人は山道を歩いて來た。丁度秋の初めであつた。お雪は讓の後に跟いて歩いた。

『僕の心は解るだらうね?』

婆さんの出してゐる休茶屋にやすんだ時、讓はかう訊いて見た。

『え。』

お雪は笑はうともしなかつた。

誌や小說をギツシリ入れた本箱とが並んで置いてあつて、かれの文章の掲載されてある雜誌が山のやうに積んである。それをお雪が毎日拂塵をかけて掃除するが、それでも埃がよくたまつた。

秋の晴れた日曜日の午後など、日當りの好い其緣側の障子を明けて、其處にごろりと身を横へて厚い小說などを讀んでゐると、赤い手絡をした、銘仙の羽織を着たお雪が靜かに入つて來て、『好いお天氣ですね。』などと言つて、緣側に立つて碧い晴れた空を見て居る。お雪はこれから三里ほど山の方に入つて行く農家に生れたのだが、家がかなり金持で、少しの間、町に來てゐたものだから、田舍の娘にしては、何處か垢ぬけがしてゐて、脊の高いのと色の白いのとが常に際立つて人の眼を惹いた。それに甘えるやうな調子で口を利いた。

それから店の方に出る處が、父母の居間で、猶は二つ三つ室を隔てゝ店になつて居る。今は商賣はさう盛んにしては居ないが、それでも土地では名高い舊家になつてゐる。

讓には二十になる弟と十五になる妹とがゐた。

小舅達とお雪とは交情が好い方ではなかつた。お雪が默つてゐる方の性質である爲めに、一層其間が面白くない。それに、弟の理一は兄とは丸で違つて、氣分が學問より商賣の方に向いてゐた。

お雪に讓が優しいのが、母親にはその機嫌を損ふ大きな理由の一つになつてゐる。餘りやさしくされ

時間になつて、すぐ歸らうとすると、同僚が、『菅井さん、碁でも打つて行きませんか。』などとにやにや笑ひながら言ふ。と、年老つた書記さんは、『菅井さんはとめるのは可哀相だ、奥さんが待つてる。』などと言つてからかつた。

路傍に小川が流れて居た。小さい紅い白い花などが咲いて居た。秋の雲が靜かに鮮かにその水鏡に映つてゐることなどもある。町の子供達が目高をすくつてゐることなどもある。秋雨が蕭々と波紋をつくつて降つてゐる時には、かれは傘を斜にして通つて行つた。『東京に出てつらい思をしたッてつまらない、それに成功するものもあれば墮落して了ふものもある。寧ろかういふ靜かな田舍の方が好い。』お雪に可愛がられた翌朝は、こんなことを考へながら、かれは靜かに落附いた心持で其處を通つて行つた。

かれは稚い頃から筆を持つのが好きで、繪を書くことや文を作ることが上手であつた。好加減大きくなつた頃には、文章を書いて、東京の雜誌に投書してゐた。そして其の短い長い文章は過分の批評をつけられてよくその雜誌に載せられた。後には其雜誌の有望な投書家として寫眞を載せるから送つて來いなどといふ手紙が其處から來た。

一時はそれがかれの生命のやうに見えた。中學から歸ると、かれはすぐ机に向つて筆を執つた。夕飯などは食ふのも忘れて居た位である。そしてそれが少なからずかれの『東京熱』を煽つたもの丶一つである。けれど今ではもう忘れたやうになつてゐた。かれの居間にはお雪の持つて來た新しい簞笥と、雜

『お雪を貰はうと言ひ出した時にも、父母は其家柄とか氣風とか周圍とかには贊成しなかつたが、嫁を貰ふ、妻を持つといふことには贊成した。嫁を貰つて、子供でも出來たら、口癖のやうに言ふ『東京に行く』も出なくなるだらうと思つた。落付いて田舍の古い家の後繼者になつて吳れるだらうと思つた。譬にしても、可愛いお雪の爲めに、自分の一生の功名を犠牲にしても構はないと思つたことがないでもなかつた。……何も東京になど行かなくつても好い。家にはお雪がゐる。あの可愛いお雪がゐる。歸ると、默つて入口に迎へに出て來る。顏を見合せてにつこり笑ふ。そのにつこり笑ふ心がかれには捨て難くなつかしいものであつた。

父母の勸めで、唯遊んで居てもつまらないと言ふので、やがて役場に出ることになつた。町長とも助役とも書記とも父親は懇意である。だから何事につけても便利で、その居心も決して惡くはない。『菅井さん、菅井さん。』と言つて心置なく使つて吳れる。用事も馴れないものは古參のものにさせて吳れる。一日仕事もなく煙草ばかりふかして、笑ひ話などをして歸つて來ることもある。家に居るより却つて樂な位だ。——役場は町の裏の南の外れにあつた。かれは每朝、裏道を通つて、貧しい人達の住んで居る處を掠めて、ひろびろとした野に出て行つた。其處からは、役場の白い壁が朝日に輝いて見えた。秋も遲くなると、コスモスの紅い白い花が其處に一杯になつて咲いて居た。

お母さんも私を東京に出して下さい。私はまだ勉強しなければならない體ですから、……私はこんな田舍に埋れて、先祖代々の家を嗣いで、平凡な人間になつて了ふのは厭ですから。』かれは其時さう言つたことを思ひ出した。

厭なことだ！　こんな田舍に。話相手になるやうな友達は皆な東京に出て行つて了つて、何處を見渡しても、因循して後れた考を持つて居る奴しかありやしない。日が暮れさへすれば何處でも戸をぴつしやり閉めて了ふやうな暗い田舍の町、碁と將棋と酒と縣會議員と地面の話とそれより他には何もないこんな色彩に乏しい町になど何時までぢつとして居られるものではない――お雪が來ない前には、一日としてさういふ考を抱かないことはなかつた。かれの心は唯々都會へのみあくがれて居た。都會に行きさへすれば、どんな事でもどんな希望でも成し遂げることが出來るやうに想像して居た。

お雪だツて、可愛い可愛いお雪だツて、かれの其の心を全く其方に轉じさせて了ふやうなものではなかつた。綺麗ないぢらしい影を帶びたお雪の眼でも、白い柔かい美しいお雪の肌でも、かれからその希望を全く奪ひ去つて了ふことは出來なかつた。

『私を東京にやつて下さい。』

父母がお雪に對してやかましいことをいふ時には、譲はこれまでにも既に幾度となくそれを言出した。

別るゝまで

一

讓は役場に居る間、お雪のことばかり考へて居た。『あんなに家に眠まない女は、歸して了ふ方が好いと父親も言つたさうだし、母親は初めから不贊成だつたから、何ぞと言つては、あらばかり搜して、出て行くやうに、やうにと仕向けて居る。お雪は何んなに辛らかつたらう。時々人知れず陰に行つて泣いて居るやうなこともあつたに相違ない。あれでも己を思つて呉れゝばこそ、今まで辛抱して居て呉れたんだ。今にお父さんもお母さんも可哀相に思つて呉れるやうな時が來るだらうと思つて辛抱してたんだ。それが何うだ。今になつてあの騷ぎ……。』

讓は自分の家の厭な空氣をまざまざと眼の前に浮べて見た。母親も默つて居る。父親も默つて居る。かれ自身も默つて居る。かれは寧ろ今の生活を全く破壞して了はうかとまで思つた位だ。『よう御座んすとも、そんなにお氣に入らないんなら、お雪は出します。歸して了ひます。しかしその代りお父さんも

山は段々近くなつて行つた。大きな杉並木などもやがて見え出した。綺麗な水が小さな瀬をなして流れてゐた。

は持つて來た。髮を長く生した、色の黑い丈の高い青年で、田舍にゐて、親達の言ふまゝに藥學校に行つて勉學してゐれば、三四年の後には一人前の藥劑師になれる身分を、好きで文學に志して、學校に通ふ爲めに親から買つて貰つた自轉車を賣飛ばして、『一文も親には世話にならない。』と言つて、そして東京へやつて來た男だ。『あれを伴れて行かう。そして自炊をさせやう。それに、己だツて飯位炊ける。昔の書生生活に戻るんだ。さうしよう。』かう龍太は言つた。

二三日經つた後には、龍太とその青年とは、山の方へ行く汽車の中に膝を並べて乘つてゐた。行李、鞄、風呂敷包みなどが汽車の上に載せられてあつた。龍太の鞄の中には二人の中年の女の物語を書いた小說などが入れてあつた。青年は雜誌やら新刊物やらを澤山龍太の書齋から持つて來て、熱心にそれに讀み耽つてゐた。

青年に取つては、この世の中は希望の多い生效のある樂しい愉快なものらしく見えた。何んなに辛い慘めな生活でも、青年に取つては生に向つて突進して行く勇ましい道程であつた。何んなものでも面白いといふやうな調子で、雜誌の中のあらゆる小說を讀み盡した。

『矢張、讀んだり、書いたりする他仕方がありませんね。勉强するんですね。私も一つ記念になるやうな作を山で書いて見ませう。』書生はこんなことを言つた。

外國に行つた友達からは、行く先々から繪葉書が屆いた。それにはジャンクの帆影の無數に漂つてゐる港があつたり、支那人の店の一面に連つてゐる賑やかな町があつたりした。Blank page! Blank Page! などと書いてあるものもあつた。渺茫とした海の中を世離れて漂つて行く友達の生活が龍太には限りなく羨しかつた。

龍太は都會の明るい通の方へ行かうと思はないこともないではなかつた。友達をも訪問しやう、例の騷々しい Café にも行かう、新聞をも見やう、雜誌をも讀まう、兎に角沈滯した自己の生活を立直す方法をも考へなければならない。こんなことを狂熱的に考へることもないではなかつた。しかし、其處にはジロ〳〵と氣味わるく人を見るやうな厭な目や、冷笑しながらお世辭を言ふやうな冷たい顏や、人の心を落付かせて置かないやうな尖つた心持などが一杯に滿ちわたつて居た。

『そんな生活など何うでも好い、自己から、さうだ、先づ自己から立て直して行かなければならない。』かう思つて、行きかけた路を途中から引返して來た。

ある日のことであつた。龍太は俄に思ひ立つたやうに妻に言つた。『さうだ。日光に行かう。あすこの山の中に行つて一人で少し考へて來よう、あの寺はまだ明いてゐる筈だ。』

『だッて、貴方一人で何うするんです？』かう妻は笑ひながら言つた。

昨年の春あたりから、龍太の家に常にたづねて來る一人の書生があつた。をり〳〵小說などを書いて

明方近く、かれはいつも眼を大きく闇の中に明けていろ〳〵なことを頭に浮べてゐた。半年も一年も歸つて來ないやうな長い旅に上らうと思つて、電球を捻つて、旅行案内を床の上で展げて見たりした。かれは琉球に近い絶海の孤島にゐる友達の死を惜んだ。その友達さへ生きてゐるならば、かれは一番先に其處に出かけて行つたに相違なかつた。椰子の葉の大きな樹の蔭、ハブのゐる草藪、暑い〳〵日影の下に赤銅色の肌を見せて半ば裸になつてゐる土民、さういふものをかれは想像した。かれはその友達から送つてよこして呉れた寫眞を箱の中に捜した。

二三年前の夏、其の友達は久し振りで、東京に出て來て、川に近い灯の明るい室で一緒に酒を飲んだ。その時龍太は、『君のやうな友達を持つてゐるのは心強いよ。僕等は今はかうして世の中に働いてゐても、何時隱れ家が必要になつて來るかわからないからね。其時は逃げて行くからね。かくまつて呉れるね。』などと言つて笑つた。それが痛切にかれの胸に思ひ出されて來た。『あの友達さへ生きてゐたら――』龍太は思ひをかけた絶海の孤島が今は全くかれに背いて去つて行つてしまつたことを考へて長大息を吐いた。

日は日と經ち、月は月と經つた。目の覺めるやうな新綠も段々濃い深い綠に變つて行つた。生温い重苦しい空氣は草にも木にも鬱陶しく漲り渡つた。かれは頭を抱へるやうにして、佗しく雨の降つて通る薄暗い窓の下にゐた。

とこへ停車場をこしらへやがつた。』

『これでも、こゝの地面に家をたてるのは、餘程、鐵道の奴等にヒヨコ〳〵頭を下げなけりや許可にならないんだツてな。弓さんなんか餘程取られたやうだぜ。』

『勝手なことをしやァがるな。』

鉋屑が風に吹かれてあちらこちらにころがつて飛んで行つた。一軒出來上つた板圍ひの茶店には、髯の生えた百姓面をした中年の男が、瀨戸物の安火鉢を挾んで、もう一人の若い男と何か話をしてゐた。前にはひろい野がひらけてゐた。

停車場には町に出かけて行く娘達の赤いメリンスの帶が見えたり、百姓の上さんの荒れた唇が見えたりした。新らしい停車場の中を新しい制服をつけた若い車掌が元氣よく歩いて行つた。

龍太の姿は長い間其處に見えてゐた。かれは其處で東京の方へ行く汽車を待つた。

龍太は矢張落附いてゐられなかつた。『今年一年は靜かに休息するつもりです。』などゝ表面は言つてゐても、心は絶えず何物をか求めてそれに縋らうとあせつてゐた。何んなものでも好い、縋るものがあれば、何んな小さなものでも好いとかれは思つた。落附いて机の前に坐つてゐられないのがかれには何よりも辛かつた。

外國に行く友達がいよ〳〵神戸から立つといふ日には、龍太は丘の中にあるさびしい溫泉場の一間にゐた。細かい雨が降つてゐる中に桃の花が目も覺めるやうに見えてゐた。龍太は赤い表紙の洋書を一冊其處に持つて來て讀んでゐた。二人の中年の男が田舍に行つて、まことの生活を始めやうとする心持が絕えず龍太の心を動かした。龍太は幾度となく長大息を吐いた。

かれのゐる室の高い窓からは、公園になつてゐるやうな廣場が一目に見渡された。大きな櫻の木からは絕えず花が散つてゐた。子守が二三人ぶらんこに乘つてゐるのも見えた。

『まことの生活――』さういふ問題がまた押寄せて來た。

新しく出來たある停車場の前には、大工や左官達が寄り集つて、一生懸命で家を建てゝゐた。

『べらぼうに寒いな。』

『まだからッ風が止みやがらねえ。』

『もう好い加減に止んでも好い時分だな。もう、ぢきお釋迦さまぢやねえか。』

一人の年を取つた方の大工は『それでも、停車場が出來たんで、こゝも賑やかになるァな。店が澤山に出來るやうになるァな。こゝいらは、田圃の中だから仕やうのねいところだッたんだが。……えらい

荒くれた手や、色の褪めた唇や、あぐらをかいた足や、しよぼ〳〵した眼や、さういふものゝ前でかういふ演説をしたことをかれは頭に浮べながら歩いた。龍太はさういふ演説をする心持になつた自己を振返つて考へて見ない譯には行かなかつた。

故郷の方へも龍太は出かけて行つた。

半は丘半は泥沼のやうなところにある町の下をかれは歩いた。半鐘臺と高い大きな欅の老木と古い錆びた沼とを持つた町はひろい平野の春の中に始めて目を覺しかけたやうに見えた。

沼には草が新しい芽を出し始めてゐた。破れた垣からは盛りを過ぎた梅の花が白く覗くやうに見えてゐた。城趾から士族屋敷の方へと龍太はやがて歩いて行つた。子供の時分かれの教はつた先生の碑は城址の公園の中にあつた。その前にかれは長い間立つてゐた。

『モスリンの方へ出るには此方を行つて好いでせうか。』

ある路の角で、洋服を着た男にかれはこんなことを聞かれた。かれは默つて點頭いてそして通り過ぎた。

町にはかれの從弟もゐれば、かれを知つてゐる年寄もゐた。かれの知つてゐる若い妓などもゐた。しかし、かれは誰をも訪ねる氣にならなかつた。かれはそこの停車場から北へ行く汽車に乘つた。

す。皆な同胞です。考へて御覧なさい、何の誰と言ふ名がないといふことゝ、口を開かずに默つてゐることゝ、これたけでも、何んなに變つた生活が開かれるでせうか。そしてかれ等は朝は四時に起き、十一時に晝飯を食ひ、夜の六時には床に入つて寐て了ふのです。その間にあるのは、勞働と祈禱ばかりです。そして死ねば、棺にも入れず、衣をも纏はせず、そのまゝ土に埋められて了ふのです。何うです、これで八百年——千年も經過してゐるのです。さういふことが人間に出來てゐるのです。そしてそこに住んでゐる人は、自分の國にあるやうな血を流したすさまじい革命があつたのも知らず、ドイツ兵に巴里の城下を蹂躙されたことも知らず——自動車、飛行機が出來たといふことも知らず、女の溫い肌——それどころでは御座いません、女のいかにつくられてあるかといふことも知らずに、一生を送つて行くので御座います。さういふ生活がこの世の中にあつて、たとへ千人にせよ、さういふ人間が生存してゐるといふことを考へますと、かうしてじつとして暮してゐられないやうな心持がいたすので御座います。私達の生活には、何といふ騷々しさと忙しさと淺猿しさとがあるのでせう。饒舌、皮肉、懊惱、さういふものばかりで充されてゐるでは御座いませんか。他人を嫉んだり、自分を悲しんだり、何うかして慾を滿さうと考へてゐる人ばかりでは御座いませんか。でなければ瞋恚とか嫉妬とかいふ恐ろしい炎に身を燒いて自から亡びて了ふやうな人ばかりでは御座いませんか。……沈默と勞働、それより他に私達はまことの生活を營むことは出來ないのです。』

娘の顏と、それ以外に龍太は何物をも得ることが出來なかつた。

龍太は獨りでよく出かけて行つた。停車場のレイルを越えると、向うには野がひろ〴〵と横はつてゐた。田には昨年稻を刈つたまゝの切株がところ〴〵に殘つてゐて、葉の落ちたひよろ長い榛の木が田の畔を取卷いてゐるのが見えた。靑い草の萠え出した小川には、午後の日が明るくさして、小さな魚がちよろ〳〵と泳いでゐた。

眼界を遮つた森のかげには、大抵白堊づくりの土藏か新しい藥の屋根かが見えた。龍太は其處に住んでゐる人達の生活を想像しながら步いて行つた。野の眞中を橫ぎつて通つてゐる某町から某町に通ふ街道には、をり〳〵ベルの自轉車が通つて行つた。

野の四面を取卷いた山々にはまだ雪が日にかゞやいてゐた。

龍太は昨日友達に賴まれて、田舍の寺に行つて演說をしたことを頭に浮べてゐた。かれは無理に賴まれて三十分ほど演壇に立つた。『飛行機が出來、自動車が走つてゐる巴里の郊外半日路のところにさういふところがあるので御座います。十二世紀からと申せばもう八百年以上もさうしてゐるので御座います。其處にゐる信徒は一生口を開くことを禁じられてゐるのです。また一度その敎へに入つた人は、今まで社會で何んなことをしてゐた人でも、どんな富豪でも、何んな英雄でも、何んな名高い人でも、皆な同じやうに唯々信徒になつて了ふので御座います。其處に入ると、姓名といふものがなくなつて了ふので

例だつた。女に對する苦悶を持つて來たこともあれば、心に對する不安を背負つて來たこともある。『ああ疲れた――』かう言つて、その長火鉢の前で長大息をついたことも一度や二度ではなかつた。

『何の爲めの努力だらう。何の爲めに、自分等はこんなに齷齪してゐなければならないのだらう。もう疲れた――。』

かう龍太が言ふと、

『少し休息する方が好い。しかしいくら努力をしても仕甲斐のない努力をしてゐる人は世の中に腐る程あるぢやないか。君などはそんな事を言つては贅澤だ。努力するんだよ。矢張、仕方がない。』

かう言つて唯笑つた。龍太の苦惱などは耳にも留めなかつた。

この友達の落附いた、物に動かされない心持は、かれが常に羨しいとも思ひ、豪いとも思ふところのものであつた。何んなものを持つて來て打つけられても、その友達はいつも笑つて受けた。龍太は今まで何んなにいろいろなものを持つて來て、この友達に打つけて行つたらう。怒るやうなことも、羨しがらせるやうなことも、餘りだと思はせるやうなことも何も彼も持つて來て投げつけて、そして何等かの安心を得て歸つて行つた。しかし今は投げるにも投げることの出來ないやうな苦痛を龍太は持つてゐた。さびしい風の音と、遠くから來る汽車の響と、茶の間から見えるいつも同じやうな風の方向を知らせる赤い青い旗と、素燒の德利と、友達の細君の顏と、はしやいだ元氣な調子で唄をうたひながら三味線を彈く

矢張すり硝子の箱の中に以前見たと同じやうな本が入つてゐて、赤い毛氈をかけた机の上にはモウパッサンの短篇集が載せてあつた。

寒山拾得の古い幅物――まづい田舍の繪師の筆を揮つた幅物が依然として大きな床の間にかけてあつて、下には例の剝製にした雉子の置物が置いてある。何も彼も同じだ。此處には時が經つてゐないかとさへ疑はれた。

葬式が來ると、友達は緋の僧衣を着て、白足袋をはいて、拂子を持つて、本堂の方へ行く長い廊下を歩いて行つた。やがて低い唸るやうな讀經の聲が聞えて來た。鉦がけたたましく鳴つた。

茶の間に置いてある火鉢、ひろい暗い臺所の緣、何百年か知れない黑い煤のたまつた天井、二つつゞきの土竈のある土間、汚ない古い高流し、くるゝの十分にきかなくなつた大きな扉、さういふものが矢張り依然として龍太の眼の前にあつた。龍太は本堂に添つて、裏の森の方へ行つて見た。杉の黑い樹立の中には矢張黑い淀んだ澤水が惡魔の眼のやうに光つて見えてゐた。

これまでにも龍太は度々其處にやつて來た。此處はかれに取つて唯一の隱れ場であつた。かれはいつも世の中の煩累から逃がれて來た。『あそこに行つて來る。』かう云つては出かけて來た。

かれに取つては、いろ／＼な追憶のある寺だ。其處でかれは燃えるやうな熱い心を靜めた。さま／＼の批評、さま／＼の罵詈、さま／＼の攻擊、さういふものも此處に來ると、かれは皆な忘れて了ふのが

何んなものでも平氣だ。かれ等に取つては食つて大きくならなければならない目的しかないのだ。若い人達も矢張さうだ。努力しなければならないんだ。努力するやうに出來てゐるんだ。努力するのがかれ等の生きてゐる目的なんだ。僕等だつてさうしてやつて來た。しかし、年齡はさうして置かない。僕等の前には死がそろ〳〵芽を出してゐる。死の最初の一歩に僕等は向ひつゝある。まだ、そんなことを言ふ年ではない、外國人を見たまへなど〻人は皆な言ふけれども、イブセン劇などを讀んで見たまへ。皆な老人といふことを痛感した作が多いではないか。『建築師』でも、『小アイオルフ』でも、ニジオン、ガブリエル、ボルクマン』でも皆さうぢやないか。かれは決して少年や青年の爲めに劇を書いてゐやしない。——生の努力は僕はもう散々やつて來た。今度は死の努力をやらなければならないのだ。死の努力に入る扉の前に僕等は立つてゐるのだ。』

『それはそれに相違ないけれど……』

かう言つて友達は笑つた。友達には生の努力も死の努力も問題になつてゐないやうに見えた。潮の中に漂つてゐるのに、何もすがるものなどなくつてもい〻、流れるま〻に漂つてゐるさへすれば好いのだ。それが一番平安だ。つかまる一握の藁などがあつては却つて邪魔だ。かう思つてゐるやうにも見えた。

『それもさうだね。』

龍太は書齋の中にゐるのが堪へないで、二三日前から此處にやつて來てゐた。庫裡のひろい座敷には、

來なかつた。

『ぢや、御機嫌よう。』

『左樣なら。』

汽車は靜かに出て行つた。さびしさうにして長い旅に上つて行つた友達の顏は長い間龍太の頭に絡みついてゐた。かれは主人と大船でわかれた。さびしい旅がまたかれの前に續いた。

平野の中の寺にゐる友達の顏は依然としてさびしさうであつた。瘦せた、どす黑い、皮膚の荒れた血色は龍太の心を暗くせずには置かなかつた。

『まあ、いいぢやないか』

友達はかう言つていつも慰めて吳れた。しかしさうした言葉ももうかれには空しい慰藉にあつた。

龍太は言つた。

『しかし、年齡から――內部から來るのは何うすることも出來ないね。君だつてさうだらう。若い時代には、努力するやうに體が出來てるんだ。例へば、毎日食ふ飯でも、かれ等はまだ二十年かそこらしか食つてゐない。何を食つてもめづらしい。何んなものを食つても旨い。見るもの聞くものすべてめづらしい。子供を見ると、一番よくわかるが、かれ等は食ふことが目的で、旨いまづいが目的でない。だから、

こんなことをも言つた。龍太も主人も笑つて川の岸に立つてゐた。

『本當にPicturesqueですね。かういふシインは見たいたッて見られやしませんよ……さし込んでゐる光線が好いぢやありませんか。』私は何うしてか、かういふのを見ると、すぐ Sensual な感じが起つて來て仕方がありませんがね。』友達はかう言つたが、それでもまだ飽足らないといふやうに、暫く立つて見てゐたが、『一つ見せて戴くかな。』こんなことを言つて、石段を下りて浴槽の前に行つて、そして長い間其處に立つてゐた。

龍太は年齢が伴れて行く深い Sensual な境を頭に浮べずには居られなかつた。女の髪をわざと長く解かせて見たり、齒と齒との合ふ音の快感を貪つたりする境の不思議な感覺は俄かに龍太の體に蘇つて來た。噛まれた耳の快感が強い力を持つてかれを襲つて來た。

汽車に乘り込んだ友達の位置がちよつと分らなくなつたので、龍太と主人とは長く續いた客車の前を彼方へ行つたり此方へ來たりしてさがした。

『此處です。』

見ると、先に行つた主人は手を擧げてゐた。龍太は急いで其方へと走つて行つた。見ると友達は大勢の旅客の中に窮屈に挾まれたやうになつて立つてゐた。人が一杯にゐて窓のところに顏を出すことも出

がしますね。』

かう言つて山の上を見た龍太には、それが他の話のやうには思へなくなつて來た。龍太は默つて谷の上に聳えてゐる山を見た。外國に行く決心をした友達の心持なども繰返して考へられて來た

晴れた朝だ。

溫泉場の外れになつてゐるやうなところから、路は川の方へと下りて行つてゐた。二人は通りから其方の方へ行つた。

町の外れにある小さな溫泉宿から客が入りに來るやうな浴槽が河の畔に出來てゐた。トタンで張つた屋根の下には、暗い狹い浴槽があつて、路から下駄ばきで、石段を下りて、そして入つて行くやうになつてゐた。明るい午前の日影が板圍ひの隙間からさし込んでゐて、暗い浴槽の中もそれと微かに窺ふことが出來た。脫いだ衣服が其處の石彼處の棚にかためて置かれてあつた。

女の唇だの乳だのが黑く光る湯の中におぼろげに見えてゐた。

後れて來た友達は、『これは面白い。』かう言つて立留つて、『丸で繪ですね。これは面白い。……』さも印象の深い光景に出會したやうにして、暫く立つてそれを見てゐた。

『入つて見たくなりましたね。……何うです、一つ一緒に入つて見ませんか。』

硝子戸の向うに見えてゐる山を指して友達は言つた。

『そら、いつか話したことがありますね。……そら、私が昨年の正月此處に來てゐた時の話ですよ。あの山の上に、ロシアのカソリックの會堂がありましてね。そこに年を取つた牧師がゐるんですよ。何でも明治の初年に日本に來た人で、ニコライなどよりも早かつたと言ふことですよ。中々人物ださうですけれども、日本に來てゐるロシアのカソリックの人達と意見が合はないので、この山の中に引込んだまゝ老いて了つたやうな人ですッて。私は行つて見ましたがね。かういふ異鄕に來て、一生をかういふ山の中に過した人の生活といふことがいろいろ考へられましたよ。え、さう、殆んど世の中と交渉を絶つてゐるやうな生活でしたよ。』

『この山に路があるんですか。』

かう龍太は訊ねずには居られなかつた。

友達は向うの方を指して『そこから橋を渡つて行くと、路がついてゐるんですよ。細い路ですがね。灌木などの一杯に生えてゐるやうなところを通つて行くんですがね。……さう、上はちよつとひろい平らなところになつてましてね。そこに會堂があるんです。』

『面白いですね。かういふ溫泉場のすぐ上に、さういふ人が住んでゐると言ふのは何だか不思議な氣

など、主人は言つた。

龍太も友達も主人も靜かな落附いた心になつてゐた。

龍太は輕く醉つた身を長く籐椅子に横へて、いろいろなことを考へてゐた。

今朝停車場へ送つて來た大勢の中にゐた友達——色の白い背の高い綺麗な顔、——髪の長く出た銀杏返し——かれの空想はやがてかれを川の岸のある明るい一間へとつれて行つた。つゞいて夏の夜の暗く光る水の中にぼんやりと三つ四つ白い顔が見えて來るかと思ふと、橋の下を通つて行く舟の舷尾に提燈が一つ暗くついてゐるさまがちらと見えた。龍太は大きなある二階の家から出て、橋の傍で電車を下りて通りの中にある小さなお宮の境内を拔けて、そしてよく其の友達の家に行つた。その友達の家の小さな入口の前には、いつもメリンスなどを張つた張板が二三枚夕日に立てかけてあつた。門を明けると、八ツ手の緑の葉が見えた。子供達が騒いでゐた。『ゐらつしやいますか——』かう云つて、龍太はその狹い二階へと登つて行つた。氣が附くと、龍太の眼の前には、吹雪の中に高く聳えてゐる海岸の眺望臺が見えてゐた。

『何も彼も過ぎ去つて行きますね。』

『本當ですね。』

『かうして靜かに君を送つた一夜もすぐ昔になつて了ひますね。』

こんな話を龍太は友達とした。

かう別莊の主人に言はれて、龍太は外を見た。山畑のところ〴〵は、夜目にもそれと白くなつて見えてゐた。電車は闇の中を明るい溫泉の方へと急いで走つてゐた。

『まだ降つてますか。』

窓から外に手を出してゐる龍太に向つて友達は訊いた。

『いゝえ、もう止んでゐます。大したこともないんですね。』

かう龍太は言つた。

橋を渡つたり、山の裾のやうなところを通つたり、谷川の白く闇の中に漲り落ちてゐる傍を掠めたりして、電車はやがて山の麓にある停車場へと着いた。明るい灯がチラチラした。降つた雪はもう雪汁になつてゐた。

靴を穿いた友達だけを車に乘せて、主人と龍太は闇の道を溫泉場の方へと行つた。谷川は凄じく上から漲り落ちてゐた。崖に添つて二三軒固まつた家には、三味線の音などが聞えてゐた。

『溫泉場に入つて來た感じは好う御座んしたね。』

大きな二階の一間に落附いてから、別莊の主人はかう龍太に言つた。二人は雨の中に明るく見えた溫泉場を頭に描いた。そこに後れて入つて來た友達の顏を見て、

『私達の方が早う御座んしたね。』

汽車の煙は白く固まつて畠の上に落ちた。

友達は、ある停車場で窓を明けて青い麥の中に折れ曲つて行つてゐる路を眺めた。その路には紺の蛇目の傘がさびしさうに此方から向うへと歩いて行つてゐた。その路の向うには海があつた。

『此頃は大分好いさうですけれども……あゝいふ病氣ですからな。』

主人は傍から言つた。

其處に、友達の知つてゐる若い女が肺を病んで療養に來てゐた。鎌倉で、電報を打つて、停車場まで出てゐて下さいと言はうとしたが、さう思つた時にはもう間に合はなかつた。友達は、『ぢや私一人ちよつと下りて寄つて行きませうか。病氣が病氣ですから、逢つて行きたいと思つてゐるんですけれども……』などと言つてゐた。しかしそれも出來さうに思はれなかつた。『寄るのはもうよします。』などゝ友達は言つた。

その停車場を汽車が動き出して行つても、友達は猶ほその白い顔を其處から放さなかつた。ポプラの青い葉で圍まれた小學校だの、背の低い桃だの、青い麥の畠だのがその前を通つて行つた。雨はまた盛に降つて來た。友達はやがて窓を閉めて、元の座にもどつた。汽車の煙は依然として白く固まつて畠の上に落ちてゐた。

『此方は雪ですね。』

言つた。

鎌倉の別莊に龍太とその友達とは半日ほどゐた。庭には四季咲の赤い躑躅に靜かな雨が降つてゐた。春ももう闌になつてゐた。別莊の入口の四疊半には、友達の持つて來た新調の鞄と蝙蝠傘とが置いてあつて、編上げの靴が其處から黑く光つて見えてゐた。友達は座敷から立つて來て、その鞄を明けて、餞別に貰つた埃及煙草を出したりした。

別莊の主人は友達が山から都へ出る時に多少世話になつた人であつた。龍太も知つてゐた。友達とかれと二人して別莊の主人を山の中の寒い大きな家に訪ねて行つたことなどもあつた。記念の爲め――かう言つて三人は其處で寫眞を撮つた。田舍町にそのStudioを持つてゐる瘦せた寫眞師の蒼い顏は、細かい雨の中に長い間見えてゐた。

午飯の御馳走になつた室は、光線の十分に入つて來ないやうな一間であつた。主人の持つてゐた『誕生日』に友達も龍太も其の名を記したりした。友達は昔の人の詠んだ歌を自分の作つた本の扉に書いた。やがて雨は春の雨に似合はないやうな音を立てゝ來た。日暮近く三人はその雨を衝いて停車場の方へと急いだ。

仕合せた、皮肉、冷笑、憎悪、罵詈——さういふもの丶漲りわたつてゐる文壇ではないか。ある人は藝術の爲めに自己の人格を失ふのをも頓着しなかつた。ある人はある親しい友達をモデルにしてその祕密を世の中に示した。ある人は親の愛を忌憚なく描いた。否、自己をすら冷やかに解剖臺に上せて何とも思はなかつた。人間の理想と偶像破壞とが常に到る處で衝突して生々しい血汐を流した。疲れた、本當に疲れた神經だ。』

龍太はこんなことを考へてゐた。

汽車の窓から顔を出して見送りの人達に對してゐる友達の顔は蒼白かつた。何處となくそはそはしてゐるやうな樣子にも見えた。新聞記者の持つた寫眞機械は到る處から友達の顔に向けられた。やがて靜かに汽車は出た。

『何が羨ましいと言つて、毎月小說を書かせられる苦艱を遁れて來たといふことが一番羨ましいですね。これから二年なり三年なり、自分の仕たいと思ふことが出來るんだから、それが羨ましい。』

龍太はかう言つて友達の顔を見た。

『それも、今度決心した一つにはなつてゐるんですよ——』

友達はかう言つて笑つた。『ひとつ、もとの書生になつた氣で勉强して來やうと思ひますよ。』などゝも

知つてゐる人達の顏は其處にも此處にもあつた。文壇の人達の十の八九は此處に集つてゐるかとさへ思はれた。年を取つて書けなくなつたやうな人もゐれば、新しい才能を抱いてやがては文壇の視聽を集める流行兒にならうとするやうな人達もゐた。ある人の眼は輝き、ある人の眼は淀み、ある人の眼は鋭い皮肉の光を放つた。

お互に作品の批評をして、お互に拙い感情を抱いてゐるやうな人達は、各自に自分の味方をさがして其方に行つて何か頻りに饒舌つてゐたりした。『一つ、何うです、貴郎もつゞいてお出かけになつては。』

龍太はある作者からこんなことを言はれた。

『行くのも好いが――さう流行物のやうに誰も彼も行かなくたつて好いぢやないか。』

背の高い劇の方の作者はこんなことを言つて笑つた。

友達の志を壯とする人は澤山あるだらう。友達の出かけて行くことを羨む人も澤山あるだらう。しかし、再び生活を始めやうとする心持を知つてゐる人は、この大勢の中に幾人あることか？　かう思つた龍太は自己の問題に觸れずには居られなかつた。

かれは默然として立つてゐた。

かれの眼の前には、山の中で見た果樹栽培の夫婦者が見えたり、荒蕪地を耕す草分の百姓が見えたり、小說の中に書いてある二人の半老いた獨身者が見えたりした。『かういふ都會生活から逃れて行くものは

その友達の生活は艱難の多い生活であつた。山の中から出て來て、郊外に住んでゐた頃には、かれはよく其處に出かけて行つた。眞の努力の痛苦を龍太はよく其處で見た。かれの生活にもその友達の努力の影響は常に働きつゝあつた。從つてかれは母親のない子供を置いて、その二階から出て行かうとする友達の心持を單に勇ましいとか羨ましいとかいふだけの感じを持つて見ることが出來なかつた。友達の決心も矢張大きい潮の中に一握の藥しべを得やうとする努力ではないか。

その友達の外國に立つて行くといふ日は、雨がしめやかに降つてゐた。龍太が行つた時には、停車場には、友達を送る人達がもう大勢集つて來てゐた。學者もあれば、小説家もあつた。詩人もゐれば畫家もゐた。友達の作品を愛讀してゐる青年も澤山來て見送の群に加はつてゐた。

友達は平生つけたことのない洋服を着て、周圍を取卷いた大勢の見送人に對して、その色の白い顏を見せてゐた。紺絣の羽織を着た子供達は、親類の女達につれられて矢張見送りに來てゐた。

龍太はその傍に行つて、

『鎌倉まで行きますか。』

『え、そのつもりです。』

龍太は鎌倉行の自分の切符と、子供の爲めの入場券とを買つて、そしてそこから戻つて來た。かねて

ら、思ひ切つて出て行かうとする心持が私にはよくわかりますよ。』

主人はその友達の行くといふ外國の文學を研究してゐる人であつた。名高い短篇作者の書いた繪の入つた原書などを澤山出して龍太に見せた。中には龍太が英語で讀んで感心した本なども雜つてゐた。それは男と女の深い心理の複雜した光景を描いて見せたやうな作であつた。『えらい挿畫が入つてゐますね。丸で何かのやうですね。日本では、とてもこんな本は出せませんね。』かう言つて主人は笑つた。

午飯の御馳走になつて、心持よくビイルに醉つてそして龍太は出かけた。ふとすぐれた作家の描いたシインがかれの頭に蘇つて來た。海岸からはがきを出さうとした女のことを頭に浮べながら龍太は歩いた。その女はまだかれの心に執念く絡みついてゐた。

靜かな心持で歩いてゐたかれは、再び如何ともすることの出來ないさびしい自然の迫つて來るのを覺えた。龍太の身には悔恨やら追憶やら哀愁やらが犇と押よせて來て、持つてゐるその力を發揮するやうな餘裕は何處にもなかつた。唯、身の流れ行くのを覺えるばかりであつた。

龍太は昔通つた山の手の町を靜かに歩いて行つた。せめて漲る心に任せやうといふのが、かれの勢一杯の心の狀態であつた。旅に出て、行くところまで行つて生活を立て直さうとした決心は、要するに決心だけで、何うにもならないものだといふことが段々知れて來た。かれは二階の狹い壁の中から健氣にも出て行かうとした友達を思ひながら歩いた。

『もう、本當に、子供に追はれて一日まご〳〵してゐるんで御座いますよ。』やがて茶を運んで來た細君は、初めて逢つた人とは思はれないやうに馴々しく龍太を欵待した。龍太の書いた小說の中の子供の話などをして、『本當に子供を持つた方でなくつてはわかりませんよ。私などあれを讀んで泣きました。』などと言つた。龍太は七八年前に自分が山の手にこれと同じやうな生活をしたことを思ひ出さずには居られなかつた。龍太の妻も矢張初めて生れた子に追はれて暮した。

やがて主人は歸つて來た。『風邪ッて、さうひどくもありませんのですけれども……わるくこじらさない中にと思ひまして。』などゝ言つて、龍太の前に坐つた。龍太はこの主人の關係してゐる雜誌に賴まれた作の出來なかつたことを謝して、それからいろ〳〵文學上の話に移つて行つた。外國に行く友達の話なども出た。

『何うも矢張轉換期ッて言つたやうな時機なんですかね。』

などゝ言つた。龍太は、

『私などもやつぱりさうですよ。今迄考へて來たことがすつかり焼けて流れて了つたやうな氣がしてゐますから……。何も彼も興味をひかなくなつたッて言ふことが一番打擊ですね。何かつかまる藥しべのやうなものがなくなつては、流されて行つて了ふやうな氣がしますよ。』龍太はかう言つて考へて、『島田君の今度の決心なども、だから、私などには好い暗示にもなつてゐますよ。あの二階の狹い壁の中か

漂つてゐる身であることが染々とかれの胸に迫つて來た。

『流れ行く潮だ！』

かれはかう獨語した。

外國に行く決心をした友達のことも胸に上つて來た。その友達とは長い間一緒の路を歩いて來た。年も略同じだ。『若い人の爲めにはいろ／＼教育の機關が出來てゐますけれど、われ／＼には社會は何の機關をもつくつてゐて吳れないから困りますな。』と言つた人だ。六十の手習をしやうとした決心が龍太の胸にある深い暗示を與へた。

龍太の姿はある横町へと曲つて行つた。寺の墓地であつたやうな陰氣なところが、すつかり開かれて、家屋が澤山に出來てゐた。その中の一軒を龍太はおとづれた。

そこには若い小說家が住んでゐた。

『今、一寸、醫師に行きましたが、ぢきに戾つて參りますから。』かう言つて色の白い丸顏の愛嬌のある細君は、玄關に立つてゐた龍太を二階へと導いて行つた。去年生れた子供の泣く聲が下できこえた。

二間つゞきの明るい二階の四疊半の方には、卓が置いてあつて、そこの高窓から、山の手の坂になつた町が一目に見渡された。本箱には外國の小說だの新刊物だのが一杯に詰つてゐた、此家の主人の書いた新刊の短篇集などもその中に雜つてゐた。

さういふ幼いものゝ上にも遺憾なく働いてゐた。
『千代ちやん。』
『整ちやん――』
籐椅子の上に身を横へて、その無邪氣な聲を聞いてゐた龍太の頰にはいつか涙が流れて來た。

薄日の當る日の午前、龍太はかれの姿を山の手のある通りに見出した。それはかれの友達が外國に行く決心をしたといふ話を聞いた翌日であつた。かれは通りから細い橫町へと入つて行つた。そこには官吏や教師や會社員などが多く住んでゐた。四ッ目垣や二階屋が其處にも此處にも見えた。

そのあたりはかれが若い時代を過したところであつた。通りの肴屋の上さん、燒芋屋の娘、小間物屋の番頭――さういふ人達をもかれはよく知つてゐた。かれはキヤラコの紋付の羽織を着て袴を穿いた自分の姿や、得意さうに新調の洋服を着て茶皮の靴をはいて車に乘つて行くかれの姿を明かに眼の前に描き出すことが出來た。そこには藝術と生活の犧牲になつて自から動脈を切つて自殺した小說家の一度住んだ家などもあつた。かれは其家によくその小說家をたづねた。秀麗な目をした丈の高い姿がありありとかれの眼に見えて來た。『ヤ、しばらくでしたね。』かう言つて出て來た詩人の眼は夜更しをする爲めにいつも充血して赤くなつてゐた。龍太は過ぎ去つた時を繰返さずには居られなかつた。大きな潮の中に

『何うぞお上り下さい。』

など〻言つてゐるかと思ふと、本を讀む眞似をする聲があとから聞えた。『千代さん、あなた隱れてゐらつしやるんですもの――』かう小さい方の女の兒は讀んだ。

『整ちやん。』

『千代ちやん。』

かう互に呼ぶ聲も常に聞えた。

大きい方の兒がリボンの片を何處からかさがして來て、妹の方の兒の髮を結んでやつたりした。『本當によくおとなしく遊んでゐますよ。もうちつとも手はか〻らなくなつてしまつた。外に出るにも、二人一緒につれて行つてやらないと、喧しく言ひますけれど、二人で遊ばせて置けばそれはおとなしい……』こんなことを妻が言つてゐたのを龍太は思ひ出した。

年兒で、あとのが生れた時には、姉の方が泣いて泣いて仕方がなかつた。母親が抱いてゐると、枕を持つて來て、これを寢かして、自分を抱けと言つて仕方がなかつた。牛乳をきらつて、一時は絲のやうに細く痩せて了つたことなどもあつた。それが今では互に助け合ふやうになつた……。一人の存在と否とは一人の生命に關係するほどの深い結合力を生じて來た。

それを考へると、龍太はソイツを思ひめぐらさずには居られなかつた。複雜した心理の悲慘な姿は、

つて言つてた。本當に行かないのかえ？　ちつと出かけて行かうぢやないか。』

龍太は默つてゐた。いろいろのことがかれの頭を往來した。

ある若い友達は言つた。『さうかも知れませんね。人間には轉換期といふことが何うしてもあるやうだ。私達には、さういふことはまだよく解りませんけれど、貴方にしても、足立君にしても、それから島田君にしても、さういふ感じが今丁度來てるツて言ふところなんですね。所謂危機ですね。』

龍太は友達の群だの、親類の人達だの、周圍の社會だのを見廻すやうな人であつた。をり〳〵新聞に出る名士や大官の死に對しても、じつとしてはゐられないやうな心持がした。かれの抱いた個人主義は、今や愈々社會や周圍を切落して、獨り生きて獨り死なねばならないやうなさびしい冷たい個人主義になつてゐるのをかれは發見せずにはゐられなかつた。

六つと五つになる二人の女の兒は、終日、無邪氣なことを言つて、おとなしく仲好く奥の一間で遊んでゐた。

龍太がぼつねんとして、書齋の籐椅子に横つてゐると、をばさまごつこをしたり大人の眞似をしたりする聲がよく此方まで聞えて來た。

『よく入らつしやいました。』

その友達は、若い時には直覺といふことを重んじて、戀に天啓のあるといふことなどを常に口癖のやうに言つてゐた秀麗な青年であつた。星のやうにかゞやいた小さな一冊の詩集を抱いて、教會の會堂に胸のもだえの救ひを祈つたやうな人でもあつた。

『さうだね、昔から比べると、路が狹くなつたやうな氣がするにはするね。しかし、もうかなり深くは掘つたやうな氣がするね。』

などとも言つた。

その友達に龍太は言つた。

『何うも落附かなくつて困る……君にはそんなことはないかえ！』

友達は笑つて何も言はなかつた。『酒を飲むかえ？　矢張。』などゝ言つた

この友達は龍太の家にやつて來て、子供を大勢並べて、『皆な大きくなつたな。これがあの子か、大きくなつたな……まだ此間までこんなだつたつけ。』などゝ言つて笑つた。

ある友達は、

『君、相變らず飲むかね。』

『此頃は駄目になつたね。』

『そんなことはないだらう。この間、彼方に行つてゐたら、宜ろしく言つてゐたよ。ちつとも來ない

だね、武藏野の開墾といふことは德川時代に始まつたんだが、その時分のことを考へると中々面白いよ。板橋から川越へ出て行く街道があるだらう。あそこに野火止といふ村があるがね。あれが中々面白いところだよ。最初村を拵へた人が面白い人だつたと見えて、あそこの通りからは、何處まで行つても武甲山が眞直に見えるやうに村をつくつてゐるから面白いね。それからその多摩川から引いた疏水も、その出來た時のことがちやんと武藏風土記に書いてあるが、出來上つて三年經つても水が來ない。來ない譯がないとお役人達が不思議にしてゐると、其工事をやつた大百姓の一人が、何ァに、大丈夫です、きつと來ますと言つて信じて疑はなかつた。段々聞いて見ると、溝を掘つてから第一埃が以前ほどでなくなつた。それに野菜が近年になくよく出來た。溝には來ないが水は確かに來てるんだ。今にお待ちなさいと言つてゐる中に、三年經つて始めて水が來た。かういふことが書いてある。その疏水が今でも久米の方から來て、彼方此方を灌漑して、水車を動かしたり、食物を洗ふ水となつたりして、そして志木といふ村を通つて、川越の北から出る川の上を鐵管で越して、荒川に落ちてゐるから面白いぢやないか。』

かう言つて、其の友達はその他いろいろ研究した町やら村やらの興味のある話をして聞かせた。山の中に圍まれた煙草の出來る町の話をしたり、縣境にある丘の上の開けた町の話をしたりした。『何でも外國の智識ばかり豪いやうに言つてゐるが、日本人も隨分面白い意味のあることをしてゐるんだよ。』などゝ言つた。

かれは十年前のかれを想像した。その頃には、この二階もかう大きな、ガランとしたものではなかつた。かれは其時分には渇した人のやうな熱い希望を抱いてそしていつも其二階へと上つて行つた。通りに面したドアを明けると、いろ〳〵な西洋雑貨の並んでゐる店があつて、靴ぬぎのところに草履が二三足並べて置いてあつた。薄暗い光線の中で、本と本との間に人知れず挾まれてゐる新しい本をさがし出した時のかれの喜悦は果して何んなであつたらうか。かれは戀人に向ふやうにして、新しい紙の匂ひのする本に向ふのが例であつた。かねて註文して置いたフランスの短篇作者の全集が來た時などは、殊にかれには忘れられない深い喜悦の鮮かな印象を與へた。その日は雨が降つた。かれの毎日勤めてゐる二階の電話に、その店からその電話のかゝつて來た時には、かれはじつとしてはゐられなかつた。かれは無理に原稿の金の前借をして、そして雨を衝いてすぐその二階へと出かけて行つた。その熱した心の要求！それは今何處へ行つたらう。かれは棚の上にある本を出して見ては、すぐそれを元のところに入れた。かれは不幸福な生涯を送つたある詩人の詩集一卷と舊敎の教義を書いたやうな本とを買つて、さびしさうな顏をして其處から出て來た。

ある友達は地理と傳說とを一緒にしたやうな話をした。

『それは君、面白いよ、多摩川の水を荒川に落すやうな大工事を昔の人はしてゐるんだからね。さう

歸つて來た都はやつぱり依然としたもとの都であつた。寒い風は吹き、煤烟は靡き、電車の線は遠くうめくやうに鳴つた。妻の顏も矢張蒼白くさびしさうに見えた。『母さん行つて來ますよ。』かう言つてそして娘は學校に出かけた。

今年六つと五つになる二人の女の兒は『はアい、行つてらつしやい。』『左樣なら。』などゝ言つて終日無邪氣にをばさまごつこをして遊んでゐた。

雜誌記者は相變らず原稿の心配をして、誰の原稿は毎月遲くなつて困るなどゝ言つてゐるし、批評家は『今月の文壇のさびしさ加減はないね。何うだあの作の拙いことは。』などゝ言つてゐるし、町の通りの Café には、例の定連が集つて、椅子を一隅に集めて、何かがや／＼と嵐のやうな議論をやつてゐるし、何處に行つても、渇したかれの心に新らしい泉を湧かして呉れるやうなものは見當らなかつた。かれは外國の本を賣る大きな赤煉瓦の二階へもわざ／＼出かけて行つて見た。しかしそこにもダヌンチオがゐたり、イブセンがゐたり、ストリンドベルヒがゐたりするばかりで、かれの好奇心をさそふやうなものは一册もなかつた。それらの本に書いてある烈しい積極的な樂天說や、暗い佗しい灰色のやうな運命說や、皮肉な冷やかな人生觀や――さういふものも、始めの中こそかれの孤獨の伴侶ともなり、かれの思想の糧ともなつたが、今ではそれはもう何等の反響をもかれの胸に傳へなかつた。かれの求めるものは、もつと實際的のものでなくてはならなかつた。紙に書いた空しい言語では滿足が出來なかつた。

龍太の内の聲はかれに向つてかう叫んだ。橋の下には錆色をした水が漲り渡つて流れてゐた。猶は身動きもせずに立盡してゐた龍太の頬からは、やがて冷たい涙が落ちた。向うからは早立の旅客の橇が勇ましく橋を渡つて來た。

高い石階の上をかれは登つて行つた。雪片は巴渦のやうに下から上へと捲きあげられた。かれは蝙蝠傘を疊んで、吹雪の吹くのに任せて、そしてお宮のある高いところへと上つて行つた。

そこには眺望臺があつた。それは一日に北海の見渡されるといふ名高い眺望臺であつた。かれは勇氣を鼓して半鐘臺のやうな階梯に手をかけた。氷つた階梯はツルリと滑つた。それでもかれは登つた。蝙蝠傘が邪魔になるので、中途でかれはそれを下に投げ棄てた。かれは上へ上へと登つて行つた。中ほどにある眺望臺でもかれは猶足をとゞめなかつた。風雪は凄じくかれの體を天上に捲き上るやうに思はれた。一歩一歩かれは登つて行つた。頂上は四疊半位の狹い狹いところであつた。龍太は欄干に凭つて、そして遠く眸を放つた。風雪に包まれた北海は暗澹としてかれの前に展げられてあつた。此處から右に見えるといふ名高い遠い大きい島も見えなかつた。

龍太はそこで始めて都にかへる心を起した。

氣の立つ湯を盥に取つてその前に据ゑた。圍爐裏の傍で一あたりあたつてから、旅客は二階の室の方へと案内されて行つた。

長い庇の中に道がついてゐて、其中を人達はぞろ〳〵と通つて行つた。荒物屋、呉服屋、乾物屋、旅籠屋と軒は段々につゞいて行つた。何處の家の中も皆な一目に見えた。赤いメリンスの片や、莫大小のシャツや、青物の綠や、乾鮭や――さういふものが人の通る店先に一杯に並んでゐた。目のさめるやうな赤い蟹の足などもあつた。龍太の姿はこの中の通りに見えた。

町の盡きたところに大きな川が流れてゐた。それは重り合つた雪の白い山の中から流れ落ちて來て、これから平野に出やうとするやうな川であつた。長い長い橋が此方から向うに渡されてあつた。龍太は其處にも長い間立つてゐた。雪をわたつて來た寒い朝の風は、剃刀のやうにかれの顏を吹いて通つた。橋の下では、繫いで置いた舟を流されまいとして、船頭が三人も四人も寄つてたかつて綱を筏に結んだりしてゐた。龍太の前には雪の白い大きな山脈が續いた。

『この力――この力があるではないか。まだ、此の體と魂との中には、これほどに物を痛感する力がこもつてゐるではないか。お前は何故それを用ゐやうとしないか。それからお前の行くべき路が開けて行くではないか。……お前の前に横つてゐる年月の爲めに、お前は殘つた力を十分働かせなければならない義務を負つてゐるのではないか。』

り村があり人が住んでゐるかと思はれるやうなところもあつた。

龍太は所在の分らない寶をさがすやうな旅客であつた。ある夜は疲れて靜かに眠つた。ある夜は眼を闇の中にあけて終夜床の上に轉輾反側した。ある田舍の町では、吹雪に降りこめられて、三日三夜を其處に送らなければならなかつた。その室は二階になつてゐて、其處から中庭にある八ッ手の青い葉に雪の積るのが覗かれた。『今日もフキ。』こんなことを言つて女中は寒さうにバタバタと前の廊下を通つて行つた。

其處には政治運動にわざ〳〵遠くからやつて來たといふ樣な人も泊つてゐた。この雪の中でと思ふやうな堆雪の中で、今夜は演說會があるなどと言つて、カッパを着て、そして出かけて行く青年などもあつた。かれの向うの室には、毎晩遲くまで明りがついて、樂しさうに酒を飮んでゐる人達が泊つてゐた。

二階から下りて行くと、天井の高い古い座敷に大きな圍爐裏を圍んで、その旅籠屋の家族の人達が住んでゐた。厚い帳面を前にして、眼鏡をかけて、その家の老いた主婦は長い間其處に坐つて何か物勘定をしてゐたりした。神棚には大きな眼の白い達磨が置いてあつた。夜は燈明の灯に花が咲いた。夕方には、

『一晩御厄介になりやすかな。』

蓑も笠も一杯に雪に白くなつた旅客がかう言つて入つて來たりした。と、主婦は飛んで出て、『まアまア大變で御座んしたらう、このフキでは――』などゝ言つて、旅客の體の雪を丁寧に拂つてやつて、湯

命の本當の流れをつかむことが出來ないで、それで苦しんでゐるではないか。」龍太はかう飜へて考へた。

Giocondaのことがかれの頭に烈しい力で上つて來た。

傍を見ると、茶代の禮にさつき女中の置いて行つた此處の旅館の風景を撮した繪葉書が二三枚、そこらに散らばつてゐた。かれは蒲團の中から手を延して、それを一枚取つて、色鉛筆を包の中からさがして、女にやる文句をそれに書いた。

宛名を書いて、明日は朝早く女中に入れさせやうと思つた、かれはそれを行燈の傍に置いた。

あくる朝、其の繪葉書をかれは細かく破つて棄てた。勘定をして立たうとする時にもまだその細かい破片はあちこちに散らばつて白く見えてゐた。

龍太は矢張、生命の本當の流を何處に求めて好いか分らないやうな人であつた。海には日が當つてゐた。

北に進むにつれて、雪は愈々深くなつて行つた。何處まで行つても、人は樂しさうな顏をして笑つて暮してゐた。豚小屋のやうな汚い長屋にも、つぎはぎの襤褸が吊してあつた。

大きな停車場からは、軌道の狹い短かい鐵道が山奥の方へ向つてわかれて行つてゐた。掘立小屋のやうな小さな停車場は半ば雪に埋れて、掘つた穴のやうな中から人は出て來た。かうした山奥にも町があ

合になつて了ふんです。私は覺えてゐますがね。それは丁度六歳位の時でしたね。私が兄と仲好く遊んでゐると、キッと近所の可愛い女の兒か何か來て、兄と仲好しになつて、私はいつもそつちへ行けッて言ふやうな素振をされてしまふんです。私と何うしても遊んで臭れないんですね、その時ほど悲しいと思つた時はなかつたんです。兄さんが遊んで臭れない。かう云つていつも母のところに泣いて行つたんです。今、日本橋にゐる人ね。あの人などは兄と仲好しで、私はいつもそつちのけにされて了つて、よく泣いたもんですよ。……考へると、何うしても、私はさういふ不運なのかも知れませんよ。傍に放つて置かれる……さういふ星なのかも知れませんよ。私の母が矢張さうですから。それに、さういふ運と云つたやうなものは一生ついて行くもんでせうね。年が老つてからも、子供に傍に放つて置かれるやうになるもんでせうね。しかし、さうした星なら、仕方がありせんね。』

かう言つた妻の言葉が龍太の胸に力強く蘇つて來たりした。かれの通つて行く大きな道の傍にゐて、そして何處までもかれについて行くやうな女の生活をもかれは考へずには居られなかつた。

かれは到る處にかれの妻と子とを置いて想像した。丘の上の果樹栽培者にも、草分の事業をした百姓にも矢張さうした妻と子とがついて行つてゐた。龍太は過ぎて來た生活を考へて黯然とした。

……急に明るい女の顏がかれの渾べてを占領した。『自己に力、もし力が殘つてゐるとすれば、その力を與へて臭れるものはその女の明るい顏ではないか。生命の本當の流は其處にあるのではないか。生

取卷いてゐる。かれはCaféのドアを排して、其の中へ入つて行つて、長い間その片隅に坐つてゐるかれを發見した。酒も女給仕がさつきついで行つたまゝになつて置いてある。シガアも半分吸つたまゝになつてゐる。かれはをり〳〵長い苦しさうな溜息を吐いてゐる。幾組の人の群は出たり入つたりしてゐる。中には女を伴れた男などもゐる。棚の上に並べてあるいろ〳〵な色をした酒が電燈に照されてキラキラしてゐる。

龍太は長い間飲まずに放つて置いた酒に初めて唇を當てたかれを見た。と、其處にも此處にも女の顏は見え出して來た。灯の中にも、酒の中にも、かれの持つて來て讀んでゐる雜誌の字の行間の中にも……龍太は財布を出して、急いで金を拂ふかれを見た。かれは町の通りの方へと出て行つた。

氣が附くと、かれは女の方へ靡いて偏つて行く男の心を深く深く考へてゐた。波の音が屋を撼かすやうに聞えて居た。行燈の光がチラチラと動いた。

龍太は思ひめぐらした。『何故惡い。何故それがわるい。』かう心の中に叫んで、そしてかれは長大息を吐いた。かれの半生に絡み着いたさまざまの女の姿をかれは頭に浮べて見た。唯同じ家にゐる運命を持つた爲めばかりに、——絶えず顏を合せてゐる成行になつた爲めばかりに、五人の子供がやがてその間に生れて來たやうなかれの妻のことなども考へて見た。

妻はある時言つた。『私は何ういふものか、昔からさうでした。いつでも傍に放つて置かれるやうな具

何遍かれは其處から引返すことに力を費したらう。何遍かれは意氣地のない自己と腹立しい自己の姿とを罵つたであらう。かれは百日の忍耐を一刹那の中に破壞し去つた。離れた心を忽ち元の艮の中に押込めて行つた。――かれは煩悶した。かれは夕方になると、いつもじつとしてさびしい書齋の中に落附いてゐられないかれを見た。細君は悲しさうな、しかし笑ふやうな調子で、『貴方は何うしても家には落附いてゐられないんですね。』と言つた。龍太は闇の中にその姿を沒して行くかれを見た。時にはかれは勞働に逃げやうと苦心した。『さうですとも……若い青年時代に運動の必要なのはその爲めですとも、肉體を勞らせて了はなければ――ヘト〳〵になるほどに肉體を勞らせて了はなければ、性慾に打克つことが出來ないものです。』かうかれはある若い青年に向つて言つたことを思ひ出した。かれは机にのみ頭を向けた。『勞働――勞働――』かれはかう喘ぐやうに叫んだ。しかしその叫びのいかに弱く力の乏しかつたことよ。勞働は忽ちかれに叛いて向うに行つて了ふのに躊躇しなかつた。

感覺は忽ちかれを輕い肉の痛みに伴れて行つた。女は男の耳を柔かに嚙んだ。柔かな輕い肉の痛み！それは今でもかれの感覺の上に生々として殘つてゐた。かれの體も魂も忽ちそつちへと偏つて行つた。

夜每にかれは明るい町を步いた。サツポロビイルの廣告塔は赤くなつたり青くなつたりしてかれの眼の前を通つて行つた。電車が行つたり來たりしてゐる。群集が波を打つやうにひろい明るい街を通つて行つてゐる。其處にも此處にも料理屋の灯がかゞやいてゐる。快樂を誘ふ空氣は濃く厚くかれの周圍を

聞えた。ふと三味線の音がした。

さつき見た色彩を龍太は思起さない譯に行かなかつた。この旅館に入つて來た時第一にかれの眼に着いたのは、長い袖をひるがへした二三人の雛妓が廊下のところに固つて立つて何かコソコソ話をしてゐる光景であつた。『あれだな！』龍太はこんなことを考へながら、波の音と松の音とに雜つて靜かな冴えた三味線の音を聞いた。

『靜かに考へやう。』かう思つてかれは女中のさつき敷いて行つて呉れた温かい蒲團の中に身を入れた。何處の室にも、その近くには客のゐるやうな氣勢もなかつた。枕元には古風な行燈がついてゐた。ふと見ると、其處には何か書いてあつた。――去りし女房の形見とて行燈に殘せし針のあと――そこにはその昔の小唄が書いてあつた。

『靜かに考へやう。』

しかし龍太は靜かに考へることが出來たであらうか。かれは思ひもかけない惡魔が忽ちかれを襲つて來るのを見た。それは Huysmans の所謂 Florence であつた。耳を嚙むことに興味を持つた艶やかな巧みな表情と笑とを持つた女であつた。

恐ろしい Flesh だ。忽ちかれはその方へ體も魂も奪はれて行つた。其處に龍太は居た。明るい灯の中に靜かな音樂の中にかれはかれの爛れた姿を發見した。悶えた神經と勞れた魂との中に……

その女中は笑ひながら答へた。

折角、海が近いのに、雨戸を閉めて置くのもつまらない。『明けられないのですか?』かう龍太が女中に訊くと、『でも、風がヒドウ御座いますから。』かう言つて躊躇してゐたが、それでも立つて行つて二枚ほど前の雨戸を明けて呉れた。しかし矢張それは徒勞であつた。海と室との間には、高い風除の声垣が出來てゐた。微かに海の微光を見ることが出來るばかりであつた。風を帶びた吹雪は時の間にその明けた緣側を濡らした。

一枚毎に雨戸についてゐる明り取りの硝子から明るい光線が室の内に微かにさし込んで來てゐた。始めは暗く陰氣だと思つた光線にも龍太はやがて馴れて行つた。家の周圍から襲つて來る海の音と松の音とはかれの心を底深く落附かせるに十分であつた。かれは女中が火を入れて呉れた火燵に身を寄懸けて、つめたい欅の火燵板に長い間熱したかれの頰を當てゝゐた。

遲くなつてかれは風呂場に案内されて行つた。風呂には綺麗な湯が漲るやうに沸いてゐて、赤く熱した鐵砲は、入ると、ジ、ジ、と音を立てた。中にはコオクスが赤く見えてゐた。

『何年振りの靜けさだらう。かうした靜かな心持を自分は何時經驗したらう。』

こんなことを考へながらかれは長い間湯に浸つてゐた。海の鳴る音が微かに何處かで聞えてゐたかと思ふと、遠くの室で鳴る呼鈴の音に返事をして、長い廊下をバタバタ輕く女中の駈けて行く足音が靜かに

大きな鳶の翼のやうな暗い雲は海の半面を凄じく蔽つてゐた。やがて吹雪はしぶいて來た。凄じい煤烟と、海と、吹雪と、暗い地獄のやうな隧道とが續いた。

時の間に海は雲に包まれて了つた。隧道を出た時には、吹雪と煤烟との渦を巻いた中に微かに暗い波の轉つてゐるのを見るばかりであつた。凄じい音を立てゝ汽車はまた長い隧道に入つた。

龍太は妻や子供の事を考へてゐた。何うした聯想がさういふところにかれをつれて行つたか、それは龍太かれ自身にもわからなかつた。立つて來る夜、『父さん、何處かへ行くの？』かう言つて眼を丸くして父親の方を見た男の兒をかれは思ひ出してゐた。『歸つて行つたつて、矢張同じ生活だ。同じ女と、同じ人間と、同じ社會とが自分の周圍にあるばかりだ――』

暗澹とした海がまた見え出した。

『靜かに考へよう。』

かう思つて來た願をかれは漸く滿足させることが出來るやうに思つた。それほどその室は靜かであつた。入口の帳場から此處まで來るには、長い廊下を通らなければならなかつた。若い娘々した、友禪の赤い帶をしめた女中が初めに其處にかれを案内した時、龍太は訊いた。『隣の間にお客がゐるんですか？』

『いゝえ。』

活とした。神經のコナ〴〵に粉碎されるのを見て我々は喜んだ。無邪氣と誠實とを見て我々は笑つた。我々は人間の持つた渾べての惡德を實行することを得意とした。我々の生活には惡づれと、皮肉と、玩弄と、掠奪とがあるばかりだ。涙は笑ふべきものとして卻けられ、同情は憐むべきものとして葬り去られた――我々の生活の一つを聞いても、かれ等はその恐ろしさに戰慄するであらう。かれ等は眼を見張つてさういふ生活があるかと驚くであらう。』

それからそれへと龍太の考は續いた。龍太は涙の頰を傳つて落ちるのを知らなかつた。

海近い停車場には、さういふ人達が澤山に見受けられた。籠を五つも六つも重ねて、赤い脛を出してプラツトホオムを彼方から此方へと驅けて歩いてゐるものなどもあつた。靑い色をした魚の籠は窓の外を行つたり來たりした。『何うだ、ア？』などいふ聲が窓から聞えた。

停車場を幾つか通り越した。その大漁のあつたといふ村をも通つて行つた。不思議にも其處は靜かであつた。赤い模樣のついたドテラを着て、漁師が二三人ブラ〳〵歩いてゐるのを見るばかりであつた。藁葺に板葺の交つたヂツクザツクした漁村の向うには灰色の海が遠く展けて見えた。

波除の長い板塀を波は凄しい勢をして越して來た。窓は明けられなかつた。暗澹とした海――暗い灰色な波頭ばかりを徽白く見せた海は、大きなロウルをころがしたやうに絕えず岸に押寄せて行つた。

ゐる男がこんなことを言ふと、『なァに、矢張駄目だよ。汽車賃が出る位のもんだよ。』などと噂達の一人は言つて笑つた。

『己が濱よりか、新濱の方がしつかり捕れるぞえ。それはえらい衆だ。』

なぞと一人は言つた。

夜はもう明離れてゐた。太い鐵色した腕、肥つた脂切つた顏、疎い唇、動物に近い單純な眼などが其處にも此處にもあつた。龍太はさうした女の生活を頭に浮べて考へずには居られなかつた。かれは心の躍るのを覺えた。『かうした生活から比べたなら、自分等の生活は何んなにだらけた、爛れた、みだらな生活であつたらう。かれ等の生活は體のすべてに力といふ力が充ちわたつてゐるやうな生活ではないか。……しかし、自分には出來ない。原始に近い、本能ばかりで生きてゐるやうな生活はもう自分には出來なくなつてゐる。種々な罪惡や、習慣や、惡德や、陋劣な卑怯な考や、さういふものがしつかりと自分等の生活には固く絡み着いてゐる。虛飾の殼だの虛僞の殼だの社會の殼だの、いやそれ等の何よりも恐ろしい淫蕩の殼が自分等の體に常に無限の浪費を要求してゐるではないか。自分等はその爲めに疲れた。その爲めに魂を削られた。その爲めに肉體をそがれた――』龍太は猶續けた。『肉で肉を削ぐのも平氣の生活だ。魂で魂を亡すのも何とも思はないやうな生活だ。快樂を追求するに滿足せずに、我々は快樂を玩弄した。我々は本能の命ずるものを幼稚として、本能を玩弄することを却つて貴い意義のある生

がもうありやしねえ。』龍太が茶を買つて熱いのを吹き〳〵飲んでゐるのを見て『お茶屋はそれでも好いなァ、一杯位ごまかしたッて、主人にはわかりやしねえんだから……そこへ行くと、己達の主人は大變だ。一々數へて見るからなァ。』

郵便脚夫は默つて足をコツコツさせて、時間の來るのを待つてゐた。

汽車は赤い焰を堆雪の中に漲らしてやがて遣つて來た。闇と滑る氷道と雪と微暗いランタンとがさびしい旅客の前にあつた。龍太は刺すやうな寒氣に身を震はせながら、列車の中に入ると其まゝ堅い窓に體を寄せかけて眠つた。

箒のやうな髮をして、汚れた青縞の筒袖を着て、草鞋をはいた嬶達が、ドヤドヤと三等室に入り込んで來た。魚を入れて來た丸い籠を五枚も六枚も重ねて持つてゐるものもあれば、天秤棒を突立てゝそれに凭りかゝるやうにして立つてゐるものもあつた。ある嬶の持つた財布には錢が重さうにチヤラチヤラと音を立てゝゐた。

腥い磯の臭ひが俄かに室内に漲り渡つた『えらい漁だ。三十年以來ないッていふ話だぜ。鰮の集つてゐるのはそりや凄いもんぢやでな。漁師がその上に乘つかつても落ちるやうなことはねえさうだ。こゝにゐる上さん達は、皆な濱ぢや安いから汽車に乘つて昨夜此處まで持つて來たんだ。いゝ捗ぎだぜ。』傍に

『寒い、寒い。』
かう言ひながら外から突然此方へ入つて來るものがあつた。それは矢張仲賣の一人で二十になつたかならないか位の少年であつた。いきなり茶を賣る男の前に腰をかけて、微かになつた火に手をかざしながら、『寒い、寒い、最終は一番辛い。』
『また、寢ばなを起されたんだらう。』
郵便配達夫は笑ひながら言つた。
『とても堪らない。こんなところにつとめてゐちやうだつが上らねえ。もう逃げることにきめた――』
少年は大きなあくびをしながら、『おゝ寒い。べらぼうに寒い。雪が一丈二尺もあるんだから、無理はねえやなァ。……本當にもうつとまらねえ。一文だッて殘るぢやなし、折角好い心地に寢てゐれば起されるし、辛けりや辛いで旨いことでもあると好いけど――全く冬はかなはない。』
『全くだよなァ。』
茶を賣る青年が傍から調子を合せた。
『己だッて立身しなけりやならねえからな。親もあるんだからな。もう逃げるにきめた。二三日經つたら逃げるんだ……。こんな寒いところに物好にゐないたッていくらも好いところがあらァ。』
また大きなあくびをした。ありもしない火を足で搔廻しながら、『汽車の奴ァ、しみつたれだなァ。火

龍太は旅行案内をひろげて見た。最後の下りが十一時に此處を通つて行くことになつてゐた。かれは危難から救はれたやうな氣がした。晝間通つた路だ。停車場まではわけはない……かう思つて、時間が來たら立つて行くことに腹をきめて、そして獨り女の饒舌るのに任せてゐた。

一時間ほど前に、かれは立つ支度した。女は吃驚したやうな顏をしてかれを見た。あてにした金を取ることの出來なくなつたといふことが一番女を失望させたらしく見えた。『いゝぢやありませんか、もう遲いから。』かう言つて女は執念く引留めた。

晝間通つた路はすつかり氷つてゐた。電燈の柱がところどころに立つてゐるので、路には迷はずに下に下りて行くことが出來たが、靴を穿いてゐるので、滑つて幾度深い雪の中に身を埋めたか知れなかつた。闇の中には谷川が音高く流れてゐた。

停車場にはランタンが微暗くついてゐた。東京の方へ出す用事の端書を書いて持つてゐたので、かれは停車場に入る前に、入口にある小さな郵便函を手さぐりにさぐつて、それを入れて、そして停車場の中へ入つて來た。見ると、其處に僅かな火を前にして、二人の青年が腰をかけてゐた。一人は茶を賣る仲賣で、一人は郵便配達夫であつた。

『氣の毒ですけれど、今、あそこに入れて來たんですが、出して來て呉れませんか。』龍太がかう頼むと、配達夫は立つて行つて、もう一度鍵を明けてその端書を大きな鞄に入れて呉れた。

笑ひもせずに、かうまともに龍太に訊かれて、『いやだよ、旦那は――これでも旦那より若いつもりだよ。』

『それや僕よりも若いだらう。』

龍太は笑はずには居られなかつた。

『旦那は丁度位だらう。私はこれでもまだ丁度になるには一二年間があるんだよ。』

かう言つて女は快活に笑つた。

女の話す言葉の中から、龍太は女の生涯を略知ることが出來た。生れは新潟だと言つた。つい昨年までは直江津にゐたと言つた。其處で女はつまらぬ若い男に關係して、やがて愛想をつかして、出刄庖丁で追ひ廻されるやうな目に逢つて、そして此處に暫し身を躱してゐるのであつた。

『これさへやらないと好いんだけども。』と親指を出して賭博を打つ眞似をして『これをやつちや、末の見込が立たないからね。』

女は命じもしないのに、酒の代りを持つて來たりした。註文もしないものを、『好いでせう。』と言つて無理に持つて來てお膳の上に並べたりした。龍太よりも先に先づ女は醉つた。靜かに考へやうと思つてやつて來た龍太は此處にも恐ろしい罪惡の生活の横つてゐるのを見た。龍太はこの女とこの夜を過さなければならない不愉快を想像して、やがてかうしては居られないやうな氣がして來た。

の生活の中に入つて行かなければ――その中に入つて神經を過敏にしたり、慾情を盛にしたり、人と爭つたり、酒を飮んだり、女に戯れたりしなければ生活して行かれないやうな生活をかれは呪はずに居られなかつた。

中年の女がやがて龍太の前に夕飯の膳を運んで來た。それはいやに〳〵した赤い色の袖をピラシヤラさせてゐるやうな女であつた。寒さを凌ぐために一本つけさせた酒を何うしても自分で酌をしなければすまさせないといふやうな調子で、いきなり龍太の當つてゐる火燵の向う側に、『御免なんし。』と言つて上にかけてある蒲團をまくつた。

龍太はその女のするさまをじつと見てゐるやうな人であつた。さういふ女の生活を飽きるほど見て來たかれには、容易にかうした調子になつて行つた女の半生を知ることが出來た。卑しい笑ひ、厭はしい表情、人を人と思はない素振――さういふものにかれはもう飽きた。かれは唯見詰めてゐた。

女は一人で饒舌つた。

聞きもしないことが段々その唇に上つて行つた。『私にも一杯頂戴ね、好う御座んすね。』かう言つて自分で酌をして飮んだりした。『それはこれでも苦勞してゐたのよ。こんな雪の中に來てるのも男の爲めだよ。』などゝ言つて卑しい笑ひ方をした。

『いくつになるね。』

少し行くと、今下りた停車場はすぐ下に手に取るやうに見えた。レイルが長く長くつゞいてゐた。壞れた貨車が一臺遠く離れて置いてあつた。それに夕日が當つてゐた。谷川の水の音がザアと聞えた。高原の上のやうなところにその溫泉場はあつた。二階建の家屋が半ば雪に埋れて、湯氣が家々の浴槽から白く颺つてゐた。道の眞中にある大湯からは手拭を下げた浴客達が出た。

三十分後には、龍太は大きな二階屋の下の六疊の火燵に當つて、雪に埋れた溫泉場のさびしさを頭に浮べたりなどしてゐた。浴槽は廊下を通つて行つたところにあつた。長い間を山から引いて來た溫泉は、もう餘程溫くなつてゐた。寒いので容易に出られないで龍太がゐると、其處にさつきの巡査が入つて來て、『寒いですな。』などと言つた。生れは栃木縣で三年前から本縣に來たなどと頰髯の多い中年の巡査は龍太に話した。

その巡査達は二階の大きな一間にゐて、酒を飮んで、元氣な聲で、唄などをうたつてゐた。それが龍太のゐる下の座敷まで聞えて來た。それが龍太には羨ましかつた。『生效のある生活と言ふのは、何ういふ生活だらう。努力の生活だらうか。歡樂の生活だらうか。……それは何方にしても、兎に角、心を打開いて、束縛を脫して、安んじてこの世に生きて行く生活であらねばならない。』こんなことを龍太は考へてゐた。龍太の頭には都會生活の痛い刺戟、無意味に空虛な交際、人にさへ逢へばジロ〳〵顏を見られるやうな突詰めた生活があり〳〵と見えて來た。あさましいやうな恐しいやうな淒しいやうな生活。そ

た人足達の吹雪の中に包まれて立つてゐるさまが微かに窓の中から見えたりした。ある處では綺麗な繪のやうな谷川に添つて汽車は凄じく駛つて行つてゐた。

もう日の暮れる頃であつた。ある停車場からある溫泉場に行く路を龍太は步いてゐた。午前から午後にかけて降つた吹雪は一時止んで、青い空が覗くやうに灰色の雲の中から見られた。夕日の彩やかな光線が雪の上に斜に明るくさし渡つた。

それは停車場のある町から、谷川の崖に添つて上へ上へと登つて行くやうな路であつた。電信柱がところ〴〵に立つてゐて、その向うに路のついてゐるのが指された。

劍をガチャ〳〵言はせて巡査が三人ほど龍太の前を話しながら步いて行つた。停車場を出た時、龍太がその巡査の一人に訊いた。『溫泉まで餘程ありますか。』とその巡査は振返つて、『私達も行くんです。何ァに三四町位なもんです。私達についていらつしやい。』かう言つて前に立つた。

『溫泉宿では何處が一番好いんですか。』

『それも、私達の行くところが一番大きい家です。一緒にいらつしやい。』

で、龍太はその跡に跟いて行つた。巡査達は頻りに何か話してゐた。縣から巡回の警部が來たので、それを御馳走してやらうといふ計劃らしかつた。一人は部長だつた。

かれの身を寄せた壁は雨にぬれて冷めたかつた。かれは其處で自分の半生を考へた。かれの頬は涙にぬれてゐた。『誰も自分の心は知らない。』其時かう言つて、かれはその涙を右の手に拭つた。

龍太は汽車の中を見廻した。絆纏を着た男がすぐ其前にゐた。その隣には子供に乳を呑ませてゐる色の褪せた女がゐた。向うの方にはこの近在の娘だらうと思はれるメリンスの帶をしめた女づれが二三人外を指して何か語り合つてゐた。龍太は不思議な氣がした。氣が附くとこの堆雪の中を走つてゐる汽車の中の一室の存在といふことをかれは考へてゐた。『存在といふことが不思議だ。かうした人間が存在してゐるといふことが不思議だ。自分のやうな人間とかういふ人間とがかうして此處にあるといふことが不思議だ。』

ある停車場は、丁度越えて行く大きな山脈の背のやうなところにあつた。雪は降り出して來た。今朝日影に輝いた大きな山はすつかり灰色の空の中に埋れて、灰のやうな細かい雪片は、物を賣る男の新しい桐油の上にチラチラと落ちた。

『また吹かなけりや好いが。』

かう誰かが言つてゐた。

人足達は鋤で雪を掬つてそれを堆雪の上へと投げてゐた。

山脈の靡いた上を汽車はやがて通つて行つた。そこでは雪は少くとも一丈以上あつた。雪かきを持つ

その上に半鐘臺だの電信柱だのが立つてゐる。大きな氷柱の並んでゐる軒なども見えた。雪をまるく切り拔いた中には、子供の遊んでゐる緣側や、手水鉢や手拭や萬年青の鉢などが見えた。此方から向うへとレイルを越えて行く簑笠を着た旅客などもあつた。

『そこには大きな酒屋がある筈だ。』

龍太はこんなことを考へて、その中にその見覺えのある家屋を見出さうとした。しかし汽車は早く通つて行つて了つた。

眼に映つて行く山だの木だの宮だのと、頭に見えてゐる若い愛嬌のある女の顏とは暫くは一緒になつて、かれの心に絡み着いてゐた。しかし、そんなことは皆な過去だ。創痍の痕さへ殘してゐない過去だ……。

かれは何んなに堪へ難い夜を送つたらう。『男の一分が立たない。』かう叫んで、とめる細君をつき離して、そしてその闇の中を衝いて出かけて行つたこともあつた。かれは闇の中に立つてゐるかれを再び眼の前に描き出すことが出來た。……微かな聲……明るい光……人の輕く步いて行く足音……。

門から人の入つて來る氣勢がした。かれは蝙蝠のやうにひたりと其身を暗い壁に寄せかけた。やがてマッチをする音がして、パッと暗い闇が明るくなつた。其處に青白い背の高い男の顏が見えた。やがて火は消えて、再びもとの闇にかへつた。

てそして水を汲んだ。かれは口を釣瓶に當てゝ、ガブガブと水を飲んだ。さも〳〵渇いた心を潤すもののやうに――。

井戸側に積つた雪はバサと音を立てゝ水の中に落ちた。

停車場の前のある茶屋では、白粉を顔に塗つた筒袖を着た汚ない酌婦が厭に人の顔を覗き込むやうにして酒を勸めた。膳や徳利などの一杯に並んでゐた棚、鬚の生えた狡猾さうな顔をした爺、燒こげのところ〴〵にある疊、絲屑やら埃やら鼻紙やらの雪の雨滴の上に落ちてゐる廊下――そこからかれは遁れるやうにして停車場へと行つた。

汽車は喘ぐやうに凄じい音を立てて積雪の中を進んで行つた。レイルの兩側には雪かきを持つた人達が汽車の通つて行く間を傍に偏つて休んでゐた。雪は次第に深く深くなつて行つた。

谷川の細く流れてゐる傍を掠めて通つて行つたりした。大きな樹の梢近くまで雪の積つてゐるやうなところもあつた。何處を見ても唯白かつた。山の裾の深い谷に靡き落ちてゐる斜面には枯れた木の枝が針のやうにツンツン立つてゐるのが見えた。大きな山脈の背に當るやうなところを汽車は此方から向うに越えて行つてゐた。

雪に埋れたある町は、丁度其の背中を此方に見せてゐるやうであつた。家屋と堆雪とは殆ど平行して、

たところを向うの方へと出て行つてゐた。低い丘に凭つた人家がまともに朝日に照されて、點々として黑く雪の中に見えてゐた。龍太は一度、二度、――三度まで振返つて見た。送つて來た友達も長い間その橋の袂のところに立つて此方を見てゐた。最後には手を振つたのを龍太は見た。

『空虚は依然として空虚だ。何うにもならない。破產した自己の思想に、一點の光明を放つて呉れるやうなものは矢張無かつた。自分は何處までも自分で行かなければならない。自分のことをするものは、自分より外に何もない……。自分は長い間、友達を信じた。自己の周圍を信じた。世の中を信じた。然し、友達は自分に何をして呉れたらう。自己の周圍や世の中は果して自己の爲めに何をして呉れたらう。……四十以上になつて、かうした思想の空虚に出會さうとは誰が思つてるだらう。……しかし、そんなことを思つたつて仕方がない。空虚なものは充實させなければならない。自分で、自分の力で……。』

こんなことを考へながら、龍太は歩いた。『自分で、自分の力で……』かう再び叫んだかれは、自己を振返つて考へて見ない譯には行かなかつた。空虚と戰ふことの辛さが犇とかれの身を襲つて來た。自己の力も自己の體格もそれに打克つことが出來ないといふことを考へてかれは黯然とした。眩しく反射した光線はキラキラとかれの頭を眩惑させた。

ふと見ると、そこに井戶があつた。かれは小さな包を雪の上に置いて、井戶に伏せてある釣瓶を取つ

る男の小屋はまともにその日影を受けてキラキラと雪に閃いて見えてゐた。
『もう澤山です。あまり遠くなると、歸るのが大變だから。』
かう言つて、龍太は友達の遠く送つて來るのを辭した。
『なァに、まだ、此處はわし共の村の中ですから……いゝえ、何ァに、歸るッてわけはありやしません。まァ、もう少し行きませう。いつまたお目にかゝれるか知れやしないんですから。』
二人はまた歩き出した。
それは丘の蔭になつてゐるやうなところであつた。路は川に添つて眞直に向うについてゐた。簑を着て、ガンジキを穿いた男が、すれ違ひさまに丁寧にお辭儀をして行つた。笠のやうな形をした大きな松の枝からは雪が朝日に溶けてばらばらと雫になつて落ちてゐた。
やがて谷は盡きて野は二人の前に展けた。水車の氷つて動かなくなつたのなどが其處にあつた。
二人の立留つたところには橋がかゝつてゐた。
『ぢや東京に來たら、是非寄つて呉れたまへ。何うも遠いところを難有う。』
『ぢやお別れしますかな……折角、お出下すつても、何もお構ひするやうなものがなくつて……え、さうです。こゝから向うは外の村になつてゐるんです。ぢや大事に行つていつらしやい。』
橋を渡つて行く龍太の後姿はさびしさうに此方から見えた。路の低い丘の上から、百姓家の垣に添つ

積り方が少いんですから、そんな氣味が何處かにあるか知れませんよ。あの家は、村の者が溫泉を始めるなんて言つて建てたんですが、矢張思ふやうに行きませんでね。……資本が少いものですからな。』友達はかう龍太に言つて聞かせた。

やがて路の傍にあるその明家の中に入つて行く龍太の姿が見えた。龍太の眼には、やがて鐵色をした水の一杯に湛へられた汚ない大きな浴槽が映つた。一度浴客が衣をぬいで入つたらしい棚の跡なども其處此處に殘つてゐた。

龍太はやがて其處から出て來た。

『汚くなつてゐるでせう。』

『え、隨分ひどくなつてゐる……。しかし、折角思ひ立つたんだから、もうすこしやつて見れば好いのに……それにしても、分析はして見たんですか。』

『縣廳の技師か何か賴んで來て、何かゴトゴトやつてゐましたけども……碌なことは何うせ出來やしないんですから。』

『見込があるなら惜しいもんだ――。』

『なァに、あなた……。』

二人は默つて步いた。朝日は美しく谷合にさし込んで來てゐた。振返ると、あの果物栽培をやつてゐる

穿いた友達の丈よりも餘程高く見えた。龍太の歸るのを村外れまで友達は送つて行くのであつた。

龍太はこの山の中に來て始めて住んだ百姓のことなどを考へてゐた。路も其時分には無かつたに相違なかつた。林と草藪ばかりであつたに相違なかつた。その林の木を伐倒し、草藪を刈り、荒地を耕し、そして段々村らしい村にして行つた人達のことがかれの胸に往來した。隙間の多い板張りの小屋や、傍に立てかけてある鋤犂や、土を運ぶための畚や、ぶすぶす燻りながら終日燃えてゐる焚火や、さういふものもかれの眼の前に浮んで見えた。事業を始めた人々の生活がまたしてもかれの無意味な頽廢した生活に引較べて考へられた。『いつそ百姓にならう。北海道の曠野の中にこの身を埋めて了はう。さうすれば何の事もないのだ。其處には女の幽靈もやつて來ない。世の中から來る針でさゝれるやうな刺戟もやつて來ない。皮肉なあのキヨロキヨロした氣味のわるい眼を氣にしないでも好い。頭の上には唯青い空があるばかりだ。キラキラした星の影があるばかりだ。』一月ほど前かれはこんなことを考へた。それがまたかれの頭に力強く蘇つて來た。

『一町、五百圓位――さうですかな。東京近在から比べれば安いもんですな。』

かれはこんなことを言つて歩いてゐた。まだ耕されない草藪や森や荒地が到る處にあつた。ある山懐のやうな處には、昔だの薄だのの雪に埋み殘されてある向うに小さい家が一軒しよんぼりと立つてゐた。

『此處のところは不思議なところでしてね。昔から湯が沸くツて言はれたところですがね。冬でも雪の

『妻は餘り進みませんでしたけれど……無理にすゝめてやつて來たんですが。』主人はそんな處まで話を持つて行つた。

『それは雪がひどいんですから――北海道よりもひどいかも知れません。それに土地のものが旨くつかへませんや――』

こんな話もした。龍太はそこに一時間ほどゐた。葡萄や林檎の話を何彼と聞いた。歸る時には、主人は外まで出て送つて來て呉れた。――其夜から恐ろしい吹雪が始まつた。空には灰色の暗い雲が蔽ひかかつて、輕い細かい雪片が下から上へと渦まき上つた。東京の客をたづねて來た村の人達は、途中まで歸つて行つて、とても駄目だと言つて、また引返して來た。

龍太は終夜眠られなかつた。山の上の小さな家が絶えず彼の眼の前にあつた。

『かういふ夜はたまらんよ、あの山の上にゐては――』かうさつき誰かが言つた言葉がそれからそれへと思ひやられた。『それでもまだ好いかも知れない。都會の中の暗鬪默鬪よりも好いかも知れない。』

龍太はかう思つて、明るい都會の灯を眼の前に浮べて見たりした。風雪は荒れに荒れた。

『さうですね、此處等の田地はまだ安う御座いますよ。』

龍太の友達はこんなことを言つた。龍太と二人並んで歩いて行く路は、白い雪の中に一筋眞直に踏み固められてあつた。細い谷川は紺青の色をして寒さうに路に添つて流れてゐた。龍太の背廣姿は足駄を

姿の客を見た。傍で子供に乳を飲ませてゐた上さんは、半ば身を起して此方を見た。

『飛んだお邪魔をしますけれど――』

かう言つて龍太は來意を告げた。

收稅吏とでも思つたらしい不安が始めてとれたといふやうな顏をして、主人はやがて龍太を圍爐裏の傍に導いた。『いや――私等駄目です。失敗の歴史ですから。』主人はこんなことを言つて、龍太の顏を見た。龍太の眼には悲慘な生活狀態が窺はれた。

『イヤ。もう駄目です――何しろ、寒いですから、御覽の通りの雪ですから。』

主人は新に楢の細いのを一つ二つ圍爐裏の中に入れた。ぱつと燃えた火は、小さい室を明るく見せた。

『この向うの山の下のところに目をつけてやつたんですけれども……何うも思ふやうに行きません。何しろ、雪が多過ぎますから。』

『もう餘程やつてゐるんですか。』

『もう五年になります。今年こそ、今年こそと思つてやつて見たんですけれど……何うしても駄目です。』

それは東京に長くゐて、多少は其途にも經驗のある人であつた。何うしても、しつかりした基礎を固めなければならないと思つて、此向うの村に知人のあつたのをたよりに、俄かに此處に移住して來た。

『なァに、東京もんでさ。』

『行つて見たいもんですね。この雪でも行かれるでせうか。』

『行つたッて何もありやしません。』

『さうですかね。』

しかし龍太は出かけて行つた。村を離れてから、少し行くと、其處に小さな谷があつた。碧い水が此方の岸に偏つて流れてゐた。橋を渡ると、細い路がついてゐた。かれは其處をつたつて、一歩々々登つて行つた。路が細いので、靴が滑つて、幾度となくかれは膝をついた。

丘の上はやゝ平らかになつてゐた。葡萄畠の雪に埋れたのが其處にも此處にもあつた。林檎の畠らしい竹の棚が半分壞れかけてあつたりした。

小さい家は其奥にあつた。

さうした光景は不思議にもかれの胸に强いある印象を與へた。何んな生活でも、新しい生活、まことの生活、かう考へたかれには、因習の多い村の人達の生活よりも却つてさういふ生活が意味深く感ぜられた。『御免なさい――』かう挨拶して龍太はその小家の戸を明けた。

圍爐裏の火に燻つてゐる大きな榾火が先づかれの眼に映つた。薄く靡いた烟――その中に年の頃四十二三と見える、鬚の深い、丈の高い大きな男が坐つてゐたが、吃驚したやうにして突然入つて來た洋服

『さうですな、雪でも解けねえぢや、お墓のお參りは出來ねえな。』

こんなことも言つた。

かれはそこから引返した。

『あれは何です？』

朝日の當る丘の上を指して龍太は訊いた。そこにある小さな家は半ば雪に埋められてゐた。

『何ァに、あれは葡萄だの林檎だのを栽培してゐるんです。』

『土地のものですか？』

『いゝえ、他所から來たんでごわす。……碌なものも出來ねんでさ。』

『一體、葡萄など出來るんですか。』

『資本を多くかければ、出來ないこともごわすめいが——資本をかけないでは、何をしたつて駄目でがんさ。』

丘の向うには、大きな山が雪に包まれて、キラキラ朝日に光つて見えてゐた。

他所の人といふ言葉が第一に龍太の好奇心を惹いた。他所からかういふ山の中に來て、村の人々から全く離れてさういふ處で果樹栽培をやつてゐる人の生活が見たくなつた。かれは言つた。

『近所の人ですか。』

もならなかつた。齒を黑く涅めた上さん、弓のやうに腰が曲つたお婆さん、汚い着物を着て青い洟を垂した娘、さういふ中で送つた人達の生活は決して羨しいものではなかつた。『平和――唯平和があるばかりだ。爛れた平和は、生きながら墓の中に入つて了つたやうな平和だ。しかしこれでも猶、都會の生活よりまことの生活に近いだらうか。目覺めた生活は此處にもあるだらうか。』龍太は緣側から雨滴の落ちる細い雪路を厠の方へ歩きながら、こんなことを考へたりした。

雪は軒近くまで高く積つてゐた。ある家では、裏の方がすつかり家根から一面に埋められてゐるので穴居の民のやうに深く穴を掘つて、辛うじて其中に往來することが出來るやうにして置いた。南に面した室が唯日に向つて明けられてゐるばかりで、裏は何の家でも皆戶を深く閉めて置いた。

龍太は以前來た時のことを繰返した。其間に過ぎ去つた年月と、生れたり死んだりした人のことなどが絕えずかれの頭にあつた。かれは雪の中につけられた細い道を通つて、村の方へと行つて見たりした。矢張同じ鎭守があつたり寺があつたりした。

寺の墓地の中には、かれの知つてゐる男が一人埋められてゐる筈だつた。龍太はせめてそこに行つて、お詣りしようと思つて出かけた。しかし、雪が深いので、寺の本堂の前にすら行くのが容易でなかつた。

『墓場には道がつけてありませんでな。』

かう寺男は言つた。

雪に半ば埋められたやうになつて、人家がポツ〳〵其處此處に見えてゐた。日はまだ昇らないが、朝日の光は既に明るく四邊に漲り渡つてゐた。その光を受けた山の雪は薄紅色に輝いてゐた。眠むさうな顔をして戸を明けてゐる女などもあつた。ある家では、手桶を下げて、雪道を傳つて、家の前にある井戸端に水を汲みに來ようとする婆さんなどもあつた。高原の上の村はやがて朝日に輝いて見えた。

龍太の訪ねて行つた村は、山と山との谷合のやうなところにあつた。『東京のお客さんでしたな。』かう言つて、昔見た其家の細君は襷を外しながら迎へた。半ば白髪になつた友達は、『昨夜電報が來ましたから、今朝は、途中までも迎へを出さうと思つてるところでごわしたが――早うごした。』かう言つて、奥から出て來た。

『年を取つたね?』

『いやはや、もうこんなでごわす……』かう云つて龍太の顔を見て、『おんたも隨分白い。』

昔の友達は矢張昔話したやうな調子で話した。室は同じ室だ。家も同じ家だ。山も同じ山だ。床にかゝつてる幅物も同じ幅物だ。龍太の身には過去と現在と將來とが一つになつて押寄せて來た。

何の爲めにかうして山の中へわざ〳〵訪ねて行つたかわからないやうな旅だ。かう龍太は思つた。火燵に當つて、まづい地酒を飲んで、雪にふり籠められて、昔の追憶を話し合つたとて、矢張、それは何に

『明方近い頃までには、汽車はもう百哩以上も走つてゐた。雪は次第に深くなつて來てゐた。四邊の山の一面に雪に埋められてゐるのもそれと微かに闇の中に見えてゐた。鐵橋――谷川――星の光――停車場の名の青い中に白く出てゐる六角燈――助役の持つた小さなランタン――庇に長く連つてゐる大きな氷柱――やがて龍太の下りる停車場は來た。龍太は小さな包を抱へて、そして暗い停車場へと下りて行つた。

龍太の心は遠い昔を辿つてゐた。其處には三十年前に唯一度來たばかりであつた。その時から今まで。それがかれに取つては大きな問題であつた。今からかれの身の亡びるまで。これがまた一層かれに取つては大きな問題であつた。其頃はかれはまだいろ〳〵なものを持つてゐた。世の中といふ大きな誘惑もあれば、女といふ不可解の謎もあつた。體には血が漲つてゐた。いかやうにしても生きて行かれる年月であつた。かれは好奇心に躍る心を抱いて、谷合の道を勇んで通つて行つた可憐の少年を思ひ起さずにはをられなかつた。『しかし、今は、これから先は？』かう思ふとかれは堪らなくさびしくなつた。何を伴侶にして、何を誘惑物にして、かれはこれから先を送らうとするのか。世の中か？　女か？　物質か？　金か？

その問題は長い間かれの胸に絡み着いて離れなかつた。谷を越えて、丘へ上ると、山から下ろして來る風が寒くかれの身に迫つて來た。耳が切れさうになつた。

てゐた。廣い世界が唯かれの前にあつた。

荒れた唇だの、箒のやうな頭だの、目脂のついた眠さうな眼だのが其處にも此處にもあつた。色の褪めた古い毛布をすつぽりと頭から被つて高い鼾を立てゝゐるやうな人達もあつた。龍太は眠つたり覺めたりしてゐた。自己の生活がかういふ人達の生活の中にあるといふことが不思議であつたりした。足を當てゝゐたスチイムの管は段々冷たくなつて行つた。

をりをり眼を覺して龍太は外を見た。闇の中に星が煌々と閃いてゐた。

『これぢや山も天氣だらう。』

『降られちや大變ですからね。』

すぐ後にゐる夫婦らしい二人づれは、小聲でこんなことを言つてゐた。

山の上に來たといふことは、急に寒くなつて來たので知れた。車掌の持つたランタンがチラチラして地上にある白い雪がそれと指された。谷合のやうなところを汽車は通つて行つた。ある停車場では、小さな舍の中で、ランプを點けて、火をカンカン起して、何か面白さうに話し合つてゐる二三人の詰襟の男が、汽車の留つた龍太の窓のすぐ前のところに見えてゐた。廣いライフの中にそこだけくつきりと現はれてゐる縮圖のやうに感じられて、龍太は溜息をついた。龍太はその明るい群の中に自分を入れてそして長い間いろ／＼なことを想像してゐた。

默つて二人は歩いて行つた。

『行くやうに打つて來たんですか。』

路の角に來た時、細君は思ひ切つたやうにして訊いた。

『あゝ。』

『矢張、今夜行くんですか。』

『あゝ。』

細君は何も言はなかつた。路はだら〳〵と下りて行つた。月は狭い汚い町の上に氷のやうに冷たく冴えてゐた。

スコッチの背廣に外套に靴——唯それだけであつた。子供達はもう大抵寢てゐた。二番目の男の兒が一人起きて、茶の間の電燈の下で、机を出して、課業の下調をしてゐたが、餘りガタビシさせるので、

『父さん、何處へか行くの？』

かう目を丸くして訊いた。

狭い三等室はぼんやり薄暗かつた。何ういふ停車場があるか、何處を汽車が通つてゐるか、そんなことを龍太は考へなかつた。帽子をかぶつたまゝ車窓に頭を凭せかけて、唯、汽車の動いて行くのに任せ

は涙を催さしめた。狹い谷合には、日影が明るくさし込んでゐた。竹藪の中の野碓が獨りで上つたり下つたりしてゐた。龍太は二人の小商人の阪を登つて行くのをいつまでもいつまでも見てゐた。

『そんなことを言つたつて、あんまり急ぢやありませんか。よく考へて明日行つたら好いでせう。』

忠實な細君はかう言つて龍太の急な思ひ立をとめた。

龍太はしかし落付いてゐられなかつた。一人で考へて見たいやうな問題が澤山に前に横はつてゐた。長い間住んでゐた家の門に入つて、あの書棚のある書齋の中で籐椅子に身を横へて見たところが仕方がなかつた。ぽつねんとしてはゐられなかつた。

かれは細君とつれ立つて郊外の町を歩いて行つた。月の明るい夜であつた。龍太は默つてゐた。細君はさびしさうな白い顏を月の光の中に見せてかれの跡について歩いた。若い時樂しさうに嬉しさうに並んで歩いた追憶などは、二人にはもう餘りに昔になつてゐた。

町の通りに小さな郵便局があつた。龍太はツカツカと入つて行つた。電燈の明るくついた中では、若い男が頻りに郵便物を調べながら血色の好い希望の多さうな顏を此方に見せてゐた。久し振でたづねて行かうとする友達の許へ電報を打つて、そして龍太が出て來る間、細君は寒さうにして其處に立つて待つてゐた。

いて行つたり脅やかして行つたりした。かれは友達をたづねて行く氣にもなれなかつた。饒舌と、皮肉と、惡魔と、陷穽との滿ち渡つてゐる社會へも出て行かうとも思はなかつた。正月の初には、かれは都會を離れた山の上に朝日の當る家をたづねて行つて、其處で二日三日を送つた。西風の寒く吹いて來る日影の薄い田舍の溫泉場へも出かけて行つた。其處でかれは昔知つてゐた女に逢つたりした。其女は寒さうに袖を合せて、そして昔の話をした。『もう私も二十七になるわ。』などと言つた。龍太はその女のゐる家の前を通つて、朝早く停車場へ行つた。

停車場にゐる車掌も、街道を通つて行く百姓も、交番の前にぼつねんと立つてゐる巡査も、車にいろいろな荷物を載せて出かけて行く小商人も、皆それぞれ意味のある生活を營んでゐるのに、かればかりはさびしい空しい心を抱いで、そしてそこらを彷徨いてゐた。それが龍太には辛かつた。

ある小さな谷合のやうなところでは、二人の小商人が車に腰をかけて、そして樂しさうに何か話してゐた。

『もう午だ。』

『さうなるかな……それぢやぼつぼつ出かけべいか。』

こんなことを言つて、一人が車を引き出した。一人は大根だの人參だのの入つてゐる籠をかついでそしてその跡に續いた。何かおもしろさうな話をしながら歩いて行つた。その小さな光景が何故か龍太に

とすごして行つた人の話なども書いてあつた。海鳥の白い糞の一面に附着してゐる岩、膃肭獸の數限りもなく群集してゐる島、橇を犬にひかせて積雪の中を旅して行く住民、さういふ寫眞にかれは長い間見入つてゐたりした。『そんな生活が今の自分に何ういふ關係があると言ふのだらう!』こんなことを考へて龍太は黯然とした。

今まで過ぎて來た生活は、一つ一つ繪になつてかれの眼の前を通つて行つた。何の爲めに自分は努力した。何の爲めに自分は生活した。明るい灯、はなやかな生活、一歩一歩切開いて進んで行く奮鬪、それが何だ。こんなことも考へた。意義があり、生命があると確信した自己の生活が、何の意義も何の生命も持つてないといふ風に考へて來るのが龍太自身にも不思議に思はれた。過去も將來も現在すらも、意味のない空しいBlank rageになつて了つたのにかれは驚かずには居られなかつた。氣が附くと、若い人達は若い妻を持つて、そして新しい生活を始めてゐた。書齋のすぐ裏のところに出來た小さい貸家の中にも、矢張さういふ人達が住んでゐた。二十年前のかれ等夫婦が矢張其處に住んでゐた。

『若い人達の修業する機關はよくそろつてゐますけれども、私達の爲めには誰もさういふのを拵へて置いて呉れないから困りますね。』

かうある友達が落附いた靜かな聲で言つたのを龍太は時々思ひ出した。

その冬はかれに取つては今迄經驗したことのないやうな淋じい寒いものであつた。何も彼もかれに背

葉の林、鉋屑のころ〱ところがつて行く垣の傍の道――さういふものが常にかれの周圍にあつた。

書齋の一隅にある籐椅子は、かれの伴侶として長い間其處に据ゑられてあつた。かれは其上で疲勞をやすめたり思想をあつめたり長い長い小說に讀み耽つたりした。そこから下りて、かれは憧憬と奮鬪との世界に出て行くのを習ひとしてゐた。明るい町の灯も其處で想像した。

机も書籍も筆も、長押にかけてある額も、何も彼もかれに興味を惹かなくなつたと同じやうに、最後の休息所であり最後の同伴者であつたこの籐椅子も、今では全くかれに背いて行つた。身を橫へたと思ふと、すぐかれは其處から起上つた。

『あゝあゝ！』

かうかれは口癖のやうに言つたが、その口癖すらも此頃ではもうかれの口から出なくなつた。かれは唯立つたりゐたりしてゐた。

かれは今まで繙いて見たこともない本を開いて見た。それは厚いクロウス表紙の本であつた。それには遠い島のことがかいてあつた。一月の中大抵は濃霧につゝまれて、二日と靑空の見えないといふやうな土地や、冬になつて了ふと全く無人島になつて了ふやうな土地のことが詳しく書いてあつた。荒れに荒れた海を船は三日も四日も漂つた揚句、大きな流氷に封じ込められて、何うすることも出來なくなつて了つた話や、崖と崖との間に僅かに狹い土地を開いて、馬鈴薯や蕎麥や稗を栽ゑて、そして一年二年

一握の藁

龍太は言ひ出した。『兎に角今夜行くことにする。十時の夜汽車で出かける。サア何時歸つて來るか、それは聞かずに置いて呉れ。自分にも解らない。』

此頃、龍太には何も解らなくなつた。これまで目あてにして進んで行つた幻影は、何時崩れるとなく崩れて行つて、もう何も彼もかれの心を惹くやうなものはなくなつて了つた。書棚には一杯埃がたかつたまゝになつてゐた。机の上の原稿用紙は一月もそこに置いたまゝになつてゐた。

門のあたりをサッと掠めて通つて行く時雨の音が、靜かにかれの魂に染み込んで、夜もすがらぱつちりと眼を闇の中に明いてゐることなどもあつた。時にはさうして靜かに床の上に横つてゐることすらかれには堪へ難かつた。明方が殊にかれを堪へ難くした。水霜にぬれた樹々の間から薄白く光る殘月の影は、今までに經驗したことのないさびしさと悲しさとの濃淡の影をかれの頭に織り込んで行つた。草の上に白い霜、がさこそと小藪を渡つて行く風、黎明の明るい光の中に黒くはつきりと現はれて見える落

一握の藁　外二十一編

花袋全集第四卷目次

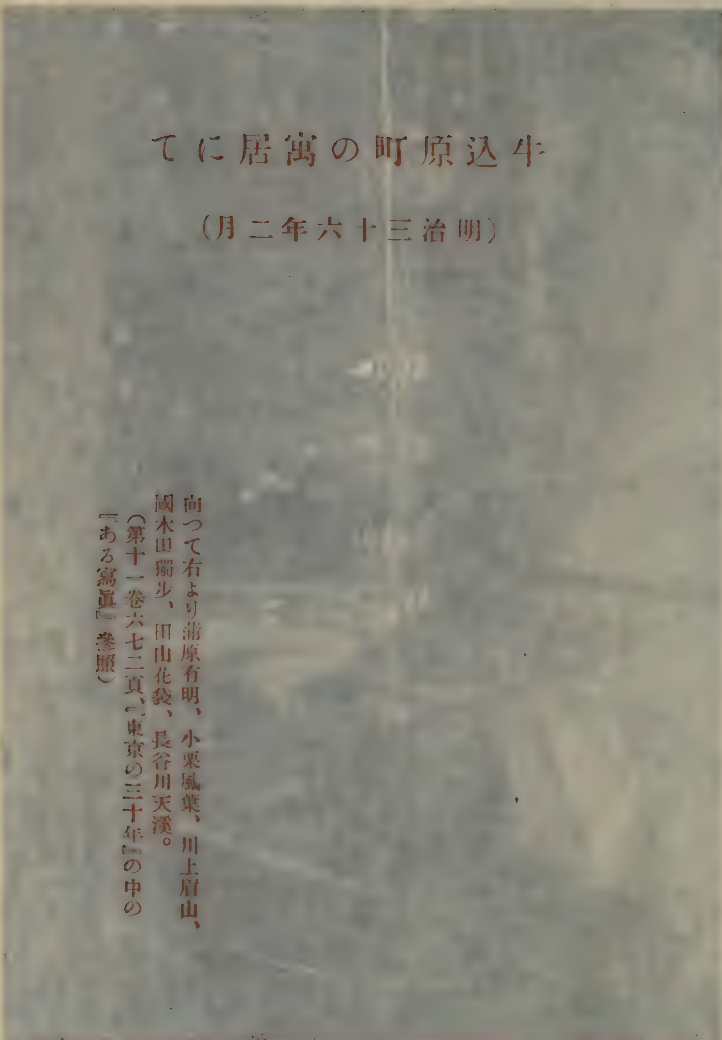




館林東校

（著者が幼時小學教育を受けた、故郷の學校。）





牛込原町の寓居にて

（明治三十六年二月）

向つて右より蒲原有明、小栗風葉、川上眉山、國木田獨歩、田山花袋、長谷川天溪。
（第十一卷六七二頁、『東京の三十年』の中の『ある寫眞』參照）

田山花袋著

花袋全集

第四巻

一握の藁・外二十二編

花袋全集刊行會

